
LEGEND OF THE SEVEN

トモカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEGEND OF THE SEVEN

【Nコード】

N3148X

【作者名】

トモカ

【あらすじ】

7人が異世界からやってくる。辿りついたのは魔法世界、ハルゲギニア。

目の前にいるのは桃色の髪の魔法少女。

召喚されたのは才人君だけではない…？

他の世界から召喚された6人が魔法の世界の運命を揺り動かす。

その6人は世界を滅ぼす者なのか、それとも、世界を変える者なのか。

0・DEATH 2

三日月に照らされた夜の住宅街を大小二つの影が跳んでいく。

季節は冬。透き通り、突き刺すような空気がさらに三日月を研いでいる。

僅かばかりの月明かりに照らされた二人は、お互いに上下伴に黒い袴を履いている。

大きいほうの影は橙色の髪に茶色の瞳という日本ではあまり見ないような色をしている。月に照らされたその顔は凜々しさと力強さ、そして優しさを備えた男の顔をしている。

背中には柄も唾もない、持ち手を布で巻いただけの武骨な身の丈程の大刀を背負っている。

年の頃は、まだ何処と無く世間の垢に塗れていない頃。

名前は黒崎一護という。

「夏梨、付いてきてるか？」

跳んでいく速度を緩めることなく、顔だけを後ろに向けて付いてくる小さな影へと話しかける。

「大丈夫、一兄」

そう答える小さな影の方は、黒い髪に黒い瞳、何となくはねっかえりのような感じ、強い意地を見せる目をしている。何処と無くあとけなさを残した、まだ女の子と呼んで差し支えない歳の子が付いてきている。腰には小さな背丈にあった、刀を携えている。

一護を「兄」と呼ぶ、この少女。名前は黒崎夏梨。一護の実の妹である。

「早く帰らねーと遊子に怒られそうだ」
「夜食の用意してくれてるかな」

そんな軽口を叩きながら、家路を急ぐ二人は只の人間ではない。世界に蔓延る悪霊を切り捨て、彷徨える正しき魂をあの世界へと導く神、死神なのである。

神話の御世では創造神に次ぐ神格を持つ、死神。

多くは髑髏と大鎌がイメージだろうが、それは歌舞伎者が生み出した幻想に過ぎない。実際の死神はこんなにも人間臭くて、人の思いを理解できる者達なのだ。

そんな二人も生まれたときから死神だったわけではない。

最初はただ、自分たちの生きている世界にふらり、ふらりと漂う霊が見えるだけ、ということを除けば友達と遊んで、偶には真面目に勉強するという、何処にでもいる高校生と小学生だった。

だが因果の交差は一護を死神として迎え入れた。

今では数々の敵を打ち倒してきた立派な戦士として、仲間達からも一目置かれる存在へとなっている。今や次の死神たちを纏め上げる頭、護廷十三隊、への次期総隊長として候補が上がるほどの存在になっている。

兄の成長と想いを受けた妹は、その兄を守るべく修行に励んだ。

その結果は今の姿にも表れている。体格や経験の差からその背は遠いが、いずれ同様の力を手に入れるだろうというのが、彼女の師の見立て。

尤も二人ともまだ高校生と中学生だ。これから先の人生の方が圧倒的に長いし、まだ死ぬ気もない。まだ人生は謳歌したい。

二人の前に「クロサキ医院」という看板を掲げた家が見えている。一家の大黒柱が街の診療所を開設しているこの家こそ、彼らの生家であり、暮らしている家でもある。

「もうすぐだな」「腹、減った」

そんな夜食を待望する兄と妹の前に、上から夜間に似合わない、ハイテンションな声が掛かってくる。住宅街の屋根の上、その男は颯爽と降り立つ。

「スピリイイツツ、アー、オオオルウェイズ、ウイズ、ユウウウ
！！」

確実に騒音問題で訴えられそうな程の大声を上げて、降りてきた、いや、落ちてきたのは髭に丸サングラス、ドレットヘア、背にはマントと何とも可笑しな格好をした男だった。

「ボハハハハ」

「.....」

「久しぶりだな！マイー番弟子！家に行けば二人ともい無いということからな、探し回ったのだぞ！」

突如、現れたこの男の名はドン・観音寺。霊の見える、所謂霊能力者という存在だ。力としては、はつきり言って二人の足元にも及ばない。及ばないのだが、嘗ての出来事から一護のことを、一番弟子と呼んで憚らない。一護にとっては迷惑千万なのだが、観音寺自身は気がついていない。

「それにそのガールは、夏梨ではないか！キミもボーイと同じく死神になったのかね！」

「あ、まあ.....」

ドン・観音寺の言葉に若干イライラしながら、夏梨は答える。決して嫌いではないのだが、クールぶってローテンションで生きている二人にはどうも反りが合わない。

「ならば本格的に参入しようではないか！キミは二番弟子だ！」

空気を読まないのが、ある意味、この男の素晴らしいところだ。
カチン。

「うるさい！」

観音寺の言葉に二人揃ってキレる。裏拳を彼の顔に叩き込んで、サングラスに罅を入れる。高位の死神の左右両方からの鉄拳制裁だ。普通の人間が喰らったら、サングラスどころか頭蓋骨が真っ二つである。少なからず霊力のある観音寺だからこそ、この程度で済んでいるのである。

「アウ！何をするんだね！ボーイ、アンド、ガール！」

「いや、何かムカついた」

「それだけかね！久しぶりの師匠との再会だぞ！もっと喜びたまえ！」

詰め寄る観音寺と冷静に切り返す一護。死神は普通の人間には見えないので何も知らない人間が見れば観音寺が一人ではしゃいでいるようにしか見えない。

そんなときだった。夏梨が今の異常に気が付いたのは。

「一兄」

「ん、何だ？夏梨」

一護の服の裾を引っ張って、状況を知らせる。一護もその異変に気がついた。

喚いている観音寺の後ろに、光る鏡のようなものが浮かんでいる

のだ。しかも、当の本人は気がついていない。若しかしたら、有害なものかもしれない。兎に角、二人はこれを見たことがない。得体の知れないものに対して、警戒を取るのは当然。すつと戦士の本能として刀の柄へと手を伸ばす。

「二人とも、酷いじゃないか！いくらなんでも、刀を振るうのは勘弁してくれ！」

「黙ってる」

真剣な顔になって、二人は光る鏡を見据える。

「何だと思う、一兄？」

「解らん、見たことないもんだ」

「むづ、どうしたというのだね？」

くるつと振り返ろうとした観音寺の体が、その光る鏡に触れかける。

「危ねえ、観音寺！」

「くー！」

咄嗟に駆け出す、二人。観音寺を遠ざけ自分たちがその鏡の前に立つ。立ったのだが、僅かばかりに触れた夏梨の服の袂が鏡の中へと消える。

「な！」「え！」

袂は鏡を突き抜けることなく消えさり、凄い力で夏梨を引き込む。その状況に驚き、懸命に引つ張り挙げる一護と夏梨の足の抵抗も虚しく、鏡はは既に夏梨の左半身を飲み込んでいた。

「何だ、コレ？ 抜けねえ！」

「ふぬぬぬ！」

真つ赤になつて抵抗する兄妹。それを見ていた観音寺が立ち上がる。

「なにやら弟子の一大事のようにだ！ このドン・観音寺、微力ながら力を貸そう！」

胸に手を当て、大仰な仕草で喋る。見る人が見れば間違いなく、頭の痛い人だ。

事実、霊など見えない人の方がよっぽど多い。もう一人、一護と夏梨の間には兄妹がいるが、その妹は全く霊を見ることも、感じることも出来ない。死神も同様。大抵の人は世界の裏で、このような事が起こっているなど露知らず、一生を終えていくのである。

「助かるぜ、観音寺！」

自分が弟子かどうかはこの緊急事態、心底どうでもいい。今の状況がどうにかなるなら、観音寺だろうが無力な中年親父でも力になる。誰でもいい。

だが、今すぐに手が貸せるのはこいつしかない。世話になるのは癪だが、恩人には違いないので終わったら、多少なりとも付き合つてや……

「ム！」

つるりと何も無い屋根の上で盛大にこける。

その観音寺の手が、一護の体を押し、一護までも鏡の中へと叩き

込んでしまっ。

「オイ、コラ！」

「ム、失敗してしまった！」

サングラスの向こうの目は見えない。もし、笑っているなら殴り飛ばす。そう兄妹は心に誓って観音寺の顔を見上げると、泣いていた。自分の力不足、失敗を嘆いているのだろう。そう思ったら、ちよっただけ頑張ってくれと思う。もう二人とも三分の二は吸い込まれている。段々と吸い込む力が鏡の方が強くなり、両の足が飲み込まれるところまで来ている。

「マイ弟子たちよ、頑張れ！」

（まさかの励まし！？）

観音寺から来たのは何の根拠もない精神論の励まし。手を貸してくれるとか、そんなことは一切ないようだ。愕然というか、開いた口が塞がらない。

「何だと、テメー！」

「一兄、もう無理！」

耐えていたが、ついに両の足が消えてしまった。これではもう踏ん張りが利かない。いよいよ切羽詰ってきた。普段から冷静で沸点の低く、落ち着いている二人の顔にも焦りと怒りが見えてくる。勿論、怒りの矛先は事態を悪化させた観音寺だ。

「せめてもの師匠からの手向けだ。これを持って行き給え」

（ダメだ、完全に酔ってやがる…）

そういつて観音寺が手渡したのは、ボロくさいライオンの縫いぐるみ。二頭身の良くある市販品だ。鏡の淵を掴んでいた一護の指を若干強引に引き剥がして、ぬいぐるみの体を握らせる。

「何してんだ、テメー！」

「そんな、怒らなくてもいいだろう！喋る縫いぐるみだぞ、チヨールアではないか！」

そんな観音寺のハイテンションな声がスイッチだったのか、ぼろい縫いぐるみに魂が入ったかのように動き始めた。

「何やってんだ、一護？」

理解できているのか、いないのか。ぬいぐるみは呑気な声で、一護に話しかける。右手で縫いぐるみ、左手で淵を掴んでいる危機一髪の状態でこんな呑気な声は腹立たしいだけだ。夏梨は幸い頭だけが出ている状態。一護にしがみ付いて何とか持っているのだ。

「つかコレ、コンじゃねーか！お前、また俺の部屋勝手に入ったな！」

この喋るぬいぐるみ、名前をコンという。何とも不思議な仕組みで動いているのだが、それを説明している時間も余裕も今は無い。

「ははーん、一護。お前、困ってんだな。何なら助けてやってもいいぜ」

随分と上から目線の物言いだ、今のコンは状況を理解していないようだ。全身を完全に一護の手に驚？みにされた状態。

待っているのは一護・夏梨と一緒に助かるか、一緒に吸い込まれ

るかの二択。

「そうか。じゃ、お前も運命共同体だ」

「え、何で？」

「頑張りたまえ、マイ弟子たちよ！これも修練だ。キミ達の成長を期待している！」

「覚えてろよ！観音寺！」

そう言つて一護と夏梨、そして喋るぬいぐるみ、コンは光る鏡と吸い込まれてしまった。

後には何の痕跡も残っていない。埃一つ、髪の毛一本、落ちていない。

「フ」

誰も居なくなった屋根の上で、観音寺は不敵に笑う。

「スピリイイツツ、アー、オールウェイズ、ウィズ、ユウウウウ
！」

「うるせー！今何時だと思つてんだ！」

大音声で自分の合言葉を叫んだ瞬間、家の住人に烈火のごとく怒られてしまった。

0・Running to horizon [exist]

「ハア、ハア」

月明かりも届かないイギリスはロンドン郊外の深い森を一人の少年が何かに追われるかのように奔っている。既に組織を裏切った彼は、もう戻ることは出来ない。だからといって行く宛てが在る訳でもない。それでも、彼は走る。自らの運命に決着をつけるため。

灯すらない状態で森の中を奔るといのは、思いのほか辛い。

それは鍛え抜かれた軍人でも同じ。ましてや今だ成長段階である少年には更に負担が多い。

「疲れた…」

足を止めるのは危険だが、疲労した状態でこれ以上の行動は危険だと判断し、手頃な木の下に座り込む。ちょうど根がいい具合に地上に露出していて、腰掛けにはピッタリだ。

すらりとして余計な脂肪も筋肉もない体躯、顔もまだあどけない。だが、髪だけは老人のように白い。それだけでもおかしいのに、顔には五芳星を逆さにした刺青らしき模様がある。

「こんなとき、師匠ならどうするかな…」

年頃にしては細い体は、赤く縁を取られた黒衣を纏っている。シンプルなデザインだが、ボタンは純銀であったり、刺繍は銀系であったりと色々と高級な素材が使われている。

彼は行方知れずになってしまった、赤毛の師匠のことを思い出す。

(アレン、俺はな…)

顔半分を仮面で覆った師匠は優しく…

(とつとと行け！っていつてんだ！)

想像の中で少年の脳天に一片の迷いもなく、ハンマーを振り下ろす。そこまで想像して身震いがした。決して冬の森の寒さではない。師匠が怖くなったのだ。

少年、アレン・ウォーカーはヴァチカン教会の対AKUMA部隊、エクソシストであった。

あつたと過去形なのは、たった今、好きな人も、世話になった人も、皆を裏切つて遁走してきたからだ。裏切つたのには彼の運命が関係しているのだが、語るにはあまりにも重い。

「序でに師匠の武器とかパチつたけど、大丈夫だよね…？」

腰にはキラリと光る両手大の銃がある。本来なら彼の師匠、同じくエクソシストであるクロス・マリアンにしか使えないのだが、何故かしつくりと馴染むのだ。「使える」と直感で判断した彼は師匠が残したモノを色々と持つてきたのだ。

厚く膨れた財布には見たことのない金貨や銀貨が入っている。小さな保管箱には薬の原料となるだろう薬草の種を根限り詰め込んでおいた。そして、師匠が持っていた仮面のスぺア。

自らの意思で裏切っておきながら、心配する。決して非情から裏切った訳ではない彼には、教会の重役であった師匠の品々を盗難するということとは、正直言って、あまり気が進まなかったが、これも自らの運命と言いかせ、奪取したのだ。

その他にも師匠の所以以外にも、色々どギツて来たものはあるが、多分役に立つだろう。

「タイムキャンピー！」

大声でなく、それでいてよく通る声で名前を呼ぶ。その声に答えるように空から小さな星が一つ降ってきた。鳥でもなく、蝙蝠でもなく、落ちてきたのは金色の羽根の生えたボールだった。

ボールは呼ばれた事が嬉しいのか、アレンの周りをクルクルと飛び回る。

「できるだけ遠くへ行こう…」

宛てのない少年の旅が始まる。

「箱舟」

短く噛み切るような言い方で起動コールを送る。目の前には白く輝く水晶の様な墓標が立ち上がった。それに感嘆することもなく、彼は水晶へと手を伸ばす。ずっと彼の体は水晶を付きぬけ、消えてしまった。

完全に消えてしまったことを確認すると、水晶は役目を終えたかのように瓦解し、粉雪のように落ち葉の上へと降り注いで、後には何も残らなかった。

だが、これが彼の意図していた門であったかどうかは誰も知らない。

彼だけが知っている、彼だけの行き先。

そうして彼は異世界へと足を踏み入れる。

思い人の声も届かない、世界へと。

O · f u l l m e t a l t h e m a j e s t i c

大通りの昼下がりに。

人や車が行き交い、商店は軒先を並べて元気の良い声を人々に声を掛け捲る。男のだみ声もあれば、澄んだ女性の声もある。兎に角商人は売らねば生きられないのだが、皆、必死になって声を掛ける。

そんな時。

ガシャーン

ガラスが盛大に割れる音。次に聞こえてきたのは悲鳴。

交通事故だ。どうも車がハンドル操作を誤って、店に突っ込んだらしい。昼下がりの街に嫌な空気が流れ始める。

「だ、だ、大丈夫かい？」

店の中でのんびりと新聞を読んで店番をしていたハゲ頭の店主は、幸いなことに壊れずにすんだガラス戸から飛び出してくる。店の中は商品が飛び交い、泥棒に荒らされたかのよう。気は動転しているが、兎に角、怪我しているなら店の修復よりも運転手の方だ。自分に怪我が無かったのは僥倖としか言いようが無い。

「だ、大丈夫です」

「そうか、なら良かったよ・・・」

方々の体でフロントが拉げた車から這い出てきた若者を見て、店主はほっと一息つく。身なりは良いらしく政治家が着るような服を着ているが、それもガラスの破片で切り裂かれている。頬に一筋の

紅い血が流れているが、死ぬような怪我は無いようだ。

「にしても…」

ハゲ頭の店主は自分の店の惨状を見て、愕然とする。紆余曲折あってようやくこの場所に店を構えて5年余り。小さな雑貨屋ではあるが、今日車が突っ込んだために、窓は割れ、壁には大穴が開いている。幾らぐらいかかるのか、頭を抱えた。

「あ、あ、申し訳ありません！」

落ち着きを取り戻したらしい若者が、必死に頭を下げる。頭を下げて車や店が元通りになるわけではないが、それでも下げねばならない。

「いや、いいよ。頭を上げてくれ」

「いや、しかし、これでは…」

そう商売にならない。いくらかの蓄えはあるだろうが、生活が苦しくなつては意味が無い。

しばらくの間、押し問答が続くが、幾ら続けても意味が無い。

「お困りのようですね！」

そこへまだ若く瑞々しい少年の声が届いた。

二人が揃って顔を声の方へ向けると、そこには金髪と赤いコートという随分と派手な感じの少年がカッコいいポーズを決めて立っていた。後ろには彼を盛り上げているのか、全身を鎧で覆った大男がポーズを決めていた。

(随分と、変な二人だな…)

最初に思ったのはコレだった。いきなり現れた変な二人組。その程度の認識だった。

つかつかと二人が近づいてきて、もう一度。

「お困りのようですね？」

「あ、あ、まあ、店が壊れちゃって…」

少年のテンションに押されて、しどろもどろになりながらも今の事情を説明する。

ふんふんと頷きながら聞いていたが、少年は立ち上がると、白い手袋に包まれた両手を勢い良く合わせる。パアンと心地よい音がして、両手を離し、今度は手のひらを店の方へと向ける。

「うわっ！」

目も眩む光が瞬間、走ったかと思うと。

「す、すげえ…」

店がなんと元通りになっていたのだ。流石に事故前と同じとまでは行かず、中の商品は散乱した状態であるが、それでも元々の大枠が戻ったというのは嬉しい限りだ。

「おや、こちらの車も壊れていますね？」

そついうと少年はもう一度、同じ動作を繰り返す。後にあつたのは完璧にガラスが元通りになり、拉げたバンパーも新品同様になっ

ていた若者の車だった。若干、ディテールに趣味の悪さが出ているが。それを見ていた事故の野次馬達が、こぞって金髪の少年の下へとやってくる。

「直してもらえませんか？」と取っ手の取れたバックを持った老婦人、

「こつちも直してくれ！」と欠けたかなづちを持ったガタイのいい大工、

「これはダメ？」と車軸の折れた電車の玩具をもった子供。

それら全てを前にして少年と鎧は一言。

「一列に並べ！全部、お安い御用だ！」

「はい、こつちに並んで」

次から次へとやってくる壊れた物を持つてくる町の人。

それを全く疲れた様子も見せず、一瞬で直していく少年と鎧。

「修理代など頂きません！全て元通りです！」

一回喋るごとにポーズを決める少年。何でも直してくれくれる彼は直ぐに街のヒーローとして祭り上げられた。

「せめてお名前だけでも、お伺いしたいわ？」

最初にバックを直してもらった老婦人が優しく、少年に語り掛ける。

「なーに、名乗るほどの者じゃありません！」

もう一度、びしつと決めて、別のポーズを取る、

「貴方の街の国家錬金術師、エドワード。エドワード・エルリックでございます！」

「そして、僕は弟のアルフォンスです」

少年と鎧の名乗り、街の人は歓喜に沸く。

「あの噂の！」「エルリック兄弟かよ！」

「エルリック兄弟つていやあ、最年少の国家資格者だよな！」

「俺ら、軍つてだけで誤解してたぜ、いい奴も居るんだな！」

この世界には物質を理解、分解、再構成する科学技術、錬金術が存在する。

物質の形や中身が解れば、モノを元通りに戻すことも簡単だし、例えば土を金に変えたり、また金属の形状を変えたりすることも可能な技術だ。勿論、人間も物質の塊であるから、傷を治したりということも可能だ。その利便性と比例して習得するのは難しく、彼の生きるこの国でも、まだ完全に浸透してはいない。

しかし、科学技術は往々にして軍事転用されるのが常だ。

故にこの国、アメストリスでは国家資格が設けられ、莫大な研究資金と引き換えに軍属となる事がある。それがエドの持つ国家錬金術師という称号なのだ。故に「軍の狗」と罵られる。軍や戦争を嫌っていた師匠には、このことがばれた時にはこっぴどく叱られた。だからこそ「ありがとう」などと言われることは、まず無い。

「では、皆さん！壊れたものがありましたら、またいつでも！」

そう言うと颯爽と歩き去った。

ちよつと大通りから離れた路地裏。

そこには先ほど、大活躍だった兄弟が居た。

「いやー、結構疲れたな」

「そうだね、兄さん」

アルの鎧に緩く拳を入れると空の筒と同じ反響音がする。エドの右手からも金属が触れ合ったときと同じ、甲高い音が響いた。

アルの鎧の中には肉体が存在しない。全くの空虚な鎧なのだ。同じようにエドの右手、そして左足は生身の手足ではない。

人工義肢、機械鎧 オートメール。

個人の神経を繋ぐことで普通の義足などよりも、さらに人間に近づき動きが出来る鋼の腕。

この手足が彼の国家錬金術師としての二つ名「鋼」の由来でもある。

アルが鎧なものも、エドの手足が機械鎧なものも深い理由がある。だが、それは二人の口から喋るべきものであり、人が軽々しく聞いていいモノではない。理由を知っているのは幼馴染で、義肢工のウィンリイ・ロックベルと彼女の祖母のピナコ。彼を国家錬金術師にスカウトした直属の上司であるロイ・マスタング国軍大佐、そして、彼の副官であるリザ・ホークアイ中尉くらいである。

「にしても、これで随分と有名になったんじゃないか？」

「そうだね、これで傷の男が釣れるといいんだけど…」

彼らがやっていたのは、決して慈善のためだけではない。

自らを狙っている連続殺人犯、コードネーム「傷の男」を探すのだ。もう何人も国家錬金術師だけを狙って殺している「傷の男」は

当然のようにエドも狙っている。
更なる被害を抑えるためにも、自分を餌に一騎打ちを仕掛けよう
としているのだ。

ふと、そんな時。

「ねえ、兄さん。あれ何かな？」

アルが路地裏の行き止まりに浮かぶ、鏡のようなものを見つけた。
サイズは2M近いアルでも十分に通れそうなくらいの高さと幅。
突如として現れた謎の物体を警戒する。

「何かわかるか？」「いや、さっぱり……」

とりあえず近くに落ちていた小石を投げつける。路地の壁にぶつ
かることなく、すっと消えてしまった。これには色々と思議な生
物や事象を見てきた彼らも驚いた。

「ふーん」

顎に手をやり、何事か思案していたエドは近くの壁を錬成し手槍
を作る。アルも習って手槍を錬成。

「せー」「の！」

二人、息のあったタイミングで投げるが、それも消えてしまった。

「とりあえず大佐に連絡するか」「そうだね、他の国の侵略兵器か
もしれないし」

そう言って大通りへ向かおう踵を返し彼らの前にも、同じものがあつた。咄嗟の出来事に対応できず、エドもアルもすっと消えてしまふ。

「何だ、コレ！」

鋼と鏡、兄弟の言葉が短く路地裏に解けていった。

O・H e i s n o t m a s t e r o f m a g i c

東京、新東京国際空港。

関東一円では一番大きな滑走路を持ち、年間の離発着数は日本最高のこの空港の国際線ターミナルにある二人が来ていた。

「ほら、ネギ。里帰りなんだからしっかりね」
「分かってますよ、アスナさん」

一見すれば少しばかり歳の離れた姉と弟といった調子。
アスナと呼ばれた少女、神楽坂明日菜の方は、弟の服の乱れをてきぱきと直している。

現にアスナも、手の掛かる弟を見守る優しい姉のような空気がある。逆にネギという十歳くらいの少年の方も、世話を焼いてもらって嬉しい表情を浮かべている。実際の血縁関係から言えば、ネギの母の妹がアスナであるから厳密に言えば叔母と甥の関係である。

この少年、本名をネギ・スプリングフィールドという。
生まれはイギリスの北部、ウェールズ。見事な赤毛と鼻に掛かった眼鏡が印象的だ。

歳の頃は、あどけない外見どおり、まだ十歳。だが、これでも一つのクラスを受け持つ先生なのだ。だが外見に騙されてはいけない。知識や力のほうは確かに、先生を務めるだけの力がある。そう判断されたからこそ、こうやって生徒を持って教えているのである。

「大丈夫っすよ、オレッチが付いてますから！」

そういつてネギのフード付きコートの中からひょっこりと小さな白い生き物が現れた。

ネギのペット、白いオコジヨのカモミール。アルベール。ネギか

らは「カモくん」と呼ばれ、結構強い信頼で結ばれている。

「アンタがいる方がよっぽど不安よ……」

「ああ、ヒドイっすよ!」

オコジヨとネギもアスナも普通に会話している。なぜ、オコジヨが喋るのか。それは、ネギの秘密に関係がある。

それは「魔法使い」であるということ。

一般社会には決して出ることなく、秘匿され続ける魔法社会。彼の父と母はその魔法使いたちの世界において、名の知れた人たちだった。そんな両親を見習って彼もまた、立派な魔法使いになるべく修行中の身だ。

そんな修行も冬休みに入り、ひと段落。一度、故郷のウエールズへと帰るべく、ここへやってきたのだ。傍らには大きなスーツケースが二つもある。そして、何よりも特徴的な先が大きく湾曲した木製の杖もある。

この杖はネギが父親から貰った、唯一に近いプレゼントだ。

「じゃ、帰りますね、アスナさん。冬休みも頑張ってくださいね。

一応、受験ですから」

「う……」

それだけ言っただけでネギは荷物を軽々と担ぎ、また両の手で引張る。いくら魔法使いといえども体格はまだ十歳のそれだ、いくつもの大きな荷物を抱えている様は、ほほえましいのを通り超えて、ちょっと可愛そうに見える。

「お姉さんに宜しくね〜!」

ぶんぶんと勢い良く手を振って、アスナは手間の掛かる弟を送り

出した。ゆっくりと小さくなる背が見えなくなるまで手を振っていた。

「じゃ、カモくん。とりあえずケースに入って」
「了解す」

一応、ここは空港。ペットの持ち込みは制限されている。もし海外へ行こうというなら喋るとは言え、一応オコジョのカモミールはケージの中に仕舞わねばならない。

「ん、なあ兄貴。アレ、何すか？」
「どうしたの、カモくん？」

そうやって振り向いた先にはふよふよ浮かぶと白色の鏡があった。しかも、どうやら自分たちにしか、見えていないようだ。毎日3万近い人が、ターミナルでは行き交っているのに、この白い鏡に気がついた人は誰もいない。無関心とか、厄介ごとを避けようというよりも
そもそも気がついていないようだ。

(兄貴、注意したほうがいいですけど)
(うん、分かってる)

ネギは自分の身の価値をしっかり分かっている。うぬぼれでも、大仰に言っているのでもなく、自分がどんな人材で、人物なのか客観的に判断している。だからこそ、接触してくる敵も味方も多い。

今、目の前にあるものが敵の手の者によるモノ、としてもオカシクナイのだ。

周囲の目に触れないように、慎重に動く。

「とりあえず、探知してみますぜ」

「お願い、カモくん」

カモは先だけが黒い尻尾を逆立てて、鏡の正体確かめる。
結果は、

「ダメっすね、兄貴。でも、敵性はどうもないみたいっすよ」
「そっか…」

ぼそりとネギが呟いた瞬間、まるでカバが口を開けるかのように、鏡が大きく広がった。

「え?」「うわ!」

ピカッと光ったと思うと、そこにネギとカモ、そして二人の荷物は消え去っていた。

はらりと一枚、ネギが乗るはずだった、ヒーロー行きの航空券だけを残して。

「悠二」

紅蓮に包まれた世界で、燃え盛る炎と同じ色の瞳と髪を持つ少女は思い人の名を呼ぶ。

力強く、それでいて切ない声で。彼女の傍には彼女の今の気持ちを表すかのように、小さく煌く火の粉が無数に舞い散る。手には鋭く磨かれた剥き身の太刀が握られている。

勇ましく立つ少女の姿はまさしく、勇者と呼ぶに相応しい。

「シヤナ」

紅蓮の少女に呼ばれた少年はどこまでも優しい声で、少女に語りかける。その姿は人の様でいて、人の様でない。後頭部からは蛇のような尻尾が生え、手には到底、人身には余る柄の短い大剣が握られている。纏うのは黒い、輝かない炎と緋色の鎧。まるで御伽噺に出てくるような魔王の姿である。

「僕は君を守る。そのために強くなったんだ」

力強い意思に満ちた声で悠二がシヤナに語りかける。

でも、その思いと目的は受け入れられない。恋した姿と違って、何も変わらない。彼の想いの最悪の形での結実。シヤナがそれを望んだかどうかは、誰にも分からない。

でも、この実は摘まねばならない。

それが彼女が、己に課した使命と義務だから。

「私はそれを受け入れられない。だから、私は貴方と戦う」

「そう言ってくれろと思った。だから、僕は君と戦う」

紅蓮と黒。二人が剣を構える。

静寂が二人の間を包む。

「はああ！」

紅蓮の炎と翼をその背に現し、シャナが飛ぶ。

必殺の突きの構え。

「…」

悠二はその突きに備えるべく、大剣を楯のように構える。

そんな時に紅蓮の世界を引き裂いて、白い水晶のような物体が表れる。

(自在法？それとも、新しい敵？)

ドコーン！

階下から爆音が響く。その爆音を合図にしたように、中から黒い物体が転がり出てきた。ゴロゴロと転がって、近くの壁の残りにぶつかる。

「いたた・・・」

突然の闖入者に二人も驚きを隠せない。原理的に誰の侵入も受け入れることのない、この世界に突然として現れたのだ。自分の仲間、若しくは敵である。

今の位置を動かさず、二人は物体、転がりてた人を確かめる。

老人のような白髪頭だが、顔はまだ少年のようである。まるで法

衣のようなフード付きの服を着ていて、腰には白色の銃。左手にだけ分厚い革の手袋をしている。

「お前、誰？」

「んー、箱舟の操作、間違っただかな？」

服に付いた埃を払いながら、何事か考え込む。「箱舟」という聞きなれない単語が聞こえてきたが、この少年の自在法か何かだろうか。シヤナなどいないかのような感じで考え込んでいる。

「お前、誰？」

今度は幾分、強い感じで。首筋に切先を当てる。

それでようやく気がついたらしい。気がついたのだが、シヤナの剣呑な雰囲気に対して、何とも呑気に周りを観察して、切先を突き立てる小さな少女をじっと見つめている。

「えっと、君は誰？」

「お前こそ誰？敵、味方、どっち？」

質問に質問で返され、さらに質問で返す。

「僕はアレン・ウォーカーって言います。君は？」

「そう、じゃアレン。邪魔だからどこかへ行つて」

シヤナに見れば精々の親切心で言った言葉である。目の前には最愛の思い人にして、最悪の敵がいる。言いたい事だけというと、アレンに背を向けた。

「若しかしなくても、僕、お邪魔だったかな？」

「…」

「ねえ、赤い君？」

「…」

「あっちの黒いの誰？」

「…」

少年のような無邪気さ、アレンの本性を知るものなら完全に演技の、で聞いてくる。段々とイライラしてきたシヤナはアレンの方を向いて、

「うるさい、うるさい、うるさ…」

「だから、僕の質問に答えてください」

くるりと振り向いて、質問を全部剣幕で封殺しようとしたシヤナは今度は自分の眉間に銃が突きつけられていることに気がついた。ともすれば女の子にも見えるかもしれないアレンの顔には、静かな怒りが張り付いている。

「シヤナ！」

敵となっても思いは変わらない。思い人の危機に黒の魔王は駆け出す。

（まずい！）

幾度も危機を乗り越えたアレンの直感が脳内にブザーを響かせる。ぐいっとシヤナの襟首を強引に掴むと、

「箱舟！」

箱舟を再起動させる。彼が現れたときと同じ、白い水晶のような物体が白い髪の少年の前に現れる。紅蓮の世界を引き裂いて現れた水晶に、勢い良く飛び込む。紅蓮の髪と瞳を持つ、少女を荷物のように引つつかんだまま。

「シャナ！」

ずっとシャナの細い足が全部消えると同時に水晶は崩れ去った。紅蓮の世界に白い水晶が、欠片となって降り注ぎ、地に付いた欠片は雪のように消えていった。

1・WELCOME TO NEW ANOTHER WORLD (前書き)

皆様、このような私の拙作をお読みいただき、真にありがとうございます。

本編より、いよいよ舞台をハルゲギニアへと移し、6人と+1人が活躍します。

テーマソングはL・Arc en Cielの「Link」、
そして6人のチームとして主題歌にKELUNの「Chu-Bur
a」です。

1・WELCOME TO NEW ANOTHER WORLD

よく晴れた草原を風が弄る。

遠くに見える丘陵の木々が太陽の日差しを、その身に浴び、吹き抜けた風が木の葉を少し散らす。

ここはトリステイン王国。ハルゲギニアという大陸にある、長く続く伝統と、素晴らしい格式を持つ王国である。国土の殆どが平地であり、大海に注ぐ川も多い。周辺国からは「水の国」と呼ばれているほどだ。

この国を始めとして、この「世界」には「魔法」が存在する。

血の成せる人の力として、「魔法」を使える「存在」、いわゆる御伽噺の「魔法使い」たちが、この世界では支配層として王族・貴族階級を成して君臨し、そこから溢れた一般市民、平民を思うが俤に支配する世界である。

そんな貴族である魔法使い、メイジも生まれたときから魔法が使えるわけではない。成長とともに技術を習得していく。技術を教え、さらに次世代へと継承していく。拙い貴族の子女を一人前にするために置かれているのが学校、つまりは「教育」という方法である。

ここトリステイン王国にもその魔法使い達の学校の一つである、「王立トリステイン魔法学校」が存在する。

現在、そのトリステイン魔法学校では、毎年の恒例行事にもなっている、2年次への進級試験を兼ねた「春の使い魔召喚の儀式」が行われていた。

午後から行われているこの儀式。本来であれば、一人あたり2分もあれば、全行程が終わってしまう結構簡単な儀式なのであるが、たった一人、たった一人の女生徒だけは30分近く掛かっているのに、今だ終わらずにいた。

「あーもう！どうしてよ！」

繰り返し、使い魔召喚の呪文、口語で唱えられる「サモン・サーヴァント」を唱えていたが、結果は全て爆発。

今回もドカーンと爆発。爆風が吹き荒れ、轟音が草原を駆け抜ける。駆け抜ける度に、先に成功させていたクラスメイトの使い魔たちギャアギャアと騒ぐ。

「いいかげんにしろよ、ルイズ！」

「さつきから爆発ばかりじゃない！」

いい加減、彼女の失敗で起こる爆発に辟易、騒ぐ使い魔を達をなだめるのにも疲れてきたクラスメイトからは野次が飛んでくる。

「うるさいわね、見てなさいよ！」

ルイズと呼ばれた少女、爆発に巻き込まれて若干、顔や髪の毛、服も煤けているが、ピンクブロンドの若干ウェーブの掛かった髪にくりくりとした鳶色の目。中々に可愛らしい顔である。

しかし、その顔も煤けている上に、眉間に皺を寄せていては可愛らしさも半減である。

「兎に角、見てなさい」

再び、意気込んで唱える。しかし、結果は見えていた。ドカンとまた爆発。これで既に31回目だ。ルイズの顔にも怒り以外に、焦りの色が見えてきた。

今までルイズは碌に魔法が使えていない。座学の方は満点に近い点を取っているが、実技は全て爆発、失敗という結果になっていた。

今日こそは誰もが羨む使い魔を召喚して、見返してやろうと思っていたのだが、結果がこれでは見返すどころか、もったからかいのネタを同級生に提供するだけである。

31回目の失敗を見て、今年度の「召喚儀式」の担当教師である、ジャン・コルベールが、

「ミス・ヴァリエール。非常に残念ですが、続きは明日にしましよ
う…」

近づいてきて、ルイズに酷く残念そうな声で語りかける。

彼はルイズの人知れぬ努力を知っている人間だ。誰よりも努力しているのに、必死に勉強しているのに、報われない。少し悲しい学生であることを。

「お願いです。最後までやらせてください！」

振り向いたルイズの顔は、今にも泣きそうだった。煤けた顔もこんな感じだと、コルベールは困ってしまう。ふうつと息をついて、

「分かりました。これが最後ですよ」

「ありがとうございます！」

それだけ言っつて、下がった。最後まで見届ける。担当教師としては一人も落第者は出したくない。ましてや努力している生徒を落せるほど、彼は冷酷な人間ではなかった。

「早くしろよ」

「精々、頑張れ」

一片の温かみも無い応援や野次が飛んでくるが、一瞬にして集中

したルイズの耳には届かない。
そして、

「世界のどこかにいる、私の下僕よっ！！」

力強い声で「サモン・サーヴァント」を唱え始める。

「強く、美しく、そして生命力に満ち溢れた使い魔よ！私は心より
求め、訴えるわ。………我が導きに応えなさい！」

そう言って、杖を振り下ろした。

ドコーン！

起きたのは今までよりも一際、大きな爆発。辺りにはその爆発に
比例するだけの爆風が吹き荒れ、ルイズの周囲の草を何本も吹き飛
ばす。爆音が結末を見届けようとしていた、生徒やコルベールの耳
を使い物にならなくする。舞い上がった土埃が完全に視界を奪う。

やがて風も落ち着き、土埃も収まる。ルイズにも、他の生徒やコ
ルベールにも爆心地の中心が見えてきた。全員揃って、爆心地に視
線を集中させる。

「はい？」

全員が目点を点にする。

無理も無い。土埃が晴れたそこには、人間が倒れていたのだから。
更にはその人間を囲むように、3枚の光の壁のような物体と、堅そ
うな鉄の壁が一枚、張られていた。

人間が現れたことにも驚きだが、周囲の壁も不思議だ。

「ゼロのルイズが召喚に成功したぞ！」
「でも、誰だアレ？そして、何だアレ？」

周囲の喧騒に答えるかのように、壁の向こうから、声が聞こえてくる。

「大丈夫、一兄？」

「助かったぜ、いきなり爆発するんだもんな」

「コラ、一護！説明しやがれ！」

「カモくん、いる？」

「オレっちは無事っすよ！荷物も欠けてないっす」

「ふう、助かりました…」

「何故、あのような事をしたのだ。そして、お主は何者だ？」

「いい加減、離しなさいよ、アレン・ウォーカー！」

「あれ、アル？何で俺の腕に？」

「何でかな、兄さん。でも、とりあえず魂だけは無事みたいだよ」

壁が喋っているわけではない。壁の向こうに何かが居るらしい。若しかしたら、人語を解して、おまけに喋ってくれる凄い魔獣なのかもしれない。

ルイズはワクワクしてきた。これで見返せる。この見慣れない服を平民はきつと近くを通りかかっただけの一般人に過ぎないのだから。この世界の貴族しか持っていない特有の思考回路でそう思った。

光の壁が消え、鉄の壁が崩れる。

その向こうにいたのは、

「へ、い、み、ん……？」

見慣れぬ服を着た6人の平民。

これを見たルイズは愕然とした。あれだけ大見得切っておいて、

結果は平民が7人。これでは結局、見返すどころか、さらにバカにされるだけだ。

案の定、

「ルイズが平民を召喚したぞ！」

なんて声が聞こえてくる。

ルイズは7人の平民をまじまじと見詰める。

とりあえず、倒れているのは表情にどこか抜けた感じがある以外は、取り立てて特徴のない少年。

一番右から、御揃いの黒い服を着た、オレンジ髪青年と短い黒い髪の女の子。

次は赤い髪とローブを着込んだ、自分よりもいくつか小さいだろう子供。

鉄の壁の向こうから現れたのは、見事な金髪と良く目立つ赤いコートを着た少年。

最後は長い黒髪を蓄えた少女を右脇に抱える、白髪の黒い法衣をきた少年。

「つか、ココ何処？」

6人とも揃って、辺りを見回している。全員が見たことのない服を着ているが、見た感じでは貴族の一番分かりやすい象徴とも言えるマントを着ていない。ならば平民である。とかなり短絡な思考で決めていたのだ。

「一兄、あれ！」

「ん？」

一番、右端に居た黒髪の女の子が、ルイズが「抜けた感じ」と称

した少年に気がついたらしい。後ろに居た少年の手を引っ張り、駆け寄る。

「見た感じ、怪我ねーし、気絶してるだけだな。おーい、起きろ」

少女に「一兄」と呼ばれた青年は気絶している少年の頭をポカポカとノックでもするかのような気軽さで叩く。

「ちょっと退いてなさい！」

流石にそれを見かねたルイズが少年を優しく揺り動かす。段々と少年の意識がハッキリしてきたのか、ゆっくりとゆっくりと瞼が開く。

「あんた達、誰？」

ルイズの質問が青空に響いた。

2・STARTER'S

ぼけつとした頭で、どこか抜けた少年、平賀才人は考える。

周りを見渡せば、マントに明らかに黒い髪色がない少年少女たち。今まで東京の大通りに居たのに、気が付いたら、広い草原に寝転がっていた。遠くには世界史の授業で少しだけ習った、中世ヨーロッパのようなデザインの大きな建物が見える。

目の前に居るのは、多少煤けているが、随分と可愛らしい、少なくとも才人が今までであった中では一番可愛い女の子が座っていた。この子もマントを身に着けて、右手には杖のような物を持っている。

何だか魔法使いみたいだ。

「流石、ゼロのルイズ！平民を7人も呼び出しやがった！」

「うるさいわね！ちよと間違っただけよ！」

ルイズが上品な声で怒鳴るたびに、周りの同じ格好をした人垣がどつと笑う。

「うーん、どうしたものでしょうか？」

才人に近づいてきた、頭の可哀相な大人、多分、会話から判断するとこの子達の先生らしい、男の格好をまじまじと観察する。

（なんじゃ、この格好？）

大きな木の杖を持ち、真っ黒なローブに身を包んでいる。

本当に魔法使いみたいだ。

大丈夫か、こいつら。

歳は多分、ルイズと呼ばれたこの子は自分とそんなに変わらない歳だろう。でも、先生の歳は同考えても自分の父親とそんなに変わらないと思う。そんな歳で魔法使いのコスプレをしていたら、只のイタい人だ。

(本当に何なんだ、こいつら?)

才人は何事か口論しているルイズと先生から目を離し、自分の後ろを見渡す。

そこにはまた、ルイズたちと違った格好をした人たちがいた。

黒い侍みたいな格好をしたオレンジ頭の青年と黒い髪の少女。

オレンジ頭はデカイ刀を背に背負い、女の子の方は腰に日本刀らしき鞘を差している。

目立つ赤いコートを着た金髪の少年と、赤毛のローブを着た子供。心配そうに声を掛ける子供を、少年が優しく制している。特別なところは全く無い。

顔は若いのに白髪頭の少年と、その少年に抱えられた長い髪の女の子。

少年は黒い法衣を着ているのに、女の子の方は緑色のセーラー服だ。誘拐かもしれない。

どう考えても、普段の生活で自分が目にするには無いだろう格好をしている。

才人は急に怖くなった。どう考えても今の状況は普通じゃない。

あの鏡みたいはモノは、このヘンテコな宗教団体へとやってくる罠だったのだろうか。

何せ、12の瞳が全部、自分の方を興味深げに見ているのだ。

調子に乗りやすく、大勢の視線を集めたがる才人でもこれだけ注視されては、流石に辛い。

「ミスタ・コルベール！もう一度、召喚をやり直させてください！」

「ミス・ヴァリエール。それはできない」

「何故ですか！？」

混乱している才人を他所に口論は続く。

「この『召喚の儀式』は神聖なものだ。やり直しはできない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、規則にしたがって彼ら7人には君の使い魔になって貰わなくては……」

「でも！」

「ミス・ヴァリエール！」

コルベールが優しく、しかし、厳しい声でこれ以上の反論を辞めさせる。

「もう、30分以上も掛かっている上に、もう直ぐ時間も終わる。えり好みしている場合ではないでしょう？」

「うう……」

ようやく観念したらしいルイズが、才人へと顔を寄せてくる。

「あなた達、名前は？」

「名前って……俺は平賀才人……」

まだ完全に覚醒していない頭で答える。殆ど脊髓反射のようなものだ。名前を聞かれたから、答えた。それ以上でもそれ以下でもない。

「あ、僕はアレン・ウォーカーです」 黒い法衣の少年がニコニコと答える。

「シヤナ」 長い髪の女の子が憮然とした表情で答える。

「エドワード・エルリック。国家錬金術師だ」 金髪、赤コートの少年が嫌そうに答える。

「ネギ・スプリングフィールドです」 赤い髪の子供が礼儀正しく答える。

「……」 「……」 一番、右端に居た二人は答えない。

それを見たルイズが烈火の如く、怒り始める。

「貴族の私が、名前を聞いているのよ！答えなさい！」

「……何、お前、私達が見えるの？」

女の子の方が訳の分からないことを言う。見えるって、バリバリ侍みたいな格好をした二人が見えている。それは先に名乗った4人も同じだったらしい。

「あ、あの、どういうことが知りませんが、見えますよ。しっかり」と……」

ネギがどこまでも礼儀正しく、オレンジ頭の方の袖を引っ張って返答を促す。そのことに驚いているのか、呆れているのか、どちらかは分からないが、

「おいおい、マジか。夏梨、どうもこいつら、俺らのこと見えてるみたいだ」

「だね、一兄」

ハアと重いたため息をつく。何だこの二人。見えることとため息がどんな繋がりがあるんだろうか。

「黒崎一護だ。んで、こっちが…」

「黒崎夏梨」

ようやく全員の名前が分かった。にしても日本人っぽい名前だったり、外国人っぽい名前だったり、国籍はバラエティに富んでいるな、などというどうでもいい事を才人は考えていた。

全員の名前を聞き終えたルイズは何度も復唱している。覚えるのに必死なようだ。

少し間があつて、

「よし、覚えたわ！じゃ、後ろの6人、屈んで。契約するから」

「……………は、契約？」……………」

6人とも中身がつかめていないらしい。頭の上にはてなを浮かべる。

そんな7人を無視してルイズはこう続けた。

「か、感謝しなさいよ。普通、平民が貴族にこんな事されるなんて一生無いんだからね」

「へ？」

6人の言葉を無視して、ルイズは才人に近づいた。そして目を瞑る。

「はい？」

才人がマヌケな声を上げる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブランド・ラ・ヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。この者らに祝福を与え、我が使い魔と成せ」

そういつとルイズの唇がゆっくりと才人の唇に近づいてきた。

「え、えっと？」

才人は訳が分からず、首を左右に振る。何となく防御反応のようなものだ。

「ああ、もう！じつとしなさい！」

「うわ！」

暴れる才人の顔を強引に両手で固定し、さらに唇を近づける。

その姿に何となく、危機感を覚えた一護はボソリと呟く。何が起るかは知らないが、幾度と無く戦闘を乗り越えてきた危機察知能力が、コレまでにないくらいの大音量でブザーを鳴り響かせる。

「何か、まずいな」

「そうですね」「だな」

一護の言葉に賛同を示したのはアレンとエド。他の三人は何が何だか、分かっているらしい。

「逃げるぞ！」

結末を見るよりも命だ。三人は傍に居た夏梨、ネギ、シャナを抱

えて三方向へ脱兎のごとく翔ける。アレンと一護は序でに散らかつていたネギの荷物を両手に持つ。

「ん…」

そんな6人の後ろで、ルイズと才人はキスをしていた。

キスを終えて、唇を離すと突然、才人の体が熱くなり、左手が禿るのではと思うくらいに痛み、なにやら古そうな文字が刻まれていく。

「何だ、コレ！お前、何しやがった！」

「使い魔のルーンが刻まれているだけよ、直ぐに終わるわ」

「刻むな、んなモン！」

痛みを耐えつつ、ルイズに必死に食い下がる才人。
その後ろで逃げた6人も同じ症状に苦しんでいた。

「痛てえ！」「痛い！」「何ですか、コレ！」

「何だ、コレ！」「え、僕、痛くないですよ」「何で？」

痛い、痛いと転げ回る5人を他所に一人、白髪頭のアレンは涼しい顔をして皆の様子を見舞っていた。打つ手も無く、オロオロと困っている。

「先生、何ですか。まだ一人しか契約していなのに、全員にルーンが…」

「ふむ…？」

怪訝そうにコルベールが才人の左手を取って、刻まれたルーンを確認する。その間に、どうにも逃げられない事を悟ったのか、6人

が戻ってくる。

「そちらの皆さんも…」

全員が苦い顔で左手を差し出す。アレンだけは分厚い革の手袋に包まれていたが、取る素振は全く見せない。

「あ、ええつと手袋を取って貰えるかね、えつと、ミスタ…」

「アレン・ウォーカーです」

「申し訳ないが、ミスタ・ウォーカー。お願いできないか」

すつと革の手袋を取る。その左手は普通の肌色とは違う、青い色をしていた。手の甲には白い十字架が煌いている。その十字架の上に、力を足すかのように、他の6人と同じルーンが刻まれていた。

「ふむ…、見たことのないルーンだ」

さらさらとルーンをスケッチしているコルベールを見ながら、才人は考えていた。

突然、キスされて、まあ彼女いない歴16年で始めての経験だったから、それなりに嬉しかったが、いきなり変な文字は左手に浮かび上がってくるし、それは思いつきり痛いし、良かったのか、悪かったのか、今ひとつ分からない。

全く、本当にファンタジーみたいだ。

ぶつぶつと呟きながら考えていたら、

「では、全員一応終わりましたので、帰りますよ」

コルベールの号令で、周りにいた生徒達が皆、宙に浮いた。

「はい？」

才人は目が点になる。あんどりと口を開けて、その様子を見ていた。

「え、何、アレ？何で浮いてるの？」

周りは障害物など何も無い青々とした草原だ。当然、人を吊るすようなクレーンやワイヤーもない。幾らなんでもありえない。一人くらいなら説明も付きそうだが、全員である。50人近い人数が一斉に何も無い空中に浮かび上がったのだ。

目の前の光景に才人は自分の目を疑った。

そうして、浮いた生徒達は一斉に遠くに見えた石造りの建物へ向かっていく。どうやらアレは学校のようなようである。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ！」

「アイツ、『フライ』どころか『レビテーション』すらまともに使えないんだぜ」

「その、平民達、あなたにお似合いよー」

飛び去っていく生徒達が口々に笑いあう。

残されたのはルイズと才人、そして一護に夏梨、アレンにエドとネギ、そしてシャナの8人だけになってしまった。

今の到底、才人の持っている常識では説明できない現象を目の当たりにして才人は口を開いた。

「あんた達は一体、何なんだ！俺の体に何をした！」

「まま、えーと、才人だったけ？落ち着けよ」

才人の怒りを込めた言葉を一護がなだめる。その質問の行き先だ

ったルイズはため息をついた。

「そりゃ、飛ぶわよ。メイジだもの。というか、『フライ』も知らないなんて、一体どこの田舎から着たのよ?」

「田舎? 田舎はここだろうが! 東京はこんなド田舎じゃねえぞ!」

「トーキョー? なにそれ。どこの国?」

「日本だけど」

「なにそれ。そんな国、聞いたことない」

そこへアレンとシヤナ、更にはエドが入ってきた。

「俺はアメストリスのサウスシティから来たんだけど」

「アメストリス? どこよ、そこ?」

頭を掻きながら聞くエドとつっぱねるルイズ。

「僕はイギリスのロンドンという所ですが…」

「だーかーらー! どのなのよ、そこ!」

頬を掻きながら考え込むかのような仕草で聞くアレンと突っぱねるルイズ。

「私は御崎市からよ」

「知らないっていつてるでしょ!」

腕を組んで無然と聞くシヤナと突っぱねるルイズ。

「もう、何度も説明させないでよ! ここはトリスティンよ! そしてココは由緒正しきトリスティン魔法学院よ!」

それで分かるでしょ？と言わんばかりの態度でルイズは言う。
だが、さっきまでの混乱が引き、頭に上っていた血が降りてくると段々と冷静に考える余裕が出てきた。ルイズの言葉に看過できない言葉が混じっていたことに気がつく。

「魔法学院？」

「そうだけど、それがどうかした？」

「じゃ、飛んでたのは魔法だったのか？」

「だから、当然でしょ。メイジだもの」

ルイズの言葉に啞然とする。

とりあえず、今までの情報を整理して疑問を呈する。

「じゃあ、あんたは魔法使いなの？」

「そうよ。私の使い魔じゃなきゃ本来は、あんた達なんか口がきける身分じゃないんだからね」

「じゃあ、あんたらはさっき俺達のことを平民と呼んでたけど、あんたは貴族なのか？」

「そうよ。私は由緒正しい旧い（ふるい）家柄を誇る貴族のヴァリエール家の三女儿ルイズよ。そんな私なんであんたらなんかを使い魔にしなくちゃならないの？」

ハアとため息をつくルイズ。顔が可愛く、体格も華奢だから一回の行動が日々絵になる。

そのため息を見て、才人は気がついた。さっきから自分以外誰も喋っていないことに。

普通あんな光景を見せられたら、自分のように腰を抜かすはずだろう。でも、誰も喋っていない。あまりの出来事に思考が追いついていないのだろうか。ここは自分が促して、ルイズをとっちめるべきだろう。幸い女の子や子供がいるとは言え、同じくらいの歳の男

が4人もいるのだ。こんな小さな女の子なら、直ぐに捕まえられる。

「黒崎さんたちも何とか言ってくださいよ」

そう言っつて振り返った才人の目には、フワフワと宙に浮かぶ一護と夏梨の姿が。

「アレ？」

ばさりと羽音がする方へ、顔を向けると炎のような紅蓮の双翼を背中から生やしたシャナの姿が。

「ハイ？」

「よし、んじゃ、とりあえず右も左も分かんねーし、あいつら追っぞ」

「はい！」「了解」「分かりました」

一護の号令にフワフワと浮かぶ杖に乗ったネギとエドとアレンの姿。エドとアレンはネギの傍にあった荷物を天秤のように抱えている。

全員が先に飛び立った生徒達を追って学院を目指す。

「……………」

ルイズも才人も目が点になる。

とりあえず、二人は先に飛んでいった6人を追って、学院への道を走り出した。

「へえ、魔法世界ね」

ずっと水を飲みながら、エドが喋り始める。

時刻は変わって夜。見たことのない二つの月が窓の向こうの空に輝いていた。

ここは魔法学院の寮、ルイズの部屋である。

「今ひとつ、信じられねーけど、そういう事なんだろ」

どこからか調達してきたらしい、ハムを噛みながら一護がエドの話に乗る。更にシャナとアレンも、その会話に参加する。

「信じられません」

「魔法なんてあったんだ……」

「俺はお前らの話も信じられねーけどな。AKUMAに人食いの徒”なんて」

ぼいっとアレンの方へ、籠に盛っていた林檎を投げて寄越す。片手でキャッチするアレンと、両手で掴むシャナ。会話に参加していないネギは自分の荷物の整理、夏梨はそれを手伝っている。

「それはこちらも同じですよ、死神なんて神話の話ですよ」

「そうそう、錬金術だって眉唾ものだと思ってた」

しかしお互いの自己紹介も兼ねて先に見せている。

背負った武器や、自分達しか持ち得ない技術や能力を。

現実を見せられた後では、疑いようがない。

「その通りだ。しかし、お主らも豪胆というか、呑気というか…」

不意にシャナの胸元、正確にはそこにある金の輪を二本、引つ掛けたペンダントから重く遠雷の様な声が響いた。シャナに異能の力を与えている、紅世の王「天壤の劫火」アラストールのものである。ルイズと才人よりも早く学院に戻ってきた6人は、近くにいたルイズのクラスメイトらしい女生徒を適当に探し出し、この部屋を聞き出したのだ。無論、鍵はしっかりと掛かっていたが、エドが錬金術で強引に開けたのだ。

「なんつーか、生きる事になっちつこいだけさ」

「そうだね、豪胆とか、そういう褒められたものじゃないです」

そこへ来て6人と3体、そして1匹で善後策を協議しているというわけだ。

「ただ離れていたのかは知らないが、まだこの部屋の主は帰ってきていない。」

「で、カモくんがいいのかな？」

「おう、なんでい、アレンの兄貴？」

アレンのフードから金色の羽付きボール、ティムキャンピーとネギのペットである喋るオコジョ、カモミール・アルベールがひよっこりと顔を出した。白い髪に保護色のように溶け込んでいる。

「ネギ君もその、魔法使いなんだよね？」

今、この場におらず荷物の整理に勤しむネギ・スプリングフィールドもまた魔法使いらしい。だが、どうもこの世界の魔法使い「メ

イジとは違う存在らしい。全部、カモから5人と1体は聞いた。

「ふう、ありがとうございました、夏梨さん」

「何、気にすんな。それと一兄」

「ん？」

「コレ」

荷物整理が終わったらしいネギと夏梨が戻ってくる。適当に空き部屋を探して、そこに荷物を放りこでいたのだ。流石に男4人と女2人が一緒の部屋にいるのは拙いという、至極常識的な見解からだ。夏梨が一護に黄色い何かを放り投げる。握りつぶさんばかりの握力で、一護がそれをキャッチする。

「おい、一護！ヤメテ、綿が出るから！」

そのライオンらしいぬいぐるみが喋りだしたときには流石に焦った。

「ぬいぐるみが喋ってる…」「どんな仕組みで…」「不思議だ」

「お前らが言えるかよ、喋るペンダントと義手にオコジョって…」

「うん、無理だと思う」

じとつと喋る生物と無機物を見る、一護と夏梨。

エドと一緒にこの世界へ転送された、彼の弟であるアルフォンスは鎧から、彼の右手の機械鎧に魂を移し、エドのオートメイルは世にも珍しい喋る機械鎧になっているのだ。この事態は本人達も驚いたという。だが、その結果として錬金術の実力が上がったという。あまり喜んだ様子ではないが。

「ま、どうやら俺たちは全員、ちょっと違った世界から来てしまっ

たと…」

ガリガリと頭を掻く一同。見ず知らずの土地に来てしまつて、どうにも勝手が判らない。そうなるとする事は一つだけだった。

「まずは、帰る方法を探しましょう。若しかしたら、僕ら同様…」

「別世界の人間も居るかも知れない…、ってことですねネギ君」

そんな事を話していると、カツカツと石段を上がってくる足音が二つ、聞こえてきた。

「お、この部屋の主のお帰りのようだぜ」

3・Our master is ZERO

善後策を協議していた6人と3体と1匹が占拠した部屋へ、この部屋の本来の主が帰ってきた。随分と急いでいたのか、それとも草原に放置して消えてしまった自分達に怒っているのか。間違いなく後者だろうと全員が当たりをつけた。

案の定、扉を蹴破り入ってきた、桃色の髪の毛の女の子は、

「あんだ達、使い魔の癖に、ご主人様を放っていくなんで、どんな見よ！」

開口一番、ガミガミと喋り始める。

とりあえず、聴いたのはそこまで。後は皆揃ってシャットアウト。自分達の話し合いに戻る。

シヤナとネギとエドは現実問題として、これからの生活をどうするか。こんな月が二つあるような異世界に紛れ込んでしまったのだ。元の帰れる方法を探すためにも資金や活動は必要だ。尤も、金について言えばエドが錬金術で、金でも銀でも大抵のものが作れるから、そんなに心配していない。

一護とアレンと夏梨は、モグモグと食堂から失敬してきた果物にかじりついている。特にアレンの食べる量は同年代のエドに比べて、異常なまでに多い。

「ちょっとあんだ達、無視しないでよ！」

「あー、すまん。えーと、誰だっけ？」

片手に赤い林檎を持ったまま、一護がルイズに話しかける。

それで気がついたが、こちらの名前は名乗ったが、先程から怒鳴り散らしていた、この女の子の事は何も聞いていない。どうも6人、

いや、正確には彼女の傍にいるうらぶれた黒髪の少年と、鎧とペンダントとぬいぐるみに、オコジョを足した10人は、この女の子に呼ばれたらしい。とりあえずは一番、重要な手がかりだ。

一護の態度が気に入らないのか、40センチ近い身長差のある一護をキツと睨む。

「はあ？さつき、名乗ったでしょ？」

だが、所詮は女の子の一睨み。数々の戦いを潜り抜けてきた戦士である一護には殺気の籠っていない睨みなど、普段と同じように見られているだけに過ぎない。そして、それは後ろにいるシャナやアレン達も同じ。くわっと大きな欠伸をしながら、遣り取りを見るでもなく見ている。

妹である夏梨は知っているが、一護は人の顔と名前が覚えられない。今でさえ、4人の名前を覚えるのにたっぷり1時間を掛けていた。

もやもやと一護は自分の記憶を揺り動かす。この世界へ遣って来たら、ここに来るまでの時間。

「えっと、ドン・パニーニだったけ？」

「違うよ、一兄。ドルトーニ」

「だー、本当に2人とも覚えられてねーのな、ドン・パニーニだろ？」

「「おお、エド。すげーな」」

意図的なのか、それとも天然なのか。三人揃って名前を間違える。でも、その一方的に剣呑な遣り取りを見ていられないのは、ネギだった。

「わわ、ダメですよ！黒崎さん！」

「一護でいい、ネギ坊主」
「そうじゃなくてー！」

あぶぶと10歳らしい可愛い慌てぶりでネギが困り果てる。
とりあえず、三人の前に立ち、改めてルイズに向き直る。

「えっと、取り敢えず、名乗っていただけないでしょうか？」

本場英国仕込みの紳士然とした対応で、ネギが喋り始める。

「ふん、いい心がけね。なら言うわよ」

「偉そうだな、オイ」「だね」「ああ」

ボソリと呟いたのは内緒だ。ルイズにも聞こえないくらいの音量で喋っている。

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「名前、長え」

エドが兎に角、覚えるのが面倒だと言わんばかりの態度で悪態をつく。それに同感だという調子で他の4人が首を上下に振る。

「うるさいわね！平民の分際で、貴族に意見しないで！」

「はいはい、んで、そっちの黒い髪の奴は？」

エドと一護の心底、どうでもいいという調子にキーツとルイズが発狂する。その狂いつぶりや、まるで動物のようである。2人は無視、ネギとシヤナが両肩を持って、飛び掛るのを阻止している。

才人はそこで自分を見ている二人、そして奥にいる4人に目を留

めた。

(相変わらず、変な格好してるな…)

そう思いながらも自己紹介をする。

「えっと、平賀才人です」

そして再び、6人の自己紹介。

勿論、死神だ、フレイルムヘイズだ、エクソシストだ、魔法使いだ、錬金術師だと言う事は伏せておいた。加えて異世界云々の話もルイズと才人にはしなかった。6人と魔神やオコジョはお互いを知っているが、二人は知らない。これは単純に余計な先入観を与えないという処置だ。なので、兎に角、アラストールにもカモミールにも、コンにも、アルにも口を開かないようにと念押ししておいた。

間違っても信じてもらえない。

この学院の寮を作りや材質を見ながら、明らかに科学技術が低いと指摘したエドの提言でもある。次元だ、異空間転送とか、そんな事を近代自然科学という概念のないだろう彼女達に説明しても面倒というのが理由だ。

このエドの直感は物の見事に的を得ていて、

「信じられないわ」

「俺だって信じられねえよ」

「別の世界って、どういうこと？」

「魔法使いがない。月は一つ」

と、ルイズと才人が口論している。心底、言わなくて良かったと思う。異世界から来た証明をしなければならぬが、生憎と凝り固まった価値観が簡単に変わるほど、人間は単純にできていない。

しかし、話を聞いているとこの平賀才人という少年も異世界からやってきたようだ。それも恐らくは、一護と夏梨、シャナ、ネギ、いずれか、若しくは本人たちの常識が違うだけで、4人の世界は同じなのかもしれない。いずれ、彼にも話さねば、成らない時が来るだろう。

だが、今はその時ではない。

「で、使い魔ってなにすんの？」

才人はルイズに尋ねた。

それについては6人も気になっていた。おそらく、昼間の出来事を考えると使い魔の召喚というのがあって、その使い魔に自分達はされたらしい。こちら辺はネギとカモが懇切丁寧に説明してくれた。才人は魔法使いが出てくる映画やアニメを知識を総動員して思い出す。髭と白髪 of 素敵な魔法使いの肩に乗っているワシとかフクロウが出てくるのは知っている。でもあいつらは大体肩に乗ってるだけで、具体的に何もしなかった記憶もあるのだ。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ。」
「どういこと？」

遠くの月を見ながら、夏梨が尋ねる。今さらながらこの異世界に興味が出てきたようだ。冷静になって考えると不思議が多い。好奇心たっぷりの猫のようにワクワクしているのが伝わる。

「簡単にいえば、使い魔が見たものは、主人も見ることができると

よ。」

「へえ、凄いですね！」

ネギは素直に感嘆のため息を漏らす。ネギの使い魔、というかペットであるカモとは、そんな事が出来ない。自分の作戦立案を手伝ってくれたりするが、少なくとも感覚を共有はできない。

「で、どうなんだ？」

かなり面倒な様子で一護が尋ねた。随分と夜は更けている。どうも早く寝たいらしい。

そんな自分のいう事を聞く気が一切ない、一護をまた一睨みすると、ルイズはガツカリした様子で言った。

「でも、あんた達じゃ無理みたいね。わたし、何にも見えないもん！」

「ふん」

才人は眠くなってきたのか、ぼけっとした様子で言った。

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね。」

「秘薬って何ですか？」

アレンも興味深げに聞いてくる。薬というものにあまりいい思い出がないアレンであるが、不思議な効果のある薬を売れば、金が入ってくるかもしれない。師匠がたっぷり残していった迷惑な置き土産を処分するためにも、聞いておきたい。

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか…」

そこまで言って、心底残念そうにため息を付く。

「でもあんた達、そんなの見つけてこれないでしょ。秘薬の存在すら知らないのに」

哀しそうに言うルイズに、答える。

「うん。それ無理」

「無理無理」

「硫黄を秘薬とか言ってる時点で、度が知れるな」

最後のはエド。錬金術師は同時に物理学者であり、化学者であり、植物学者であり、動物学者でもある。科学の粋を集めている錬金術師にしてみれば硫黄という、至極市中に溢れている品物を、秘薬などと呼称する時点で、かなり下に見ていた。

勿論、現代日本から来ている一護や夏梨、シャナの考えは押しつけて測るべしだ。

そして、ルイズは溜め息をついた後、言葉を続けた。

「そして、これが一番なんだけど……使い魔は、主人を守る存在であるのよ」

「ほっ…」

ここでようやく、全員が興味を示した。

「その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！で、あんた達はどなの？」

ルイズが尋ねる。

才人は、「無理。普通の人間だし」

一護と夏梨は、「断わる!」

アレンとシヤナとエドは、「嫌」

ネギは、「ちょ、ちょっと、皆さん!」

「何を言ってるの?」

5人の言い草にルイズが静かに怒り始める。

判ってやっているのか。それともただ神経を逆撫でただけなのか。

「言ったとおり」「ちょっと、一護さん!」

「黙ってる、ネギ坊主」

一護はグシグシとネギの赤毛が乱れるほどに、乱暴に頭を撫でる。

「生憎と俺は見ず知らずの奴を守ろうって言うほど、人間出来ちゃいねーんだ」

「ですね、僕も同じですよ。僕は自分の為に生きます」

「私も自分の使命がある」

「私は一兄の背中を守るためにいる」

「俺も同じだな。俺の目的の為に全部、利用したり捨てたりしたんだ」

5人の若しかしたら悲壮な、若しかしたら利己的なそんな思いは、全ての人を救おうと思う立派な魔法使いを目指すネギには納得できない事だった。

でも、理解はしている。そういう生き方を選んだ人を知っているから。

「本当に平民の癖にナマイキね…。まあ、いいわ。喋ったら眠くなつたし」

ルイズは眠たそうにあくびをした。

「その内、絶対に私の為に働いてもらうから！」

「俺達はどこで寝ればいいんだよ」

ルイズの決意に才人が質問を挟む。その質問にルイズは無表情で床を指差した。

途端に額に汗を浮かべる才人。そしてルイズは勝ち誇った顔。

行く宛も無し。動く為の金も無し。頼れるのは自分だけ。ならば、ここで大人しく使い魔をやるしか、このムカつく5人は方法がない。

(私が上だっつてことを分からせてやるんだから…)

ルイズはそんな風に考えていたが、6人は涼しい顔。逆にハラハラしているのは才人だ。

「犬や猫じゃないんだけど」

「しかたないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

そう言っつてルイズは毛布を一枚ずつタンスから出すと7人へ投げつけた。

才人はおもむろに受け取る。受け取ったのを確認するとルイズは、ブラウスに手をかけた。

「ちょッ！なにやってんだよ！」

大慌てで才人と止める。あわあわと動転しているネギと違って、5人は興味ないと言った感じだ。

その様子にきよとんとした声で、ルイズが言った。

「寝るから着替えるのよ。なにかおかしいところでも？」

そう言って再びブラウスに手をかけたルイズを見て才人は、

「ごめん、夏梨にシヤナ。任せた」

それだけ言い残して、急いで部屋を出て、ドアを閉めた。序でに欠伸をかましていた男3人と、慌てまくるネギの襟首を強引に掴む。部屋を出て、才人は襟首を掴んで引つ張り出してきた男4人に向き直る。

そして、重く深いため息をついた。

どうやらルイズは俺達が男とは思っていないらしい。

(にしても、何なんだ。この3人の悟りきつたような表情は…)

ネギが慌てるのはまだ10歳だからだろう。当然である。だが、自分と同じくらいのこの3人は、ルイズが着替え始めても、「何かどうでもいいや」みたいな顔だった。

理由はあるのだが、まあ聞けば才人が羨むことは間違いない。

「本当に、どうなっちまうんだ…」

才人は心底、疲れた顔で呟いた。そして、独り言のような事を呟く。

「くそっ!!!!どうして俺はあんなモノをくぐったんだよ!!!!」

「まあ、落ち着けっつ」

ドンドンと灯も何も無い廊下の石壁を叩く。

叩いたところで何も変わらないが、それでも叩かずには入れなかつた。あまりの勢いに腕の方が行かれる寸前で、エドが止めた。

「くぐらなければ、何事も無く家に帰れたのに!」

しばらく経ち、夏梨の声が響く。

「終わったよ」

夏梨に言われたので部屋に入ると、ルイズはベッドにくるまつている。

床には毛布が7枚、ちょうど才人たちの人数分散らばっている。どうもコレで寝るといふ事らしい。

才人はどこまでも勝ち誇った、傲岸不遜の笑顔を浮かべたルイズを見ていた。だが、一護もアレンもエドもその毛布を見向きもしない。デザインが気に入らないとかではなく、純粹に興味がないかのようだった。

「いくぞ、夏梨。シャナ」

「はい」「うん」

一護が外へと促す。2人ともまるで合鴨のヒナのようにオレンジ髪青年についていく。

「ちよ、ちよつと、どこへ行くのよ!」

自分の宛てが外れたルイズは慌てる。それはそうだろう。ルイズ

は自分しか頼れ無いという状況を作り出し、主人と認めさせようとしていたのだが。完全に宛てが外れ、困り果てる。

「どこって、寝るんだよ」

「だから、ここにあるでしょ。早くしなさい」

「はいはい、ルイズちゃんは偉いですね」

かなり小ばかにした様子でエドが言う。これに更にルイズは青筋を深くする。

「んじゃ、アレン」

「はい、箱舟」

短く噛み切るような言い方でアレンが箱舟を起動させる。突き出したアレンの右手の先、そこにはまるで白い巨大な水晶のようなものが浮かんでいた。

「ちょ、何よ、コレ？」

「何って、箱舟です」

「コレ、あんたの？」

「そうですね、それが何か？」

「寄越しなさい」

「何ですか？」

「私があんたのご主人様だからよ！」

ルイズの根拠薄弱な主張にアレンは露骨に嫌そうな顔をする。

「ま、いいや。皆さん、先に入ってください。あ、ネギ君は荷物を忘れないでね」

「あ、はい。シャナさん、夏梨さん、エドさん、手伝ってもらえま

すか」

「あいよ」「うん」

そういうと三人で荷物を取りに行く。アレンとルイズは箱舟を譲る、譲らないの口論、といっても一方的にルイズが喋っているだけだ。

「ったく、付き合いきれねえ。先に休ませてもらうぜ」

「はい、直ぐに僕も休みますから」

そう言い残すと一護は水晶の中へ消えてしまった。

「え?」「はい?」

ルイズも才人もきよとんとする。きよとんとしている間に戻ってきた4人が次々と同じように消えていく。更に目が点になる。

「じゃ、僕も」

そう言ってアレンも消える。

「ちょっと、待ちなさい!」

あれが入れるものだとは判断したルイズは自分も入ろうと、特攻するが、ビタンとぶつかってしまった。先ほどまでは水のようになっていたのに、今は硬い壁だ。

見ればアレンが水晶体の上のほうで、嫌な笑顔を浮かべている。

「ふん!」

「はあ…」

ルイズは使い魔に馬鹿にされたのが、心底気に入らないらしく、ふてるようにベットに入った。

才人は用意された毛布全てを贅沢に使って、石の床に寝転ぶ。

固い感触が背中と後頭部を襲うが、意外にも、すんなりと眠気が襲い目を閉じた。

パチンとルイズが指を弾くと、ランプの灯りが消えて窓の外の二つの月の光がゆるっと入ってきた。

才人はあの二つの月を眺めた。

ここは日本ではない。地球ですら、ない。

魔法使いがいて、空を飛ぶ国があるなんて、俺の世界ではありえないことだ。

空に浮かんだあのでかい月はなんだ？

地球の夜空に浮かんだ月の、二倍は優にある。

でかいのはまだいい。

もしかしたらどこかの国では、そういう夜もあるかもしれない。

だけど、二つあるのはおかしい。

才人が知らないうちに月は二つに増えたのだろうか。

ここは本当に地球ではないようだ。

否定したかったが、否定のしようも無かった。

才人は今日ほど、己の好奇心を恨めしく思ったことはない。

「ドッキリだと言ってくれよ。なんで誰もボード持って来ないんだよ」

夢だと信じたかったが、ルイズとキスした時の感触とそのあとの左手の痛みが夢ではないと物語っていた。

「母さん」

辞世の句でも詠まんばかりの勢いだ。

「どうやら才人は魔法使いがいる世界にやってきてしまいました」

まだ、死ぬ気はないが。

「しばらく学校にも行けません。勉強もできません。勘弁してください」

グスグスと恨み節を言うが、

「うるさい!!」

「じめんなさい」

と怒られてしまった。

ハアとため息をついて、目を閉じるとあっという間に、夢の世界へ誘われた。

3・Our master is ZERO（後書き）

本文中にあるエドの「硫黄が秘薬なんて時点です」というのは彼が錬金術師であることもありますが、やっぱり硫黄という基礎的な元素すら抽出できていないという、事実を重く受け止めているからです。今ひとつ、その裏にある「神学」の要素は測っていないですが、ルイズ達の世界観、つまり17世紀というのは自然科学の走り調節でした。ニュートンが万有引力を発見し、トスカネリが地球球体説を唱えた時代。しかし、それは現実の世界でもキリスト教に拠って潰されてきました。

単純に無自覚にルイズ達は深く神学に嵌っていますから、エド達の言葉が額面どおりにしか受け取れない。本来であれば、怒りよりも技術力の無さを嘆くべきだったのです。

もし原作の才人がこんな風に高校程度の自然科学を開陳できていたら、間違いなく打ち首獄門です。それくらいにキリスト教に対する自然科学へのある意味、冒瀆ともいえる迫害はすさまじいものでした。ガリレオやケプラー、メンデルなども悉く宗教裁判に掛けられていますから。

4・Council In Cube (前書き)

このような拙作をお読みいただきありがとうございます。P V 一万件を突破いたしました。

4・Council In Cube

にゆっとアレンが白い水晶から首を出し、ルイズの部屋の明かりの消えた事を確認する。

そして再び、首を引っ込める。その姿はどこか白い色をしたカメラのようだった。

「ようやく、寝ましたか…」

アレンの振り返った先には一護達にとって、中世ヨーロッパを彷彿とさせるような石造りの建物が際限なく奥へ奥へと続いていた。空は染み一つ無い白。太陽は無いが、まるで陽だまりのように明るい。

ここは箱舟。

アレンの行った事のある場所であるならば、その場所を物理的な距離を無視して自在に繋ぐ、アレンとそのゴーレムであるティムキヤンピーにしか扱うことの出来ない、秘宝中の秘宝である。

中の街並みは単純に興味の域であるが、アレンは気に入っていた。先ほど、ルイズが「寄越せ」と喚んでいたが、これを扱うことができるのは鞠に羽根の生えただけのティムキヤンピーを連れたアレンだけ。この不思議な空間に入れるも、はじき出すも全てはアレンの心意気次第なのだ。ルイズは入れると間違いなく引っ掻き回すと思っただけの自衛の為に。才人の方は何となく。

「お待たせしました」

石畳を数分ほど歩くと、城下町にあるような大きな噴水が見えてきた。

噴水の縁には先に入った一護達が待っていた。ペコリと丁寧にお

詫びする。

「にしても、すげーな、これ。アレンの行った場所ならどこへでも行けるんだろ？」

「まあ、ある程度の制約はありますが」

夏梨は一護の後ろで、袴をたくし上げ、水遊びに興じている。エドとネギは探索でもしているのだろう、噴水の傍には居なかった。目標となる場所はここが一番なので、しばらくすれば戻るだろう。

逆にこれに入ったのが3度目となるシャナは、かなり機嫌が悪い。

「どうした、シャナ」

「うるさいうるさいうるさい！」

実はルイズと才人が帰って来るまでの間に、この部屋、正確には空間に一度、全員をアレンは招待しているのだ。皆、一様に呆けた顔をしていたが、一護だけは「こんなバカでかい空間があったなんてー！」と大声で叫んでいたが。

その場所で各々の正体を明かし、序でに簡単な手合わせをしたのだ。先に相手に一撃入れたほうが勝ちという、かなりシンプルな勝負。勿論、全員が無手だ。

結果は一護が4勝1分、アレンも4勝1分け、ネギが3勝2敗、エドが2勝3敗、シャナと夏梨は4敗1分という、本人曰く恥ずかしい結果になってしまった事が、相当来ているらしい。

さっきの間も良く、爆発しなかったなとアレンは心の底から感心していた。まるで娘を見守る父親のようである。

で、その父親代わりでもある、アラストールはというと

「確かに気になっていたのだが、随分と素晴らしい身体能力なのだ
な」

紅世の王と契約した人間は、”徒”を狩る異能の討ち手となる。勿論、”徒”達は人間には到底、及ばない膂力や脚力を持っている。だからこそ、それに呼応するように異能の討ち手、フレイムヘイズもまた、人外の膂力を持つのだが…、

「だって、アレンにはバックドロップを喰らって…」

白髪頭の少年に体を掴まれ、頭から石畳に落された。

「一護には空手チョップ…」

突進したらするりと避けられ、脳天に鋭い一撃。

「ネギには胸に一発…」

後でアワアワと右へ左への大騒動だった。

「エドには捕まえられ…」

思いつきりぶつかっていったら、その先は壁だった。

一応、武器は使っていないのでセーフらしい。

「ようやく、夏梨と引き分けじゃない！」

アレンと一護はボリボリと頭を掻いた。正直、やりすぎたかなと思っていたが、ここまで思いつきり臍を曲げられるとは思っていなかった。使命感が強くて、これから宿敵にして最愛の人との戦いを前にしていた、（ここらへんの話はアラストールから聞いている。尤も、5人とも興味は無かったが）フレイムヘイズの少女にとって、

これは随分と重く押し掛かっているようだ。

「ま、いいじゃねえか」

「何がよ」

今まで見せたことのないはずの透明な液体が、今にもシャナの目からあふれ出そうだった。

「俺らだって、最初から強かった訳じゃねえ。必死になって戦って、必死になって鍛錬して、それで強くなったんだ。心配すんな。シャナの修行、俺達が手伝ってやる」

自分に親指を当てて、自信満々といった調子で一護が語る。
それに乗って、

「はい、私も一兄に稽古つけてもらおう！」

「僕も彼女に協力しましょう」

「ふ、心遣い感謝する」

短く、紅蓮の少女が笑った事に気が付いたのは、その契約者だけだった。

「あ、皆さん。準備できましたよ」

話が纏まったとき、入ってきた方向とは逆の方向からネギとエドが杖に乗ってやってきた。この杖はネギの持ち物で、ネギの魔法詠唱の精度と、魔法の威力を増加する、早い話がブースターなんだそう。魔法に関して、一切の知識の無い側の4人は適当に掻い摘んで理解していた。

杖の下には大きな布で包まれた物体がぶら下がっている。

噴水の傍にゆっくりとホバリングしながら降りてくる。先に荷物を降ろすと、エドが飛び降りる。包を開くと現れたのは大きな台の付いた丸水晶だった。

「…なんです、コレ？」

「あ、えつとですね…」

怪訝そうな顔をする4人にネギが説明を始める。

中を覗き込むと、綺麗な青いサンゴ礁と海、白い雲と砂浜が広がっている。そこから小高い丘を登っていくと、城らしき建物があって、周りを南国植物が彩っている。

滅多にお目にかかれないう、かなり手の込んだミニチュアだ。

「こいつの名前はドライオマ魔法球！このミニチュアの中に入れて、1日を10日にすることができー！」

と思ったら、ネギの赤毛の陰から白い小動物が現れ、全部台詞を搔っ攫った。

「どういうこと？」

「まあ、単純な話さ。浦島太郎って昔話があるだろ？アレの逆で、この中では経過時間が遅いんだ」

「あー、なるほどな」

一護が凡そ理解したらしく、その先の説明を引き継ぐ。

「こつちで1日24時間しか経ってなくてもでも、このドライ…魔法球の中に入れば10日の時間が流れているっていうことか」

「さすが、一護の兄貴！」

カモが話していることを理解してくれた人を見つけて喜ぶ。

このドライオマ魔法球の事を一回で覚えなかったのは、一護の持ち前のダメスキルの発露である。

「その通りでさ！しかも、今回は修行環境を自由に選べる、オプシヨンをつける！」

そうやってネギが魔法球を中心になるように、別の魔法球を接続していく。

こちらの魔法球の中をのぞくと、一面が白い銀世界、赤く燃え盛る火山地帯、木しかない密林、あちこち腐ったような沼、流れ飛ぶ砂しかない砂漠という、5つが繋がった。

「こつちの中も同じように時間が流れる。修行には打ってつけて訳さ」

どこから取り出したタバコを銜えて微笑む。若干、黒いモノが見えた気がしたが、気にしないことにした。

「これは自由に使ってくれ。この位置に置いておく。いいつすよね、兄貴」

「うん、カモくん。皆さん、有効に活用してくださいね」

パンパンと話が完結したところで、エドが手を打つ。

「じゃ、一段落したところで、これからの動きだ」

「そうだね、兄さん。帰らないと皆、心配するし」

エドが頭を掻きながら、話し始める。

「とりあえず、何で俺達がこの世界へ呼ばれたのか。それを探るべきだろう。ならば、手がかりはあのピンク頭のクソガキにある」

実際のところ、エドとルイズは同じ年なのだが、平均身長よりも低いエドから見ても、ルイズはまだ頭一つ分、低い。年下と勘違いするのも無理からぬ話だった。

呼んだのが彼女なら、帰せるのも彼女。エドは状況証拠からそう結論付けた。

「若しかしたら、他の世界から紛れ込んだ品や人がいるかもしれない。それを探すためにも、箱舟の行動範囲は広げておきたいです」

アレンの行った場所なら何処へでも行ける。この箱舟の性能は有効に活用したい。

「じゃ、こうだな。アレンの兄貴を連れて、エドの兄貴と兄貴がこの世界の探索。あとの3人はあの子に付いて回ると…」

「序でに買い物をしてくれ。俺達の格好じゃ、目立つだろう」

そういう一護と夏梨の姿は上下黒の袴。シヤナはセーラー服だ。どっちもこの世界の社会状況から考えると、着られていないだろう。目立つことは避けたかった。

「了解です。どんな服を所望で？」

「とりあえず、目立たなければ、エドみたいな感じで頼む。二人はどうすんだ？」

「私は…」

シヤナは詰まる。単純に服を機能性と必要性で選んできたため、今ひとつどんなものかいいの分からないのだ。それに気が付いたの

か、

「じゃ、私達はこんな感じで」

パスツとアレンに紙を二枚渡す。そこには綺麗なデッサンで描かれた服のデザインがあった。生憎と男衆にはデザインの良さや来歴は全く分からなかったが、どちらも17世紀の西欧をイメージさせるものだった。

「それを二着ずつ。色の指定があるけど。ネギ、読める？」

「大丈夫です、夏梨さん」

今後の活動指針。

そして、指し当たったの当面の目標。

それらが決まった。

「じゃ、寝ましようか。異世界の一日目の夜ですよ。たっぷり休んでください」

そうネギが促すと、予め決めておいた家へと各々が散っていく。

ネギもまた、自分にあてがわれた家へと行く。既に荷解きも終わり、赴任先の学校である、麻帆良学園の寮と同じ感じになっていた。

白い空の下、動き回る影が二つ。

噴水の傍に近寄るのは、煤けたライオンの縫いぐるみである、コ

ンとオコジヨ妖精のカモミールだった。

「にしても、異世界か……。可愛い子いるのかね？」

そんな愚痴をこぼすコン。間違いなく、主人が聞いたら中の綿を
残らず取り出されそうだ。

「まま、気にしても仕方ねえ。一杯やろうぜ、コンさんよ」

へへへと下品な笑いを浮かべるカモ。

「お、気が利くじゃねーか。じゃ、俺からも……」

「ととと、じゃ、乾杯と行きますか」

「異世界で生まれた」「俺達の友情に」

「乾杯」

4・Council In Cube（後書き）

まず、シャナファンの皆様、真に申し訳ありません。

どうしてもあの4人と対峙した時に彼女が勝つシーンというのが思
い浮かばなかったのです。

確かに技巧や体力面では圧倒的にシャナの方が圧倒的に上ですが、
それを補って余りあるだけの一護には速力が、アレンには手数が、
ネギには火力が、エドには発想力があると思います。

決して彼女は弱い訳ではないです。今回は無手なので、彼女は必殺
の大太刀と呼ばれた「贄殿遮那」を使っていますし、使えばまだ
強いかと。勿論、それは他の4人にも言えます。今回は無手という
単純に体格差が明確に出る勝負だったので負けたということですよ。

ただ、原作を読んでいるとやっぱり速度に難がある点は否めません。
高速移動術というのはフレームヘイズには無いのでしょうか。模し、
身に付けることが出来れば、彼女の戦いもワンステージ上へ上がる
と思います。

d-nakさんから質問を頂きました。

「作品の別キャラクターは出てきますか。特にグリードやリンは」
ということですよ。

エドの機械鎧が破壊されるような事になれば、当然の事ながらウイ
ンリイは必要になりますし、東方からの使者という事でリン主従の
登場も意図できると思います。

一番、簡単なのはネギまのヘルマン男爵でしょうか。

彼にはネギの成長を確かめる役割があると思いますので。

5・A W a k i n g r o m a n c e

朝、アレンは箱舟の中に拵えた自分の部屋の中でパチリと目を開けた。

いつ何時、AKUMAに襲われるか分からない生活を送っていた彼にとつて、この余計な存在を入れない空間は心地良いものだ。だが、太陽の日が在る訳でもなく、昼も夜もないので今ひとつ時間の経過が掴みにくい。どうもこの世界には時計というものが存在しないようなので、早々に6人とも計時は諦めていた。

「ん、ん」

軽く伸びをしてベットから飛び降りる。一番上の黒い法衣を外したシャツとスラックスという何ともラフな格好で部屋を出て、そのまま箱舟の出口に向かう。

にゅつと顔を出したのは、昨日勝手に使ったルイズの部屋。

ここの主人は随分と寝起きが悪いのか、まだ眠っている。額には昨日ぶつけた痕が赤く残っていた。才人はというと堅い石の床の上で毛布を7枚も使って眠っている。

2人とも随分と幸せそうな寝顔だ。この寝顔を邪魔するわけには行かないので、椅子を一脚コソツと失敬して部屋を出た。随分と広い学院なので、序でに箱舟のチェックポイントを増やしておくのも良いかもしれない。

「はっ！ふっ！」

「せい！やっ！」

適当に日が当たって、広い場所を探すとそこには既に先客がいた。その先客は椅子を持って、遣って来るアレンに目を留めると、

「おはようございます、アレンさん」

「おはよう、アレン」

シヤナとネギだった。2人とも昨日とは違う、汗をかいても心配しなくて良い運動着を着ている。ネギは拳法の型。シヤナはどこかで拾ってきたらしい棒きれを振り回していた。

「おはよう、2人とも。良く寝れた？」

居住区の提供者としてどこか危なっかしい子供を気遣う。こういつた心配りを忘れないのがアレンの基本的な流儀だ。

「大丈夫、問題ない」「うむ、真に不思議な空間であった」

「あ、ありがとうございます。所でなんですかそれ？」

ネギがアレンの持ってきた簡素な木の椅子に目を留める。

「これ？これはね、こう使うんだよ」

そう言うと、上半身はシャツ一枚になり、4本足の一本だけを接地させる。そして、その上に片手で逆立ちしてしまった。物凄いバランス感覚と腕の力である。オマケに一本の芯が通ったかのように、足まで真っ直ぐになっている。背筋力や足の力も相当なものだろう。これには二人にして3人も驚いた。

「すごいです、アレンさん！どんな鍛え方してるんですか！」

「何と言う体だ、シヤナが負けたのも頷ける」

「素直に驚いた」

腕の折り曲げ、片手逆立ちの状態で腕立て伏せを始めたアレンは、

「僕らは単純に剣術とか拳法とか学んでも生かせないんです。武器が武器ですから。ただ、武器を扱うために体力をつけているんです」

そう言いながらもカウントは欠かさない。僅かな時間だったが、既に30回も終わらせていた。普段彼が課しているノルマは300回なので、10分の1程度だが、この分だと直ぐに終わるだろう。

「えと、じゃあ手合わせしてくれませんか？」

「手合わせ？」

「私もお願いしたい」

物凄いスピードで回数を重ねるアレンを見て、小さな少年少女はお願いをしてきた。正直な話、アレンは子供に弱い。本人もまだ16に成り立てだが、それでも小さい子には優しいのだ。

「いいですよ」

ニコツと笑って2人のお願いを聞き入れた。

「ん、ん…」

箱舟の一室。一護は目を覚ました。特別にエドを拝み倒して作らせた、草を編んで作った畳が特徴だ。勿論、い草ではないので、あの特有の香りが無いのが少し残念だ。

もし、い草を見つけたら、もう一度錬成してもらおう。そう考え

て、もう一度朝の睡眠を享受すべく目を瞑る。ふと、何か胸元にササラと流れるような感触があった。

「ん？」

ペラツと捲ると妹がグースカ、鼾を掻いて寝ていた。母親が無くなって直ぐ位は自分のベットに潜り込んで来る事がよくあった。もう一人、ここには居ない一護にとつての妹、夏梨にとつての姉の遊子と二人で。最近というか、一護が高校に入ってからはその事もなく無くなっていたが、異世界に吹っ飛ばされて、不安にならない方がおかしい。豪放磊落、よく言えばクール、悪く言えばぶっきらぼうな性格の妹はあるが、いきなりトンデモナイ現象と人にあつたので、疲れたのだろう。

「遊子の奴、大丈夫か……」

もう少しだけ妹を寝させてやろうと、一護は静かに部屋を出た。

一護が目覚めた頃、箱舟の外でも才人が起きた。

溜め息をつき、ベッドの方を見る。

ルイズは、ベッドの中で寝息を立てている。

とても自分と同じ年位とは思えない程、あどけない寝顔をしていた。どうにも気位が高くて、とてつもない暴力少女だと言うことが分かったが、それでもグツと来てしまう。

「やっぱり夢じゃないか……」

平賀才人。16歳の日本の高校生。

身長も体重も平均値。髪は染めているわけでもないのに、日本人の原色ギラギラな黒。

特別な趣味も無い。特技も無い。石を投げれば取り敢えずぶつかる、そんな少年だった。

だからこそ、不思議なモノに興味を持ったのだ。

パソコンを修理してもらった帰り。彼は出会い系サイトに登録したばかりだった。勿論、それなりにネットの知識もあるので、全てが女性だとは思っていない。ただ単純に人と合って、あわよくば女の子と知り合いに為れたらいいなと何となく思っていた程度だ。

はつきり言って、他の6人とは違って危機感が足りていなかった。

「顔、洗おう…」

水場を探しに階下へ降りていく才人は気分も落ち込んでいた。

やっぱり一晩寝たら自分の部屋でした、なんて展開を期待していたが、なんてことはなかった。

少しせつなくなる。

しかし、眩い朝日は差込み、空気は澄んでいる。すがすがしい朝である。

自分が生きてきた日本、東京でこんなになすがすがしい朝はあったらどうか。

いや、無かったような気がする。

鳥のさえずり声が外から聞こえる。

まるで、何かの物語の中に自分がいるように感じた。

そうだ。何事もネガティブじゃなくてポジティブにしよう。

ポジティブポジティブ。

どこかの漫画でもポジティブ少女がいたではないか。

そう考えると、明るい気持ちになれた。そして、少し考える余裕

もできた。

そうだよ。考えてみれば、ちょっととした観光ではないか。

この世界はどんな世界なんだろう。ちょっととした知的好奇心も沸いてくる。

ふかふかのベットのうえで、のんびりとぐーすか寝ている生意気魔法少女の使い魔というのが少し気に入らないが、人生で使い魔になるなんて一生に一回もないはずだ。

どうせなら楽しんでやろう。

そんな風に決意したのだ。

やっぱり、彼には危機感が全く無かった。

「ん、よう」

ふわふわと浮かぶ、白い水晶から浮かぶようにオレンジ頭の青年が出てきた。自分よりも頭一つ分高い。オマケに目つきが鋭く、ただ立っているだけなのに、かなり怖い。

「おはようございます…、えっと…」

「一護だ。黒崎一護」

「あ、俺、平賀才人っていいいます。宜しく願います、黒崎さん」

「一護でいいぜ、才人」

二人で連れ立って階段を降りていく。何となく不良っぽい感じがするが、今の感じを見ると結構いい人なのかもしれない。自分を放置して、「箱舟」なるモノの中に消えてしまったことは、燻っていたが怒っても仕方が無い。

暗い石段を降りて、外へ出るとそこでは既に一戦を終えた3人の姿があった。

「っ、っよ…」

「速いです…」

「もう、へばったんですか…」

朝から体力を使い果たしてしまっただけらしいネギとシヤナ。二人とも顔中、体中、汗だくで、長い髪が肌へばりついている。対してアレンは涼しい顔。汗だくになるところか、一筋も垂れていない。

「付いていくのでいっぱいいっぱいでした…」

アレンから渡されたタオルでネギとシヤナは汗を拭う。二人の子供を相手に息を上げていないアレンを見て、一護が何か触発されたらしい。

「おし、アレン。次は俺だ」

「分かりました」

ずっと二人とも自然に構える。そして、両者同時に一步踏み込む。その速度は才人の目で終えないくらいに速かった。右手の拳で三発、左の蹴りで二撃、普通にできるだろう体術であるが、その速度は段違いである。

「え…、何アレ…?」

「速いけど、目で追えなくは無理。でも、体が付いていかない」

シヤナが二人の拳と蹴りの応酬に意見する。それにも才人は驚いた。3分ほどすると、お互い動きを止める。流石に二人とも汗が流れ、肩で息をしていた。

「強えな、アレン」

「一護さんこそ」

お互いを褒め称え、一礼する。

「うし、じゃ顔洗いに行くか」

一護が促し、その後ろに続いていく。ポカンとしていた才人も、正気に戻ると軽い手合わせを終えた4人を追って水場へと急いだ。

「あー、眠い…」

エドが目を覚ます。取り敢えず顔を洗ったりしななければならないと思い、箱舟の外へと出て行った。

ちょうどエドが箱舟を出たとき、ルイズが目を覚ました。

「お、起きたのか」

「あ、あんた…、どこ行ってたのよ!」

何気ない朝の挨拶をするエドワードに対して、朝からルイズはヒートアップしている。昨日、散々虚仮にされたのだ。大貴族の三女である自分が、しかも、平民ごときに。これで怒らない方がどうかしていると思い、兎に角、ぎゃあぎゃああと騒ぐ。

貴族だの、使い魔だの、魔法世界だの、そんなことに全く興味が無いエドは取り敢えず、朝からうるさいと思い、思いっきり肘を叩き込む。機械の右手の方を。

案の定、ちょうどいい位置にあったルイズの可愛らしい顔にクリンヒットし、気を失ってしまった。

そんなトンデモナイことをしながらも、エドの頭では、

(あー、水道設備がないのか…。作ってやるか…)

と、この世界のインフラ整備について考え始めていた。

「ルイズー？」

「よ、才人」

ちょうどエドと入れ違いで才人が戻ってきた。中でルイズが気絶しているのを見て、何があったのか聴こうと思ったが、どこか機嫌が悪そうなので、辞めておいた。

「あ、おはようございます。エドワードさん」

背は自分より低い、滑らかな金髪と輝く金目が綺麗で、意志の強さを表している。

「俺は顔洗ってくる、そこの馬鹿起しとけ」

かなりの上から目線で、才人に命令する。その言い方にカチンと来たが、追々自分の方が年上なのだとこのことを教え込んでいけばいい。そんなことを考えていた。

エドワードが部屋から出て行くと、ルイズを起こしてと言われたので、とりあえず寝ている、というか気絶しているルイズの肩を揺り動かした。

「な、なによ！なにごと！」

「朝だよ。お嬢様」

「へ？そ、そう……って誰よあんだ！！？」

ルイズは寝ぼけた声で怒鳴った。

朝に弱いのだろうか。ふにゃふにゃの顔が痛々しい。

とてもではないが、絶対に年頃の女の子が見せない顔である。

大丈夫かこいつは。

「ルイズ。それはないだろ！！」

「ああ、そういえば昨日召喚した使い魔の内の一人ね」

「そう。忘れないでくれ」

なんて言うとなルイズは来ていたネグリジエを脱いで、着替え始めた。昨日の調子で分かったが、この子は才人、使い魔のことを男としてみていない。ちょっとだけ才人はシヨックだった。

「下着」

「自分で取れよ」

顔を真っ赤にして、伏せる。そんな才人にルイズはもう一度、

「下着」

二度も言われては仕方が無い。しぶしぶ、クローゼットを開けてルイズの下着を取り出す。まあかなりガキっぱいものばかりだった。

「どれだ？」

「んー、一番右のやつー」

裸になっているかもしれないので、振り向かずに投げて寄越す。

「服」

単語一語で命令されるといっても、分かりにくい。取り敢えず、
適当に釣り下がっていた服を一着、投げて寄越した。

「着せて」

「自分で着るよ」

ちよつと強い口調で才人が言い返すと、ルイズは振り返らないサ
イトの背に向かって、

「あのね、高貴な人は下僕がいる場合は自分で着替えないの。着せ
なさい、さもないとご飯抜き」

流石にご飯を抜かれては生きていけない。才人にも意地はあるが、
意地では腹は膨れない。しぶしぶ引き受けることにした。

「あら、いい心がけね。とりあえず、あなたには朝食を上げるわ。
他の6人には上げないけど」

勝ち誇った調子でルイズが喋る。才人は昨日の遣り取りの一部始
終を見ていたので、ルイズがこんな風になるのも分かる。確実に6
人はご飯が無いだろう。同情と伴に、箱舟に入れてくれなかったこ
とや、エドに下に見られたことへ意趣返しを考えていた。

「丁度いいタイミングでしたね」

着せ終わったところで、タイミングよく戸が開いて、白髪頭の少
年がひよっこり顔を出した。

「動いたら、お腹すきました。早く朝食にしましょう」

主導権を握られっぱなしのルイズと才人が部屋を出る。部屋の外には帰ってきた5人が全員いた。ちょうど出ようとしたタイミングで箱舟の中に残っていた夏梨も出てくる。

ルイズは恨み言の一言でも言つてやろうかと思つたが、使い魔程度にそんな事をして、一々腹を立てていては話にならないと思ひ、ぐつと堪えた。

未だにルイズは6人を下に見ている。

実際は6人が6人もこの世界を滅ぼしかねない程に危険な爆弾だということを知らずに。

踏み出そうとしたところで、ルイズの部屋から数えて三番目のドアが開き、中から燃えるような赤い髪と健康的な褐色の肌を持つ女の子が出てきた。

ルイズよりかなり背が高く、才人やエドと大して変わらない身長にムンムンと色気を放っている。

彫りが深い顔に、ルイズとは比べものにならない突き出たバストが艶かしい。まるでメロンが二つくっついていてるようだ。才人は思った。

その彼女はルイズを見ると、にやつと笑った。

「おはよう。ルイズ」

ルイズは顔をしかめ、嫌そうに挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔ってそれ？」

才人を指差して、バカにした口調で言った。

すぐにルイズは顔をしかめる。才人もこのおっぱい星人に何か言
ってやるうと思っただが、黙っておいた。ちらりと後ろを見ると、女
の子二人は羨望と嫉妬の入り混じった射殺するような視線を向けてい
るが、男4人は興味なさそうに談笑していた。

（こんなきれいな子に興味がないのか…！仙人みたいじゃないか…
！）

才人が思っているのはまったく別の理由があるのだが、それを
慮るほど、才人は人の機微にさといわけではなかった。かなりの欠
点といえるだろう。

「そうよ」

「あっはっはっは！本当に人間なのね！しかも7人も！すごいじゃ
ない！」

才人は少しムツときた。夏梨とシヤナはムカッときた。
ルイズに至っては顔を真っ赤にしてふるぶると震えていた。

「『サモン・サーヴァント』で、平民喚んじやうなんて、あなたら
しいわ。さすがはゼロのルイズ」

「……ゼロ??」「……」

才人はゼロという言葉に首をかしげた。

キュルケの言葉にルイズの白い頬が、薄く赤くなる。

「うるさいわね」

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発
で成功よ」

「あっそ」

「どうせ使い魔にするなら、こついつのがいいわよねえ。フレイムー！」

キュルケは勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。

すると、キュルケの部屋からゆっくりと、キュルケと同じ髪色で巨大なトカゲがのしのしと現れた。

むんとした熱気が、8人を襲う。しかし、何人かは涼しい顔のまま。

「うわあ！真つ赤な何か！」

才人は驚いた表情で慌てて後ずさるが、ネギはあまり驚かなかつた。これ以上の生物なら、色々と見飽きるほどに見ている。そしてそれはエドやシャナも同じだった。オマケにシャナの知っている生物は、人語を鶏も馬も虎も喋るのだ。今更、蜥蜴が喋りだしても驚きはしないだろう。

そして動物好きの夏梨が近寄る。

「何？これは？」

夏梨が目を輝かせながらキュルケに尋ねた。

「おっほっほ！もしかして、あなた、この火トカゲを見るのは初めて？」

「いろいろ動物見てきたけど、これは初めてかな？」

ワクワクと赤い鱗を撫でて回る夏梨に、キュルケは嬉しそうに微笑む。

「そばにいて、熱くないの？」

才人が尋ねる。まあ確かに、尻尾が燃えていて、口からもチロチロとほとばしる火炎が熱そうだ。

「あたしにとつては涼しいぐらいね」

「これって、サラマンダー？」

ルイズが悔しそうに尋ねる。それに大して、キュルケは大きい胸をプルンと揺らすとさらに張り上げてこう言った。

「そうよ。火トカゲよ。見てよ？この尻尾」

夏梨の触る手を優しく外して、尻尾の辺りを撫でる。

「ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ！！ブランドもので好事家に見せたら値段なんかつけられないわよ？」

今にも腰に手を当てて、高笑いしそうな勢いで喋っている。アレが借金だの、返済だのぶつぶつと唱えている事は、自分の精神衛生上悪そうなので、そちらへ突っ込むのはキュルケは辞めておいた。

「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」

「あんな『火』属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱」

それでチラリと才人も含めた男性陣に熱っぽい視線を向ける。

一護は興味なさそうな顔をしていたが。

「でも、男の子はそれでイチコロなのですわ」

くすつと流し目を送る。

送り先は後ろにいる金、黒、白、赤、橙の色とりどりの髪色をした男達だ。序でに、

「あなたと違ってね？」

キュルケはその自慢の胸を得意げに張り上げる。

それをみてルイズも負けじと胸を張り返すが、正直、胸のポリウムが違いすぎて見ていて痛々しかった。後ろの10歳、どれだけ歳が行っていても、精々12、13といった位の体格であり、成長の余地のある後ろの二人と全く同じというのが、更に才人視点から痛かった。

才人は知らなかったが、フレイムヘイズは不老である。つまり、シヤナには成長の余地はない。

夏梨も死神である以上、肉体的な成長は遅い。

元々、歳を数える習慣のない彼らに「成長」と言うものは無用の物なのだが、自身の体格を気にしていない訳ではなかった。静かに二人とも奥歯を噛む。

ルイズはそれでもぐつとキュルケを睨みつける。どうやら相当の負けず嫌いのようだ。

最初から勝負にすらなっていない闘いではあるが、それでも負けたくないらしい。

「あんたみたいにいちいちと色気振りまくほど、暇じゃないのよ」

「あら？あなたに色気なんてあったかしら？」

キュルケの言い様にルイズの堪忍袋の緒が切れた。随分と簡単に切れる堪忍袋である。

「うがー！ーッ！！」

ルイズが才人に怒りをぶつけているのを見つめたあと、キュルケは余裕の態度でニッコリと笑い、後ろにいる明らかに毛色の違うの7人を見つめる。

「あなた達、お名前は？」

「アレン・ウォーカーです」「シヤナ」「僕はネギ・スプリングフィールドです」

「エドワード・エルリックだ」「さか…、すまん。黒崎一護だ」「その妻、黒崎夏梨」

最後にさり気に一護と夏梨がボケをシリアスな空気に咬ます。

勿論、「誰って言おうとした？」「妹だろ」とお互いに叩かれていたが。

最後に、

「平賀才人」

「みんな、独創的な名前ね……じゃあ、お先に失礼」

そう言うと、颯爽とキュルケは自慢をするだけして去っていった。それに四足歩行のサラマンダーがその図体に合わない機敏な動きであとを追う。

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握り締めた。

「くやしー！」

キーツとハンカチの端でも噛んでいるかのような怒り方だ。

それにしても随分と沸点の低い女の子だなと、今さらながら7人

は思った。

「なんなのよあの女！！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！！ああもう！！」

地団太を踏んで悔しがる。相当に悔しいようだ。

「いいじゃねえかよ。召喚なんかなんだって」

のんびりとした調子で一護が諭す。

「よくないわよ！メイジの実力をはかるには使い魔を見るって言われているぐらいなのよ！！なんであのバカ女がサラマンダーで、私があんたらなのよ！」

「え、どう考え立って、あんな爬虫類なんかより人間の方が上だろ？」

才人が訳が分からないといった調子で尋ねる。尤も、この中にまともな人間は才人只一人なのだが、ルイズも才人もそれを知らない。何せ6人ともそれを秘匿しているのだから。

「あのね、貴族と平民じゃ犬とオオカミほどに違うの」

ルイズが下を向いて愕然とした様子で言う。

「犬っコロを呼んでも嬉しくないわ」

（じゃ、俺は神様だな…）

（僕は天使でしょうか…？）

（俺は王様だな）

ルイズと才人の遣り取りの中、どうでもいい事を考えているのが三人居た。

確かに貴族と平民で犬とオオカミなら、貴族、つまり魔法使いと死神の差は歴然としている。勿論、エクソシストや錬金術師も同じだ。技術の面で大きなアドバンテージがある。フレイムヘイズやネギが属する魔法体系とは、体力面・膂力面で抗いようの無い、埋めようの無い差がある。

「ほら行くわよ！」

そう言って8人は食堂へ向かった。

5・A W a k i n g r o m a n c e (後書き)

死神という概念は単純に死を体系化したから生まれた概念的存在な
のですが、どうも原作を読んでいる感じではそういった「死」に対
するものへの意識が貴族にしても、平民にしても稀薄な感じがしま
す。ある意味では創造神に次ぐ神格を持ち得るのは生命を司るもの
だからなのに、そういった「死」、それに対する「生」という概念
が確立していない。やっぱりハルゲギニアの住人は人の命を軽んじ
ている、そう思えてなりません。

サラマンダーというのは火蜥蜴と和訳されます。

元々は魔法薬などを注いだ炎、それに宿る魔法生命となっていました。
火というものはゾロアスター教などを始め、一定の聖性を持つ
ていることが多いです。日本でも神道や仏教に於ける護摩や送り火
なんていうのも、火に聖性があるからです。

そういった火というのを軽く扱えるキュルケもそれなりに、実力の
ある魔法使いへと育つのかもしれません。

アレン達の修行と言うか鍛錬のシーンは原作そのままです。アレン
は2巻冒頭のシーン、ネギやシャナは毎朝やっています。他の3人も
色々修行してますが、どうしても進化の帰結の一つである一護に
は修行の必要があるとは思えません。何せ完現術と死神、卍解、虚
化という能力を持っていますから。

6・running to breakfast

トリステイン魔法学院の食堂は、学院の敷地内で一番背の高い、真ん中の本塔にある。

食堂の中は、やたらと長いテーブルが三つ並んでいる。軽く百人は座れるだろう。

今年で二年生のルイズたちのテーブルは、真ん中だった。

食堂の正面に向かって左隣のテーブルに並んだ、ちよつと大人びた感じのメイジたちは、みんな紫色のマントをつけている。

そして反対の右隣のテーブルのメイジたちは、茶色のマントを身につけている。

どうやら学年ごとでマントの色が違うらしい。茶色が一年生、紫が三年生だろう。そんな風に才人はあたりを付けていた。

朝食、昼食、夕食と、学院の中みんなが、先生や生徒も含めてここで食事を取るらしい。

食堂へ向かう傍ら、ルイズがそんな事を説明していた。

尤も、それを真面目に聞いていたのは才人、只一人だったが。

一階上にロフトの中階があり、虹のようにカラフルな色合いのマントをつけて、思い思いの服をその下に着込んだ、教師のメイジたちが、そこで歓談しているのが見えた。

食堂に所狭しと並んだテーブルの上には、いくつものロウソクが立てられ、花が飾られ、フルーツが盛られた籠がのっている。

すべてのテーブルにはそのような豪華な飾り付けがなされていた。それらをじっと眺めていると、得意げに指を立てたルイズがこう言った。

「トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ」「ふん」

食堂前に来た6人はルイズの説明を右から左へと流していた。
アレンに到っては、ルイズの部屋から食堂への移動時間を短縮しようとして、箱舟のポイントを置いていた。短いピアノの旋律が流れ、風に溶けていく。

「メイジはほぼ全員が貴族なの」

エドはほぼ、全員というところに引つ掛かる物言いを感じたが、全てがメイジ＝貴族という公式ではない。逆に貴族＝メイジという公式は成り立つのかと聴こうとしたが、このプライドだけ高い女の子に聞いてもムダだろうと思ったので、辞めておいた。

無駄な争いは少ない方がいい。それでなくても、彼らはこの国を崩壊させかねないのだから。余計な事をして軍に追われるような事にはなりたくない。

「『貴族は魔法をもってしてその精神となす』のモットーのもと、貴族たるべき教育を、存分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬのよ」

「へ〜〜〜」

分かっているのか、分かっていないのか。
生返事で済ませる。

「わかった？ ホントならあんた達みたいな平民はこの『アルヴィー
ズの食堂』には一生入れないのよ。感謝してよね」

「ああ、よくわかった。一般市民の働いた大切な金がここで消えて
ることが」

一護が嫌味つたらしく、ルイズに言う。やたらと「一般市民」と
「消える」ということを強調した言い方だった。彼ら死神の世界に

も「貴族」と言う存在はいる。だが、こんな感じにプライドだけ高い者は居なかった。死神の世界は実力主義、そして現場主義だ。

貴族だからという、そんな矮小な理由で他人を下に見たりしない。尤も、これは死神同士の話で、死神とそうでない者との間の乖離は酷いのが現状だと知っている。

「アルヴィーズって何ですか？」

箱舟の設置を終えたアレンが訊いた。

「小人の名前よ。周りに像がたくさん並んでいるでしょう」

言葉通り、壁際に精巧にできた小人の像が並んでいる。

今にも踊りだしそうなくらいに精巧な出来栄である。だが、所々塗装が剥げていたり、サイズが一個一個微妙に違っていたりする。大量生産ではなく、手工業に拠る物だという事をエドは一つ手にして確認する。

見入っているらしいエドから視線を外し、それから才人に顔を向ける。

「いいから、椅子を引いてちょうだい。気の利かない使い魔ね」

腕を組んでルイズがそう言った。

それを見て才人は「すみませんね。お嬢様」と業と仰々しく言っ
て椅子をひいてやった。

ルイズは礼も言わずに腰掛ける。

才人も自分の椅子を引き出して座り、それを見た一護達も座った。

「へえ、随分と豪華だな。俺の知ってる奴の家でもこんなのは見たことねえや」

冷静で伶俐な兄と、ちょっとお調子者でお茶目な義妹の貴族を脳裏に思い浮かべながら、一護がため息を漏らす。単純に彼らが質素な食事の方がいいという理由なのだが、その事情は知らない。

「足りるかな？」

食事の量に不安を漏らすのはアレン。この豪華な料理で足りないかもしれないとは普段、どれだけ食べているのだろうか。ネギとシヤナ、夏梨の三人はアレンの食事が気になった。

エドは何も言わない。適当に自分が食べられる量というのを判断しているようだ。

朝から無駄に豪華な料理であった。

それぞれが、それぞれの感想を漏らす。才人も早く食べたくてうずうずしていた。

それを見てルイズがじっとこちらを睨んでいるのに、一番近くに居た才人が気づいた。

「何だ？どうした？」

才人が怪訝そうに訊く。それを見て6人も頭の上に、ハテナを浮かべて首を傾げている。

そんな7人にルイズは無表情で床を指差した。

その指の先に沿って、14の瞳が豪華なテーブルから床に視線を動かす。

そこには、1枚の皿が置いてあった。

その皿の上には、何やら得体の知れない物が浮かんだスープと硬そうパンが二切れずつ置いてあった。質素というか、残飯の残飯のような感じの食事だ。

「……は？」

7人共目が点になる。
ルイズが頼杖をついて言った。

「あのね？ほんとは使い魔は、外。あんたは私の特別な計らいで、
床」

「……………」

才人は絶句した。

その呆けた顔を見て、今度はニタニタと勝ち誇った顔で6人に言う。

「あんた達は何もしなかったから、ご飯抜き」

無情ともいえる宣告だが、才人は内心「ざまーみる」と思っていた。

この台詞に一番、カチンと来たのはアレンだった。普段から良く食べるアレン。そんな彼が食事を抜かれて頭に来ないはずがない。だからと言って、自分の態度を改めようとは思わなかったが。

「一護さん、僕、カチンと来ました」「奇遇だな。俺もだ」

そんな6人を無視して、ルイズは手を合わせる。
彼女の周り、食堂中の生徒が手を組む。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ」

全員で目を瞑り、唱和を始める。

「今朝もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝いたします」

祈りの声が、唱和される。

ルイズも目をつむってそれに加わっている。

「おいおい、何がささやか糧だよ」

才人は納得がいけないと言った様子で、祈りを捧げるルイズに食って掛かる。しかし、完全に無視されてしまった。

「随分と豪華なくせしやがって！」

「……………」

「ささやかな糧はこっちだろうが。これじゃあ、ペット以下じゃねーか！」

兎に角、マシンガンのように才人が文句を言うが、ルイズの硬い壁には傷ひとつ付かなかった。

「ああ、うまい。うまい。泣けそうだ」

と呟きながら硬いパンをかじる才人。それでも食事に在り付けただけいいことだと思い、食事を抜かれた6人を勝ち誇った顔で見る。

「ヤベーな、コレ。美味しい」

「千草と同じくらいに美味しい」「ですね、ジェリーさんと互角かも」

「やべ、俺こんな美味しいモン、食ったことねえぞ！」「こんな豪華な食事なんて初めてです！」

「ココに来て良かったかも」

「……………」

まだこの異世界に来て2日目、最初の朝なのにもう驚くのは何度目だろう。

食事を抜かれたはずの6人が、自分よりも良い食事を食べているのだ。よくよく見れば、何枚もの白い皿が宙に浮いていて、その皿を白い帯みたいなの吊り下げている。その帯の元はアレンの左腕に繋がっている。

浮いた皿から6人は好き勝手に取って食べている。凄く嬉しそうなお顔をしている。肉を頬張り、果物に齧りつき、野菜を口へと運ぶ。さっきまでテーブルに乗っていた料理の数々が今、アレンの手にあるのだという事が、才人は直感で分かった。

テーブルの方へ目を向けると、何も無い空間でルイズとその傍にいた生徒のフォークとナイフが行ったり来たりしている。何も口の中へ入っていないのだが、どうも気が付いていないらしい。

「え、えっと…」

「お、才人も食べるか？」

「あ、ありがとう…」

一護が優しく、林檎を差し出す。それに手を伸ばそうとすると一護の後ろで、仁王立ちしている悪鬼の姿があった。勿論、ピンクの髪の毛の悪鬼だ。怒りのオーラで体が何倍にも見える。

「あ、あんだ達…！」

「あ、やべ。バレた」

そう言っただけ料理と伴に6人は脱兎の如く、駆け出す。

ルイズも懸命に追うが、とてもじゃないが6人の速度には追いつけない。廊下に出たところで、6人は箱舟の中へと消え去り、ルイズは完全に見失ってしまった。

「キーン！！」

怒り狂ったルイズに才人は思いつきりぶたれた。

7・THE Approaching Magic

箱舟の中に戻った6人は準備を各々準備を整え、昨日の夜決めた手はずどおりに動く。

「よし、行くぜ！」

朝の手合わせの前にアレンは箱舟のポイントを中庭に置いておいた。そのお陰でルイズどころか誰にも気づかれること無く、この朝日が差し込む中庭にもう一度遣って来ていた。

ふわりと浮いた杖の上に、運転手であるネギ、財布役であるエドとその腕に宿ったアル、箱舟の持ち主であるアレンが乗った。ネギはまだ10歳だが例外だとしても、そこそこの体格のあるアレンとエドを乗せても沈むことのない、この魔法の杖というのに感嘆していた。

「本当に便利だな」

「いや、そこまでは…」

空も飛べて、高速で移動できるこのネギの杖は、彼の魔力制御の精度を高める役割もある。

それだけの力を持つても、ネギはこの力が万能であるとは思っていない。ネギの見た感じでは、この世界の魔法使い、メイジ達は自分達の使える魔法を万能、始祖の御心と言っていた。修練次第では誰にでも扱えるネギたちの魔法使いの体系とは、どうやら根本から違っている。

ネギ達の魔法使いは、移動や通信にも魔法を使っている。

だが、どれだけ異能の力でも所詮は人の身で扱う程度の力。

遠くへ行けば行くだけ、その力は弱まるし、精度も落ちてくる。

通信なら携帯電話を使うし、火を付けたいならライターを使う。遠くへ行きたいなら、飛行機や車の方が良い。

その方が遥かに効率的で安定しているからだ。決して科学を否定しないし、受け入れないわけでもない。

「では、行きましょう!」

そんなこの世界と自分の世界との魔法の乖離を思いながら、出発の合図を掛ける。

乗り切れなかった一護達3人は留守番である。

「行ってらっしゃい。頼んだぜ」

「はい、任せてください。一護さん、夏梨さん、シヤナさん」

そういつて三人は朝日に向かって飛び立っていった。

見送りも終わり、くるりと振り返った先には、腕を組んでこちらを睨んでいる女の子が居た。傍には頬を真っ赤にした才人も立っている。

「よ、えーと、ルフランだったけ?」

まさにたった今、気が付いたといった感じで、最早業となのか、素なのか分からない感じで一護が話しかける。

「ルイズよ!ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール!いい加減覚えなさい!」

「あー、悪い。で、何?」

この態度にルイズは完全に堪忍袋の緒が切れた。使い魔の癖に、主人を放置。使い魔の癖に、主人の食事を強奪。使い魔の癖に、主

人の話を無視。僅かな期間であったが、これだけの事を高が平民にされたのだ。ルイズのプライドは痛く傷ついていた。

「本当にその態度、何？私は恐れ多くも公爵家の人間よ！」

「はいはい、公爵家の人間ってだけの奴だろ？お前、自身が公爵じゃねーんだろ？」

「うっ！」

ルイズは反論に困ってしまった。確かに、自分が公爵の位を持っているわけではない。持っているのは自分の父親だ。単純に自分は公爵の父の元に生まれただけ。一護の指摘は核心を突く。

尤もルイズ本人が公爵だった所で、一護の態度は変わらないだろう。それはシャナと夏梨も同じ。

「ふ、ふん！それを差し引いても、私は貴族よ！平民が口答えして良い存在じゃないんだからね！」

「はいはい、偉いですねー！」

立ち直った気持ちも軽く流される。

正直、ルイズはココまで随分と本人は譲歩していたのだ。口で言うなど彼女にとって、序の序。物質的なモノで制裁を始めて漸く、序。だから、ここまで来てついに実力行使に出た。

「いい加減に言うこと聞きなさい！」

小さな拳を振り上げてやってきた女の子。一護は正直、扱いに困っていた。後ろでポケットとしている二人に任せてもいいのだが、こちらで彼我の実力差を見せておくのもいいかもしれない。

すつと右へ小さい動きでルイズの突撃を回避すると、首に左手を引っ掛ける。そして、そのまま、

「ぐえっ！」

と、カエルが潰れたようなうめきを上げて、ルイズが気絶する。自分の進行方向に首を狙い打つ角度と高さで障害物があった。殆ど自滅である。ただ、本気の力で一護がやったら、ルイズの首が胴体と永遠に離れ離れになってしまう。辛うじて気絶ですんだのは、一護が何の力も入れていないからだ。

「うわ、容赦な！」

才人が思わず叫ぶが、一護も後ろの女の子二人も涼しい顔。それから女の子に有るまじき、白目を向いて不細工な顔になってしまった、ルイズの片足を引っつかんで、運び始めた。

「あ、あの大丈夫ですか…？」

一護の余りな扱いに思わず、才人が心配そうに声を掛ける。

「あー、大丈夫だろ。死んじやいないし。で、これからどうする？」

「え、えーと、確か教室へ行くつて。その前に使い魔たちを探すつて」

「そう、それなら教室へ行かないとね」「魔法の授業か…、興味あるな」

ワクワクといった感じの夏梨とあくまでも事務的なシャナ。似たような二人だが、性格は鏡に映したように正反対である。

「教室は何処？」

ぶつきらぼうに聞くのは一護。そういえば才人も教室の場所を知らない事に気が付いた。

「ま、いいや。探してれば見つかるだろ」

意外にも教室は直ぐに見つかった。

途中で今朝、ルイズの部屋を出た所で逢った赤い髪の女の子、キルケが案内してくれたからだ。彼女も一護にまるで荷物のように引き摺られるルイズを見てポカンとしていたが、才人が「教室へ行きたい」というと話を悟ったようで、快く案内してくれた。

魔法学院の教室は、才人から見ると、大学の講義室みたいだった。一番前に黒板があつて、そこから階段状に椅子と机が並んでいる。それが石できていていると思えばいい。

一護達と引き摺られたルイズが扉を開き中に入ると、先に教室にやってきていた生徒たちが一斉に振り向いた。

そしてくすくすと笑い始める。

先ほどのキルケは仕事は済んだとばかりに、4人とルイズを放置して、教室の中ほどへ。

その一挙手一投足をに見惚れていた男子が、あつという間に周りを取り囲んでいた。

(なるほどな、男の子がイチコロというのは間違つてないな)

何となく自分の周りの女性の顔を思い浮かべながら、一護は胸の大きさを比べてみる。もし、心の中が見れたら、確実に妹に叩かれるだろうが、真顔で考えているので誰も気が付かない。

周りを囲んだ男子どもに、まるで女王のように祭り上げられてい

る。

それだけ胸が大きいと、うようよと篝火に寄ってくる蟲の様に男がなるのはしょうがない。

一護はキュルケを見てそんなことを考えながら、次に他の生徒をみた。

(……全部、実験対象にされそうだ)

真っ黒な仮面を付けたマッドサイエンティストを思い浮かべながら、どんな風に改造されるのか、ちよつとだけ見たい気もした。こらへんは彼も「男の子」なのである。

才人は他の生徒が召喚したらしい使い魔を見てワクワクしている。漸く復活したらしい、ルイズに尋ねた。勿論、片足は一護に拘束。髪や服には草や廊下の埃が付いていて、汚らしい。

「あの目の玉のお化けはなに？」

「…バグベアー」

「あの、タコ人魚はなに？」

「…スキュア」

ルイズは不機嫌な声で答え、自分の足を持っている一護をキツと睨みつけた。

「ああ、気が付いたのか」

パツと手を離す。思いつきり足が落ちた、その先は固い石畳。自分の体とは言え、重力には逆らえない。しこたま足を打ちつける。

「つつつ…」

思わず涙目になるが、ココで怒っても授業前なので他の生徒に迷惑になる。痛む足を摩りながら、席の一つに腰掛けた。

それを見て一護達も隣に座った。才人、シヤナ、夏梨、一番通路側が一護である。

ルイズが席に座った才人達をジツと睨みつける。

「ここは、メイジの席。使い魔は座っちゃダメ」

一護は聞いていなかったが、才人たちは憮然として、床に座る。

だが、窮屈だったのでまた椅子に座り直した。

ルイズはちらつと才人を見たが、これ以上はムダだと悟ったのか、授業前だから他の生徒に配慮したのか何も言わなかった。

しばらくして扉が開き、教師らしき婦人のメイジが入ってきた。

中年の女の人で、紫色のローブを身に纏い、帽子を被っている。

ふくよかな頬が、優しい雰囲気を醸し出している。彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んでこう言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は無事に大成功のようですね」

ニコニコと微笑みながら、教室内を見回す。

「このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

ルイズは俯いた。

そしてシュヴルーズの目がルイズたちを捉える。

「おや？変わった使い魔たちを召喚したものですな。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズが、才人たちを見てとぼけた声で言う。
すると、教室中がどっと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

ルイズは立ち上がった。長い、ブロンドの髪を揺らして、怒鳴る。

「違うわ！きちんと召喚したもので！コイツらでも使い魔よ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろっ？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「ミセス・シュヴルーズ！侮辱されました！かぜつぴきのマリコン又が私を侮辱したわ！」

握り締めた拳で、ルイズは机を思いつきり叩いた。木の机が少しだけ音を立てる。

「かぜつぴきだと？俺は風上のマリコン又だ！風邪なんか引いてないぞー！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いてるみたいなのよ！」

マリコン又と呼ばれた男子生徒が立ち上がり、ルイズを睨みつける。まさに一触即発といった感じだ。そこへ水を差したのは、つい、ふんつと笑ってしまったシャナだった。

今までぶすつと、不機嫌そうな顔で居た彼女の笑い顔を見たのは、一護も夏梨も初めてだったので、正直、驚いた。それと同時に同じだけの嬉しさも感じた。

すると、それに気づいて少年がこちらを睨んだ。

「おい、平民！！お前今笑っただろ！平民の分際でも僕を笑つたな！！」

少年がシャナに向かって叫ぶ。その声は教室の空気を冷たく、硬直させている。

シャナはそれを無視して言う。

「ルイズ。お前のセンスは最高よ。よく相手の特徴を捉えてる」

「おい！無視するな！！」

「何？私はお前なんかと話たくはない」

カタツと腰を動かして、窮屈だったすわり心地を直す。

凜としたその姿は、威風堂々といった感じだ。

「なんだと？お前、貴族をバカにしてるだろう。平民がそんな態度とっていいと思ってるのか？」

「私は貴族をバカにしてない。失望しただけ」

そこまで言っつて、

「相手の立場を貶め、あざ笑う。高が知れるわよ」

そうして、シャナは先ほど笑っていた生徒たちを、その黒い瞳で見据える。

彼女の発言に憤っている者、自分のした行動を恥じている者がいる。自分のした愚かな行動を恥じれるのならまだ救いようがある。これから正していけばいいのだから。

「中には貴族らしい人間もいるけど、この教室の大半が貴様と似た

ような人間」

勿論、これからの言葉は恥じてもしなければ、尚も憤り、省みる事すらしない愚か者への警告だ。

「よくもそれで『貴族は魔法をもってしてその精神となす』と言えるわね」

「き、貴様！そこまで言うのなら
「おやめなさい！！」

マリコルヌがなにか言おうとしたとき、シュヴルーズがそれを止める。マリコルヌはまだなにかいいたそうにしていたが、黙って席に着いた。

「ミスタ・マリコルヌ。確かに今のあなたは貴族らしくありません。彼女が言ったことを反省なさい」

マリコルヌは一度、憎しみを込めてこちらを睨んだがそのまま静かになった。

シュヴルーズは目を閉じ、やれやれといった様子で手に持った小ぶりな杖を振った。

そこでようやくルイズとマリコンヌの二人は席につく。

「ミス・ヴァリエール。ミスタ・マリコンヌ。みっともない口論はおやめなさい」

ふつつと肩を竦めて生徒の二人に、それから

「それにミス・ヴァリエールの使い魔もそういうことは言うてはいけません」

そうシュヴルーズが冷や汗を浮かべて、凜と腕を組んで佇むシャナにそう言った。

「シャナ、お前、案外喋るんだな。驚いたぞ」

「ホント、ホント。案外、毒舌なんだ」

「ふん、あいつが気に入らなかつただけよ」

「そっか」「にひー」

一護と夏梨が歯を見せて笑っていた。

ルイズはしょぼんとうなだれていたが、同時にシャナ達がちゃんと自分のことを思っていたことが、少しだけ嬉しくて、それを隠せなかつた。

勿論、シャナ自身にそんな意図は全く無い。

「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

くすくすと笑いが漏れる。だが突然笑いがビクツと止まった。

シュヴルーズから飛んできた赤い粘土が、笑った生徒の口に張り付いたからだ。

「では、授業を始めますよ」

静かになった教室の中、シュヴルーズが杖を振るうと机の上に、石ころがいくつか現れた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです」

授業の準備が整った所で、自己紹介を始める。

「『土』系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ミス・ヴァリエール」

先生から質問されたルイズが弾かれたように飛び上がって、答える。

「は、はい！『土』の系統の基本魔法は『錬金』です。金属を作り出したり建物を建てるのに必要な石を切り出したり、農作物を収穫したりするなどの生活に関係した魔法が『土』です」
「あとは、『火』『水』『風』です！」

最後までルイズが言い切らないうちに、後ろの方で薔薇をくわえた金髪の少年が手を挙げて答える。

「はい。今は失われた系統魔法の『虚無』を含めて、全部で五つの系統があることは、皆さんも知つてのとおりです」

カンカンと黒板に白い五角形を描きながら説明を続ける。そして、その頂点に何か文字を書き込んでいく。しかし、才人達にはそれは読めなかった。

(文字、知らないと)

(うむ、その通りだな。これでは読み書きができん。しかし、何故我々は言葉が通じるのだ?)

シヤナとアラストールが二人にしか聞こえない方法で相談する。
今の文字が読めない状況では、経済的・法律的な問題が噴出する。

街へと三人が向かったが、問題はないのだろうか。てっきり会話が通じるものだから、失念していた。

シヤナが考えている間にも授業は進む。

「その五つの中で『土』は最も重要なポジションを占めているとは思いますが。それは、私が『土』系統だからという身びいきだからではありません」

シュヴルーズは重々しく咳をした。

「『土』系統の魔法は、万物の組成を司る重要な魔法であるのです。この魔法がなければ、重要な金属を作り出すことはできないし、加工することもできません。大きな石を切り出して建物も建てることもできなければ、農作物の収穫も、うまくできなかつたでしょう。このように、『土』系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのです」

才人は、なるほど、と感心した。どうやらこの世界では才人の科
学技術に魔法が相当するらしい。

だが一護は話をまったく聞いていない。シヤナと夏梨はじつと黒板を見つめている。

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である、『錬金』を覚えてもらいます。一年生のときにできるようになった人もいます。ようが、基本は大事です。もう一度、おさらいをします」

そう言ってシュヴルーズは、石ころに向かって手に持った小ぶりの杖を振った。

すると石ころが光始める。

そして光がおさまると、ただの石ころがピカピカ光る金属に変わ

っていた。

それには、才人は驚いていた。しかし、隣の三人は冷静に事の成り行きを見ていて、動いたりしていない。何というか、この人たちは感動とかに無縁らしい。勝手に才人はそんな事を思ったが、実際は、

(エドの方がすげえよな…)

(何せ、黄金をトン単位で作りに出したのだ。石ころを黄金に変えるなど造作も無かるう)

(つまんない)

(こつちも同じ事が出来るんだ…)

などと昨日エドが見せた錬金術と比較していた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ！」

キュルケが身を乗り出して尋ねた。女性がキラキラと輝くものに弱いのは異世界でも同じらしい。そして、胸が揺れ、男子共がいやらしい目で見えるのも共通なのだろう。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは『スクウエア』クラスのメイジだけです」

そこで少し、憂いに沈んだ表情で続けた。

「私はただの『トライアングル』ですから…」

シュヴルーズの言葉にキュルケは、「なぐんだ」と呟くと興味をなくしたように席についた。

そんな中、才人はルイズに小声で話しかける。

「ルイズ」

「なに」

「スクウェアとか、トライアングルってなに？」

「系統を足せる数のことよ。それでメイジのレベルが決まるのよ」

「はい？」

この世界の魔法の事が、まだ分かっていない才人にルイズは小さい声で説明した。

「『土』系統の魔法はそれ単体でも使えるの」

そこで一端、言葉を区切り説明を続ける。

「『火』の系統を足せば、さらに強力な呪文になるの」
「なるほど」

「『火』『土』のように、二系統を足せるのが、『ライン』『メイジ』

ルイズの説明を聞きながら、シャナはとりあえず和訳した感じで点をつけ、線を引く。

その隣で、才人が頷く。

「シユヴルーズ先生みたいに、『土』『土』『火』、三つ足せるのが『トライアングル』『メイジ』」

「同じの二つ足してどうするの？」

「その系統がより強力になるわ」

「ふ〜ん。じゃあルイズはいくつ足せるの？」

才人からの質問に、ルイズは黙ってしまった。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

授業中の私語はやはり学校では厳禁らしい。

「授業中の私語は慎みなさい」

「すみません……」

とうとう先生に注意されてしまった。

「おしゃべりをする暇があるのなら、あなたにやってもらいませう」

「わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてごらんください」

シュヴルーズが促すが、ルイズはオロオロとしていて立ち上がる気配がない。

「どした？ルイズ」

才人が聞いた。

「ミス・ヴァリエール？どしたのですか？」

シュヴルーズが怪訝そうに再び呼びかけると、キュルケが困った声で言った。

「先生」

「なんです？」

ちらりと窓の外へ目を遣りながら、困ったような調子で、

「やめといた方がいいと思いますけど……」

「……………？どうしてですか？」

「危険です」

キュルケは、きっぱりと、はっきりと良く通る声で言った。
それに教室の生徒たちのほとんどが頷く。

「危険？どうしてですか？」

先生はどんな意味でキュルケがこんな発言をして、周りが頷いているのか分からなかった。

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています」

にっこりと笑って、更にルイズを促す。

「ミス・ヴァリエール。気にしないでやってご覧なさい。失敗を恐
れては、何もできませんよ？」

「ルイズ。やめて」

キュルケが青ざめた顔で言う。

だがルイズは立ち上がると、「やります」と緊張した声で言い、
つつつかと教卓に歩いていった。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべる
のです」

隣に立ったシュヴルーズがニツコリとルイズに微笑んだ。

こくりと可愛らしく頷いて、手に持った杖を振り上げ呪文を唱える。

その姿は、とても愛らしく、その暴力的な性格を知っていても、才人はぐつときてしまう。

しかし、そんな愛らしい姿を見ようとせず、教室中の生徒たちがみんな椅子の下に隠れた。

何となく、周りが避難を始めている状況を見て、夏梨は防御の準備を始める。

「縛道の八十一、『断空』！」

ルイズは目をつむり、短くルーンを唱えて、杖を振り下ろす。

すると、石ころが七色に光輝いた。みんなが「おお！」と呟いた次の瞬間、石ころは爆発した。

カランカランと、石の破片が降り注ぐ。

爆風と爆発の衝撃が密閉された教室内で行き場をなくし、最も脆い場所、窓ガラスから逃げていった。轟音が響き、使い魔たちが暴れ回る。

爆風が治まった後、真っ黒焦げになった爆心地には、木片と化した教卓と伴に、気を失ったシュヴルーズと煤けたルイズが立っていた。

「けほ、ちょっと失敗したみたいね」

何事も無かったかのように言うルイズに、周りから野次が飛ぶ。

「ちょっとじゃないだろ！窓ガラスが全部、無いじゃないか！」

「ああ、僕のスクイードが、食われた！」

「もう、ルイズは退学にしてくれよ！」

ここに到って、才人たちは何故、ルイズが「ゼロ」と呼ばれているか悟った。

（なるほど。魔法が使えない「ゼロ」って訳か…）

爆発を防いだ光の壁の後ろで、3人は思った。隣にいてギリギリ幅に入らなかった才人はすっかり真っ黒になっていたが。

教室でルイズの魔法が爆発していた頃。

分かれて、街のほうへ行っていった三人は、漸くといった調子で辿り付いていた。

朝はルイズから食事を奪い、逃走することしか頭に無かったので、街の方向を聞きそびれていたのだ。確かに、強奪から逃走は計画性も何もない咄嗟の犯行だったから、そんなモノがある訳ないのだが、ここまで無計画に進めるのは三人とも初めてだった。

ネギの杖のスピードは最大時速150キロ。トリステインの魔法学院からトリステインの首都であるトリスタニアまでは馬で約2時間。馬の最大時速は40キロぐらいだから、その三分の一の時間でたどり着けた。ここを選んだのは単純にランドマークとなる大きな建物があつたからだが、まだその高い尖塔がある建物が、王宮だとは知らない。

街の入り口から少し離れた場所に留め、アレンは飛び降りて、早速アレンは箱舟のポイントをセットする。単純な作業なので、そんなに時間は掛からない。

「よっと」

「もう兄さんたら」

杖からエドが降りる。そして、そのまま両手を合わせ錬成の体勢を取る。途中でアルの批難する様な声が上がったが、エドは無視する。石畳でも何もない剥き出しの土色の大地に手が触れると、触れた所から徐々に金色に変わっていく。金属の王である黄金の錬成である。

三人の目の前には、山のように積みあがった金の延べ棒が並んでいた。

概算で2トンくらいはあるだろう。

「こんなもんかな」

「わー！凄いです！」「便利な術だな、オレッチも覚えてーぜ」

「これだけあれば、師匠の借金も……」

何度も見ているが、元々あった元素を別の元素へと変貌させる。ネギもアレンもそんな事ははじめて見た。ネギは知的好奇心から、アレンはその身の都合で見ているが。

本来、エドとアルの世界、アメストリスでは金の錬成は違法である。

錬金術はハルゲギニアの魔法とは違い、修練次第では誰にでも体得できる。つまりは黄金を錬成できる人間はエドだけではない。そんな人間が好き勝手に金を錬成したらどうなるか。

一番、分かりやすい答えは経済の混乱である。金銀はそれだけで、経済的な取引の効果を持つ。金の市場に流通する量が増えれば、金の価値は下がる。金の価値が下がれば、物価が上がる。十分な経済の混乱を齎すのだ。これが禁止されている理由である。

「よし、じゃ運ぶぞ」

「でも、こんな量……」

「大丈夫、心配すんなって」

そうして、今度は台車を作る。大きな車輪がいくつも付いた台車が地面から金を押し上げる。ちょうど良い感じに運びやすくなった。この世界のメイジは人口の1%もない。そして、金を錬成できる「スクウェア」メイジの数は更に少ない。全体の人口比からすれば、多分、0.1%も居れば良い方だろう。その最上位に存在するメイジの力持つとしても、指先ほどの小石を金に変えれば気を失ってしまう。

だからこそ、この世界では金を錬成しても経済が混乱しない。小石程の金が産出量から増えても、誰も気にしないし、気にならない。エドの力は、この世界の社会体制や経済体制を根本から揺り動かさねない。

その事に一番気が付いているのは、他ならぬこの3人だった。

「やっぱりこれだけあると壮観で、重いですね」

「ほら、運ぼうぜ」

ガラガラと耳障りな音を立てながら、三人が運んでいく。

その姿ははつきり言って人目を引く。幅5メートル程もない通りだから、金2トンを運んでいる姿は、異様とも言えるものである。アルとカモは目立たないように口を噤む。

大抵は遠巻きにひそひそと話し合っているだけだが、中には気になって話しかけてくる人も居る。

「よお、兄ちゃん達」

勿論、その人達は金に目が眩んだ命知らず、身の程知らずである。

「そいつはあ、何だ？」

「あ、これは金ですよ」

ネギがニコニコと答える。どこまでも正直に答えるネギを見て、二人は頭に手を当てて、呆れた。

明かに相手は盗賊といったような容貌だ。外見で差別するような趣味はないが、周りにゾロゾロと集まってきた男達も、同じような薄汚れた服を着て、腰にナイフなどを指しているのだ。

これが盗賊や強盗でなければ他に何に見えるというのだろうか。

「ネギ、行くぞ」

エドが促し、アレンが続く。その後ろでネギが困惑している。その姿を見て、男の頭だろうか、スキンヘッドに一本傷の入った一際大きな男がドスの聞いた声で呼び止める。

「待ちな！」

「何だ、おい」

今度はエドがイラ付いた調子で振り向きもせず尋ねるふりをする。盗賊や強盗と遣り合ってきた経験のあるエドは既に次の言葉に予想が付いていた。

「その金置いていきな」

(やっぱりな…)

じゅるりと良く研がれているナイフを舐める。

余りに予想通りの答えにエドは呆れる。その遣り取りを見ていたアレンは、また深いため息を付いて、ネギは訳が分からないといった調子で慌てふためいている。

周りからは「おい、早く渡しちまえ」とか、「命が惜しくないのか!」と言った声が聞こえてくる。勿論、エドの力を使えば金など幾らでも錬成できる。

だが、エドのプライドは譲ることを許さなかった。

「黙って働け、おっさん」

「んな!」

額に青筋を浮かべるエドと盗賊団の首領。エドのあからさまな挑発に街道に行く人達は戦々恐々と行った調子で遠巻きに眺めている。

娯楽の少ない中世の街ではこういつた喧嘩が、市井の人の楽しみと
なっていた事も多い。だが、明かに頭数が違う。オマケに片方はモ
ヤシのような細い体の子供が三人だ。下手をすれば、殺されてしま
う。娯楽だからこそ、流石に人死には見たくないのだ。

だが、一番小さな赤毛の男の子は杖を背負っている。しかし、金
という一番良く見える欲望に、目が眩んだ盗賊たちは、全くネギの
存在に気が付いていなかった。本当ならメイジに喧嘩を売ったりは
絶対にしない。

どれ程、鍛え上げた屈強な剣士や弓兵でも、魔法には敵わないか
らだ。だからこそ、それがこの世界でメイジが増長する原因にもな
っているのだが。

「おい、俺が優しい顔をしてる間に大人しく渡しな、モヤシにチビ
」！

カチン、ブチッ

アレンとエドが口を鎖す。相変わらずネギは右へ左へあたふたし
ている。色々と冒険してきたとはいえ、こんな状況にはどうにも慣
れていないようである。

「へへ、ビビッて声も出ねーってか」

「誰が…」「誰が…」

「あ？」「ん？」「あーあ」

アルは手が在ったら呆れたかった。

エドは自分の身長をかなり気にしている。同世代と比べると低い
その背に、かなりのコンプレックスがあるのだ。それを指摘され
ら、どうなるか。

アレンも自分の薄い胸板やひよろつとした体格に不満を持って
いた。体格の悩みは年頃の男女にとって最も触れては行けないポイン

トなのだ。

「誰がミジンコ豆粒ドチビじゃー！」

「誰がモヤシカー！」

堪忍袋の緒が切れた二人が、周りを囲んできた屈強な男達を次々と討ち果たしていく。武器は使っていない。錬成術も使っていない。拳と蹴りだけで囲んでいた10人余りの意識を刈り取っていく。

後に残ったのは、白目を向いて気絶する盗賊たちと、その中で仁王立ちする金色と銀色の髪を持つ対照的な格好の二人の少年。

「うっし、終わり」

「終わりました」

「……………」 「強ええな、兄貴達……」

口が塞がらないのはネギもカモ周りの通行人も同じ。鬼神の如き強さで撃退した二人は、何も無かったかのように再び歩き出した。その後をネギは少しだけ大股で付いていった。

途中で目を付けた商店主らしい男性に、エドが詰め寄る。鬼神の如く暴れた金色の髪の少年がチンピラの如く目を光らせてやってくる。大の大人が泣きそうな顔になる。

「なあ、おっさん。銀行と、服屋、えと、あと飯屋どこ？」

「え、ぎ、銀行ですか……。あれですけど」

指を指した先には、インゴットを模した鉄の看板が掛けられた店が。どうやら、あそこが銀行らしい。呉服店はその隣に生地を模した看板が、飯屋は分かりやすくナイフとフォークの看板が掛かっていた。この世界は分かりやすく記号で店を表しているらしい。

ハルゲギニアは貴族と平民の世界。7人の元居た世界と違って、

平民は文盲、文字の読み書きができないのが当たり前だ。このような看板は分かりやすいようにと平民に向けた処置でもある。

カランカランとインゴット型の看板が掛かっていた店の戸を開ける。

中にはマントを羽織った貴族らしき男性と、その連れらしき女性が居た。音に反応して、戸のほうをちらりと見たが、直ぐに窓口の店員との会話に戻ってしまった。

「いらっしゃいませ」

受付嬢らしい女性が3人の格好をまじまじと見つめる。こう言った好奇の視線に曝されるのは、朝食の時にも感じていたし、今まで同じような調子だったので今更という感じでもある。格好としては杖を持つネギはメイジで、持っていない二人は平民と言う扱いだ。

「どんな御用で？」

若干、慇懃な感じで女性は尋ねる。

「コレ」

ここまで持ってきた金塊を指差して、商談に入る。勿論、店の中に居た人は啞然とした顔をしている。少年三人が自分たちでも見たことのないような量の金塊を運んできたのだ。呆然としないほうがおかしい。

「これを金に換えてくれ」

エドはふんと胸を張って依頼した。この時までは経済体制も単純に自分達と同じ紙幣と硬貨が流通しているのだと勝手に想像してい

た。勿論、管理通貨制度になれていたアレンやネギも同じである。だが、

「え、えっとこれをお預かりしますので、金貨に換えましようか？」
「「「は？」」「「え？」」

マヌケな声を出したのは3人。分からないといった調子なのは受付嬢のお姉さん。

3人は全く知らなかったのだが、この世界には紙幣が存在していないのだ。管理通貨どころか兌換紙幣もないのである。未だに金貨や銀貨を持ち歩いて、取引しているのである。紙幣と言うのは、こういった硬貨の「重さ」から開放される為に作られたのだが、どうもまだ流通していないようだ。

これには流石に参ってしまった。エドが妥協する。頭を掻いて、やれやれという調子で、エドが妥協する。

「じゃ、それで、金貨1000枚くらいで。まあ、持ちきれない分は、ここに預けるよ」

「お願いします」「お願いします」

「わ、分かりました…」

戸惑いながら、店の奥からスタッフを呼び、金塊を引取り店の奥へと引込む。

半刻程して皮袋と1枚の羊皮紙を持って戻ってきた。

「では、これがお金になります。エキュー金貨1000枚です」「どうも」

そうやって今度はアレンが前に進み、金貨を一枚一枚丁寧に、真剣にカウントする。十枚ずつ重ね、十の束を作る。金に取り付かれ

たよつな感じになっているが、エドは気にした風でもない。
それよりも、

「……………」

シヤナが気が付いたことに直面していた。そう、文字が読めないのである。こちらの3人も言葉が通じるものだから、文字も読めるモノだと勝手に思っていた。

「ネギ……」

慌てて後ろでワクワクと好奇心をフルで活用していたネギを呼ぶ。その只ならぬ様子に、ネギは幾分緊張して近寄った。

「どうしたんですか？」

「いや、文字が読めなくて……」

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。年下であるネギに聞くのは、ちよつと躊躇いがあったが、ここで無駄な意地を張ってもいい事はない。エドもプライドは高いが、張り方くらいは知っていた。

「えつと……」

羊皮紙を渡されたネギも混乱する。勿論、肩に乗ってそれを見ていたカモも頭を悩ませた。そこに並んだのは文法も文字も知らない記号の羅列。単語が一つも分からないのである。見たことすらない。

「……僕も読めません」

「マジで？」 「はい……」

「……しかたねえ。すみません、これ読み上げてもらえますか？あと何

も書いてない紙も一枚」

受付嬢は怪訝そうな顔をしたが、折角の上客だ。見逃す手はない
と思い、素直に要求に従った。お姉さんが読む文字をネギが書き取
つていく。さらりさらりと、ネイティブらしい綺麗なアルファベッ
トが綴られる。

「はい、大丈夫です。エドワードさん。その空欄に名前をお願い
します」

「ん、了解。あ、俺の名前はエドワード・エルリックです」

そう言つと自分の名前をハルゲギニア風に変えた文字が書き込ま
れた。これで自分の名前を意味するらしい。いつもとは違う見慣れ
たはずの名前が、異世界に来たことをまざまざと教えてくれた。

「じゃ、服だな。生地買つぞ」

「はい」「ええ」

それだけ言つと三人は銀行を後にした。最後の最後まで先に入っ
ていた貴族の夫婦と商談をしていた行員は開いた口が塞がらなかつ
た。

「結構、美味しいな」

生地を買い終えた三人は飯屋に入っていた。適当に選んだ店には
昼食時には少し早いのか、あんまり人が入っていない。カップでお
茶を楽しみながら、軽食を頂く人ばかりだ。

早速注文しようとしたが、ここでも文字が読めないことが邪魔をする。誰か適当な人を見つけて教授してもらわないと、生活が難しい。誰かの奴隷や召使で生きていくなら、文字の読み書きは不要だが、生憎とそんな都合は3人にも、学院に残った3人にも無かった。だが、注文は面倒だったので、アレンが、

「このページに乗ってる料理全部」

と注文してしまった。朝もかなり食べていたが、昼もやっぱり大量に食べるらしい。それなのに体は、しゅっとしていいる。どんな体をしているのか、単純にエドは興味が出てきた。

「どうしたの、兄さん？」

三人の座った机には騎士を模したデフォルメされた人形が二足歩行で立っていた。その騎士のぬいぐるみが立ったり喋ったりしているのだが、周りは気にしていない。

これは先に寄った服屋で買った生地を利用して作ったエド特製の人形である。この中にはコンを参考にしてアルの魂が入っている。喋る音声も癖もアルフォンス・エルリックのそれそのものである。総身を鎧で固めるのは目立つと思いい、自分の機械鎧に移したが、それも壊れたときのリスクが大きい。

エドの機械鎧が壊れたときに備えて分離させたのだ。勿論、目立たずに動くと言う理由のほうが大きなウエイトを占めているが。

「いや、アレンのあの細い体にどんな圧縮率で入っているのかと思つて…」

「そうだね。何で入るんだろう」

「びっくりです…」「ま、エドの兄貴も、アルの兄貴も気にせず食べようぜ」「

カチャカチャと食器の擦れ合う音と共に食事を再開する。モグモグと口を動かすアレンを後目にエドとネギ、カモとアルは先刻の遣り取りを纏めている。

そんな時、

「あ、ごめんなさい…。少し席外します」

「どうしたんです、ネギ君」

食事の最中に席を立とうとしたネギを、デザートらしいアイスをほづばっていたアレンが引きとめた。

「・・・トイレです」

「あ、ごめん。行ってらっしゃい」

そう言うと再び、アレンは食事に戻る。ネギは荷物を置いてトイレに行った。

「ごちそうさまでした」

「ふう、美味かった」「僕は食べられないけどね」

数分ほどして食べ終わる。いざ、会計しようと思ったが、ネギがまだ帰ってきていない。随分と長いと思う。

「まさか、迷子になったんじゃない？」

「いやいや、それはねーだろ。ほら、あそこの席で…」

カモがゆっくりと視線を動かした先へ、三人も視線を沿わせる。

その先にはパンツ一丁になっていたネギが泣きそうな顔で、カードゲームをしていた。

「……………」

「何やってんの…?」

僅か10歳のあられもない姿に同情と、呆れが緇交ぜになった視線を向ける。ネギの向かい側には瓶底眼鏡を掛け、タバコを銜えた男と、その取り巻きらしい二人の男がカードを握っていた。

その傍にはネギが着ていた服が綺麗に畳んで置いてある。どうも賭けをして、取られてしまったらしい。ネギみたいな真面目な性格の少年が進んでやるとは思えない。美味い具合に騙されたのだろう。

「いや、その少年とね、カードで遊んでただけど、この子弱くてさ」

ヘラヘラと笑っている眼鏡男にアレンはどこかデジャブを感じた。でも、明かに「彼」ではない。もし彼なら自分を見つけた瞬間に、話しかけてくるはずだ。

「ふう、仕方ないですね…」

ネギを押しつけ、アレンが椅子に座る。ずいっと持っていた皮袋を差し出し、ベットする。

皮袋は6枚用意してもらい、それを6等分した。その内の一つ、アレンの財布である。一護達の財布は服の生地を買ったために、少し他よりも軽い。

「これ、金貨が200枚入っています。これで彼の服を賭けてもらいますよ」

ニコリと天使の微笑みで勝負を申し込む。

これに男達は「カモが来た」と目で打ち合わせる。3対1の上にイカサマを仕掛けていけば、まず自分達が負けることは無い。この金貨200枚も取れると。

「ルールは？」

慎重にアレンが確認を取る。相手の土俵で勝負しないのは、賭け事の基本中の基本だ。

男達の説明を聞いてみると殆ど、ポーカーと変わらなかった。男達はニヤニヤしている。金貨200枚、平民がしばらく生活に困らないだけの金額だ。十分である。今日はこれを取って終わろう。そう思っていた。

だが、

「コール」

ニコニコとアレンが自分の手札を公開する。その手役に男達は啞然とする。吸い込むことを忘れたタバコの煙が自然に流れ、灰がポトリと落ちる。

「また、僕の勝ちですね」

「だああ、ちくしょー！」

男達の姿は既に下着だけ。最初に2勝したと思ったら、そこからこの白髪頭の少年に全敗。その結果が三人揃ってパンツ一丁と言う情けない姿だ。勝ち続けていることに服を取り返して貰ったネギは、興味深そうな顔で覗き込んでいる。

その様子を怪訝そうに見ていたカモが、こそこそと尋ねる。

「アレンの兄貴、やたら強くねーか。何でそんな…」

「だって、イカサマしてますもん」

カモの疑問に一片の悔いも、迷いも無く小さな声で答える。

「本気かよ！ばれたらどうなるか…」

「大丈夫ですよ。先に仕掛けてきたのはあっちですから」

「いや、だからって…」

カモの心配に、アレンは続ける。

「修行時代に師匠の借金を返すために、必死で業を磨きましたから…」

ちよつと暗く、それよりも黒い顔をして、

「ちよつとやそつとじゃバレませんよ」

ニタアと嫌な笑顔を浮かべる。その笑顔に気が付いているのは、後ろでアレンから発せられる嫌な空気を感じ取っていたエドとアルだけだった。

「博打なんて勝ってナンボ！さあ、搾り取ってやりますよ！フハハハハ！」

「兄貴…、黒いぜ…」

そうしている間に会計を終わらせる。

アレンの食べた量がかなり響いたが、十分すぎるくらいの余りが出来た。

店を出ようとした時に、優しくアレンは服を返した。正確には服と最低限のお金を返した。筆り取るが、結局、博打では冷酷になり

きれないのがアレンの長所であり、欠点でもあった。

「ま、服無いと外歩けないでしょう？それにココの会計も必要です」

「ふ、すまねえな…。兄ちゃん」

そういつて瓶底眼鏡の男は服を着なおし、新しいタバコを銜えた。ふうつと白い煙を吐いて、一息つく。

「せめて、名前をおしえてくれねえか？」

「僕ですか、アレンです」

「そうか、覚えておくれ。俺はアーネストだ」

「はい。では、また」

さつきとは違い真っ白な笑顔を三人の男に向けて、アレンは店を後にした。

先に出て、店の先に待っていた二人と合流する。

帰りは杖で飛ぶ必要はない。道から少し外れた所にセットしておいた箱舟を使えば、あつと言う間に魔法学院まで帰ってこれる。ネギは飛べる機会が無くなって少し残念そうだったが。

8・Magic World days (後書き)

3人のハルゲギニアの街の探訪でした。

よくよく読み返してみると、金貨や銀貨は出てきても、紙幣というのがハルゲギニアには出てきていないんですよ。

本来は紙幣と言うのは金や銀を持つよりも、紙を持つほうが軽くて良いという理由なのですが、羊皮紙を使っていて、製紙技術のないハルゲギニアでは無理そうですね。こちらの世界では兌換紙幣というのも、製紙というのも中国で生まれたものです。製紙技術は後漢時代に、兌換紙幣は銀鉞山を大量に保有していたモンゴル帝国で、紙幣と言うのが生まれたのが12世紀ですから、貴金属硬貨で流通をやっているハルゲギニアの経済システムというのは、12世紀よりも下という事でしょうか。欧州諸国にはモンゴルの西征と伴に伝播していったから。若しかしたら、エルフがイスラーム諸国だとすると、その向こうの東方には中華・日系の人間が居るのかも知れません。

中世から近代に掛けて識字率が殆ど100%に近かった日本では発達しなかったのですが、40%程度しかなかったロンドンやパリでは、文字や絵で店や中身を伝えると言うことをしていました。これが鉄細工の発達を促しました。同時に文字が読めない、書けないという事がどれだけ怖ろしいのかそれが分かったと思います。会話だけで人間は繋がっていない。書面に書かれた事も伝える文章なのです。

今回はシエスタの登場とギーシュとの戦闘ですね。

才人は未だしも他の3人では相手にすら、なりそうにないのですが。

9・CRASH

シュヴルーズは二時間後に息を吹き返し、授業に復帰したが、ルイズの爆発魔法は彼女に相当なトラウマを植え付けたようで、その日以来、シュヴルーズの講義で『錬金』の魔法が扱われることはなかった。

「ちくしょー…」

当然の成り行きとして、ルイズには罰として、めちやくちやになった教室の片づけを言い渡された。

とは言っても、ルイズは「主の不始末は、使い魔の不始末」と言っただけでほとんど動かなかったため、実際に教室を片付けたのは才人だけだった。

他の3人は、ルイズが「主の…」と言い始めたところで、不穏な気配を察知。

割れた窓から、さっさと逃走してしまっていた。

「腹、減った…」

トリスタニアの飯屋でアレンがイカサマで金を巻き上げていた頃。才人は腹を減らしていた。

「ちくしょー、ルイズの奴・・・、俺の飯、食わなくても良いだろ・・・」

朝と同じように飯を抜かれた一護達三人は再び、ルイズ達の昼食を強奪。そして、そのまま逃走。生きることとは食糧である彼らにとって、至極当然のように振る舞っている彼らを見て、ルイズ

はまた腹を立てた。純銀のプレートの上に乗った豪華な奪い返そうと三人に襲い掛かるが、軽業師のように必殺の蹴りは避けられていた。

オマケに食べるモノが無くなった彼女は、才人の粗末な食事を強奪。

そのときの台詞が「使い魔のものは、主人のものよ」だ。

たった一人で、ルイズの爆発させた教室の後片付けをやらされた彼に、食事抜きは辛い。それでなくても食べ盛りである彼にとって、朝に食べた欠片程度の肉のスープと堅いパン二枚ではカロリーが足りなさ過ぎる。既に限界だった。

「腹、減った…」

とうとう才人は腹を抱えて、壁に手をついた。

「どうなさいました？」

鈴の鳴るような声に振り向くと、大きい銀のトレイを持ち、メイドの格好をした素朴な感じの少女が心配そうに才人を見つめている。カチューシャがとても似合っていて、纏めた黒髪とそばかすがマツチしていた。だが、今現在、絶賛空腹に困っている才人に、そんなことを考えている余裕などなかった。

「いや、食事抜かれて……………」

「大丈夫ですか？」

「いや、大丈夫じゃないかな。お腹と背中がくっつきそうだ」

「まあ大変！わかりました。どうぞこちらにいらしてくださいな」

彼女は才人の手を取って連れて歩き出した。

才人が連れていかれたのは、食堂の裏にある厨房だった。

大きな鍋には火が入れられ、オーブンがいくつも並んでいて、コックたちが汗を流しながら、忙しそうに料理を作っている。

「ちょっと待っててくださいね」

才人を厨房の片隅に置かれた椅子に座らせると、彼女は小走りで厨房の奥に消えた。

そして、お皿を抱えて戻ってきた。皿の中には、温かいシチューが入っていた。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作ったシチューですよ。よかったら食べてください」

「ほんとか!!!?」

少女の言葉に才人は目を輝かせた。

「ええ。賄い食ですけど……」

目の前に置かれたシチューの皿を、才人はじっと見つめている。不思議に思ったメイドの少女が、彼の顔を覗き込んだ。

「どうされました?」

「えと……これはもらっちゃってもいいの?」

彼女をじっと見つめて、才人が聞くが、それにまたニコリと返す。

「ええ」

屈託なく笑う、その笑顔に才人は、また不思議な魅力を感じていた。

「困ったときはお互い様ですから。私達平民は、魔法が使えない分、みんなで助け合わないと」

にっこりと笑って、そう答えた。

「助け合う……」

才人は今まで経験したことの無い、むず痒いような、奇妙な感覚を覚えた。

「はい。だから貴方も遠慮せずに食べてください」

少女は微笑んで、そう言った。よくわからないが、食事にありつけるのは願ってもないことだ。むず痒いような感覚も、不快ではないし、むしろ心地いい。

「助かった！ほんとにありがとう！」

そう言ってガツガツとシチューをおいしいおいしいと食い始めた。あの一度しか食べられなかったとは言え、犬のエサのスープとは天と地の差で断然こちらのシチューがおいしい。ハマるかもしれない。

空腹に困っていた才人はあつと言う間に平らげてしまった。しかし、これだけではまだ足りない。

「おいしい！これ、おかわりあるかな？」

「ふふ、そんな急がなくても大丈夫ですよ。はい。まあ、お代わりもありますから。ごゆっくり」

才人が夢中になって周りの事を忘れてまでシチューをバクバクと食べた。

そばで見ていたメイドの少女も才人の食いつぶりに驚いていたが、ニコニコしながらそんな才人の様子を見つめていた。

そこで、彼女が口を開いた。

「あなた、お名前は？」

「才人。平賀才人」

「変わったお名前ですね…」

単純にこの世界では発音できない音だったので、不思議だと言う顔をする。小さく頭を振って、もう一度、笑顔に戻って、

「じゃあ才人さん。私はシエスタっていいいます」

「ああ、よろしく！」

「あれ？」

何故か、シエスタの目が才人の体のある一点に集中する。その視線を追っていくと、文字の刻まれた自分の左手があった。

「才人さん、あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になっただっていう………」

シエスタは左手に描かれたルーンに気づいたらしい。

「知ってるの？」

「ええ。なんでも、召喚の魔法で7人も平民を呼んでしまったって」

彼女は純粹に興味津々というような顔で聞いてくる。

どの世界でも女性は噂が好きらしい。

「噂になってますよ。あなたもそうなんでしょう?。」

シエスタはニツコリと笑った。

この世界に来て初めてみた屈託のない笑顔で。

「シエスタも魔法が使えるの?。」

「いえ、私は違います。あなたと同じ平民です」

首を左右に振る。

「貴族の方々をお世話するために、ここでご奉公させていただいてるんです」

「ふん」

ぼんやり、平民と貴族の差を考えるが、どうにも彼は歴史の知識が不足している。

何も思うところの無かった才人は、再びシチューを頬張り始めた。

「ご飯、貰えなかったんですか?。」

「ああ、他の使い魔にルイズが飯を取られてさ、それからお冠」

やれやれといった調子で首を才人は竦める。

「昨日の犬のエサしか食べてないんだ」

「その使い魔さんも凄いですね。貴族の食事を取ってしまうなんてホントだよ、そのせいで俺の飯がなくなっただから!。」

才人は積み重なった空の皿の上に、もう一枚乱暴に皿を重ねた。

あのオレンジ頭の青年のニヤ付いた顔を思い出すと、イラっとし

てきた。

「普段じゃ絶対に食えない料理だった！おいしかった！ありがとう！」

「よかった。お腹が空いたら、いつでも来てくださいね」

尚も屈託無くシエスタは笑う。

「私たちが食べているものでよかったですら、お出しますから」

その言葉に才人は再び目を輝かせる。

このままでは確実にカロリー不足で死んでしまう。ちゃんとした食事が出てくる、食べられる場所があるというのは、この上なく大事なことだ。

「ほんと!?!」

「ええ。いいですよ」

「やった!!!」

ここは一護達には教えられない。教えてしまえば、ルイズに知られてしまう。あの犬のエサで使い魔の食事は十分と、才人からすれば、人でなしのような、だが、本人にとっては至極当然の考えで動いている彼女が知れば、何があるか分からない。

尤も、そんな考えで動いているから一護もアレンも反発しているのだが。

「お礼として、私に何か手伝わせてくれないか」

恩を受けたら、返すのが道理。ここで彼女の事を無視できるほどに、才人は人間は腐っていなかった。彼の申し出にシエスタも素直

にお願いする。

「なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな」

シエスタは微笑んで言った。

「任せてくれ」

才人は胸を張って言った。

大きな銀のトレイに、デザートのカッキーが並んでいる。

食堂の端でのんびりと食後の紅茶を飲む一護達がちよこちよこと走りながらケーキを配るメイド達を見るでもなく見ていた。ちなみに一護は珈琲派だ。だが、この世界にはコーヒー豆がなく、珈琲が淹れられない。淹れられたとしても、味覚が子供なシャナは飲めないのだが。

傍には体力を使い果たしてしまっただらしい、ルイズが倒れ付している。結局、食事は全て三人の胃袋へと消え去ってしまった。

「メイドね。俺、始めて見たわ」

「結構、可愛いよね」

それを横で聞いたシャナが割って入る。

「ヴィルヘルミナに比べたら、あの程度普通」

「メイドの事、普通ってお前、案外、いい所のお嬢ちゃんなの？」

ヴィルヘルミナ、詳しいことは知らないが彼女のメイドらしい。あくまでも一般家庭にいた一護と夏梨にとってメイドなどという存在は、精々童話か作り物の中にしかない。現物を見るのは初めてだ。それを普通などと言ってしまうのだから、一護の疑問は当然と言えた。

「いや、そういう訳ではない。ただ、この子の育ての親というだけだ」

重く遠雷のような声が解説を始める。昨日から身の上話などを聞いていたが、この魔神は随分と身内に甘い性格をしているらしい。シヤナの事もだが、知り合いの話をするときはやたらと饒舌になるのだ。

「この子を育てるときに最も適していた服が、あの服であったと言っただけの事。他意はない」

「いや、他意ありまくりだろ。何、そのヴィル…さんはそういう趣味？」

最後まで名前を覚えきれていない一護が最後の方を濁しながら聞く。

「ヴィルヘルミナ・カルメル。『万条の仕手』と呼ばれる戦技無双の使い手だ」

「うわ、逢ってみたい！」

メイドに反応したのか、アラストールの解説に反応したのか、夏梨が目を輝かせる。

「にしても…」

そこで一護はメイドに混じって、ケーキを配っている青いパーカーの良く目立つ少年に目を留めた。
そんな息を吸わずに、思いつき呼び寄せる。

「おい、才人！」

「……………」

まあ、無視される。それも当然と考えていたので、自分でこつちまで連れて来た。

「え、え？」

テーブルのところに居たのに、ちょっと瞬きをしたら、壁の側にやってきていた。突然の出来事に才人は頭が回っていない。トレイも落としていないし、ケーキの数も減っていない。

「何やってんだ、お前？」

「…いや、シエスタにご飯食わせてもらったんで…」

怪訝そうな顔で才人に尋ねるが、どうにも返事に要領を得ない。

「シエスタって誰？」

倒れ付していたルイズが顔だけ上げて尋ねる。

埃塗れて、汗でべとべとだが、どの道洗うのは才人の役目になるのだろう。

「シエスタはメイドさ。呼んで来るよ」

と言つて才人はシエスタを呼びに行つた。才人がいなくなり、一護達は何の気なく辺りを見回した。

夏梨は二年生のテールブルの中ごろに金色の巻き毛に、フリルのついたシャツを着た、いかにもキザなメイジを見つけた。そのメイジは、薔薇をシャツのポケットに挿している。

(うわ…、あんなん遊子の読む少女漫画だけかと思つた)

まさにファンタジー。あんな幻想の中にしかないような人間が本当にいるなんて思つていなかった。でも、乙女思考丸出しの姉でもあんな奴は好きにならないだろう。とういうか、好きになったら兄と自分がタコ殴りにしかねない。何故だか、その確固たる自信があつた。

「なあ、ギーシュ！お前、今は誰とつきあっているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

取り巻きの二人がニヤニヤと笑つてそのメイジに尋ねる。

どうやらあの、キザなメイジはギーシュというらしい。

彼はすつと優雅に唇の前に指を立てた。

「つきあつ？僕にそのような特定の女性はいないのだ」

そこで言葉を切つて、額に手を当てる。気障な仕草に、気障な台詞。シヤナはまるで天然記念物でも見たかのように目を爛々と輝かせているが、一護と夏梨は正直、イラつときていた。特に理由はない。

「薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

夏梨の持っていたカップの取っ手ががベキッ！と音を立て、物凄
い力で折れた。

カップの部分が落っこちて、派手な音を立てて粉と化す。

「一兄。ちよつとあの人、殴つてきていい？」

口をひくつかせながら刀の柄を握りしめた夏梨を一護は慌てて止
める。

「止せ、夏梨」

ずっと夏梨の刀の柄に手を当てて制する。

むすつとむくれたが、学校の中で人死には不味い。素直に手を離
し、従う。

そのとき、ギーシュとかいうメイジのポケットから何かが落ちた。
これでも3人とも目はいい。オマケにそれに才人が、目を留めた。
ちよつと才人と連れているメイドの女の子、彼女がシエスタだろ
うと、適当に当たりを付けて、成り行きを見ていた。

才人は最初、ガラスでできた小瓶を不思議そうに見ていた。中に
紫色の液体が揺れている。こんな場所にある位だから、毒ではない
だろう。

それを才人が拾い上げ、本人が出来る範囲で丁寧に、

「おい、落としたぞ」

と言ってテーブルの上に置いた。

金髪の気障な少年は、ちらりと才人の方を見たが、それだけだっ
た。

(む、丁寧さが足りなかったか?)

この2日間で随分と貴族と言うものに慣れてきた才人は、今度はもっと丁寧に、

「落とされましたよ、貴族様」

自分でも吐き気がするほど丁寧な口調で喋った才人。
しかし、ギーシュは苦々しげに、才人を見つめると、その小瓶を押しやった。

その行動に才人は首を傾げる。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね？」

「どうみても、貴方から落ちましたよ」

その小瓶の出所に気づいたギーシュの友人たちが、大声で騒ぎ始めた。

「おお?その小瓶は、もしや、モンモランシーの香水じゃないのか?」

「そうだ!その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ!」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちてきたってことは・・・」

友人達が声を揃えて言う。

「つまりお前は今、モンモランシーとつきあっている。そうだな?」

友人三人の圧力に押されながらも、

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……」

ギーシュが何か言いかけた。そのとき、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって、コツコツ歩いてきた。少し、気分が沈んだような感じの歩き方だ。栗色の髪をした、なかなかの美少女だった。茶色のマントを付けているから、一年生だろうか。

「ギーシュさま……」

そして、ボロボロと泣き始める。

「やはり、ミス・モンモランシーと……」

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。いいかい？僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……」

バチンッ！

ギーシュが言い終わるときに、ケティと呼ばれた少女は、思いっきりギーシュの頬をひっぱたいた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！さようなら！」

そう言って走り去っていくケティ。その後ろ姿を見つめながらギーシュは、頬をさすった。

すると、遠くの席から一人の見事な巻き毛の女の子が立ち上がった。

かつかつと歩き方や表情に怒りが含まれているようである。そしてギーシュの席までやってきた。

「モンモランシー。誤解だ」

ギーシュがあたふたと手を振って弁明する。浮気がばれた時の男のみつともなさと言ったら半端ない。シヤナは少し、自分が大好きな男の子と、その彼を取り合っている栗毛の女の子の顔を思い出していた。ギーシュとは全く性格も、外見も違うが、二人の女の子の間で揺れているという所に引掛かったらしい。体中から怒りのオーラを出している。一番驚いたのは一護だ。

「彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただ……

…」

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー」

ギーシュが幾ら話そうとしても、金の巻き毛の少女、モンモランシーといったか、彼女は一言たりとも耳に入れていない。多分、浮気がバレた時の妻や彼女というのは、ああいうのが正しい反応だろう。

(なるほど、女ってのはやっぱり怖えな…)

一護は絶対に彼女や妻を大事にしようと心に誓う。

「咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ」

一護がぼんやりとそんな事を考えている間にも、必死の抵抗は続いている。しかし、それは最早圧倒的な戦力差で挑む戦争に等しい。勿論、劣勢なのはギーシュの方。

勝負は見えていた。

「僕まで悲しくなるじゃないか！」

必死になって叫ぶが、やっぱりモンモランシーには聞き入れてもらえない。

(そのバラのような顔を歪ませたのは誰よ)

シヤナはムカムカと苛立っていた。

モンモランシーは、テーブルに置かれた高そうなワインの瓶を掴むと、中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。ワインの良い芳醇な香りが辺りに漂う。

そして、モンモランシーはワインをかけ終わると、

「うそつき！」

と食堂全員に聞こえるような大声で怒鳴って、何処かへ走り去っていった。

辺り一帯にシーンとした空気が流れる。今の速すぎる状況の推移に誰も頭が付いていないのだ。ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭く。

そして、やれやれといった感じの芝居がかった仕草でこう言った。

「あのレディたちは薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

この台詞には一護も呆れてしまった。夏梨はとっくの昔に諦めている。シヤナの怒りのビートは既に臨界点を記録しそうな位に膨れ上がっていた。

「一護、あいつ、殴っていい？」

「…お前もかい。だから、ダメだったの」

騒動は済んだとばかりに判断した才人は一護のもとへ、シエスタと一緒に再び歩き出す。

「待ちたまえ」

そこで才人を呼び止められた。

「なんだよ…？」

モンモランシーが掛けたワインの赤い液体をハンカチで拭きながらギーシュが。

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた」

明らかかな怒りが混じった口調だ。

だが、今回ばかりは完全にギーシュの落ち度だろう。

「どうしてくれるんだね？」

「何言ってるんだ。悪いのは、二股してるお前だろ」

才人の正論にギーシュの友人たちが、どっと笑った。

「そのとおりだギーシュ！お前が悪い！」

「バレる二股なんか、最初から無理だろ」

ギーシュの顔に、さっと赤みが差した。

そこで、一護と夏梨とシヤナがそれぞれの抱えた感情と伴に来た。才人が気づいたような声をあげる。

「あ、一護さん」

「おい、何事だよ？」

一護は今の状況を見て才人に尋ねる。尤も一部始終を見ていたの
で、随分と白々しい言い方だが、面倒事に首を突っ込みたくないの
で、今まさに来ましたという空気を醸し出す。

「いいかい？メイド君。僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、
知らないフリをしたじゃないか」

二人の女の子から振られたショックから立ち直ったらしいギーシ
ユが、やれやれと言った調子で首を竦める。

「話を合わせるぐらいの機転があってもいいだろう？」

反論とばかりに才人がギーシュに言う。

「どっちにしろ、二股なんかそのうちバレるっつの」

「ふん……。ああ、君は……」

ギーシュは、才人たちを見ると、バカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、君たちは、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな」

それなら納得と言った様子で、言葉を続ける。

「平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

その言葉に四人はカチンときた。シャナが出来るだけ無表情を保ちながら言った。胸に掛かっているアラストールと一番傍に居る一護は気が付いていたが、今にも噴火しそうな火山のような調子であるのは間違いない。それに余計な刺激を加えたらどんな事になるか、昨日のフレイムヘイズの力を見ていた一護はどうやって止め様か考えていた。

「お前みたいなのが、貴族なんて度が知れるわね」

今度はギーシュがカチンと来た。見たことのない服だが、マントを付けていないし、杖も持っていない。ならば相手は平民である。多少、灸を据えてやるのも良いかもしれない。

「君はどうやら貴族に対する礼儀を知らないようだな。ならば決闘だ！」

ギーシュはそう言って立ち上がった。
そして杖を構える。

「上等だ！」

才人は言い放った。ギーシュは、くるりと体を翻して言う。

「ヴェストリの広場で待っている。用が終わったら、来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。

シエスタが、ぶるぶる震えながら、才人達を見つめている。

「あ、あなたたち、殺されちゃう……………」
「ん？どうして？」

夏梨が尋ねた。

「貴族を本気で怒らせたら……………」

そう言っただけでシエスタは、だーと走って逃げてしまった。

「なんなんだよ」

と才人は呟いた。見た感じ、後ろに控えている一護と違って筋骨隆々といった感じではない。刀どころかフォークとナイフを持ったら、それで終わりという位に細い体だ。正直、アレンよりも細い体をしている。

(大丈夫だろ、あんな奴に負けるわけが無い)

そこで、後ろからルイズが駆け寄ってきた。

「あんたたち！何してんのよ！見てたわよ！」

「あ、居たんだ。えーと、ルブラン」

まだ一護は名前を間違えている。勿論、これは彼の精一杯の嫌味を込めた嫌がらせだ。

「一兄、いい加減名前覚えないと。ルイズ・ヴァリエールだよ」
「うん」

中の名前をすっぱり取った名前で呼ぶ夏梨と同意するシヤナ。

「分かってるよ、嫌がらせに決まってるんだろ」

しれっと悪びれもせずと言つ一護。

その態度にやっぱルイズは怒りたかったが、今はそんな事に怒っている場合ではない。

「なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「だって、あいつが、あんまりにもムカつくから……」

才人はバツが悪そうに言った。

彼の言葉は本音である。いきなり見ず知らずの異世界に連れてこられて、使い魔になれと言われた。オマケに扱いは教科書で見たような奴隷以下の扱い。食事も碌なモノを出してもらっていないし、寢床は冷たく堅い石の上。これに納得できるほど、才人の度量は大きくなかった。凡そ、一般人と同じだけの感性を持つ、彼にとってそれは当然だった。

ルイズはため息をついて、やれやれと肩をすくめた。

「謝っちゃいなさいよ」

「は？なんで？」

「怪我したくなかったら、謝ってきなさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

ルイズの言葉は才人には訳が分からなかった。

もう少し、彼が賢ければ、賢くなくても彼の世界の中世欧州の知識があれば、何故シエスタが逃げ去ったのか。そういった理由が分かったのだろうか、生憎とどちらも彼には欠けていた。

逆に、そういった知識が豊富な一護とシヤナは気が付いていた。

尤も気が付いたところで、彼らの力は貴族とは比べ物にならない。

精一杯の悪意を持ってすれば、この世界を滅ぼすことなど造作もないだろう。そんな気は微塵も無いのでしないが。

「まず、誰からやる？」

ルイズの言葉を無視して、才人が後ろにいた一護達に尋ねる。

「俺は断わる」

きつぱりと一護は断わった。

大きな刀を背負って、筋骨隆々としたまさに武人と言う格好だが、その明かに情けない姿に、才人は腑抜けだと思ったが、口には出さない。

「二人と一緒に頑張ってくれ。シャナも夏梨も随分とアイツに怒っているみたいだからな」

「はい」「いいわよ」

「ちよつと聞いてんの？」

とりあえず、ルイズの言葉は無視。

「ヴェストリの広場ってどこだ？」

近くにいたメイドに聞き、才人は歩き出した。

突然、異世界に連れてこられて使い魔にされた。その憂さ晴らしも彼の頭にはあった。

そのあとにシャナと夏梨が続く。

彼女達二人の頭には、二股を掛けたギーシュ♀女の敵という思考が回っていた。

「ああもう！ほんとに！使い魔のくせに勝手なことばかりするんだから！」

ルイズは、才人と夏梨、シャナの後を追いかけた。

9・CRASH（後書き）

中世というのは領主制で非常に貴族というのが権力を持っています。貴族と商人は貴族と商人の為にしか動かない。農民が飢えようが、死のうがどうでも良いという態度でした。貴族優勢で逆らえば、殺される。どんなに悪法を行っても、読み書きが出来なくては理解できない。平民の貴族に対する畏怖というのはそれだけ凄まじいものでした。シエスタの態度も至極当然と言えます。そんな貴族体制を革命と言う形で一番最初に打倒したのが、イギリスの清教徒革命でした。この革命軍の総司令官がイギリス国教司教だったオリヴァー・クロムウェルです。尤も彼も専制政治に近い事をして、結局王政の復活を許し、その王政もまた、名誉革命で打破されるのですが、革命者が革命によって終われるというのは何とも皮肉な話です。

シャナの男性に対する考えはやっぱり千草に由来するものだと思います。どこまでも一途に好きになった人を追いかける。これからもシャナが一護を始め、4人に心を動かされることは無いと思います。懐きはしますが、アラストールやシロ、ヴィルヘルミナに対する態度と同じような調子です。その為、正直ネギとの仮契約もしないでおこうかと思っています。

さて、ギーシュとの戦闘ですか。

彼、死んじゃうんじやないだろうか…

トリスティン魔法学院は魔法を教えるとはいえ、学校である。

つまりは資料室、どこの学校にでもある図書館と言つものが存在していた。場所は学院本塔の2階から5階までを貫いて造られた、吹き抜けのような構造をしている。

その光も届かない図書館の奥の奥、教員しか閲覧を許されていない、「フェニアのライブラリー」で今年度の2年生の「使い魔召喚儀式」の担当であった、ジャン・コルベールはあることを調べていた。

今年でトリスティン魔法学院に奉職して、実に30年近く。

「この本にも無い…」

色々と苦労があつたのか、頭と深く刻まれた顔の彫に、その苦労の跡が窺える。それなりに実力を持つメイジではあるが、確りした後ろ盾のない下級も下級の貴族である彼には、この国の最上級とも言える貴族の子弟が集まる事はストレスの原因にもなっていた。

本来であれば、教育と政治は切り離すべきなのであるが、そういったことが上手くいっていないというのが、この国の現状だった。

「この本にも無いか…」

ふよふよと「レベテーション」で宙に浮いて、目的の一節があるだろう本を探す。

手元を取った本には、また無かった。力なく閉じ、また新たな本を引っ張り出す。

そんな彼が目下、一番興味があるのは、ミス・ヴェリエールの使い魔の青年達、そして刻まれたルーンである。コルベールは彼らが

どうしても気になり書物を読み漁っているのだ。

「さて、この本はあるかな…」

使い魔に刻まれるルーンについては、一定の規則と云うか、法則が存在する。

魔法使いの属性による幻獣が生まれ、そして魔法使いの徳性によるルーンが刻まれる。つまり、メイジの属性が「火」なら「火」に属する幻獣が召喚される。「微熱」のキュルケがサラマンダーを召喚したのは、この法則に則っている。刻まれたルーンも、彼女の徳性である「愛（*caritas*）」であった。

（だが…）

パラパラとページを繰りながら、コルベールは自身の脳細胞を徹底的に活動させる。

ルイズの召喚した使い魔達は4属性のどれにも当てはまらない。

そして、本来なら彼女の徳性が刻まれるはずのルーンも7つの徳性のどれでもないものだった。

イレギュラー中のイレギュラー。周りの生徒達は平民と笑っていたが、何事にも付きまとう例外というのは、得てして問題を引き起こす。そういつた事を理解している、彼はそういつた意味ではメイジとしては珍しい学者と言われる存在だったのであった。

そんな彼は漸く、目的の本を見つけ出した。

「これは…」

ある書物に目を通すとコルベールの顔色が変わった。

彼はそのまま本を抱えたまま図書館から出ていった。

その図書館の上、本塔の最上階である7階にある学院長室にはトリスティン魔法学院の学院長オールド・オスマンが書類仕事に勤んでいるふりをしていた。

振りと言つのは、

「オールド・オスマン」

「なんじゃね、ミス・ロングビル？」

サワサワと秘書であるミス・ロングビルの尻を触っているからである。わざわざ、自分の近くに呼び寄せておいて、質問があるからと言つから来てみれば、堂々のセクハラである。

「質問は何ですか？」

「ほほ」

すつとボケる。

この白髪に床まで届くような長い白髪の老人は、国内でも屈指のメイジでありながら、こういったお茶目な点も持っていた。尤もお茶目で済まされない事も多く、

「いい加減にしてください！」

ミス・ロングビルに一喝される。これならまだ序の口だ。

それに対するオスマンの対策もしっかり用意されていて、今度は耳の遠いふりだ。

「ん、最近、耳が遠くての」
「……」

ロングビルの方はイライラとしながら、自分の机に戻った。戻った瞬間に足元から、小さな白い鼠がテテテツとオスマンの方へ、机の脚の林を駆け抜けていった。

「おう、よしよし。モートソグニルや。ナッツをやるうの」

鼠に話しかける姿は傍から見れば、完全にボケてしまった老人の姿である。縁側でお茶でも啜りながら、日向ぼっこでもしているのがお似合いの姿だ。

「じゃが、その前に戦果報告じゃ」

ぼそぼそと白いネズミに語りかける。

「そうか、ミス・ロングビルは白か。じゃが、ワシは黒の方が似合うとおもつんじゃがの……」

「オールド・オスマン」

静かに怒ったのはロングビルだ。つかつかと近寄って、ドカツと一発脛にかます。弁慶の泣き所、ここを攻撃されては流石に歴戦の魔法使いでも痛い。

「何を、するのかね……」

痛む脛をさすりながら、涙目でオスマンはさも意味が分からないといった調子で聞く。

「理由なら、腐るほど思い当たるはずですが？」
「い、いた、痛いから！ちよつと辞めてくれんかの？」

ゲシゲシと脛を蹴り続ける。脛なのはセクハラをかまして来る上司への彼女のせめてもの慈悲だ。仮にも学院長であるのだが、人前に出ることは多い。それをボコボコにしては、学院の評判が下がってしまう。本当なら、髪を切り取って青あざだらけにしたかったのだが、流石に理性が咎めた。

「オールド・オスマン！」

ノックも何もなく、扉を蹴破るように突然入ってきたのは先ほどのコルベールである。

いつの間にか2人とも何事も無いように机について、普段のように振舞っているのはさすがだ。

「たた、大変です」

「大変なことなどあるものが、すべては小事だ。えっと、ミスタ…、誰だっけ？」

「コルベールです！お忘れですか！」

うっかり度忘れしたオスマン。

「ミスタ・コルベール。君は何かに付けて大騒ぎするが、今まで大事であったことなぞないぞ」

ポリポリと頭を掻いて、机の引き出しから水キセルを取り出し、銜えた。

その姿にミス・ロングビルが咎めるような、鋭い視線を向けたが、オスマンは意に介さない。

「大騒ぎするくらいなら、授業料を徴収する方法を考えんかね。君らの給料も危ういのじゃぞ」

しれつと重大な事を言い始める。

だが、コルベールの持つてきた話は彼にとっては、生活の掛かった給料よりも重大な問題らしく、

「兎に角、これを見てください！」

バンと今までに無い位の勢いで、コルベールはオスマンに「始祖ブリミルの使い魔たち」と書かれた書物を先に見せる。それは古ぼけて、今にもページが外れそうな位に痛んでいた。殆ど死蔵に近い形で乱雑に置かれていた本の塊からコルベールが取り出してきたのだ。

「『始祖ブリミルの使い魔たち』か。随分と古い本を持つてきたのだ。』」

ボロボロの本を摘み上げながら、オスマンが尋ねる。

「で、これがどうしたのじゃ？」

まだオスマンは話分からないといった調子だ。

次にコルベールは「使い魔召喚儀式」の時に現れた7人。ルイズの召喚した使い魔の手に現われたルーンのスケッチを見せた。

それを見たオスマンの眼光は鋭くなり、秘書のロングビルに退出を促す。

「ミス。ロングビル。すまんがちと、席を外してくれんかね？」

そう言われたロングビルは素直に従う。彼女もそれなりに社会を知っている。自分が絶対に聞いてはいけないこともあるし、トリスティン政府からの圧力を受ける学院の長にでもなれば、機密情報を扱うことも多い。カツカツと足音を鳴らして、扉から出て行く。最後に礼を忘れないのは秘書の礼儀だ。

その礼が終わり、扉がしっかりと閉まったことを確認すると、オスマンはコルベールに向き直った。

「詳しく説明するんじゃ、ミスタ・コルベール」

ヴェストリ広場、そこは『火』と『風』の塔の間にある中庭である。普段、朝の短い時間にしか日も差さないことから人の行き来も少なく、教師の目も届いていないことが多い。つまりは悪巧み、凡そ校則違反になるような事をする時には、うつつけの場所なのである。

この学校においては、決闘には最適の場所である。
そんな場所で、一護は酷く後悔していた。

(まずった…。ここが決闘の場所になるとは…)

朝、軽くアレンと手合わせしたときには知らなかったが、鍛錬をしたこの場所がヴェストリ広場らしい。ここにはアレンの箱舟を設置している。

つまりは今この場にいない、3人がここから帰ってくる可能性がある。そうなれば、何も無い空間から人が現れたと大騒ぎになる。

正直、自分たちの力をよつぽどのが無い限り秘匿しておきたい6人として、非常に不味い状況になってしまった。

最初は（ギーシュが）心配だなと思つて付いてきたし、才人の通したい意地の為に譲つたが、こうなつてしまつては、自分が出てさつさと片付けてしまつた方が良かったかもしれない。

（何で断わつたんだー、おれー！）

どこから噂を聞きつけたのか、すでに広場は野次馬でいっぱいになつている。

この野次馬を抜けて、箱舟にたどり着くのは流石の死神にも至難の業だ。街に行つてしまつた3人に連絡を取る手段が無い以上、ここから出てこないことを祈るしかなかった。

「諸君！決闘だ」

ギーシュは気障つたらしくバラの造花を掲げている。

ワアアツと周りからは歓声が巻き起こる。

普段から娯楽の少ないトリステイン魔法学院の生徒にとって決闘はある意味最大のシヨウかもしれない。昔の貴族は、わざわざ決闘をさせて賭け事に興じていたらしいから、徹底している。

「ギーシュが決闘するぞ、相手はルイズの平民だ」

才人は自分が見世物にされてるようで、やれやれと頭を搔く。後ろにいる黒い髪の女の子二人は、さつきから一言も喋っていない。じつと目の前にいるギーシュを見据えて、静かに構えている。

「女の子二人か…。まあいい、ちょうどいいハンデだ」

ギーシュは気障つたらしく、シャナと夏梨を指して言う。3人を相手にすると言っているのだが、正直、才人は自分より背も小さい女の子に頼る気など毛頭なかった。この時点で二人とも、この女の子達の実力を誤解していることを知らずに。

「とりあえず、逃げずに来たことは、ほめてやるうじゃないか」

「逃げねーよ」

「逃げるか、金髪バカ」

「お前みたいなのに、逃げる方がおかしい」

ギーシュの芝居がかった台詞にいい加減、才人はうんざりとした声で答える。

後の二人は此れでもかと言う程に、怒りを込めた声で。

「さてと、では始めるか」

「なあ、悪いけど、手を出さないでくれよ」

「え?」「へ?」

後ろの二人に声を掛け、とりあえず才人は先手必勝で行くことにした。

行動を制された二人はキョトンとしている。だが、しぶしぶと言った様子で才人の頼みに従う。

才人は、相手がどんな魔法が使ってくるか分からない以上は、先に動いたほうが有利だし、事実、ギーシュのようなひよろつとした貴族なら、自分のパンチで一撃で熨せる。そう思っていた。

「先手必勝!」

足に力を思いっきり込めて、脱兎の如く駆け出す。

駆け出した才人を見て、ギーシュは余裕の笑みを浮かべ、バラを

振る。

花びらの一枚が才人の前に舞ったかと思うと、それは甲冑を着た女戦士のゴーレムとなった。

「なっ、こいつが魔法ってやつか」

始めてみた「本物」の魔法に才人はぎょっとした。

彼の主人は、魔法を使うとっては爆発を繰り返していたから、事実これが初見である。

「僕はメイジだ、だから魔法で戦う。文句をあるまいね」

「くそっ！」

才人は自分の慢心を恥じた。流石に青銅は殴れない。

殴れば、間違いなくゴーレムではなく、自分の拳が壊れる。

「言い忘れたが僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ」

そう言って、一回一回ポーズを決める。

「従って、青銅のゴーレム、ワルキューレがお相手するよ」

まずは顔面。

思いつきり右の拳で殴られた。そして次に腹に重いブローを入れられた才人は地面に倒れる。青銅の重みと振りぬいた拳の重み、その両方が才人の体に襲い掛かる。

「ぐ……」

重さに耐えかね、思わず膝を突く。

「なんだよ、もう終わりかい」

「へへ、終わるかよ。蚊が止まったのかと思っただぜ」

あきれのようなギーシュの言葉に才人は今だに軽口で答える。

再び、立ち上がって向かっていくが、それも軽く避けられ、また腹に一発、腰に一発、足と手に2発ずつ貰ってしまった。殴られるたびに、成り行きを見ていた女子生徒から短い悲鳴が上がる。殴られた才人は口から血が出ている。

「ギーシュ！」

ギーシュを叫ぶように呼んだのはルイズだった。

「おおルイズ、悪いな君の使い魔をちよっとお借りしているよ」

「いい加減にして、大体ねえ、決闘は禁止じゃない」

「禁止されてるのは貴族同士の決闘だ。平民と貴族の決闘は誰も、禁止なんかされていない」

ギーシュのルールを都合のいいように解釈した発言に、ルイズは言葉に詰まった。

「そ、それは、そんなこと今まで一度も無かったから…」

「ルイズ、君はその平民が好きなのかい」

ギーシュの冷やかすような言葉にルイズは顔を真っ赤にする。

「誰がよ！やめてよね！自分の使い魔が怪我するのを黙ってみてられないだけよ！」

「ルイズ、心配してくれてるところに悪りいんだけどこいつは俺の

決闘だ」

「だ！誰があんたの心配なんか・・・」

殴られても吐ける才人の軽口に、ルイズが更に顔を赤くする。その遣り取りを見ていた、夏梨とシャナは、

「そうかい、お前意外に優しいなあとおもったんだけどよ」

「な！何いつてるの！！」

「なあ・・・」 「ねえ・・・」

口を挟むが無視される。完全に二人だけの世界に入り込んでいる。ルイズはさらに顔を真っ赤にして怒る。シャナと夏梨は青筋を浮かべる。

「悪いけど、邪魔しないでくれ」

「サイト！」

「何だ、はじめて会った時以来だな、俺の名前を呼ぶの」

「なあ！」 「ねえ！」

「ふ、やれやれだね。まだ、やる気かい？」

二発喰らっただけだが、才人は既にボロボロだ。生身を青銅の棍棒で殴られているのと同じような衝撃があるはずだ。下手をすれば、肋骨の一本でも折れているかもしれない。

それでも才人は諦めない。

「ねえ、分かったでしょ。平民じゃ、貴族に勝てないの！」

ルイズが才人に力説するが、それでも才人は折れない。立ち上がった才人にギーシュがやれやれと嘲笑うかのように挑発する。

そんなギーシュに才人は、ゆっくりと走り出す。だが、また再び

重い拳が才人に突き刺さる。

「うほ！」

血の塊にも見える赤い水を吐く、それでも才人は踏鞴を踏んで耐える。

再び向かおうとする才人を、ルイズがその後を追いかけて肩を掴む。

「寝てなさいよ！バカ！どうして立つのよ！」

才人は肩に乗せられた手を振り払った。

「ムカつくから」

「ムカつく？メイジに負けたって恥でもなんでもないのよ！勝てないんだから！」

才人はよろよろと歩きながら呟く。

「うるせえよ」

「え？」

何度も何度も殴られた。それでも、諦めない。

「うるせえ、うるせえ、うるせえ」

「な、なによ……」

「いい加減、ムカつくんだよね……」

才人は自分の力を持って、力強く立つ。

「メイジだか貴族だかしんねえけどよ…」

そこで、口から垂れた血を拭う。鼻血に骨折、切り傷、打撲、既に満身創痍である。立っているのがやっとと言う状況なのに、それでも、張らねばならない。

「お前ら揃いも揃って威張りやがって。魔法がそんなに偉いのかよ。アホが」

ギーシュが薄く笑みを浮かべながら、そんな才人の様子を見つめている。

ボロボロの才人は、ルイズに血まみれの顔で優しく語り掛ける。

「なあ、ルイズ。しかたねえ、使い魔やってやるよ。洗濯もするし、着替えも手伝ってやる」

才人の戦いに一護はいつ手を出そうか、考えあぐねていた。

ただ、単純に自分がバカにされただけなら、さっさと自分が終わらせてしまえばいい。だが、事此処に到って、この「決闘」と言う名の、一方的な「私刑」は才人の誇りを賭けた戦いになってきた。それを邪魔できるほど、無粋ではなかった。

結局、手を出せないまま、さり気に移動した箱舟の出口の前で、じつと才人を見ているのだ。

傍には今朝方、会ったキュルケと青い髪の小さな女の子がいる。

二人もルイズと、才人の状況にハラハラと言った様子で見ている。

（何だ…、喧嘩してるから仲悪いのかと思ったけど、俺と石田みたいなもんか）

キュルケの見つめる視線に混じる感情を読み取りながら、一護は

そんな事を思った。

「飯も寝床も我慢する。だけど・・・」

「だけど…?」

「下げたくない頭は下げられねえ!」

もう一度、立つ。立てば立つただけ、傷と怪我が増えると知りながら。

それでも自分の誇りの為に、彼は立つ。自分のちっぽけだが、大切な誇りを守るために。

「やるだけ無駄だと思いがね」

ギーシュの言葉に、才人は持ち前の負けん気を發揮して言った。

「全然きいてねえよ。お前の銅像、弱すぎ」

遂に、怒りが沸点に達したギーシュの顔から笑みが消えた。ワルキューレの右手の拳を、頬にモロに食らい、才人は吹っ飛んだ。

次の左からの攻撃は鼻が折れ、鼻血が盛大に吹き出る。才人は痛み鼻を押さえながら、呆然と思う。

目の前には抜けるような青空が広がっている。もう見るのは何度目だろうか。

(参ったな……………)

これがメイジの力。

才人も多少のケンカはしたことがあるが、こんなパンチは食らったことがなかった。

それでも、よろよると立ち上がる。

ギーシュのワルキューレは、容赦なくそんな才人を殴り飛ばそうとした。襲い掛かってくるだろう衝撃に才人は思わず目をつむる。しかし、

「はああ！」「だりゃあ！」

やって来たのは後ろからの衝撃だった。

「げふ！」

盛大に才人は転がり、今のダブルの蹴りが止めになったのか、気を失ってしまった。

「全く…、手を出さないでくれって言うから、任せたのに…」

「そうね。頼りないにも程があるわ」

「『辛辣だー！』『』」

蹴りを入れた上に、気絶した才人へと鞭を打つような言葉を掛けるのは、さつきまで決闘に参加を止められていたシャナと夏梨だった。二人とも呆れたような顔をしている。

それを見ている兄は、もっと呆れた顔で二人を見ている。

「ふん、選手交代かい？あまり僕は女の子を傷つけたくはないのだが…」

「二人も泣かせて、よく言えるわね」

「そうね、私も同感」

ギーシュの言葉は本当の気持ちであるが、そろそろ堪忍袋の緒が切れた二人には無用の挑発だった。

「さつさと終わらせてあげるわ。最大戦力で掛かってきなさい！」

見事なハモリで挑発する。

流石に、「女性に甘い」と称されるギーシュにも、これは許せなかった。

最初にゴーレムを出したときと同じようにバラを振って、今度は6体を追加する。ギーシュの造り、操れる最大戦力、7体の青銅製のゴーレムが二人の女の子の前に現れた。

「いいだろう！お望みならば、そうさせてもらおう！」

キュルケの隣に居た青い髪の少女、タバサはこの決闘を見るでもなく見ていた。

今この場にいるのも隣にいるキュルケに半ば無理やり連れてこられたからだ。

結果は分かりきっている、貴族には平民は勝てない。案の定、そう思ってきてみれば黒髪の男の子がギーシュのゴーレムにボコボコにされてしまった。

だが、次に現れたのは自分とそれ程、背丈の変わらない女の子が二人。

(流石に、まずい！)

ゴーレムと男の子なら、喧嘩の範囲で済むかもしれない。だが、女の子に手を上げてしまったのは、本人は気が付いていないが、ギーシュの評価は地に落ちる。女の子の命も危ない。

その両方の理由から、咄嗟に自分の節くれだった大きな杖を持ち、決闘を止めようとするが、それをキュルケの隣に居たオレンジ髪の

男に止められてしまった。

「二人とも死んでしまう」

二人と一緒に居た黒衣とオレンジ髪が特徴の男に、何故止めるのか聞く。

だが、返って来た答えは、彼女の予想を上回るものだった。

「何、心配いらねーよ。あの二人はこの奴らの1000倍は強え」

その彼の言葉が現実とかけ離れたモノだと、タバサは勝手に考えていた。だが気が付く。自分の考えが甘いものであったと言っことを。同じく戦いを潜り抜けたシユバリエであるタバサだけが分かった。

二人の赤く煌く目と、蒼く輝く目。

その二人の双眸は幾多の戦場を駆け抜けた歴戦の戦士の目であることを。

学院長室でコルベルは唾を飛ばして、オスマンに説明していた。

「ですから、こういうことなのです!」

春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の使い魔を7人も呼び出してしまったこと。

ルイズがその中の少年と『契約』した時したこと。

契約をしていない6人にも証明としてルーン文字が浮かび上がった。

たこと。

そして、そのルーン文字が気になったこと。

どれもコレもイレギュラーな出来事ばかりだ。普通の使い魔との契約ではありえない。

それから、そのルーンを調べていたら…、

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、というわけじゃね？」

オスマンは、コルベールが描いた才人達の左手のルーン文字のスケッチをじっと見つめた。

今ひとつ、オスマンは信じられないといった調子である。

「そうです！」

バンと机を叩いて更に力説する。

「さらに使い魔を7人も召喚したということ！」

コルベールのボルテージは更に上がっていく。
あまりの剣幕に、オスマンは若干引いていた。

「普通はメイジー一人に付き、一体であるはずの使い魔が7人もいるのです。それが同じルーン！」

コルベールはさらに興奮して言う。

「で、君の結論は？」

「あの少年たちは、『ガンダールヴ』です！」

下手をすれば、口と口がくっ付きかねないほどに近くに寄ったコルベールを若干、嫌がりながらも説明を続けさせる。ここに到って、彼の言葉の信憑性が増してきたのだ。

「それも全員がです！これが大事じゃなくて、なんなんですか！オールド・オスマン！」

コルベールは、禿げ上がった頭を、ハンカチで拭きながらまくし立てた。

「ふむ…。確かに、ルーンが同じじゃ」

七枚、七人に刻まれたルーンを見比べるオールド・オスマン。そのルーンは一字一句変わっていない。全く持って同じルーンが7人に刻まれているのだ。

「その平民だったその少年達は、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃないだろうな」

「どうでしょう」

「しかし、それだけで決めつけるのは早計かもしれない」

ふうつとため息を付くオスマン。その息に取り敢えずはコルベールも落ち着きを取り戻す。

確かに、ルーンが同じだからと言って、決め付けたのは軽率だったかもしれない。

そう考えた二人の緊張を裂くかのように、ドアが控えめにノックされた。

「誰じゃ？」

扉の向こうから、退出を促したロングビルの声が聞こえてきた。

「私です。オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるようで、大騒ぎになっています」

疲れたような声でロングビルが言葉を続ける。決闘沙汰は貴族が集まるこの学園では決して珍しいことではない。だからこそ、「決闘禁止」などという校則があるのだ。

しかし、実際は守られていないことが多い。

「止めに入った教師がいましたが、生徒たちに邪魔されて、止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい」

ふうと学費も払ってこない、生徒たちの親の顔を思い出しながら、肩を竦める。

「で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「…あの、グラモンとこのバカ息子が」

彼が原因の決闘は去年もそれなりに多かった。今更、何を言うでもない。

去年から彼を見ていたオスマンとコルベールは、顔に浮かぶ疲労の色を一層濃くする。

「オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好き

「じゃ」

「おおかた女の子の取り合いでしょうな。相手は誰です？」

「…それが、メイジではありません」

「メイジではない…？誰じゃ？」

それからロングビルは言いにくそうに、一瞬躊躇ってから、

「ミス・ヴァリエールの7人の使い魔の内の黒髪の少年と女の子二人のようです」

オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるために、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」

「わかりました」

ドアの前から、ロングビルは去っていった。

コルベールは、唾を飲み込んで、オスマンを促した。

「オールド・オスマン！！」

「うむ」

オスマンは、杖を振る。

壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリ広場の様子が映し出された。

大勢のギャラリーがいる前で、シヤナはフレイムヘイズ『天壤の劫火』の契約者『炎髪灼眼の討ち手』としての能力、黒のコートにも見える外套「夜笠」を纏う。

そして、永久にも見える黒い虚空から一本の大太刀を取り出した。これが彼女の名の由来にもなった、必殺の大太刀、紅世に伝わる比類なき宝剣「贄殿遮那^{にえとのしやな}」である。

ここまで僅か数秒、その数秒の間に、彼女の目と髪は燃え盛るような紅蓮になった。

その紅蓮は太刀も覆う。燃え盛る炎の剣だ。

「な、なんだ！髪の色が変わったぞ！」

「それにあの剣に黒いコート、どっから出したんだ？」

「剣が燃えているぞ！メイジだったのか！」

ギャラリーに動揺の声が上がる。しかし、その動揺の声は更に大きくなる。

夏梨が腰に差していた刀を鞘から抜きさる。

正眼に構えた刀へ向かって、優しく、それでいて冷たく、声を掛ける。

「清めよ、『流月』！」

持っていた刀の周りに無数の水が流れ、夏梨の周りを満たす。これが夏梨の刀、水を纏いし静謐たる刃、『流月』である。紅に煌くシヤナに対するかのように青い瞳に輝く。

「おいおい、こっちの子もメイジなのか…！」

ギャラリーは完全に引いていた。先ほど、ギーシュがボコボコに

した黒髪の男はそんな素振も見せなかったが、後ろに控えていた二人は炎と水を纏い、操っている。

ギーシュの顔から余裕が消える。のんびりと逃げまわって、適当にやり過ぎそうとしていたら、いつの間にか追い詰められていた。彼も実力はそれなりにある。向かい合った二人との実力差、それを痛いほどに肌を感じていた。

「はああ！」「だああ！」

二人が気合一閃。刀を振りぬく。飛沫が飛び、炎が舞う。

後に残るのは燃え残った、砕ききれなかった青銅のワルキューレの欠片。7体の悉くが一瞬で消え去ってしまった。

「ひっ…！」

情けない声を上げて後ずさる。レベルが違いすぎる。

その様子を遠くから眺めていたのは、学院長室のオスマンとコルベールである。

「あの二人…、いくらなんでも…」

「まずいかもしれんの…、彼女らではなく、グラモンのバカ息子が」

二人の圧倒的な力を見ていた二人は、率直な感想を漏らした。

言っている間に、一步、また一步と二人はギーシュに近づいていく。最大戦力をあっさり打ち破られたギーシュには、もう打つ手がない。

自分よりも小さな女の子に気圧されている。その事が何よりも情けなかった。

ピタリと首筋に冷たい感触が奔る。

「さあ、言い残すことはある？」
「まだ繋がっている間に、聞いてあげるわよ」

二人の刀が首筋に突きつけられた。少しでもこの刀が動けば、自分の首は永遠に胴体とは離れ離れだ。「命を惜しむな、名を惜しめ」とは軍人一家である彼の父の薫陶でもある。

だが、ギーシュはこの小さな二人の悪鬼に初めて、薫陶を破ることにした。何せ名も、誇りも、奪い去られ、自分に残っているのは命のみ。ここで見栄を張って、命は失いたくない。

「待って、悪かった。侮辱は取り消そう……」

「そう、で？」

「で？って何でだい！」

侮辱の言葉は取り消した。しかし、首の冷たい感触は消えない。

「分からないの？」

夏梨があきれ果てる。

「分からないなら、仕方ないわね」

「二股を掛けるような……」「女の敵は……」

「ぶっ倒す！」

二人が、刀を振った。何時来るかもしれない死の時間に、ギーシュは強く目を瞑った。

だが、待てども待てども、痛くならない。いつの間にか消えた冷たい感触が戻ってきていない。恐る恐る目を開けると、二つの切先が自分の目の前で、完全に停止していた。

「動くなよ、どっちも」

後ろから男の声が掛かる。バツと勢い良く振り向くと、そこには呑気に見物していたオレンジ頭の少年がしっかりと刀を止めていた。それも一本の手で一人を止めていた。

使い魔の徳性というのは「魔法先生ネギま！」など多くの魔法作品に代表される人の7つの徳性、ヨーロッパ七元徳の事です。即ち、知恵、勇氣、愛情、節制、正義、信仰、希望の7つの事です。「美德」とか「道徳」の「徳」では無く、人の有益性を表したもので、最も優れている点と言い換えてもいいと思います。

夏梨の刀、説明しませんでした。が斬魄刀です。

イメージ的にシャナの対局に性格とか、態度とか、考え方が位置している。で属性的にも反対にしてやろうという、かなり安直な考えで「水」にしてみました。使い方に関してはこれから戦闘があれば、書きたいと思います。

シャナの説明が長い。「『天壤』」シャナ」まで文字数ありすぎです。

「護の「あいつらは」は多分、仲間のことを信じている彼なら恐らくこんな事を言うのだと思います。現にルキア救出の時にも言っていましたから。

11・NO REGRET RAIN

ヴェストリの広場に居たギャラリーは皆一様に呆けた顔をしていた。

何せ今まで同じようにギャラリーの中にいた、黒衣の平民がひゅつと飛び出したかと思うと、ギーシュに迫っていた二本の刃を片手で止めたのだ。刀はつい先ほど、紙の様に青銅製のゴーレムを切り裂いたばかりである。それを何も無く素手で止めているのだ。

この「ありえない」状況に頭が付いていけないのである。

「ふう、全くお前ら…」

「一護、離して…」

「一兄、手を退けて…」

尚もギーシュに向けて刀を動かそうとするが、がっちりと掴まれた切先は全く動かない。まるで万力で締められたような圧力だ。

「いい加減にしろ！」

「痛い！」「痛って！」

ゴチンと二人の脳天に重い拳が落ちる。頭の割れそうな衝撃に思わずうずくまる。

余りの痛さに涙目になる。

「ぐおお…」「うっ…」

「ったく、人死にはダメだっつてんだろ」

呆れたような調子で二人に言い聞かせる。尚も二人は睨んでいたが、一護の剣幕に圧されて黙ってしまふ。正直、女の敵であるギー

シュに天誅を加えたかったが、ここまで言われては仕方が無い。
そして、一護は未だに腰を抜かしていたギーシュに向けて、

「お前もな！」

「ぐふ！」

思いつきり、女の子に落としたのとは比べ物に成らないほどの重い一撃を脳天にぶち込む。ギーシュはその重さに一撃で気絶してしまった。

「まったく、気が付いたら謝りに行っとけよ……」

気絶したギーシュを後にして、血塗れになった才人を担ぎ上げる。切り傷、打撲と余りにも傷の数は多いが出血量は少ない。いきなり死ぬようなことは無いはずだ。

「夏梨、エドとネギを呼んで来い！ シャナは俺と一緒に医務室だ」

「はい！」 「分かった！」

二人仲良く返事をする。少しこわばった声になったのは、一護の袂に黒だから目立たない、しかし、確実にある赤いシミがじわっと広がったからだ。

夏梨はしゅつと目に留まらない速さで消えてしまった。

「おい、その赤毛！ 医務室へ案内しろ！」

「は、はい……」

今朝見た赤毛の女生徒を見つけた、一護は取り敢えず命令する。その大きな声にビクツと反応して、正気に戻る。普段なら、キュルケも断わるのだが、只ならぬ様子に思わず返事をしてしまった。

ギャラリーと一緒に呆けていたルイズは、この声で漸く正気に戻った。

「ちょっと、何なの！あれ！」

シヤナの纏った炎。夏梨の流した水。そのどちらもルイズには理解の範囲外である。聞きたい事が山ほどあった。ワクワクと言った様子で一護に詰め寄る。

「ねえ、何なの？もしかしてメイジ？」

「やかましい！」

「ハウツ！」

ワクワクと聞いてくるのに腹が立ち、説明するのも面倒になったので、取り敢えず後頭部に空手チョップを食らわす。その衝撃にルイズの意識は地の底へと沈んだ。

その意識を失ったルイズも抱えて運ぶ。

急ぎ足でたどり着いた医務室は上を下への大騒ぎになった。取り敢えず、慌てふためく先生方にはアレンが丁重に退出願った。

「ちよ、ちょっと本当に大丈夫ですか！」

才人は何せギーシユのゴーレムにしこたま殴られているのだ。金属の中では軟い青銅とは言え、生身で喰らって傷を負わないほうがおかしい。

一護が来るのを待っていたように、医務室の中で準備を整えたエドが治療を指示する。

「この程度なら、直ぐに終わる。一護、円の真ん中に才人を置いてくれ」

「分かった」

指示されたとおり、医務室の床にチョークで書かれたなにやら複雑な記号の書かれた円、錬金術師の方式と法則の体現である錬成陣の丁度中心に才人を横たえる。

「さて、死ぬんじゃないぞ！」

目の前で両の手を合わせる。パンと乾いた音が医務室の小さい部屋に響く。その次は手を書かれた錬成陣の上に重ねあわせる。エネルギーが陣に満ち、パリパリと眩い光が幾筋も煌く。

その光、錬成光が治まったあと、陣の中にいたのは出血が塞がれ、骨折が直された才人の姿だった。服は血や泥に染まっているが、それもシャナが、

「アラストール、『清めの炎』を」
「うむ」

ぽつと手のひらに灯した紅蓮の炎を投げつけると、シミが逆再生のように消えてしまった。

「処置完了だ。あとは体力が戻れば目も冷めるだろ」

遠見の鏡で決闘から医務室での一部始終を見ていたオスマンとコルベールは顔を見合わせた。

この世界の魔法使いのランクとしては一番低い、『ドット』とは

いえ、女の子二人の平民がメイジに圧勝したのである。しかも、平民だと侮っていたら、刀から長い黒髪の方は炎を、短い黒髪の方は水をそれぞれ出したのだ。

「オールド・オスマン…」

「…ううむ」

長い間、生きてきたつもりだったが、あのような技術や魔法は二人とも見た事がなかった。

しかも、二人はルーンを詠唱していない。

つまりはこの世界の魔法使いとは根本から違う存在。根拠は何も無いが、二人の直感がひしひしとそう告げていた。

更に追い討ちを掛けるかのように、オレンジ頭の黒衣の男は、その二人の刃を軽く止めてしまった。

「幾らなんでも強すぎるじゃろ…。まあ、黒髪の少年の方はそれ程でもなかったが…」

極めつけは医務室の出来事。

眩い光が『遠見の鏡』の視界を奪ったかと思うと、後に残ったのは傷が塞がれた少年の姿。本来なら高級な水の秘薬を使っても、全治1週間はありそうな大怪我を一瞬で直してしまったのだ。

床に書かれていたあの円に秘密があるのかもしれないが、その技術も見たことがなかった。

「オールド・オスマン。早速王室に報告して指示を仰がないことは…」

「それには及ばん」

オスマンはきっぱりと言った。

オスマンは、窓を開けて険しい表情で景色を眺めた。

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

再び暑苦しい勢いで、オスマンに詰め寄る。

「それもそれが七人！七人も『ガンダールヴ』なのですぞッ！！！」
研究熱心なコルベールはワクワクせずには居られなかった。伝説と呼ばれていた存在。自分の短い人生では到底お目にかかれないだろう、御伽噺の向こうに消えた存在。それが目の前に立っているのだ。

非人道的なことをする気はないが、話くらいは聞いておきたかった。

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』」

持ってきた『始祖ブリミルの使い魔たち』の一節を思い出しながら、コルベールは語る。

「その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……。その強力な呪文ゆえにの」

「この世で貴族として君臨するメイジにも、唯一にして決定的な弱点がある。」

ぶかっつと水キセルの煙を吐きながら、情けなさそうに話す。

「知つてのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ」

そう。魔法詠唱中はルーンを唱えることに集中せねばならない。ルーンを唱える事を妨害されれば、魔法は発動しない。妨害の方法は何でもあるが、兎に角集中を乱されると、どうしてもメイジは弱いのだ。だからこそ、その詠唱時間を確保する戦い方が確立されたり、使い魔に時間を稼がせたりするのだ。

「そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ」

オスマンは勝手にブリミルの姿と、その傍らに立つガンダールヴの姿を思い浮かべる。

スケベな大人らしく、両方とも体のメリハリの利いた女性の姿だったが。

「その強さは……………」

その後を、コルベールが興奮した様子で言った。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力！」

コルベールの興奮の度合いは天井知らずに上がっていく。

「あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかったとか！」

「それが、七人もいるとなると…」

オスマンは唖った。コルベールは冷静になって考えてみた。

「危険以外の何物でもありません…」
「で、ミスタ・コルベール」

くるりとオスマンは、また髪が薄くなったコルベールへ向き直る。

「はい。なんでしょうか？」

「その少年たちは、本当にただの人間だったのかね？」

「それが……………」

コルベールは少し言いよどんでから、

「さっきの少年はどこからどう見ても、ただの平民の少年でした。

しかし、後の6人は……………」

「後の6人は？」

オスマンがコルベールの態度に怪訝そうに尋ねる。

「念のために『ディテクト・マジック』で確かめたところ…、正直、
契約を辞めさせるべきでした」

「何故じゃ？」

「6人共に相当鍛えこまれていて、相当の実力者、いえ」

そこで言葉を切り、数秒置いて意を決したように続ける。

「恐らくこの国の全軍を持って、傷の一つでも、付けられれば御の
字かと…」

「…それ程かね？」

「はい…」

消え入りそうだが、しっかりとした様子でコルベールは答える。

オスマンは天井を仰ぎ見る。正直、もうあと少ししかない自分の任期中に、厄介の種を抱え込みたくは無かった。彼らを排除すれば一番手っ取り早くていいのだが、自分が教師の中では、全幅の信頼を置いているコルベールの話である。付き合いも長い自分に、そんな大仰な嘘をつくとは思えなかった。

トリステイン軍全滅で、戦果は傷一つ。これでは排除のしようがない。

「そんな7人を、現代の『ガンダールヴ』にしたのは、誰なんじゃね？」

この話は終わりとばかりにもう一つ、気になっていた疑問を口にした。

「ミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は、優秀なメイジなのかね？」

コルベールは教師である。確かに鼻屑して評価したいと言う親心もあるが、

「いえ、というか、むしろ無能というか……」

できるだけ正直に言った。

「正直、あまり魔法の才は優れないようです」

「さて、その二つが謎じゃ」

オスマンは再びキセルをふかした。

そして、それを静かに見つめるコルベール。

「ですね」

「無能なメイジと契約した7人が、何故、『ガンダールヴ』になったのか。まったく謎じゃ」

「そうですね…」

コルベールは残り少ない、自分の頭の寿命を気にした。

こんな厄介ごとを抱え込んでしまったのだ。いつその事、カッコいいスキンヘッドにするのも手かもしれない。そんな事をぼんやり考えていた。

「とにかく、王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい」

ポケポケと秘書にセクハラをする、スケベな大人の姿はそこには無かった。

そこにいたのは凜々しい学院長、魔法使いの戦争をいくつも潜り抜けてきた本物の魔法使いがいた。

「そんなオモチャを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじゃろう」

水の国と謳われるトリステインの王宮。

見た目は澄み切っているが、本等の姿は魑魅魍魎が跋扈する魔窟である。得てして政治の世界はそういうものであると分かっているが、今の状況では、いや、今の状況だからこそ尚更、彼らの存在は秘匿しておかねばなるまい。

「宮廷で暇を持て余している連中は、戦好きばかりじゃからな」

「はあ、学院長の考えには恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

コルベールは急いで部屋を出て行った。
オスマンは杖を振ると窓際へと向かった。

「さて、何者なのじゃろうな。願わくば、この世界に平穏を齎すものであってほしいの…」

オスマンの希望のような声は、強く吹いた風に乗って消えた。

白い白い空間。限りも無く広がる空間。

魔法が存在し、魔法を扱うメイジが貴族として君臨する世界。
彼らは貴族にあらざるものを虐げ、時に笑い、時に喜ぶ。

それを見た彼は、

「どうにかならないのか」

自分が向かっていったのは、決して憂さを晴らすためだけではない。
い。

零れ落ちた問いに、誰かが答えた。

「どうにもならねえよ」

それはぶっきらぼうな男の子の声だった。白い空間に反響する「
となく、解けて消えた。」

それに持ち前の負けん気を發揮して、答える。

「どうにかしたいんだ」

「無理よ、今の貴方では」

今度は透き通る鈴の音のような女の子の声だった。耳の両側から聞こえてくる。この声も反響することなく、消えていった。

「どうしてだ」

冷たく突き放すような声が聞こえる。今度は問うような声。耳に残って消えそうに無い。

そこで才人は目が覚めた。

真っ先に目に入ったのは、白一色で塗られた天井。ここはまだ夢の続きだと思った才人だが、体の節々が痛んでいないのに気が付く。

(俺、死んだのか…。じゃ、ここは天国か…)

ここが天国ならそれもいいかもしれない。今まで痛かったのが消えて、温かくすら感じている。敵わない戦いをギーシュに挑んだが、結局負けてしまった。その結果なら、まあいいかもしれない。

「あ、気が付きました?」

「目を覚ました…」

天国かと思っていたら、目の前には赤毛の男の子と青い髪の女の子が、仲良さそうに本を読んでいた。目を開けた自分に気が付いて、声を掛けてくる。

女の子の方は見たこと無いが、赤毛の男の子の方の名前は知っている。

「えっと、ネギ君だっけ…?」

「は、はい。そうですよ、才人さん」

キョトンとした様子でネギは才人の顔を見ている。
それから心配そうな声で聞いてくる。

「えっと、大丈夫ですか?二日も寝ていたんですよ」

「二日?えっと決闘騒ぎからか?」

「はい」

どうやら寝ている間に、太陽と月が二度も昇って沈んでしまっただけらしい。随分と寝すぎたのか、頭が痛い。自分の格好を確認するが、包帯でぐるぐる巻きで体はミイラ男のようだ。

だが、不思議と体は痛くない。正直数えるのもバカらしくなる位に殴られていたのだが、その傷が2日程度で塞がったりするものなのだろうか。

才人は首を傾げた。

「ネギ、私は皆を呼んでくる。戻ってきたら、さっきの続き」

「あ、お願いします。タバサさん」

そういつと青髪の女の子は傍に立てかけてあった、自分の身長ほどもある杖を持って出て行った。それを見送ってから、才人はネギに向き直る。

「俺、死んだんじゃないの?」

「死んでないですよ、ちゃんと生きてます」

さっきの白い空間はどうやら夢らしい。流石に才人も16歳。ま

だ恋もしてないし、彼女もいないし、キスもしてない。そんな状況で死ぬのは嫌だった。

「そっか……、俺生きてるのか」

そう思うと不思議とため息が出てきた。

一つため息を付いた所で、さっき出て行ったタバサに一護、エド、アレンに夏梨とシヤナが半ば引き摺るような形でルイズを連れてきた。

9人も入ると流石に白い医務室は手狭になった。

「よ、目覚めたみたいだな」

一護を始めとして皆揃って、自分が目を覚ましたことを喜んでくれる。

だが、ルイズだけは、

「ふん、勝手な事して。洗濯物たまつたじゃない！」

とあくまでも主人としての威厳を崩さずにいた。その態度に夏梨とシヤナが持つていたルイズの腕を極める。ミシミシと離れていても聞こえてくる、骨の軋む音。

「いたい、いたい！」

「あれだけ、説教したのにまだ直らないのね……」

「貴族、貴族と振舞うのも、貴族たる実力と振る舞いがあってこそ。お前の貴族は人を虐げること？」

才人は知らなかったが、ルイズはこの2日間。6人にこっぴどく叱られていたのだ。

発端は「掃除をしろ」といきなり命令したことに夏梨とシヤナが反攻したことだ。それから一護達が出てきて喧嘩を辞めさせたが、ルイズが一方的にボロボロになっていた。

そこでルイズが6人の態度に怒った。

「使い魔なら使い魔らしくしなさい」と。正直、マントも髪もぼさぼさの状態で言うのも情けなかったが、自分が上なのだということをしつかり自覚させないと、そんな風に考えていた。

それに頭を掻きながら、代表して言ったのは一護だった。

「俺達は皆、命賭ける様な事やってきたんだよ」

一護はまた、この医務室で才人に同じ事を言う。

「その傍には仲間がいた。そいつらは俺の為に命張ってくれる頼もしい奴らだった。」

それぞれが伴に戦場を駆け抜けた仲間の顔を、また思い出す。

無口な巨人、黒い靴の姫、赤い炎の軍人、白い羽根の侍、白い弓引き、蓮の剣士……

皆それぞれが、心強い仲間だった。

今から問うのは、才人への覚悟。

「お前は俺たちの為に、命賭けてくれるか？」

確り見たことのない無かった一護の茶色の目に、まるで鏡のように自分が映っているのが見えた。

「少なくとも俺達は俺たちの為に命張れない奴の為に戦わない」

「…勿論です」

少しだけ言いよんだ。才人は一護の言う事を正直、上辺しか理解していなかった。

確かに彼らは武器を持っているし、強そうだ。だが、見た目は自分とそんなに変わらない。オマケにそのうちの3人は、小学生と言っても差し支えないほどだ。

「おし。だが、まあ、弱い奴に戦えって言ってもそれは自殺の推奨だよな」

「うん。だって、こいつ弱いもん」

シヤナを皮切りに次々と降り注ぐ、辛辣な言葉。腐っても才人も男の子である。余り弱い弱いと呼ばれるのは心外だった。無謀にも一番近くにいたアレンに掴みかかるが、くるりと天地が半回転する。そして、そのまま床へ叩きつけられた。腰と背に異様な痛みが広がる。

「わー、傷口開いちゃいますよ！アレンさん！」

「心配すんな、そんな柔な塞ぎ方はしてねーよ」

「それに今のは、受身も取れていない才人が悪い」

慌てるネギと、短く欠伸をかみ殺しながら、微塵も心配していない口調のエド。

追い討ちを掛けるのは夏梨だった。

その様子を見て、一護は話を続ける。

「RPGのゲームじゃねえんだ。武器換えて強くなるわけがねえ」

今までの気楽で、のんびりとした空気を一瞬にして消す。

「強くなりたいか？」

「え？」

「言つてたる、下げたくない頭は下げられないって」

「ええ…」

気絶する寸前、ルイズに向かって叫んだ言葉を思い出す。

「下げたくない頭は下げられない」と本人にとっては大声で誓つたのだ。

「えっと、僕の友達が言つてました」

白いローブで身を固めたネギが一護と才人の会話に口を挟む。

それは嘗て聞いた、天才から自分へと贈られた言葉。綺麗な言葉でも、含蓄のある言葉でもない。けども、ネギの心の奥の奥を締め付け続ける言葉。

「『世界に幾百の正義があるとして、正義を通すのは力ある者のみ』
つて」

「『力ある者のみ』か…」

「強くなりましょう、才人さん」

ネギが才人の手を取つて促す。

正直、ギーシュのことも甘く見ていた。貴族と言うのがどれだけの實力を持っているのか。それを知らずに突っ込んで行った。その結果が今のこの様だ。見た目がモヤシのように細くても侮ってはいけない。それを才人は痛いほど痛感していた。

「何か、失礼なこと考えてませんか？」

アレンが何事か言つたが、一護が無視して話を進める。

「ま、そういうことだ。本当に自分のその思いを通したいなら強くなれ」

「私達も、最初からこんなに強いわけじゃない」と自らの幼い時を思い出すシャナ。

「そうです。必死になって体を鍛えてきました」と師匠と養父と自分に立てた誓いを思い出すアレン。

「幾度も死に掛けてきたんだ」と自分を支えてくれる幼馴染や上司の篤さを思い出すエド。

「皆、誰かに頼って強くなった、それは恥じゃない」と傍の兄の顔を見ながら思い出す夏梨。

「誰にも負けない思いがあるなら大丈夫ですよ」と記憶の向こうの父を思い出すネギ。

それぞれの想いの丈。想いの向き方もバラバラだが、共通するのは「心」だ。それが「善」か、「悪」かなどと言う単純な二元論ではない、自分の揺ぎ無い思いかどうか。

「お前らはどうなんだ？」

一護は黙っては話を聞いていたルイズとタバサにも振る。勿論、彼女達も黙って聞いているわけではない。二人にも通したい意地と願いがあつた。

ぎゅつと結んだ二人の唇の形を見て、一護は首を縦に振る。

それは、3年前の事。まだ力の無い自分へ投げかけられた言葉。今でも一護と夏梨、二人の力の源泉となり、行動理由となるその言葉。

「思う力は鉄より強い？半端な覚悟なら溝へ捨てよ」

そして背負った刀を抜き、切先を才人へと突きつける。

「10日間、俺たちと命の遣り取りできるか？」

大きな黒い切先が眼前にある。それでも、才人は引くことを良しとしなかった。

「強くなれるなら…、思いを通せるなら…」

口を結んで才人が言う。

「私も！『ゼロ』なんて言われたくない！」

ルイズが飛び跳ねるように言う。

「私にも通したい思いがある」

静かに自分の杖を強く握り締めてタバサが言う。

才人は、ルイズ、一護、アレン、エド、ネギ、夏梨、シャナの顔を見渡す。

8人の間が少しだけ縮まった気がした。

11・NO REGRET RAIN（後書き）

前話を書いてから、多く質問を頂きました。

基本的には「才人が嫌いなんですか」というものでした。

私は決して彼が嫌いな訳ではないです。彼の軽薄さ、咄嗟の時の一途さ、そして、豪胆さ。どれも愛すべきものだと思います。

ですが、文中の通りハルゲギニアはRPGの世界ではありません。武器を持って強くなって、敵を倒すなんていう展開はどのようなのだろうかと思ったのが一つ目。

当初の段階ではギーシュを倒すのも才人の役目でした。ですが、ここでガンダールヴの能力を発現させて、ギーシュを倒してしまつては、他の6人が血反吐吐いて修行して、死に掛けるような戦いをして、そうやって積み上げてきた経験や強さと言うものを否定してしまつような気になりました。それは決して彼らの経験の否定だけではなく、その経験に携わってきた例えば一護なら、修行の相手だった浦原や夜一、死闘を繰り広げた恋次や剣八、そしてグリムジョーやウルキオラたちの否定でもあるのではと思つたのが二つ目。

最後にここで勝たせてしまつと、彼は努力を怠るのではないかと思つたのです。

確かにガンダールヴの力は絶大です。しかし、それに頼つて努力を怠れば負けてしまう。現に二巻でもワールドに負けていますしね。

6人のルイズに対する扱いは正直、これで正解だつたと思います。石田もチャドも織姫も、アスナも刹那もこのかも、大佐も彼の部下

も、神田もリナリーもラビも、ヴィルヘルミナもマージョリーも悠二も、彼らを守ろうと戦って、また彼らも彼らを守るために戦っていました。

ルイズのように一方的に思いをぶつけて、要求を通すなんて事を認められるほど、彼らは器量が大きくありません。狭量ではという声もあるかもしれませんが、戦いの場を経験している彼らにとって、一方的な要求を通す存在と言うのは、切り捨てたいと思ってもおかしくないと思います。

これで一巻の半分が終了です。

才人の修行とフーケ討伐を中心に行きたいと思います。

第一章のEDはシュノーケルの「SOLAR WIND」でお願いします。

今回はお遊びです。

質問解答となると「RADIO・KON」とどっちにしようか迷ったのですが、彼に任せると間違いなく18禁になりそうだったので、フリಾಗネさんお願いします。

背景は色紙をざっくりと切って張っただけの、平原と空。

そこへ線が細く、白い上下のスーツを着た美男子が。

ボタンと毛糸で作られた簡素な女の子の人形が現れる。

フリアグネ（以下、フ）「狩人”フリアグネ”の！」

マリアンヌ（以下、マ）「なぜなに質問箱！」

フ「いきなり登場して誰かって？私たちのことを知らないとは…」

マ「まあまあ、フリアグネ様。今回は私たちの自己紹介も兼ねていきますので…」

フ「何、そうなのかい？愛しいマリアンヌ」

マ「ハ、ハイ。そのようです」

フ「では、簡単な自己紹介を。私の名前は紅世の王”狩人”フリアグネだ。そしてこちらが…」

マ「フリアグネ様の隣子、マリアンヌです」

フ「機会があれば、我々も登場できるかもしれないね、マリア、ブツ！」

マ「フリアグネ様！」

コン（以下、コ）「オイ、コラ！何でお前らなんだよ！俺じゃねーのかよ！」

フ「君は本編に出ているだろう。これはせめてもの救済措置という奴さ」

コ「腹立つ！すかしゃがってよお！」

マ「ま、まあ、落ち着いてください。それでは早速質問に参りましたよー！」

Q1「作者は才人やルイズが嫌いなんですか？」

フ「…」

マ「あ、あのフリアグネ様？」

フ「これ、作者に対する質問じゃないか。僕らが答えることじゃないね…」

コ「おい、折角コーナー持たせてもらったからちゃんと処理しろよ」

フ「無粋なぬいぐるみだね。私の作ったマリアンヌ様とは大違いだ」

コ「だと、コラ！」

マ「フリアグネ様。そうおっしゃらずに…」

フ「まあ、いいだろう。前話のあとがきに書いたとおり、作者は決して嫌ってはいない」

コ「んじゃ、何でぼこぼこにしたんだよ？」

フ「取り敢えず、彼がどれだけ戦いというモノを誤解しているか」

マ「どういうことですか？」

フ「この世界は彼の生きていた現代日本とは違う。魔法と言う神秘がある」

コ「ま、一護は色々と遣ってきたからな…」

フ「いきなり異世界に飛ばされてその世界の戦い方に順応できるかい。私だって出来はしない。空手の選手がボクシングのルールでボクサーに試合を挑むようなものさ。勝てるわけが無い」

マ「ええつと、彼以外の皆さんが適合できたのは確かに強いからかもしれないが…」

フ「それに加え彼らは『学んでいた』というアドバンテージが大きい」

マ「あ、まさか！」

フ「そう。戦いの作法というか、技術は喧嘩もしたことの無い彼が身に着けているはずも無い。相手が魔法使いだと分かっているなら、尚更、武器を持っていくとか、そういった事に知恵を働かせないと」

本当ならあの時点で死んで物語が終わっていたかもしれない」

マ「怖い世界ですね…」

コ「大丈夫かよ、オレ……」

フ「どうも彼は歴史と体育が苦手のようなだね。そんな彼もちゃんと帰ったら励むようになるさ」

マ「彼へのアンチテーゼというよりもジュブナイルのような方が強いんでしょうか？」

フ「そうだね。この世界を知った彼がどんな風にガンダールヴとして生きるのか。帰りたくて仕方の無い6人と違って、彼はこの世界で目標を手に入れるから、成長が楽しみだね」

マ「なるほど。才人さん、頑張ってください！」

フ「桃髪のおちびちゃんも同じかな。『貴族』という特権で偉ぶっているような人間を、彼らは嫌っている。嫌っている理由は各々違うけどね。才人君は受け入れたようだけど、ほいほいと人間としての最低限のプライドまで売るほど、彼らは簡単にはできていない」

マ「だから、あそこまで反発、というか冷たくしてたんですね…」

コ「ま、当然だろ。あんな胸のねー女、つまんねーよ」

フ「……うるさい、ぬいぐるみだね。彼女には普通かもしれないけど、彼女はどうしたんだろうね。もし、彼らが名の有る有名人だったら。思い込みで判断しているのもいけないことだよ」

マ「才人さんとルイズさんの成長と恋愛、それを軸にまた他の6人の成長もあるといいですね」

Q2 ネギの強さはどれくらい？また、他の面々の強さも知りたいです

フ「これに関しては、ネギ君は闇の魔法マギア・エヘレアを習得している状態だ。一撃の火力だけなら、多分6人の中では最高だろうと私の推察を述べ

ておく。だが、専門家に任せの方がいいだろう」
 マ「という訳でお願いします」
 ジャック・ラカン（以下、ラ）「という訳でこの俺！『赤の翼』^{アラルフラ}所
 属、伝説の傭兵剣士！千の刃の男！そう、この俺！ジャック・ラカ
 ンだ！」
 フ「……ずいぶんと暑苦しいね……。では、早速、解説を」
 ラ「取り敢えず、6人と他の面々をまとめてみた！ま、あくまで目
 安だけだな。大体の物理的力量的差だと思ってってくれていい。つう訳で
 以下の表を見てくれ！基準は才人だ！」

	D	C	B
	0	60	500
ネコー匹	0.5		
才人たち一般人	1		
ネギ達の平均的魔法世界の魔法使い	2		
ギーシュ（ルイズ達のドットメイジ）	20		
旧世界の人（気未使用）	50		
ルイズ達のラインメイジレベル		60	
旧世界魔法学校卒業生（全過程修了）		100	
戦車		200	
タバサ・キュルケ（トライアングルメイジ）		250	
麻帆良学園魔法先生・魔法生徒の平均値		300	
旧世界の人（気使用）		400	
ネギ（ラカンの修行前）		500	
護廷十三隊一般隊員			500
エドワード			550
ルイズ達のスクウェアメイジ			

650 シヤナ 夏梨

竜種（魔法非使用系統）

700 ネギ（ラカンの修行後）

A
1100
ネギ（闇モード発動）

1500
イージス艦

2000
タカミチ（本気がどうか疑わしい）

2200
アレン（神の道化発動）

ネギ（マギア・エベレア術式兵装装填状態）

一護（始解『斬月』）

A
2800
鬼神兵（大戦中に利用されたもの）

A K U M A（Lv. 3程度）

3000
フェイト・アーウェルンクス

3500
A K U M A（Lv. 4程度）

アレン（神の道化臨界面突破状態）

S
8000
リヨウメンスクナノカミ

エヴァンジェリン（吸血鬼の真祖として）

一護（卍解『天鎖斬月』状態）

黒の教団 エクソシスト元帥

12000
ジャック・ラカン（『アラルツラ赤き翼』所属の面々も同

格）

15000
護廷十三隊隊長格

一護（卍解『天鎖斬月』 + ホロウ虚化）
破面（十刃ランク）
アラソカルアランカル エスバードエスバード

17500 藍染惣右助（崩玉を取り込んだ状態）

？ 一護（最終奥義『無月』発動）

ラ「こんな所だな」

フ「随分と頭の悪そうな図だね。これがレベルの差かい？」

コ「つか、一護強すぎるだろ！」

ラ「あいつは単純に生物としてのランクが違うからな。地獄行つてみたりして大丈夫なのかよ」

マ「ええと、これが直ぐに勝敗に直結するのでしょうか…？」

ラ「いや、そういうわけじゃねえ。単純にエドがこんなラインなのは水中、空中での戦闘手段がないからだ。もしあればグツと評価は上がる」

マ「なるほど。つまりは力量差をひっくり返すだけの戦術や戦略、あとは技術があるかですね」

ラ「そういうこつたな、ぬいぐるみの嬢ちゃん。如何に自分の有利な場に持ち込めるか。エドなんかは空飛ばれたら、打つ手ないし。

一護も虚化ホロウつー技あるけど、あれ体力すげえ使っらしいじゃん」

フ「これはあくまでも普通の時の状態だ。参考程度でお願いしたい。なお、作中ではAの1100を常にキープしていると思ってくれ」

コ「こっやって見るとあいつ、本当に強くなれんのか？」

フ「…っと、この表を書いてもらっている間に、時間が来てしまったようだ」

マ「ラストは駆け足で質問に答えます！」

Q3 名誉革命で打破されたのはジェームズでは？

A3 作者が不勉強で申し訳ない！私からきつく西洋史を学びなおすよっ言っておく！

Q4 同じ声の人が多いですが？

A4 同じ声？何のことかね？

Q5 今後の展開は？

A5 できるだけ、原作どおりに進めて行こうと考えている。

頑張るので、是非ともこれからも読んで欲しいとの事だ。

フ「それではこの辺で！」

マ「では、また！」

ラ「待つてるぜ！」

コ「…俺の出番がまるでねえ！」

フ「所でぬいぐるみ君。君を調べていいかい？マリアンヌを完璧な物とするために参考に…」

コ「いや、ちょっと待って…。何で来んの？ぎいやあああ！！」

こんな感じでコンのトラウマが増えていく算段です。

才人が怪我で床に伏せている頃。

ネギとシャナは図書館前で立ち往生していた。

トリステイン魔法学院の図書館は、食堂もある本塔の中にあつた。

「そこを、何とか…」

頭を下げて頼むネギに、慥然とした態度で図書館司書を見つめる、というより睨みつけるシャナ。

当然の事ながら、二人は貴族ではない。この時代、活版印刷と言ふものが発明されていない時代に本と言うのは、何枚も何枚も人力で写して複製している。

オマケに紙も製紙技術が確立しておらず、羊皮紙に書いているハルゲギニアにとって紙は一枚、一枚が高級品である。つまりは紙の集合体である本も高級品なのである。

そんな中に得体の知れない「使い魔」を入れる訳にはいかない。司書の態度は当然だった。

「そこを何とか、お願いします。文字が読めないと困るんです！」

才人が動けない間を利用して、二人は文字を習う事にしたのだ。

だからと言ってルイズを頼るのも気が引けた。彼女は今、付きっ切りで才人の看病をしている。そんな彼女に余計な負担を掛けたくなかつた。

「もういい、ネギ。力づくで押し通る」

直裁直情のシャナが物騒なことを言い出した。確かに彼女の体力

と身体能力なら、それも可能だろう。だが、こんな所で揉め事を起こすのは避けたかった。後々、面倒な事になる事は間違いない。

「わー！ダメですってば！」

そんなシャナを羽交い絞めにして止める。

それでも尚、ぐいぐいと両手両足に力を込めて、この少女は前へと進む。

「おや、どうされました？ミスタ・スプリングフィールドに、ミス・シャナ」

そこへ何とも都合よくコルベールが通りかかった。

ネギはコレまでの経緯を凡そ掻い摘んで話す。

彼も図書館に調べ物をしに来たらしい。彼もまた、使い魔召喚の儀で呼び寄せられた彼ら6人に興味があった。打算的な考えだが、ここで恩を売っておくのも悪くは無い。

惘然と構える少女の方は、刀を何処からとも無く出現させ、炎で戦った。

彼女の傍にいる赤毛の少年の方もまた、素晴らしい実力の持ち主であることに気が付いていた。

「ははあ、なるほど。そういうことでしたか…」

そういうと司書と一言、三言、何事か話す。そうすると二枚の紙を持って戻ってきた。

「これをどうぞ」

何事か文字が書かれた二枚の紙片を二人に差し出した。

「これは？」

「……？」

見慣れぬ文字が書かれた紙切れを、不思議そうに見つめながらコルベールに聞いた。

「私は学ぶ者には誰であれ教えたいと思います。これは君たちの図書館への許可状です」

それから薄くなった頭を隠そうともせず、ニツコリと笑って、

「無くさないくださいね」

序でにとばかりに、コルベールは二人を連れて図書館の案内を始めた。

コルベールに促されてそこに入った時、ネギもシャナも圧倒された。本棚が見上げるほど大きく、コルベールの説明によると30メートル程あるそうだ。

メイルはハルケギニアの長さの単位で、1メートルの長さを聞いたネギは、1メートル相当と理解した。となると、本棚は30メートルということか。シャナも、その胸で見ていたアラストールもここまで圧倒的な迫力を持つ図書館にお目に掛かった事は無かった。

そう思うと、それが壁に並んでいるのは壮観の一言で、麻帆良の図書館島にも負けないと感じた。

そしてある所に止まると、そこに理路整然と並ぶ分厚い大量の本を指差し、

「ここに並ぶのは辞書です。調べ物とかに役に立つでしょう」

序でとばかりに懐から取り出した本をネギに差し出した。それ程厚い本ではないが、しっかりと読み込まれた後があつて、捲りの部分には手垢が付いている。その本をネギの手にしっかりと握らせる。

「これは私が書いた本です。宜しければ読んでください」

そう言つて自分の調べ物に行つてしまった。

コルベールが去つていったのを見送ると、二人は適当に本を一冊手にとつて見た。

そこに並んでいるハルゲギニアの文字、全くというわけではなかったが、ハルケギニアの文字は筆記体で書かれる、崩れたアルファベットにどこか似ていた。だが、そのまま読んでも、意味が通じるかというと流石の天才二人にも自信がなかった。

多分、書かれている言葉は、簡単な例文なのだろう。だが、こんなに難しいとは思わなかった。

「難しい…」

「取り敢えず、文字から考えると判る」

「はあ…」

「ため息を付いている場合ではない。始めるぞ」

ため息を付いて、諦めかけたネギをアラストールが叱咤する。

「訳す」という作業は想像以上に難しい。

辞書を片手に文法と、単語それらを意味の通るように並べなくてはいけない。うっかりした訳にすれば、その時点で意味のわからない文になってしまう。そういった前後の整合性も重要だ。

オマケにハルゲギニアには、ネギとシャナの使ってきた言葉に訳する辞書がない。

これは相当な障害だった。

「はあ……」

図書館を見渡すネギに苦笑しながら、シャナは更に一冊の辞典を棚から取り出した。それを使って簡単な固有名詞を幾つか並べると、ネギとシャナ、それぞれ知っている文字と合わせていった。

しばらくして、何とかアルファベット26文字に対応するハルケギニアの文字が分かった。羊皮紙に対応表を書き、簡単な文章を訳し始める。

「これは、木……。これが、水かな……？」

「こっちは鉄、これは黒」

後はネギとシャナの天才ぶりが、如何なく発揮された。

ネギは母国語である英語とは全く異なる言語の日本語を3週間でマスターしている。アルファベットの対応さえ分かれば、後は述語などを含めた応用だけだ。

シャナは英語だけでなく、ドイツ、フランス、その他スペイン語などもマスターしている。彼同様に素晴らしい勢いで習得していく。

「ああ、そうでした！」

そんな時、凄まじい勢いでコルベールが戻ってきた。

ネギが頭を上げて聞く。シャナは本に没頭したままだ。

「どうしたんです、コルベールさん」

「いえいえ、説明し忘れたことがあったので、戻ってきたんですよ」

頭を掻きながら、コルベールが申し訳なさそうに話す。

アラストールは奇妙な闖入者に口を鎖した。ここで知られては流石に不味いことになる。

「実は、図書館はさっきの許可証で大丈夫なんです…」

そういうとネギたちが居る方とは、ちょうど塔の反対になる場所を指差して、

「向こうの『フェニアのライブラリー』は教師以外の閲覧は不可なので、入らないように」

と簡単に説明して戻っていった。

「判りました」

「わかった」

二人がしつかりとした返事をした事を確認すると、再び戻っていた。

その後、どれだけの時間が経ったか。兎に角、二人は訳す作業に集中した。

辞典、本、羊皮紙と次々に持つ紙を替え、睨めっこしていたネギとシヤナだが、さすがに疲れたのか、「ん〜」と身体を伸ばして凝りを解した。体の節がパキ、パキと小さな音を立てる。

上手に二人とも同じタイミングで重なる。

すると、集中が切れた為、すぐ横に人の気配を感じた。

「え……わあっ！」

そこには赤色の縁をした眼鏡をかけた蒼髪の少女がいて、じつとこちらを覗き込んでいた。

二人とも本に集中していて、いつから居たのか気が付かなかった。それ程までに、この少女の存在が希薄なのか、それとも自分達が没

頭しすぎていたのか。

「あの……え、と？」

「……」

こういう時にはシャナは黙って自分のするべき事に戻って仕舞うので、必然的に聞くのはネギの役目である。彼女は矢鱈と人見知りというか、他人を避ける傾向がある。一護やアレンに懐いているのは、アラストールからして見れば奇跡にも近かった。

「字を書いてる？」

「あ、うん」

首をほんの極僅かだけ動かして、青髪の少女はネギに問いかける。背格好から自分と同年くらいと思ったネギは、いつもの敬語ではなく砕けた口調で答えた。ちなみにシャナと夏梨には敬語である。同世代と思っていたら、年上だったので、かなり怒られたからだ。少女は更に問う。

「なぜ？」

「あの、僕…、というか僕ら、恥ずかしいんだけど、ここの字の読み書きができないんだ」

「そう…」

青い髪の少女は何事か思案するような顔つきになった。

「ええっと、何か知ってるの？」

突然、黙ってしまった青髪の女の子をじっと見つめる。

「私は使い魔召喚の儀の時、あそこにいた。それとオールド・オスマンが言っていた」

「じゃあ、こここの生徒なの？」

ネギの問いに、少女はコクリと頷いた。

そして、

「ここ、違う」

パツと羊皮紙をもぎ取り、ネギが書いていた文章を、さらさらつと羽ペンで修正した。

「ここも、違う」

シャナが書いていた文章にも、さらさらと修正を加える。

「あ、ありがとう……。なるほど、こう書くんだった」

「あ、ありがとう……」

丁寧なネギと、照れくさそうにそっぽを向くシャナ。

お礼を言う二人。どこがどう違うのか、注釈が読めなくてはコレも全く意味が無いのだが、そこは指摘しない事にした。親切心に水を差すのは心苦しかった。

「一人では文字は大丈夫でも文章は難しい。私が教えてもいい」「本当？」

ネギの顔がパアツと華やいだ。シャナの方も心なしか嬉しそうである。

「コルベール先生は忙しそうだから、言い辛かったんだ。助かるよ」
「助けてくれるなら心強い」

凄くほっとした様子で、ネギが言う。

だが、世の中、受けてばかりではない。それなりの対価が必要となるのが世の常だ。ギブ&テイクという奴である。

「その代わりに」

「？」

「私に戦い方を教えて欲しい」

少女からの申し出に、二人は答えに窮じた。

流石に、二人の戦い方はこちらの魔法使いにできるかどうかは解らないし、何よりも出来たとしても大きなリスクが付きまとう。特にシャナ、一護の戦い方は、はっきり言って、文字通り命を削る。

「でも……」

一護の言葉を思い出し、傍に居るシャナの射抜くような視線を受けて、ネギは困った顔を浮かべた。その困惑の表情を浮かべたことで、事情を少女もそれと無く察したようだ。

「貴方達は強い。間違いなく、私たちの誰よりも」

察していても、自分の気持ちに嘘は言えなかった。

「だから、私の師になって欲しい。私に変なことをしないように一緒にいて監視してもいい」

ネギは、少女が単なる好奇心で自分達に近づきたいと言っている

のでないと分かった。その真摯な態度と眼差しは、何か他人には言えない事情があるのだと理解させた。

ネギもシヤナも同じような事情を持っている。決して他言できない過去《事情》が。

「はあ・・・」

半ば諦めたようにネギがため息を付く。

その様子にシヤナも諦めが付いた。

「分かった。なら、僕らと一緒に修行しませんか？」

「修行？」

少女はまた小さく首を傾げた。

「えっと、僕らだけじゃなくて、また5人も居るんです。で、その内の二人・・・」

白の髪、黒の法衣のアレン・ウォーカー。

橙の髪、黒の袴の黒崎一護。

二人に稽古をつけてもらえれば、自分もまだ強くなれるかもしれない。そんな確固たる確信にも似た、希望がネギにはあった。

「二人に頼めば、もっともっと強くなれると思うよ。僕も毎朝、稽古つけてもらってるんだ」

「私も、鍛錬に付き合ってもらってる」

こちらに来た次の日の朝から、ネギもシヤナも夏梨も、二人に稽古を付けて貰っている。

だが、漸く一発を入れるので、限界だった。一発入れようとする間に、十発は貰っている。それくらいに実力差があったのだ。師としては優秀である。

しばらく、少女は逡巡する。

「解った。それをお願いしたい」

開いた少女の目には、いつか見た決意の色が光っていた。

それを見たネギとシヤナは、嬉しそうな顔をする。きつと、他の面々も同じように言うだろう。

「じゃあ、これからよろしくね。えつと…」

「まだ、名前を聞いていない。教えて欲しい」

そこで気が付いた。

まだ、お互いに自己紹介していなかったと言う事に。

「タバサ」

「え？」「へ？」

少女は短く、それだけ答えた。

あまりの短さに、二人揃ってマヌケな声で聞き返す。

「私の名前」

それだけと思わず口に出かかった。

てつきりルイズが舌を噛みそうになるくらい長い名前だったので、同じように学院で学んでいる貴族である、彼女もそうだと思っただが、ネギもシヤナも、そういった何かしらの事情を抱えているのだろうと考え、開きかけた口を少し強引に閉じた。

それに名前の短さを笑ったら、シャナも同じである。
好きな人に付けて貰った大切な、自分の名前。タバサの名前を笑
う事は自分と、自分の好きな人をバカにする事だとシャナは気が付
いた。

「えっと、僕はネギです。ネギ・スプリングフィールドです」

「ネギ・スプリングフィールド…」

タバサは口に出して、反芻する。心にその名前を刻み込むかのよ
うに。

「私はシャナ」

本当なら、フレイムヘイズとしての名乗りを上げる所なのだが、
覚えられないだろうし、フレイムヘイズというのを晒すのも不味い
と考えて、短く名乗った。

今までに余りした事がない、挨拶の時の笑顔だった。

「シャナ。よろしく」

タバサの方も優しく、シャナに小さく微笑みかける。

「じゃあ改めて……よろしく、タバサちゃん」

ネギは右手を差し出し、握手を求めた。

しかし、タバサはそれに応えず、がしっ！と、いきなりネギの
頭を鷲掴みした。

「へっつっ!?!?」

いきなり掴まれたネギは何故なのか解らず、困惑する。

「私の方が年上……」

「えあつ!？」

きゅぴーん、とタバサの目が光り、凄い握力で万力のようにネギの頭が締め付けられる。傍から見ればじゃれ付いているように見えなくも無い。だが、内実はネギがかなり痛い仕打ちだ。

「私、15歳。あなた、10歳……」

「いだだだだだだっ」

呻くネギと無表情に締めるタバサ。そんな二人をシャナはやれやれと言った調子で肩を竦めた。胸に掛けられたアラストールは声も出さずに、笑っていた。

勿論、騒ぎすぎて追い出されたのは、言うまでも無い。

13・Crossing the Fire girl

ネギとシャナがタバサの指導の下、簡単な言葉の手ほどきを図書館で受けていた頃。

ルイズの部屋でも一悶着起きていた。

「だ・さ・い」

そう言うのは夏梨だ。彼女の手には、お世辞にもセンスが良いとはいえない服が強く握られている。

この部屋の主は此処の所、付きっ切りで才人の看病をしている。その献身さと言ったら、態々医務室に泊り込むほどだ。お陰で4人は広々とこの部屋を使えている。

「いやいや、センス抜群だろ？」

冷徹に言い放つ夏梨に反論するのは、この服を作ったエドだ。決闘騒ぎがあつたので、皆失念していたが、シャナと一護、そして夏梨の服はこの世界では大きく目立つ。その為にエド達に服を依頼していたのだが、

「だ・さ・い」

再び、同じように冷徹に言い放つ。

持ってこられたのはあまりにもセンスが悪い代物だった。シャナと夏梨に用意されたのはフリフリのレースに色使いも滅茶苦茶なもので、一護の服に到っては、説明するのすら躊躇われるレベルだった。

この服を選んだのは服屋に入ったエドである。

流石に肩に乗っていた騎士人形になったアルも、余りの兄のセンスの酷さ、無さに呆れてしまった。

「流石にこれは無い」

「ないですね。センスが悪すぎます」

「兄さん、僕も同感だよ」

「うっ…」

こつこつファッションの話に成ると女性は強い。

オマケに回りは全て敵だった。エドは完全に根負けしてしまった。

「じゃ、じゃあ、どんなのならいいんだよ!」

半ば逆切れ気味に怒鳴る。

自分のセンスに絶対の自信を持っていたエドは、完全に自分を失ってしまった。

「だから、これの通りに造ってくれ」

そう言っで一護はデザイン画をエドに渡す。夏梨も自分で書いたイメージ画を渡した。シャナの画は夏梨が同じようにデザインしたため、細部と色合いに違いがある程度のものである。

「えー、髑髏とか無いじゃん」

そのデザインを見て、ぶー垂れるエド。

彼は兎に角、髑髏とかドリルがカッコいいと思っているのである。その為かデザインにそれを直ぐに反映させる。これには弟も呆れるほどである。

「だから、無くていいんだよ！」
「ほんと、いい加減にしてよ！」

服にまで髑髏をつける趣味は3人とも無い。逆切れしたエドに対して、かなりイライラした調子で言う。仕方が無いので、エドは三人のための服から髑髏を取り外す。

そうするとそれなりに見られる服になった。

それからエドの錬金術で、ドンドン理想に近い服にしていく。実用性とデザイン性、両方を兼ね備えた三人の理想の形だ。

「よし、これでいいだろ」

「これ、最高！」

喜ぶ二人の傍でエドは床に腰を付けて、肩で息をしていた。錬金術といえども体力は消耗するのだ。

「お疲れさま、兄さん」

「頑張ってくれました」

服をそのまま持っていた二人からは労いの言葉が掛けられる。序でにエドは自分の為に、「メリクリウス十字架に掛けられた蛇」を黒く染めた真紅のマントを、アレンの為に銀系のローズクロス薔薇十字の刺繍を入れた黒のマントを用意した。せめてものお洒落である。

所で服の出来栄は二人の理想どおりだった。

「よし、サイズもピッタリ」

夏梨の服は薄青に黄色の縁取りをされたベストに、黒の短パン。序でに白のブラウスを黒のリボンタイで可愛くも、活動的に纏めている。シャナはベストの青い部分が深紅に、そして黒のスカートに

なっている。勿論、これは御揃いだ。夏梨にもスカートが、シヤナにも短パンが用意されている。

夏梨は、その上から黒のコートを纏う。別にシヤナと違って特別な効果はないが、何となく雰囲気で作ってもらった。

「しっかり動けるな」

腕を回したり、背伸びをしたりしながら、服の様子を確かめる。窮屈でもなく、緩みすぎているわけでもない。安心、安定のフィット感だった。

一護の格好は軍服を髣髴とさせる。足元は丈夫な革で出来た軍用靴。スポンも同じように軍用のデザインである。死神の正装である死覇装を元にしながらも、この世界に良くあつたデザインになった。

「序でにコレっと…」

一護は靴と同じ革で出来た手甲を仕込んだ指貫のグローブを嵌めた。これもちゃんとフィットする。関節の動きを制限する事も無い。拳闘を主軸に置く事も多い一護にとって手の保護は絶対だった。

その出来栄えに感心する。

「ありがとよ、エド」

「お疲れ様、エド」

二人の感謝の意に、エドは短く手を上げて応える。

「じゃ、ちよつと行ってくる」

そう言っで一護は夜の帳に包まれた廊下を勢い良く駆け出して行った。

多分、戦闘に支障が無いとかを確認するためだろう。こういった装備の確認は基本である。もしもの時の為に、備えていて損は無い。

「あ、行っちゃった…」

その後姿を追いかけることなく、3人は見つめていた。

「ま、そのうち戻ってくるでしょ」

気にした風でもない実の妹の言葉に、男二人は顔を見合わせて苦笑した。

「では、寝ましようか」

「…おう。悪いけど、負ぶってつてくれ…」

促すアレンと力を使い果たしたエド。その鋼を付けた体をアレンは軽く担いで箱舟の中へと消えていった。それを追う様に夏梨も消えていく。

「…つたく、少し暴れすぎたか…？」

深夜も近い廊下を一護は何事か考え込みながら歩く。

先ほど、服のフィット感や丈夫さを確かめるために、自らの剣である背中の大刀、斬月を振るっていた。それをやりすぎて学院の城壁に大きな傷をつけてしまった。

明かにやりすぎである。

だが、最近は盗賊が暴れまわっているらしいので、出逢った事も無い、そいつに全ての罪を擦り付けることにした。朝になったら、

エドに頼んで直してもらえばいい。怒るかもしれないが、
そう思いながら、女子寮の石段を登る。

「きゆるきゆる」

「ん？」

不意に何物かの鳴き声が聞こえて、振り向く。

すると、召喚された次の日の朝に会ったサラマンダーのフレイム
がこちらを見上げて見つめていた。何とも円らかな瞳で、一護のブラ
ウンの目を見つめている。

「なんだ、どうした？」

一護はこのサラマンダーがキュルケの使い魔であることをすつか
り忘れていた。犬にでも接するような調子でサラマンダーの赤い鱗を
撫でる。

黒服の青年が、赤いトカゲをあやす。傍から見れば実に変な光景
である。

「お、どうしたんだ？」

「きゆるきゆる」

一護の問いに再び鳴き声で返す。質問を理解できているのか、出
来ていないのか、オコジョのカモミールが居れば、解ったのかもし
れないが、生憎とネギに付いていつているのか、コンと一緒にエロ
談義に花を咲かせているのか、姿が見えなかった。

サラマンダーはきゆるきゆる、と人懐っこい感じで、近づいてき
た。

「どうやら害意はないようだ。」

「何なんだ…？」

するとサラマンダーは一護の造りたての服の袖を銜え、ついでこいでもいうように首を振った。

「熱っ！」

その袖から伝わってくる熱さに思わず、一護は顔をしかめる。

そんな抗議は無視してサラマンダーはぐいぐいと強い力で、一護を引っ張るのであった。

一護は諦めて、サラマンダーにどこかも解らない場所に連れてってもらおう事にした。

「きゆるきゆる〜」

何故だが、サラマンダーは凄く嬉しそうだ。

サラマンダーに連れられていくと、そこはだれかの部屋のようにだった。この部屋はどこか見覚えがある。ルイズの部屋も近い。

三つ並んだ戸のうち、真ん中の戸を開けてサラマンダーは入っていった。消える前に「入って来い」と言いたげな目で、一護を見る。

「はあ…」

ボリボリと面倒臭い様子で、頭を掻き毟る。

サラマンダーに促されるように、ガチャリと扉を開けて中に入ると、部屋は真っ暗だった。先に入ったサラマンダーの周りだけ、ぼんやりと明るく光っている。

暗がりから、女の声がした。どうやらこの声の主が、この部屋の住人らしい。

「扉を閉めて？」

一護は言われたとおりに閉める。

「ようこそ。こちらにいらっしやい」

「何も見えねーぞ」

さしもの死神も夜目は人間と同じである。暗闇を明るくする方法は無いのだが、あんまり上手くない一護は爆発させてしまう可能性があった。

一護の声を聞いた女の指を弾く音が聞こえた。すると、部屋中のロウソクが、ぼっ、ぼっとリズム良く一つずつ灯っていく。

最後に女のそばのロウソクが灯り、ぼんやりと、淡い幻想的な光の中に、ベッドに腰掛けたキユルケの悩ましい姿があった。

「ふふふ」

キユルケは艶やかに笑う。

使い道は「男を誘惑するため」。そうとしか言いよつた無の下着を付けている。というよりも、それだけしか付けていない。一糸纏わぬ姿まで、あと一歩という感じである。

そして、メロンのような胸がレースの下着を持ち上げている。

「そんなところに突っ立ってないで、いらっしやいな」

キユルケは、色っぽい声で言った。

「…えつと、誰だっけ？」

頭に手を当てて、考え込む一護。必死になって記憶の底を浚う。だが、同然のことながら、サラマンダーのフレイムすら覚えていない、一応は主人であるはずのルイズの名前すら碌に覚えていないのだから、キュルケのことも一護は覚えている筈がない。というより覚える気が無かった。

「…え？」

異性に名前を忘れられたことなど今までになかった、初めての経験だったキュルケが驚く。

しばし、無言が部屋を支配する。

「キュルケよ！キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー！」

再び、相も変わらず舌を噛みそうな名前を、すらすらと並べ立てる。

その流れるような自己紹介に、一護は口にも出さず感心した。

「覚えてない！？」

「あー」

記憶の底に溜まったモノまで浚い終えた一護が唸った後、キュルケは言った。

結局、才人を助ける時、教室へ案内してもらった時の女生徒だど気が付くのに、たっぷり時間を掛けていた。

「座って？」

一護は一回一回逆らうのも面倒だったので言われたとおりに、キ

キュルケの隣に腰掛けた。

決して口には出さないが、一護は「こんな夜に何のようだ」と言わんばかりの顔をしている。

「なんで下着姿なんだ？」

ここに入った時から疑問だった一護はさつきよりも強く頭を掻きながら、かなりやる気のない声で言った。そんな彼に燃えるような赤い髪を優雅にかきあげて、キュルケは一護を見つめた。

じっと見つめる灼熱にも似た目が、澄んだブラウンの瞳を映し出す。

説明の少ないキュルケに、一護の目は更に釣りあがり、眉根に深い皺が刻まれる。

それをキュルケが、緊張していると見て取り、大きなため息をついた。そして、悩ましげに首を左右に振った。

「あなたは、あたしをはしたない女だと思うでしょうね」

「そうだな」

イライラした口調の一護。

「思われても、しかたがないの。わかる？あたしの二つ名は『微熱』」

「『情熱』の間違いだろ」

どこまでも面倒な感じで応える。

正直、一護はキュルケと同じレベルの女性なら何度も見てきているし、同じようなアプローチを受けてきた。今更こんな事をされても、顔は同レベルでも、スタイルが劣るなら興味が沸かないのだ。

これくらいの女性なら、彼の周りには両手で数えられる程に居る。

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの」
「松明じゃねーだろ。直ぐ燃え尽きるくせに」

更に皮肉を交える。

一護のじわじわと利くボディブローはどうやら効果が無いようだ。ケロリとした顔で淀みなく続ける。確かにこの持続力は松明だった。

「だから、いきなりこんな風にお呼びだてしたりしてしまうの。わかってる。いけないことよ」

「じゃ、辞めろよ」

一護の言う事は尤もであるのだが、悉く無視される。

「でもね、あなたはきつとお許しくださると思うわ」

キュルケは潤んだ瞳で一護を見つめた。

どんな男でも、キュルケにこんな風に見つめられたら、「コロリと」
いってしまう。キュルケにはそれだけの自信と、それを叶えるだけの自身が在ったのだが、一護にはいまいち効いていない。

「さつきから何言ってるの？」

そろそろイライラもピークである。中学時代から喧嘩を売られる事が多く、直ぐに手が出ていた頃から比べると、人の話を少しは聞くようになっただけ十分な成長である。

だが、ここまで無視されると、流石に面白くない。

一護の質問を続けざまに無視して、キュルケは、すつとさつきまで斬月を握っていた手を、優しく握ってきた。そして、こう言った。

「恋してるのよ。あたし。あなたに。恋はまったく、突然ね」
「そうか。それは良かった。じゃ」

一回一回呆れるほどに演技染みだ、キュルケのやれやれと言った調子の台詞。

それに励ますでもない事を言っただけで帰ろうとする一護。だが、その一刻も早く帰りたい腕を掴む。

「待って！」

キュルケの顔は真剣そのもので言う。

「私が今、恋してるのはあなたよ。黒服のお兄さん…」

確かに一護はキュルケよりも年上だろう。

だが、あんまり「お兄さん」と呼ばれるのはしっくりこなかった。というよりもムカついた。

「あの決闘の時に見せてくれた妹を見守るような視線」

大仰な台詞回しで先の決闘のシーンを思い出す。

そう言えば、青髪の女の子の傍に居たなと此処に到って漸く思い出した。序でに医務室に案内してくれた少女だという事も。

「信じられる？その視線に痺れたのよ！！情熱！！あああ、あなたの言うとおりの情熱だわ！！」

「俺、そんな事、全く言っただけ？」

思い当たる節のない一護は腕を組んで、考え込んだ。

「二つ名の『微熱』は、つまりあなたの言つとおり情熱なのよ!」
「ぱあっと真昼の太陽のような顔で一護に迫ってくる。

「その日から、あたしはぼんやりとしてマドリガルを綴ったわ。マドリガル。恋歌よ?」

「知らねーよ」

一方的にそんな事を言われても困るだけだ。

大体、死神の世界に恋歌などという文化はない。

あくまでも冷静に、そして冷徹に応える。最初から面倒臭さはフルスロットルであるが、ここまでくるとフルスロットルを大きくオーバーしそうだ。

「あなたの所為なのよ。イチ」

何がどう自分のせいなのか。

説明する言葉が不足しすぎていて、何が言いたいのか一護は今ひとつ理解できないでいた。

「あなたが毎晩あたしの夢に出てくるものだから、フレイムを使って様子を探らせたり……」

「ストーカーかよ……」

一応は自分の隠しておきたい部分は見られていないはずだ。

もし、見られていたら確実に自分と距離を置こうとするだろう。

「ほんとに、あたしってば、みつともない女だわ。そう思うでしょ」
「っ」

「ああ、思う」

いつになったら終わるんだろう。
遠くに見える星を窓越しに見ながら、そう思った。

「でも、全部あなたの所為なのよ」

（井上とか、たつきとか、こんな調子の奴、居たっけ…？）

ぼんやりと自分の妹も含めた自分の周りの女性の顔を思い出してみよう。

空手家の幼なじみに、天然ボケのクラスメイト、女好き、生徒会副会長、どれとも違う今まで、逢ったことの無いタイプだ。

「恋と炎はフォン・ツェルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命よ」

そんな事を言われても正直、困る。

「恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系は本望なのよ」

一護がそんなことを思いながら沈黙してるのを見てキュルケは、イエスと受け取ったのか、ゆっくりと目をつむり、唇を近づけてきた。

「…まずくない？」

キュルケの態度にイライラから、恐怖というか、危機感を感じる。

（しかしな…）

ぼんやりと褐色の肌を見つめながら、一護は考える。

多分こちらの褐色の女の方が年上だろうが、キュルケとルイズは年はあまり変わらないだろう。

しかし、いかんせん発育が違いすぎる。

キュルケは大振りのメロンが二つ、体にくっついていてるかののよ
うな胸で、ルイズは大平原、まな板みたいな胸で、2つも年下の夏
梨にも、惨敗している。

神つてのは等しく平等に物を分け与えるはずなのに。

(ああ、それより俺の身が危ないな)

そう思い、一護は立ち上がる。

散々お膳立てしたのに梯子を外されてしまったキュルケはキョト
ンとしている。

「俺、帰るわ。んじゃ」

それだけ言って、再びドアノブに手を掛ける。

だが、それに反して今度は後ろから抱きつかれた。背中にむにゅ
んと胸の感触が広がる。

「ダーリンの！そういうところが素敵！」

「うるせー！」

キュルケがそう言ったとき、窓の外が叩かれた。二人は窓の方へ
と顔を向ける。

そこには、恨めしげに部屋の中を覗く、一人のハンサムな男の姿
があった。

「キュルケ……」

少年はそこに悲壮とも、嫉妬とも付かない表情を浮かべていた。

「待ち合わせの時間に君が来ないから来てみれば……」

どうやらキュルケは約束をすっぱかして、一護にアピールしていたらしい。

流石に気の毒すぎるだろうと、一護は思ったが、流しておいた。今は一分一秒でも早くこの部屋から出て行きたい。そうしないと自分の身が危ない。

「ベリッソン！ええと、二時間後に」

「話が違うー！」

ペリッソンと言われた少年の恨みがましい視線の行き先は一護だ。

ここは確か、三階である。

どうやらベリッソンと呼ばれたハンサムは魔法で浮いているらしい。

「ああ、もうー！」

キュルケは煩そうに、胸の谷間に差した派手な意匠が施された魔法の杖を取り上げると、ハンサムがいる方を碌に見もしないで杖を振る。

するとロウソクの火から、炎が大蛇のように伸び始め、そのまま窓ごと男を吹っ飛ばした。

一瞬だけ悲鳴が上がって、直ぐに消えた。というか落ちていった。

「まったく、無粋なフクロウね」

「え、大丈夫、彼？」

一護は真顔でキュルケに訊くが、キュルケには耳がないようである。

全く聞いていない。

「でね？聞いてる？」

「その台詞、そっくりお返しするぜ」

早くも一護の嫌な予感が当たってしまった。

「彼はただのお友達よ。とにかく今、あたしが一番恋してるのはあなたよ！！」

キュルケは色気たつぷりにそう言つと一護に再び唇を近づけた。

だが再び、今度はコンコンと窓枠が叩かれた。

二人は再び窓の方へと顔を向ける。

風を遮るものがなくなったそこには、ハンカチをくわえて悲しそうな顔で部屋の中を覗き込む、精悍な顔立ちの男がいた。さっきの奴よりは体格が良くてなかなかの良い男であった。

「キュルケ！その男は誰だ！！今夜は僕と過ごすんじゃないのか！！」

「スティックス！ええと、四時間後に」

「そいつは誰だ！キュルケ！」

怒り狂いながら、スティックスと呼ばれた男は窓枠に足を乗つけて部屋に入ってこようとした。

キュルケはさっきと同じように無表情で、再び杖を振った。

さっき起きたことがまるでコントの天井のように起きて、男は煌々と燃える炎にあぶられ、地面に落ちていった。

「……………」

一護は無言で呆れた後、ジト目でキユルケを見つめる。顔が引きつっているのが、自分でも良くわかった。

「彼は、え〜と。友達というよりはただの知り合いね」

かなり苦しい言い訳である。

「とにかく時間をあまり無駄にしたくないの」

再び、真面目な顔に戻る。

喋っている事はまともだが、やっている事はかなり不貞な事である。

「夜が長いなんて誰が言ったのかしら！瞬きする間に、太陽はやってくるじゃないの！」

キユルケは、またまた一護に唇を近づけた。

「キー！！何でだ！？」

ついさっきまで窓だった壁の穴から、そういった感じの悲鳴が聞こえた。

一護は、

「またかよ……」

と呟きながら、やる気のない目をして振り向く。

窓枠で、三人の男が押し合い、へし合いしている。その状況はかなり滑稽だった。三股、正確には5股を掛けられていた事に気が付いていないのだから。

三人は同時に、同じセリフをはいた。

「……キュルケ！そいつは誰なんだ！恋人はいないって言ってたじゃないか！」

「マニカン！エイジャックス！ギムリ！」

来る男、来る男、全員が今までやってきた男と違う事に、柄にも無く一護は感心した調子でキュルケを見て思った。勿論、感心の中には非難がましい目線も混じっている。

これを見ていると決闘にまで発展したギーシュの二股と比べると、彼など可愛いものだ。

「……ええと、六時間後に」

ちよつと壁に視線を移して逡巡した後、キュルケが面倒そうに言った。

「……朝だよ！……」

三人は仲良く叫ぶ。

それに対し、キュルケはうんざりした声で、サラマンダーに命令した。

「フレイム！！」

きゆるきゆると部屋の隅で寝ていたサラマンダーが起き上がる。そして、三人が押し合っている窓だった穴に向かって、勢い良く

炎を吐いた。先の二人と同じように地面へと落下していく。

「彼らは？」

「知り合いでもなんでもないわ……」

ジト目と眉間の皺を更に深く刻みながら、一護が尋ねる。一応、帰ってくる言葉が予想が付いていたが、ここまで予想通りだと泣けてくる。

明かに嘘だ。目が泳いでいる。

「と・に・か・く！」

キュルケが仕切りなおすように叫ぶ。

「私が今、恋してるのはイチゴ！あなたなの！」

「うるせえんだよ！」

遂に一護が切れた。

だが、

「そうね……。相手を怒らせるなんてあたしはまだ子供ね」

「あれ？」

予想の斜め上の解釈が返って来た。

思わず、目を瞬かせる。

「だけど積極的なのはしかたがないじゃない」

オマケに反撃がきた。

「恋は突然だし、すぐにあたしの体を炎のように燃やしてしまうんだもの！！！」

「知らん。つーか帰らせてくれ」

キュルケの言葉を無視して、一護は立ち上がった。

そして、扉の前に立ちドアノブに手をかけるとまた再び、キュルケが抱きついてきた。

「そういう連れない所が本当に素敵！」

「知るかぁ！」

抱きついてきたキュルケの襟を掴み、ベットへと投げ返す。
どたんとうと凄まじい音がして、ベットがギシギシと軋んだ。

「じゃあ俺、寝るから」

あくびをしながら気絶しているかもしれないキュルケに一護は言った。

それだけ言い残すと、部屋を出て行った。フレイムは主人の看護か、一護を追うか逡巡していたが、ベットへ心配そうに駆け寄った。

「きゆるきゆる？」

心配そうに鳴くが、キュルケは気絶もしておらず、真っ直ぐに天井を見つけていた。

むくりと起き上がる。

「大丈夫よ、フレイム……」

心配してくれる自分の使い魔に優しく微笑む。

「それよりも…」

さっきまでの流れを思い出して、考える。

「ますます、惚れたじゃないの…!」

かくして、彼女の恋の炎はもっと大きく燃え上がるのだった。

「ぶえつくし!」

「一兄、風邪?」

箱舟に戻ってきた一護は大きなくしゃみをした。

「かもな…」

鼻をすすり上げながら、嫌そうに呟いた。

13・Crossing the Fire girl(後書き)

三人の服はかなり悩みました。

参考に解りやすく絵を描ければよかったです。生憎とそのような技術は無いので勘弁していただきたく思います。

気になる方は夏梨とシヤナは、イメージとして尚村透作「失樂園」を。

一護の方はアメストリス国軍軍服の黒カラー、若しくはウルキオラのデザインの黒カラーだと思ってください。

エドのセンスの無さは作中でも指摘されている通りです。何で彼はあそこまで独創的なセンスを持っているのでしょうか。流石に持つものなら未だしも、良く着る服にその趣味を反映させるのは如何なものかと思えます。

特に相手は女性ですから、碌に服を着替えない彼と違って、それなりに二人ともお洒落には気を張っていますから。

キュルケの男性遍歴というのも見てみたい気がします。絶対に腰を抜かすと思いますが。

所でBLEACHの女性陣の面々は中々にスタイルの良い方ばかりです。乱菊・織姫を筆頭にたゆんたゆんな方達ばかりです。例外もありませんが、キュルケやティファと誰が一番スタイルが良いのか。測ってみるのも面白いかもしれません。

是非、この人という意見をください。

少なくとも、夏梨と遊子には勝ち目はないでしょうけども。

14・LESSON START(前書き)

第二章の開始です。

OPテーマはBEST CRUSADERSの「TONIGHT
TONIGHT TONIGHT」でお願いします。

14・LESSON START

「はあ、はあ…」

既に何時から息は絶え絶えだったのか。それすらも判らないほどに奔り続けていた。目の前は鬱蒼と生い茂る熱帯の木や花、美味しそうな実もあるが、毒があるかもしれない。だが、今はそんなモノに目を奪われている暇はない。

足をいくつものシダ植物が絡めるが、それでも必死に動かす。

「くそ！何なんだアレ！」

後ろからは自分の身の丈程の巨大な剣を持った鎧が追って来るのだ。日本でいう武者鎧とは違って、板金の騎士の鎧だ。あれが自分に振り落とされたらと思うと、気が気でない。

何せ、こちらの武器はこのジャングルに入る前にエドから渡されたナイフが一本だけ。

これで、どうやって立ち向かえばいいのだろうか。

ガチャン、ガチャンと鳴り響く鎧の音が一層、恐怖を掻き立てる。

「にしても…」

才人は呟く。

「魔法世界に来てまでジャングルって…、ネギもアレンもすげえよ…」

鎧が奏でる死への独奏曲ソナタが小さくなっていく。どうやら見失ってしまったらしい。

ここへ来て既に3日。そろそろ、食事も碌なものを取っておらず、精神も肉体も限界に近かった。

何故、才人が一人でこんな熱帯のジャングルにいるのか。

話は3日前に遡る。

ギーシュとの決闘、という名の一方的な私刑制裁でボコボコにされてしまった才人は、しっかりと皆の前で宣言した。「強くなりたい」と。その意思を汲んでくれたのか、それとも自分たちの修行のついでなのかは知らないが、ここへルイズとタバサも加えた9人で修行が始まる運びになった。

その修行初日。

すっかり傷もエドの手によってふさがれ、体力も全快とまでは往かないが、それなりに動ける程度には回復した才人はアレンの案内で白い水晶のような物体の前に立たされていた。

場所はルイズの部屋。

才人とルイズ、そしてタバサと何処からそれを聞きつけたのか、キュルケまでがやって来ていた。

「ゼロのルイズ。何、あなた達こんなおもしろそうな事、やろうとしているの?」

ニタニタと精一杯のからかいを込めた笑顔でルイズを挑発する。勿論、ルイズとて遣られっぱなしではない。こちらも出来る限りの虚勢を張って答える。

「ふん、今に見てなさいよ。修行が終わったら、私を誰も『ゼロ』なんて呼ばなくなるわ」

何せ、キュルケの実家があるツエルプストーとルイズの実家があるラ・ヴァリエールはちょうど国境線を挟んでいる。つまりはトリステインとツエルプストー領がある隣国であるゲルマニアとは、開戦の口火が開かれる度に、真っ先に戦ってきた仇敵なのである。

尤もこのトリステインとゲルマニアの状態が比較的安定しているここ50年程は、お互いが殺しあうという事はないのだが、一度残された記憶と恨みは何よりも根深く、親から子へ受け継がれているのだ。

「ていうか、何でアンタがいるのよ!」

根本的な問題として、ルイズは疑問を呈した。

「私が誘った」

「はあ?」

ルイズの疑問に変わりに答えたのは、ぼんやりと本を読んでいた眼鏡の女の子だった。

「そうよ、ルイズ。私はタバサに呼ばれてきたの。あなたのことは関係ないわ」

「ぐぐぐ…」

何故、タバサが入ってきているのかは判らない。だが、基本的に独占欲の強いルイズは自分だけが受けられると思っていた修行が3人も増えたことが腹立たしいようだ。

「ま、まあ、そう言わずに…」

病み上がりの才人が寝めるが、ルイズとキュルケの睨み合いは終

わらない。

「はいはい、皆さん。そこまでにして下さい」

にゅつと白い水晶の中から出てきたのは、いつもの黒い法衣ではなく、漆黒のスーツに身を固めたアレンだった。その光景にキュルケとタバサは、目を点にしていたが、何度か見ていた才人とルイズは指して驚かなかった。

「皆さんを修行の場へと案内します。既に皆さん、始められていますので宜しくお願いします」

そういうと踵を返して、再び中空に浮かぶ白水晶の中へと滴が水面に落ちるように消えていった。その様子にあっけに取られていたが、タバサが意を決して触れてみると、自分もすつとアレンと同じように消えていった。タバサを追う様に3人も続く。

才人とルイズは得体のしれないモノに入る恐怖があったので、少しでも目を強く瞑る。体がふわつと一瞬だけ軽くなると、また再び足元に固い感触が現れた。

ゆっくりと目を開けるとそこには、

「何だよ…、この空間…」

「凄い、なんてもんじゃないわ…」

広く広大な石造りの家が立ち並ぶ、大通りだった。しっかりと組み合わされた石は、同じ石製の建築物が多いトリストインよりも圧倒的に技術のレベルが違う。いや、レベルと言うよりも根本から違うような気がした。

「あ、皆さん。来られましたね。こっちですよ」

この一週間ほどで見慣れた白髪頭の少年が先に立って案内する。通りの幅が7メートル程度の道はトリストインにはない。首都トリストニアの宮殿へと通じる大通りであるブルドンネ街でも5メートルも無いのだ。

ルイズはちよつとだけ悔しくなった。

少し歩くと、ちょうど街路の交差点なのか、噴水が設置された公園にたどり着いた。

そこでは何か大きな袋を担いだエドと、白いローブに身を固めたネギが何事か話し合っていた。

「ですから、僕の世界にはこういった理論で飛ばす物がありました
…」

「待て待て、それだとおかしくないか？」

「いえ、実はその理論は否定されているんです」

「え、マジで？」

4人には全く理解できない小難しい単語が飛び交っている。議論に白熱しているので4人が到着した事に気が付いていないようだ。アレンが二人の肩を叩いて漸く、才人達のほうへ向いた。

「よ、元気になったみたいだな」

エドが軽い感じで才人に話しかける。良く目立つ赤いコートが実に彼らしいと思う。

「ええ、おかげさまで」

才人が頭を下げる。後で自分の怪我を治したのがエドだと聞いていた才人は退院したら、お礼を言おうと心に決めていた。礼を言わ

れたエドは頭を掻きながら、簡単に言う。

「何、ちょっとした気まぐれだ」

「それよりも…、ネギ君」

アレンに促されて、ネギが喋り始める。4人には話していないがこの10歳の少年、元の世界では中学の英語教師をしていた位に頭がいい。それも他人に解説したり、説明したりできる本当の頭の良さを持っている少年なのだ。

「えっと、皆さん。皆さんにはコレを使ってもらいます」

そういつて一歩右へ動き、後ろに隠していたものを見せる。

才人はそれを見て、精巧なミニチュアだと思った。勿論、科学技術に深くないルイズ達はポカンとしていた。高い尖塔を持った城のミニチュアが入った球が中心にあり、そこから6つの管が伸び、また球があるのだ。ここまで精巧で、それでいて互換性の有る代物はハルゲギニアでは作られていない。

「これは？」

タバサが尋ねる。

「これはですね…」

「これはドライオマ魔法球！1日が24日になるっていう代物だ！」

「あ、あのエドさん…」

ネギの説明をエドが強引に奪う。

ルイズたちは説明が適当すぎて付いていけない。

もう一度、ネギが一から説明を始める。錬金術師であるエドは、

基本的に自分の研究を秘匿するために暗号で研究書を執筆する。そのためか、他人に説明することが苦手なのだ。尤も、彼の説明というか自然科学分野に関する知識はレベルが違いすぎて、理解できる人は早々いないのであるが。

「これはこちらでの1日を24日として生活できるものなんです。ですから、この中で修行すれば、こちらでの短い時間で多くの経験を積むことが出来るんです」

「あ、なるほど」

才人だけは得心が行ったようである。時間の概念が今ひとつないルイズ達と違って、才人は現代日本の男子高校生である。常に一定の時間に追われている生活をしている。そんな彼だからこそ、一番に理解できたのだ。

「でも、どうやって入るんだ」

「簡単ですよ。これに手を当てて下さい」

そう言って4人を促す。

「どうということよ？」

ルイズは訳がわからないと言った様子で尋ねるが、その目の前でシュツ、シュツと6人が次々と消えていった。

「あ、あれ？何処行ったのよ」

アレンも、ネギも、エドも。

さっきまで言い合っていた才人も、キュルケも、タバサも。いきなり影も形も消えてしまった。

才人たちがダライオマ魔法球の中へと消えていた頃。

学院長室では、秘書のミス・ロングビルが書き物をしていた。

ある程度の仕事を終えて、彼女は手を止めると、学院長であるオスマンの方を見つめた。

そのオスマン氏はセコイア製の立派な造りの机に伏せて居眠りをしている。

ミス・ロングビルは薄く笑った。学院長だけではない、少なくともこの学院の誰にも見せたことのない黒い笑みであった。

「良い夢を、学院長…」

しっかりとオスマンが眠っていることを確認すると、ゆっくりと立ち上がり、呟くように消音のための『サイレント』の呪文を唱える。

オスマンを起こさないように自分の足音を消して、学院長室を出た。

ミス・ロングビルが向かった先は、学院長室の一階下にある宝物庫である。この中で管理されている物の管理や、盗賊などからの防衛というのも、学院長の仕事の一つである。

階段を下りて、鉄の巨大な扉を見上げる。扉には、梁に使われるようなぶっとい鉄製の門がかかっている。門はこれまた巨大な錠前で守られている。

「やっ、うっね…」

ここには、魔法学院成立以来の秘宝が収められているのだ。

ロングビルは、慎重に辺りを見回すと、杖を取り出した。鉛筆くらいの長さだが、彼女が軽く振るとするすると伸びて、オーケストラの指揮者が振るような指揮棒くらいの長さになった。

ロングビルは低く呪文を唱えた。

詠唱を終えると、杖を錠前に向けて振った。

しかし…、錠前からは何の音もしない。

「まあ、この錠前に『アン・ロック』が通用するとは思ってないけどね」

くすりと妖艶に笑うと、ロングビルは自分の得意な呪文を唱え始めた。

それは『錬金』の呪文であった。誰にも聞こえないように、しかし、朗々と呪文を唱え、分厚い鉄のドアに向かって杖を振る。魔法は扉に届いたはずだが、しばらく待っても変わった所は見られない。

「スクウェアクラスのメイジが『固定化』の呪文をかけているみたいね」

ロングビルは呟いた。『固定化』の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。

これがかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続ける。

だが、酸素や窒素といった元素、元素化合物といった化学のないハルゲギニアのメイジにとっては、物体が変わっているという程度の認識であるが、それでもその変化を防止できる『固定化』の呪文は思いの外、ポピュラーな呪文なのである。

『固定化』をかけられた物質にはロングビルの掛けた、物質の素材そのものを変化させる『錬金』の呪文も効力を失う。呪文をかけ

たメイジが、『固定化』をかけたメイジの能力を上回れば、その限りではないが。

「さつて、どうしましょうか？」

しかし、この鉄の扉に『固定化』の呪文をかけたメイジは、相当強力なメイジらしい。学院長つきの秘書とは言え、『土』系統のエキスパートであるロングビルの『鍊金』を受けつけないのだから。ロングビルは、ずれたメガネを直し、何事か思案して扉を見つめていた。

そのとき、階段を上ってくる足音に気づく。

その足音を警戒した彼女は杖を縮めてポケットにしまった。

現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールは間の抜けた声で尋ねた。ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……」

「はあ…、それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日がかりですよ」

ロングビルの任された仕事に、やれやれと言った様子でコルベールは肩を竦める。彼も学院に奉職して長い。オスマンに付き合い、この部屋の掃除を手伝ったこともある。

「何せここにはお宝ガラクタひっくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしよっね」

くすりとほほえましく笑うロングビルに、優しくコルベールは言った。

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは微笑んだ。

「それが……、ご就寝中なのです」

上の階でぐっすりと寝ている学院長の顔を思い出しながら、答える。

「まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど、ご就寝中ですか」

がっくりとさつきよりも大きく肩を落す。

「あのエロジジイ、じゃなかった、オールド・オスマンは寝るとなかなか起きませんからな」

学院長に用があつてここまで来たのに、寝ているのでは無駄足になつてしまう。コルベールは起きているタイミングでもう一度来ることにした。

「では、僕も後で伺うことにしましょう」

コルベールは歩き出した。それから、ふと立ち止まり、振り向いた。

「その……、ミス・ロングビル」
「なんででしょう?」

照れくさそうに、コルベールは口を開いた。

「もし、よろしかったら、なんですが……。昼食をご一緒にいかがですか?」

ロングビルは、少し考えた後、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

コルベールは内心、飛び上がって喜んだ。だが、それを一片たりとも顔には出さない。一応は彼も常識ある教師なのである。2人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちよつとくだけた言葉遣いになって、ミス・ロングビルが話しかけた。

「は、はい?なんででしょう」

自分の誘いがあっさりを受け入れられたことに気をよくしたコルベールは、跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありません?」

「ありますとも」

「では、『破壊の杖』をご存知?」

「ああ、あれは、奇妙な形をしておりましたなあ」

顎に手を当てながら、その杖の形を思い出す。コルベールの見た感じでは到底、杖とは言えない様な独特の形をしていた事を思い出す。

その答えにロングビルの目が光った。

「と、申されますと？」

「説明のしようがありません。奇妙としか。はい」

これは本当だった。

それよりもコルベールはしたいことがあった。

「それより、なにをお召し上がりになりますか？本日のメニューは、ヒラメの香草包みですが……。なに、僕はコック長のマルトー殿に顔が利きますから、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を……」

コルベールと言えども男であり、美人の気を引きたいと言う欲望はあるのだ。

「ミスタ」

ミス・ロングビルはコルベールのおしゃべりを遮った。

「は、はい？」

「しかし、宝物庫は立派なつくりですわね」

梁のような門、手のひらには治まりきららないほどに巨大な錠前。どれも盗まれないための工夫だ。

「あれでは、どんなメイジを連れて来ても、開けるのは不可能でしょうね」

「そうですね。メイジには、開けるのは不可能かと思えます」

この学院の創立からこの宝物庫はあつたらしい。

大事な品をいくつも締まっているのだ。それを誰にも奪われないための工夫がなされている。

「なんでも、スクウェアクラスが何人も集まって、万事に對抗できるように設計したそうですね」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらっしやる」

ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「え？いや……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので……」

さっきの発言も『トリステイン魔法学院沿革史』という本を読んだ時に見つけた記述だ。真偽の程は流石のコルベールにも確かめようが無い。

「研究一筋と申しましょうか。はは、おかげでこの年になっても独身でして……、はい」

自嘲気味に言うコルベールに、

「ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は幸せでしょうね」

ロングビルは優しく囁く。

「だって、誰も知らないようなことを、たくさん教えてくださるんですから……」

更にうつとりとした目でコルベールを見つめた。

「いや！もう！からかってはいけませんよ！はい！」

コルベールはかちこちに緊張しながら、禿げ上がった額の汗を拭いた。それから、真剣な顔で、ロングビルの顔を覗き込んだ。

「ミス・ロングビル。次のユルの曜日に開かれる『フリッグの舞踏会』はご存知ですか？」

「なんですか？それは」

舞踏会と言うからには、舞踏をする会なのであるが、それが唐突に出てくる意味がロングビルにはわからなかった。

「ははあ、貴方はここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな」

それなら仕方ないと言う風にコルベールは笑う。

「その、なんてことはない、ただのパーティーです」

やたらと「ただ」のを強調して言うコルベール。

「ただ、ここで一緒に踊ったカップルは、結ばれるとかなんとか！そんな伝説がありましたよ！」

「それで？」

「コルベールの慌てながら喋る調子にロングビルはにっこりと笑って促した。」

「その……、もしよろしければ、僕と踊りませんかと、そういうことで。はい」

「喜んで。ですが……」

そこで少しだけ憂いに沈んだ表情を作る。美人がするとそれはもう破壊力抜群である。

「舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫について知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

コルベールはミス・ロングビルの気を引きたい一心で、頭の中を探った。宝物庫、宝物庫と……。

やっと、ロングビルの興味を引けそうな話を見つけたコルベールは、もったいぶって話し始めた。

「では、ちょっとご披露いたしましょう。たいした話ではないのですが……」

「ぜひとも伺いたいわ」

興味津々といった様子でロングビルが、コルベールに迫る。

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、一つだけ弱点があると思うのですよ」

人差し指を立てて、まるで言い聞かせるような調子で喋りはじめた。

「はあ……………、興味深いお話ですわ」

「それは……………、物理的な力です」

「……………物理的な力？」

問題解決の糸口を見つけたロングビルは、更にコルベールに近づく。

「どんどん近づいていくのだが、美人と一緒に居られることよりも、美人に自説が語れる喜びのあるコルベールはその事に気が付いていない。」

「そうですね！例えば、まあ、そんなことはありませんのですが、巨大なゴーレムが……………」

「巨大なゴーレムが……………？」

コルベールは得意げに、ミス・ロングビルに自説を語った。聞き終わった後、ミス・ロングビルは満足げに微笑んだ。

「そうですね……………」

コルベールの話を聞いたロングビルは、妖艶な笑みを再び浮かべた。それは学院の秘書と言うには似つかわしくない笑みであったが、一緒に食事が出る事にすっかり舞い上がっているコルベールは気が付かなかった。

舞台は戻り、今度はネギの魔法球の中。

「…みんなっ！」

シユタツとルイズが降り立つ。傍に居たのは憎き仇敵のキュルケだけだった。

「やっと来たわね、ルイズ」

「ちよつと、アンタだけ？他の皆は？」

自分を待っていたのがキュルケだけだとは随分な扱いである。

心の中ではまだ、7人を下に見ているルイズはこの扱いに怒っていた。

「…私に怒るよりも、周りを見て御覧なさいな」

キュルケに言われて気が付く。

「な、何よ！コレ！」

周りは断崖絶壁。ただ、それも切り立った自然物というよりは見事に整地されたつかみ所の無い塔の頂上だった。手すりも無く、自分の顔と桃色の髪を吹き抜ける風が弄る。

奥には見たことの無い植物が鬱蒼と生い茂る森、そしてその緑に囲まれるように、白く高い尖塔が聳え立つ城があった。

「全く、何よコレ！私なんかよりもずっと立派じゃない」

この魔法球の持ち主、ネギ・スプリングフィールドの立派さに、ルイズは自分の身の小ささを嘆いていた。だが、そんな落ち込みをチャラにする以上の面白いネタが目の前に転がっていた。

「所でキュルケ、あんた足が震えてるわよ」

「…ふ、ふん！『ゼロ』のアンタに心配されたくないわよ。これは武者震い！」

精一杯強がっているが、明かに足が震えている。勿論、それはルイズも同じだったのだが。

「にしても、ルイズ。あなた随分と遅かったわね」

やれやれと言った様子で、肩を竦める。

「あたし、待ちくたびれたわよ。他は先に行っちゃうし」

その様子にルイズは怪訝そうな顔をする。

「え、そんなに待ったの？私、そんなに居たような気がしないんだけど・・・」

「ようこそ、いらっしやいました」

言い争う二人の下へ何処からとも無く、メイド服を着た長身の少女が現れた。

「えっと、貴方は？」

唐突に現れたメイドにキュルケは名前を尋ねる。

名前を聞かれたメイドは恭しく一礼し、

「私はこのレーベンスシユルト城の管理人、チャチャでございます。本来この城は、我が主のモノなのですが、今回は期限付きでネギ様に貸し出されておりますので、よろしくお願いいたします」

「これはご丁寧に」

ペコリとキュルケが頭を下げる。こちらもしっかりと筋の通った綺麗な一礼だった。

「あたしはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツエルプストー」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

良く教育が行き届いて、礼儀の出来たチャチャの対応に、ルイズもキュルケも思わず、礼を返してしまった。本来なら貴族である彼女達はこんな事をしないのだが。

「では、こちらの魔法陣にお乗りください。何せ城までは歩くと500メートルありますので」

そう無表情にチャチャは言った。

ルイズ達が転移魔法陣に乗って行った先では、既に戦闘が始まっていた。

「どうした、お前ら！遅いぞ！」

一護の怒号が響く。背には刀は無く、素手だけで戦っているのに、刀を振り回しているシャナと夏梨を圧倒しているのだ。その光景にタバサは息を飲む。二人で戦ったとは言え、ギーシュを完膚なきまでに叩きのめした二人、その二人をまた、オレンジの少年は完封している。

それに唇を噛んで睨み返すのはシャナと夏梨だ。

「くそ！やっぱり速い！」

「うぬ、全く持って捕らえ切れておらん」

「いつも稽古つけて貰ってたから、気が付かなかったけど、やっぱ一兄は強いや」

投げ飛ばされ、空中で体勢を立て直す。本来ならここで追撃が来て、倒れ付しているだろう。それをしないのは単純に修行であって、戦闘ではないからだ。

「ならば、息を合わせて行くぞ」

遠雷のようなアラストールの声に二人は顔を見合わせる。一撃も与えていないが、一撃も与えられていない。完全に無力化されている。それだけの実力差があるということだった。

(私が『流月』^{りゅうげつ}で攪乱するから、そのうちに)

(OK。その間に私が決める！)

「はああ！」「だりやあ！」

二人で飛び出す。夏梨は水を、シヤナは炎を纏って。

夏梨の打ち出す水の塊が砲弾のように一護を襲う。だが、その無数の塊を全て拳だけで打ち落とす。

だが、ここまでは二人とも予想通り。弾けた水の塊が生んだ飛沫に隠れて、一護の視界は無くなった。

この攪乱作戦で距離を詰めたシヤナは刀を思いっきり振りかぶる。

(一撃で決める！)

力を注ぎ込む感覚、構成することで感じられる距離、威力と『殺し』の範囲、

その全てが一致する。

（強いからこそ、全力で行く！）

大太刀を飛沫の向こう、大上段に構える。

（一撃で、決めろ！）

足を重く地に打ち、背中に隠した形になった右腕に、思いつきり練り上げた力の源”存在の力”を込める。これを利用して鍛錬して、更に強く得た感覚と感触が、実践の中で繋がる。強く握った『贄殿遮那』に自身の中に入ったアラストールのイメージを重ねて、強く放つ。

「っだあー！」

大太刀の剣尖から恐るべき密度と確たる存在を持った紅蓮の炎が迸る。

その光景に危機感を感じたアレンは、傍で見ていたタバサの襟首を引っつかんで庇う。

必殺の一撃にも見えるが、これはまだ序の口。

（本命は…）

（これに紛れた…）

「追撃だろうな」

紅蓮の炎の向こう、オレンジ頭の少年が意に介した風も無く立っていた。追撃のために、肉薄していたシャナと夏梨は届く寸前だった刀の柄を、自分たちの手の上から、更に大きな手に握られていた。じたばたしても握りこまれた手は解けない。打つ手無しだ。

「…むう、降参」
「…降参」

少女二人が白旗を上げる。それを確認した一護は手を離さずに、先に二人を地面に立たせてから、手を優しく離した。

「しかし、強いな。一護」

シヤナにとって父親であり、兄であり、友であり、師でもある、この炎の魔神は普段は簡単に人を褒めたりしない。そんな彼が素直に一護の実力を認めたのだ。シヤナも嫌々ではあるが、認めていた。「強いつていうか速いんだ。お前も速く動けるようになったら、変わると思っぜ」

にっとなんて笑って、シヤナの頭を乱暴に撫でる。

少し痛くて、手を離された後の頭をシヤナは自分でも撫でた。

「一兄、私は？」

「あー、夏梨はもつと『瞬歩^{しゅんぽ}』頑張れ。鬼道は全くわかんねえから、自分で頑張れ」

乱暴な言い方だが、これは事実なのである。一護は死神としての基本戦術の内、鬼道による戦闘がまるで出来ていない。最早、才能と言い換えてもいい位に才能がない。だからこそ、剣術と拳闘、そして歩法で戦っているのだ。逆に夏梨は鬼道の出来がいい。その分、他の要素はまだ発展途上なのである。

発展しきった所で、一護を超えられるかといえば、無理な話であるが。

「お、来たか。お前ら」

「遅い！」

「どう、ここ？すごいでしょ」

3人にとっては久しぶりに見る4人の顔。その顔を見た対応はまた違っていた。

全員を揃ったことを確認して、ネギが整列させる。

「皆さん、並んで下さい」

その若干泣きそうな声に、圧されたのか9人は整列する。キュルケとルイズがどっちが、一番の方へ並ぶかと喧嘩し始めたので、ネギの涙の度合いが酷くなり、エドが二人を殴って辞めさせた。

「先に説明したとおり、ここでは1時間が1日になります。それを利用して皆さんにはしっかりと修行してもらいます。勿論、僕もですが」

「はい！」

ネギの言葉に強い返事が返ってくる。

返事を返さないのは修行のしようがない一護とアレンだ。彼らには別メニューが用意されている。意思のしっかり入った全員の返事にネギは、一護とアレン、エドの4人でこの魔法球の中、2日寝ずに考えたメニューを発表する。

「まず、才人さん」

「おう！」

「才人さんには、まず基礎体力を付けてもらいます」

「きそ、たいりよく…？」

才人の疑問に、エドが答える。

「いきなり、剣振り回したり、体術学んで生かせると思ってんのか？」

エドの小ばかにしたような言い方にカチンとくるがぐっと堪えた。

「詳しいことは、エドさんが付きますので、聞いてください。次にシヤナさんと夏梨さん」

「はい!」「おう!」

正直、彼女達も自分より年下のネギに仕切られるのは面白くなかったが、実力差を考えると致し方ない。そういった意味では理性より合理性を取るのには彼女らだった。

「お二人は、先ほど同様、一護さんに稽古をつけて貰って下さい。

一護さん、お願いします」

「任せとけ」

面倒に頭を搔く一護の傍、二人は嬉しそうに歯を見せて笑った。

「僕は3人の魔法を見ます。その代わりといっては何ですか…」

そこで一瞬だけ言葉を切る。それから、

「タバサさんには、引き続き文字を教えて欲しいんです」

「文字…?」

ルイズが怪訝そうな顔で隣に立つタバサと、目の前のネギの顔を

見比べる。

睨み付けるルイズをネギは「まあまあ」と抑えるが、タバサは彼女を一瞥しただけだった。

「あなたには関係ない」

「なあっ!？」

一言で会話は断ち切られ、ルイズは二の句が繋げなかった。そして続け様、さらに愕然とさせられた。

「ネギ」

「は、はい」

「よ、呼び捨てえ!？」

あんぐりと口を開けたルイズを余所に、二人の話は続く。

「大丈夫、それくらいならお安い御用」

二人の様子を見て才人はなるほどと思った。

自分が目覚めた時の二人。仲良さげに本を読んでいたが、そういうことだったらしい。

「そうですね。ありがとうございます」

「ん……」

「ちょっと! 字の練習って何よ!」

礼を言うネギに、さらに返すタバサ。

そのあまりに親密な二人に、ルイズは間に割って入った。

「いや、あの、ルイズさん。僕、こっちの文字がまだ上手く読み書

きできないんです」

随分とバツの悪そうな顔でネギが話し始める。

「それでタバサさんに教えてもらっているんです」

「そういうことは早く言いなさいよ！もう、何でご主人様の私に黙って」

バシン！とシャナとキュルケの手が飛んでくる。

「痛いわね、何をするのよ！」

「お前は学習しないの？」

冷たいシャナの言葉。

「空気読みなさいよ、ラ・ヴァリエール」

呆れた調子のキュルケ。

二人の言葉にルイズはぐっと押し黙る。

「あ、あのー、皆さん宜しいですか？」

一頻り騒動が終わったのを、ネギがおずおずと確認する。

「では、皆さん。お願いします」

そう言って一同は解散する。

一護はシャナと夏梨を連れ立って、別の場所へと向かう。

一通りの修行が終わる10時間後までアレンは城を出る。その間、アレンは別の事を行う。

ネギが奥の城へと女の子三人と伴に向かう。
才人は一人、残されてしまった。

「あ、えっと…」

目の前には慄然とした感じの金髪と赤コートの少年。肩にはどうやって止めているのか、小さな騎士のような人形が乗っかっている。

「エドワード・エルリックだ。んで、こっちが…」

「弟のアルフォンス・エルリックです」

エドが指さした所から声が聞こえる。だが、そこには誰も居ない。

「どっから、声が…」

「目の前に決まってるんだろ！」

イライラという調子でエドが喋る。ルイズもだが、この少年も随分と血の気が多い。直ぐにカツと頭に血が上る性質たぐなのだ。ぐいっと才人の襟首を引き寄せ、人形の前に持つてくる。

「僕がアルフォンスです」

兄とは違ったおどけた調子で人形が喋っている。その光景には流石の才人も驚いた。

「人形が…、人形が、喋ってる！」

「あ、それくらいで驚くんじゃねーよ。あいつらなんかオコジヨが達者にべらべら喋ってたぞ」

その上、喋るオコジヨまで居るらしい。

本当の意味で、この人達はレベルが違う。腕っ節もだが、何よりも心が違う。

(何せ、人間以外が喋ることに驚いてないんだから…)

才人の考え方は凡その外れであるが、エドもアルもこれ以上の問答は無駄だと思い、早速始めることにした。

「んじゃ、早速始めるぞ。ちょっとこっちに来て」

そう言つて魔法陣へと案内する。

再び、レーベンスシユルト城から移動する。

移動先は木々が鬱蒼と生い茂るジャングルだった。才人の目には見たことも無いような草や木が写っている。毒があるかもしれない、派手派手しい実や花も、遠くに見えていた。

「うわ…、なんだよ、コレ…」

「これが才人君の修行場だよ」

人形なので表情が読みにくいが、きつと喜んでいるのだろう。嬉しそうな声でアルが喋る。

「ここで修行…？」

困惑する才人にエドは鞘に入ったナイフを投げて寄越した。

若干、乱暴な投げ方だったので才人は取り損なつて、地面に落とすってしまった。

「これは…？」

更に才人は困惑の表情を強くする。

「取り敢えず、10日間。ここで生きるだけの基礎体力が、修行の最低条件だ」

エドが厳しい調子で言う。

「ここは取り敢えず、凍死の心配はない。食べられる動植物もあるし、海も近いから魚も取れる」

「凄く過ごしやすい所だよ」

「ナイフはせめてもの饞別だ。上手く使ってくれ」

「切れ味の良いのを用意しました」

エドとアルが交互に説明をする。

つまりは自給自足で生活しろと言うことだ。最も気候はそれなりに整えられ、暑いが我慢できないほどではない。一応は屋内なので雨は降らない。

「んじゃ、頑張れ」

そういうとエドが自分を困うように檻を錬成した。一見するとエドが閉じ込められたように見えるが、実際は逆だ。エドの足元には主城へ赴くための魔法陣がある。この密林へ来るための唯一の手段。それを防がれたということは、才人は戻る事が出来なくなってしまう。

それに気が付いた才人が嘔み付く。

「ちょっと、何してんだよ!」

「強くなりたいんだろ?」

鉄格子を挟んで真剣な顔が向かい合う。

「……」

「どうしても無理だって言うなら、コレを鳴らせ」

鉄格子に一箇所だけ用意された大きく湾曲した場所。そこから掌大のハンドベルを差し出した。

「これは…？」

「これを鳴らせば、助け出してやる。但し、その時点で修行は無しだ」

エドの真剣そのものの口調に才人は押し黙った。

自分より背も低く、歳も若いくせに、その金色の双眸には深く重いものがあつた。真っ直ぐに才人の黒瞳を見つめている。

「お前の世界に戻る手段も考えてやるから、大人しくルイズお嬢様の召使でもやってみろ」

嫌に『お嬢様』の部分強調して言う。

基本的にまだエドもアルも、ルイズを信用した訳ではない。6人の資本力の源であるエドはルイズに頼らなくても生きていける筆頭格である。彼は召使になる気は毛頭ない。

「何なら今鳴らせ。ま、お前の負けん気なら鳴らす気はないだろうけどな」

ふつとエドは鼻を鳴らす。その様子にくすくすと肩の騎士人形が笑った。

それだけ言うと、エドは再び魔法陣で消えていった。だが、消え

る寸前に、

「ああ、ちなみに俺ら兄弟は二人だったけど、同じ状況で1ヶ月生きたぞ」

輪郭も判別できなくなった所で、更に追い討ちを掛ける一言を告げる。

「ちなみに、10歳のときだけだな」

「な…！」

こうして才人は密林に取り残された。

「…見てろよ。絶対に生き残^{ぜって}つてやるからな！」

最後に腹の立つ一言を言い残したエドに対抗心をむき出しにする才人。

こうして才人達の修行が始まった。

だが、才人の腹は容赦なく食べ物要求する。

「その前に食べ物だな…。南の島だし、食い物くらいあるだろう」

14・LESSON START (後書き)

修行開始です。

正直、8巻でしていたアニエスとの修行が見戲に見える位にビシバシ行くつもりです。この修行方法は皆、通る道なんでしょうか。流石にいきなり雪山に放り込むのは躊躇われましたので、まずは南の島でサバイバルです。

このドライブオマ魔法球の中で、既に3日。

最初ネギに誰が文字を教えるかで揉めに揉め、沫や取っ組み合いの喧嘩にまで成りかけたが、結局タバサが教える事になり、3人の魔法の修行をネギが見ることとなった。

キュルケは一護とアレンに教えようとしていたが、二人にはにべも無く断わられた。

「まず、この世界の魔法に関する本を読んで気が付いた事があります」

難しい顔で、黒板に何事が書き連ねていくのは、魔法先生のネギである。

才人の決闘から、事態が事此処に到ったことで、一応はこの世界の身元引受人であるルイズとその一番近い学友である二人には6人も存在を明かしたのだ。

勿論、誰にもバラさないという条件付で。

二人がトリステインとは違う外国、キュルケは軍事大国ゲルマニアから、そして、タバサはハルゲギニア最大の国家であるガリア王国からの留学生であると言うのも大きかった。

嫌らしい言い方ではあるが、彼女らとパイプを作っておけば後々、有利に働くことは間違いない。ここらへんは「軍」と言う円滑に情報伝達を運ぶ組織で動いてきたエドとアルの発言が正しかったし、他の面々もそれに同意した。

「信じられないわね…」

「そんな存在が居るなんて…」

「でも、この目で見た」

三人の感想はこんな感じである。
自分たちの存在の証拠として武器や技術を見せるよりも、実演してみせた。

それを見れば、既に見ているシャナと夏梨の二人は於いておいても、他の三人の力、メイジではないがメイジと互角、いや、それ以上の力を持つ圧倒的な存在である事は容易に予想が付いた。

「…」

ルイズとキュルケが感嘆のため息を漏らす中、タバサだけは全く別の事を考えていたが。

その中に置いて最年少であるネギ・スプリングフィールド。

彼は魔法使いである。つまりはメイジ。三人を教えるのには打つてつけの存在だった。

修行の当初は、魔法理論、実践ではなく使い方とか、魔法が起きる現象や理屈について説明していた。理論を教えてもらうという事で、三人ともかなり不満そうだったが、理論を侮ってはいけなさと云うネギの言葉に圧されて、グツと我慢した。

「それは魔法使いが限定的であるということですよ」
「どうということ？」

そんな彼が唐突に話した。

覚えてたての文字を黒板に書きながら、説明していくネギ。

タバサが教えたのは簡単な文法と文字だけである。しかし、そこは天才と謳われてきた少年である。簡単な取っ掛かりだけ掴むと、あつと言う間にハルゲギニアの公用語であるガリア語をマスターしてしまったのだ。修行開始から3日たった今では、殆どルイズ達と筆談で会話できるようになっていた。

「つまりこういう事です」

図と図解を入れながら、ネギは自分の魔法体系と、ハルゲギニアの魔法体系の違いについて大雑把に説明した。

相次いで聞こえてくる剣尖がぶつかり、擦れ合う音のほかには何も聞こえてこない。

一護達のほうも上々の仕上がりのものである。

「つまりは使えるのが血、つまりは遺伝子によって左右されると言う事です」

「?」「?」「?」

三つのハテナが並ぶ。遺伝学など兎に角、自然科学については遅れに遅れている世界だ。

一から説明し出すと、それだけで日が暮れてしまう。現に今既に日が暮れている。

「腹、減ったな」

「飯にしようぜ」

そんな事を言いながら散っていた一護が戻ってくる。

肩にはぐつたりと疲れきったシャナと夏梨の姿。これもこの数日で見慣れた光景になった。

それから直ぐに食事、和気藹々と言った風でもなく、坦々と食べて、坦々と夫々が皿を洗う。

その後は、各員伴に個室が与えられているので、そこに備え付けられたベットに横になる。

エドだけは、毎夜のように図書館へと消えていくのだが、それを誰も追う気にはならなかった。

これが3日間の8人の生活リズムであった。

その夜のこと。

「うわあああああ！！」

ネギはベッドから跳ね起きた。

びっしょりと全身は冷たい汗に濡れ、息は運動の後以上に荒かった。

「はあはあ……あ、あつ……？」

「うわあ、何だ何だ、兄貴！」

余りの大声だったのか、カモまでもが彼専用に使えられた、小さなベットから跳ね起きる。

キヨロキヨロと見回すと、そこはレーベンスシュルト城に備えられた自分の部屋。家具や調度も、自分好みの安くて丈夫なアンティークを揃えた苦心の部屋である。

ネギは今の自分の状況を思い出し、安堵の溜息を吐いた。

魔法球の中で修行したのはこれが始めてではない。

頻繁に出入りを繰り返して、息をとることも多かったネギには専用の部屋が与えられている。他にも彼と一緒に修行した面々の部屋もあるのだが、これには管理人であるチャチャが鍵を掛けていた。

自分の部屋だという事が、ネギの安心感を更に大きくする。

「夢、か……よかった」

「兄貴どうしたんだ……？」

傍で寝ていたカモが薄目を開けて、心配する。

「うっん、大丈夫」

その不安げなオコジョの顔に、汗だくの顔で笑顔を作る。腕を見る。何ともなっていない。

身体を見る。五体満足の体がそこにはあった。

窓から漏れる月明かり。怖い師匠との修行中に何度も見てきた空と月だ。

「はあ……」

ネギは部屋の扉近くにあるポールスタンド型のハンガーまで寄ると、掛けてある自分のローブの内ポケットから何枚かのカードを取り出した。

綺麗な文字や模様が印字されているタロット程の大きさのカードには、それぞれ別の女の子が居る。

これはネギのパートナー、世のため人のために動く事の出来る、立派な魔法使い《マギステル・マギ》を指す上で余りにも未熟である彼を、心から支えてくれる頼もしい仲間であった。

その内の一枚を額に当てた。

空港で別れたきりの自分の姉貴分であり、叔母であるアスナがカードの中にはいた。

「テレパテイア念話、アスナさん……」

応答は無い。

このカードには対象者と念話を結ぶ機能がある。だが、その念話機能は簡単に妨害ができる程度の性能しかなく、同様に召喚機能も5〜10Km圏内という制限がある。

異世界であるハルケギニアにいるのだから、仲間のへの連絡手段が一切なかった。

「兄貴……」

そんな彼の様子を、使い魔であるカモミールは見ていられなかった。

しかし、もしかしたらということもある。

ネギは万に一つもないはずの僅かな可能性を期待し、時折こうしてカードを使っていた。魔法球の中でも、それを起点にした半径内なら通じる。

実時間で一時間おきに、こういして念話を送っているのだが、芳しい成果は上がっていない。

この結果にはネギだけでなく、カモも愕然とした。

外に出て飛び回って探知しようかとも思ったが、一日酷使した頭と体は睡眠を欲している。

「心配してるだろうな……」

「そうっすよね……、特に姉さん達は……」

カードを仕舞い、ベッドに戻ったネギは呟く。

「はあ……」

「はあ……」

半ば諦めにも似た溜息をつき、ベッドに横になるネギとカモ。ネギにはある不安感があった。

自分の中の別の自分が揺り動かされるような、そんな漠然とした感覚が体の中を駆け巡っているのだ。ここ最近は安定していたのだが、この世界に来てから異常なまでに大きく膨れ上がっている。

「おやすみ、カモくん」

「おやすみだぜ、兄貴」

気にしていても仕方が無い。

明日も早い。この空間だけで通じる目覚まし時計をもう一度セツトし直すと横になって目を瞑る。

ベッドから見上げる光景もいつもと一緒なのに違和感が拭えず、安心して眠れるようになるにはいつまで掛かるか、それはネギには分からない事だった。

「腹、減った…」

同じ頃、才人はジャングルの地面に大の字で倒れていた。

澄んだ夜空に浮かぶ月が、優しく才人を照らしている。だが、その優しい光も才人を全く癒してはくれない。寧ろ、余計に傷ついたような気がする。

ジャングルに来てから早3日。才人はこの鬱蒼と熱帯植物が生い茂るジャングルに放り出されてから碌な食事を取っていない。水だけは小川を見つけたので、困っていない。

「くそ、あの鎧…」

森に入って、木の実を取ろうとすれば鎧に追いかけられ。

海に入って、魚を取ろうとすれば魚には逃げられ。

漸く取れた魚も、火が熾せなくては食べる事ができない。生で食べる事もしてみたが、とても食べられるような味では無かった。不味いだの、味が無いだのを通り超えている。

再び、水以外何もない腹が音を立てて、自己主張する。

傍には木の枝と、葉っぱで拵えた寝床がある。最初に浜にたどり着いた時、造ったのがコレだった。

とても簡素な作りではあるが、月光くらいなら遮断できる。

「寝よ…」

起きていても体力を使うだけである。空腹の状態で何時までも起きているのは得策ではなかった。素直に目を瞑ると、今日も鎧に追いかけられ、木の実が取れなかったことが悔やまれた。

翌日、才人が目覚めてみると、体が動かなかった。

食事を取らず、水だけで生活してきた彼の精神と体力は限界だった。

「…なんで俺、こんな事してるんだろ…」

才人の疑問は当然と言えた。

何故、自分はこんなバカみたいな事をしているんだろう。

正直な話、エドは逃げ道を用意してくれていた。それがどんな道になるかは才人は知らないが、これを選んだのは自分である。誰かを恨んだりはしていない。恨むとすれば、安易にこちらの道を選んではまった自分を恨んでいた。

「はあ…」

動かない指先をアリが這うのを虚ろな瞳で見ている。泥だらけ、砂だらけの指は痛みがあるが、誰も才人の脳の声には応えてくれない。

そんな時、ガチャン、ガチャンと鉄の擦れ合う音がしてきた。

この3日で何度も聞いてきた断末魔の音。

燦燦と降り注ぐ太陽を見つめる虚ろな視線を、棘を生やした鎧が遮った。手には相変わらず、大きな剣が握られている。

「…殺せよ」

才人はどうでも良くなった。

どの道、元の世界に変える手段など無い。かといって彼らと轡を並べて戦える訳が無い。彼の言葉は選択肢を防がれた末に出た、消極的な自殺だった。

短く言つと、再び目を瞑る。何時来るかも判らない剣が自分に目掛けて振り下ろされる時を待つて。

だが、幾ら待てども痛みもしなければ、風を切る音すらしない。

「……？」

代わりに香ってきたのは、たんぱく質が良く焼けた香ばしい匂い。幾度もかいた焼き魚のおいだ。

動かない体の中で、首の筋肉に鞭を打つて、匂いのする方を向く。そこでは大きな鎧が、火を熾して魚を焼いていた。大男の鎧が、細やかな作業をしているのは見ていてコミカルだった。思わずくすくすと笑ってしまう。

その音に反応したのか、鎧がガチャンと音を立てて振り返り、才人と目が合う。その目には虚ろな差人の目にも心配が浮かんでいる事が、しっかりと判った。

「これは…？」

振り返る序でに、鎧は焼けた魚を才人に差し出す。香ばしい香りが才人の鼻腔をくすぐる。

「食べていいのか？」

鎧はまたガチャンと音を立てて頷いた。

頷き終わらない内に、才人は魚に被りついた。塩もしていなければ、醤油も無い。無い無いづくしの魚ではあったが、3日ぶりの食事は才人の腹を刺激した。

「う、うう…」

思わず泣いてしまう。その才人の顔を鎧は嬉しそうに眺めていたが、やがて森の中へ消えた。

「あいつ、何なんだ…？」

自分を追つてみたり、食事を振舞つてみたり。そんな鎧の行動を才人は怪訝そうな顔で、消えていった森の闇を見つめていた。食事が取れたことでいくらか精神が安定した。

「そっか、そっだよな…」

もう一度、寝転がる。確りとした視線の先には、またしつかりとした太陽があった。

そして己の行動を恥じる。

木の実が取れない？

魚が取れない？

その程度の事は諦める理由にはならず、寧ろ、自分は取るうともしていなかったのだという事を。

思わず口をついて出た言葉だったが、鎧に向かっていった言葉を撤回したかった。

鎧の残した魚を付いていた串は尖っていた。勿論、最初から先端

が尖っている木など存在しない。傍に散らばった削りカス。ナイフで研いだのだという事は容易に予想が付いた。

渡されたナイフは魚を捌いたり、あの鎧と戦う為のものなのだろう。というか、10日も生きなくてはいけないのに、果物が取れない訳がない。

魚を手づかみで取る理由はない。木を削いで槍を作ってもいいし、そうすれば火だつて熾せるかも知れない。何の工夫もせずに、何の行動も起こさずに、死のうとしていたのが恥ずかしかった。

「よし、あの鎧をどければいいんだな…」

そうすれば取り敢えず、果物が取れるかもしれない。

鎧なら自分の腕力でも突き抜く事はない。だが、体勢を崩して動けなくする事くらいならできるだろう。出来なくても、出し抜ければ十分、木の実は取れる。

ナイフの柄を強く握った才人の左手の甲が、淡く煌いた。

その頃、外も夜であった。

ルイズ達の授業が終わり、夕食の時間が終わってから始めたのだから、仕方ないと言えば仕方が無い。アレン達の食事は勿論、食堂からルイズたちが代わりに頂いてきた。

「ん、いい月ですね」

アレンが外に居るのは、単純に修行の相手がいないという事と、

彼の食事量が半端ないことが原因だ。ダライオマ魔法球の中でも、時間が流れれば腹は減るし、眠たくもなる。彼を置いたままにしておけば、一日が24日になるあの中では、72食も食べる事になってしまふ。アレンの一回一回の食事の量を考えると仕方ない事だった。

「仲間はずれにされましたけど、鍛えておきましょうか」

そういつと諸肌を晒し、ルイズの部屋の中、一本足立ちの椅子の上で逆立ちで腕立て伏せを始めた。しかし、直ぐに飽きてしまい、外に出る事にした。面倒なので、窓を大きく開け放つて、飛び降りた。小さな月のように煌く金色のティムキャンピーが、アレンの後を追って飛び出した。

巨大な二つの月が、魔法学院の本塔の外壁を照らしている。

「そういえば、景色を楽しんだことなんて何時以来だろ……」

夜の学院はまた変わっていて、幻想的だとアレンは思った。

黒の教団に入ってから、碌に景色を楽しむ事もしていなかった彼にとって、こうやって落ち着ける場所と言うのは何物にも替え難い価値がある。これで好きな女の子の一人でも居れば、盛り上がるのかもしれない。

そんな幻想的な二つの月の光が、壁に当たり、人影をくつきりと浮かび上がらせていた。

最近、ちまたの貴族たちを騒がしている『土くれ』のフーケであった。

「ちい！」

フーケは足から伝わってくる、壁の手触りに舌打ちをした。

「さすがは魔法学院本塔の壁ね……」

彼女が立っているのは魔法学校本塔の5階。

学院長室の直ぐ下で、図書館の上。昼間、コルベールとロングビルが話し合っていた学院の宝物庫がある、ちょうど外壁だった。そこに彼女は魔法で地面と平行に立っているのである。

「物理衝撃が弱点？こんなに厚かったら、そこらの魔法じゃどうしようもないじゃないの！」

足の裏で、壁の厚さを測ることは『土』系統のエキスパートであるフーケにとって、造作もないことである。だが、感じて測った石壁の厚さはかなりのモノがある。

「確かに、『固定化』の魔法以外はかかってないみたいだけど……」

更に少し歩いて適切な位置を探す。

フーケは苦い表情を含ませ、それでもなお薄い部分はないか調べる。少なくとも薄い方が宝物庫を破る労力と時間が短縮できる。誰にも見られない事がポリシーであるフーケにとっては大事な問題だった。

「これじゃ私のゴーレムの力でも、壊せそうにないね……くそっ
！！」

やはりというべきか魔法学院の宝物庫の壁はどこもブ厚かった。付け入る隙が全く持って見つからない。

「やっとここまで来たつてのに……ちっ！！あのハゲ、役に立たないわね」

フーケは歯噛みをした。

目的のお宝は手の届く所まで来ている。ここで諦めては盗賊の名折れだった。

「かといって、『破壊の杖』を諦めるわけにやあ、いかないね……」

フーケの目がきらりと光り、そして腕組みをしたまま、じっと考え始めた。何事か良い手は無いかと思案するが、全く持って見つからない。

「仕方ないね、ここはもう少し情報を集めるかね」

今後の活動方針を決めたフーケは魔法を解除し、地面に降り立つ。そこでフーケは、ふいに誰かが近づく気配を感じた。

「ん？誰か来たみたいね。ったく良い子はお寝んねの時間だったのに」

フーケはそう呟くと、身軽な動きですぐに中庭の植え込みに消えた。

夜から体を酷使し、学院の周りを走り回っている内に空が白み始めた。

流石に月が綺麗だという理由で外に出てみたが、外は肌寒く到底諸肌では耐えられなかった。

「998…、999…、1000！」

アレンが日課と成っている筋トレをちょうど1000回終わらせた時、窓から朝日の軟い光が差し込んできて、アレンの目を刺した。眩しさに思わず、バランスを崩して使っていた椅子から転げ落ちた。机に引っ掛けていた自分の制服も纏めて、床に落ちる。

「いたた…」

流石に鍛えている人間と言えど、石の床に頭をぶつければ痛い。ペラリと服から1枚の写真が零れ落ちてきた。何時の間に入っていたのか、それとも入れていたのを忘れていたのか。随分と懐かしい写真が出てきた。

「そういえば、僕の写っている写真ってこれくらいですよね…」

大きな旅を終えて、再び教団に戻った時に、所属するエクソシスト全員で取った写真。

ムカつく顔も、頼れる顔も皆が揃っている。

「心配してるだろうな…」

箱舟を抜けた先はまさかの異世界。

特に教団を抜ける時に、抱きしめた少女は泣きそうな顔はいくら頑張っても忘れられない悲しみを浮かべていた。「いつか戻る」と言ったその言葉も彼女の心を苦しめているかもしれない。

そう思うと気が気でなかった。早い内に元の世界へ帰りたい。それが本心だった。

「そういえば、そろそろ時間ですね…」

時間制限の10時間。ダイヤオマ魔法球での10日間は皆にどんな成果を齎すのか。

まるで子の成長を見守るかのような親の顔で、アレンは再び戸を開け入っていった。

「っへへ、やったぜ…」

鎖されていたジャングルで才人の歓声が上がった。

此処に来てから付けていた木の傷が10個に増えていた。日が昇るたびに付けていたこの傷はこの間、才人が生きていたという証拠である。

「10日間生き残ったぞー！」

着ていた青のパーカーはドロドロでボロボロ。何度も何度も食料を採る為に鎧と格闘した結果だ。ナイフなど扱うのは初めてだったが、何故か体が覚えているかのように動けたのだ。

尤も相手も去るものであり、素手で才人は何度も殴られた。結構重い拳で何度も気を失いかけたが、持ち前の負けん気と生きたいという希望と執念で踏ん張り続けた。

「魚も美味かつたしな…」

4日目の朝。鎧が食わせてくれた後の残骸を見て、ナイフで木を削ぎ、槍を作ってみたりした。こうすると狙いが付けやすくて、一撃で仕留めて逃がす事も無い。

火の起こし方もその残骸で気が付いた。焼いて食べる事ができると、海水を蒸留して真水を作ったり、生のままで食べていた木の実や魚も美味しく頂けた。

この10日で才人はそれなりのサバイバル術と、それを行うだけの体力を身に付けたのだ。

多少なら全力疾走しても息が切れる事は無い。

高校の体育の授業は、興味のあるスポーツしか参加していないサボり魔だったため、体力にかなり不安があったが、木の生い茂る密林を走り回り、素早い魚を捕らえ、鎧とナイフを使って格闘している内に、その他の身体能力もそれなりに向上した。

「生き残ったか！」

「おう！」

朝飯の魚を焼いていた所へ、10日ぶりに聞いたエドの鋭い声が響く。

その言葉に力強い声で答える。その目にはしっかりとした光が宿っている。

「随分と力をつけたみたいだな。10日って言うのも密度を濃くすれば十分な成果がある」

エドの言う事は尤もだった。そもそもこの魔法球は修行や修練の為に作られた魔法具である。だからこそ、様々な気候や立地を考えられたオプシヨンパーツが付いているのだ。

「これで取り敢えずは、スタートラインに立つただけだ」
「はい」

エドはあまり人を褒めない。

だから、この言葉は彼なりの精一杯の激励の言葉なのである。それに10日やそこそこで年単位で鍛錬してきた彼らに敵う術もない。才人もそれは自覚していた。一朝一夕の付け焼刃で、無いよりはマシというその程度の扱いだが。

「これから武器の扱い方とか学ぶことは多いぞ」

目の前に居る小柄な少年は素晴らしい圧力を発している。このサバイバルを通して、才人もそれなりに人を感じられるようになってきた。

「ハイ」

「おーし、じゃ戻るぞ！」

そういつと10日前に遣ってきた転移魔法陣の前にやってくる。

そんな時、またガチャンガチャンと音が遣ってきた。直ぐ近くに視認できる程までに近づいて来た時、才人がこの10日で何度も見ている棘だらけの鎧が大きく跳躍した。

ドシンと重い音を立てて、才人とエドの間に着地する。その振動に才人は思わず腰を抜かしてしまった。手には昨日まで見ていた大きな剣は無いが、それでも後半は色々と組み手に近い事をしてきた。

何度か死にそうになった事もある。
そうそう受け入れられようはずもない。

「ちょ、ちょ、なんでこの鎧が此処にいんだよ！」

狼狽する才人に、エドはしれつと言ってしまう。

「お疲れ様だったな、アル」

「もう、十日間も喋れないって大変だったよー」

鎧の庇を開けると、そこにはエドの肩に乗っていた騎士人形が頭の中に貼り付けてあった。しかも、その鎧は流暢に人形と同じ声で喋り始めた。

「ど、ど、どうなって…？」

「いや、一応修行だし、死んだら不味いつて思って監視」

鎧の中から人形を取り出しながら解説するエド。その顔にはいたずらが成功した時の子供のような笑みがあった。

「じゃ、じゃあ、何で死ぬような事したんだよ！」

「バカか？10日しかないんだよ、体術とか、ナイフの使い方とかも盛り込まなくてどうする？」

再び鎧から人形になったアルは大きく跳躍して、才人の肩に飛び乗った。

それから耳元で才人の反省点を列挙していく。あまりのダメ出しの数に、来た時と同じようになきそうになった。

「よし、戻るぞ」

魔法陣を覆っていた鉄の檻がエドに触れた瞬間、ガラソランと耳障りな音を立てて崩壊してしまった。分解されたわけでもなく、ただ単純に組み立て終えた完成品が外れるような感じだった。

才人は此処に来てから驚きの連続。人が空を飛んでみたり、自分が召使のように扱われたり、何かに付けて驚いてきたので、この程度では動じなくなっていた。

10日間過ごしたジャングルに名残を惜しみながら、才人は久しぶりのレーベンスシユルト城へ戻った。

「こんな感じで大丈夫なのかな……」

「うむ、一護に言われた通りのことが確実に出来ておる。これで問題ないだろう」

シャナはこの10日間、兎に角何も考えずにぶっ続けで一護と戦っていた。

彼に高速歩法である「瞬歩しゆんぽ」の基礎理論を習い、後は自分の力になるように戦闘外でも鍛錬してきた。シャナを始めとするフレイムヘイズの最たる弱点は、肉体的な素質が向上しない事である。つまりはいくらアレンのように筋トレを行おうとも、筋肉が付くわけでもなく、腕力があがることは無い。

だからこそ、技術を磨く。

その意味では死神の持つ戦闘技術というのは、新鮮なものだった。

「へえ、中々だな」

死神の力の源である霊力を、そのままフレイムヘイズの力の源泉である「存在の力」に置き換えるとシャナにも使える。その発想の転換には皆が管を巻いた。

その修行相手だった一護が出来の良さに、思わずため息を漏らした。

実を言うと、彼は即興の感覚だけで戦ってきた事が多い。剣を振る鍛錬をした事が無ければ、鍛えた事も、フレイムヘイズに成るために鍛えてきたシャナに比べれば圧倒的に時間は短い。

「一護は教え方が下手だった」

「おい、そういうことを言うんじゃないよ」

だからこそ、かなり教えるのが下手だった。これは妹も認めるところでもある。

原因のもとを辿ると彼を教えた師匠たちに問題があるのだが、こちら辺は黙っておいた。何せ死神の業界では屈指の実力者達だ。まだペーペーの二人に比べると影響力は大きい。

世話になった事も大きいので、下手に侮辱するような事は言いたくなかったのだ。

「一兄、私も鬼道頑張ったよ」

傍でガッツポーズをする夏梨。体格的に不利な彼女は術法である鬼道をがんばってきた。普通は詠唱しないと発動しないのだが、それを詠唱なしでも発動できるように修練を重ねた。

その結果、80近い術を即席で発動できるようになった。元々、才に溢れるのだが、この成長は異常ともいえるほどに早かった。

「うっし、終わり。戻るぞ」

ハルゲギニアの魔法というのは神学の要素が強い。

この修行に入る前に読書好きであるタバサに頼んで、図書館の本を何冊か借りて読んでいたネギは、根本から違うこの魔法体系に大いに驚いていた。

そこでネギは魔法を使って戦う、つまりは魔法を効率的に使う方法を3人には教えたのだ。

ここら辺は基礎魔法を誰よりも得意とした天才少年の力が生きた。

その甲斐あつてか、キュルケとタバサは実に力をつけていた。

それぞれが得意とする火の魔法と風の魔法、その使える回数が今までに比べて大きく増えていたのだ。基礎呪文になると、一日の休息と行動内で限界まで使っても簡単に倒れる事は無かった。

だが、

「あーもう！何で成功しないのよ！」

一つだけ例外があつた。

ルイズである。

同じようにネギの授業を受けていたのだが、結局、起こる事といえは爆発ばかり。

どんな呪文を唱えても結果は同じ。

ドカン、ドカンと爆発しかない。

この結果についてはネギも大いに首を捻っていた。

「変ですね…、何で爆発するんでしょう？」

「私達は確実にレベルアップした」

一緒になってタバサは考える。自分もレベルアップしているのにルイズだけが効果が表れ無いというのは一体どうということなのだろうか。

「『ゼロ』のルイズ、あなた、こんな優秀な先生に付いたのに何の成果も上げられないなんて…」

ヨヨヨ、とまるで姉が妹を心配するように崩れ落ちるキュルケ。一回一回演技つばいが、本心である。キュルケの言う事は最早憐れみすら混じっている。

ライバル、といつても一方的にルイズが思っているだけであるが、そのライバルにここまで言われたのが相当悔しかったらしく、シユンと沈んでしまう。

「…私って、やっぱり才能がないのかしら…」

「そんなことはありませんよ」

ネギが優しく反論する。その力強い声にルイズは今にも泣きそうな顔でネギを見た。

そんな慰めの言葉は何度も聴いて来た。けども、実際は適当に言っているだけ、自分も言われているだけだと気が付いた。だからこそ、そんな事をいう実力者であるネギが少し許せなかった。

でも、違った。

その子は凜々しく、朝日を受けて煌いていた。

その言葉は嘘偽り無い、心からの言葉だった。

「『努力したからって言っても、それが叶う事はない。けども、叶える為には努力するしかない』」

誰かの言葉を伝えるように、空を見上げながら言う。

「ここで諦めたら、それで終わりです。僕ももつと頑張りますから」

そう言ってルイズの手を握る。10歳とは言え凛々しいその顔。ルイズは自分を真っ直ぐに見つめるその顔に思わず顔を赤くしてしまった。

「ネギ先生は本当に良いことをおっしゃいますわ〜」

そう言ってネギの手をルイズから剥がし、逆にネギを真っ直ぐ見つめるのはキュルケだった。

「どうですか、これから私に付きっ切りでコーチなど…」

オマケに10歳の少年に対して危うい事まで言うてくる。

「如何でしょうか?」

「あ、あ、あの…」

(本当に兄貴は女関係全然だな…)

艶っぽい瞳に自分が左右対称に写っている。思わぬ展開にネギは頭が付いていかず、目を回しだした。そんなネギをカモは口に出さずに心配する。

「ツエルプストー! アンタ、何朝から盛ってんのよ!」

「あ〜ら、アンタの色気じゃ盛るのもできないでしょ?」

つんと澄ますキュルケの胸のポリウムは、ルイズと比べて一目

瞭然だった。そして、それを見た男がどちらになびくかという事も。

「…ふ、ふん。本当に好色で慎みが無いわね、ゲルマニアの女は…」
「あゝら、慎みばかりで恋人を取られ続けているのは、どこのお方かしら？」

この二人の両家の因縁は戦争だけではない。

ラ・ヴァリエール公爵家の主人は、何かにかけてツエルプストー家に恋人を寝取られているのである。この原因は、決してツエルプストーばかりではなく、ラ・ヴァリエールの方にも問題があったりするのだが、その辺りの状況はルイズには関係ない。

「ムツキー！」

怒り狂うルイズと、簡単にあしらうキュルケ。

二人の力量差は圧倒的にキュルケのほうが上だった。

「何、やってんだ。ホント…」

「大方、予想は付く。人を恐れないのは素晴らしいが、限度があるぞ。ツエルプストー」

そんな二人を見て、肩を竦めるのは年長者の二人。

「あら、焼いてるの？一護にアラストール？」

「焼いてねえよ」「うむ」

ずっとシャナのペンダントを手に持ち、一護の首に逆の手を回す。キュルケの媚のある言葉に、棘棘しく冷たくあしらう二人。それを聞いている妹二人はとてでもないが気が気でない。また再び、恨みがましい視線でキュルケの、主に胸を、睨みつける。

「胸が大きいのを威張らないで欲しい」

「絶対に、譲らない！」

「…」

その視線にもう一人入っている。

そんな言い争いをしている間に、エドとアル、そして才人が戻ってきた。

才人の体も服もボロボロだ。その姿を見てルイズが叫ぶ。

「全く！どんな事してきたのよ！」

「いや、まあ、サバイバルを…」

若干ヒステリックなルイズの叫びにバツが悪そうに才人が答える。

「ホント、そんなんじゃ外も歩けないじゃない！」

「だから、ごめんって…」

「そういえば、此処って外より時間の経過が早いよね…？」

謝る才人を横目にルイズが弾かれたように気が付いた。

ネギに顔だけ向けて確認を取る。

「は、はい。そうですよ。外はまだ夜が明けたくらいだと思います」

「そう…」

何事か考え込むルイズ。そして唐突に言い放った。

「じゃ、今日は虚無の曜日ね。街に買い物に行くわよ！」

16・end of lesson (後書き)

修行完了です。

修行のシーンなどは各作品を参考にさせてもらいました。特に才人の修行は「鋼の錬金術師」の6巻の最中、イズミと伴にした無人島でのサバイバル修行を元にしています。シャナは7巻から8巻の守護の修行。エドとアレンは特別していませんが、エドはネギの所蔵図書から武器の本を読んでいます。アレンはずっと筋トレです。

勿論、これで才人が強くなっただけではありません。単純に負けん気と生活能力が育っただけです。武器の扱い方とかはまだ素人で、これから鍛えられていきます。そういった修行というのをちゃんとクリアしてこそ、才人にも戦える力が備わっていきます。

取り敢えず、ガンダールブの力を使った戦いとして、まずはギーシユとのリターンマッチを考えています。

ネギは相変わらず、天然のジゴロです。

好きな人、大切な人が居るシャナと夏梨にはいまいちですが、今後とも女性が出てくるたびに、キュンと来る様な事を言ってくれと思います。

17・the sword and legendy

「もう、ホント、何もかもが理解の外よ…」

そんな事をばやくのは、キュルケである。

場所はトリステイン王国最大の街、王都トリスタニアである。
ルイズが「才人に服を買う」と言ってから、ものの3分ほど。その王都近くの門に着いていた。本来なら馬で2時間は掛かる様な距離を一瞬にして移動してしまった。

「あの装置、私達には理解できない」

修行場であつたドライオマ魔法球から出た一同は、アレンの案内で箱舟のトリスタニア付近に設置された扉から出た。最初は怪訝な顔をしていたルイズ達だったが、目の前に現れた石造りの街並み、遠目に見える尖塔は紛れも無く王城のモノであつた。他人の言う事は理解できなくても、自分の目で見た事は確かに信じられた。

「なによ、なによ…。私なんかよりよっぽど魔法使いじゃない…」

はしゃいで、呆れているキュルケとタバサの後ろ。ルイズは、自分の、一応は使い魔である7人に大きく自分が水を開けられている事を実感していた。

「まずは、銀行だな。才人、ついて来い」

「あ、はい」

「僕も行きます」

エドに促されて銀行へ向かう、才人とネギ。

まずはお金が無くては何も始まらない。という訳で銀行に預けてある莫大な資金の一部を取りに4人で行ってしまった。

文字が一番読めるネギの存在は非常にありがたいものだった。

何せ、まだネギとシヤナ以外の面々はマスターしたとは言い難い状況なのだ。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

それを追いかけるのはルイズ。

一応、貴族ではない彼ら、平民が銀行にお金を預けられるほどの資産があるわけ無い。そう考えていたルイズは自分も、公爵家である本邸から毎月送られて来るお小遣いを引き出す為に、着いていった。

その一方で、お金を全く使う機会に恵まれなかった3人はというと、

「この世界じゃ、CDもDVDも無いだろうし…」

確かに、この中世欧州のような石造りの街並みに、電子機器をふんだんに使った、現代技術の粋が存在しようはずはない。音楽が大好きな彼女にとって、これはある意味、拷問にも等しかった。

ネギや兄と一緒に歌ったりはしているが、やっぱり生の歌が聞きたいのだ。

「ま、何かあるでしょ。いこ、シヤナ」

「あ、ちよっ、ちよっとな夏梨」

無いものを強請っても、仕方が無い。

夏梨がシヤナの手を取って、走り出す。

一番の大通りといっていた、この王宮に通じるブルドンネ街も道

幅は5メートルも無い通りだ。唐代の長安や、奈良期の平城京、ローマ帝国のコンスタンティノープルと比べると、かなり狭い。狭い狭いと嘆かれる東京の大通りでも、歩道だけでこれくらいはあるだろう。

案の定、ワクワクと好奇心でいっぱいだった夏梨は、直ぐに人にぶつかりそうになる。

「迷子になるなよ」

手をメガホンにして、小さくなっていく二つの背中に、心配する一言を一護は送った。

「ったく…。ま、大丈夫だろ。さて、こっちはどうするかね」

残ったのは特に目的も無い一護とアレンとキュルケとタバサの4人である。

何となく着いてきた4人。目的も無いので、「する」事に迷ってしまった。うーんと考え込み、4人の間を何とも言えない空気が支配する。

その支配に対するかのように「ぐー」っとお腹の音があった。

「おいおい、アレン。どんだけ食べるんだよ」

発信源を隣に居た銀髪の少年だと思った一護は、茶化すような視線を向けた。その視線に対して、冷静にアレンは返す。

「え、やだな。僕じゃないですよ。一護さんじゃないですか？」

「いやいや、俺じゃねーって」

そんな軽口を叩きあい、ワハハと笑う黒服の二人。そんな中に意

を決したように、タバサが手を挙げた。3人、6つの目の視線が赤い縁の眼鏡の奥、青い目と交差する。

「…今の私」

かなり恥ずかしそうに言った。普段から無表情で、感情を表す事が少ない彼女の赤みの差した顔は何とも可愛らしいものだった。これには付き合いの長いキュルケも驚いたようで笑っていた。

「あなたのそんな顔、見るの初めてよ」

「そういえば、まだ朝ご飯食べてませんでしたね」

普段なら、アルウィーズの食堂で食べるのだが、修行を終えて出てきてから直通でやってきたので、食事を取っていないのだ。準備不足にやれやれと言った様子で4人とも頭を掻く。

「解った。まずはメシだな」

一護の言葉に誰からとも無く歩き出した。目的地はまず飯屋である。

そうは言うものの、まだ時間は早い。日は昇りきっているが、まだ昼には及ばない。どこの店もまだ準備中なのか、戸を堅く鎖していた。おまけに市には遅すぎる。何とももどかしい状況だった。

「やっぱ、時間が早いか…」

「…ごほん」

ふらふらと空腹で倒れそうなタバサ。さっきからあっちへフラフラ、こっちへふらふらしている。今にも人と正面衝突しそうで危ない。ぶつかつた人が気の良い人なら未だしも、荒くれ者に当たった

ら、また一騒動だ。それを避けたかったアレンは彼女を負ぶってやる。

彼は細身の体であるが、実際はしっかり鍛えこまれているので、見た目よりもがっしりしている。タバサ程度の体重なら十分に支えられた。

「優しいんだな、アレン」

「いや、養父がこうやってくれましたから」

アレンは顔を薄く染める。自分と養父であるマナ・ウォーカーの思い出を浚いながら、昔語りの一つでもしたくなった。だが、折角これから食事だというのに、重たい身の上話は相応しくないと思っ
て、それ以上は言わなかった。

「そつか、優しい親父さんなんだな」

「ふふ、素晴らしい方だったのね」

一護とキュルケ。二人も自分の父親の肖像を思い出してみる。それは彼の背で話を聞いていたタバサも同じだった。

「あーダメだ。俺の親父のいいところが一つも見つからねえ！」

必死になつて探していたが、どうにも父、黒崎一心のいい所が見
つからなかった。街医者としての腕前は確かにあるし、妻に対する
愛も深い。そこは息子である一護も夏梨も、認めている。

だが、こと父親という評価に限れば、どうにも良い点が見当たら
なかった。

「まあ、いいじゃないですか」

呻きだした一護を制するように、アレンが話を打ち切った。打ち切った所に丁度良く見つけたのは、ナイフらしき刃物と、先が三股に分かれたフォークの看板。それを店先に掲げた、食事処だった。

見ればそれなりに人が入っていて、何人かの目の前には色とりどりに飾り付けられた料理があった。

「じゃ、ここでいいか」

一護が何気なしにそんな事を言ったので。

顔には一ミリも出していなかったが、既に空腹の限界だったアレンがタバサを担いだまま、翔ける様にして店に飛び込む。それを追うような調子で、路地に残された二人が入ってきた。

「店員さん、メニュー持ってきて」

いきなり現れたマントを付けた少女、貴族を負った銀髪の少年に店員らしい若い女性は、恐る恐るといった様子でメニューを差し出した。またこの席に座ったのはオレンジの髪に黒衣の青年と、炎のような赤い髪を持った貴族だった。更に恐怖心を煽る。

「えっと、こちらに…、なります…」

ぱっとひったくるようにして、アレンがメニューを奪いとる。そして、ざっと一瞥。

長ったらしい名前が並んでいて、何とも読み上げるのが面倒だ。そう思ったアレンは、読んでいたページを店員に向けると、

「この見開きに書いてあるのを全て。とりあえず全部、4人前で」

そう宣言したのだった。

銀行でお金を下ろし、懐がそれなりに重くなった4人にして5人は服屋へと着ていた。

エドとネギの一回に引き出した金額に、ルイズと才人が驚いたのは言うまでも無い。何せ自分の一ヶ月分のお小遣いが、悲しくなるほどに多額だったのだ。

眩く光る金の光沢に、才人は目を回しそうだった。

4人が入ったこの服屋は先日、アレンも一緒にやってきた服屋である。店長である、立派な口ひげを蓄えた中年の男は、入ってきた四人を見るなり、

「やや、エドワード様に、ネギ様ではありませんか！」

などと言い出したので、才人もルイズも慌ててしまった。後ろには立派なマントを付けた貴族が控えているのである。それを無視して使い魔に話しかけるなど、ルイズにとっては言語道断だった。

散々、シャナに叱られても、まだそういった根性が抜け切れていないのであった。

「おう、服屋のおっちゃん！」

「こんにちは」

後ろで静かに燃え上がるルイズの怒りなど、意に介している風も無く、二人は店主と喋り始めた。

「それで、今回はどういったご用件で？また、服を仕立てまじょうか？」

矢鱈と低姿勢な店主。その態度に、嫌そうな顔でエドが言う。

「おっちゃんよ、『様』付けも、そんな低姿勢も辞めてくれって言うたろ？」

「そうですよ。恥ずかしいです」

「とんでもございません。お三方のお陰で私は救われたのですから」

今にも感涙にむせび泣きそうな勢いだ。

実は、前回三人が来たとき、この服屋は倒産寸前だったのだ。この時代、布の原料になるのは綿や絹であるが、大規模農業も工場制手工業も成立していない。だからこそ、平民は服を何度も使いまわし、貴族は服で着飾る。ある意味では宝石以上に服があるというのは、一種のステータスだったのだ。

そんな訳で貴族がまず来る事の無い首都の服屋は倒産寸前だったのだ。生地を扱っただけなら、未だしも被服加工しては、労力も掛かってしまい値段に釣り合わない。

「本当にありがとうございます」

思いつきり頭を下げる店主。それにはエドもネギも、肩に乗っていたアルも戸惑うばかりだった。

倒産寸前だった、この店にぶらりと入った三人。まだ物価も分かっていなかったで、全員の服を買う時にかなり過払いになってしまったのだ。おまけに「お釣りはいらない」などと言うのだから、かなり潤ってしまった。そうして危機を脱し、今に至るといふ訳である。

「ま、いいや。とりあえず、今回も服を仕立てて欲しいんだ」
「どちら様のでしょうか」

エドが商談の話を始めると、途端に仕事人、商人の顔になった。

「後ろの黒髪の奴だ。名前はサイト」

そこで漸くルイズと才人の存在に気がついた。ルイズがマントを付けた貴族だという事にも。

「やや、これはこれは貴族様。初めまして」

自然になるようにとの演技ではなく、あからさまに素で今気が付いたという店主の態度は、かなり腹立たしかったが、

「ふ、ふん。この使い魔の服を仕立てて頂戴。一心、貴族の従者というのに相応しい格好にね」

若干、怒りでしどろもどろに成りかけたが、最初から頭の中では決めていた事を言った。

「ルイズ、いいのかよ」

「何が？」

才人の疑問にルイズは慥然と返す。

「服、貰っちゃっても」

「良いに決まってるでしょ！主人の気持ちぐらい受け取りなさい！」

無論、ルイズの「主人の気持ち」というのは、才人が使い魔としての自覚が出てきたという事を褒めているにすぎない。だが、額面どおりに受け取ってしまった才人は、ちよつと感動してしまった。

「へへ、ありがとうよ」

「では、こちらへ」

そう言つて台の上へと上がらせる。直ぐに巻尺を取り出し寸法を測つていく。なれた手付きの店主は測つたサイズをすらすらとメモしていく。その様子を憚然とした様子で見るのはルイズ。

興味の無かつた二人は、別の事を考えていた。何事か話していたが、ルイズの耳には入らなかつた。

「終わりましたよ」

店主の言葉に、才人は台からゆっくり降りる。

「仕上がりは一週間となっております。出来ましたら、学院宛てに送りますので」

「そう。ありがとう」

ルイズは店主の言い値どおりの値段を払つた。

「ありがとうございます。エドワードさん、ネギさん。またご贖員にお願いします」

「おう、また頼むぜ」

店を後にする4人にして5人。

結局、最後までルイズは店主にほつたらかされていた。

店を出た4人は次に向かう場所を決めようとしていた。服屋の軒

先でうんうんと唸っている。そこで口を開いたのがアルだ。

「サイトさんの武器を買ったらどうかな？」

これから生きていく、生活していく上で武術というのは幾ら習得しておいても、損はしない。

そう言った意味もあつたし、何よりも3人には、一護達には話していない、胸のひっかかりを感じていた。誰も反論しない。

「いいですね」

「決まりだな」

ゆっくりと全員が立ち上がる。

「で、ルイズ。武器屋はどこだ？」

「こつちよ。剣だけ売ってるわけじゃないけど」

そういうとルイズは、案内を始めた。

彼女は歩く度に、ドンドン狭く路地裏に入っていく。その路地は何ともいえない悪臭が鼻をつき、ゴミや汚物が、道端に転がっていた。

「何だ、コレ…」

「いやですね…」

光を受けて輝くブルドンネ街と違って、こちらは日も差さない影の部分である。

中世から産業革命時でも同じであるが、こういったスラムには誰も目を向けない。過ごす人の事を考えない。過去、こういった場所からヨーロッパ全土を滅ぼした黒死病ペストやコレラは始まったのだが、

まだこの世界には公衆衛生という概念が無いようだ。
そんな事を周囲を見ていたネギとエドとアルは思っていた。

「きたねえ……」

「だからあんまり来たくないのよ」

後ろを歩く3人を見ながら、ルイズが心底嫌そうな顔で言ってきた。

途中で、柄の悪い奴らが群がってきて、金をよこせと言ってきたが、エドがボコボコにした。理由は勿論、盗賊に「チビ」と言われたからだ。その強さたるや鬼神の如しである。

あつと言う間に制圧して、逆に金を筆り取ってしまった。

「…この人の方がよっぽど盗賊だろ」

ぼんやりと才人はそんな事を思っていた。

そのまましばらく歩いていると、ルイズは、立ち止まり、辺りをきよろきよろと見回した。

狭い路地同士が交差して、一つの広場を形成している。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺りなんだけど………
…」

ルイズが指で指すのは、何を売っているのか看板からは判別しにくい店。

それなりに立派な店構えで、儲かっているのが何となく想像がついた。

「あれじゃないですか？」

ネギが指を指す。

ルイズが指した方へ見ると、剣の形をした看板が下がっていた。いかにも武器屋です、といった感じであるが、向かいにある秘薬屋と違って、看板が所々錆付いている。手入れされていないのか、それとも手入れするほど利益がないのか。

「そうよ、それだわ」

ルイズが嬉しそうに呟いた。どうやら、そこが武器屋であるらしい。

ルイズと才人たちは、石段を上り、扉をあけて、店の中に入った。

酒場にあるような、蝶番で止められた木製の戸を開けて4人は中へと入る。

店の中は昏間だというのに薄暗く、ランプの灯りがともっていた。壁や棚に、所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾ってあった。戸の近くには、質が悪いのか乱雑に入れられた剣が何本も樽に無造作に突っ込まれていた。

「いらつしゃい」

店の奥で、パイプをくわえた五十程の男が、先頭きつて入ってきたルイズを胡散臭げに見つめた。背中に羽織ったマント、そしてそれを留める五望星のピン。ルイズが貴族だとわかると、パイプを口から離し、ドスの利いた声を出した。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさら」

ぶかあっと白い煙を吐きながらいう。

「お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

再び、パイプを銜える。

あまりにも怪しい態度。その態度は、自ら疑ってくれと言わんばかり態度だった。

「客よ」

ルイズは腕を組んで言った。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた！」

ちよつとした劇場なら、直ぐにでも脇役が出来そうなほど、仰々しい動きで店主は語り始める。

「どうして？」

「いえ、若奥さま。坊主は聖具をふる」

そう言いながら聖具を振るジエスチャーを交える。何処と無く、嫌味の混じった言い方と動き方だ。

「兵隊は剣をふる」

自慢のものらしい、剣を一本引き抜いて軽く振る、

「貴族は杖をふる」

剣から傍に落ちていた棒を拾うと、呪文を唱える、

「そして陛下はバルコニーからお手をおふりになる、と相場は決まっておりますんで」

謁見に参った民衆を見下ろすような調子で、店主はルイズ達に向かつて毛むくじやらの手を振った。勿論だが、この国の陛下はこんな毛深くはない。

「使うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

そう言つて才人を指指す。

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣をふるようで」

主人は、商売つ気たつぷりにお愛想を言つた。それから、才人をじろじろと眺める。目つきがちょっと怖い。その上にパイプを銜えているので、どこか甘い煙が才人の鼻を刺激した。

「剣をお使いになるのは、この方ですか？」

パイプを銜えたまま店主は尋ねる。ルイズは頷いた。用は済んだと思つた才人は直ぐに、店に並んだ武器に夢中だった。目を輝かせている。

エドは一本一本、剣を品定めするように見つめている。ネギはというと、名刀かもしれない並んだ剣を歳相応の笑顔で見っていた。

「わたしは剣のことなんかわからないから。適当に選んでちょうだい」

ちよつときつめにルイズは言い放つ。

主人はいそいそと奥の倉庫に消えた。そして彼はルイズたちに聞

こえないように、小声で呟く。

「……こりゃ、鴨がネギしょってやってきたわい。せいせい、高く売りつけるとしよう」

奥へ消えた彼は一メートルほどの長さの、細身の剣を持って現れた。

「そついや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのがはやっておりましてね」

まるで世間話でも始めるかのような調子で話し始める。

こういった所に商売の上手さが現れるのだ。

「その際にお選びになるのが、このようなレイピアでさあ」

持ってきたレイピアには、きらびやかな模様が柄や唾に施されていて、実に貴族にお似合いの綺麗な剣だった。

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのがはやってる？」

目の前の剣よりも気になった事があつたルイズは尋ねた。そのルイズの言葉に主人は「待ってました」と言わんばかりに、もっともらしく頷いた。

「へえ、なんでも、最近このトリスティンの城下町を、盗賊が荒らしてしております……」

「盗賊……？」

ちらりと才人はエドの方を見るが、本人は気がついていない。

「そつでさ」

勿体つけたように目の前で剣を選んでいるルイズと才人に語る。さも自分が聞いてきましたという様な体裁で。

「なんでも『土くれ』とかいう、メイジの盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくってるって噂で」

それがこのレイピアを店主が進める理由なのだ。

「貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

「貴族は気高いんじゃないやなかったのか？」

ルイズや才人が振り向く。エドだ。

彼は剣を見ながらも、ちゃんと話は聞いていた。そして、この見事にルイズの神経を逆撫でするタイミングで口を挟んだのだ。

「盗賊ぐらいでビビリやがって」

「しょうがないでしょ。『土くれ』のフーケは狙った獲物は必ず盗み出すっていうし」

ルイズの何とも情けない言葉をスルーしたエドは店内を見回すと面倒臭そうな調子で、

「おい、こんな細い剣はダメだ。こんなナマクラ剣が使えるか」

店主を睨みつけながら言った。

エドの本職は錬金術師である。刀剣に関する知識や技術は無くとも、使っている材質や加工方法が解らないようなレベルではない。

確かに本職の鍛冶屋のように剣を鍛えたり、形を整形したりを錬

金術でやってしまうので、鍛造や鑄造といった事はしないが、剣を、正確には使われている鋼を見切る目位は持っているのだ。

彼の下した評価は、「しっかり鑄造も鍛造もされていない」、不合格印だった。

「こんな錆びた刃物が売れるかよ」

悪態を付き捲るエド。

エドとアルの見たところ、飾ってある剣は大半が錆び付いていて、どれも扱えるようなものではなかった。刃物は「モノ」を切る事が求められる。錆び付いて切れなくなった剣に役割はないのだ。確かに何本か錆付かずについて、使用に耐えられるというモノはありはしたが、結構値が張り、到底手が出るものではなかった。

その悪態に店主は負けじと、

「お言葉ですが、剣と人には相性ってもんがございます。男と女のように」

と余りにエドの指摘とは的外れな答えを返してきた。

「見たところ、そこの使い魔とやらには、この程度が無難なようで」

「そうか、そうか」

「あ！」

つかつかとゆっくりカウンターに迫る。アルはエドの上で呆れていた。

「主人、この剣は丈夫か？」

エドがレイピアを右手で思いっきり掴んで尋ねた。

レイピアが突きを重視して作られた剣とはいえ、刃を握れば血くらはいは出る。

だが、剣を握ったエドは血を流すどころか、痛みがもしていない。

「あたりまえでさア。うちの剣はどれも丈夫でさあ、へえ」

「じゃあ…」

ギリギリと握る力が強くなる。そして、最後にはボキッと派手な音を立てて折れてしまった。

カランカランと二つになった剣が石の床へと自由落下して、劈くような音を立てた。

「え、えっと…」

主人は片手で折られた残骸を見つめながら、困惑していた。それにエドは追い討ちを掛ける。

「丈夫なのを持ってこい」

「…はい」

エドがそう言うと、主人はすっかり半泣き状態でぶつぶつ何かを呟きながら店の奥へ消えていった。アルだけはエドが何をしたのかを知っている。小声で批難を始めた。

「また、兄さん…。勝手に物質を変えて…」

そうなのである。

エドはカウンターに近づく間に、錬成を用意。それをレイピアにかけ、鉄からもっと折れやすい、つまりは脆い物質に変えたただけなのだ。決して、エドの握力で折ったわけでは無い。

「ほんと、あくどいね…」

「ま、いいじゃねーか。これでマシな剣が買えったる」

そして、今度は立派な剣を油布で拭きながら、主人は現れた。

「こ、これなんかいかがでしょうか？」

先ほどのことがトラウマになっているのか、エドを視界に入れた瞬間、引きつった笑顔を浮かべた。

持ってきたのは見事な一・五メイルはあろうかという大剣だった。柄は両手で扱えるように長く、立派なこしらえである。

ところどころに宝石が散りばめられ、鏡のように両刃の刀身が光っている。

見るからに切れそうな、頑丈そうな大剣であった。

「すごいですよ、これ！」

「すげえ…、ホントすげえ」

ネギもワクワクと言った調子で歩み寄る。

だが、それに反してエドの眉にしわが寄る。

「店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいものですな」

この店で最上の商品を紹介できる事を店主は心から喜んでいらしく、厚い胸板を更に力強く張って紹介を始める。

「といつても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないと無理でさあ」

確かに此処まで大きな剣を腰から下げるのは、才人の体格では無理だろう。

才人は早くもこの剣を背中に背負って戦っている自分の姿を妄想していた。

「やつこさんなら、背中にしよわんといかんですな」

才人は更に近寄って、その剣を見つめた。

「すげえ。この剣すげえ」

「わああ・・・」

一瞬で、欲しくなってしまうた。なんとも、見事な剣である。

才人が気に入ったのを見て、ルイズはこれでいいだろうと思った。「店一番」と親父が太鼓判を押ししたのも気に入った。

ルイズだけではなく貴族という生き物は兎に角、見栄っ張りなのだ。だからこそ、貴族はなんでもかんでも、持つもの全てが一番でない気が済まないのである。

「おいくら？」

「何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シユペー卿で」

眉間に刻む皺を更に深くしたエドは、そのシユペー卿とやらに会ってみたくなった。

勿論、理由は決まっている。アルは兄の喧嘩っ早い腰に、やれやれと頭を振った。

「魔法がかかっているから鉄だって一刀両断でさ」

その言葉を聞いたネギが、おやつと言う顔をする。彼も魔法使いの端くれである。魔力を感じる器官というのも持っているのだが、この剣からは魔法の痕跡が一切感じられなかった。

「あ、あの、ルイ……」

「ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう？おやすかあ、ありませんぜ」

ネギの言葉は遮られる。

主人はもつたいぶって柄に刻まれた文字を指差した。そして、愛しく撫で付ける。

「わたしは貴族よ……！」

ルイズも、胸をそらせて言った。払えるという自信の表れである。そんな薄い胸を張ったルイズに主人は淡々と値段を告げる。

「エキュー金貨で二千。新金貨なら三千でさあ」

「立派な家と、森つきの庭が買えるじゃない！」

ルイズは呆れて言った。

「名剣は城に匹敵しますぜ。屋敷で済んだらやすいもんでさ」「新金貨で、百しか持ってきてないわ」

ルイズは貴族なのだ。

モノが食べたいと思えば、どこからか出てくる。服も、剣も、何もかもが。それを手に入れるに当たって、金を使うという機会に接してきていないのだ。

当然の結果の帰結として、買い物に関する駆け引き、所謂「値切り」という概念すらなく、勿論、モノの値段というのも漠然としか解らない。この世界にいながらにして、エドやネギ同様、物価を理解していなかったのだ。

勿論、あつたとしても彼女の山よりも高いプライドからすればまじしないだろうと、エドは当たりを付けていたが、ここまで自分の予想通りだと泣きたくなつた。

「はあ…」「はあ…」

兄弟揃つて深いため息をつく。

何も考えずに財布の中身をばらしてしまふ。

主人は話にならない、というように手を振つた。何せ20分の1しか持つてきていないのだ。

「うっ…」

その主人の表情にルイズは顔を赤くした。剣がそんなに高いとは知らなかったのだ。

しかし、何事が閃いたように、エドとネギの方を、その薄い胸を張つて、

「あんたたちのお金、私に寄越しなさい」

「は？」

「え？」

エドは呆れている。アルは嘆いている。ネギは戸惑っている。

エドとアルは此処まで予想がついていた。お金が無いのなら、在る所から引つ張つてくれればいい。そして自分の後ろにいる少年達はお金を持っていると。

勿論、それは折込済みだったので、その対応も何パターンか用意している。

今回は言って聞かせるのが面倒だったので、

「ふん！」

右手で文字通りの鉄拳制裁を喰らわせた。ゴチンと何か割れたような鈍い音がした。その後には頭を抱えて蹲るルイズの姿が。

「わー、何してるんですけ、エドさん！」

主人が冷や汗をかいた。今度は何をしでかすんだ。といった感じである。

そんな主人をよそにまるつきりルイズに興味を無くしたエドは続ける。

「これは何製だ？」

「へ？」

質問の意味が解らなかった店主はマヌケな声を上げる。

「へ？え、いや、そ、そうですな」

「銀製だな？」

「へえ、はい。銀製です」

「そうか。なら、ダメだな」

「ええ？」

主人は驚いた。

「は？」

コレには才人も驚いた。

才人の価値観では、銀メダル、つまりは二番というものをダメだとは一体どういうことだろうか。

「こ、この剣は名剣ですぜ。頑丈さといったら一級品でさあ。おまけに高級ですぜ」

必死に取り繕うが、エドには意味が無い。

エドは店主の反論を無視して、そのダメな理由を一から十まで説明した。

「そもそも銀ってというのはな…」

銀は貴金属であり、古来から金属を加工する事で食器や装飾に用いられてきた。

だが、銀製の武器というものは存在していない。なぜかという単純に剣や槍など、武器としての使用耐久に無理があるからである。銀は水に弱く、錆びやすい。おまけに柔らかいのだ。武器として使っても直ぐに折れてしまう。ましてやそれが戦場なら尚更だ。

一部の隙も無い科学者としての意見。それにはネギは感心して、賞賛の拍手を送っていた。

才人も自分の高校の先生が言っていたこと以上の、知識を聞いてなるほどと思っていた。

「ま、まっしてくれ！すまんかった！あつしが悪かった！」

理路整然として反論の使用がないエドの言葉にとつとつ、主人が負けた。エドがニタアと何とも嫌らしい笑顔を浮かべる。その悪魔のような笑顔を見て、また弟は顔を濃くした。

「そうか、そうか。解ったか」

エドがニヤニヤしながら言う。

「すみません！すみません！」

主人がひたすら謝る。

その主人の無様な様子を見ていたのか、

「ぶひゃひゃひゃひゃ！」

突然、何とも下品な笑い声が上がった。

「おもしれエ。おもしれエ。親父をそこまで追い詰める奴なんぞ、お前らが初めてだ」

「誰だ？」

頭を抱えていたルイズも含め、皆一様にその姿無き声の主を探す。店内には5人以外の人影はない。ただ、乱雑に剣が積んであるだけである。主人はその声を聞いて、さらに頭を抱えた。

「おい、そこの坊主！こつちだ！」

「誰ですか？」

ネギは丁寧に聞き返しながら音源を探る。声の反響や大きさから、声のする方に近づいた。

「おめえの目は節穴か！」

「え？」

陳列棚に近づいていたネギは漸く音源を見つけた。
なんと、声の主は一本の剣であった。

「へえ、剣が喋ってるのか」

と鎧が喋る錬金術師の感想。

「すごいですね〜」

とオコジヨが喋る魔法使いの感想。

「剣がしゃべってる」

才人は驚いた。ネギとエドは、その剣をまじまじと見つめた。
さっきの大剣と長さは変わらないが、刀身が細かった。薄手の長
剣である。

ただ、若干の表面に錆が気になった。だが、中までは錆付いてい
ない。表面を磨けば何とか使用に耐えられるようになるだろう。

「何ですか？この剣は？」

「うるせえよ」

剣は何ともつんけんな感じで返す。

「やい！デル公！お客様に失礼なことを言っただけじゃねえ！」
「デル公？」

才人が、二人から受け取った喋る剣を手に持つ。

「それって、インテリジェンスソード？」

ルイズが、当惑した声をあげた。

すっかり元気をなくした主人が説明する。

「そうでさ、若奥さま。意思を持つ魔剣、インテリジェンスソードでせう」

店主は喋る剣の扱いについて、かなり頭が痛いらしい。

「いったい、どこの魔術師が始めたんでしょうかねえ、剣をしゃべらせるなんて……」

なるほど、来歴は解らないという。

ますます、魔剣という響きに箔が付くと思った才人は、さっきの剣よりも早く気に入ってしまった。

「とにかく、こいつはやたらと口は悪いわ、客にケンカは売るわけで閉口してまして……」

深いため息を付いて、

「やいデル公！！これ以上失礼があったら、貴族に頼んでてめえを溶かしちまうからな！」

「おもしれ！やってみる！」

売り言葉に買い言葉。店主と剣の喧嘩は客を置き去りにヒートアップする。

「どうせこの世にゃアもう、飽き飽きしてたところさ！溶かしてく

れるんなら、上等だ！」

「やってやらアー!!!」

主人が処分する為に近づいてきた。しかし、才人はそれを遮る。

「もったいないよ。しゃべる剣なんて面白いじゃないか！」

言葉の端々に喜びと好奇心が混じっている。

才人は、まじまじとその剣を見つめた。

「お前、デル公っていうのか？」

「ちがう！デルフリンガーさまだ！覚えておけ！」

「名前だけは、一人前でさ」

呆れた様子で主人が言う。

「俺は平賀才人だ。よろしくな」

剣は黙った。じつと、才人を観察するかのように黙りこくった。

「あの、デルフリンガー？」

唐突に黙ってしまった剣に、才人は語りかける。

それからしばらくして、剣は小さな声でしゃべり始めた。

「おでれーた。てめ、【使い手】か」

「【使い手】？」

「ふん、自分の実力も知らんのか。まあいい。てめ、俺を買え」
「買つよ」

才人は嬉しげに言った。すると剣は、黙りこくった。

「ルイズ。これにする」

ルイズがいやそうな声をあげた。

「え〜。そんなのにするの？もっと綺麗でしゃべらないのにしなさいよ」

ちらりとカウンターに乗った店主の持つてきた、大剣へ視線を送る。どうもエドの御高説は聞いていなかったらしい。そもそも銀だの、金だの、合金だのと喋っているのだが、言葉の一つの理解できていなかったのだから、当然といえば当然である。

ルイズには散々な言われようではあるが、才人は意地でも買っつもりのようなのだ。

「いいじゃんかよ。しゃべる剣なんて面白い」

「それだけじゃないの」

ルイズはぶつくさ文句を垂れているが、他に買えそうな剣もないので、主人に尋ねた。自分の手持ち金以上の物を買おうとして、またエドの鉄拳を貰いたくはない。

「あれ、おいくら？」

「あれなら、百で結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

主人は手をひらひらと振りながら言った。

ルイズが金貨を主人に渡し、主人は慎重に枚数を確かめると、額

いた。

「毎度」

剣を受け取り、おまけとばかりに鞘に収めると才人に手渡した。

「どうしても煩いと思ったら、こつやっつて鞘に収めてくれればおとなしくなりませう」

才人は頷いて、デルフリンガーという名前の剣を受け取った。

17・the sword and legendy (後書き)

ルイズが物価を知らないというのは貴族なら当然かと思いましたが、入れました。T A L E of A b y e sでも序盤にルークが林檎を丸齧りして、ティアに怒られていましたが、今回はそれだと思ってください。

モノの値段を知るといのは、為政者にとっては重要な事かもしれません。

今の殿様企業や、政治家を見ていると庶民派といのは、かなり稀有な存在でしょう。

公衆衛生の話題が出てきました。

そういえばシャナも原作5巻で、公衆衛生についての本を読んできましたが。

公衆衛生というのは伝染病を防ぐ上で、最も重要なポジションを占めています。欧州全土が死に絶えたのは、大戦を除けばペストとコレラくらいです。これもスラムが乱立し、それを放置していったツケが回ってきたからです。

逆に公衆衛生のしっかりしていた江戸は伝染病によるパンデミックは記録されていません。今現在、先進国では伝染病が流行せず、途上国で猛威を振るうのは、こうった状況もあります。

銀の性質について。

銀というのは、非常に錆びやすい性質を持っています。それが銀食器などに使われるのは純銀では無いからです。銀色の物質、例えばクロムやチタンなどを混ぜた合金して錆びないように加工されています。

そして、何よりも武器として使われない理由は、重いという事、高いという事に限ります。重いということはそれだけ、機動力の減退

となりますので、行軍に影響が出ます。貴金属で作れば、それだけ価値が上がってしまい兵站到持たせれば、軍の維持費も高騰する。そんな理由があります。

だからこそ、狼男を倒し、魔よけともされる、必殺の弾丸である純銀シルバーブレットの銃弾というのがありますが。

トリステン魔法学院の朝。

ネギの魔法球で鍛錬を繰り返せば、実時間では短時間で出来るの
だろうが、現在修復中との事で締め出されてしまったので、因縁の
多いこの場所へとやってきた。

日の光が当たるが、まだ静謐な空気が満ち、学校らしい喧騒は聞
こえない。

その静まった空気を裂いて一陣の風が吹く。

「はぁぁ！」

一護へと空気を断つ音すら後に残さずに、神速の斬撃が奔る。
それに合わせて、着ている赤のベストが風に乗る。

傍から見ている才人の肌には、草の生えた地を摺り上がって、必
殺の一撃を込めた太刀風。だが、その必殺の風に対する黒の気の張
りようは凄まじい。

黒の革ブーツが少しだけ後ろへ引く。

「おっと！」

反射的に首だけを後ろへ引き、斬撃を軽く避ける。届く距離まで
は実に10センチ少々。明かに振る速度よりも早く動いている。だ
が、その引いた頭へ振り下ろす方向へと振る方向を変える。

脳天へと落ちる重力によって加速する一撃は、しかし、手首をガ
ツシリと掴まれ、

「ほい！」

一護の背へとぶん投げられ、そのまま背中からまともに落ちた。ドサツという鈍い音が空気を伝う。

しかし、それでもシヤナは気を失わず、その身を最大限に捻って立とうとするが、その前に一護に額を押さえられてしまった。流石のフレイムヘイズもこんな事をされては、動くことができない。

名実伴に負けだった。しかも、相手は武器を振るっていない。かなり悔しかった。

「むう…」

「しかし、凄まじいな…。ここまでの力量差があるとは…」

じとつと睨みつける契約者に、炎の魔神は素直に結果を見つめなおすように促した。

一護は二人の模擬戦をじつと見ていた、才人の方へと向き直る。

「今のような感じだ。剣を振るう感覚ってのは」

「いや、あの…」

デルフリンガーを手に入れて帰ってきてから、また再びダライオマ魔法球へと身を投じた才人は、エドの指導の下、基礎体力を更に強化すべくサバイバルに挑んでいた。時間は約20時間、魔法球の中では20日の時間だ。

何せ、身長が188センチと恵まれた体格である一護に比べて、才人の背は172センチしかない。こんな体で薄刃とは言え、大剣を振るうのだ。基礎体力は絶対に必要だった。

そして今朝。それなりに体力を付け焼刃であるが、手に入れる事のできた才人を連れ、一護とシヤナは決闘騒ぎのあったヴェストリの広場にやってきた。ここで毎朝、剣の訓練をするという。ただ、乗り気だったのはシヤナだけで、一護は面倒臭かったが、結局根負けしてしまった。

「解ったか？」

それで二人は見せてくれたのだが、如何せん速過ぎた。

文字通り神速で振るうシャナの握った棒切れを、一護は同じように神速で避ける。特に最後の手首だけを握ってやった投げは、最早目で終えなかった。

むくりと起き上がったシャナも、才人へと向き直る。

「今みたいに、戦いの場では技術も型も必要ない。ただひとつ『殺し』を感じる事なの」

何ともシャナらしい率直で、殺伐とした言い方だった。

「なんにするにつけ、これができないと話に成らない」

きっぱりと言い切る。

「今も私の動きから『殺し』を感じ取って動いていた。それが出来れば避けられるし、攻められる。」

「……」

「解りにくい！」

シャナの直截な言い方に、戸惑う才人を現実へ引き戻したのは、彼女の脳天へと落ちてきた、一護の拳だった。何とも可愛らしい声を上げて蹲る。

「ま、ごちゃごちゃ考えなくても、まずは『ビビらない』ってこつた」

腕を組んで解説を始める一護。今度は何とも解りやすい解説だった。

「相手の動きから目を瞑らない。逸らさない。そうやって相手の動きを目で追う」

「ふむふむ」

「型や技術がいらないってのは本当だが、相手にビビッちまったら、勝てるモンも勝てねーぞ」

一護の言わんとしている事は、素人の才人にも良く解った。

目を逸らせば、相手の攻撃を見切ることできない。避ける事もできはしない。ましてや反撃など叶わない。その動き、シヤナの言う所の『殺し』を感じる事に繋がるのだろう。そう理解した。

これは一護とシヤナがお互いが経験して、得てきた成果だった。

「よし、じゃやるぞー！」

「はいー！」

そういつと背中に背負ったデルFRINGERを抜く。

「よう、相棒。あの二人のうち、どっちとやるんだ？」

デルFRINGERがいつもの調子で喋りだす。これを見たとき、驚くかと思っただが、何せぬいぐるみとペンダントが喋るのだ。面白そうとシゲシゲと眺められたが、特別驚いている風も無かった。

「今回は模擬戦だよ。でも、本気で行くぞ」

ぐっと柄を握る力を強くする。そうすると何故か左手に刻まれたルーンが淡く光るのだ。

一番最初に気が付いたのは、エドとのサバイバル中にナイフを握った時だ。これが光ると明かに自分の実力以上の力が発揮できるのだ。早く動けるし、手の動きも早くなる。

ルイズに聞いてみると、「使い魔の能力」かも知れないとの事。このルーンは才人だけではなく、一護やアレン達にも刻まれている。彼らもまた、武器を握ると早く動けるのかもしれない。

現に繰り返してきた模擬戦の中、武器を握ったシャナと夏梨の左の手の甲は淡く煌いていた。

「あいよ、頑張れ！」

「おう！」

そうして、ルイズ達が目覚めるまでの間、ひたすら模擬戦を続けるのだ。

だが、長い間戦い続けた経験のある二人と違って、才人は昨日剣を握ったばかりの素人。動きが多少早くても、見切られて、避けられ、また反撃に会ってしまった。

「いたた……」

大空を見上げるのは、通算32回も地に叩き伏せられた才人である。

確かに才人には熱意がある。だが、それは決して結果には直結しないのである。特に武術というのはそれが顕著に現れる。あつと言う間に達人の域にまで達する事の出来る天才が居れば、一生掛かって努力しても凡人のまままで終わってしまう人、その両方が確かに存在している。

「ま、一朝一夕で俺らに勝とうってのが無理な話だな」

一護の評価は適切だった。その傍で、休憩を取っていたシャナは、食堂からかつぱらってきたパンを食べている。本人いわく、「メロンパンが食べたい」との事だったが、生憎とこの世界にメロンパンは存在しない。そして7人の誰もメロンパンの作り方を知らなかった。

「だけど、筋はいいんじゃないか？」

「あむ、多分、このルーンでのドーピングが、はむ、利いてるんだと思う。実力じゃない」

一護に負けた悔しさを噛み締めるように、シャナはパンを噛み干切る。

「厳しいんだな…」

「当然よ」

直裁で直接的な言い方に、才人は愕然とする。解ってはいるので反論のしようも無かった。

「追々、身に付けていけばいいさ」

「はい」

一護の励ますような言葉。

その言葉に才人は元気付けられる。根拠は無いが、力強い言葉だった。

「ま、それはお前も同じだけどな」

「うっ」

グシグシとしっかりと梳かれたシャナの髪を強く撫でる。手を離

した後は、折角の髪がボサボサになってしまっていた。それをシャナは拗ねるような顔で見っていた。

「じゃ、そろそろメシだな。メシ食ったら、少し休んでまたやるぞ」
「はい」「…はい」

荒らした後を足を使って隠して、3人は食堂へと向かっていった。勿論、実力が上といっても3人は貴族では無い。その為に学院の食堂に入る事は叶わなかった。今では、厨房から食材を適当にかっぱらって来たり、街に出て買いに行ったりしながら、箱舟の中に設えられた台所でやっている。

こうしないとアレンの食事が間に合わないのだ。自分で量を測って作ってをしているので、必要な量だけが消えていく。料理の担当はアレンと夏梨だ。一度、シャナが「やりたい」と言い出したが、全てが黒焦げの何かになってしまったので、任せるのは全会一致で辞めさせた。

本人はかなり不満そうだったが。

「ういつす、おはようさん。今朝は何だ？」

広場から箱舟の中へと入る。実に簡単に行き来が出来て非常に便利な代物だ。

そのまま食堂として使っている家へとたどり着く。戸の向こうには相変わらず、大盛りを超えるような量を盛られた皿がいくつも並んでいる。これの殆どが、アレンの腹の中へと消える。

「おはようございます。今日は卵を使ってみました。どうぞ」

アレンの言葉に促されて、5人が席に付く。ここでの生活を始めて、既に1週間。

色々と7人の中で、固定化されたスケジュールが生まれ、それに沿って生活をするようになってきた。毎食の料理当番はアレンが基本に、一護とエドがサポートする。かといって、食事以外は仕事も無いので、ルイズの授業に着いて行ってみたり、修行したりとそこはローテーションが組まれている。

「ネギとエドはどうしたの？」

挨拶もそこそこに料理に手を伸ばしたシャナが尋ねる。

「あの二人なら、もう図書館へ行ったよ。食事も終わってる」
「そう」

短く了解の言葉を切ると、フォークを口へと運ぶ。シャナのマナーは一般家庭で過ごしてきた一同にとっては実に立派なものだった。何でも「昔、知人に教わった」らしい。

「凄く、上品ね。私も教えて貰いたいな」
「これくらいなら、直ぐにでも覚えられるし、多分、簡単」

シャナの言う「簡単」と言うのは決して額面どおり「簡単」ではないという事を、才人はこの一週間の扱きでよく解っていた。シャナとネギはタバサに文字と言葉を教えてもらってから、今度はこのメンバーにも教えている。だが、やっぱり先生であるネギの方が教え方は良かった。

「ごちそうさまでした」

先に食べ終えたアレンが立ち上がる。

「んじゃ、僕は厨房の手伝いでもしてきます。皆さん、後片付け、よろしくお願いしますね」

そう肩を回しながら、部屋を後にした。

7人はルイズの世話以外にも、厨房の手伝いをしてみたり、図書館での調べ物をしている。

「じゃ、俺が片付けとくわ。三人でルイズの処へ行ってくれ」

「はい」「解った」「大丈夫です」

食事を終えた面々は各々の場所へと向かっていく。

一護はシンクに向かい、水を流し始める。才人とシャナと夏梨は、帯刀してルイズの元へと行く事にした。

さて、一足先に箱舟を出たアレンだったが、

「えっと、どこどこ?」

迷っていた。実を言うと厨房の手伝いは彼は初めてだった。

出かける前に、誰かについて来て貰えば良かったと少し後悔する。

この学院は結構広大な敷地面積で、尚且つのべ床面積も相当にある。一番食堂に近い箱舟から出てみたが、厨房へとたどり着けず、迷ってしまっていた。おまけに、

「お腹すいたな」

さつき食べたばかりだが、また腹が減ってきた。

正直、他の面々も食べるので、自分は控えめにしていたのだ。だが、そうなる と必然的に自分の食事が足りなくなってしまう。例えば、ここに来てから学院内では満腹になった記憶がなかった。常人とは思えない胃の圧縮率を誇るアレンには、「机に乗る量」というのは、到底足りるはずがない。

「はあ、腹が減った」

人の居る学校なのに、アレンは遭難したような気分になってきた。こんな時、自分の方向感覚の無さが恨めしい。余りに恨めしくて、壁に手をついた。

「どうなさいました？」

その鈴の鳴るような声に振り向くと、大きい銀のトレイを持ち、メイドの格好をした素朴な感じの少女が心配そうにアレンを見つめている。彼は初見だったが、この少女がルイズに食事を抜かれて困っていた才人を助けた、シエスタであった。

「あ、どうも。ごめんなさい。お腹すいちゃって…」

「大丈夫ですか？」

銀髪の少年におろおろしながらも、彼女はデジャブを感じていた。

「いや、お腹空いただけなんで、何かごはんを貰えたら…」

「まあ大変！わかりました。どうぞこちらにいらしてくださいな」

シエスタはアレンを連れて歩き出した。

彼が連れていかれたのは、ちょうど彼が行こうとしていた食堂の裏にある厨房だった。

此処では相変わらず、大きな鍋や、オーブンがいくつも並んでいて、コックたちが忙しそうに料理を作っている。

「ちょっと待っててくださいね」

アレンを厨房の片隅に置かれた椅子に座らせると、彼女は小走りで厨房の奥に消えた。

そして、お皿を抱えて戻ってきた。皿の中には、才人の時と同じように、温かい湯気の立つシチューが入っていた。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作ったシチューですよ。よかったら食べてください」

「ありがとうございます！」

シエスタの言葉にアレンは思いっきり頭を下げた。

「ええ。賄い食ですけど……」

「助かりました！」

そう言ってガツガツとシチューをおいしいおいしいと食い始めた。

「おいしいです！おかわりください！」

「ふふ、ゆっくりなさってください」

アレンは夢中になって、すっかり最初の目的を忘れてまでシチューをバクバクと食べた。

黒髪の少女はアレンの異常な食いつぶりに驚いていたが、ニコニコしながらそんな彼のの様子を見つめていた。だが、消えるように

腹へと消えていくシチューを見ていくと、段々顔が引きつってきた。そこで、彼女が口を開いた。

「あなた、お名前は？」

「アレンです。アレン・ウォーカーです。ありがとうございます。えっと…」

そこまで言って、まだお互いに自己紹介を済ませていないということに気がついた。

「あ、ごめんなさい。私はシエスタつていいます」

「本当にありがとうございます。シェフにもお礼を言いたいのですが…」

「あ、待っていてくださいね」

そういうと再び、厨房の奥へと消えていく。

そうして直ぐに高い帽子を被った男を連れてきた。太い腕に、清潔に保たれた指。

「お前さんか？学院の中で、遭難しかかった奴つてのは」

シエスタが連れてきたシェフはアレンの肩を叩きながら、豪快に笑う。

どこか懐かしい感じがして、アレンはうつすらと右目に涙を浮かべた。

「はは、恥ずかしながら。アレン・ウォーカーです。美味しかったです、シェフ」

そう言って恭しく一礼する。このような礼儀作法は師匠との修行

時代に散々、叩き込まれたので付け焼刃ではない優雅さが隅々に漂っている。その挙動に感心する。

「何ともできた兄ちゃんだな。俺はこのシェフ長のマルトーだ」
「ところであなたって、ミス・ヴァリエールの使い魔になったって
いう…」

シエスタはアレンの特徴的な白にも見える、老人のような銀髪を見て思い出した。

「ええ。その通りです」

「かなりの噂になってますよ。その中の女の子二人が、貴族様を倒したって」

シエスタはニッコリと笑った。

アレンが元の世界で最後に見た笑顔と似た笑顔だった。

「ああ、なるほど。どうもお騒がせして申し訳ありませんでした」

ペコペコと頭を再び下げる。

初めて街へ行った帰りの後の事。才人が大怪我をしていた理由は、大まかにしか聞いていなかったが、随分と広まってしまっているらしい。

「いや、あんな風にガツンと貴族をやっちまうなんて初めてだったモンだからよ。胸がすいたぜ」

ニツと白い歯を見せて笑うシェフ長。

やはり、この世界の貴族と平民の確執は根深いもののようにだと、改めてアレンは思った。だが、そんな意識を押し流すように、残っ

ていたシチューを頬張り始めた。その傍には、何枚にも積み重なった空の皿がある。その上へ、さらにお皿を重ねた。

「ごちそうさまでした」

スプーンを置いて、シエスタとマルトーへと頭を下げる。

「おいしかったです。ありがとうございました。お礼に何かさせていただけませんか？」

「なら、昼食の準備と配膳を手伝ってくださいな」

シエスタは微笑んで言った。

「解りました」

アレンは胸を張って言った。

アレンの料理の腕前は実に素晴らしかった。師匠に教えられたのは、上流階級の挙措だけではない。こういった料理を始めとする家事全般も教えてもらったというか、身に付けていた。何せ、身に着けないと、容赦なく鉄拳が落ちてくるのだ。

「ほう、兄ちゃん。中々、腕があるじゃねえか」

マルトーがアレンの料理の腕前に感心する。実にテキパキとして無駄の無い動きをしている。昼食用のジャガイモを剥き、肉を切っていく。朝食が終われば、片付けの後は直ぐに昼食だ。存外、学校の食堂というのは忙しいものだ。アレンは改めて自分の食事を文句も言わずに出してくれた、教団の料理長であるジェリーに心の中で感謝した。

「いや、まあ、色々あったもので」

自分の腕前に関してはお茶を濁す。あまり突っ込んで欲しくない事もある。

「んじゃ、そろそろ昼食の時間だ。頼むぜ、アレンよ」
「はい」

ポンポンと肩を叩く料理長に、ニツと微笑んで返す。

昼食の時間になるとエドとネギが、夫々アルとカモを連れてやってきた。結構忙しいらしく、アレンに言われるまま、二人も手伝う事になった。勿論、杖を持ったネギに厨房の面々は戦々恐々としていたが、ニコニコとこの世の人の良さを全部集めたような彼の笑顔に、皆腑抜けになっていた。

唯一、シエスタだけは「この子は年下、この子は年下……」と何か呟いていたが。

「料理するってのも大変だよな」

「そうですね」

「はい、軽口を言っていないで、これを運んでください」

ドン、ドンと二人の両手に大きな皿を渡される。一同は此処での仕事を手伝う代わりに、食事や食料の世話をして貰っているのだ。確かに料理はアレンの担当ではあるが、普段から研究に没頭しやすい彼らは別枠で食事を、この厨房で貰う事が多かった。

「コレくらいの手伝いは造作も無い。」

「じゃ、行つて来るぜ」

「行つてきます」

二人が厨房を出て行く。

すると、二人の視界に金色の巻き毛に、フリルのついたシャツを着た、いかにもキザなメイジがいた。彼が才人と決闘騒ぎを起こした、ギーシュだと気がつくのに、それ程時間は掛からなかった。相変わらず、薔薇をシャツのポケットに挿している。

(おいおい、何だありゃ…)

エドは自分の趣味の悪さを棚に上げて笑いたくなくなった。

「なあ、ギーシュ！お前、今は誰とつきあっているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

取り巻きの二人がニヤニヤと笑ってそのメイジに尋ねる。

彼はすつと唇の前に指を立てた。

「つきあう？僕にそのような特定の女性はいないのだ」

才人との決闘の経緯は、シエスタやルイズから聞いて二人も知っている

どうも彼はシャナと夏梨に、完全に敗北したのを反省していないようである。あるいは、二人に負けた事を無かった事にしようとしているのか、真意は知らないが、エドは取り敢えず、イラツと来た。本当に彼は頭に血が上りやすい。

「薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

エドの配り終えた後のトレイが、物凄い力で折れ曲がった。

「ネギ、アル。ちょっとあの気障ったらしいの、しばき倒してきて

いいか？」

口をひくつかせながら、今にも飛び掛りそうなエドをネギは慌てて止める。

「ダメですつてば！本当に死んじやいますよ！」

ギヤーギヤーと喚く二人の所へ丁度、やってきたルイズとシャナ達もやってきた。

ネギに才人も加わり、エドの暴走を阻止する。確かにエドが全力で襲い掛かったら、1個大隊くらいなら簡単に殲滅できてしまう。あの気障ったらしいギーシュだけに被害が済めば御の字である。

「俺もムカついているから！」

「あいつ、何も反省して無いじゃん！」

むすーっとした表情で夏梨が憤慨する。当事者だった二人は、エド以上にいらだっていた。

「皆さん、どうされたんですか？」

「早く、運んでくださいよ」

そこへアレンとシエスタがやって来た。

戻ってくるのが遅い二人を気にしていたらしい。くの字に折れ曲がったトレイを拾いながら、やれやれといった様子で、全員の見つめる先を見る。

そのとき、ギーシュとかいうメイジのポケットから何かが落ちた。コロコロと転がって、シャナの目の前にまるで意思が在るかのようによって来た。

「はあ、本当にコイツは進歩して無いのね」

横に居る才人をチラリと横目で見ながら、呆れた声で呟いた。それを兄に似た面倒臭そうな様子で夏梨が拾い上げ、

「おい、落としたよ」

と言ってテーブルの上に置いた。

ギーシュは苦々しげに、夏梨を見つめると、その小瓶を押しやっ
た。その行動に一同、「ああ、やっぱりか」と言っ調子で頭を抱え
る。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね？」

「どうみても、お前から落ちたよ……。つか、何も反省して無いんだ
な……」

年上だが、ここまで反省の色が見えないと、もう一度ぶん殴って
やりたくなった。孔子の言葉だが、「過ちて改めざる、これ即ち過
ちという」という言葉を耳にタコが出来る位に言ってやりたくなっ
た。

その小瓶の出所に気づいたギーシュの友人たちが、大声で騒ぎ始
めた。

「おお？その小瓶は、もしや、モンモランシーの香水じゃないのか
？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけ
に調合している香水だぞ！」

「そいつが、お前のポケットから落ちてきたってことは……」

三人は同じ結論に到つたらしい。勿論、その余りに無様な様を才人達は呆れた様子で眺めていた。

「つまりお前は今、モンモランシーと復縁したんだ。そうだな？」

この間振られたばかりの女子生徒と復縁したらしい。

復縁できるギーシュもだが、簡単に浮気を許してしまう、相手の女の子も相当なモノだ。

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが………」

ギーシュが何か言いかけたとき、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって、コツコツ歩いてきた。

亜麻色の長い髪をした、なかなかの美少女だった。この間のケティとは違って、ツリ目で何処と無く気の強そうな感じだった。マントの色からすると、一年生だろうか。

「ギーシュさま？」

そして、顔には明かに怒りの表情が浮かんでいる。文字通り、修羅のような顔だった。

「やはり、ミス・モンモランシーと……」

「彼らは誤解しているんだ。バーバティ。いいかい？僕の心の中に住んでいるのは、君だけ………」

バチンッ！バチンッ！

二発、乾いた音が響いた。

ギーシュが言い終わる前に、バーバティと呼ばれた少女は、思い

つきりギーシュの頬を二発もひっぱいた。シャナと夏梨はこの様子を呆れた目で見ていたが、アレンに辞めさせられた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠でしょう！ さようなら！」

そう言っつつかつかと歩いていく、バーバティ。

余りにも、前回と同じシナリオを辿っている展開に、才人は段々面白くなってきた。

その後ろ姿を見つめながらギーシュは、頬をさすった。

すると、遠くの席から一人の見事な巻き毛の女の子が立ち上がった。件のモンモランシーである。

かつかつと歩き方や表情に怒りが含まれているようである。おまけに1ヶ月程で2回目だ。その怒りの大きさは、最早知るべくも無い。そしてギーシュの席までやってきた。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけ……」

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

静かな怒り。

こつこつた修羅場というのは傍で見ているのが一番面白いと、悪い顔でエドは見ていた。

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー」

あたふたと慌てるギーシュ。

「薔薇のような顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

本当に懲りない男である。一言一句違わず、自分が悪くないというような言葉に本当に一同揃って呆れてしまった。モンモランシーは、テーブルに置かれた高そうなワインの瓶を掴むと、中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。赤いシミがシャツへと広がる。ワインの良い芳醇な香りが辺りに漂う。

そして、モンモランシーはワインをかけ終わると、

「うそつき！」

と怒鳴って走り去っていった。

辺り一帯にシーンとした空気が流れる。余りの出来事に思考が着いていかないのだ。

ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭く。

そして、やれやれといった感じの芝居がかった仕草でこう言った。

「あのレディたちは薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

「ダハハハハ！」

遂にエドが耐え切れなくなった。大きな声を上げて兎に角、笑う。腹を抱えて笑う、思いつきりバカにした様子にアルは額に手を当てたくなつた。勿論、彼も人形でなければ、パンチの一発ぐらいはかましていたかもしれない。アラストールは、それを自らの娘に置き換えて、イライラしていた。

一通り、笑い終えたエドを抱えて、厨房へ残った仕事を片付けるべく、シエスタと一緒に再び歩き出す。

「待ちたまえ」

そこでギーシュが一同を呼びとめた。

「なんだ？浮気野郎。ぷぷぷ…」

代表して、エドが答える。状況の面白さに笑いが止まらない。

同じ浮気がちな男でも、自分の上役とは天と地の差だ。全ての女性に平等の愛を注ぎ、女性同士を喧嘩させない。自分も浮気者と言われない最高の状況を作り出す。

その結果が常に副官に銃口を突きつけられるという、情け無い状況ではあるが。

「笑うんじゃない！」

ギーシュが激昂する。

「その黒髪の君」

香水の瓶を拾い上げた、夏梨を指して言う。

「軽率な君の行動のせいで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「何言ってるの？ 悪いのは、二股してるお前だろ」

夏梨の的の中心をずばりと射抜く正論に、ギーシュの友人たちが、どっと笑った。

「そのとおりだギーシュ！お前が悪い！」

「しかも、今月は二度目だぞ。いい加減、学んだらどうだ？」

ギーシュの顔に、さっと赤みが差した。

「いいかい？僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、知らないフリをしたじゃないか」

どこまで、この男はバカなんだろうか。自分の兄には絶対にこんな風になつて欲しくなかった。

「話を合わせるぐらいの機転があつてもいいだろう？」

そこで才人がギーシュに言う。

「どつちにしろ、二股なんかそのうちバレるっつもの。つか、前もバシてたる」

がつくりと肩を落とす才人。

その顔にギーシュは見覚えがあつた。よくよく見ると前に居る二人の女の子にも見覚えがあつた。

だが、貴族というのは調子のいいもので、絶対に自分の都合の悪い事は認めない。二人にギタギタに負けた事はすっぱり忘れていた。

「ふん……。ああ、君は……」

ギーシュは、才人たちを見ると、バカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、君たちは、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな」

どうも自分が才人を熨した事は、自分が熨された事とセットになっているので、完全に忘れていたようだった。都合のいい頭をしている事にシヤナは今すぐに剣を突き立てたくなり、『夜笠』から『贅殿遮那』を抜こうとしたが、隣に居た夏梨に止められた。

「平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

その言葉に3人はカチンときた。だが、アレンは平然としているし、シエスタはおろおろとしている。ネギはあたふたしている。エドが笑いながら言った。

「何の成長もしてないバカに言われても、腹が立たんよ」
「な…！」

今度はギーシュが絶句した。

「君はどうやら貴族に対する礼儀を知らないようだな。ならば決闘だ！」

ギーシュはそう言って立ち上がった。
そして杖を構える。

「『上等！』『上等！』」

同時に言い放った才人達にギーシュは、くるりと体を翻して言う。

「ヴェストリの広場で待っている。用が終わったら、来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。

シエスタが、何となく悲しそうな顔で一同を見ている。

「あ、あなたたち、大丈夫ですか…？」
「ん？どうして？」

アレンが尋ねた。

「前は偶然にも勝てたかもしれませんが、今度は……」

どうも前にシヤナと夏梨が勝った事は偶然の産物だと捉えられているらしい。

ギーシュが全力を出さなかったから、偶然にも勝てたのだと。マルトーは面白がっていたが、実際偶然でも無い限り勝つことは難しいのだ。

だが、二人が勝ったのは偶然でも、ギーシュの慢心の結果でもない。純然たる「格」の差である。

そこで、食事を終えた後ろからルイズが駆け寄ってきた。

「あんたたち！また、何してんのよ？」

「よお」「やあ」

騒ぎの中心にいて止めるべき立場に居たエドとアレンが軽い調子で返事する。

「なに勝手に決闘なんか約束してんのよ……。二度目じゃない……」

「いやー、済まん。済まん」

がつくりと肩を落すルイズに、エドは全く反省した様子も無く言った。

ルイズはため息をついて、やれやれと肩をすくめた。

「謝っちゃいなさいよ」

「は？なんで？」

「怪我したくなかったら、謝ってきなさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

確かに才人は強くなった。

だけでも所詮は平民に毛の生えた程度。それで一番低いランクであるドットメイジであるギーシュも難しいと考えていたのだ。

勿論、まだ全力を出した処を見ていないし、その存在をまだ平民だと信じて疑っていない他の面々も同じだ。少し学院のメイジよりは強いといった程度の認識だ。

「まず、誰からやる？」

ルイズの言葉を見捨て無視して夏梨が後ろに居た面々に尋ねる。

「俺がいく！」

手を挙げたのは才人であった。

「じゃあ、頑張れよ。俺らは見ててやるから」

「ちよつと聞いてんの？」

才人は歩き出した。そのあとに夏梨とシャナ、更にその後ろエドとアレンが続く。

「ああもう！ほんとに！使い魔のくせに勝手なことばかりするんだから！」

ルイズは、才人達の後を追いかけた。

「どついつつもりですか？」

暗い廊下を歩きながらアレンはエドに尋ねた。

「…どういうとは？」

エドはすっ呆ける。言葉の真意は解っているが、素直に答えるのもバカらしい。勿論、アレンも意図は解っている。これはある意味、確認作業だった。

「何で態々、挑発するような事を言ったのかって事でしょ？」

3人の間で既に解っている事を改めてアルが言う。

「んー。アイツの成長を見てみたいってのが一つ」

サバイバル訓練に、今朝からは剣の振る特訓も始まった。基礎体力が付いた事で剣が何処まで振れるのか、それを確認する意味が大きい。言ってしまうえば、ギーシュは実験台だった。

「それともう一つ」

此処で人差し指を立てる。このもう一つの意図まではアレンは理解していないかった。

「このルーンとやらの効果を測りたくなってな」

左手が生身ではないアレンはすっかり忘れていたが、7人の左手に刻まれたこのルーン。これの効果を実際に体験する意味もあった。何せ二人とも無手で戦う事が多い。武器を持って効果が現れるのか、折角デルフリンガーを手に入れて、勢いづいている才人を使うのは

当然だった。

「君は悪い人ですね、エドくん」

「お前には言われたくねえよ、アレン」

二人はニツと笑った。

才人の成長を解り易くするためにもう一度、ギーシュとの決闘を企画しました。

これが実にいい感じにギーシュへの対応に動くと思います。

彼は序盤は凄く悪いというか、バカみたいなる枚目キャラなので、こういう風に一度すっぱりと都合の悪い事を忘れていきます。

反省する事が出来れば、きっと彼も強くなれると思います。

孔子では在りませんが「過ちて改めざる、これ即ち過ちという」です。

シヤナやアレンのマナーというのは、アレンはクロス師匠から、シヤナはヴィルヘルミナやゾフィーから習ったものです。ヴィルヘルミナはもう少し、包丁を握れたら彼女も少しは料理が出来たかもしれませんが。千草の教育の元、ちょっとだけ出来るようにはなりませんが。

エドやネギが図書館へ出かけるのは、偏に研究のためです。文字が読めるようになった彼らは本当に研究します。ただ、エドの行動は下手をすれば、この世界では禁忌に触れる事になると思います。神学の影響を受けているこの世界で、エドの起こす風は新しい種を運ぶと思います。

アレンとエドが、ネギやシヤナ達と違うのは、この世の裏というか人の心の裏を知っているという事です。素直に全部を信じるのではなく、疑って掛かる。自らの目で耳で五感を使って確かめる、それが彼らだからです。

19・JUNCTION・S(前書き)

気が付いたら7万5000を突破していました。
このような拙作をご愛顧頂き、皆様真にありがとうございます。

才人たちのこの騒ぎを食堂2階のロフトから見ていた女性がいた。

「やれやれ、あの色ボケ。全く反省してないんだね…」

昼食に来ていた学院長秘書のロングビルであった。頭に手を当てて呆れたい気持ちになったが、ぐっと堪えて、皿に残っていたポテトを一つ、口に放り込む。

「けどまあ…」

ロングビルには気になる事があった。

それは勿論、才人達を始めとする7人のことである。

ルイズが召喚した時に、コルベールも指摘したが、普通は使い魔はメイジ一人に付き一体が基本である。ましてや古今東西、人間が使い魔になった例は記録されている限り、ない。

つまり「一人」のメイジに「複数」の「人間」の使い魔という異例の事態になっているのだ。

学院の生徒達は「平民を喚んだ」という事だけを重要視して、その主人を貶しているようだが、彼女はそんな事はどうだっていい。

今、重視されるべきはこの世界から外れてしまっている彼女とその使い魔なのだ。

「前は見逃してしまっただし、見させてもらおうかね」

普段では考えられないくらいに斜っぱな口調で、決闘会場へと向かった。

ある意味では恒例になってしまったヴェストリの広場。

相変わらず、西側にある広場なので、日中でも日があまり差さないし、人の往来も少ない。だからこそ、アレン達はここを毎朝の鍛錬の場所としていたのだ。

ちなみに鍛錬と言うのは、シャナが言い出した。随分と古風な言い方だと才人は思ったが、口に出したら引っ叩かれそうだったので、辞めておいた。

「追々、またかよ…！」

噂を聞きつけた生徒たちで、広場は溢れかえっていた。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュが薔薇の造花を掲げた。
すると、うおーッ！と歓声が巻き起こる。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民だ！」

ギーシュは腕を振って、歓声にこたえているが、その歓声の主が男達ばかりであることに、ちよっぴり傷ついた。何せ、今回の事でギーシュの女子生徒からの評価は地に落ちているのだ。

「また、八つ当たりよ」

「あんな男と良く付き合えるわね…」

と、こんな感じである。
そこへ、

「お、来たぞ」

才人達が並んでやってきた。

ギーシュも存在に気づき、才人の方を向く。

「とりあえず、逃げずに来たことは、誉めてやるうじゃないか」

ギーシュは、薔薇の花を弄りながら、歌うように言った。

才人だけを残して、全員はギャラリの中へと溶けた。去り際にシヤナが、才人の耳を思いつきり引っ張ってアドバイスを送った。正直、リミッターの掛かっている引っ張り方は痛かった。

「誰が逃げるか」

才人はそう冷静な調子でぼやく。

「さてと、では始めるか」

ギーシュが薔薇の造花を掲げて言った。

才人からギーシュまで、およそ十歩ほどの距離を取って対峙する。ギーシュは、そんな才人を余裕綽々といった感じで見つめ、薔薇の花を振った。

前回と同じく、花びらが一枚、宙に舞い上がり、その花びらが甲冑を着た女戦士の形をした、人形になった。青み掛かった甲冑がきらめき、そいつが才人の前に立ちふさがった。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

「ねえよ！」

ギーシュを睨みつける才人。

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ」

再び謳うような、演技でもしているかのような所作で一礼をする。

「従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

ワルキューレが才人に向かって突進してきた。

その突進の力を全て載せた右の拳が、才人の腹にめり込む。

「げふっ！」

才人は呻いて、地面に転がった。

「なんだよ。もう終わりかい？」

ギーシュが呆れた声でやれやれと頭を振った。勿論、バカにしてくれたのは才人だけではないので、序でに纏めて仕置きしてやろうと考えていた。

「次は誰だい？」

ルイズはハラハラした様子で、シエスタはもう気が気でない様子で。だが、アレンとエドは涼しい顔で才人を見ていた。

「おーい、その金髪。まだ終わってねーぞ」

そんな心底嬉しそうな声で、エドがギーシュに言った。

その頃、タバサは私用を終えてトリステイン魔法学院上空まで戻ってきていた。勿論、彼女にもこの世界のメイジの例に漏れず、使い魔を従えている。

「きゅい、きゅい！」

彼女が召喚したのは、今年唯一の竜種。風よりも速く空を飛ぶ、風竜である。凶暴極まる他の竜と違い、どこか人懐っこく、簡単に懐いてくれる。勿論、これはこの青い鱗の竜が幼生だと言う事もあつた。この青の竜に彼女は風の妖精という意味で「シルフィード」と名付けた。

「何？」

その声に反応したタバサが下を覗き込む。

赤い縁から見える眼下には、学院の影が大きく広がった広場が見える。

金髪と黒髪の男子二人。さらには彼らの周囲を取り囲むように大勢の生徒たちが、この抜けるような青空まで響く、囃し立てるような歓声を上げている。

この場所は普段から誰も来ないので、アレンやネギが鍛錬の場所に使っている。最近は何人も少しだけ早起きして参加するようになっていた。

しかし、時間は既に昼過ぎ。オマケに雰囲気は穏やかとは言いがた

い。

「あなたは戻って」

タバサはシルフィードに指示を出した。しかし、彼女はイヤイヤと首を振る。

「きゅいー！」

その上、抗議の声を上げだした。

風竜は人語を解する程に賢い。どうしても、骨格的に喋る事はできないが、意思の疎通は可能だ。

「戻って」

「……きゅいー」

有無を言わせないタバサの迫力に負けたシルフィード。ぽん、とレビテーションで下へ飛び降りた主人を涙目で見詰め、残念そうに寂しくその場を離れた。

タバサの方もシルフィードが離れたのを確認して広場に降り立つ。皆の視線は広場の中央に向いているので誰も気付くことはなかった。

（これはいったいどういう状況…？）

さすがのタバサも見ただけでは理解が難しい。

説明を求めて軽く辺りを見回すと、ちょうど近くにキュルケがいた。

「この騒ぎは何？」

「あら？ タバサ？」

振り向いたキュルケは少し驚いたようだったが、すぐに笑顔を見せた。

「いつ戻ったの？」

「今さっき」

「そう。おかえりなさい」

「ただいま」

短い言葉で挨拶を交す。

行動的で情緒的なキュルケ。

理論派で論理的なタバサ。

正反対な性格をしているが、二人は親友同士だった。余計な言葉は必要なかった。

「で、これは何？」

タバサが改めて問うと、キュルケは顎に人差し指を当て、少し困った顔をして答えた。

「ん〜。ま、ギーシュがまたバカやらかしたってとこかしら？」

「そう…」

事態の中心に居る人物に対して、無表情だが呆れて嘆息したタバサ。

その直後、うおおっ！ と観衆がどよめいた。

キュルケとタバサが視線を広場の中央へに移すと、才人が立ち上がった所だった。

むくりと起き上がった才人はそのまま、デルフリンガーを抜き去り、遥か高く天空へ向けて振り上げた。キーンと金属同士がぶつかり合う音がして、何かが高く舞った。

ドサリと落ちた、それはギーシユの出したワルキューレの腕だった。

「何だ、中身空っぽだったのか。どうりで切りやすい訳だ」

デルフリンガーを力強く握った才人が、今度は上から振り下ろす。脳天から胴体を真っ二つにされた戦乙女が、土へと帰っていった。

「へへ、案外簡単だったな」

切り伏せた戦乙女の向こう。才人が身の丈程の大剣を持ち、不敵に笑っている。

「こ、こんな事があるわけ無いだろう…」

それでもギーシユは目の前で起きた現実を受け入れられないでいた。アレンはこの瞬間、才人の勝ちを確信する。どれ程の実力を持っているようと、どれだけ誇りがあるうとも、目の前で起きている現実を見据えられない者に勝利はない。

才人の頭には、修行前に一護から言われた言葉が何度も繰り返されていた。

「これは剣だ。俺の武器だ」

（引けば老いるぞ）

「そうだぜ、相棒！」

剣が喋り始めたことに、どよどよと更にギャラリーのどよめきが大きくなる。

何せ世に何振りと無い伝説の魔剣、インテリジェンスソード。その現物が今まさに目の前に存在しているのだ。薄刃ではあるが身の丈程の大剣を正眼に構える。

「君。その剣で一体何ができる」

あくまでもギーシュは認めない。何かの間違いであると思っ

た。
平民に貴族は負けない。そういった社会概念の狭さが、彼の慢心を生んでいた。

「平民どもが、せめてメイジに一矢報いようと磨いた牙なんかで、このワルキューレは切れないよ」

ギーシュは心底バカにしたような様子で才人を睨む。

「うるせえよ」

（臆せば死ぬぞ）

「大丈夫だ、自分を信じる！」

そして、刀を見つめながら呟く。その呟きに答えるように、剣が応える。

才人は驚いていた。自分の体の中に、今までに感じたことの無い力の奔流が見える。サバイバル中にも何度か感じてはいたが、ここまでハッキリした感覚になったのは初めてだった。

「ふうー…」

吸った息を思いつきり吐く。

剣を握った瞬間、腹部を覆っていた鈍痛が消えた。ちらりと横目で見ると、自分の左手のルーンが煌々と光っていることに気づいた。体が羽のように軽い。少し足に力を込めれば、空も飛べそうなほどに昂揚している。

その上、左手に握った剣が自分の体の延長のようにしっくりと馴染んでいる。

（不思議だ）

自慢では無いが、今まで才人は剣など握った経験も無い。

剣を握った才人を見て、ギーシュが冷たく微笑んだ。

「まずは、誉めようじゃないか。ここまでメイジに楯突く平民がいることに、素直に感激しよう」

そして、手に持った薔薇を振った。

今度現れたワルキューレは槍を持っている。どうも才人の剣に対抗するつもりらしい。

あの造花の薔薇は、どうやら魔法の杖らしい。どこまでもキザなヤツだ。

そんなこと前回負けた時は思いもしなかったことを、考える余裕があることに驚く。

ギーシュの槍を立てて、ワルキューレが襲ってくる。軟い金属とは言え、槍のように尖らせれば、殺傷能力は十分にある。

（あれ？）

才人が見える戦乙女の動きが遅い。
顔を目掛けて突っ込んでくる槍の穂先も、まるでスローモーションのように見える。この瞬間、才人は確かに、シヤナのいう『殺し』の感覚と言うモノを漠然と掴んでいた。

(相手の動きを良く見て…)

正面切って、首だけを捻って避ける。頬が少し切れたが、その程度だ。

シヤナが送ったアドバイスはたった一つだけ。「相手の動きを良く見る」という事だけ。相手の動きが見えるなら、体は十分に付いていけている。

そして付いていけているなら、

(攻撃する事も容易い!)

避けた勢いを殺すことなく、今度は逆袈裟に切り裂かれ、ワルキユーレは胴体を真っ二つにされた。

ギーシュは最初、意味がわからなかった。

なにせ、先ほどまでその平民を圧倒していたはずの自分のワルキユーレが、ズバツと、まるで絹でも裂くかのような調子で、その平民に軽く切り裂かれたのだから。

「う、こんな事って…」

一番最初に真っ二つに斬られたことにも驚いたが、ただのまぐれ当たりだと思っていた。

しかし、現実だ。

ぐしゃっと音を立て、胴体が真っ二つになったワルキユーレが地面に落ちる。

そのまま、才人はギーシュめがけて旋風のように突っ込んだ。

「う、うわぁ！！！！」

敗北への恐怖、死の恐怖、ありとあらゆる恐怖が、ギーシュは薔薇を慌てて振らせた。

花びらが舞い、新たなワルキューレが五体現れる。既に二体斬られた。合計で7体。今のギーシュの魔力で出せる限界だった。

残りのワルキューレ五体が、才人めがけて、一斉に躍り掛かる。文字通りの決死の攻撃だった。

いずれもが槍や楯を構えている。

「っだらぁ！！」

だが、才人は止まらない。

ワルキューレを一体、また一体と真つ二つに楯ごと切り裂いていく。次から次へと迫る必殺の一撃を避け、最後の一体も紙でも破るかのように脳天から切り裂いた。

既にギーシュは限界になっている。彼を守る楯はもう存在しない。

「ひっ！！」

才人はギーシュに近づいて剣を構えて言った。

「続けるか？」

才人は呟くように言う。

思わず尻餅をついたギーシュは完全に戦意を喪失していた。震えながらギーシュは言った。

「ま、参った」

ギーシュの降参の言葉に野次馬達は一齐にわー！と歓声をあげた。

「すげー！なんだ！あの平民！？」

「あの平民、やるじゃないか！」

「ギーシュが負けたぞ！！？」

などと歓声が響いた。

その歓声を後にしながら、才人は一同の所へ戻ってきた。

「お疲れ様です」

アレンがのんびりした様子で、労いの言葉を掛けてくる。エド達もバンバンと痛い位に背を叩きながら才人を褒め倒した。さしたる怪我も無い事に安心した、ルイズが駆け寄ってくる。

「サイト！」

「勝ったぞ。ルイズ」

才人が気の抜けた声でそう言った。

「ちょっと、大丈夫なの？」

「ああ、平気平気、あんくらいどうってことないから」

そう言っただけで才人はデルフリンガーを鞘に収める。

すると才人は急に疲れを感じて、意識が遠のき、倒れた。

「ありゃ？」

意識を失った事に驚いたのは、皆同じだった。
いきなり倒れた才人に、ルイズは支えようとしたが、力が足りず
に下敷きになってしまった。

「ちよつと、サイト！」

ルイズは才人の様子に心配になって体を揺らした。
だが、

「ぐー……………」

幸せそうないびきが聞こえてくる。どうやら寝ているようだった。

「寝てるし……………」

ルイズはほつとした表情で、ため息をつき才人を見つめる。

「やれやれ……………」

肩を竦めて夏梨が呆れた。

「ま、一件落着って処でしょうか？」

「そう」

そんな様子を、ネギ達はほつと呟いた。

「全く、一体どんな魔法を使ったんだい…」

ほんの一週間ほど前には、剣も扱えずにワルキューレにボコボコにされていた才人。

それを今回はあつと言う間に熨てしまった。流石に二度目と成ると、これは疑いようがない。一度目は偶然、二度目は必然と成る。

「全く、あいつだけじゃなくて、その周りの奴らも大した面々なのかもしれないね…」

その日の夜。ルイズの部屋。

「いたた…」

才人はその後、軽い治療を受けた。

ケガといっても口の中と頬を軽く切った程度である。序でに殴られた腹にシツプを張る程度で終わった。

「本当に大丈夫ですか…?」

「ああ、たいしたことはないよ」

手当てを担当してくれたシエスタが心配そうな顔で、才人を見ている。

「ふん！勝手に決闘なんかするからよ、自業自得よ、そもそも私に

無断で…」

シエスタが心配そうに見ている横でルイズはブツブツ言っている。

「まあ、良いじゃないですか、勝ちましたし」

ネギはルイズをたしなめるように言った。

そのニコニコした笑顔を見ていると、どうにも怒りが止められてしまう。

「でもよかった、ごめんなさい…。あの時勝手に逃げて…」

自分がしたことを思い出してシエスタは涙ぐみ始める。

この世界の社会を考えれば、彼女のした事は責められるものではないし、彼らも責める気は毛頭なかった。だが、彼女の心の中ではどこかに引っ掛かっていたのだろう。

生まれて16年余り。女性に泣かれるなど初めての経験だった才人は大きく慌てた。

「別にシエスタのせいじゃないって」

「へえ、その平民のメイドには優しいのね」

窘める才人に、ルイズは何故か怒り心頭だった。可愛らしい顔は笑っているが、頭には青筋が出ている。それを見たエドがさかさ茶々を入れてくる。

「何だ、妬いてんのか。くくく…」

「兄さん…」

エドは壁にもたれながら、ニヤリとルイズを見る。

「な、ち、違うわよ!」

「慌てる所がますます怪し〜」

こういう所は何故か子供だった。自分も女性関係を指摘されると弱いのだが、生憎と此処で知っているのは、アル一人だ。弟が黙っていたら誰も知らないで済む。

「はあ…、君達はある人になつてはいけませんよ」

そんな様子を、アレンは先生のように年少の三人を見つめる。正直、人の世事と言うモノに、アラストールもシャナもとんと不案内だった。ネギと夏梨の二人は若いからであるが。

こういつた「大人」の気配りができる、一護とアレンの事をアラストールは素直に頼っていた。

そんな部屋の空気を打ち消すように、扉がバンと勢い良く開かれた。

「うーす、お疲れ。またやったらしいな」

入ってきたのは一護だった。朝、分かれてから見ていなかったの
で、何をしていたのだろうか。

「一護さんは何をしてたんですか?」

ひよこひよこことネギが寄って来る。

「いや、何。あのコッパゲを探して、この学校で一番偉い人に会って来た」

「へえ。何してきたの？」

その成果が気になるシャナが率直に聞いてくる。

「おお、その前にな…」

ちらりと後ろを見る。そこには昼間決闘騒ぎを起こしたギーシュが、何とも申し訳なさそうな顔で立っていた。正直、まだ才人の彼への印象は良くない。思わず、手当てを受けていたベットのうえで身構える。

「何しに来たの？」

シャナの剣呑な言葉を無視して、部屋を歩く。そして、才人のそばで立ち止まった。

「君」

「ん？」

才人はじろりとギーシュを睨む。傍に居たシエスタはもう気が気でない。

「なんだよ」

「そ、そんな怖い顔をしないでくれたまえ…。その何だ…」

一瞬だけ考え込むような顔になる。まだどんな事を言うべきかどうか悩んでいるような様子だった。やがて意を決したように、

「僕は君に謝りに来たんだ」

ギーシュの言葉に、才人もだが、一同揃って目を丸くした。

「今回のことは全部、僕の八つ当たりだ」

思いつきり頭を下げる。

「許してくれなどと贅沢な事は言わないが、せめて謝罪の言葉だけは言っておきたいんだ」

ギーシュは一度顔を上げ、また再び頭を下げた。

この事に才人は大きく慌てた。

「お、おい…、いいよいいよ！もう終わったことだろ、頭を上げてくれ…！」

ギーシュはゆっくりと頭を上げた。

「それと……」

ギーシュは少しはにかみながら、手を差し出した。

「君に、ぜひ友達になってほしいんだ」

「……………」

流石に此処までは予想していなかった。予想の斜め上に行く状況に一同はまた驚いたが、直ぐに嬉しそうな顔になる。特に先生であるネギの顔は殊更嬉しそうだった。

才人はその手を見つめる。

「…俺は、サイトだ。これからよろしく頼む」

一瞬だけ言いよんどんでから、差し出された手を握った。力強く絆を感じるような強さで。

「ありがとう、サイト」

ギーシュはそれを強く握り返した。

「さって、話は纏まったか…」

「そうだった。一護さん、何を話してきたんですか？」

「あ、そうだな。まあ、簡単に言っちゃえば…」

そこへドカーンと会話に割り込むような感じで爆音が響く。

「何だ、何だ？」

「何があったんだー？」

寮のあちこちから悲鳴にも似た声上がる。

「いくぞ、テメーら！」

「はい！」「解った！」「OK！」「あいよ！」「了解です！」

爆音にいち早く反応した一護が全員を声だけで叩き、窓から外へ飛び出した。

「は？」

その光景に部屋の中に残された3人は驚く。何せ五階分を飛び降りたのだ。

ルイズの制止のほうが遅かった。

「ちよつと！」

窓から下を見下ろしたルイズは6人が真下の地面に、ぴつたりと着地していたのを見た。本人達は何気なくやっていることだが、改めて才人もルイズも実力の差に愕然とした。

「追いかけるなきゃ！」

そういつと自分も6人に習って、窓から飛び降り…れなかった。そう、うっかりしていたがルイズは魔法が使えない。そう思うとももどかしかった。

「ああ、もう！ギーシュ、才人、行くわよ！」

「わ、解った！」

ギーシュに浮遊呪文である『レビテーション』を掛けさせて自分達も窓から降りる。何せ5階分を律儀に降りていては、時間が掛かって仕方が無い。

「何よー。どうしたのー？」

その三人を見ていたキュルケが窓から同時に飛び降りてきた。一緒の部屋に居たのか、タバサも一緒だった。

音の主は、巨大な土ゴーレムの肩の上で、薄い笑みを浮かべてい

た。

その正体は最近、トリステンの軍や王政府が血眼になって捜査を続けていた「土くれ」であった。頭からすっぱり黒いローブに身を包んでいる為、男か女かも判断付きにくい。

その下の自分の顔さえ見られなければ、問題はない。

「さて、美味しい具合にいったわね」

先に手に入れた情報で、この学院の壁が物理的な力に弱いと言う事は知っていた。だが、それだけでは突破するのに不安があった。「土くれ」は、大胆にも爆薬を使う作戦に出た。

爆破して、ゴーレムに乗って侵入するという、最早、盗賊や怪盗というよりも、強盗と言った方が良いような手口だった。

発破して与えられたダメージは、ひび程度だったが、これだけあれば十分だ。

どれだけ頑丈なダムも、一点を空けてしまえば、そこから瓦解する。

「あとは、これで！」

ヒビが入った壁に向かって、土ゴーレムの拳が打ち下ろされた。

『土くれ』はその瞬間、ゴーレムの拳を鉄に変えた。文字通りの鉄拳が壁にめり込む。バカツと鈍い音と共に、魔法が掛けられた壁が崩れる。黒いローブの下で、『土くれ』は微笑んだ。

「成功……」

フーケはゴーレムの腕を伝い、壁にあいた穴から宝物庫の中へ入り込んだ。

中には様々な宝物があった。普段は綺麗に整頓されているだろう、

宝物も今は爆破とゴーレムの攻撃で土や石の破片を被っていた。しかし、フーケの狙いはただ一つ、『破壊の杖』である。これが無事なら他はどうでもいい。

「さて、お目当ての品は…？」

宝物庫の中には、様々な杖が壁にかかった一画があった。その中に、どう見ても魔法の杖には見えない品があった。

全長は一メートルほどの長さで、見たことのない金属でできていた。フーケはその下にかけられた鉄製のプレートを見つめた。

立派な鉄細工のモノで、精巧に『破壊の杖 持ち出し不可』とあった。これを見つけた『土くれ』の笑みがますます深くなった。迷うことなく『破壊の杖』を取った。

その軽さに驚く。

(いったい、何でできているのかしらね?)

興味は尽きないが、今は考えている場合ではない。急いでゴーレムの肩に乗った。

去り際に杖を振ると、壁に文字が刻まれた。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

再び黒ローブのメイジを乗せ、ゴーレムは歩き出した。魔法学院の城壁をひとまたぎで乗り越え、ずしんずしんと地響きを立てて草原を歩いていく。

才人達は去っていく巨大なゴーレムを見つめながら、ルイズに尋ねた。

流石に力量差というか、体格差がありすぎる。4人は見送るしか方法が無かった。

「あいつ、何したんだ？」

「さあ？」

「おい、お前ら！」

エドの鋭い声が響く。その言葉に促されるように、4人は付いていった。

あるところで止まると、エドは無表情に壁に開いた大穴を指差す。

「あの大穴、どこに開いてるんだ？」

「あの位置は……」

ルイズ達在必死に学院内の見取り図を思い出す。

真っ先に思い出したタバサが言う。

「宝物庫」

「宝物庫お？」

エドが素っ頓狂な声を上げる。

宝物庫に大穴を開けて、何をしたのか。

整理整頓とか、目録の作成とか、そんな事務的な仕事ではないだろう。それくらいは一同にも簡単に推理する事が出来た。

「肩に乗ってた人、何か持ってたみたいですね……。チッ」

宝物を奪われた別ベクトルの怒りをアレンはぶちまける。

「泥棒か。しかし、ずいぶん派手に盗んだもんだな……」

一護は手際の良さと大胆さに、思わず感心していた。

ネギ達は初めて遭遇した、事件に嘆息していた。

その頃、草原の真ん中を歩いていた巨大なゴーレムは突然ぐしゃつと崩れ、大きな土の山になった。

そして、肩に乗っていた黒ローブのメイジの姿は、闇に溶けて消え失せていた。

19・JUNCTION・S（後書き）

今回のタイトル「JUNCTION・S」には交差すると言う意味を込めてみました。ギッシュとの仲直りと言うか、友達。フーケの討伐への流れです。

さて、次回はフーケ戦ですね。

間違いなく勝ち目無いと思うんですけども。

翌朝。

トリスティン魔法学院では、昨夜の出来事を受けて大きな騒ぎが続いていた。

何せ、学院の秘宝の『破壊の杖』が盗まれたのである。それも、巨大なゴーレムが、壁を破壊するといった大胆な方法で。その大ニュースによって、早速朝から宝物庫ではオスマンの指令を受けた、コルベールが資料の片付けと後確認も兼ねて、宝物庫に入っていた。

「やれやれ」

また彼の髪の毛が少し薄くなったような気がする。確認できただけでも、破損した物は幸いな事に宝物でもなんでもない、乱雑に放り込まれていたガラクタだけで済んだ。尤も彼にとってはどんなガラクタでもお宝には違いないのだが。壁に掛かれた文字を読んで更にため息を付く。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

壁には、生意気にもフーケの犯行声明がそう刻まれている。

「何とも大胆不敵な…」

薄くなった頭を搔く。

だが、その大胆不敵な盗みに気が付かなかったのも事実だ。

「やはり、なまっているのかもしれないね…」

コルベールの自嘲に染まった咳きは大穴から吹き込んだ風に紛れた。

その宝物庫の上階。

学院長室では、早速善後策が話し合われていた。

「土くれのフーケめ！とうとう魔法学院にまで手を出しおって！」

「衛兵はいつたい何をしていたんだね？」

「衛兵などあてにならないらん！所詮は平民ではないか！いてもいなくてもそう変わらないだろうが！！」

「そんなことより当直の貴族は誰だったんだね！」

だが、集まった教師陣は感情的に怒るばかりで、効果的な策が出せないでいた。

最後に叫びながら一人の教師がそう言ったところで、シュヴルーズは震え上がった。

昨晚の当直は、シュヴルーズであったのである。

「……」

彼女は追及を恐れて、黙りこくっている。

まさか、魔法学院を襲う盗賊などいるとは夢にも思わず、自分は当直をサボり、態々、消音魔法まで掛けて自室でぐうぐうと寝ていたのである。

そのお陰で、ルイズ達が気が付いた爆音にも全く耳に入っていなかったのだ。

「ミセス・シュヴルーズ！当直はあなたなのではありませんか！？」

教師の一人が、さっそくシュヴルーズを追及し始める。

遂に責任の矛先が向き、おろおろとし始めたシュヴルーズは顔を真っ青にして、終いには泣き出してしまった。

「も、申し訳ありません……………」

「泣いたって、秘宝は戻ってこないのですぞ！」

追求する教師の語気が増す増す強くなる。

「それともあなたは『破壊の杖』を弁償できるのですかな……！」

「わ、わたくし、家を建てたばかりで……………」

「これこれ。女性を苛めるものではない」

その窘める様な声と共に学院長のオスマンが現れた。その隣には喪失物の確認を終えたコルベールもいる。

「しかし……！オールド・オスマン……！」

窘める様な事を言うオスマンに、その教師は食って掛かる。

「ミセス・シュヴルーズは当直なのに、自室で寝ていたのですぞ！責任は彼女にあります……！」

シュヴルーズを追及していた教師が、オスマンに訴えた。

オスマンはそこで、じっとその教師を見つめる。

「ミスタ……………」

「な、なんでしょうか……？」

射すくめるような視線に、黙ってしまった。

「なんだっけ？」

「ギターです！お忘れですか！」

すっかりなのか、そもそも覚えていないのか。

いい加減、この学園にきて長いというのに、覚えていないとは学院長に有るまじき態度だ。

「そうそう。そうじゃった。ギター君。そんな名前じゃったな。君は怒りっぽくていかん」

そんな風に自らの小さな失態を隠すように、きつい一言を言う。

「さて、この中で、まともに当直をしたことがある教師は何人おるのじゃ？」

オスマンが白くなった髭を弄りながらそう言うと、辺りを見回す。教師たち全員が、名乗り出なかった。みんながみんなお互いの顔を見合すだけである。

確かに当然と言えば、当然の話である。

ここは言ってしまうえば、メイジしかいない。そんな危険な場所に飛び込むような人間が居ようはずがない。そういった慢心が今回の事件だ。

「さて、これが現実じゃ」

この哀しい現実をオスマンはただただ事実として受け止めた。

「責任があるなら、我々全員じゃ。この中の誰もがそうじゃ。私も含めてじゃ」

責任の所在は全員にあると言つ言葉。

自分を庇っているようで、庇っていないその言葉にシュヴルーズは俯いて聞いていた。

「この魔法学院が賊に襲われるなど、誰もが夢にも思つはずがなかった」

オスマンは、見事に崩され、階下の部屋にぽっかりと空いた壁の穴を思い出しながら、やれやれと首を振った。

「その油断を突き、賊は大胆にも忍び込み『破壊の杖』を奪っていきおつた」

そこでもう一度、深いため息を付く。

「…我々は油断していたのじゃよ。責任があるとするのなら、我々全員にあるということじゃ」

オスマンがそう言うと、教師の皆は黙ってしまった。確かにその通りであるのだ。

だが、何時までこんな責任追及をしている場合でもない。善後策の話し合いを始めないと、フーケは捕まらないし、『破壊の杖』も返って気はしない。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰じゃね？」

オスマンがキョロキョロと見回しながら尋ねた。

「この4人です」

コルベールが前にでて、後ろに控えていた4人を指差した。ルイズにキュルケにタバサ、そしてギーシュの4人である。その後ろでは、ネギと才人がオロオロとしながら付いてきていた。逆に一緒になつて付いてきたエドは心底、気に入らないという表情を浮かべていた。

「この子達がですか？」

シュヴルーズが尋ねた。

「はい」

コルベールが、短く答える。

他の面々はコルベールの頼みで宝物庫のリストを確認している。一護はあからさまに嫌そうな顔をしていたが、アレンは悪魔のような顔を浮かべていた。

「ふむ…、君たちが」

オスマンは、興味深そうにネギと才人も含めた6人を見つめる。その目にネギは困ってしまった。どこか心の奥底まで見透かされているような感じがしたのだ。エドは思いつきり学院長に対して、にらみを利かせている。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが前に出て、見たままのこと、聞いたままのことを説明する。

「あの、大きなゴーレムが現れて、宝物庫の壁を壊したんです」

昨日の事を思い出すような調子で喋る。大方というか、ルイズ達が見たのはフーケが逃げていく瞬間だけだったので、犯行の現場はネギ達が見た事をそのまま聞いていた。

「肩に乗ってた黒いローブを身に纏ったメイジがこの宝物庫の中から何かを……」

「たぶんそれが『破壊の杖』」

ルイズの言葉をタバサが補った。

「盗み出したあと、またゴーレムの肩に乗りました」

「その後、ゴーレムは城壁を超えて歩き出して、最後には崩れ落ちて土になってしまいましたわ」

キュルケが何とも儀的な態度で言葉を紡ぐ。

「それで？」

オスマンは説明を続けさせる。

一応、追いかけたゴーレムの最後は。

「肩に乗っていた黒いローブのメイジは、いなくなっていました」
「ふむ……」

オスマンはひげを撫でた後、溜め息混じりに言った。

「後を追おうにも、手がかりナシというわけか……」

これでは捜査の仕様もない。元々、フーケは犯行の証拠を残して

いない。残しても手がかりになるような物は全くない。だからこそ、ここまでフーケは捕まらずに済んでいるのだ。
その時オスマンが、

「あれ？」

と、頭に疑問符を浮かべた。

「どうしました」

その疑問符に答えるようコルベールが尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「それがその…」

コルベールが言いにくそうに一瞬だけ淀んで、

「朝から姿が見えませんでした」

「この非常時に、どこに行ったのじゃ」

「さあ？どこなんでしょう？」

そんな風に二人が噂をしていると、戸を行き良いよく開けてロングビルが走って入ってきた。

少しだが、疲れているようである。

「ミス・ロングビル！どこに行っていたんですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

興奮した調子で、コルベールがまくし立てる。

その空回りに怒鳴っているのをよそに、ロングビルは落ち着きを

払った態度で、オスマンに告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」「調査?」

オスマンとコルベール、そして教師達が片眉を吊り上げる。

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はあのとおり」

何とも仕事が速い。

「これが国中を騒がせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」

「仕事が早い。ミス・ロングビル」

オスマンが自らの秘書の手際を褒めた。

コルベールが慌てた様子で尋ねる。

「で、結果は?」

「はい。フーケの居所がわかりました」

短く噛み切るような言い方に、教師たちの間にどよめきと緊張が走る。

「な、なんですと!」

「誰に聞いたんじゃない? ミス・ロングビル」

「はい」

短く返事をし、説明を始める。

「近所の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入った黒いローブを着た男を見たそうです」

彼女のすらすらと流れるような説明に、学院長室に集まった一同は感心する。流石は学院長の秘書を務めているだけのことはある。

「おそらくは、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

それを聞いてルイズがあわてた様子で叫ぶ。

ネギはアレっという様子で首を傾げていた。エドは指摘しようかと思ったが、辞めておいた。彼の頭の中ではグルグルとこれからの事、一護の持ってきた交渉事が巡っていた。

「黒いローブ？それはフーケです！間違いありません！」

「そこは近いのかね？」

オスマンは、目を鋭くして、ロングビルに尋ねる。

「はい。徒歩で半日。馬では四時間といったところです」

「すぐに王室に報告しましょう！王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては！」

コルベールが叫ぶと、オスマンは首を振って、学院全体に響き渡るような声で怒鳴った。

「ばかもん！！王室なんぞに知らせている間にはフーケは逃げたしまっわ！」

その怒鳴り声に教師たちも、ルイズ達もすくみ上がる。

「その上、身にかかる火の粉は己で払うものじゃ！魔法学院の宝が盗まれたのなら、これは魔法学院の問題じゃ！それが貴族というものじゃ！」

その言葉にロングビルは薄ら笑いをした。自分の思い描いた通りに事が運んでいる。その笑顔をこれまた、ニヤリと笑顔を浮かべてその笑顔を見ている人がいるとも知れずに。

そんなことも知りもせずにオスマンは咳払いすると、杖を掲げて言った。

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ！」

だが、誰も杖を掲げず、教師たちは困ったように、顔を見合わせている。

当然の話だ。敵は国中を騒がしている盗賊。その盗賊に返り討ちにあつては、自分の面子が立たない。そのプライドが邪魔をして誰も名乗り出ないのだ。

「おらんのか？」

再び、オスマンが一同を見回す。

「かー、嘆かわしい！フーケを倒して名を上げようとするものは居らんのか！」

「じゃ、アンタが行けよ」

ボソツとエドが呟いたが、幸いな事にネギ以外には聞こえてなかったようだ。だが、聞こえていたとしても流石に老体に鞭を打って動けるほど、オスマンも若くはない。

「何で皆さん、名乗り出ないんでしょうか…?」

ネギが解らないといった様子でエドに尋ねるが、鼻を鳴らして答える。

「当然だろ。リスクの方が高いんだから」

幼い弟を諭すような調子で説明を始める。

「相手の力量もわからない。援軍が居るかもしれない。そんな分の悪い賭け、誰が乗る?」

「そう…、ですよね」

ネギは納得がいつていないような顔だったが、一応は理解した。お互いの肩に乗っていたカモヤアルは、うんうんと頷く。

「ま、その賭けに乗ろうともしない、二の足を踏む腰抜けばかりとは予想外だったけどな」

このエドの言い草にカチンと来たのか、ルイズは俯いていたが、それからすつと杖を掲げた。

「わたし、行きます!」

ルイズの言葉に教師たちが一斉に驚き、喚きだした。

「ミス・ヴァリエール?」

硬直の解けたギトーが不思議な顔をする。

「何を言っているのです！あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて……………」

「誰も掲げないじゃないですか！！！」

ルイズは唇を軽くへの字に曲げてそう言った。その言葉にうつと教師陣は黙る。

才人は口をぽかんとあけて、そんなルイズを見つめていた。対照的にエドは余計な事を言ってしまった事に頭を抱えて、いかにも嫌そうな顔をしている。

「やっちまったな、エドの兄貴」

カモの慰めるような言葉が何とも恨めしい。

「あたしも行きますわ」

ルイズが杖を掲げているのを見て、キュルケも勢い良く杖を掲げた。

これにはコルベールも驚いた。

「ツエルプストー！君も生徒じゃないか！」

「ヴァリエールには負けられませんの」

彼女の言葉は完全に対抗心からだ。そしてタバサもゆっくりと杖を掲げた。

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」

キュルケがそう諭すように言うと、タバサが答える。

「心配」

キュルケは感動した様子でタバサを見つめた。

その視線を気にした風もなく、タバサはずっとネギを見つめている。ネギが首を傾げて、その視線に目を合わせるとタバサは、すつと目を逸らした。

「？」

これに、ネギは首を傾げる角度をきつくする。そんな彼の戸惑いを余所に、ルイズはタバサにお礼を言った。

「ありがとう……。タバサ」

「いい」

タバサは相も変わらず、無表情である。流石に女の子3人が名乗り出たのに、男が行かないのは不味いと思い、ギーシュも杖を掲げた。

「僕もいきます！」

「そうか。では、頼むとしようか」

オスマンはそのやりとりを微笑ましく見つめたあと、そう言った。流石に生徒だけを行かせることには、教師たちから反対の声がある。だが、その反対の言葉を一つ一つ潰すような言葉でオスマンが言う。

「彼女たちは、敵を見ている」

これは大きな利点であった。敵を見ていると言つのは実に戦闘において、非常に有利に働く。

「その上、ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

オスマンがそう言うと、教師たちはみんながみんな驚いて、タバサを見つめた。

「本当なの？タバサ」

そのこの世界の貴族なら誰もが驚く情報にキュルケやルイズも驚いた。

「「しゅばりえ?」」

オ人たちはイマイチよくわかっていない。

そんな彼らにルイズが説明を始める。

「『シュヴァリエ』は、いろんな業績に対して与えられる実力の称号よ」

確かに貴族位の中では一番地位の低い。

それは貴族だからと、血族として継続される称号とは違い、一代限りの称号。決して金では替えぬ、手に入れられぬ、純粋な実力に与えられる称号なのである。

それを同世代の女の子が持っていると言つ事に素直にルイズも、ギーシュも驚いていた。

オスマンはそれからキュルケを見つめた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く排出した家系の出で、彼女の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」
キュルケは得意げに、燃え盛るような赤い髪をかきあげる。
次はギーシュである。

「ミスタ・グラモンは知る人ぞ知る、グラモン元帥の息子と聞いている。中々の指揮官ぶりを見せてくれるじゃろうて」

オスマンはそれから、ルイズを見つめた。

うむむ、と呻いてオスマンは必死に誉めるところを捜す。だが、正直な話、彼女に大しては褒める所が見当たらなかった。

「その……、なんだ、うむ……」

やおら何か思いついたのか、こほん、と咳をするオスマン。それから、オスマンはルイズから目を若干逸らしながら言った。

「ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、将来有望なメイジと聞いているが？しかもその使い魔は！」

その言葉にルイズは苦虫を百匹くらい噛みつぶした表情になる。

オスマンはそれから才人を熱っぽい目で見つめた。

「平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

この言葉に、ギーシュは呻いたが誰も気にしない。

オスマンは思った。彼らが、本当に、コルベールの言う通り伝説

の『ガンダールヴ』なら……。
…頼りになるであろう。

「そうですぞ！なにせ、彼らはガンダー……………」

オスマンは慌ててうつかり滑らせたコルベールの口を押さえた。
聞かれては、どこから王室に漏れるか解ったものではない。

「むぐ！い、いえ、なんでもありません！はい！」

「この三人に勝てるという者がいるならば、前に一步出たまえ」

オスマンは学院長らしい威厳のある声で言った。だが、誰もが俯
いて何も言わなくなる。

誰も一步前には出ず、オスマンは、後ろに控えていた才人達を含
む7人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する！！」

ルイズとキュルケとタバサ、そしてギーシュは直立した。そして
4人同時に唱和する。

『杖にかけて！！！！』

そう言うと、ルイズ達はロングビルの案内で部屋を後にする。
エド達はどうと、

「いつてらっしや〜い」

戸を開けて出て行くルイズ達を見送っていた。その態度にまたル
イズは簡単に低い沸点に達する。

「あんだ達も行くのよ！ここに居ない4人も呼んできて！」
「えー？」

顔をゆがめて、心底嫌そうな表情を浮かべるエド。
その顔と言葉に、更にルイズはイライラした様子になる。

「そんな学院の事情とか、そんな事はどうでもいい」

ぺいつと学院の事情は他所へと持っていく。この学院の秘宝が盗まれようが、売られようが、どうなるうが、エドにもネギにも才人にもどうでもいいのだ。勿論、それは他の4人も同じ。

「てめーで受けた話だろーが。自分でケツ拭け」

「なによ、あんだ達は私の使い魔でしょうが！」

この言葉にエドは怒りを通り越して、呆れてしまった。この期に及んで未だにそんな事を言っているこのピンクブロンドの貴族様に、心底呆れてしまった。

首を振って呆れるエドに思わず、拳を振り上げたが、ギーシュに止められてしまった。

「どうして止めるのよー！」

「ルイズ、一部の隙もなく彼の言う通りだ。僕らは自分たちの意思で決めたんだ」

「そうね。それに他人を巻き込むのは、どうかと思うわ」

ギーシュの言葉を、更にキュルケが強くする。

「彼らは人間。あなたの都合のいいように動く人形じゃない」

一番、タバサの言う事が的を射ていた。

確かに、ネギは彼らに魔法を教え始めた。才人もエドやシャナ達と一緒に鍛錬に励んでいる。だが、そこには決定的に違いがある。あくまでも才人が、6人の役に微力ながらも成りたいと言う物なのに対して、ルイズはそれが当然であるという調子なのだ。

最初の一護の決意はどこへ行ったのか。ルイズはすっぱり忘れていたのだ。

「じゃ、じゃあどうすればいいのよ!」

ちょっと泣き出しそうな声になりながらも、ルイズが拳を下ろす。

「それなりの報酬。ま、ちょっとそこには色々兼ね合いがあるから、お前じゃなくて…」

くるりとエドが振り返る。先にいるのは学院長とコルベール。

彼らの基本は、ギブ&テイク。錬金術師であるエドに言わせれば、全てのモノは何かの犠牲無しには得られない「等価交換」という言葉だろう。

この盗賊退治に対する対価を受け取ろうとしようとしているのだ。

「昨日の交渉事、しっかり聞いてもらっせ」

「…まあ、仕方あるまい」

若干、オスマンが言いよどんだが、素直に肯定した。

「うっし、じゃ、契約だ。ネギ」

「は、はい」

エドに促されて、ネギが学院長の机まで進み出る。そして懐から一枚の紙を取り出す。

「これは制約紙ギアスペーパーです。これに書かれた事は必ず果たしてもらいます」「どこまで疑り深いんじゃない？」

そんな事をばやきながらも、オスマンはサインをした。

「よし。じゃ、行くか！」

21・hero is always with

学院の門までやってきたフーケ討伐の一向の一部は、大きな声で他の面々を呼んだ。

「おい、一護、夏梨、アレーン、シャナー」

エドの怒鳴るような声に呼応するように、4人が本塔の5階から飛び降りてきた。シユタツと魔法も何も使わずに草原に着地した4人の姿に、ロングビルは驚いた。

「どうしたんです、エドさん？」

白髪頭を少し傾けてアレンが聞いてくる。

「盗賊退治」

「盗賊？」

「そ、盗賊だ」

それで解るだろと言わんばかりの顔。にやりと歯を見せて笑うエドの真意を理解した4人は二つ返事で賛同した。この態度は傍で見ているルイズが一番、面白くなかった。

ルイズとキュルケ、タバサ、そしてギーシユも遅れて馬車に乗る。馬車といっても人数は11人も居るのだから、どちらかというところ荷台のような感じだ。ロングビルが御者席に飛び乗り、出発した。

目的は『土くれ』のフーケの打倒と『破壊の杖』を取り戻すことである。

「ところでミス・ロングビル」

進み出した馬車の中では会話らしい会話が行われない。アレンは銃を磨いているし、ネギとエドは本を読んでいる。一護、夏梨とシヤナの三人は精神を高めるかのように、目を閉じていた。

そんな風に誰にも話しかけづらい空気なので、才人は勿論、ギーシュですら口を鎖していた。

しばらくして誰も口を開かなかった重苦しい空気を打ち破るように、キュルケが口を開いた。

「なんででしょうか？」

秘書らしい丁寧な言葉遣いで応える。

「御者なんて秘書のする事ではないかと思ひまして。何故、秘書などされているのです」

人の過去に土足で入り込むようなキュルケの言葉に一瞬、空気が冷え込んだ。この遠慮の無さは彼女の美德であると同時に欠点でもあると言っている。

本来なら嫌がるだろう答えにもロングビルは詰まることなく応える。

「私は爵位を剥奪されましたから。それにオスマン氏はそういった身分には拘らない人ですし」

「差し支えなければ、その詳しいはな……」

「やめましよう」

すつと話を打ち切ったのはアレンだった。

「あまり人の過去を穿^{ほじく}るのはオススメしませんよ」

普段ののんびりと大食いには勤しんでいる彼からは想像もできないほどに冷たい声だった。その寒さに才人はビクツと身を竦ませた。

「過去を知るのと同じ経験を共有する事ですよ。相当覚悟がいりま
すけど」

「いいのですよ、ミスタ・ウォーカー」

馬を手では操りながら、顔だけは此方へ向ける。

「確かにあまり話したくないことですが、いずれ話すこともあるか
もしれません」

「ま、俺たちはあんたの心に泥を付けずに聞く手段がないからな。
話したくなったら話してくれ」

遣り取りをぼんやり眺めていた一護は片目だけで、その向いた口
ングビルの目を見た。

そして、四時間後、馬車は突然動きを止めた。先には鬱蒼と茂る
広葉樹の森が広がっていた。当然の事だが、馬車の通れるような道
は整備されていない。

ロングビルは丁寧な口調で口を開いた。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

ミス・ロングビルがそう促す。どうやら、目的地近くまで来たよ
うだ。

全員が馬車を降りて、鬱蒼とした森の小道を歩き始めた。

「ダーリン、暗くて怖いわ。ねえねえ。聞いている？」

キュルケが熱っぽい表情で一護の腕に手を回す。その健康的な褐色の腕をはねのけ、一護はうざったそうに言う。

「離れてくれ…」

そんな一護の訴えなど耳に入っていないのか、キュルケは再び彼の腕に自分の腕を絡ませ、さらには自慢のメロンのような胸を押しつけた。

「だって〜、オバケが出そうだから。怖いよ〜ダーリン」

ある意味でその触っている存在は、オバケ以上の存在なのだが。そういった細かい説明は一切していないので、適当に聞き流していた。

「つか、何？ダーリンって呼ばれたくないんだけど」

「ダーリン冷たい〜」

「夏梨。なんとかしてくれ」

そう言って妹に助けを求めるが、夏梨は面白い物を見つけたような調子で言う。

「モテる男はいいよな〜」

助ける気はないらしい。寧ろ、この状況を楽しんですらいる。

ニタニタともケラケラとも笑っていない。冷静な目で実兄に好意らしきモノを寄せるキュルケをみていた。

「悪い」

誰の助けも借りられない。そう思った一護だった。勿論、彼女の猫撫で声は森中に響き渡る位に大きいので、一同耳には入っている。面白がっている者、興味の無い者、怒り心頭の者、様々だった。そんな夫々の思惑が交差する中歩いてみると、一行は開けた場所に出た。

「やっと森を抜けましたね…」

ふうつと一息つくアレク。才人も自分の服に付いた葉っぱを払う。ほんの少しだけしか歩いていないのに、体中に葉っぱが付着していた。

「怖かったよーダーリン」

「だから離れるって…」

何となく頭が痛い。

こういった一護の興味の無さを見るたびに、才人はその立場を変わってくれと思うのだった。

「くそ、羨ましい…」

「シッ！静かにして！」

その開けた場所にはポツンと小屋があった。遠目から見ただけでも、周囲の草は手入れがされておらず、嵌め込まれていたはずの窓ガラスも、そこにはない。見まがうこと無い廃屋だった。

廃屋が見える場所で、みんなは森の茂みに身を隠して、目的の廃屋を見つめた。

ロングビルの聞いた情報が間違いでないのなら、アレは間違いなくフーケの隠れ家である。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」
「あんなボロ屋に、人の気配なんかしねえぞ」

確かに、人が住んでいる気配がない。というか人が住めるような小屋ではない。

本当にフィーケはあの中にいるのだろうか。最も盗賊が一箇所に留まっている可能性は低い。既に廃棄した物なのか、それとも逃走用の荷物を隠しているだけなのか。

ココからでは流石に中の様子は掴めない。
ルイズたちは、相談を始めた。

「じゃ、奇襲ですね」

あの中にフィーケがいてと仮定した上で、この提案したのはネギだった。

彼の提案を聞いたタバサは、ちよこんと地面に座り、無表情でみんなに自分の立てた作戦を説明するために杖を使って地面に絵を描き始めた。

「作戦はこう」

まずは、偵察兼囮でもある一人が小屋のそばに近づき、中の様子を確認する。

そして、中にフィーケがいれば、挑発して、外に誘き出す。

フィーケは小屋の中にいる限りはゴーレムは作れない。なぜなら、小屋の中にはゴーレムを作り出すほどの土はないからだ。

つまり外に出ない限りは得意のゴーレムが使えない。

そこで、フィーケが外に出たところを、魔法で一気に攻撃するということにした。

タバサ曰わく、ゴーレムを作り出す暇を与えずに一気に倒してし

まうとのことだ。

中々に利に叶った作戦である。最小限の時間で、最高の効果を生み出す作戦を構築する。小隊行動に於いて、実に軍師に相応しい才覚を持っていると、ネギの服の中でカモは一言も喋らずに考えていた。

(兄貴と仮契約バックティオーして欲しいな…)

ボソリとそんな事を思う。

だが、タバサの作戦には問題があった。

「で、偵察兼囷は誰がやるの？」

才人がそう言うのと、みんなは才人を見つめた。

「俺？」

「あんたがやりなさい！」

ルイズが強い口調で才人を指差して言った。みんなの目が才人を見つめている。

結局、その目に押し切られて才人が偵察兼囷に抜擢された。

「はあ、面倒くさい…」

才人が茂みから出ようとすると、今まで黙って作戦を聞いていた一護が襟首を掴んで押し込めた。ちよつと乱暴すぎる扱いに、抗議しようとするが、目線で黙らされた。

(怖え！)

視線で人が殺せるといふ人が居るらしいが、まさに一護の視線はそれだった。

「え、えっと、何か問題がありました…？」

オロオロと言った様子でネギが聴いてくる。ここでネギは思い出した。そういえばエドは盗賊退治と説明しただけで、「盗品の奪還」と説明しなかった事を。

一護は背負った柄も唾も無い武骨な大刀を大上段に構える。

「月牙…」

ギリツと奥歯を噛み締める。持つ手に、大地を捕らえる足にも力を入れて踏ん張る。

「天衝！」

空気すら切り裂く勢いで大刀「斬月」が振り下ろされる。その斬撃が巨大な青白い閃光となって廃屋へと向かう。ガリガリと大地を抉りながら、突き進む。

「ちよ！」

誰かが声を上げたがもう遅い。小屋の上半分を塵と化して斬撃は消えた。

「…誰もいねえな」

「そうみたいね」

「じゃ、帰りましょうか」

先制攻撃の結果を見て、「盗賊退治」としか説明を受けていなかった4人は帰り支度を始める。と言っても一護が納刀するだけである。斬月には鞘がないので布を巻くだけだが。

「あわわ・・・」

ネギは盗品が壊れていないか、不安だった。塵と化した小屋の屋根の中に紛れ込んでなければいいのだが。

「何してんのよ!」

ルイズが顔を真っ赤にして怒ってくるが、4人は何処吹く風。

「何って、奇襲?」

「ですよね。もっと言ったら、ちゃんと狙った方がいいですよ、一護さん」

奇襲の是非は兎も角として、小屋全部を潰した方が良かったのは事実である。

「一兄はコントロールが下手」

夏梨の厳しい一言。

「だって、盗賊を倒すんですよ。何でお前が怒っているのか解らない」

最後にシャナの一言。確かに、彼らは「盗賊退治」としか報告を受けていない。これは間違いなくエドの連絡ミスだった。

「盗品があるのよ！壊れたら、どうすんの！」

「…え、マジで？」

とりあえず、この攻撃で中に誰も居ない事は決定的になった。誰もいないのを確認できたのは収穫だったので、そのまま小屋へと揃って近づく。

ロングビルは「周囲を見えます」と言い残してに森の中に消えた。序でにと言わんばかりに、アレンとエドも緑の中へと消えて言った。

半分だけ言えとしての様相を残した小屋に入った一護たちは、中を探索し始めた。どこかにフーケが残した手がかりがないかを見んなで探す。幸いな事に吹き飛んだのは屋根だけであって、中の家具類は埃を被っただけで無事だった。

「どこかにマントとか、フードとか、その『破壊の杖』だけ、が見つかれば…」

ガサゴソと床を這うように探していたタバサは、箱のような物をベッドの下に見つけた。

無表情でベッド下から、その無機質な箱を引きずり出す。そして、みんなが見つめる中、タバサは箱を開けた。

「破壊の杖」

そうやって彼女が取り出したのは真正正銘、学院に伝わっている『破壊の杖』だった。タバサは無造作にそれを持ち上げ、みんなに見せた。ひょいと鞆ごとルイズに渡して、マントに付いた埃を払う。

「何、もう終わりなのかい。見せ場が無くて残念だよ」

「あっけないわね！」

「これで終わりなのね…」

ギーシュとキュルケが拍子抜けした様子でそう言う。唯一、ルイズだけは緊張の糸が切れたのか、ため息を付いた。

そんな空気の中、才人は、その『破壊の杖』を見た途端、目を丸くした。

「お、おい。それ、本当に『破壊の杖』なのか？」

才人は驚いて言う。心なしか声色が震えている。

それに続けて、一護も、ネギも、シャナも、夏梨も、破壊の杖を目を細めて見つめて、皆揃って首をかしげた。

「これって…」

「多分、間違いない」

「でも何でこんな所にあるんでしょうか・・・？」

「本物じゃないなら、尚ある理由がわかんねえよ」

「そうですよね…」

うーんと考え込む4人。

「何言ってるのよダーリン、それに皆も？」

キュルケが意味が解らないといった様子で目を細める。

その時、ふと空を見上げたルイズは、青空が見えるようになった大穴から、それを塞ぐようにぬっとゴーレムが現れたのを見つけた。

「キヤアアア　　…!!」

世界を劈くような絶叫がルイズから昇った。

「何だ!？」

「どうした、ルイズ!？」

「あ、あ、あれ…」

ルイズが震える指で指す。その先には鉄の拳を振り上げる見上げるほどに巨大なゴーレムが居た。

小屋の中にいた全員があわてて外に出る。飛び出た瞬間に、先ほど自分たちがいた小屋はゴーレムによって押し潰され、完全に木の破片となった。

「ゴーレム!!!？」

「冗談じゃない!」

キュルケとがギーシュが驚く中、タバサが真つ先に反応した。自分の身長より高い杖を振り、高速で呪文を唱える。瞬間、巨大な竜巻が出来上がり、ゴーレムにぶつかる。だが、山のようなゴーレムを怯ませるには力不足に過ぎた。

一瞬だけ開いた隙を見て、次にキュルケがその豊満な胸から杖を引き抜く。一気呵成に呪文を唱えて、杖をゴーレムに向ける。すると、杖から炎が伸びて、ゴーレムを火炎に包み込んだ。

だが、やはりゴーレムにはまったく効いていなかった。

「怯むな、行くぞ!」

勿論、女の子だけに任せているギーシュではない。彼もまた、勇ましい声を上げ、近くの土をワルキューレへと替え、突撃させる。だが、如何せん体格が違いすぎる。

羽虫を潰されるかのように、青銅の戦乙女は土へと帰っていった。

「無理よ！こんなの相手に！」

「悔しいな！」

キュルケが叫ぶ。相手は30メートル近い巨人だ。魔法を使える人間が何人いても「大きさ」というアドバンテージはそう易々と覆す事は難しい。

「とりあえず逃げましょう！」

ネギが叫ぶ。それが合図となつてキュルケとタバサは一目散に逃げ出した。その後ろを追う形でギーシュも走る。

一護の肩に夏梨とシャナも飛び乗る。才人もそれに続く。逃げる中、才人はルイズの姿を探した。

「どこに行つたんだ！」

何故か、ルイズはゴーレムの背後に立っていた。

彼女は必死に呪文を唱えて、ゴーレムに杖を振りかざすが、失敗して爆発が続けざまに起きる。しかし、爆竹程度の破裂では、ゴーレムには表面が削れる程度にしか効いていない。

「何だよ、何でこんな時にまで！」

いくら傷が浅く、蚊の刺す程度しか聞いていなくとも、数あれば流石にうっとおしい。その爆発でルイズに気づいたゴーレムが振り向き、大きく窪んだだけの目で、ルイズを睨む。

（まずい！）

標的をルイズに定めた。それを見た才人はルイズに叫んだ。

「逃げる！ルイズ！」

才人の言葉にルイズは唇を噛み締めて言った。

「いやよ！あいつを捕まえれば、誰ももう、わたしをゼロのルイズと呼んで馬鹿にしないわ！」

「バカか、あいつは！」

一護は思わず舌打ちをする。ルイズの目は怖ろしいまでに真剣だ。

「あのな！ゴーレムの大きさを見ろ！あんな奴に勝てるワケねえだろ！」

「やってみなくちゃ、わかんないじゃない！」

確かに同じ体格、同じ人ならその理屈も通る。だが、相手が悪すぎる。単純に体格が大きいと言うのは、それだけで有利に働くのだ。ましてや今回の相手は30メートルの巨人。

爆竹を幾ら投げつけても無駄でしかない。これは最早、精神論ではない、単純な兵法として、軍略として覆す事も否定する事も出来ない、漫然たる事実なのだ。

だが、決して彼女はそれを認めようとしない。

「無理だっつの！」

ルイズはぐっと真剣な目で才人を睨みつけた。

「あんた、言ったじゃない」

「え？」

才人は思い出す。

「ギーシュにボコボコにされたとき、何度も立ち上がったって私に言ったじゃない！下げたくない頭は下げないって！」

「そりゃあ、言ったけどよ！」

確かに、そんなカツコいい事を言った。

だが、才人だって、死にたがりとプライドを守る事は違う事くらい理解している。

「わたしにだって、ささやかだけど、プライドがあるの！」

半ば、泣きそうな声でルイズが叫ぶ。

「ここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって絶対言われるわ！」

「いいじゃねえか！言わせとけよ！」

「わたしは貴族よ！魔法を使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ！」

ルイズは杖を握りしめる。そして叫んだ。

「敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ！」

ルイズは呪文を唱える。

そして、杖を振る。だが、やはり失敗してゴーレムの胸に小さく爆発した。しかし、その爆発も小さいもの。ゴーレムは全くびくともしない。

ゴーレムが巨大な足を持ち上げ、ルイズを踏み潰そうとした。

ルイズの視界に、ゴーレムの足が広がる。迫り来るその時を思っ
て、ルイズは思わず目をつぶった。

「行け、夏梨!!」

「はい!」

一護が力いっぱい妹の名を呼ぶ。

その叫びに素早く反応した夏梨は疾風の如く駆け、間一髪で、迫り来るルイズの体を抱きかかえて、鈍重なゴーレムの攻撃の届かない場所まで走った。

「ふう…」

夏梨が安堵のため息を漏らした瞬間、ゴーレムの足がルイズの元いた場所を踏み潰す。緑の草原だった地面がいと容易く砕け、クレーターができる。

その間に夏梨はルイズを抱きかかえて、すぐさまに一護の元へと取って返した。

「死ぬ気か!お前!」

才人は思わず、ルイズの頬を叩いた。パァンツ!と乾いた音が響く。

ルイズは呆気に取られて才人を見つめた。

「貴族のプライドがどうした!そんなもん死んだら終わりだろうが!」

その強い言葉にルイズの目から、涙がこぼれ落ちる。

「だって、悔しくて……。わたしはいつつもバカにされて」

目の前で泣かれて、才人は困ってしまった。

いつも周囲からは「ゼロ」「ゼロ」とバカにされて、凄惨な悔しかったに違いない。

思えば、ギーシュと決闘したときも、ルイズが泣いていた。

この瞬間になって、ようやく才人は気が付いた。ルイズは気が強く、生意気だけど、本当は戦いなんか嫌いな、ただの女の子なのだ。

ルイズは端正な顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。まるで子供みたいだ。

「お前がどんだけ悔しかったか、良く解る。魔法が使えないとバカにされたこともわかったよ」

「サイト…」

ルイズは黙って才人を見つめる。

みんなが寝静まった後、必死に書物を読み漁り、勉学に励んでいたことを。

魔法が使えない分、誰よりも勉強したのだルイズは、勉学に関しては誰よりもずば抜けていた。

みんなに魔法が使えないと、馬鹿にされていたルイズ。

「ひつく…、えぐ…」

魔法が支配するこの社会において、「魔法が使えない」と言うのは大きなハンデだ。ありとあらゆる目から白く見られる。それは、教師や侍従、あげくには家族にさえも例外ではなかった。

それに耐えて耐えてルイズは必死に勉学に励んでいたのである。

「大丈夫、ちゃんと俺だけはお前を認めてやるから」

ちゃんと才人も努力した。それが何処と無く自分と被ったのだ。ルイズの家族の事についてはあまり知っていない。しかし、少なくとも学院の皆には良い感じに見られていないことは知っていた。それでも、努力を惜しまないその姿が、才人にとっては輝いて見えたのだ。

「……」

ルイズの泣き顔を見ながら、才人は自分の過去の生活を恥じた。才人は元の世界・地球にいた時は、なんの自慢もすることもない平凡な暮らしをしていた。

テストがあれば、まあ普通にただ勉強をする。テストの点数も普通だった。

才人の暮らしは努力とは無縁だったのだ。なにより立ちはだからものが無かった。

高校も普通に入れたし、入学してからも特に問題は起きなかった。

「だから、」

少し抜けているところはあるかもしれないけど、少なくとも才人が生きていた 普通の生活で努力するほどの事は無かったのだ。

だから、才人はルイズを馬鹿になどこれっぽっちもしていなかった。

「俺は絶対に、ルイズを馬鹿にしないし笑わない!」

これは才人の心からの気持ちだった。

「いろんな奴に馬鹿にされても泣き言一つも言わないで歯を食いしばって頑張ってきたんだ!」

そして、ルイズは体が物凄く軽くなったように感じた。
今まででそんな言葉をかけてきた者は誰一人としていなかった。
家族でさえも、そんな優しく力強い言葉はかけてくれなかった。

だから、ルイズは辛かったのだ。頑張る自分に誰一人として味方になつてくれなかったのだから。

出会いは最悪だった。

「サイト、ありがとう…。」

どう見ても、みんながただの平民だった。

この時は頭がどうにかなりそうだった。感じたのはただ一つ、落胆と絶望だけだった。

でも、この抜けた才人を始め、皆が使い魔になつてから、少なくともつまらなかった学院生活が楽しいと思う自分がいた。

自分の『ゼロ』の由来を知ってもなお、才人たちは今まで通り、自分の事など馬鹿にせず、普通に接してくれた。

「なあ、皆、努力したルイズを笑わないよな！」

そして、才人の思う事は一護たちも同じはず。そう思って同意を求める。

「いや、知らねえ」

くるりと振り向いた才人が見たのは、胸の辺りであり得ない位に手を振る一護だった。

その態度に同意するように頷いているのは、シャナと夏梨。苦笑しているのはネギだ。

「え、ちょっとどういうことですか！」
「間違えるな、才人」

思わず一護に掴みかかったが、やはり怖ろしい視線にすくみ上がる。

だが、ここで負けるわけには行かない。対抗するように自分を睨む才人に一護は諭すように話す。

「『努力した』でじゃ、終われないんだよ。『努力する』が目的なのか……？」

「え……？」

才人は何が言いたいのか、解らなかった。ただ只管に掴みかかる。

「何かの為に力を磨くのは『当然』なんだよ！」

その言葉が胸に痛く突き刺さる。振りあげた拳は行き先を失い、一護が軽く才人を仰向けに転がした。上から見下ろしている一護の顔は、ルイズよりも更に厳しい輝きを持っていた。

「その結果が……！」

再び、斬月を抜き放ち、半ば居合い染みた要領で月牙天衝を放った。その衝撃は小屋の屋根を吹き飛ばした時よりも凄まじく、一撃でゴーレムの体を両断してしまった。

支える足を失った土の巨人は、文字通りの土へと化す。

「何なの！？まるで人間じゃ、ない………」

「すごい………」

タバサとキュルケは、巨大なゴーレムを一刀両断した事に驚いていた。

傍に居たギーシュは声も発することも出来てない。

「……………」

タバサは、オレンジの髪少年をただ見つめている。一瞬だがゾクリとするような殺気を感じた。月牙天衝を放った時に感じた怖ろしいほどのプレッシャー。

「あれが……」

他の人とは違う生き方をしているタバサにだけ、わかった。死神と言う存在がどんな存在なのかを。そして、その彼と轡を並べて戦う、傍の少年少女達もまた、同じような力を持っているのだと、推理するのにさほど時間は掛からなかった。

「これが、その結果だ……」

刀をそのまま下げ、その結果を才人に見せ付ける。

努力は目的ではない。その先の結果を求めなければ、意味が無いのだという事を、才人はこの時思い知った。

「うっし、勝オー　　利!!」

一護の声は右手を高く突き上げ、勝鬨の声を上げる。

その声を聞いて、離れていた一同は安心してやってくる。ゴーレムを両断した事で、当面の危機は去った。安全を確認した一護には、キュルケが思いつきり跳んで抱きついてきた。

「イチゴ！すごいわ！やっぱりダーリンね！」
「だからダーリンじゃねエ！」

タバサが崩れ落ちた土の塊を見つめながら、呟いた。

「フーケはどこ？」

みんなは、盛り上がった土の小山の中を探し始めた。才人はその様子を、突き刺さった言葉と共に放心したように見つめていた。

それから何気なしに『破壊の杖』を見る。

（なんでこんなものがこの世界に……………）

と、才人はぼんやりと思った。

「一体、何なんだい。アイツは……」

森の中から喜びに沸く一堂を見ていたのはフーケだった。彼女は「破壊の杖」を手に入れたのはいいが、結局持て余してしまったのだ。要は使い方が解らないと言う事である。

そこで誰でもいいから学院の人間を引っ張ってきて、使い方を知るつもりだった。

「これじゃ……解らないじゃない……」

確かにもう一度盗み出すという方法が無くはない。だが、そんな

リスクを犯すのは避けたかった。今回は上手く運べたが、次回はどうなるか解らない。今の一刀両断されたゴーレムはフーケが渾身の魔力を込めた最強のゴーレムだった。

それを容易く破られた今、切れるカードは一枚も残されていない。今から飛び出して回収するのも、分の悪すぎる賭けだった。

「仕方ないね…、ここはそのまま…」

ぐつと歩を進めた瞬間に、足が何かに絡め取られた。瞬きをする暇もなく、木の上に逆さ吊にされてしまった。

「しまった…」

気が付いた時にはもう遅い。

吊り上げられた序でに杖も落としてしまった。パサツと乾いた音を立てて、落ち葉の上に自分の杖が転がる。その様子を心底、面白そうな顔で金髪と銀髪の少年が見ていた。

「いやー、魔法使いつてのはこういう古典的な罠に弱いんだな」

「まさか、ここまで無警戒だったのは驚きでしたけど」

木の陰からぬつと現れたのはエドとアレンだった。この罠を仕掛けた犯人である。

「なあ、いい加減、正体をばらしてくれよ。フーケとやら」

「いえ、ここはミス・ロングビルと呼んだ方が宜しいですか？」

二人のシリアスな空気の中でもニヤリと笑う、憎たらしい笑顔にフーケ、ロングビルは負けを悟った。杖がないメイジは体を鍛えていない分、異常なまでに無力な存在となり果てる。

いや、たとえ杖が合ったとしても、彼らにはココから逃がさない方法があるのだろう。

「何時から気が付いてたんだい？」

釣り下がったまま、下着を魅せないようにするのに必死になりながらフーケは聞く。

「ぶっちゃけ、最初からか？」

ふつつとため息を付くような調子で、言葉を紡ぐエド。

「最初に気が付いたのはエド君なんですけどね。幾らなんでも戻ってくるの早すぎやしませんか？」

「…それだけでかい？」

確かにこれはミスだった。

馬で4時間掛かる道のりを一晩で行って帰って出来るはずがない。

「早すぎるんですよ。帰ってくるのが。それに…」

「誰も見たことの無いフーケが見られるようなへマ踏むわけないだろ」

二人の完璧な推理に完敗した。

「くそ…」

美しい顔に似合わない汚い言葉を吐いて、トリスティンを騒がした盗賊は大人しくお縄となった。

「判ったわよ、大人しく捕まるわ……」

22・For Whom the Bell Tolls (前書き)

10万PVを突破いたしました。お気に入り登録数も実に100件以上。

真にこのような拙作をご愛顧頂きありがとうございます。

今後とも頑張りますので、よろしくお願いいたします。

22・For Whom the Bell Tolls

「ふむ……。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな
.....」

盗賊『土くれ』のフーケを捕まえて戻ってきた一行は、すぐさま
学院長室に通された。棒から、まるで狩られた熊のような格好で連
行されたフーケは、最後まで弱音を吐かなかった。

連絡を受けてやってきた王国の衛士隊に引き渡す、その時まで悪
態をつけていた。あの様子では、そのうち脱獄でも考えているだろ
う。盗賊と言うのは執念深いのだ。

「美人だったもので、なんの疑いもせず秘書に採用してしまった。
ホッホッホッホ!!!」

無事に帰ってきたルイズ達からの報告を聞いたオスマンは、何と
も本能的で、実に男らしい考え方だった。彼の女好き加減が、危機
を招いたと言ってもいい。

「.....」

今、能天気な声を上げて、笑っているのは、学院長のオールド・
オスマンである。

そのさまを、疲れて帰ってきた一護たちはあきれた様子で見つめ
ていた。

「いったい、どこで採用されたんですか？」

隣に控えていたコルベールが、心底付いていけないといった呆れ

た様子で尋ねる。

「街の居酒屋じゃ。私は客で、彼女は給仕をしておったのじゃが…」

オスマンは遠くを見つめながら、回想する。

「………で？」

コルベールが呆れ半分、怒り半分の半目になって促す。
するとオスマンは照れた様子で告白した。

「おほん。それでも怒らないので、秘書にならないかと、言っ
てしまったのじゃ」

「………なんで？」

呆れて、コルベールが再び尋ねる。今日も一段と頭が光っている。

「カーーツ！」

オスマンは目をむいて怒鳴った。

ルイズたちは、ビクツと驚いた様子で縮こまる。白髪だらけで、
髭も伸びたい放題の年寄りとは思えない迫力だったので、シャナや
夏梨もびっくりした。

それから、オスマンは、こほんと咳をして、真顔になった。取り
繕っているつもりだろうが、実に女々しい態度だった。一度、下げ
た株がそう簡単に回復するほど、人間は単純ではないのだ。

「おまけに魔法も使えるというもんでな」

「ったくよ。いい年こいたジジイが」

黙って聞いていた一護が何とも身も蓋も無い事を言う。

「興奮などしてないわ！秘書としては最高じゃったから採用したんじゃない！」

「言い訳は見苦しいだけよ」

目の前の助平な老人に辟易した様子でシャナが、ぐさりと刺さる事を突き立てる。

シャナの怒りを受け止め切れなかったオスマンは、軽く咳払いをして、重々しい口調で言った。

「今思えば、あれも魔法学院に潜り込むためのフーケの手じゃったに違いない」

「普通、気が付くんじゃね」

遠くを見るオスマンの瞳に映らないように、一護の影に隠れて、ひそひそとエドと夏梨が話し合う。

「居酒屋でくつろぐ私の前に何度もやってきて、愛想よく酒を勧めるんじゃない」

「そりゃ、そうじゃん。目的が目的だし…」

何とも危機感の薄い、学院長を呆れた目で見ながら、夏梨は呟く。

「魔法学院学院長は男前で痺れます、などと何度も媚びを売り売り言いおって……………」

「校長はおべっかとか、建前っていつのを知らないんでしょうか……………」

その二人の対談にアレンも加わる。

小さい声で話し合っているが、ネギにはしつかり聞こえていた。せめて自分の心にだけ仕舞っておこうと、堅く口を鎖した。

「終いにや尻を撫でて怒らない。惚れてる？とか思っじやる？なあ？ねえ？」

最早、言い訳にすらなっていないのだが、この話を聞いていたコルベールは、先日、ついうっかりフーケにその手でやられ、宝物庫の壁の弱点について詳しく語ってしまったことを思い出した。

あの一件は自分の胸に秘めておこうと思いつつ、オスマンに合わせた。

「そ、そうですね！美人はただそれだけで、いけない魔法使いですな！」

「そのとおりじゃ！君はうまいことを言うな！コルベール君！」

同じ手口で丸め込まれてしまった、オスマンとコルベールが何か通じ合ったらしい。

こちら辺の大人の部分は理解しているつもりだったが、いざ目の前にしてみると、実に汚いモノだと、才人は呆れながら思った。勿論、それは一護も同じ。ネギやシャナ達に見せないようにと、必死に気遣っている。

「この人、殴っていいですか？」

「やめとけ、才人……」

才人とルイズ、そしてキュルケとタバサ、四人は呆れて、そんな大人の教師の二人を見つめている。ギーシュだけは何とも言えない、

キラキラとした瞳で二人を見ていたが、また確実にモンモランシーに殴られるだろうと、後ろから見ているアレンは辺りを付けた。そして、咳払いをすると、オスマンはさっきのとは打って変わって厳しい顔つきを言った。

「さてと、君たちはよくぞフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り返してきた」

ルイズ、キュルケ、タバサ、そしてギーシュの4人は誇らしげに礼をする。

その様子を微笑みながら見つめるコルベール。

「フーケは、あの後、城の衛士隊に引き渡した。そして『破壊の杖』は、無事に宝物庫に戻した」

犯人も捕まり、盗品も元に戻ってきた。

「これにて一件落着じゃ」

オスマンは、微笑みながら一人ずつ頭を撫でた。

「君たちの、『シユヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじゃろう」

今回の件で四人には爵位が与えられる。

これで、何らかの報奨があれば、王宮が4人の実力を認めたと言う事だ。

「ミス・タバサはすでに爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

3人の顔が、ぱあつと輝いた。だが、こんな時でもタバサは無表情である。

嬉しいのか、嬉しくないのか。勳章などと言うものに縁遠い生活を送っていた7人には与り知らぬところだろう。

「ほんとうですか!?!」

「本当じゃ。いいのじゃ、君たちは、そのぐらいのことをしたんじゃないからな」

ルイズとキュルケが喜ぶ。

「ありがとうございます!」

ギーシュは学院長とコルベールに向けて、大きく頭を下げた。

「よかったですね」

ネギも心の底から微笑みながらそう口にする。

そんな様子の使い魔にルイズは、ネギたちを見つめた。

「…オールド・オスマン。彼らには何もありませんか?」

するとオスマンは、顔を苦くして言った。

「…残念ながら、彼らは貴族ではない」

確かに、彼らにも報奨があつてしかるべきだろう。

だが、この国は、この世界は、魔法使いだけが、もっと言えば貴族だけが得をするようにできている。それをオスマンは判っていた。

「そんな！」

ルイズは思いっきり叫ぶ。

「とことん、腐った国だな」

ルイズの叫びを無視して、エドが何のオブラートにも包まない、心の底から打ち出した悪態を吐く。

その言葉にルイズもギーシュも、トリステイン貴族の端くれとして反論の一つもしたくなかったが、それに足る材料を持っていないことに気が付いた。

「…エドワード君の言う通りじゃ。この国は既に終焉を迎えつつある」

オスマンは重苦しい声で、エドの悪態を受け止めた。

「功績を挙げたものが、評価されておらん。そんな体制が国家として許されるとは思えん」

今、王宮に蔓延る賄賂や汚職。

全部を駆逐できるとは思っていない。人が欲望を持っている限り、それは絶対だ。政治家や王族だって、清廉潔白の聖人君子ばかりではない。それを重々承知して、オスマンは言葉を紡ぐ。

「だが、いずれワシの様な老いぼれが去った後、新しい世代がしてくれると信じておる」

そう思って、彼はこの座に就いているのだ。王宮からの様々な圧

力に耐えながら。

オスマンは頭を下げた。

「この老いぼれの頭一つで感謝が足りるとは思わん。じゃから、ちやんと約束は果たすぞ」

「その言葉、嘘じゃねえな」

「無論じゃ」

オスマンの噛み切るような言葉には、少しばかりの決意が込められていた。

「…その言葉、聴けて良かったよ」

エドが交渉は済んだとばかりに、学院長室に設えられたソファーに座った。一護たちもそのソファーに並んで腰を落ち着けた。その様子を見届けるとオスマンは、ポンポンと手を打った。

「さて、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ」

その言葉にルイズ達の顔がぱあっと華やぐ。

「『破壊の杖』も戻ってきたことだし、予定通り執り行っ」

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりましたわ！」

「今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。用意をしてきたまえ。せいぜい、着飾るのじゃぞ」

4人は、礼をするとドアに向かった。

だが、一護たちは座ったまま、動かない。

「どうしたの？」

「先に行つててください」

ネギがニツコリと笑つて言った。

ルイズは心配そうに残つた面々を見つめていたが、頷いて部屋を出て行つた。

重く、軋んだ音がしてドアが閉まる。

「なにか、私に聞きたいことがおありのようじゃな」

一緒に残つた才人が無言のまま頷く。

「言つてごらんさい。できるだけ力になろう」

先ほどの言葉をなぞるようにオスマンが言った。

「君たちに爵位を授けることはできんが、せめてものお礼じゃ」

それからオスマンは、コルベールに退室を促した。

『ガンダールブ』の話が聞けなくなつたことに、がっくりとしたコルベールが、肩を落として部屋を出て行く。コルベールが出て行つた後、才人は口を開いた。

「あの『破壊の杖』は、俺が元いた世界の武器です」

その言葉に、オスマンの目が光る。

「ふむ。元いた世界とは？」

「俺は、こつちの世界の人間じゃない」

「本当かね？」

確かに、オスマンが疑問に思うのも無理は無い。

いきなり、「異世界から来ました」と言って信じられるほど、柔軟な思考をしている人は少ない。

「本当です。俺たちはルイズの『召喚』で、こっちの世界に呼ばれたんです」

「なるほど。そうじゃったのか……」

だが、オスマンは違ったようだ。彼らがココに来てからの事、それを思い出しながら目を細め、思案する。

「あの『破壊の杖』は、俺たちの世界の武器だ。あれをここに持ってきたのは、誰なんです？」

オスマンは、ため息をついた。

「あれを私にくれたのは、私の命の恩人じゃ」

「その人は、どうしたんですか？」

ネギが割って入って尋ねる。

「死んでしまったのじゃ。今から、三十年も前の話じゃ」

「三十年!？」

その長い年数に才人は驚いた。

「そうじゃ。その時、私は森を散歩していた」

その『杖』の主と会ったときの事を思い返す。

「じゃが、ワイバーンに襲われたのじゃ。そこを救ってくれたのが、あの『破壊の杖』の持ち主じゃ。彼は、もう一本の『破壊の杖』で、ワイバーンを吹き飛ばすと、力なくぼったりと倒れてしまった」

言つ内に段々とオスマンの声が低くなっていく。

「私は彼を学院に運び込み、手厚く看護したのじゃが、看護の甲斐なく……」

「亡くなってしまったんですか？」

言葉の最後をアレンが引き継いだ。オスマンは重々しく頷いた。

「彼はベッドの上で、死ぬまでうわごとのように繰り返して叫んでいた。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな。きっと、彼は君と同じ世界から来たんじゃないだろうか」

取り出した水キセルを銜え、ふうつとため息と共に煙を吐いた。

「でも、彼がどんな方法でこつちの世界にやってきたのか、最後までわからなかった」

「くそ！せつかく手がかりを見つけたと思ったのに！」

才人は机を叩いて、思いつきり嘆いた。

オスマンは黙って聞いていた一護達を見て言った。

「じゃあ、君たちも同じ世界から来たんのかの？」

今まで黙っていた一護が口を開いた。

「いや……」

「ふむ。そうなのかな？」

「そうだ。俺たちのいた世界と才人がいた世界は別なんだよ。いや、正確に言つとそうでもないか」

一護は重苦しそうな声で語り始める。

「もつと言つと、来た世界が違うのはエドとアレンの方だ」

その言葉にオスマンは目を細めて言った。

「なぜ、そう言い切れるのかな？」

「その説明は、少し避けさせてもらつ。余計な負担を与えたくないし…」

「まだ、ワシを信じきれておらんと…?」

少し首を傾げたオスマンだが、一護の態度と対応は尤もだった。まだ自分を信じてくれていない。そんな信頼の置けない相手に、自らの秘密を暴露する者はいない。だが、それは逆に言えば、自分を信頼できるようになれば、自ら話すといっているのだ。

「なるほど、よくわかった」

オスマンは大きく頷いた。

「じゃが、君たちが別々の世界から来たというのなら、どこが違うのかな？」

そう言つと今度は才人が答える。

「単純に言えば、俺たちの世界で存在するものが、他の世界では存

在していないって具合でしょうか」

オスマンが感慨深く考える。

「ふむ。君たちが別々の世界からやってきたというのは大体はわかった」

こちらからの説明は大体これで終わった。

今度は此方から質問する番だ。その質問は代表して、ネギが聞く事になった。

「この左手の模様は何ですか？」

「俺もこいつのこと聞きたかった」

その質問に才人が割って入る。

「この文字が光ると、何故か武器を自在に使えるようになるんです」

オスマンは、話そうかどうかしばし悩んだあと、口を開いた。

「これなら知っておるよ。ガンダールヴの印じゃ。伝説の使い魔の印なんじゃよ」

「伝説の使い魔？」

ネギが好奇心いっぱい歳の歳相応の笑顔で、聞く。

その姿を夏梨は、子供っぽいと見ていた。

「そうじゃ。その伝説の使い魔はありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ」

「なるほど」「そういう事ね」

感心しているのはネギとシャナだけだ。他の面子はどうでもよさそうな声。

それとは違って才人は首を傾げる。

「どうして、俺たちがその伝説の使い魔なんか？」

「わからん」

オスマンはきっぱりと言った。

「流石に、何故君達が『ガンダールブ』に成ったのか、それは判らんのじゃ……」

「何でよ？」

夏梨が疑問を挟む。

「何せ、資料が少なすぎる。どんな姿だったのか、どんな武器を扱ったのか、遠く歴史の彼方じゃ」

「そんなの聞いてどうすんだ？別にいいだろ」

エドが耳をほじりながらそう言った。

「資料がねえなら、探す。それが俺の、いや、俺たちのスタンスだ」

「はあ……」

才人は思わずため息をつく。どうにも道のりは遠そうだ。

取り敢えず、このルーンとやらが毒でない事が解っただけでも、どんな物なのかも解っただけでも、十分な収穫だろう。これから謎を紐解いていけばいい。

「力になれんですまんの」

オスマンは再び、頭を下げた。

「ただ、これだけは言っておく。私はお主たちの味方じゃ。ガンダ
ールヴたちよ」

オスマンはそういうと、みんなに握手をした。みんなは黙ってオ
スマンの手を握り返す。

「いろいろあったが、よくぞ、恩人の杖を取り返してくれた。改め
て礼を言うぞ」
「いえ……」

才人が疲れた声で返事をする。

「お主らがどういう理屈で、こつちの世界にやってきたのか、私な
りに調べるつもりじゃ。でも……」

そこでオスマンが言葉を区切る。

「でも、なんです？」

「何もわからなくても、恨まんでくれよ」

あっけらかんとした様子で言う。

だが、その言葉は親切で言った事であっても受け入れるわけには
いかない。

「なあに、こつちの世界も住めば都じゃ。嫁さんや、婿だつて探し
てやる」

「いや、そういう訳にはいかねえ。俺たちは絶対に帰らねえと」

一護がオレンジの髪を無茶苦茶に掻き毟りながら言った。

「俺たちの世界には待つてる奴らがいる。そいつらに借りだって返してねえ」

「そう。遊子やヒゲ親父も心配して…、待つてる」

固い決意を決めた一護と夏梨。彼らには待つている仲間と家族が居る。

「そうですね。決着を付けて戻るって言ってしまいましたし」

歩くべき道を決めたアレン。彼には誓い合った仲間と意がある。

「私はまだ、ちゃんと決着が付いてない」

伝えるべき言葉を紡いだシャナ。彼女には戦うべきライバルと意見を伝えたい人が居る。

「僕も見届けないといけませんし」

考え抜いた未来を見据えたネギ。彼には果たさなければならぬ目的がある。

「そうそう、諦められないことがあるんでな」

共に決めた誓いを思い出すエドとアル。彼らには戻るべき家がある。

6人が凄く真剣な表情をしたので才人やオスマンはこれには驚い

た。

（余程の大切な人たちがおるのじゃな…。余計な気回しだったかもしれん）

そう、オスマンは思った。

「そうか。できるだけ君たちの力になれるよう、私も頑張るとしよう。指し当たっては…」

「あの制約書ギアスペーパーに書かれた事を履行してくれ」

「良からう、エドワード君の言う所の等価交換という奴じゃな…」

そう言って、オスマンは紙とインク瓶を取り出し、羽根ペンを少しだけ浸し、サラサラと何事が掻き始めた。

22・For Whom the Bell Tolls (後書き)

エドの学院長への悪態は半ば、自嘲染みた言葉です。

彼の国も軍政で、軍での賄賂や汚職が横行しています。軍で手柄を上げる事が、政治家的な出世になるといふのは、正確な政治体制のあり方ではないでしょう。

彼らの決意は夫々方向が違います。

それが衝突の原因になったり、共闘の理由になったりする事もあります。

やっぱり女性陣は実に可愛らしい子たちばかりです。

性格に難のある子が多いですが、その尖り具合を上手く削れる事が出来ればいい感じになると思います。

23・PHANTASIA

その夜、二つの月が幻想的に輝く中でのお話。

アルヴィーズの食堂の上の階は、大きなホールになっている。この学院は貴族の子弟が通う。時々、このような調子で舞踏会が開かれるのだ。年に何度もある行事ではないので、皆一様に気合が入る。フリッグの舞踏会はそこで行われていた。

本塔の玄関から、ここに到るまでの道筋は綺麗に磨かれ、ホールの中も綺麗に飾り付けられていた。

「はあ」

才人はバルコニーの枠にもたれかかり、華やかな会場をぼんやりと見つめている。

中では着飾った生徒や教師たちが、豪華な料理が盛られたテーブルの周りで歓談している。

才人は外からバルコニーに続く階段からここまで上ってきて、料理のおぼれにありついて、中をぼんやりと眺めているのだった。

どうしても場違いな気分がして自分は中に入ろうとは思わなかった。

「うーん、はむ、てが、あむ、かり、もぐ、無しでふか…」

才人は入っていかうと思わなかったが、アレン達は平気な顔をして、輪の中に入っている。特にアレンは大量の食事を前にして、遂に理性が崩壊したのか、テーブルの上にある、豪華な料理をガツガツと目にも止まらぬ早さで食べている。その速さは手品のようにだ。

それを見て、貴族たちは、顔をしかめている。だがお構いなしに食べている。

「アレンさん。周りが厳しいです…」

そういう風にネギが窘めるが、流石に1日分の食事を抜いたアレンには意味が無かった。

黒いパーティードレスを着たタバサもそれに加わり、一生懸命にテーブルの上の料理と格闘している。二人とも細い体だが、どういった圧縮率で胃に入っているのだろうか。

才人のそばの枠には、シエスタが持ってきてくれた肉料理の皿と、ワインの瓶がのっている。

才人は手酌で一杯グラスに注ぐと、それを飲み干した。

「相棒、大丈夫か？さつきから飲みすぎじゃねエのか？」

バルコニーの枠に立てかけてあるデルフが心配そうに言う。
相変わらず口の減らない剣だが、根は陽気で楽しい奴なので、今みたいな気分ときには、愚痴を聞いてくれて都合がいい。

「うるせえ。家に帰れるかもと思ったのに思い過ぎだったんだよ」

思いつきり愚痴をこぼす。少し酔っているようだ。

「これが飲まずにいられるかってんだ!!」

「こら、お前、未成年だろ。酒なんか飲んで良いと思ってんのか？」

やれやれと言った様子で才人の下へやって来たのは一護だった。
後ろから、思いつきり呼びかけられたので驚いてしまった。

「あ、一護さん…」

「ったく、こんなに開けて…。お前、未成年じゃなかったけ？」

半分ほど開いたワインの瓶を見ながら、一護は誰に尋ねるでもなく訊いていた。

「確かに未成年ですけど、こんな時、酒飲みの気持ち解るんですよ」

「で、剣相手に管巻いてた訳か…」

やれやれと言った様子で首を振る。一護は案外、堅い性格なのだ。酒もタバコも20歳になってからと決めている。20になってもしないかもしれないが。

一護もバルコニーの手すりに寄りかかって、ホールの方を見る。ホールの中では、キュルケがたくさんの男に囲まれ、笑っていた。キュルケが何かに気が付いたらしくこつちを見た。そして、笑顔になってこつちに向かって来る。大方、一護を踊りに誘おうとしているのだろう。

「ダーリン！あたしと踊りましょ！！」

一護の腕に手を回してキュルケが熱っぽく言う。やっぱりそうだった。

先ほどの男子陣は悔しさからなのか嘆いている。

キュルケの色気に、普通の男ならこれでイチコロだが、一護には効いていなかったようだ。

「ちょっと考えたい事があったな。後にしてくれ」

「解ったわ、それじゃ後で」

憂いを帯びた一護の表情を見て、仕方なくキュルケはホールの中に戻って行った。

ホールの食事スペースでは相変わらず、アレンはガツガツと食べている。いつの間にかアレンとタバサの食べ比べは、大食い競争へと発展していた。これには、人だかりができていて、応援している人もいる。

シヤナと夏梨は、二人で何か考えたい事があるらしく、さっきからホールの壁に寄りかかって何か話し合っている。よほど聞かれたくないらしく、ネギが来た時も丁寧になんとも断わっていた。

エドはというと、壇上で何か大音声で喚いている。対面にはギーシュと、太っちょの少年、マリコンヌが青ざめた表情で座っているのが見えた。

だが、みんなそれぞれに、パーティーを満喫しているようだった。

「なあ、才人よ」

「何です、一護さん」

一護が口を開いた、その時にホールの大きな扉が開き、ルイズが姿を現した。

門に控えた呼び出しの衛士が、ルイズの到着を告げる。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなありい!!!」

相変わらず、長い名前だと思っ。

だが、扉を開けて出てきたルイズを見て才人は息を飲んだ。

ルイズは長い桃色の髪を、バレッタにまとめ、ホワイトパーティードレスに身を包んでいた。

その姿を見たら、どんな男でも、たぶん同じ感想を言うだろう。

『とても似合っていて、きれいだと』

主役が全員揃ったことを確認した楽士たちが、小さく、流れるように音楽を奏で始めた。

曲のセンスにあまり詳しくない才人もいい曲だと思った。

遅れてやってきた、ルイズの周りには、その姿と美貌に驚いた男たちがアリののように群がり、さかんにダンスを申し込んでいた。

「ああいうのは、どこの世界でも変わねえんだな」

ボソリと一護が呟いた。

今まで、ゼロのルイズと呼んでからかっていたノーマークの女の子の美貌に気づき、いち早く唾をつけておこうというのだろう。やっぱり貴族のやることは汚い。

「そうですね…」

ホールでは、貴族たちが優雅にダンスを踊り始めた。

しかし、ルイズはダンスの誘いをすべて断ると、バルコニーに佇む才人と一護に気づき、近寄ってきた。光と闇の境界線は、実に幻想的にルイズを煌かせていた。

ルイズは二人の前に立つと、腰に手を当てて、首をかしげた。

「楽しんでるみたいね」

「別に…」

才人は眩しすぎるルイズから、目を逸らす。一護はそれを見て、ニツと少しだけ笑った。

「意外と似合ってたな」

「馬子にも衣装ってやつさね」

一護とデルフリンガーが褒めているのか、褒めていないのか。両方に取れる事を言う。

「うるさいわね」

ルイズは一護と剣を睨むと、腕を組んで首をかしげた。

「お前は、踊らないのか？」

才人はルイズから目を逸らして言う。

可愛らしくて直視できない。余りにも初心な反応である。

「相手がいないのよ」

ルイズは手を広げた。勿論、これは嘘だ。それが直感で才人には解った。

「いっぱい、誘われてたじゃねえかよ」

ルイズは、何も答えずに、ずっと才人に手を差し伸べた。

「え？」

「踊ってあげても、よろしくつてよ」

目を逸らして、ルイズはちょっと照れた様子で言った。いきなり申し込まれたルイズの誘いに、才人は戸惑う。

(何をいきなり言うのだ…！こいつは…！)

と思った才人は、顔が真っ赤に照れて仕方がなかった。

嘗てドラマか、何かで見た見たヨーロッパの洋画の世界に入った気分になる。

「踊ってやれよ」

一護が促す。

「そつだぜ、女の誘いは受けるもんさ！」

デルフリンガーも乗っかる。

「踊ってください、じゃねえのか」

だが、どうにもこの誘い方で受けるのは嫌だったので、意地を張る。

「うわ、意地っ張り！」

「なんて、贅沢な奴だ！相棒はよ！」

と一護もデルフも茶化してくるが、才人は無視した。

しばらくの沈黙が流れる。するとルイズはため息をついて、先に折れた。

「今日だけだからね」

ルイズはドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げて才人に一礼した。

「わたくしと一曲踊ってくださいませんこと。ジェントルマン」

そう言って顔を赤らめるルイズは激しく可愛くて、綺麗で、清楚であった。

才人は丁寧にルイズの手を取る。そして、そのままホールの中ほどへと歩んでいく。

「ダンスなんかしたことねえよ」

「わたしに合わせて」

ルイズは才人の手を軽く握る。

才人は見よう見まねで、ルイズに合わせてステップを踏んで踊り出した。

ルイズは、才人のぎこちない踊りに文句一つも言わず、澄ました顔でステップを踏んでいる。

「ねえ、サイト。信じてあげるわ」

「なにを？」

ぎこちないダンスの最中、突然にルイズが口を開いた。

「…その、あんたたちが別の世界から来たってこと」

ルイズは軽やかに、ステップを踏んでそう呟いた。

揺れるプロンドの向こうに見える、その顔は実に可愛らしかった。

「なんだよ。信じてなかったのか？」

憤慨半分、当然半分といった調子で才人が聞く。

「今まで、半信半疑だったけど……」

言いにくそうに、ルイズは言葉を続ける。それから少しだけ俯いた。

「ねえ、帰りたい？」

心を決めて、聞く。

「ああ。帰りたい。でも、どうしたら帰れるか見当もつかねえから、ま、しばらくは我慢するよ」
「そうよね」

ルイズは無言で踊り始めた。

それからルイズはちよつと頬を赤らめると、サイトの顔から目を逸らした。

そして、再び口を開いた。

「ありがとう」

突然、飛び出た5文字の言葉。ルイズが礼など言ったので、才人は驚く。

ダンスに才人を誘ったことといい、今日のルイズはどうかしている。

(明日は大雪でも降るのか?)

可愛さに打たれた才人は、随分と失礼な事を考えていた。

「その…、私のために怒ってくれたし…、サイトの言った言葉に私…すつきりできたのよ」

突っかかりながらではあるが、確実にルイズは進んでいる。

「こんなに晴れ晴れとした気持ちになれたのは、皆のおかげなの…」

ルイズは何かを誤魔化すように、そう呟いた。

「気にすんな。当然だろ」

「どうして？」

素直な疑問を浮かべたルイズが聞いてくる。

「俺はお前の使い魔だろ」

才人はそう言って、ルイズに笑いかけた。

そんな様子を一護は才人が残していった料理を摘みながら、バルコニーから眺めていた。

「ああ、いい感じだな…」

デルフリンガーも呟く。

「その通りだな一護よお！相棒は！てーしたもんだ！」

二つの月がホールに月明かりを送り、ロウソクと絡んで、幻想的な雰囲気をつくりあげている。

そんな中、一護はワインをすつと横へと押しやった。

「一護は酒飲まねえのか？」

「ああ、飲めなくてな」

踊る使い魔とその主人を見つめながら、一護は笑いながら言った。

「そっぴやよ、何、言おうとしてたんだ？」

「ん？」

デルフリンガーの疑問は尽きない。

「いや、昔な。俺の友達ダチと約束した事があってな…」
「へえ、すげえ奴なのか？」

その巨人と悪魔の両腕を持つ男を思い出しながら、一護は語る。
正直、昔語りなど趣味ではないのだが、何となく才人の愛剣である
デルフには聞いて欲しいと思ったのだ。

「ああ。そいつとの約束。『お前が命賭けて守りたいものなら、俺も命賭けて守ってやる』って」

「随分とカツコいいな！」

「その代わり、『俺の命賭けて守りたいものを、お前も命賭けて守ってくれ』ってよ」

一護と巨人の約束。

それは後で竜の姫と、星の姫と、弓引きも加わった。皆、お互いに守りたいものを出して、お互いが守りあう、そんな信頼に満ちた、命がけの関係。

「あいつの命、賭けて守りたいモノが何なのか。聞いておきたかったんだけど…」

聞くまでも無かったと一護は思う。出来れば、何で守りたいのか

も聞いておきたかったが、何れまた、その機会もあるだろう。

ホールでは段々と軽くなってきたステップを踏む二人が居る。

その傍ではネギとタバサのペアが、実に常道なステップを踏んでいた。

「あの二人、お上手ですね」

そう言って、アレンがやって来た。手には山盛りの料理を抱えている。取り皿というか、そのまま大皿を持ってきたようだ。随分と無礼なというか、不躰な行動である。

「だな」

「あ、一護さんも食べます？」

皿に乗っているのは、ハムだろう。一護は持ってきた箸で何枚か摘んで口へと運ぶ。二人は無言でホールを眺めながら、食べていた。傍では喋る剣が盛り上げるように、

「おでれーた！使い魔がメイジと踊るなんざ、見たことねえや！」

そう大きな声で喚いていた。

月はまだ、高く、夜は長い。

煌々と光る月は、皆を等しく照らし、また沈む。

23・PHANTASIA（後書き）

ようやく1巻完結です。

長かったとは思いません。大体1巻分が24話の計算で進める計算にしています。

それで大体1章が12話の計算で行きます。足りない時はフリーアグネやラカン達に登場してもらおう事にします。

いよいよ3章、2巻へと進みます。

2巻のメインイベントとなると姫様の来訪とアルビオン行きです。

2章のEDテーマはシドの「ドラマ」でお願いいたします。

24・memorys in the dream(前書き)

第三章開始です。

今回は、アレンの特技が生かされるかも…？

曲は玉置成実「BRIGHTDWAN」でお願いします。

24・memorys in the dream

ネギとエドの不眠不休のメンテナンスで、3日ぶりに機能を回復させたドライオマ魔法球。

今回からギーシユも交えて、魔法の修行が始まる。

各自、課された課題をこなしつつ、休息を取っていた。

「おやすみなさい」

今日の、実時間で言うと1日分の修行を追い、皆、自室へと引き上げていく。部屋数の都合により何人か相部屋になったが、本人たちから文句がでなくて、部屋割りを決めたネギは内心ホッとしていた。

その夜。

ルイズは夢を見ていた。

その舞台は、トリスティン魔法学院から、馬で三日ほどの距離にある生まれ故郷のラ・ヴァリエールの領地にある屋敷が舞台だった。夢の中のルイズは屋敷の中庭を走り回って逃げている。

「ルイズ、ルイズ、どこに行ったの？まだお説教は終わっていませんよー！」

そう言って、屋敷中を駆け回り、騒ぐ母からルイズは逃げている。その理由は簡単であった。

(ふん、もうお勉強なんて、嫌よ！)

ルイズは出来のいい姉たちと魔法の成績を比べられ、物覚えが悪いと叱られていたのである。そして、その最中に遂に逃げ出したのであった。

「ルイズお嬢様は難儀だねえ」

「まったくだ。上の二人のお嬢様はあんなに魔法がおできになるというのに……………」

召使いたちの喋り声が聞こえる。

(何よ、何も知らないくせに！)

上の二人の姉は魔法が上手にできるのに自分だけがまだ一つもできなくて物覚えが悪かったのだ。そして、そのことを母に言われたとき、ルイズは悲しくて、悔しくて、歯噛みした。

そして、捜している召使いたちから逃げて向かった場所は、彼女自身が『秘密の場所』とよんでいる、中庭の池だ。この場所はまだ誰にも知られていない。

そこは、ルイズが唯一安心できる場所であった。

(ここに隠れてれば、絶対にバレない！)

あまり人の寄りつかない、うらぶれた中庭。

池の周りには季節の花々が咲き乱れていて、小鳥が集う石のアーチとベンチがある。

池の真ん中には小さな島があり、そこには白い石でできた東屋が建っていて、その小さな島のほとりに小船が一艘浮いていた。情景

だけ見れば、実に素晴らしい場所である。

元々は舟遊びを楽しむための小船であったが、今ではその見る影もない。

軍務を退いた地方の領主である父は近隣の貴族との付き合いと狩猟以外に興味がなかった。

母は、娘たちの教育とその嫁ぎ先以外目に入らず、上の姉たちもそれを知ってか知らずか、魔法の研鑽に時間を惜しまなかった。

（お母様のバカ！）

そんな嘗ては月が、夜天に昇るたびにちやいを放たれた小船も、今では誰一人使うことはなくなり、忘れ去られたまま、哀しげに止まっていた。

そんなわけで、忘れさられた中庭の池と、そこに浮かぶ小船など、この屋敷にはルイズ以外気に留める者などいなかった。

ルイズは叱られると、決まってこの中庭の池に浮かぶ小船に逃げ込み、やり過ぎるのである。

そして、今日もいつも通り、あらかじめ用意してある毛布に潜り込み、のんびりと小船の中で空を眺める。こうやって時間を潰して、母の説教から逃げるのだ。

「…ん？」

中庭の島にかかる霧の中から、一人のマントを羽織った立派な貴族が現れた。

年はおおよそ十六歳ぐらいだろうか？夢の中のルイズは、六歳であるから、十ばかり年上に見える。

「泣いているのかい？ ルイズ」

つばの広い、羽根つきの帽子に隠れて、顔が全く見えない。でも、その少し反った声で、ルイズは彼が誰だかすぐにわかった。子爵だ。最近、近所の領地を相続した年上の貴族である。ドキッとルイズは胸を熱くした。憧れの子爵。領地が近くのために、晩餐会をよく共にして、父と彼との間で交わされた約束。

「子爵さま、いらしてたの？」

慌てて目の前にいる子爵から顔を隠す。

みつともないところを憧れの人に見られてしまったので、恥ずかしく、顔を赤らめる。

「今日はきみのお父上に呼ばれたのさ。あのお話の事だね」

「まあ！」

ルイズはさらに頬を赤らめて、俯いた。

「いけない人ですわ。子爵さまは……」

「ルイズ。ぼくの小さなルイズ。きみはぼくのことを嫌いかい？」

おどけた調子で、子爵がそう言う。対して、夢の中のルイズはとくと、首を振った。

「いえ、そんなことはありませんわ。でも……」

ルイズははにかんで言った。

「わたし、まだ小さいし、よくわかりませんわ」

帽子の下の顔が、にっこりと笑った。そして、手を差し伸べる。

「子爵さま……」

「ミ・レイデイ。手を貸してあげよう。ほら、つかまって」

そういつて強引に掴み、引っ張る。力強いが不思議と痛くなかった。

夢だからかもしれない。

「もうじき晩餐会が始まるよ」

「でも……」

正直、まだ母は怒っているだろう。説教から逃げた事で、更に怒りは大きくなっているかもしれない。そう思うと、怖くなった。

「また怒られたんだね？安心しなさい。ぼくからお父上にとりなしてあげよう」

ルイズは頷いて、子爵の手を握る。

そのとき、風が吹いて貴族の帽子が飛んだ。

「あ」

現れた顔を見て、ルイズは当惑の声をあげる。何故か。

それは帽子の下から現れた顔は、憧れの子爵などではなく、使い魔の才人であったからだ。

いつの間にかルイズは六歳から十六歳の今の姿になっていた。

「な、なによあんた」

いきなりの場面転換に、頭が付いていかずに混乱してしまう。

「さあルイズ。おいで」

「おいでじゃないわよ。なんであんたがここにいるのよ」

拒否を全面に押し出しながら、ルイズは才人と距離を置こうとする。

「気にすんな。お前、俺に惚れてんだろ？」

「はあ？」

憧れの子爵の格好をした才人は、なぜか勝ち誇ったような調子でそう言った。

夢の中の才人は、なんだか自信たっぷりなのである。やっぱりバカだ。

「ばかじゃないの！ちょっと踊ってあげたぐらいでいい気にならな
いで！」

「強がっちゃって。ばかだなあマイレیدی。俺のルイズ」

やっぱり、バカだった。

「誰があんたのルイズなのよ！」

才人は気にせずに、ルイズを抱きかかえようとした。

「やめてよ！なにしてんのよ！？ばか！」

ポカポカと殴りつけるが、それでも才人は気にせずに、ルイズを

抱きかかえた。

「なんであんななのよ！もう！」

ルイズはぽかぽかと才人を殴りつけたが、才人は実に嬉しそうに、

「痛くなくいい」

とか言いながら、ニコニコと笑っているのであった。それが心底、ルイズには楽しくない。

「うーん、ま、いいんじゃないかな？」

そこで、誰かの声が響いた。ルイズはゆっくりと声がした方へと顔を向ける。

すると、一護達がこちらをニヤニヤしながら見つめていた。

なぜかみんな、召使いの服、早い話が執事の燕尾服と、メイドのメイド服だ。それを着ている。

「ええ！！？ちよつと！？なんであんなたちもいるのよ！？」

ルイズは驚きのあまり6人に呼びかけるが、6人はというと、こちらをずっとニヤニヤと面白そうな笑顔で見つめている。聞こえていないのだろうか。

オマケにアレンとシャナ、そしてエドの後ろには見たことの無い、女性が3人いた。そちらもまた、鍛えこまれた給仕のような佇まいだった。

「イチゴ！」反応無し。笑っているだけ。

「カリン！」反応無し。見ているだけ。
「ネギ！」反応無し。笑顔を浮かべているだけ。
「シヤナ！」反応無し。だが、若干イラ付いているようにも見える。
「モヤシ！」「アレンです」
「チビ！」「誰がミジンコ豆粒ドチビじゃー！」

最後二人だけ、反応あった。流石に悪口の一つでも言われたら、言い返したくなる。

才人がルイズを優しく抱き締めているのを6人、いや、後ろに控えた3人も含めて、9人はニヤニヤしながら見つめている。シヤナの後ろに控えたメイドは、無表情だったが、笑っていた。

（誰も助けてくれないの？）

ルイズは必死に才人を引き剥がそうとするが、才人は離れず、ルイズは顔を赤らめた。

なんだか、才人に抱き締められていると妙な気分になって、それがさらに夢の中のルイズをいらだたせるのであった。

「ちょっと、ホント、離してっばー！」

才人は自分のベットの中でぱちりと目を開いた。

窓の外には、ハルゲギニアとは違う1つだけの月が煌々と光り、部屋の中をを綺麗に照らし出している。昨日も遅くまで何か書いていたエドが、机に伏せて気持ちよさそうに寝ている。

机の周囲には何冊もの本が積み重なって、山を築いていた。

(この様子なら、朝までぐっすりだな…)

そのまま寝てくれよと思いながら、才人はむくりと起き上がると、ベットから抜け出し匍匐前進を始めた。ドアへとズリズリと音を立てながら進む。

壁に立てかけたデルフリンガーが、そんな才人の様子に気づき、声をかけた。

月に照らされて、錆びた剣も鈍く煌く。

「眠れねエのか、相棒？」

「どうしたんです？」

その声に反応したのか、人形も喋りだした。才人は振り向くと、口のさきに指を立てた。

「黙ってるってか。なんでだ？」

才人は首を振り、口のさきに指立てて、相棒のデルフリンガーを睨みつけた。

「そんなつれねエ仕打ちは許せねエね。寂しい想いはまっぴらごめんだ」

結局、模擬戦以外で使うシーンの無いこの大剣は普段から、鞘に入れっぱなしだ。

だが、現実問題として、この剣の錆を取らないと実戦では使えないだろう。エドとアルが共同で錆を取ろうと悪戦苦闘していたが、これはどうも錆ではないという結論に彼らは落ち着いていた。

「相棒がこんな夜更けにいきなり起き出したワケを言わねえってんなら、俺は怒鳴る」

「ちようどいい、暇つぶしだね」

喋る剣と、アルフォンスが一致団結する。デルフリンガーはそこまで言うと、ガタガタと震えだした。どうやら本気で怒鳴るらしい。本当にに困った剣と人形である。

「うーん」

エドが唸ったので、才人は振り向く。寝返りを打ったらしく顔が自分の方を向いた。

才人は、まるで『硬質』の呪文をかけられたように固まる。だが、向いただけで目を覚ます気配はない。才人はホツと安堵のため息を漏らした。

「どうしたんだい、相棒よ？」

デルフリンガーが、呆れた声で呟いた。才人はデルフリンガーを睨みつけた。

「静かにしてる。この錆び錆び野郎」

「ひでえ言い草だな。でも許す」「僕は錆びないんだけど…」

案外、この剣、調子がいい。その後ろで、哀しげに言うアルの声が聞こえる。

「そりゃ、相棒が黙ってるって言うんなら黙るけどよ…」

きつとこの剣が人間だったのなら、頭を掻いているだろう。

デルフリンガーは剣でありながら、人の機微に聡い処があった。アルも元人間だけあって、そこは弁えているらしい。

「こんな夜中に起き出して、這いずり出した理由を教えてくださいてもバチは当たるめえよ」

「どこへ行くんです？」

才人に似て、好奇心の強い剣であった。アルの方も、相当なものだった。

彼が匍匐前進で出て行く理由がどうしても知りたいらしい。

「よし、解った。誰にも言うなよ……」

才人はため息をついて、やれやれと両手を上げて、頭の横で髪の毛を描いた。

形はウェーブの掛かった感じである。

「ルイズさん？」

「貴族の娘ツ子がどうしたんだね？」

一発で伝えられた自分に感心しながら、才人は次に、自分を指差した。

「相棒がどうしたね？」

それから才人は、自分の頭の上で、腕を使ってハートマークをつくった。

「それ、どういう意味です？」

「愛してる」

予想の斜め上に行く答えに、アルは黙ってしまった。

「……？」

「あの娘ツ子が？相棒を？」

「うん」

迷いのない頷き。

「なんでだ？」

才人は、立ち上がると、音を立てないように気をつけて社交ダンスを踊り始めた。

「ああ、この前の舞踏会か」

「踊ってるときのルイズの顔を、お前も見ただろ？」

「見たぜ」

「僕は見えてませんが、随分、仲良くなったみたいですね」

夢見るような口調で、才人は言った。

「赤かった…」

「赤かったなあ」

「赤かったんですか？」

決して三段活用ではない。

「もう、俺の手を握りたくて、握りたくて仕方がない顔だったな。ありゃ」

「そうか？」

「そうなんですか？」

完全にトリップしそうな才人であるが、デルフとアルは実に現実的に見ていた。

「なあデルフにアルよ」

言い聞かせるような、才人の言葉。

「お前らはただの鉄の塊に綿の塊だから、女心なんかわかんないだらうけど、人間界ではあんな顔を男に見せる女は、『あなたに恋してます』と言ってるようなものなんだよ」

才人は、剣をポンポンと叩きながら言った。

「確かに俺はただの剣だから、人間の男と女のことなんかわかんね。ま、相棒がそう言うんなら、そうなんだらうね」

「だから、僕は元々、人間だって……」

剣と人形が喋っている時点で「ただ」のとは言い難いだが、そこまで才人は深く考えない。

「お前は、話のわかるヤツだな」

と、才人は嬉しそうに言った。

「で、どうするんです？」

惚れているだろう事は納得は行っていないが、理解はした。そして、結局質問は最初へと戻る。

「さては相棒、惚れてると確信しつつ、今からてごめにする気だな？」

「そうとも」

嫌に自信たつぷりな様子で才人が大げさに胸を張った。

「惚れてると確信しつつ、今からてごめにしたいと思う。で、てごめってなに？」

「無理やりという意味だな」

「そんな事して、いいんですか…？」

アルの意見は尤もだったが、舞い上がっている才人を地上に落すには少しばかり、重量が足りなかった。そのまま才人の気持ちは、どンドン天へと舞い上がって行く。

「俺は随分長生きしているが、主人をてごめにする使い魔ってのは、初めて見るね」

「本来、しないっていつか出来ないんじゃないか…」

確か人間を呼ぶ事自体がイレギュラーなはず。

そう思ったが、やっぱり舞い上がりすぎた才人の頭を冷ますには、冷気が弱い。

「てーしたもんだ！お主は悪よのオ」

「いいぞ。もつと誉めろ」

（余り、褒めてないような気が…）

アルは至極真面目にそう思ったが、水を差すのも悪いと思い、心の中だけで思う事にした。

「相棒は、てーしたもんだ！」

才人は立ち上がって、胸を張った。完全に調子に乗りすぎている。

「なあデルフ。この世界で一番かっこいいのは誰だ？」

「もちろん、相棒さね」

才人はさらに胸をそらせた。

沸々とワケのわからない自信がみなぎってくる。

世界が自分一人を祝福してくれてるように感じた。

才人はまったく、バカである。

「そんな偉くてカッコいい俺様にてごめにされるなんて、ルイズは
幸せ者だな」

「あの生意気な貴族の娘ツ子は果報者だな」

デルフリンガーにもし口があれば、タバコの一本でもふかしそうな程に、笑っているだろう。

「でも、どうして普通に口説かねえんだ？惚れられてるなら、何も
寝ている隙でなくてもよさそうもんだ」

もつともな意見である。アルもそれは気になっていた。

しかし、まるで歌劇でも演じているかのように、才人は首を振った。

「あいつな、意地っ張り。素直じゃないの」

「そうみてエだな」

「あー」

確かに、この短い間でも相当なレベルの意地っ張りである事は良く分かっていた。

「普通に口説いたんじゃ、照れが災いして、『なに言ってるのかしら？この使い魔は！』なんて言つて、そっぽを向くに決まってるね」
手を広げて、やれやれと言う調子で才人は首を振る。

「そのとおりだ。相棒はよくわかってるね」

「だろ？だからてごめ。口ではああ生意気言つても、心の底じゃ俺に征服されたがってる。なにせ惚れてるからね。ルイズはそういう女の子だよ」

「おお、俺の相棒は、天才じゃなかるうか」

使い手も使い手なら、剣も剣だ。同じようにお調子者である。

「というわけで、俺は地球を代表して、ハルケギニアとかいう異世界の美少女をてごめにするであります。だからお前らは静かにしてろ」

ビシッと二人に向けて指を指す。

「いいな？」

デルフリンガーはピクピクと震えて、同意の意を示した。アルは黙ってしまった。

「そついうことなら、俺は静かにしてるよ」

キイツと音を立てて、部屋を出て行った。
それを確認したようなタイミングで、エドの頭がむくりと起き上がる。

「バカが約一名、ルイズのところへ向かった」

机の傍に備え付けられた真鍮製のパイプにそれだけ言うと、再び本の上へ頭を落とした。
安らかな寝息が聞こえてくる。

「ああ、相棒。不味いんじゃないかね」

デルフリンガーは才人が無事に帰ってくることを祈った。

ルイズの部屋はシャナ、夏梨と共同だ。
途中、ベットへ帰る所だったらしい寝ぼけたネギに不幸にもエンカウントしてしまったが、口八丁で切り抜けた。

「失礼しまーす…」

入るときにドアを大きく軋ませてしまったが、幸い誰も気が付いていないようだ。

才人は敬礼すると、忍び足でルイズのベッドに近づいた。
ルイズは可愛らしい寝息を立てている。あどけなく、清楚で美しいルイズの寝顔であった。

「すう、すう…」

まずは匂いを嗅いでみた。ほのかな香水の香りが漂ってくる。傍から見れば、完全にやっていることはただの変態である。

「では、失礼して…」

才人は震えながらルイズの毛布をはいだ。

ネグリジエ姿のルイズが、月明かりに照らされて、華奢な体が、くつきりと柔らかいネグリジエの生地越しに確認できた。

こうして見ると、胸だつてわずかに膨らんでいる。ゼロというわけじゃない。

そして、ルイズは寝るときに下着をつけないらしい。

(そもそも、この時代にブラなんてあったけ?)

才人は感激のあまり、泣きそうになった。今から、この美少女が自分のものになるのだ。

舞踏会の日から、一週間が過ぎていた。

その間、才人は虎視眈々とチャンスをつかっていたのである。

まだ幼いシャナと夏梨が同じ部屋で寝ているのだと言う事は、完全に失念していた。

(しょうがない、今から始まる事は黙っててくれよ)

眠ったままの二人に言い聞かせるように、心の中で言う。

すぐさま才人は、ルイズにぺこりとお辞儀をすると、手を合わせた。

「いただきます」

そして、お決まりのポーズでルイズのベッドに飛び込

「何をしているのだ？」

めなかつた。

シヤナの枕元から重い遠雷のような声が響く。その声に思わず、身を竦ませる。

(そうだ！アラストールが居たんだけ！)

この小さい女の子の保護者でもある彼を、舞い上がっていた才人はすっかり忘れていた。

「このような夜更けに女子の部屋に来て、何用だ？」

詰問する声が押し掛かって来る。間違っても「ルイズをてごめにしに来ました」などとは言えない。言ったら最後、保護者二人が抹殺しに掛かってくる。

たらたらと嫌な脂汗が、背中を流れる。

「どうした？」

「ふが…」

更にアラストールの声が重くなる。この騒ぎの中でもルイズは起きない。

まったくもって、寝つきのいい娘であった。

「いや、ご主人様の様子を確かめようと…」

かなり苦しい言い訳だ。

(誤魔化せられるか…?)

更に汗の筋は多くなる。

「何も無いなら…」

「ああ、ルイズう！」

破れ被れ、誤魔化しきれないと踏んだ才人は、もう父親の声は完全に無視していた。その場の勢いに任せて遣ってしまおうと決意を堅めた彼は、奇声を発してもどかしげに、ルイズのネグリジェをたくし上げようとした。

その時、ルイズの目がぱちくりと開いた。

才人は一瞬固まったが、勢いだけですぐさまルイズをきつく抱きしめた。

「な、なによ!? あんた!? ちょっと!?!」

ルイズはすぐに、自分の置かれた状況に気づいたらしい。

「痴れ物が」

炎の魔神の呆れたような声が聞こえたような気がしたが、この際、すっぱり無視する。

抱きついた才人の手から逃れようと、じたばたと暴れ始めた。

「あ、暴れるな、こら!」

「な、なに抱きついてんのよ! ねえ! はなしなさいよッ!」

「離せだど!?! おいおい惚れてんだろ?」

才人はルイズの目を、燃えたぎった瞳で覗き込む。

一瞬、そのワケのわからない迫力に押されて、ルイズはたじろいだ。

「はい？」

「俺にお前は惚れてる。違うか？」

ルイズの肩をがしつと押さえながら、自信たっぷりには言った。

「な、なんでよ？」

「いいんだルイズ。俺はわかってる。意地っ張りなお前の気持ちを、俺は誰よりも理解しているよ」

遠くを見るような才人の演技。

完全に彼は舞い上がっていた。

「だからルイズ、暴れるな。力を抜け」

才人の唇が近づいてくる。ルイズの顔から血の気がひいた。

（ 惚れてる？）

誰が惚れているのだろう。

（ わたしが？）

誰に惚れているのだろうか。

(あんたに？)

先ほど見た夢が頭の中でぐるぐる回る。

夢の中の才人も、自信たっぷりになんかことを言っていた。

おまけに面と向かってそんなことを言われて、怒りが体の中に沸々と湧き上がってくる。

(こ、このつ、使い魔は…！)

夢と現実、両方の才人に激しい怒りを感じる。ルイズの全身が怒りで震えだした。

才人はその震えを、初めてだから怖がっているんだな、と解釈していた。

思いつき勘違いである。才人はどこまでも、又けていた。

「怖いのか？安心しろ。俺も初めてだ」

どんな自信かは知らないが、随分と自信に満ち溢れた言葉だった。

「じゃあ、ズボン、脱ぎます」

才人が一瞬、腰を浮かせた隙をルイズは見逃さなかった。

チーターが獲物をしとめるような素早い動きで右足を跳ね上げる。

そして、一角獣の鋭い一撃のように、才人の股間をおもいつきり狙い打った。

「あが、ごげ…っ!？」

「本当にこ奴は」

悲鳴にもならない声を上げて、才人は口から泡を吹いて床に転げ

回った。アラストールは最早、呆れて開いた口が塞がらなくなった。ルイズはゆつくりと身を起こし、ベッドから下りて、机に置いてある鞭を掴む。

乗馬用の、見事な鞭である。

「ご、ご主人様の、ね、寝込みを、お、お、襲うような悪い使い魔には、お仕置きが必要ね」

怒りに震えるルイズの声は所々割れていた。

「いや、あの、ちよつと、待って…」

「何？」

才人の必死な最後の抵抗に、御仏の慈悲が下る。

「ルイズ、お前は俺に惚れてるんじゃないの？」

「は…？」

才人は最後の救いの糸を、自ら切ってしまった。

「何を、言っているのかしら？この駄犬！」

そこで、扉が開いた。

「うるせえんだよ、ボケエ！」

一護が顔を真っ赤にして入ってきた。

才人は、しめた！とばかりに、芋虫のように扉に向かって這って逃げ出そうとしたが、鞭を持ったルイズに首根っこを踏みつけられ、あっけなく退路を断られた。

「なにやってんの？お前ら？」

一護は内情をさっぱり理解していない。安眠妨害されて、怒り心頭といった様子で尋ねるが、ルイズは無視した。

「わたしになにしようとしたの？ねえ？」

才人は腹からくる痛みで体を丸めながら、喉の奥から声を絞り出す。

「愛の語らい。ほら、恋人同士が…」

ルイズはそこまで聞くと首根っこを踏んつけた足に力を込めた。

「一人でやってちょうだい」

一護が、夏梨のベッドに座って、その様子を眺めている。

「頼むからよ、大声出すな。皆、起きるだろうが！」

「うるさい！！！」

一護が半ば切れ掛かった頭で注意するが、ルイズもイライラしている。

才人が、なんでかわからないといった調子でルイズに尋ねる。

「アレ？ほ、惚れてるんじゃないかな？勘違いかな？かな？」

「誰が？誰に？」

殺気の籠った質問の繰り返し。

「えっと、ルイズお嬢様が、この俺に……………」

「理由を述べて？でも、わたしめちやくちゃ怒ってるから簡潔にね？じゃないと……………」

そこで鞭を一振り。

バチンと乾いた音が響く。

「自分でもうっかりなにするかわかんないから」

才人は冷や汗をかきつつ、理由を述べる。

「ほら、この前の舞踏会するとき、この使い魔を見る目が、なんだかうつとりとしてらっしゃったように感じたものですから。から」

ルイズの頬が、少し赤く染まった。

そして、傍のベッドで、一護は、夏梨が肌蹴た布団を掛け直していた。

「…それで、あんたってば、わたしがあんたを好きになったと勘違いして、ベッドに忍び込んだの？」

「ご名答で」

必死に命を引き伸ばそうとするが、もう手遅れなのは誰の目にも明らかだった。

「お嬢様は、ああ、聡明であらせられます。もしやこの使い魔、とんでもない勘違いをし……………」

「勘違いに決まってるじゃないの。とにかく、主人のベッドに忍び込む使い魔なんて聞いたことないわ」

「次からは気をつけます。はい」

ルイズはため息をついた。

それから、心底才人に同情するような声で言った。

「次はないのよ」

「お嬢様、月が、月が綺麗ですよ！ほら！ほら！」

「それは当たり前なの」

才人は慌てて誤魔化すような調子でわめいた。だが、ルイズは鞭を張る。

「よくもまあ、軽く見てくれたわね」

「一護さん！」

才人は一護に助けを求めようと傍らのベッドを見たが、一護は落胆した目で見ていた。横にはこの騒ぎで目を覚ました夏梨も居る。逆方向を見れば、シャナがじっと蔑んだ視線を向けている。

「は、は、は……」

乾いた笑いを浮かべながら、この部屋に味方はいない。

才人はそう悟った。

「……ゆ、許して！」

「バカな犬には躰が必要なのよ」

才人の哀願虚しく、ルイズの声が、音叉のように細かく震えて、煌々と光る月をバツクに、才人の絶叫が響き渡った。

「バーカ」

「痴れ物が」

保護者二人の呆れを混ぜた咳きは、絶叫にかき消された。

24・memorys in the dream(後書き)

ルイズは原作でもいい雰囲気になるので別として、夏梨やシヤナに手を出したら、確実に保護者が黙っていないでしょう。色々言いたい事があつた魔神も番外編では主人公を死にオチに導いていましたから。

一護にとっては、妹二人は守る対象でしょう。

いずれ彼女らも結婚するでしょうし、彼氏が来る事もあるかもしれませんが。

腹は立てても認めてくれると思います。親父さんの方が難しいかもしれませぬ。

さて、ルイズの夢に出てきた名前の無いメイド3人。

聡明な原作既読者の方であれば、凡その察しはお付きたと思います。関係の深い3人です。・・・あれ、また同じ中の人だ。

25・Be start to head hittin

朝日が昇る。

小鳥のさえずり声がよく響き渡る朝。

「ふう…」

今朝のトレーニングを終えたアレンは、立ち上がると背伸びをして、窓を開けて、気持ちよさそうに空気を吸う。ふわりと涼しい風が部屋の中へと舞い込む。

「この世界の空気はおいしいですね。ロンドンとは大違いだ」

開口一番にそう言ったアレンは、部屋に備え付けられた洗面台で顔を洗う。

この洗面台はエドとアルの苦心の作だ。インフラの整備を考えるに辺り、真っ先に考えたのが水道の整備だった。これで毎朝、洗面器を持って水場まで行く必要も無くなった。

無いなら無いで困らないが、やっぱりあると便利には違いない。

先にキユルケとタバサ、そしてギーシュの3人は出ている。今頃は自室で今日の授業に備えているだろう。

「今日も元気に行きましょうか…」

意気揚々と扉を開けて、廊下に出たアレンは動きを止めた。ガツンと足元に何かぶつかった感じがある。視線をゆっくりと下へ向けると、廊下にはボロボロになった才人のような物体が倒れていた。

「ちょっと才人さん!?大丈夫ですか!なにがあっただんですか!!

「？」

アレンは叫びながら才人を揺さぶる。だが、才人は白目を剥いたまま完全に気絶していた。

その声を合図にしたのか、ネギが箱舟から出てきた。

「どうしたんです、アレンさん？」

眠たい目を擦りながら、ネギが尋ねてくる。しかし、アレンの手に抱きかかえられた物体を見て、直ぐに顔が青ざめる。

「才さんが大変なことに！」

「どうしてこんなボロボロに？」

昨日の夜も、ぐっすり部屋で寝ていたネギは、この原因となった惨事知らない。

勿論、魔法球の中に入っていないアレンも同様だ。

「そいつはね、わたしのベッドに忍び込んだのよ」

その声に二人が振り向く。

ルイズが立っついていて目を眠たそうにゴシゴシとこすっていた。後ろにはまた眠たそうに、重い瞼を引き上げようとする夏梨と、元気溘刺のシャナが居た。

「ああ、そういうことですか…」

肩を竦めてアレンは呆れる。

確かに舞踏会の時から様子がおかしいとは思っていたが、ここまで調子に乗りやすいとはアレンは予想外だった。彼も経験則で、手

を出してはいけない相手くらいは分かる。

「納得しちゃダメですってば！」

抗議するネギを後目に、ルイズは無表情で首輪を才人の首に巻き付けて、太い鎖につないだ。まるで飼い犬にするかのような扱いである。

「なにしてるんです？」

「バカ犬には鎖が必要だからつけてやってんのよ」

ルイズが才人を踏みつけて言う。

グニグニと気絶している才人の顔が圧力で歪む。

「え、え？」

ルイズが何をしたいのか分からないネギは、頭の上にくっつものハテナを浮かべている。

「いいですか、ネギ君、シャナちゃん、カリンちゃん」

その様子を見たアレンが、ガツシリとネギ達の肩を強く持つ。そして真剣な目でじっと見つめる。彼の薄い銀の虹彩に、3人が鏡のように映りこむ。

「君達は生涯、知らなくていいことです」

込められるだけの力を込めて、一気呵成に言い切る。

「そして、意味が分からなくても、お父さん、お母さんに尋ねては

いけないよ」

その目はちゃんとした大人に成り切れていない、アレンなりの回避方法だった。

「君達とお兄さんとの約束だ。いいね？」

「は、はい…」

どんな意味が込められていたのかは分からないが、三人は取り敢えず頷いておいた。

さしものアレンも子供に、性教育を施せるほど責任の取れる大人ではなかった。

「そういえば、一護さんとエド君は？」

姿の見えない二人を探して、アレンが尋ねる。

「二人はまだ寝てる。昨日の事あったし…」

ふわああと大きな欠伸をしながら夏梨が答える。

昨日の晩、散々ルイズに甚振られた才人は二人の手によって、最低限の手当てを施されて、部屋の外へと放り出されたのだ。勿論、一番傍で見っていたシャナと夏梨は完全に自業自得だと思っていた。

「そうですか…、先に食事に行きましょうか」

アレンはそれだけ言うと、ゆっくりと食堂へ向かった。

「ほら行くわよ」

「はい」

ルイズは気にした素振りも見せず、乱暴にまだ伸びている才人を引きずって、食堂に向かう。

食事を終えたルイズ達は教室の扉を開いて、中に入る。

本日の授業と一緒に受けるのは、ネギと夏梨とシヤナの三人。予定があると言うアレンは食事が終わると直ぐにどこかへ行ってしまった。

入ってきたルイズを見て、クラスメイトたちは目を丸くしている。

「え、えーと…」

「あれは何だい？」

確かにボロ切れ状態の才人を鎖につないで引きずっているのは、教室中の視線を悪い意味で集めるというものだ。だが、彼女は気にした風も無い。

ルイズは険しい表情で形のいい眉を思いつきりひん曲げて、どすんと席についた。

ネギが続いて隣に座る。廊下に近づくようにシヤナと夏梨が座る。

「ねえ、ルイズ。あなた、何を引きずっているの？」

近くに座っていた、香水のモンモランシーが、口をぽかんとあけて、ルイズに尋ねた。

「使い魔よ」

ルイズがぶすつとした表情でそう一言。

「よく見ると、そうね」

ペタペタと触ったモンモランシーは頷いて言った。

大きく腫れ上がった顔と、こびりついた血で原型を留めていないが、確かにそれはかつて才人だった物体であった。首に首輪をつけられて鎖につながれていて、まるで犬のような扱いでルイズに引きずられているのである。

「なにしたの？彼は？」

不機嫌面のルイズをチラッと見つめて、答えが返って来ないだろうと思ったモンモランシーは、コソコソとネギに尋ねる。するとネギは苦い表情で答える。

「どうも、ルイズさんのベッドに忍び込んだみたいで……」

「まあ……！」

モンモランシーは驚いた顔を見ると、見事な巻き毛を振り乱して、大げさにのけぞった。

「はしたない！まあ、そんなベッドに忍び込むなんて！まあ！汚らわしい！不潔！不潔よ！」

そして、オウとかヨヨとか言いながら、ハンカチを取り出すと、それを噛み締める。歌劇を見ているような調子で、貴族というのは喋るらしい。いい加減、直情直裁な性格をしているシャナはイライラしていた。

(回りくどいわね…)

そこへ颯爽と赤い髪をかきあげて教室に入ってきたキュルケが、ルイズを睨んだ。

「あなたが誘ったんでしょ？ルイズ。エロのルイズ」

まるで侮蔑の様な調子だが、何となく面白がっているようにも聞こえた。

「娼婦のようにいやらしい流し目でも送ったんじゃないこと？」
(それはアンタだろ！)

夏梨はそう思ったが、この短い期間で口は災いの元だと悟った6人は出来るだけ適当な事を言わないようにしていた。尤も喧嘩っ早いエドや一護は、直ぐにトラブルの中心となるのだが。

「誰がエロのルイズよ！それはあんたでしょうが！わたしは誘ってないわよ！」

「まあ、それはそうとして」

さらりとルイズの反論を流す。

やっぱり面白がっているだけのようだ。

「イチゴはどこにいるのよ？」

才人の頭を撫でたままキュルケが訊く。そうすると丁度いい具合に才人の目線がキュルケの胸の位置にくる。その豊満な胸を見て、思いつきり鼻の下を伸ばしている。

その質問には、ややぶつきらぼくに夏梨が答えた。

「一兄なら、エドたちとどっか行ったよ」

「なによ。イチゴがないとつまらないわ」

キュルケがそっぽを向いて言う。序でと言うばかりにキュルケは、撫でていた才人の頭を、思いつきり胸の中へと抱き込んだ。

巨大な胸で圧迫されて息は苦しうだが、完全に鼻息がふんふん言っている。これは息苦しいだけではないだろう。顔も真っ赤になっっているのは興奮しているからだろう。

シヤナと夏梨は、そのだらけ切った才人の顔を見て、視線に混ぜる侮蔑の色を、更に濃くした。二人の才人への評価は、現在回復できないほどに下落していた。

「もう、こんな風になっちゃって…」

胸から才人の頭を引き出し、自分の顔の前へ持つてくる。熱っぽいキュルケの視線は確実に才人の脳髓を直撃した。顔が完全に真っ赤だ。

「可哀想だわ。あたしが治してあ・げ・る」

そう言って、ウインクをする。

才人は、更に鼻息をふがふがと荒くして、鼻の下が更に長く伸びまくっている。

「アウアウアー」

最早、言っている事も意味不明だ。

「大丈夫？どこが痛い？頭が悪いの？どうなの？あたしが『治癒』で治してあげるわ」

若干、バカにされているのだが、興奮のケージを振り切った才人は気が付いていない。そして、それは二人の様子を見ていた主人も同じ。

「適当なこと言わないで。あなたに『水』系統の『治癒』が使えるわけじゃないじゃないの」

ルイズが忌々しそうに言う。

「微熱よ。び・ね・つ。あなたって、記憶力までゼロなのね」

そう言っつて、キュルケはルイズの胸をつつく。

「ゼロは胸と魔法だけにしときなさいよね」

ルイズの顔が真っ赤に染まった。シャナと夏梨はカチンと来た。それでもルイズは冷静になるうと唇をゆがめて冷笑を浮かべる。

「あ、あの一」

ネギは事態の收拾が出来なくなってしまつて、右へ左へオロオロとするばかり。元の世界ではクラスの担任まで務めているのだが、彼もまだ10歳。こういう性的な話題には全く免疫が無かった。

「な、なんであなたみたいに胸だ、け大きい女って、女性の価値を胸の大きさだけで決めようとするのか、かしら？それって、すごく頭の悪い考え方だと思うわ」

怒りで完全に呂律が回っていない。大事な所で噛みまくる。

「ま、きつとカラッポなのよね。むむむ、胸に栄養取られて、頭がカカカ、カラッポなのよね」

頑張つて冷静になろうとしているが、声が震えている。かなり頭にきているようだ。その様子をクスクスとキュルケが笑う。この二人の力関係は完全にキュルケ優位だ。

「声が震えてるわよ。ヴァリエール」

それからキュルケは、ボロボロの才人を優しく抱きしめ、頬に胸を押しつけた。

「ねえサイト。あなたは、こんなに胸の大きいあたしをバカだと思っう？」

「す、素晴らしいと思います」

答えになってない。なにが素晴らしいのかも分からない。

才人は、この世の春を全て抱えて、それを迎えたような、実にうっとりとした顔で、キュルケの胸に顔を埋めている。

アラストールは、自分に手が合ったら額に手を当てて、天を仰ぎ見たくなった。ネギの髪と服の中でうるちよろしているカモミールは、先ほどから才人張りに興奮していた。

「はあ……」

夏梨がこちらに来てから多くなった、何度目かのため息を吐いたとき、才人の顔を見たルイズの眉が吊り上がり、グイッと手に持つ

た鎖を引っ張る。

勿論、ボロボロの才人に対抗する力は残されていない。

「おげげげげ!!!?」

首に鎖を繋がれた才人は、苦しそうに床に転がった。

ルイズは、転がった才人の背中に足をのっけて、冷たく言い放った。

「誰があんたに人間の言葉を許可したの? 『わん』でしょ。犬!」

才人は弱々しい声で応えた。

「わ、わんです。はい」

「バカ犬。もう一度おさらいするわね。『はい』のときはどうするんだっけ?」

「わん」

「そうよね。『わん』が一回」

何とルイズは「わん」の数で返事の内容を決めている。

「『かしこまりましたご主人さま』は?」

「わんわん」

「そうよね。『わん』が二回。『トイレに行きたいです』は?」

ココまで来ると最早、痛めつけたいだけのようにも見える。流石にネギは才人に同情し始めた。

「わんわんわん」

「そうよね。『わん』が三回」

トップブリーダーも真つ青のしつけ具合だった。

「バカ犬はそれだけ言えれば上等だから、余計なことを言ったらお仕置きね」

「……………わん」

才人が悔しそうな声で、一吠えする。吠えるまでの時間は、彼女のせめてもの抵抗だろう。

「いい子ね。よ〜〜しよ〜〜し。可愛いわ」

キュルケが才人の顎の下を撫でて言う。

「ねえ、今晚はあたしのベッドにしのもんでいらっしやいな」

完全に犬の扱いだが、やっぱり興奮している才人は気が付いていない。

止せば良いのに、また簡単にキュルケの誘いに乗ってしまう。

「ね？いっぱい、ワンちゃんに好きなところ舐めさせて、あ・げ・る」

才人はびよこんと膝で立つと、箒で作られた尻尾を嬉しそうに振った。

ルイズが昨晚、才人の尻にくっつけた代物である。頭にもボロ布で作った耳がついていた。

「わん！わん！わんわん！」

ルイズは無言でグイツと鎖を引つ張る。

「ぐえ!？」

再び、床に転げまわる才人。ルイズはそれから才人をがしがしと踏みつけた。

「ちゃんと『わん』って言ってるだろ！」

才人はさすがに頭にきて、ガオーと立ち上がった。それからルイズに悪役のように飛びかかる。

こうなったらこの場でごめにしてやるぐらいの勢いだったが、妙にすばしいルイズにあっけなく足をひっかけられ、床に転がった。

ルイズはそんな才人の頭をグシッと踏んづける。

「発情期のバカ犬は見境がないわね」

更に踏み込む力を強めて言う。頭を抑えられた才人は必死にもがくが、案外人間というのは頭を抑えられると立ち上がることも儘ならないのだ。

「ツエルプストーの女に尻尾は振るわ、ご主人さまに襲いかかるわで、まあ大変。ままま、まあ大変」

ルイズは鞆の中から、鞭を取り出すとそれで才人を叩き出した。

「いだいっ!!ちよ!!!?やめっ!やめてっ!やーめーてっ!!」

才人は、痛そうに床をのたうち回る。

「いたい？『わん』でしょ！！『わん』でしょーがッ！！！！犬は『わん』でしょう！！！！」

ピシッ、ピシッ、バシンと教室に乾いた鞭の音が響く。

ルイズは髪を振り乱して、這いつくばって逃げようとする才人を追いかけて回して、鞭で叩いた。

才人は鞭で叩かれるたびに、情けない犬声をあげた。

「いた、わん！」

クラスメイトたちはその情けない様を見て、ひそひそと隣と静かに言葉を交わす。

「あの平民は、本当にギーシュをやったのかい？」

「いや、見てたけどそれは本当だな……」

「『土くれ』のフーケを捕まえたんだらうか？」

と激しく疑問に思った。

「きゃん！きゃん！」

クラスメイトたちが啞然とした顔で才人を鞭で叩きまくるルイズを見つめている。

夏梨は、関係ないとばかりに、席について寝ている。シャナは城の書庫から失敬した本を読み始めた。相変わらずネギは止める方法が分からず、オロオロとしているだけだった。

「このバカ犬！アホイ……」

夢中になっていたルイズは周りの様子に気づき、顔を赤らめて誤魔化すように鞭をしまい腕を組む。

そして言った。

「し、しつげはここまで！」

しつげにしてはひどい騒ぎだったが、クラスメイトたちはとばかりを恐れ、顔を背ける。キュルケが呆れた声で言った。

「熱があるのはあなたじゃないの？ヴァリエール」

ルイズはキツとキュルケを睨む。才人は蓄積したダメージで再び気絶してしまい、床の上にぐったりと伸びていた。

そこで、教室の扉がガラツと開いて、本日の講師であるギトーが現れた。

さっきまで騒いでいたクラスメイトたちは、一斉に席につく。

「ふむ、全員揃っているな」

彼は、フーケの一件の際、当直をサボって寝ていたシュヴルーズを責め、オスマンに『君は怒りっぽくていかん』と辛辣な一言を言われた教師である。

確かにねつとりとした長い黒髪に、漆黒のマントをまとったその姿は、その不気味さと冷たい雰囲気からか、コルベールとは違って生徒たちに人気がなかった。

「では授業を始める。知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』。疾風のギトーだ」

嫌に尊大な声に教室中が、静まり返った。その様子を満足げに見

つめ、ギターは言っ。

「最強の系統は知っているかね？ミス・ツエルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

至極冷静に質問されたキュルケが、答えを返す。

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いているのだ」

ギターの引つかかる言い方にキュルケはちよつとカチンときた。そして自信満々に、解答を述べる。

「『火』に決まっていますわ。ミスタ・ギター」

キュルケは不適な笑みを浮かべて言い放つ。

「ほほう。どうしてそう思うのかね？」

「すべてを燃やし尽くせるのは、炎と情熱。そうじゃございませんこと。」

キュルケの答えにギターは薄く笑って言う。

「残念ながらそうではないのだよ」

ギターは腰に差した杖を引き抜くと、鋭く言い放った。

コツコツとスタッカートのようなリズムで3歩前へ出てきた。ちよつどキュルケと一直線になる位置である。

「試しに、この私にきみの得意な『火』の魔法をぶつけてきたまえ」

キュルケはぎよっとする。そんな彼女にギトーが更に短慮な挑発を重ねる。

「どうしたね？きみは確か、『火』系統が得意なのではなかったかな？」

ギトーの繰り返された挑発にキュルケは目を細める。

「火傷じゃすみませんわよ？」

「かまわん。本気できたまえ。その、有名なツエルプストー家の赤毛が飾りでなければね」

キュルケの顔からいつもの小ばかにしたような笑みが消えた。

彼女の二つ名とは真逆に、教室の空気が一瞬にして冷え上がる。キュルケは、胸の谷間から杖を抜く。彼女の家系の証明でもあり、誇りでもある炎のような赤毛が、ぶわっと熱したようにざわめき、逆立った。

「おお！」

燃え盛る炎の美しさを目の当たりにした生徒から感嘆の声が上がる。

杖を振る。目の前に差し出した右手の上に、人と同じくらいの大きさの炎の玉が現れる。

「これで、終わりで無くってよ！」

キュルケはまだ終わりではないとばかりに続けざま、呪文を詠唱する。

すると、その玉は次第に膨れ上がり、直径2メートルほどの大きさにもなった。ネギとの修行によって確実に彼女もレベルアップを遂げていた。

燃え盛る火球の熱に煽られて、生徒たちが慌てて机の下に隠れる。

「は！」

キュルケは手首を回転させて、炎の玉を飛ばした。ゴウっと音を立てて、火球がギトーに迫る。

それに対して、唸りをあげて自分目掛けて飛んでくる炎の玉を避ける仕草も見せずに、ギトーは腰に差した杖を引き抜いた。

そのまま剣を振るようにして薙ぎ払う。すると、烈風が舞い上がった。

「きゃあ！」

一瞬にして炎の玉は掻き消え、その向こうにいたキュルケを吹っ飛ばす。

「……」

静まり返った教室を見て、悠然とギトーは言い放った。

「諸君、『風』が最強たる所以を教えよう。簡単だ。『風』はすべてを薙ぎ払う。『火』も、『水』も、『土』も、『風』の前では立つことすらできない」

自分の力に絶対的な自信を持つ者の言葉。

哀しいが、彼もまた自分の能力とは別次元に、無関係に与えられる虚飾を盲信する「教師」という生き物だった。

「残念ながら試したことはないが、『虚無』でさえ吹き飛ばすだろう。それが『風』だ」

キュルケは立ち上がると、不満そうに両手を広げた。
ギトーは続ける。

「目に見えぬ『風』は、見えずとも諸君らを守る盾となり、必要とあらば敵を吹き飛ばす矛となるだろう。そしてもう一つ、『風』が最強たる所以は……」

「へえ、じゃ私とやってみる？」

そして、そういう盲信する哀しい生き物には天罰が下る。今回は小さな女の子という形で。

「何だね、君は……？」

そしてギトーは対決する選択肢へ行ってしまった。
彼の睨みつける先には、机の上で堂々と腕を組み、屹立する女の子が居た。傍で赤毛の男の子が必死に下ろそうと頑張っているが、彼女は完全に無視している。

（あれは…）

ギトーは記憶の底を浚い、彼女が何者であるかを思い出した。

「君はミス・ヴァリエールの使い魔だな。平民風情に用は無い」

明かにバカにした言葉。だが、シヤナは冷静に言い放つ。

「負けるのが怖いのか？」

ニヤリと口元を歪ませる。普段の彼女からは想像もつかない姿だが、積み重なったストレスを晴らしたいという希望もあった。それがギトーの態度で爆発したという所である。

彼にも、彼女にも罪は無い。スタツとシャナがギトーの前に飛び出す。

「良いだろう、掛かってきたまえ」

そういつと再び、ギトーは詠唱を始める。

シャナは『夜笠』を纏うことも、『贄殿遮那』を抜く事も無い。

「ふう」

左手を天に高く突き上げる。口から零れる静穏な吐息。

だが、その頭上には煌々と、火の粉を風花のように散らし、燃え盛る紅蓮の巨腕が荒れ狂う。

「な、何なんだ……」

髪の色も、瞳の色も燃え盛るようなという、形容ではない。燃える、実際に燃えているかのような煌く紅蓮。その静謐な少女の姿を見て、ギトーは本人も気づかぬ内に、足を引いていた。

「まずい！」

これに真つ先に反応したのは、彼女を寸前まで止めていたネギだった。

「ラ・ステル マス・キル マギステル」

あの紅蓮の炎は、吹き飛ばせるようなモノではないと一瞬で判断した彼は、素早く魔法の詠唱を始めた。傍で見えていた夏梨も直ぐに防御体制に入る。

「縛道の八十一『断空』」

今回は自分の目の前ではなく、シャナの後ろに。それも囲むように3枚。

此方の方が、確実に被害が少なくて済む。

「ケソテイトス アストラブサドー デ・テメー
来たれ 虚空の雷 薙ぎ払え」

「はああ！」

瞬間、シャナは腰を沈め、左手を手刀に横薙ぎに振った。

その神速に僅かに遅れて、紅蓮の巨腕がギトーの起こした烈風を飲み込みながら、彼に迫る。

「デイオス・テユコス
雷の斧！」

その寸前でネギの雷の斧が振り下ろされた。

炎と雷。二人の力が衝突して、辺りに巨大な爆風を起こす。

斧は巨腕を切り裂く。巨腕は斧を折り潰す。

煙が晴れた後に残るのは、完全に腰を抜かしてしまった情けないギトーの姿だった。

「どういつつもり、ネギ？」

彼を無視して、後ろに立っているネギに問いかける。

まさに一触即発。生徒達にしてみれば、正直、ギターとキュルケが睨み合っていた時の方が何倍も楽だった。何時終わるかもしれない睨み合いに、冷や汗が幾筋も伝う。

「一体何事ですか？」

教室の扉がガラツと開き、随分と緊張した顔のコルベルが現れた。突然の闖入者に教室の空気が幾分緩和される。

「どうしたの、その格好？」

夏梨が問いたくなるほど、今のコルベルの姿は珍妙なりをしていて、頭に馬鹿でかい、ロールした金髪のカツラをのっけている。さらには、ローブの胸にはレースの飾りやら、刺繍やら、とにかくおめかしをしていた。

だが、その方向性が上手く纏まっていなくて、何ともチグハグな感じになってしまっているのだ。

「ミ、ミスタ？」

ようやく腰が立つようになった、ギターが自分の失態を隠すように首をかしげた。

ルイズたちも首をかしげる。

「おや？ミスタ・ギター？どうしたのですか？」

「じゅ、授業中です」

そんなことは聞くなとばかりに、ギターが乾いた唇を動かして言った。

「どうかしたか？コルベールさん」

コルベールの珍妙なナリを見たネギもシヤナもすっかり梯子を外されてしまった。教室の中に漂っていたピリピリしたムードが、完全に霧散してしまった。

コルベールが軽く咳をすると、重々しい調子で告げた。

「おっほん。今日の授業はすべて中止であります!!!」

そう告げると教室中から歓声があがる。やはり学校の授業が退屈なのは異世界でも共通のようである。その歓声を抑えるようにコルベールは言葉を続けた。

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

もったいぶった調子で、コルベールはのけぞった。

のけぞった拍子に、頭にのっけてあっただけの馬鹿でかいカツラがとれて、床にぼとりと落ちた。

夏梨が頬を膨らませて笑う。

「くツ！くくく！アハハハハ！」

耐え切れなくなった笑いが爆発し、腹を抱えて笑う彼女を見て、教室中がくすくすと笑いに包まれる。

一番前に座ったタバサが、コルベールのつるつるに禿げ上がった頭を指差して、無表情にポツリと呟いた。

「滑りやすい」

笑いをこらえていた生徒達は次々に笑い出し、直ぐに教室中が爆

笑に包まれた。

キユルケは笑いながらタバサの肩をポンポンと叩いて言った。

「あなた、たまに口を開くと、言うわね!！」

コルベールは顔を真っ赤にして、怒りの表情をあらわにしながら、大きな声で怒鳴った。

「黙りなさい! ええい! 黙りなさいこわっばどもが!」

何時までも先の見えない笑い声を消し去るように、叫ぶ。

「大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行いですぞ! 貴族はおかしいときは下を向いてこっさり笑うものですぞ! これでは王室に教育の成果が疑われる!」

確かに下品な行動をしていては、教育の成果も出ていないことになってしまっただろう。

コルベールの剣幕に圧されて、あつと言つ間に教室が静かになった。

「えー、おっほん。皆さん、本日はトリスティン魔法学院にとって、よき日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並び、めでたい日であります」

コルベールは演説するかのように、横を向くと後ろに手を組んだ。何とも前置きが長い喋りである。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリスティンがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花…、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマ

ニアご訪問からのお帰りにこの魔法学院に行幸されます」

その言葉に教室がざわめいた。

「したがって、粗相があつてはいけません」

かなり真面目な顔つきになってコルベールが喋る。

夏梨はその真面目な顔と、服のセンスの無さのギャップに笑いを堪えるのに必死だった。

「急なことです、今から全力を挙げて歓迎式典の準備を行います。そのため今日の授業は中止。生徒諸君は正装で門に整列するように」

生徒たちは、緊張した面持ちで一斉に頷いた。

そこで、ようやく復活した才人がルイズに尋ねる。

「どうしたんだ？」

才人が目覚めてみると、教室中に歓喜と緊張、その二つが入り混じった空気が流れていた。今になって気絶から回復した彼は、コルベールの話を全く聞いていなかったのだ。

その様子に仕方ないとばかりにルイズは説明する。

「もうすぐ、お姫様が来るのよ！この学院に」

「へえ！」

才人は興味深々と言った様子だ。

「この国の姫様かあ。どんな人か気になるな」

「そつ?」

席に戻ってきたシヤナは、随分と興味がなさそうだ。それが伝播したのか、夏梨も話を聞くことなく大きな欠伸を一つかました。

「おっほん!」

コルベールが軽く咳をする。才人たちも会話を止めてコルベールを見る。

「諸君らが立派な貴族に成長したことを、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ!御覚えがよろしくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい!よろしいですか!」

生徒たちが、はい、と返事を出す。その様子にコルベールは満足げに頷く。

「付きましては、明日予定されていた使い魔の披露会も同時に行います」

今度は一斉にブーイングが巻き起こる。それを手で制してコルベールは話を続ける。

「使い魔の状況など常日頃から見ているものですぞ!常に気遣いを忘れていなければ、何も問題ないはずです!」

彼の言う事は全くの正論だった。

シンと静まり返った教室を、一回見回すとコルベールは満足気に教室を後にした。

「で、では、私も行くとしますかな」

そう言つて、教室からそそくさと出て行こうとするギトーも教室を後にした。シャナに精神的なプライドをズタボロにされたのが余程、堪えたらしい。歩くペースも心なしに遅く、不気味さを演出していた黒い服も、こつやつて見ると何だか、可愛いものに見えるから不思議だ。

「まずいわね…」

口々に王女の来訪を噂する生徒達を後目に、ルイズは一人考え込んでしまった。

「どうしたんだよ？」

その様子を怪訝な顔で見る才人。シャナは思いつきり、耳を引っ張つて才人の顔を此方へ向かせた。

「いたた…。何すんだよ、シャナ」

「アイツが何で悩んでいるか大体、分かるからよ」

うんうん、と頷く夏梨とネギ。でも、才人には分からない。

「何を考えてるって？」

「えっと、使い魔の披露会。コイツの使い魔は？」

「俺たち7人」

澱みの無い才人の回答に、シャナが大仰に頷く。

「そうよね、でも、私達は？」

「…ただの人間」

実際はただの人間は才人一人だけなのだが、事情を知らない外からしてみれば、どれも一緒だ。

マントと杖が無い。その外見的特長だけで、決めてしまわれる。ネギも狭い廊下を歩く事が多くなったので機能面から、長い杖は自室に置いてある。

「ただの人間が使い魔。さてこの子はどうするでしょう？」

「何か魅せられるようにする・・・」

魅せるための内容が何かは分からない。

だが、才人が予感したとおりなら間違いなく碌な事にはならない。そう痛む体が告げていた。

25・Best start to head hitting (後書き)

ネギへの「お兄さん」との約束ネタは絶対に入れておきたいと思っています。

彼は確かに優秀で、強いですが、まだ10歳なのです。社会的に、常識的に欠けている面が多々あります。それをどう補ってくれるのが気になります。

シヤナの教師制裁は原作のまま。

後半になるとあまり語られていませんが、彼女は確実に教師に良い影響を与えていると思います。ギトー先生も変わると良いな。

硬い石の床の上で、フーケは目を覚ました。

冷たくザラついた石の感触が全身に響く。既にここで生活し始めて2日。何となく監獄での生活にも慣れ始めていた。慣れたくない自分との鬨ぎ合いが続く。

「つたく、ホント忌々しいね…」

ここは王宮の地下に作られた拘禁牢。裁判を待つ罪人は真つ先にここへ集められる。裁判の後は流石に分からない。紛う事なき犯罪者であるフーケに残されているのは、良くて永久投獄、悪ければ絞首刑だろう。それくらいは彼女も分かっていた。分かっている盗賊に身を賣したのだから。

「ま、死んでやるつもりは無いけど」

決意のような呟きを漏らす。

杖も取り上げられてしまったが、彼女は盗賊になってから魔法だけに頼って生きてきた訳ではない。彼女の頭脳は放り込まれた時から、脱獄の手順を考えていた。

「あ、おはようございます」

そんな彼女の思考を邪魔するかのような、能天気で可愛い女の子の声が聞こえてきた。昨日まではいなかったから、寝てる間に叩き込まれたのだろうか。

声のする方へ、鋭い目を向けると、自分よりは幾分年下の、だが女性と少女の境目に立つ、綺麗な女の子がペタンと座っていた。髪

は肩にかかるくらいの長さで、瞳の色と同じ黒をしている。

「やあ、何とも牢獄というのも実に楽しいね。」

そして隣から壁越しに聞こえてくるのは、この状況を理解していないのか楽観している男の声が聞こえてきた。姿が見えないので分からないが、随分と若いだろう。

「こらー、出せ！」

ガンガンと鉄格子を叩く耳障りな音が、大音声と共に響く。

この声の主もまた、随分と若いだろう。姿は見えないが、窓の無い密閉された空間では良く響いて伝わってくる。

「うるさいよ、あんた！」

響く鉄のぶつかり合う音にイラ付いた調子でフーケが、辞めさせる。彼女の声もまた、薄暗い地下牢に鋭く反響した。

「あ、ごめんなさい」

先ほどと同じ女の子の声がして、叩く音が止んだ。

しかし、自分が昨日寝るまでは誰もいなかったはずだ。一晩で三人もの、それも若い男女が捕まっているのは、どうにも腑に落ちなかった。

「しっかし、あんた達は何をしたんだい？あ、私はフーケってんだけど」

興味本位からフーケは尋ねた。若い身空でここへ放り込まれた三

人に、何となく親近感というか、シンパシーを感じたのだ。

「んー、不法入国と行き倒れ？」

「はい？」

隣にいる男が、呑気に答える。

「あ、私も同じ」「うん、私もー」

「おいおい、なんてこつたい…」

不法入国でとっ捕まるとは、彼らも随分と不運である。

確かに街道には、国境に当たる場所に関所が設けられている。しかし、どの国も中央の目が行き届かなければ、あつて無き様なものだ。勿論、街道を避けて山中を通る方法もある。

「そついや、名前を聞いていないんだけど、聞かせてもらつて良いかね？」

捕まつたものは仕方が無い。不法入国位なら強制送還程度で済む。自分とは待っている未来が違うだろう。そう思うと、せめて自分の裁判が始まるまでの良い話し相手になつてくれるかもしれない。

目の前にいたセミロングの黒髪の少女から。

「私はリナリー・リー」

隣にいる姿の見えない男。

「俺はリン・ヤオ」

ガンガンと鉄格子を鳴らしていた女の子。

「ウインリィ・ロックベルよ」

しばしの間、薄暗くかび臭い監獄に似つかわしくない笑い声が響き渡った。

「だから、これが目に入らねえのか!」

一方その頃。

王宮の玄関では衛士と訪問客の間で一悶着起きていた。

「ええい、怪しい奴らめ! ひっ捕らえてくれる!」

ゾロゾロと囲むように兵士達が並ぶ。猫の子一匹通さない完全な円陣が完成してしまった。

「参ったな...」

「困りましたね...」

そう呟くのは一護とアレン。衛士達の隊長と喧々の言い争いを繰り広げるのはエドだ。

彼らはフーケ討伐の功として、オスマンを通じ、王宮の図書館の使用許可を一番最初に求めた。流石に学院の中では、異世界の事を著した本も無いだろうという観点から、情報集積される場所として、ココを選んだのだ。

「正当な許可だろ！このサインも学院長のものだろ！」

ずいつ、ずいつと印籠のように隊長の目の前に羊皮紙を突きつける。だが、その手を払いのけ、エドの顔へと剣を向ける。今回は調べモノがメインだったので、皆武器は置いてきている。

「オスマン学院長の名を語るとは、不屈き千万！掛かれ！」

隊長の合図を受けて、取り囲んでいた衛士達が一齐に距離を詰めて、飛び掛ってくる。高々、30人ほどだから、この場で蹴散らせない事も無い。だが、ここで大暴れして折角の機会を潰すのも躊躇われた。

「ち、しゃーねえ……」

最初に諦めたのは一護だ。それに習ってエドとアレンも両手を上げた。

「ふん、素直なのは良い事だぞ」

隊長の勝ち誇った顔を、孔が開きそうな程の勢いで睨みつける一護とエド。

それを無視して、満足気に隊長が命令した。こういう不審者を捕まえるのは、衛士にとって実に評価が高い。

「牢へ連れて行け」

顎でしゃくると3人は囲まれたまま、歩き出した。

牢屋の中でも軽い談笑が続いていた。

盗賊と不法入国者、こんな珍しい場所で出会うのも何かの縁である。

「へえ、アンタは東から来たのかい？」

「うん、そうだな」

フーケが特に興味を持ったのは、東から来たというリンだった。

この世界の東方には広大な砂漠があり、そのオアシスなどの要所はハルゲギニアの社会にとって脅威でしかない、エルフが残らず押さえている。

エルフ達は夫々が驚異的な魔法の使い手であり、鍛えられた戦士なのだ。

一人で此方の一個連隊とも渡り合えるとも言われる。

そんな驚異的な存在が済む砂漠の更に向こう、ロバ・アルカリ・イエ東方と呼び習わす

世界にも、風聞では人がいるらしいが、実際に会うのは裏の社会に沈み込んだフーケも初めてだった。

(ま、そういうことじゃないんだけどね…)

二人の話を聞きながら、持っていた油布でスパナを磨くウインリイ。彼女の格好はツナギの上を肌蹴け、中の黒いタンクトップが見えてしまい、何とも悩ましい格好をしている。

「東か」。あれは大冒険だったな」

顎に細い白魚の様な指を中てて、回想するリナリー。彼女もまた、東へ向けた大冒険を経験しているのだ。話は4人の間で微妙に噛みあっていないのだが、それでも通じている。

「ほら、さっさと歩け！」

その談笑を打ち切るように、見張りの兵士の鋭い声が響く。

「つてーな！んな事しなくても、歩くわ！」

更に鋭く厳しい声が、地下牢の中に響く。この鋭い声にウインリイとリンには聞き覚えがあった。聞き慣れたハスキーな声。この特徴的な声に、フーケの耳も反応する。

その声と一緒に兵士に周りを固められた三人が乱暴な足取りで降りてきた。

「あー」「あー」

「な！」「や」「あー」

新しく入ってきた二人の声と、先に入っていた3人の声が重なる。

「何で、お前らがココに！」

「何で、エドがココに！」「やあ、エド。久しぶりだな！」

「お前は知らん！」「そんな酷いよ」

言い争うエドとウインリイと、オマケのような扱いで入れてもらっているリン。

その一方でアレンとリナリーは、

「あ、え、えつと…、リナリー？」

「な、何かな、アレン君？」

久しぶりに会った恋人のような初々しい反応を見せていた。

「なんだい、あんた達。知り合いだったのかい？」

「何だ、知り合い…か？」

状況に置いてけぼりを食らった一護とフーケは、完全に外に締め出されていた。

「とつとと入れ！」

その様子を見た兵士が開いていた牢へ3人纏めて乱暴にぶち込む。その乱暴さにはいい加減、エドが切れた。無言で右手の鉄拳を顔に打ち込む。硬い拳を正面から防御も無しに叩き込まれた兵士は気を刈り取られてしまった。

「あ……」

やってしまった。我慢も長くは続かなかった。兵士の持っていた槍が、持ち手よりも先にランランと乾いた音を立てて、石の床に落ちた。

「誰かさんが穩便に済ませてくれれば、余計な騒ぎもなかったろうに……」

アレンが重いため息と共に悪態をつく。肩を竦めて、やれやれと言った様子だ。

「過去を悔やんでばかりでは、前に進めないぞ！」

アレンに反論できなかったので、顔を真っ赤にしながら叫ぶ。こうなってしまうては仕方が無い。無言で兵士の懐から鍵の束を取り出す。脱獄というよりは脱走であるが、序で見知った顔も逃がすことにした。流石にココで見つめてみぬフリは出来ない。

「ありがとう、エド」

「ありがとう、アレン君」

「おい、俺も開けてくれヨー」

捕らわれの姫というようなキャラクターでもないのだが、二人の態度にエドとアレンは少し戸惑う。顔が赤くなるのが、実感できた。

「おい、開けてくれってバー」

シクシクとその糸目から涙を流すのは、捕らわれたままのリン。

「うるせえ、この前もこんな事あったろ！」

流石に2度も3度も助けたくは無い。紛う事なきエドの本心だった。

「そんな釣れない事言つなヨ、エド。メシ、奢つたる？」

「奢つたのは俺だ！」

「あれー、そうだった？」

何時終わるとも分からない二人の言い争い。それに終止符を打つスパナがエドの頭にクリーンヒットした。

「っああ・・・」

声にならない悲鳴を上げて、的になったエドは頭を抱えて蹲る。血は出ていないが、鋼鉄の弾が当たれば、流石に錬金術師といえども痛い。

「エド、助けてやんなさいよ」

「……ち。わーったよ」

「どうも、助かるヨ」

ウインリイの剣幕に圧されて、しびしびと言った様子でリンの檻の鍵を開けた。独特の文様が入った民族衣装の埃を払いながら、リンが出てくる。

「俺の武器を取り返したいんだケド」

騒ぎを聞きつけて応援がやってくるかもしれないのに、呑気な事をシレッツと言つてのけるリン。流石にこればかりは脱獄囚となりかけた3人も難色を示した。

「急ぐ時に何言つてんだ？」

そう言おうとしたが、牢の入り口でリンの業物は簡単に見つかった。

最後にアレンはフーケをじっと見る。

「おい、何やってんだ？」

「少し、待っててください」

急かす一護を制して、捕まえた盗賊へとアレンは向き直る。フーケにしてみれば、これは面白くない。寧ろ、傷口を抉られているよ

うな気がして、じくりと心が痛んだ。

「何やってんだい？私に義理立てしようってのかい？」

フーケは鼻を鳴らして、憤慨した。

「お断りだよ。そう人の手を借りるほど落ちぶれちゃいないさ」

「そうですか。貴方の事ですから、脱獄でもするんでしょう？」

アレンの見透かしたような口ぶりに、フーケは驚く。

「そんな貴方にプレゼントです」

ニコリと笑って、ポケットから黒いイヤークアスをフーケに渡す。

「何だい、これは？」

「付けて置いてください。どうにも貴方とは長い付き合いになりそうですしね？」

そう茶目つ気たつぷりに言い残すと、先に出た5人を追って銀髪の少年も地上への階段を駆け上った。

27・Reunion of fools

「いやー、うまかつた。アリガト、ごちそサン！」

チチツと齒の間に挟まった食べかすを穿りながら、リンが片手で礼を述べる。彼の傍には山のように積み上げられた汚れた皿があった。

「奢るなんて、一言も言つてねえんだけど…」

場所はいつの間にか常連になってしまった料理屋だ。

値段は平均的で、決して豪華な食材や調味料を使っている訳ではないが、逆にその素朴な味わいに嵌ってしまい、一護たちは街へ来るたびに、ここに厄介になっている。

「小さい事、キニシナイ！」

「小さい言つな！」

笑っているのか、怒っているのか、その糸目からでは今ひとつ読めない。

だが、悪意の無い一言にエドがすかさず反応する。

「反応すんなよ…」

同じように食べ終えた一護が渋い顔になる。折角の美味しい食事なのに、こんな下らない争いがあつては半減してしまう。牢屋から脱獄した一同は、リンとアレンの腹の虫を抑えるために、いつもの料理屋にやって来ていた。相変わらず、アレンは食べるが、それに負けず劣らずの勢いでこの不思議な男の胃には、料理が消えていった。

「にしても、異世界なんてね……」

「僕も最初は、と、はむ、ま、もぐ、どいましたよ」

新しく運ばれてきた皿を手品のように消し去りながら、リナリーをアレンは優しく諭す。確かにイキナリ言葉も、通貨も通じない世界に放り込まれては、生きていけないだろう。

「でも、アレン君、元気そうで良かった」

「……」

白い指先でアレンの輪郭をなぞる。その所作にアレンは顔を真っ赤にして、咀嚼するのも忘れたままだ。大きな弟を世話するような姉のような様子である。

「この世界の機械ってどんなのがあるの、ねえ？ねえ？」

そんな二人を無視してエドにずいずいと近寄るのはウインリィ。

彼女はエドの幼馴染であり、また機械工でもある。何を隠そうエドの右手左足の機械鎧も彼女の作品だ。

騒ぎ立てる幼馴染の高い声は、好意的なものであると同時に、こついった時にはうるさいものになってしまう。

「うるさい、機械オタク」

「うるさい、錬金術オタク」

顔を付き合わせると互いに憎まれ口を叩き合うが、それでも仲は非常に良い。幼なじみというものらしい自然な接し方だ。

「……」

そんな仲の良い二組を見ている一護は所在がない。いつまでも話に入っていけないのは辛いので、強引に割り込む事にした。

「で、三人はどうやってこっちに？」

目下彼が聞きたいのはそれだ。

「破壊の杖」の事を考えると、人以外も此方へ来ている可能性がある。それならば、この世界には別の世界からやって来た物品が他にも存在しているかもしれない。自分達が戻るヒントも其処に隠されているのかもしれない。

「いやー、良くワカンネ？」

頼りにならないリンの言葉。

エドの目が更にきつい物になるが、本人は指して気にしていないようだ。

「私は、自分の部屋に浮かんだ白い鏡にみたいなモノに吸い込まれて…」

状況的には自分達と大差ないリナリー。

彼女にアレンは何故かホツとしたような安堵の表情を浮かべた。

「私も気が付いたら、ここに居たから」

三人とも聞いたが、やはり自分達と同じで当てになりそうにない。期待していなかった訳ではないが、ここまで外れると流石に辛い。

「仕方ねえな、いつペン戻るか…」

食べ終えた一護がゆっくりと立ち上がる。それに釣られるように、皆立ち上がった。

行く当てが無いなら、一緒に行動する方が良い。人数が多いほうが、これからにも役に立つ。

「行くつてドコへ？」

「うーん…」

エドが頭を搔いて、答える。

「俺らの雇い主？」

「はい？」

流石にこれには3人も疑問符を浮かべるしかなかった。

隣国ゲルマニアの国境を越える馬車の一団。

トリスティン魔法学院へと続く街道を、数台の馬車がゆっくりと進んでいた。その進行方向の街道には等間隔で衛士達が並び、行列の進む道を警戒している。

ガラガラとアスファルトなど舗装されていない道を大きな車輪を転がして、進んでいくが不思議と車体は揺れていない。その馬車を引くのは清らかな乙女しか触る事を許さないという、一角の獣だ。^{ユニコーン}銀の鬣が風に吹かれ、戦いでいる。

「あれが姫様の馬車じゃねーか？」

「ホントだ！王家の紋章が飾ってあつぞ！」

馬車のところどころには王家の紋章が飾られている。

街道には、この良い機会に王家に連なる者の姿を一目見ようと、多くの民衆が並び、歓呼の声をあげていた。その紋章の飾られた馬車が自分たちの目の前を通る度に、

「トリステイン万歳！」

「アンリエッタ姫殿下万歳！」

という大気すら割れるような、大きな歓声が沸き起る。

中には皮肉めいた叫びで、

「枢機卿万歳！」

と叫んでいる者もいた。

街道からの歓声に応えるように、ユニコーンが引く馬車のカーテンがそつと開き、中からわずかに少女が顔を覗かせると、彼女は民衆に向かって手を振った。

さらに一段と高くなる歓声に、少女は微笑を投げかけた。

民衆のよる喚起の声に包まれつつ、少女の馬車は魔法学院に向かって進んでいく。

だが、笑っている顔も見えなくなると全く別の顔を覗かせる。

「はあ……」

その一角獣の引く豪華な8頭立ての馬車の中、ため息をつく少女がいた。

「これで十三回目ですぞ殿下」

その全てのため息を聞いている、聞かされている痩せこけた男が、
苦い顔をしながら指摘する。

「なにがですか？」

「ため息のことでございます」

馬車の中では、白いドレスを着た少女と、特徴的な帽子をかぶった老人がいた。

少女の名はアンリエッタ・ド・トリステイン。この国の王家に連なる姫君である。先代国王の忘れ形見とも言われ、今やこの国のトップに僅か17歳の若さで就いてしまった少女である。

「そうおっしゃらないで下さいな。私とため息ぐらい付きたくありません」

「あまり、不安な顔を見せないで下さい・・・」

そう言って、老人は痩せこけた頬を搔く。

特徴的な帽子をかぶった老人は、マザリー二枢機卿。先代の国王が自らの片腕としていた男である。

先代の国王であり、アンリエッタの父でもあるヘンリー3世が崩御してからは、摂政の地位を得て、この国の舵取りをしている。位を得た時は、国内で色々な醜聞が流れたが、彼本人は気にしていない。

「そのような顔をさせているのは、これからお会いするオスマン氏達にも良い印象を持たれませぬぞ」

「ならば、誰も見ない馬車の中でぐらい、暗い顔をさせてくださいな」

アンリエッタもまたマザリーニに負けず劣らず苦い顔をする。

「姫には笑顔が似合います」

腕を組んで威厳たつぷりに言うが、アンリエッタは気にした風も無く、14回目のため息を付いた。

「ふつむ…」

あまり暗い顔をしていては、訪問を受け入れる側には良い印象を持たれない。

幾ら彼女が王族で、貴族たちの頂点に立つ存在だとは言え、正しい礼儀と、相応の顔をしていなければ、相手を怒らせてしまう。生きてきたマナーとして当然の話であった。

何かを思いついたのか、彼は手をポンと打つと、

「誰かいるかね？」

御簾を上げて、外に控えている姫の護衛を呼んだ。

「は、ここに」

一番近くにいた、羽根突き帽子を被った青年が直ぐに駆け寄ってくる。彼は驚の頭に馬の体を持つ、幻獣グリフォンに乗っていた。王宮を守護する魔法衛士隊。完全に貴族の子弟だけで構成されたこの部隊は、魔法を扱うだけでなく実際の戦争に借り出されたりする、貴族の中でも一握りのエリートがなれる。だからこそ、男達はこの地位を目指し、女達は彼らの妻の座を射止めようと躍起になる。

「何か、御用でしょうか。閣下」

その帽子を被ったエリートは恭しく枢機卿に一礼する。

「姫の顔色が優れない。何か気晴らしになるものを探してはくれんかね？」

「御意に」

短く切るような返事をする、直ぐに探し出した。

鋭い鷹のような目で周囲を見渡すと、街道に小さな白い花が咲いているのを見つけた。すつと慣れた動作で杖を引き抜き、魔法を唱える。

出来た小さなつむじ風が根を切り、彼の手には花を収めた。

「こちらで」

すつとアンリエッタに向けて摘み取った花を差し出す。

この程度で気が晴れ晴れとすることは無いだろうが、気休めにはなる。

「ありがとうございます」

「いえ、この程度でよろしければ」

そう言つて、衛士は謙遜する。

「お名前は？」

明かに作り物だと分かる笑顔を浮かべてアンリエッタが聞いてきた。だが、そんな造られた笑顔でも目上の者に名を聞かれては名にならない訳にはいかない。

「グリフォン隊隊長、ジャン・ジャック・フランシス・ワルドと申します」

正確に造られた最敬礼で隊長のワルドは答えた。

「ありがとうございます。あなたは貴族の鑑のように立派ですね」「殿下の卑しき僕に過ぎませぬ」

謙遜のように言う子爵に、アンリエッタは更に優しく微笑んだ。

「祖父が生きていた時代には…」

それだけ言うのと再び、アンリエッタは馬車の中へと引っ込んでしまった。引っ込んででもまたポケットと心ここに在らずと言った調子で花を見つめている。

「姫？」

「何でもありませんわ…」

自らの持つ不安を全て吐き出すようなアンリエッタの声を聞き、マザリーニゆるゆると首を振る。

「それならいいのですが…」

マザリーニはアンリエッタに頭を下げると、姿勢を正し一度咳払いをしてから話を強引に変えた。このまま沈み込んでいるよりも、何か話したほうが気は紛れる。

「ゲルマニアとの同盟は今や急務なのですぞ」

「分かっています…」

また更に表情を暗くするアンリエッタ。

常には満面の笑みを浮かべて、城のバルコニーから手を振るのだが、今そんな覇気は微塵も感じられない。マザリーニは自分で話を振りながらも、地雷を踏んでしまった事に頭を掻いた。

「アルビオンの王家が崩壊すれば、次に来るのは間違いなくこのトリストイン」

今、ハルゲギニアの4カ国を取り巻く情勢は、微妙なパワーバランスの上に成り立っている。少しでも崩すような事態になれば、全戦力を傾けた史上空前の決戦になる可能性が十分にあった。

「この国を守る為にも、ゲルマニアとの同盟。そして…」

彼は更に姫の顔を俯かせる事を知って、それでも尚、言う。

「皇帝殿との婚姻は避けられぬ事態なのです」
「分かっています…」

返事は最早、ロボットのようだ。

王家に生まれた時点で、人並みの少女としての幸せは諦めているだろうが、17の身に現実突きつけられると流石に重く、辛いものがある。

マザリーニは、そんな姫をまじまじと見つめて、

「殿下。最近、宮廷内で不穏な動きが見られます」

ピクリとアンリエッタの肩が震えた。

「何でも殿下の婚礼を蔑ろに、同盟破棄を画策するものとか…」

じろりと、一国の姫に臣下が向けるような目つきではないモノを向けて、

「そのような者達に付け入られる隙は、ありませんな？」

確認染みた作業だったが、アンリエッタの肩が小さく震えて、黙り込む。

少しばかりの沈黙の後、重苦しい口調で姫の方が口を開いた。

「…ありませんわ」

「その言葉、信じますぞ。何せ、雲上の反乱軍は王権と言うのが、心底氣にらないようですからな」

今現在、アルビオン王家は、自国内の反乱軍との戦いで手一杯になっている。

元はただの鎮圧だったのだが、小さな衝突から、大規模な革命戦争へと発展してしまった。その結果、反乱軍が滅亡まで追い詰めると言う状況になっている。

「そつえば・・・」

これ以上聞きたくないとばかりに、話を今度はアンリエッタが強引に変えた。

「『土くれ』のフーケを捕らえたという3名の生徒へと報賞はどうなりました？」

アンリエッタは手元の書簡へと目を落としながら、聞いた。

書簡に書かれている生徒の名は4つ。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

タバサ。

ギーシュ・ド・グラモン。

そして、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

「ああ、それでしたら」

つい先日、トリスティンを騒がせた『土くれ』のフーケが拿捕されたという報せがあった。

魔法衛士が散々、手玉に取られた盗賊が、こうもあっけなく魔法学院の生徒に捕らえられたという事で、アンリエッタの耳にも入っていたのだ。

「ええっと、どれでしたかな……」

ガサゴソと自分の周りに散らばった所管から、マザリーニは目的の物を探し出す。

学院からはその功を称え、3名の生徒たちへと報賞、本来ならシユヴァリエの爵位を与えて然るべき程の功であり、学院からもそのように申請があったのだが、

「それでしたら、シユヴァリエ授与の条件が変わったので、授与されませんな」

少し酷くなり始めた老眼を駆使して、書簡を確認する。

彼女らがフーケを捕縛する前日、爵位認定の要件が変更となり、授与には従軍が必須となった。

「そうでしたが…」

勿論、これは偶然ではある。

「私の知らないところで、法も何もが変わっていくのね…」

姫君の自嘲のような言葉を枢機卿は聞こえない振りをした。

「平和じゃの〜」

そういうオスマンは使い魔であるモートソグニルにナッツを与えながら呟いた。

嬉しそうに、白いネズミが啼く。

「そうですね〜」

その言葉に賛同したのはコルベールだった。

フーケの討伐も終わり、待っているのはアンリエッタ姫の行幸が直ぐにでも控えているが、ホスト役としての挨拶くらいしか役目の無い二人は、本塔の最上階、学院長室でのんびりと、ボードゲームに興じながら寛いでいた。

お互い、見事な指し手であるが、素人目にはどんな戦略が頭の中で広がっているのか、理解できない。

「して、準備のほうはどうなっておる？」

二つ目のナッツを与えながら、コルベールに世間話でもするかのような調子で尋ねる。

対する彼もまた、同じような調子だ。

「もう粗方、終わっているようですよ。一泊されるそうですから、部屋の準備も」

「ホホホ、そうか。そうか」

長いあごひげを摩りながら、オスマンは満足気だ。

今頃、学生達は右へ左へと大騒ぎしているだろう。いきなりの方針変更も、彼ら二人の発案であった。一応は、コルベールの方も勤続年数の長さから、先生たちの取り纏め役になっているので、それなりに決定権はある。飾りつけなどは、学院に務める使用人達の仕事だ。

「なら、もつ…」

そう言いつつ、ふと、窓の下に目を遣ってしまった。

今頃、先倒しになった使い魔の披露会の為に中庭には生徒達が一斉に出て、毛づくろいを試みたり、鱗を磨いたりしているはずだ。その体勢のまま、固まってしまう。

「どうしました、オールド・オス…」

言いかけて止まったオスマンが気になったのか、コルベールもまた窓の傍まで遣ってきて、一時停止のように完全に動きが止まった。彼ら二人の目線の前には、実質的にフーケを討伐した一護達がいる。

何事か談笑しているが、問題はその人数だ。

「1、2、3、4、5…」

震える手でコルベールがその人数を数える。明かに人数がおかしい。

「6人居ますね…。増えましたね…」

「ははは…」

遠目からでも和やかに談笑しているのが分かる。間違いなく彼らの仲間だろう。

ギアスベーパー
制約書に書かれた項目。「我々の仲間の必要な量の衣食住の確保」という項目。勿論、彼らの食も衣も住も、学院の運営費から出ている。

ほぼ彼らは自活しているとは言え、人数が増えるのは、単純に懐の穴が大きくなる。

「くおおお…」

学院長は頭を抱えて悩んだ。

オマケに親しげに話していると言う事は、彼らもまた、先にやって来た者たちと、同等の実力を持っているのだろう。これから先、どう相手にして良いのか、学院長は解らなくなってしまった。

「あー、とりあえず、オールド・オスマン」

コルベールが、薄くなった頭を摩りながら言いくそくに言った。

「とりあえず、今晚の事を考えましょう」

(俺の名はコン)

黙ったままのライオンのぬいぐるみが、人の言葉で語りかけてくる。透明な声だが、今は少しばかり緊張しているような様子だ。

(KING OF NEW YORK。略してKONだ！)

声に出していないからだ、周りからは何の反応も無い。

(嘘だ)

あっさりと撤回する。

清清しいくらいにあっさりと撤回する。

(現在、男手一つでオレンジ頭の単純三文死神高校生…)

彼の事を何かにつけては叩いたり、握りつぶそうとしたりする腹立たしい男の顔を思い出しながら、しっかりと憎い気持ちを込める。

(その妹のナマイキ黒髪死神中学生を養う多忙な日々を送る一匹狼だ)

何かに付けて自業自得で起こす出来事に対して、粘ついた視線を送る妹の方も彼にとっては、腹立たしいのが現実だ。実際はそんな事実は全く存在しないし、もっと言えば事実誤認も甚だしい。

(見た目はぬいぐるみだが、心はオオカミだ。そういう意味だ)

確かに彼の心はオオカミかもしれない。
下心全開で、兎に角女性にぶつかっていく。その姿はまさに狼と
いうに相応しい。

(そんな俺だが、ぶっちゃけ今、大ピンチだ)
「汚いぬいぐるみ……」

足を持たれた彼は、ちょうど曲芸のように空中に吊り下げられて
いる。

薄汚れた体を、じっと赤い縁の眼鏡の奥に隠された目が見ている。

(何で俺がこんな事になってるのか……?)

止むに止まれぬ事情がある。

(今日はまずそこから話さなきゃいけない。そうだろ?)

昼休み、それは生徒達にとっては憩いの時間。

だが、今日はいきなり皆、揃って忙しくなってしまった。

数日先に控えていたはずの使い魔披露会が1週間も前倒しになっ
た上に、更にトリステイン王女であるアンリエッタ姫が行幸するら
しく、非常に気合いが入っていた。

だが、いきなりの出来事にてんでこ舞いになっている。

「……ああ、ヴェルダンテ。君の愛らしさは、それだけで芸術だよ」

うつとりと自身の使い魔のジャイアント・モールと見つめ合うギ
ーシュ。

彼と彼が抱きしめる巨大なモグラの周りには近寄りがたいオーラ
が放たれている。

「…リボンはないわね」

すつと結んだリボンを解く。

カエルの使い魔、ロビンをどうやって可愛くするかを考えている
のはモンモランシー。

「はい、ここでプレスよ。フレイム」

「きゅるっ、きゅるっ」

口から渦巻いた炎を吐き出すサラマンドー。

キュルケはそれを見て、満足そうに頷く。留学生であるが、こう
いった勝負事に対して負けたいとは思わないのが、彼女なのである。

「……」

「きゅいっ」

ペラペラと本を読みながら壁にもたれ掛かるタバサ。

使い魔の風竜、シルフィードは何かをしたそうだが、主はページ
を捲る手を止めない。キュルケとは違って、特別彼女は何かしたい
と思わない。

そして、この披露会に向けて張り切っているのは彼女も例外では
なかった。

「こら、待ちなさい！バカ犬！」

「捕まつてたまるかあ！」

ルイズは逃げる才人を捕まえようと、先程から庭を右へ左へ駆け回っている。鬼ごっここの要領だが、男と女では体力的にどうしても差がある。どちらも鍛えていないひ弱な体とは言え、段々と才人が引き離していく。

「バカみてー」

やる気なく、上から見ているのは夏梨。

夏梨たちは彼女の癩癩のとぼつちに巻き込まれるのは御免とばかりに、早々に中空に浮いている。こうなってしまうば「フライ」の使えないルイズは追ってこれない。

憎憎しげな顔で睨んでいたが、彼らにして見れば彼女の自尊心を満たす為だけに、犬の真似事をする義務も義理も無かった。

「でも、あのままだと才人さんが…」

不安げな顔で杖に乗ったままのネギが後ろの二人に助太刀を求め
る。

だが、シャナは背から生えた紅蓮の双翼を一振りして、

「あいつが逃げ切れたら、諦めるでしょ」

と涼しく言い放つ。決して助けるのが面倒だとかそういう意図ではない。ちゃんと体力が付いているなら逃げ切れるし、通したい意志があるなら、ちゃんと自分で戦うべきという彼女なりの哲学に基づくものだった。

案の定、ジャングルを只管に走り回った才人とルイズでは直ぐに差が出てきた。

奔る才人に追いつけず、ルイズは広場に大の字になって倒れこんでしまった。

「お、おい、大丈夫か・・・ルイズ・・・」

そう言っただけで心配した才人が近づくと、彼女はキランと目を怪しく光らせて、

「おげげげ！」

外すことなく付けられていた首輪の鎖を締め上げられてしまった。

「バーカ」

流石にこれは騙される方が悪い。こう言ったものは騙されるか、騙すかのギリギリの綱渡りである。それに才人は物の見事に負けてしまったのだ。

「やれやれ、あんな簡単な手に引っ掛かるなんて、どうかしてるぜ」

そういう風に大人染みた事を言うのは夏梨の肩に乗ったライオンのぬいぐるみ。

擬似的な魂をその身に宿したコンである。

「だいたい、あんな胸も無い、色気も無い女の何処が良いんだか・・・」

彼は大人っぽい肉感的な女性が好みだ。簡単な言い方をすれば胸が大きい方が、彼は好きなのである。だが、彼の呑気な台詞は痛くある二人を傷つけた。

「あわわ…」

ネギが蒼白な顔になる。

「ん、どうしたよネギ。大体、ネギも胸のある女の方が良いよな。そうだろ？」

「あ、あの、コン君…、後ろ・・・」

恐る恐るといった様子で後ろを指差す。

そこには怒りの炎を纏ったシャナと夏梨が居た。特にシャナは本来持つ炎と相まって、更に巨大な炎となっている。

「え、えーと…逃げる！」

ガシツと指が折れそうな勢いで、夏梨に頭をわしづかみにされる。

「お前が、行つて来い！」

ぶんと掴んだ力はそのままに、コンを思いっきり才人へと向けて全力投球した。

「のおおおお！！」

人形だから涙は流れない。それでもコンは泣きたくなった。自らの自業自得による不遇な扱いに。色々と思い当たる事はあるが、それでも泣きたくなった。

「いたっ！」

コントロールが難しく、間違つてルイズの後頭部に直撃する。
当たったのはみずばらしく、汚らしいぬいぐるみ。

(やべー、そっぴゃー護つて俺の事、喋ってないんだよな！)

コンが喋るぬいぐるみだという事は、一護も夏梨も一切喋っていない。

彼の事を喋るといふのは、死神の本拠地の最高機密に関わってくる問題になる。おいそれと話す訳には行かないのであった。

「何よ、この汚いぬいぐるみ…」

(汚いって何だこのやろっ…)

繰り返して言うが、彼は肉感的な女性が好みだ。つまりはルイズのような未成熟な女性は対象外と言う事だ。だから、思いっきり殴ってやりたかった。

「ホント、ああ、もう！」

ぶんつと嫌な風きりの音がして、コンが跳んでいく。色々なイライラを込めた一投は今度はポコッとタバサの頭に当たった。彼女もまた、コンを拾い上げた。

「汚いぬいぐるみ…」

こうして冒頭の部分に戻るといふわけである。

(またペタン娘かよ…)

だが、コンの何が少女の琴線に触れたのだろうか。タバサはじつと見つめたまま、目を離そうとしない。コンの円らな黒ボタンで作られた目に映るのは、冷たげな双眸だが、持ったままで一護や夏梨のように乱暴に扱ったりする事はない。

(ああ、でも、こんな感じに優しくしてくれるのは…)

初めての経験だった。

その小さな少女の優しさに、思わずコンはじんわりと来てしまう。

(ああ、女神はここにいた…)

コンは誰も見ていなければ、大声を上げて泣きたかった。だが、今は、今だけは、心の中で男泣きする事にする。

「シルフィード…」

「きゅい？」

タバサは自分の使い魔である風竜を呼んだ。長い首だけを主人へ向ける。

「あげる…」

(へ?)

「きゅいー!」

コンを与えられたシルフィードは嬉しそうだ。そのままカブツと飲み込んでしまった。

(一護才才才、助けてくれ！)

コンは心の底から助けを求めた。
きつと一護達は愛情表現が不器用なだけで、きつと自分が危険な時には助けてくれる。

「きゅー！」

たぶん。

体育座りをしながら、才人を眺めるルイズ。

結局、調教という名の芸の仕込みは失敗してしまった。そもそも人間に芸を仕込もうという発想自体が最初から頓挫している気がしないでもないが、ルイズは最後まで気が付かなかった。

「何か品評会の準備とかしないの？皆、なんかやってるわよ？」
「うるせえ……」

必死になってルイズは才人に芸を仕込もうとした。

だが、芸など一朝一夕で身に付くようなものではない。理不尽な言い草にいよいよ才人は怒りたくなった。だが、首輪を巻かれている身の上では何もできない。

「本当に貴方、役に立たないわね……」

ルイズは膝の上に肘を置いて、ため息を付く。
完全にフーケの時の自分がどんな状況だったのか、悪い事は棚に
上げている。

「ただいま、戻りましたー」

そう言っただけで学院の門から街へ行っていたアレン達が帰ってきた。

「お帰りなさい、皆さん…ん？」

迎えようと降りてきたネギは、人数が増えている事に気が付く。
出て行った時には3人だったのが、6人になっている。

「ええと、どうされたんですか？」

「後ろの三人を紹介して」

一緒になってシャナと夏梨も降りてくる。

「3人の紹介はとりあえず後だ。何かあったんだ？」

「どうも、姫様がやってく…」

ルイズの前でボロボロになっている才人を見ながら、一護が尋ね
る。ネギが三人が街へ出て行った後の事を説明しようとする。

「待ってたわよ！あんだ達！」

空気の読めない貴族が割り込んできた。

「……………」

その読めなさに辟易するのは、才人だけではない。
会話に強引に割り込まれた、街からの帰還組も同じだった。

「兎に角、このダメ犬がダメな以上、あんた達に芸を仕込むから！」

ダメダメと繰り返されて、才人はかなり傷ついた。

朝からの扱いを考えると致し方ないのかもしれないが、ここまで不遇な扱いを繰り返されると、流石に同情する気持ち湧いてきた。

「あー何の事か、分かねえけど…」

ポリポリと頭を搔く一護。

「やるべき事は分かるわ」

そういうとゆっくりと一護はルイズに近づく。

そのまま瞬間で首を極め、落とした。序でにジャンプも入れて、腰から地面へと落す。

「くへっ！」

嫌な呻きを上げてルイズが一護の肩を乱暴に叩く。だが、全く気にした風もなく、一護は締め続ける。段々と顔が青くなつていくが、締めている方は気にしていない。

「一護さん！タップしてます！タップしてますから！」

「今日はマルトーさんから何か頼み事はあるか？」

一護は締めたまま、ネギに尋ねる。

「あ、はい！確か、掃除の手が足りないって言ってました」

「んじゃ、俺、行って来るわ。後ろの三人はアレンとエドの方が詳しいから、聞いてくれ」

「は、はい……」

乱暴な一護はルイズを脇に抱えたまま、歩き出した。

「行くぞー、夏梨、シャナ」

「はい」「はい」

実は一護達は食事の礼として、マルトーやシエスタを始めとする学院の使用人たちを手伝っているのだ。衣食住の確保の代わりとして、せめてもの対価となるべき労働である。

「それで、どうしたんだよ？」

改めて、エドが尋ねる。

「エドオ！アレン！」

今にも泣き出しそうな顔で才人が二人に抱きついてきた。

顔は涙と鼻水、そして、走り回った汗でかなりくたびれている。

「うわ、汚な！」

「せめて洗ってからきてください！」

酷いとは思ったが、今の顔を見たら誰だってそう思うだろう。しゅんと落ち込んだが、仕方ないと思い真面目に立った。

「実はですね、この国のお姫様が学院に来るそうなんです」

「ふーん」

エドはこの時点で興味を失った。

この国が王政だとは聞いていたが、王族にあったところで自分の今の立ち居地が如何にかなるとは思わなかったのも事実だ。

「それと才人さんが、ボロボロになっている事とどんな関わりがあるんですか？」

ボロボロになった才人の顔を拭き、リナリーと一緒に手当てするアレンが聞く。

「何でもそれで使い魔の披露会っていうのがあるらしいんです」

「で、いいトコロを見せ様と、彼に芸を仕込もうとシテタって事力イ？」

ネギの説明をリンが引き取った。

「あ、えっとそういうことです。え、えっと…」

「あ、俺はリン・ヤオ。ヨロシク」

そう言っつてネギに握手を求めてきた。それに対してネギもまた、丁寧に握手を返す。

「僕はネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願ひしますね、リンさん」

「さっきの女の子は？」

ネギの手を握りながらも、リンは話を先へと進める。

「長い髪の方がシャナさんと、短い髪の方が夏梨さんです。えっと夏梨さんは一護さんの妹です」

「フム、ソウカ・・・」

そう言っただけで考え込むリン。

態度の変化をネギは怪訝な目で見ていたが、直ぐにやめた。

「あたしはウインリイ・ロックベル。エドの幼馴染で専属技師よ」

ニカツと金髪の少女は綺麗な歯を見せながら、自己紹介する。

手に持ったスパナや、腰の周りに丁寧に揃えられた工具たちは今にも踊りだしそうな位に丁寧に磨かれている。油も付いていて、実際に使い込まれている。

「私はリナリー・リー。よろしくね、ネギ君」

「リナリーは僕と同じところに居たんですよ・・・」

少し尻切れにアレンがリナリーの後を引き取る。

「でも、芸ですか・・・」

そう言っただけでアレンは何事か考え込む。

「どうしたんですか、アレンさん？」

「どうしたんだ、アレン？」

顎に手を当てて考え出したアレンの顔を覗き込む二人。背が高いので、覗き込むというよりは、下から見上げる形になってしまっている。

その様子をニコニコと見ているのは、リナリーである。

「芸とかアレン君、得意だもんねー」
「どづいことですか?」

ネギの疑問を制すように、アレンが直ぐに指示を始めた。

「えっと、エド君は刃引きした剣を10本ほど用意してください」
「…?あ、ああ」

いきなり何を言い出したのが、分からないが取り敢えず従っておく。

「ネギ君とウインリイさんは、リナリーに付いてください」
「…?」「…?」

まだ話が飲み込めていない二人を後目に、リナリーはまたくすと笑った。

「うむ、お姫様の前でだし、ちょっと派手にいっても良いよね?という訳で…」

アレンは少し、明日の内容を話した。

「そんな事、出来るのか!」
「凄いです、アレンさん!」

感嘆の声を上げる残った一同。その顔を満足気にアレンは見渡す。

「リンさん。お願いしますね」
「ああ、マカセロ」

どんと胸に手を当てて、リンが自信を持たせる。

「じゃ、直ぐに準備してください」

アレンの声に全員一斉に散らばった。
いよいよ、道化師アレンの踊る幕が上がる。

自国は既に夕刻。

遠くに見える太陽は、煌々と赤く輝き、学院を赤く染めている。

魔法学院の正門にトリステイン魔法学院の全生徒、全職員が集まっていた。

予定ではもうすぐ王女一行が到着することになっている。

「一年生はこちらへ！速く並んで！」

コルベールを筆頭とする教師たちは大声を張り上げ、生徒の列を細かく整える。

生徒たちも自分の服に乱れがないか、杖にゴミが付着していないかと入念にチェックをしていた。

「な、なあ大丈夫か、俺？」

「大丈夫だろ、それよりこの杖の汚れ、取れないんだけど」

お互いに確認しあいながら、最後まで何度も確認を繰り返す。

だが、そんな人たちとは違っていつも通り、ぼんやりとしている者たちもいた。

「はあ、興味ないわね」

「……」

他国の出身で、王女・アンリエッタにさほど興味を持たないキユルケやタバサなどがそうである。

それに、一護もさほど興味はあまりなく、ボケっと突っ立っていた。だが、夏梨は持ち前の野次馬根性を発揮して、一護の肩に乗っ

かつて今か今かとワクワクとして待っている。

「一兄、もっと上げて！」

人垣を超えて見る為に、土台となった兄へ更に無茶な注文をつける。

「これ以上は無理だつての！」

いやいのいやいの言い合う兄妹を、ルイズは少し不満そうな顔で見ている。

昼間、一護に首を極められて気絶した事を根に持っているのだが、間違いない言う事を利かせる事は不可能に近いので、こうやって睨みつけるしかすることがないのだ。

一緒に手伝いに出ていたシャナは、今度はアレンたちを手伝っている。

「……いたた」

「大丈夫か、痛いなら休んどけよ」

「いえ、大丈夫です」

才人は痛む体を摩りながら、一護の傍らに突っ立っていた。少しやせ我慢が入っていないでもないが、ネギとエドの治療の効果は抜群だ。時間が経つ度に、ガンガン痛みが引いていくのが分かる。

彼もまた、王女を一目見ようと列に加わったのだ。

「あ、あれ！」

一護の上に立ち、誰よりも目線が高くなった夏梨が誰よりも先に遠くから近づいてくる馬車を見つけた。彼女の言葉を合図に、生徒

や教師たちのみんながビシッと直立不動の姿勢をとった。

一拍の時間が空いて魔法学院の正門をくぐって、煌びやかに装飾が飾り付けられた馬車が生徒たちの前を通り過ぎていく。

一番前にある馬車にはより一層と目立つ、トリステイン王家の紋章が掛けられている。

そして、その馬車を引くのは真っ白な毛並みをしていて、額からは一本の角が生えているユニコーンである。

「アンリエッタ王女万歳！」

「王女様、万歳！」

過ぎていく馬車を眺めながら、簡単なシュプレヒコールが上がる。王女の乗った馬車の周囲を、輝くような鎧を着込み、漆黒のマントをはおった、勇壮な騎士団が取り囲む。馬車の上空の防備は、鷲の頭と獅子の体を持つ幻獣グリフォンに跨ったグリフォン隊が飛び回って務めている。

「万歳！」「万歳！」

整列した生徒たちは一斉に杖を掲げた。タバサやキュルケも仕方なく杖を掲げる。

正門をくぐった先に、立派な石像に挟まれた本塔の玄関がある。

そこに立ち、王女の一行を迎えるのは、学院長のオスマンであった。好々爺の笑顔を浮かべ、降りてくるのを待っている。

馬車が止まると、召使たちが駆け寄り、馬車の扉まで緋毛氈のじゆうたんを敷き詰める。

呼び出しの衛士が、緊張した声で、王女の登場を告げた。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなありいー！
！！」

「いよいよか！」

一護の肩に乗った夏梨まで緊張した面持ちで言う。

しかし、がちやりと扉が開いて現れたのは、灰色のローブに身を包んだ痩せぎすの老人だった。先に出てきたのは、同伴していた枢機卿のマザリーニであった。

「何だよ…、枢機卿かよ」

「お呼びじゃないんだよ」

彼は取り敢えず、宮中の微妙なバランスで成り立っている力関係を知らない者達からは嫌われている。露骨にとまではいれないが、このようなブーイングが聞かれるのも無理からぬ事だと諦めていた。それでも手を挙げ、歓声に応える

「姫様だ！」

「姫様ー！」

生徒の間から歓声があがった。

ゆっくりと白いドレスを着た、少女が馬車から降りてくる。

王女はにっこりと聖母のような微笑を浮かべて、優雅に手を振った。

「うおおお、姫殿下万歳！」

「トリステイン王国万歳！」

少年たちは大声を上げて歓喜の声を上げる。最早熱狂と言っているかもしれない。いい年こいた教師たちですら頬を赤らめた。学院の中でも生真面目で通っているコルベールですらも、その中に加わっている。そして、生徒の中には感激しすぎて気絶する者までもい

た。

「きれいだなあ。本当にきれいだなあ」

タバサがそう聞こえた声に、そちらを冷ややかな目を向けるとその生徒はギーシュだった。

そんなギーシュを後ろから、さらに冷ややかな瞳で見つめるモンモランシーの姿も見える。そして、そのさらに後ろから、病んだ瞳で見つめるケティと、怒りの目で睨んでいるバーバティの姿も見える。

「修羅場」

タバサはぽつりと呟いた。彼がどうなっても、自業自得である。我関せずと言った調子でタバサは本の世界へ戻った。

「あれが王女様か」

「そうね。確かにきれいでかわいい子だけれど、私には及ばないわよね」

「……………」

そんな二人を余所に、才人はルイズを見つめた。

ルイズは、真面目な顔をして王女を見つめている。

（黙ってれば綺麗なのに…）

と本人が聞いたら、また烈火のごとく怒りをぶちまけそうな事を、平然と才人は思う。思うだけならタダなので、最近はや人も6人を見習って口を鎖すタイミングを覚えつつあった。

そのルイズの黙っていれば可愛い横顔が、はっとした顔になった。

それから顔を赤らめる。

(ん……?)

才人はその表情の変化が気になって、首を伸ばして、ルイズの視線の先を確かめる。

その先には、見事な羽帽子をかぶった、凛々しい貴族の姿があった。魔法衛士隊の先頭に立っていて、見事なグリフォンに跨っている。

ルイズはぼんやりと熱っぽい視線で、その貴族を見つめている。

「……………」

才人は面白くなかった。

あの貴族は確かにいい男かもしれないが、そんなに見つめて頬を赤らめなくてもよさそうもんだ。

「あら、いい男ねエ〜」

「……………」

いつの間にか、見つめる対象が王女からその貴族に変わっているキユルケ。

彼女の言葉は、思いを向ける人の耳には届かなかった。

煌々と明かりの灯るホールの中、使い魔品評会は行われていた。

「それでは、次はミス・タバサの出番です」

コルベールが出場順の書いた紙を見ながら言う。
その舞台袖では、順番を次に控えたルイズが緊張していた。

「どうしたー、緊張してんのか？」

大きなカボチャの着ぐるみを着込んだ一護がくぐもった声で、茶化す。

「そ、そんなわ、わけないじゃない」

言葉は勇ましいが、声が完全に震えている。

舞台袖に並んだのはルイズの一応、使い魔達。だが、今の彼らの格好は常のものではない。一護とアレンはしっかりとしたスーツに、大きなカボチャを被っている。

「はい、Okよ！シャナちゃん！」

「ありがとう、リナリー」

そういう二人はまるで姉妹のように同じ、彼らの概念で言う所の魔女のような格好である。先の曲がったとんがり帽子に黒いマント。

「はあ、すげえな……」

昼間からあつと言う間に仕上げてしまった、その手際の良さに才人は思わず感心する。

頭の隅にはさっきの羽帽子の男の顔がちらついていた。

「ぼさつとしてないで、お前も手伝え！」

「んで、これに着替える！」

ぼさつと突つ立っていると、エドと夏梨の鋭い声が飛ぶ。顔にバサツと揃いのスーツを投げつけられた。二人をネギは窘めているが、パワフルな二人には、ネギの人の良さはいまいち効果がない。

そんな二人を後目に、ウインリイは最後の調整を図るかのように、大きなナットを止めていた。

「OK、いつでもいけるわよ！」

「こつちもダイジョウブ」

リンも着込む服は常の民族衣装ではなく、統一したスーツに着替えている。

その上で持った剣をくるくると、曲芸のように振り回している。

「本当に大丈夫なんでしょうね…？」

実はルイズは一切、彼らの芸について話されていない。

重たい不安を小さい胸に抱えながら、タバサのシルフィードが悠々と天井を飛び回り、観客の歓声を浴びるのを見ている。

最大限飛び回ることは出来なかったが、一周し終えた青い鱗の竜が、再び主人の元へと戻ってくる。そうすると一際大きな歓声が上がった。

その声を意に介した風もなく、タバサは淡々とステージを降りる。そして、

「最後はミス・ヴァリエールの番ですな」

と、コルベールの声を聞いて、完全に固まったままルイズは舞台へと上がる。

最初、1人で舞台上がったルイズに向けて、

「どうした？使い魔達には、逃げられたのか？」

とか、

「いや、愛想付かされたのか？」

と汚い野次が飛ぶ。ルイズはそんなのを気にせず、自信を持って、高らかに自己紹介をする。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブランド・ラ・ヴァリエールです。よろしく願います」

そう空に向かい、叫んだ。ここまでは指示通りである。

勿論、ルイズに釣られるようにホールに集まった皆の視線が、何もない天井へ一斉に向く。

「IT'S SHOW TIME！」

アレンの高らかな掛け声と共に、準備されていたスモークがステージからあふれ出す。エドが必死になって昇華させた二酸化炭素が再び、気体へと変じる。

「なんだありや？」

「おい！こっちに来るぞ！！」

生徒がざわめき、アンリエッタの周りの護衛が警戒態勢になった瞬間に、それはステージのルイズの隣にやって来た。

「……？もしかして……」

ルイズがそう呟いた時、白く輝く煙を纏いながら、アレン・ウォーカーと黒崎一護が厳かに光臨した。といつても頭はカボチャなので、今ひとつ貫禄がない。

そして同じ格好なので、見分けが付かない。全く同じ二人は煙が大体晴れたところで、声を出す。

「こんにちは、僕は使い魔。僕は面白い事が大好きさ！」

おどけた調子でカボチャが喋る。カボチャを被っているのはアレシだが、喋っているのは中に入って言うオコジヨである。一護のほうにはアルが仕込んである。

「だから今日は！」

「皆に面白い事を見せてあげるよ！」

それを聞いた生徒の歓声が大きくなる。

彼ら貴族も、魔法においては好奇心の塊なのだ。面白い事を集めるには余念がない。

「どうも、どうも」

二人はその歓声に応えるように手を振る。そして、ある程度落ち着いた所で、手で制した。

「では、始めましょうか！カモン！」

カラガラと大きな音がウインリイの手によって運ばれてくる。

コンとなれた手付きで的を叩くと、ポンポンと音を立てて、手で

抱えられるほどの大きさのボールが落ちてきた。それにカボチャ二人は飛び乗る。

「よっと!」「ほい!」

アレンの方は曲芸だが、一護はトリック全開のイカサマだ。しかし、ボールの上に乗る曲芸を見たのは、一同初めてだったので、同情的な拍手がパラパラと沸く。

「ちよ、ちよっと、本当にダイジョウブなの?」

ルイズが心配そうな声で聞いてくるが、彼らの本懐はここからである。

「行きますよー!」

アレンは掛け声と共に腰に差した剣を10本、纏めて引き抜いた。そのまま一護との間で、ジャグリングを始めた。剣の小さい柄を確実に掴んで、投げ合う。その一歩間違えれば大怪我してしまうようなスリリングに観客は沸いた。

「はい!」

それを合図に舞台袖に控えていた残りの面々が一齐にルイズに飛び掛る。

そして、そのままに拘束してしまった。釘や縄ではなく、エドの錬金術による形状を変えた拘束なので、腕を失わないと抜け出す事はできないだろう。

「ちよ、ちよっと何よこれ!」

的に磔にされたルイズが喚く。だが、括りつけた面々は無視して楽器を準備した。

「さあ、今からこの少女の括りつけられた的に向かって、こちらの男！」

エドが大声を張り上げ、これからの事を説明し始めた。聞いているルイズは冷や汗ダラダラ、悪い予感しかしなかった。ドラムを与えられた才人も、ハラハラと見ている。

「どうも、ドウモ」

沸き立つ歓声にリンが笑顔で応えている。

「こちらの男が、いま飛び交う剣を受け取り、投げつけます！さあ、無事に帰ればご喝采！」

慣れた手つきでドラムロールが始まる。聞いているルイズの顔色は、もう蒼白である。

オマケにリンは目隠しまでしてきた。これで狙いを付けることも儘ならない。

「大丈夫よね、大丈夫なのよね……」

「ほい！」

不安げに言うルイズの右脇にサクツと剣が刺さる。

続け様に股下に二本、逆の脇に3本、もう一度、右脇に2本。

「……………」

最早格的になつてゐるルイズは齒の根が噛み合つてゐない。
そして、

「最後は二本いっぺんにイクヨツ！」

力、カンと頭の隣数センチの所に刺さつた。この時点で完全にルイズは氣を失つてしまつた。
それでも、観客の歓聲は止まない。

「すげーぞ、あいつら！」

「ブラボー！」

「素晴らしいぞ！」

万雷の拍手の中、エドが言う。

「さあ、愉快で面白い曲芸に体を張つて頑張つてくれたルイズにも拍手！」

そつ言い終わると、その日一番の喝采が送られた。

その日の夜のルイズの部屋。

「ホント、あんた達は！」

頭にちよこんと品評会の優勝者の王冠を被り、部屋に集つた面々

に怒り心頭といったルイズ。

その後、優勝者はぶつちぎりでルイズに決まり、そのまま表彰式となったのだが、結局気絶したままだった。そして今になってようやく回復したルイズは、

「あんな危ないこと主人にさせるなんてとんだ使い魔ね！」

ぷりぷりと怒っているのだが、才人とネギ以外は涼しい顔をしている。

彼らの目の前には、遅くなった分簡素な食事が並んでいる。若干、才人の皿の上には、黒焦げの何かが混じっているが、器用に彼は避けて食べていた。

「いいじゃねえか、勝ったんだから」

「ソウダナ、器が小さいゾ」

唇を尖らせるのは一番盛り上げたエドとリン。遅くなった夕食を取りながら、断固と抗議しているのだ。その相伴に預かるように、才人も便乗して食べている。

シャナとリナリーとウインリイは仲良さげに話している。尤も、仏頂面のシャナに笑顔で二人が語りかけているという方が正しいのかもしれない状況だが。

「そうだけ、ルイズ。勝ったんだ、それでいいだ…」

「あなたは黙ってなさい！」

才人の言葉は尻すぼみに消えていった。

「だいたい、あんだ達は私に対する敬意がなさすぎよー！」

そのような元から持ち合わせていないようなモノを持ってといわれ
ても困る。

特にエドとリンは顕著にそれが出ている。神様にすら挑むおろかもの挑戦者
だから、致し方ないのかもしれないが。

「おい、コンの奴、どこに行つたか知らねえか！」

「昼間から居ないみたいなの！」

ばたんと勢い良く、どこかへ出掛けていた一護と夏梨が飛び込ん
できた。

彼らは昼間、思いつきりぶん投げたコンの行方を捜すために食事
も取らずに、学院の中を走り回っているのだ。

「コンなら見てねえぜ……」

「そつか……、悪いな。もう一度探してみるわ」

カモが哀しげな顔で答えるが、聞き終わらない内に、一護と夏梨
は再び闇の支配する廊下へと駆け出して行つた。

「はあ……、もういいわ……」

いきなり飛び込んできた一護達に参つたのか、それともこれ以上
問答を重ねるのもムダだと悟つたのかルイズがガタツとベットに座
り込んだ。かと思つたら、また立ち上がる。

そして、また座る。

「……？」

その様子を部屋に残つた全員が怪訝な目で見つめる。
立ち上がったと思つたら、再びベットに腰掛け、枕を抱いてぼん

やりとしている。

披露会の時はそうでもなかったが、夕方にあの羽帽子の貴族を見てから、どうにも様子がオカシイ。普段から落ち着きがないのだが、今は何も喋らずに部屋の中を行ったり来たりしている。

「ヘンだぞー」

それから才人は、ルイズの髪を引つ張った。

くいくいと引いたが、それでもルイズはぼんやりとしていて、反応がない。

頬をつねってみた。機械のように反応がない。

「どうしたんでしょうか…？」

不安げな顔でネギがルイズの額や顔をぺたぺたと触る。

序でに才人はどさくさに紛れて、胸やお腹を触ってみる。

「ぎゃん！」

胸に触っているのが分かったウインリイが無言で、スパナを投げつける。

眉間にクリーンヒットした才人は、嫌な呻き声を上げて蹲った。

「痴れ物が、いい加減学んだらどうだ？」

更に追い討ちを掛けるようなアラストールの重い声。

才人は泣きながら、自らの行いを恥じた。

「全く、一護やアレンが居なければどうなっていた事か…」

「どっとなっていたの？」

純真な声でシヤナが聴いてくる。

流石に、エドもリンもアレンもリナリーもさつと顔を背けた。うつかりこの魔神が口を滑らせて仕舞った事に乗るわけにはいかない。重苦しい空気が流れ始めたその時、コンコンと静かに、そして丁寧にドアがノックされた。

「あ、一護さんじゃないですか？」

「早いナ」

「ま、いいんじゃないね。見つかったんだろ」

ネギがルイズに促した。

だが再び、ノックは規則正しく叩かれた。初めに長く二回、それから短く三回。

才人が床に座ったまま、ドアの方に向けて話しかける。

「一護さん。ノックなんて丁寧なマネ、いらないでしょ」

薄めの木の戸を超えて、才人の声は聞こえているはずだが、入ってこない。

ルイズが急いでボタンを付け直して、立ちあがり、ドアを開けた。そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾をすっぽりとかぶった、人だった。

「あれ？一護さん…じゃない」

「誰ですか？」

その入ってきた人は、才人達を見てオドオドしていたが、ルイズがいるのを確認すると、そそくさと辺りを見回して入ってきて、後

る手に扉を閉めた。

「あなたは？」

ルイズは夜半の来訪者に向けて、声をあげた。

頭巾をすっぽりとかぶった謎の人物は、しつと口元に指を立てて、杖を軽く振った。

同時に短くルーンを呟く。光の粉が、ふわりと部屋の中を舞う。

ディテイクトマジック
「探知魔法？」

ルイズは尋ねた。頭巾の人物が小さく頷く。

「どこに耳が、目が光っているかわかりませんかからね」

聞こえて着た声は涼やかな女性のもの。歳はリナリーやウインリイとそんなに変わらないだろう。

少女はそう言っただけで頭巾を取った。

「……………あ」

「……………え？」

その顔を見ていた一同は呆けた声を出す。

才人も息をのんだ。ルイズも稀に見るほど可愛いが、この人はそれに加え、神々しいばかりの高貴さを放っている。決して付け焼刃ではない、生まれ持った素質が煌かせる。

「姫殿下！」

ルイズが慌てて膝をつく。

訪れた少女は涼しげな、心地よい声で言った。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

頭巾を目深に被り、現れたのはアンリエッタ女王その人だった。

30・meet at midnight

フーケはベッドに寝ころんで天井をぼんやりと見つめていた。地下牢なのだから、空が見えるわけでもない。今頃、満天の星空が昇っているだろうが、それも見えない。

「はあ…」

先程、裁判の日程が決まったと、昼間に気絶させられた衛士が告げに着た。

来週の半ばにも行われるとのことだが、あれだけ国中の貴族のプライドを傷つけまくったのだから、軽い罪でおさまるとは到底思えないし、本人も微塵も思っていないかった。

判決は縛り首。よくっても島流し。

どっちにしたってこのハルケギニアの大地に二度と立つことはないだろう。

「脱獄も無理ね」

監獄の中には粗末なベッドと、木の机以外目につくものはない。穴を掘って脱獄するのも防ぐ為に、食器までご丁寧にすべて木製である。

国中を荒らしまわった盗賊に対する過剰ともいえる対策だった。

「スプーン一個あったところで、脱獄は無理だしね」

フーケは脱獄をあきらめた。

それからフーケは、自分を捕まえた銀髪の男たちのことを思い出していた。

「たくつ！何者なんだ！あいつらは！」

勢い良く打ち付けた拳が痛む。

ただの人間とは思えない動きで、ゴーレムを一刀両断したオレンジ頭の男。

そして自分を捕らえた銀髪と金髪の少年二人。

結局、フーケは目的の半分も達する事の出来ないまま、獄中の身だ。

(いったい、あいつらは何者なんだ?)

決闘騒ぎも観戦したが、結局の所分からずじまい。

そして獄中であつた彼らの仲間と思いき3人。黒髪で糸目の男は東方からの来訪者らしいが、どこまで本当なのは、もう確かめようがない。

「唯一の手がかりはこれだけ……」

アレンから強引に渡された黒いイヤークラスを眺める。魔力を感じるわけでもないし、いたって普通の有り触れた装飾品だ。

「まあ、今となつてはもう関係ないか……」

盗賊家業を始めた時から、野垂れ死ぬか、獄死するかの末路は覚悟していた。

だが、心残りがない訳ではない。

自分がこのような盗賊に身を賣した遠因とも言える存在。そして、守りたかつた存在。それらを残していくのは、気になった。

「考えても仕方ないね…、寝るか」

言葉を零し、目を閉じた。

だが、すぐにぱちりと目が開く。

フーケが投獄された監獄が並んだ階の上から、誰かが下りてくる足音がしたのだ。

(また、新しい隣人かね?)

最初はそう思った。若しくは牢番の交代とか、裁判が早まったかと思った。

だが、かつ、かつという音の中に、ガシャガシャと喚き立てるような拍車の音が混じっている。

階上に控える牢番なら、足音に拍車の音が混じるワケがない。

(一体、何者だい…?)

こんな時間にやってくる物好きの顔を一目見ようと、フーケは眠りかけた体をベッドから起こした。

彼女の視線の先、鉄格子の向こうに長身の黒マントをまとった人が現れた。

白い仮面に覆われていて顔が確認できないが、マントの中から長い魔法の杖が突き出ている。どうやらメイジのようだ。

フーケは鼻を鳴らした。

「おや！こんな夜更けにお客さんなんて、珍しいわね」

茶化すようなフーケの口ぶりを無視して、その白い仮面の男は、鉄格子の向こうに立ったまま、フーケを値踏みするかのような視線を向けて黙りこくっている。

(やれやれ、あたしの悪運もここまでかね?)

散々国中の貴族を騒がして、コケにした彼女である。

裁判なんてまだるっこしいことが面倒になって、自分を始末しにきたに違いない。

盗んだ貴族の宝の中には、王室に無許可で手に入れた禁断の品や、他人に知られたくないものも交じっている。それが明るみに出たらまずい貴族が口封じにきたというわけである。

「おおいにく。見てのとおり、ここには客人をもてなすような気の利いたものはございませんの」

手を振りながら、挑発するでも何でもない調子でフーケは鼻を鳴らす。

「でもまあ…」

男の纏う震えるような空気を肌で感じ取りながら、

「お茶を飲みながら話をする顔ではありませんわね」

フーケは身構える。

囚われたとはいえ、はい、そうですかと、見す見すやられるつもりはない。

彼女は魔法だけではなく、体術にもいささか心得がある。裏社会を生きていく為には、多少なりとも体売った事もないことはない。だが、鉄格子越しに魔法を使われたら手の打ちようがない。フーケは、この男をなんとか油断させて、中に引き込もうと考えた。

今まで黙っていた黒マントの男が、突然、口を開いた。年若く、

力強い声だった。

「『土くれ』だな？」

「誰がつけたか知らないけど、確かにそう呼ばれているわ」

彼女は他人が付けた称号などに興味はない。

フリーケが警戒しているのを感じたのか、男は両手を広げて、敵意のないことを示した。序でに持っていた杖を地面に落とす。カランカランと石と木の触れ合う音がかび臭い地下牢に響き渡った。

「話をしにきた」

「話？」

怪訝な声で、フリーケは言った。

「こんな私に弁護でもしてくるっていいのかい？物好きね」

「なんなら弁護してやってもかまわんよ」

変わらない力強い声で男が言う。

「マチルダ・オブ・サウスゴータ？」

「ッ！！？」

フリーケの顔が一気に蒼白になった。

その名を知る者は、ただ一人を除いて、もうこの世にはいるはずはなかった。

「あんた、何者だい？」

平静を装ったが無理だった。震える声で、フリーケは尋ねる。

それに対し、男はその問いには答えずに、笑って言った。

「再びアルビオンに仕える気はないかね？マチルダ」

「ふざけないでちょうだい！」

フーケは、いつもの冷静で冷たい態度を捨てて、怒鳴った。

「父を殺し、家名を奪った王家に仕える気なんかさらさらないわ！」

冷静な姿など今の彼女には微塵も感じられない。

彼女もまた名家の生まれだった。だが、それもまた過去の話。

彼女の言うとおり、アルビオンの王家により家名は貶められ、フーケもまた一家離散、そして本人は盗賊へとなったのだ。

「勘違いするな」

その取り乱したフーケを窺めるように、男は短く言葉を噛み切る。

「何もアルビオンの王家に仕えろと言っているわけではない。彼ら

王家は倒れる。近いうちにね」

「はあ？どついうこと？」

男の言う事を全く理解できず、更に怪訝な顔になる。

「革命さ」

厭に自信に満ち溢れた声で、男は更に言葉を続ける。

「無能な王家はつぶれる。そして、我々有能な貴族が政を行うのだ」

「でも、あんたはトリステインの貴族じゃないの」

気になった事をベットに座ったまま、フーケが言う。

彼女には政治の理想も、この国の行く末も興味がないというのが本音だ。今更、守るべき領民も家名もない犯罪者である彼女にとっては、政など何処吹く風なのだ。

「アルビオンの革命とやらに、なんの関係があるっていうの？」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟だ。そこに国境はない」

理想論にも程があるが、絵空事とも思えない。

そう思わせるだけの威圧感が、男の声にはあった。

「ハルケギニアは我々の手で一つになり、始祖ブリミルの光臨せし

『聖地』を取り戻すのだ」

「バカ言っちゃいけないわ」

フーケは薄ら笑いを浮かべた。

流石にここまで来ると理想論どころか、大声で叫んでいるだけの寝言である。

「で、その国境を越えた貴族の連盟とやらが、この盗賊風情になんの用？」

「我々は優秀なメイジが一人でも多く欲しい。協力してくれないかね？」『土くれ』よ

「夢の絵は寝てから描くものよ」

フーケは手を振った。

トリステイン王国、帝政ゲルマニア、彼女の故郷のアルビオン王国、そしてガリア王国のハルゲギニアの四力国は未だに国境線や資

源を巡る小競り合いが耐えた事がない。

(オマケに『聖地』を取り返すだって？あの、強力なエルフどもから？)

ハルケギニアから東に離れた地に住むエルフたちによつて、『聖地』が奪われてから、既に幾百年。

それから、この地に勃興した数多の国々が聖地を奪回しようと兵を送つたが、そのたびに無残な敗北を喫してきた。

長命で独特の尖つた耳と特有の文化を持つエルフたちは、そのすべてが強力な魔法使いであり、優秀な戦士なのだ。同じ数で戦えば、人間たちに勝利の機会がないことを、この幾百年でハルケギニアの王たちは学んできたはずである。

「わたしは貴族は嫌いだし、ハルケギニアの統一なんかには興味がないわ」

これは彼女の心からの本音だった。

ひらひらと手を振って、呆れている。

「おまけに『聖地』を取り返すだって？馬鹿馬鹿しい」

この国のみならず、ハルケギニアではエルフ達の住まう土地を聖地と呼び習わし、信仰の対象とまでなっている。だが、政同様、彼女に信心はない。

「エルフどもがあそこにいたいって言うんなら、好きにさせればいいじゃない」

「『土くれ』よ。お前は選択することができる」

手を振るフーケに対して、仮面の男は真面目な顔で言葉を止めさせた。

「言つてごらん」

「我々の同志となるか…」

男が腰に下げた長柄の杖に手をかけた。落とした杖とは別のものである。複数備えていない訳がないと思つていたが、フーケの予想通りであつた。

それを見てフーケがあとを引き取つた。

「ここで死ぬか、でしょ？」

「そのとおりだ。我々のことを知つたからには、生かしておけないからな」

想像通りに返してくる男がフーケは少しだけ可笑しくなつた。

「ほんとに、あんたら貴族つてやつは、困つた連中だわ」

ふつつと一息つく。

「他人の都合なんかまるで考えていないんだからね」

フーケは笑つた。

「つまり、選択じゃない。強制でしょ？」

男も彼女に釣られるように、仮面の奥底で笑う。

隠れて見えないが、フーケには笑つているのが感じ取れた。

「そうだ」

「だったらはずきり、味方になれって言いなさいな。命令もできない男は嫌いだわ」

「我々と一緒に来い」

フーケは腕を組んで、薄く笑うと、男に尋ねた。

「あんたら貴族の連盟とやらは、なんていうのかしら」
「味方になるのか？ならないのか？どっちなんだ」

男の言葉にフーケは返事を返さなかった。

「これから旗を振る組織の名前くらい、知らないでどうするのよ。先に聞いておきたいのよ」

男は鍵を鉄格子についた錠前に差し込んで言った。
短い、強い、声で。

「『アリストリア・ペリグリース』」

30・meet at midnight (後書き)

各方面で指摘されていますが、「レコン・キスタ」ではなく正確には「レ・コンキスタ」と区切るのが正しいと思われます。

元々はイベリア半島を支配していたイスラーム圏に対して十字軍と同時期に行われたポルトガルやカステイリヤの軍事行動ですから、スペイン語が使われています。

原作中ではスペインやポルトガルに当たる国が出てきていないので、不味いと思い「アリストリア・ペリグリース」と名付けました。ラテン語で「貴族の十字軍」と身も蓋もない名付け方ですが、ご勘弁を。

31・Just to help you from

ルイズの部屋に現れたアンリエッタは、感極まった表情を浮かべて、膝をついたルイズを抱きしめた。

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へ、お越しになられるなんて……」

ルイズはかしくまった声で言った。常日頃から暴力を受け続けている才人、それを見ている一同もガラリと180度入れ替わった、ルイズの変わりように目を大きくして驚く。

「ああ！ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！あなたとわたくしはおともだち！おともだちじゃないの！」

「もったいない言葉でございます。姫殿下」

ルイズは硬く緊張した声で言った。

「やめて！ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をしてよって、欲の皮の突っ張った宮廷貴族たちもいないのですよ！ああ、もう、わたくしには心を許せるおともだちはいないのかしら」

オロオロと泣き出しそうな顔を浮かべる姫。その顔は才人の好みを直撃した。

まだくらつと来た彼をシヤナは、じとつと睨んでいた。また彼女の中で、才人の株価が落ちる。

「昔馴染みの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、わたくし死んでしまっわ！」
「姫殿下……」

ルイズはゆっくりと顔を持ち上げた。

「幼い頃、いつしよになって宮廷の中庭で蝶を追いかけたじゃないの！泥だらけになって！」

そのアンリエッタの思い出話に、笑顔でルイズは応える。

「ええ、お召し物を汚してしまつて、侍従のラ・ポルドさまに叱られました」

「そつよ！ふわふわのクリーム菓子を取り合つて、つかみあいになつたこともあるわ！」

嫌な思いでも過ぎてしまえば、笑いあつて語り合える。

「ああ、ケンカになると、いつもわたくしが負かされたわね。あなたに髪の毛をつかまされて、よく泣いたものよ」

そんな調子でアンリエッタ王女とルイズは幼い頃の思い出話に花を咲かせた。二人揃つてはあははは、と顔を見合わせて笑つた。

才人達は笑いながらも呆れて、そんな様子を見つめていた。おしとやかに見えた王女なのに、とんだお転婆娘である。

「その調子よ。ルイズ。ああいやだ、懐かしくてわたくし、涙が出てしまっわ」

「どんな知り合いなんですか？」

アレンが尋ねた。するとルイズは、懐かしむように目をつむって答えた。

「姫さまがご幼少のみぎり、恐れ多くもお遊び相手を務めさせていただいたのよ」

「ふーん。幼馴染って事だな」

それからルイズはアンリエッタに向き直った。

「でも感激です。姫さまが、そんな昔のことを覚えてくださってるなんて」

今にも瞼の裏に湛えた涙を流しだしそうな勢いだ。

この姫様へのルイズの盲目的な心酔を正直、見ているリンはうっとおしく感じていた。

「わたしのことなど、とっくにお忘れになったかと思いました」

いきなり何故か、アンリエッタは深いため息をつくと、ベッドに腰掛けた。

今までとは打って変わった暗い表情、ルイズの猫かぶりとは違って、真剣な悩みのようなものだ。

「忘れるわけじゃないじゃないの。あの頃は、毎日が楽しかったわ。なんにも悩みがなかったもの」

深い、憂いを含んだ声であった。

「姫さま？」

ルイズは心配になってアンリエッタの顔を覗き込む。

「あなたが羨ましいわ。自由って素敵ね。ルイズ・フランソワーズ」
ニコリと笑う顔にも覇気がない。
先程まで笑っていた顔が嘘のように消えてしまっていた。

「なにをおっしゃいます！あなたはお姫様じゃない！」
「王国に生まれた姫なんて、籠に飼われた鳥も同然」

深いため息を一つ。

「飼い主の機嫌一つで、あっちに行ったり、こっちに行ったり……」

そこで区切る。そしてため息をつくときアンリエッタは呟いた。

「結婚するのよ。わたくし」

「……おめでとございます」

アンリエッタの声の調子に、なんだか悲しいものを感じたルイズは、沈んだ声で言った。素直に喜んでいない事はルイズの目にも明らかだった。

アンリエッタは、今になってようやく気が付いたのか、窓際にいた才人たちの方を向いて尋ねた。

「あなたたちは？」

部屋の中にいた髪の色も目の色も、服のデザインも皆違う一同を見渡しながら訊く。

ルイズは、いつも通りの表情に戻った。

「あれはただの使い魔たちですから、気にしないでいいです」
「使い魔？」

アンリエッタはきよとした様子で、一番近くに居た才人たちを見つめた。

それから部屋の中をその青い瞳で順繰りに見渡す。

「人にしか見えませんが……………」

「一応、人です。姫さま」

「なんですか。一応って」

才人は普通に傷ついた。

だが、繰り返して言うが、ここに普通の人間は才人しかいない。

「あと、もう二人程いるんですけど、今は何か探しモノをしています」

「そ、そうなのですか……………」

アンリエッタは、内心驚く。

使い魔が人間であること自体が前代未聞なのに、その内二人の使い魔が主人を放置して探し物に言っているらしい。

「オイ、俺はお前の使い魔になつた覚えはナイゾ！」

「というか、使い魔って何？」

「アレン君、何も聞いてないんだけど……………」

「俺はさっさとこんな所、オサラバしたいから契約切つて良い？」

イラ付いた表情でエドとリンが抗議の声を上げるが、取り敢えずルイズは無視する。

その間、才人は、どんよりとした空気で床にしゃがみこんで、の

の字を書いていた。

(どうせ俺なんて……、使い魔だし。地球人だし。貴族じゃないし)

朝の強気な態度はどこへやら。

あつと言う間に最下層まで彼のテンションは落ち込んでいた。色々切ない想いが、才人の中に連鎖的に渦を巻いて流れる。壁に手をつけて、落ちこんだ。

「はあ……」

いろいろと忙しい男である。

その変わりようをシャナの胸元から見ていたアラストールは、心底嘆いた。昨日の晩は、蛮勇にも女子の寝所へ飛び込んだというのに、この落ち込みようは如何なものか。

「そうよね。ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね」

またコロコロと可愛らしい笑顔をアンリエッタは浮かべた。それに対して、ルイズは強い声で否定する。

「好きであれを使い魔にしたわけじゃありません」

「ぐ、何気に酷いことを言うな」

何か続けたかったが、既に姫の表情に見入ってしまったっているルイズは聞いてすらない。同情的にエドの右手が才人の肩に置かれる。アンリエッタが外の月を眺めながらため息をつく。そんな深く憂いを湛えた様子が気になったルイズは、心配そうに尋ねた。

「姫さま？如何なされたのですか？」

「いえ、なんでもないわ。ごめんなさいね……」

不安を与えまいと、気丈に振舞っているのは誰の目にも明らかだった。

だが、同時に同情を引きたいというのが、露呈している、余りに杜撰な隠し方だった。

「いやだわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話すことではないのに……」

「おっしゃってください！」

姫の不安を吹き飛ばすかのような大声で、ルイズが叫ぶ。

「明るかった姫さまが、そんなお顔を……。なにかとんでもないお悩みがおりなのでしょう？」

「いえ、話せません。悩みがあると言ったことは忘れてちょうだい。ルイズ」

才人が落ち込んでいる中、ルイズは必死になってアンリエッタに問いかける。

アレンは「早く話が進まないかな」という目で二人の遣り取りを見るでもなく見ていた。

「いけません！昔はなんでも話し合っただではございませんか！」

尚も口を鎖そうとするアンリエッタにルイズは食い下がる。

「わたしをおともだちと呼んで下さったのは姫さまです！そのわたしに、悩みを話せないのですか？」

「わたくしをおともだちと呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とても嬉しいわ」

アンリエッタは決心したように頷き、語り出した。

「今から話すことは、誰にも話してはいけません」

そう前置きしてから、チラッと才人達の方を見た。

「席、外そうか？」

アンリエッタは首を振る。

「いえ、メイジにとって使い魔は一心同体。席を外す理由がありません」

「チィ」

思いつきり厄介事の匂いを嗅ぎ付けたエドが、部屋中に響き渡るような舌打ちをした。

これで、使い魔一同、巻き込まれることは確定のようである。この場にはいない二人が心底、羨ましくなった。

そして、アンリエッタは悲しさを隠しきれていない表情で語る。

「実は貴方にはアルビオンに行つて欲しいのです」

「アルビオンですか…？」

シヤナはすぐさま、それに当たる言語を頭の中で浚う。

だが該当する言葉が見当たらない。どうやら此方の固有名詞のようだ。一般的に訳せるモノは習いはしたが、流石に各言語の固有語となると、いかな天才といえど流石に難しい。

「そうです。そのアルビオンの王子であるウェールズ皇太子にお会いして欲しいのです」

「えっと親善大使って事ですか？」

ネギが質問する。

その幼い少年の問いに、

「え、ええ。そういうことです」

親善大使という事を説明するだけなのに、何故か詰まりながら答えるアンリエッタ。

その言葉尻に、何か彼らは引つ掛かるものを感じた。親善大使と彼女の結婚。それがどう繋がるというのだろうか。

「困難な道かもしれませんが。それでも…」

「何をおっしゃいます!」

俯きながら言うアンリエッタを強い口調で叱咤する。

「たとえ地獄の釜の中だろうが、竜のアギトの中だろうが、姫さまの御為ならば、何処なりとも向かいますわ! 姫さまとトリステインの危機を、このラ・ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ、見過ごすわけにはまいりません!」

ルイズは膝をついて恭しく頭を下げた。

「『土くれ』のフーケを捕まえた、このわたくしめに、その一件、是非ともお任せくださいますよう」

その言葉を聞いて、床にペタンと座って黙って見ていた才人がルイズに言った。

「いや、アレン達じゃ？」

「お前は何もしていない」

すぐさま見当違いの事をいうルイズに、シャナと才人の鋭い指摘が跳ぶ。才人もフリーケの事件でした事といえば、ルイズを励ました事くらいだ。

実際にゴーレムを斬ったのは一護で、捕まえたのはエドとアレンだ。

「フリーケのゴーレムを斬ったのは一護で……」

「フリーケ本人を捕まえたのは、エドとアレン」

ふふんと、胸を張るでもなく、名前を呼ばれた二人は、小さく鼻を鳴らした。

ルイズは才人の方を見て、真顔で言った。

「あいつらはわたしの使い魔よね」

「わん」

気に入らないが、一応犬になって答える。

本人が聞いていたら、またヘッドロックを掛けて、一晩中極められていそうだが。

「使い魔の手柄は、主人の手柄よ」

自信たっぷりなルイズは言いきった。

そんなルイズに才人は、真面目なトーンで質問した。

「使い魔のミスは？」

「それはあんたのミスじゃない」

なんか激しく騙されてる。

才人はそう思ったが、反論するだけ無駄なルイズの剣幕に押され何も言わなかった。

シヤナとアレンは最初から反論しても無駄だと悟ったのか、黙りこくった。

「このわたくしの力になってくれるというの？ルイズ・フランソワーズ！懐かしいおともたち！」

「もちろんですわ！姫さま！」

ルイズがアンリエッタの手を握って、熱した口調でそう言うと、アンリエッタはぼろぼろと泣き始めた。話が終わったのなら、何時までもここにいて欲しくない。

アレンたちの寝所は箱舟の中だ。まさか国権の最高権力者の前で、それを使うわけには行かない。

出来るだけ、この世界に影響を与えること無いまま、元の世界へと彼らは帰りたいのだ。

「姫さま！このルイズ、いつまでも姫さまのおともたちであり、よき理解者でございます！」

「本当にありがとうございます、ルイズ！」

「永久に誓った忠誠を、忘れることなどありませんようか！」

「ああ！忠誠！これが誠の友情と忠誠です！」

「そうですね、これがわたしの姫様に捧げる忠誠ですわ！」

「感激しました。わたくし、あなたの友情と忠誠を一生忘れません！ルイズ・フランソワーズ！」

「忠誠」と「友情」を連呼しあう二人。酒に酔ったように、すっかり上機嫌であった。

アレンは食事が出来ない事にイライラしながらも、呆れた表情も隠さずに二人を見つめていた。リンとエドは興味を無くしたのか、窓の外を眺めている。

まるで、出来の悪い、安っぽい映画を見ている気分させられる。自分の言葉に酔っているような、そんな二人のやりとりであった。

「姫様あ！」

ドアが勢いよくバタンと開いた。

怒声にも似た大声を上げながら入ってきた人物にみんなが振り向く。

大声を上げて入ってきたのはギーシュ。その彼を才人は思いつきり殴りつけた。

「ぐぼ！」

ギーシュは床にガンツ！！と鼻を打ちつけてのたうち回った。

「ぶっ！！？鼻血がアアア！」

ダラダラと鼻から幾筋か血の川を流しながら、才人に噛み付く。

「き、君！！酷い扱いではないか！！！」

「知るか、気障野郎！！！」

いきなり入ってきた闖入者に強く叫ぶ才人。

眠たい中、テンションの高い男の相手をするのは面倒なので、全

部才人に任せる事にした。

「お前は忘れても、俺はボコボコにされた事は忘れねえぞ！」

「そ、そんな事を言われても……」

流石に仲直りしただけでは、恨みが消えるわけでもない。才人の怒りには、もう一つ別のものが混じっていた。これはその怒りの鉄拳である。

するとギーシュは突然、アンリエッタの前で土下座をした。

「姫殿下！その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよう」

「あ、あんた、今の全部聞いてたの！？」

「もちろんだよ！姫殿下が君の部屋に入るのが見えたんじゃね！」

ルイズの質問に対して、大変な事をしれっと言つてのける。

勿論、これは犯罪だ。才人がまた思いつきり、ギーシュの顔をぶん殴る。

「何してんだ！」

「へぶっ！！？」

才人の鋭い拳がギーシュの顔にめり込む。しっかり鍛錬をしてるだけあって、段々と基礎体力や格闘戦術もちゃんとした力が付いてきた。

その衝撃にギーシュは、顔を床に打ちつける。

「……」

そんな二人の遣り取りを、アンリエッタは呆然と見つめていた。

そこで、ギーシュの名前を聞いてたアンリエッタは、機と思い出したようにギーシュに尋ねる。

「グラモン？あの、グラモン元帥の？」

アンリエッタに尋ねられたギーシュは先ほどの暗い雰囲気はどこへやら、急にバツクが薔薇が咲き誇るようなパアツと華やかな輝きを取り戻した。

「息子でございます。 姫殿下」

ギーシュはキザツたらしく立ち上がり恭しく一礼した。

「あなたも、わたくしの力になってくれるというの？」

「任務の一員にくわえてくださるなら、これはもう、幸せの極みでございます」

熱っぽくギーシュは言う。その言葉にアンリエッタは微笑む。

「ありがとう。お父さまも立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるよね」

感心したような顔になって、アンリエッタはギーシュに向き直る。

「ではお願いしますわ。この姫をお助けください、ギーシュさん」

ニコリと天使のような微笑で、ギーシュを見つめる。
そうすると、

「ひ、姫殿下が！殿下が僕に微笑んでくださった！」

ギーシュは感動のあまり、後ろにのけぞって失神した。
やはり、この姫の貴族に対する影響力というのは凄まじいものがあるようだ。ギーシュの態度は、どう考えても例外中の例外である。

「ねえ、僕らは？」

ようやく纏まりかけたところへ、アレンが最初から疑問に思っていた事を尋ねた。

それに事も無げに、ルイズは言う。

「うるさいわね、あんた達は黙って付いてくればいいの」

「えー」

「メンド臭いな、エド」

露骨に嫌そうな顔をするエドとリン。

そんな、全く隠れていない不満が充満した空気を、全く読まずに、
「頼もしい使い魔さんたち、これからもわたくしの大切なおともだちを、よろしくお願いしますね」

それを制すように白い手袋に包まれた左手を、アンリエッタはすつと差し延べた。

すると、ルイズが驚いて言った。

「いけません、姫さま！使い魔にお手を許すなんて！」

「いいのです。この方々は、わたくしのために働いてくださるので
す」

物凄い剣幕で怒鳴り散らすルイズを窘めるように、アンリエッタ

は優しい声で言った。

「忠誠には報いるところがなければなりません」

「はあ……」

才人は差し出されたアンリエッタの手を見つめながらキョトンとしている。

「『お手を許す』って、お手？俺たち犬扱い……？」

それを聞いたルイズは思わずガクツとよろけた。

アレン達はこのような作法がないので、頭の上にハテナを浮かべたままである。

「違うわよ……。もう、これくらいも分からないなんて……」

「才人、『お手を許す』というのは『キスしていい』って事」

才人はシャナの説明を聞いて、ポンと手を打った。

こんな事も判らないのと言いたげなシャナの口ぶりだったが、凄く判りやすく頭にしっかりと入った。彼もまた少しずつではあるが、作法を身に付けるようになっていた。

「あゝ、なるほど、そういうことか」

「分かったら、さっさとしなさい。姫さまに失礼よ」

「俺はいい……」

やっぱり面倒に手を振るエドとリン。それを見たルイズはまたため息を付いた。アレンに到っては話し合いに参加するのも面倒になって来たのか、心地よい寝息を上げている。

才人だけはスツとアンリエッタの前に近づいて、

「はい？」

「ちよっ！」

「うわ…」「あちゃー…」

女性陣が止める間もなく、アンリエッタに口づけした。

「むぐ…」

柔らかくて小さい唇。

あまりに突然な出来事に、アンリエッタは目を白黒させている。そのまま、力が抜け、崩れてしまった。

「何やってんのよ！このバカ犬！」

「げふっ！」

才人は思いつきルイズに股間を蹴られて悶絶してしまう。

目の前の出来事に、プルプルと全身を震わせながら、怒鳴り散らす。

「こ、このバカ犬…！『キスしていい』ってのは手の甲にするのよ！」

ルイズの怒鳴り声を聞きながら、才人はそういえば手を差し出していた事を思い出す。やってしまった後だが、なるほどなと思っていた。

「シヤナも！こいつ、バカなんだからちゃんと説明しなさいよ！」

「うるさいうるさいうるさい…」

いきなり矛先を向けられたシャナは、聞く耳持たず。

「それくらいの作法、当然でしょ！理解していないこいつが悪い！」

夜中だというのに、寮の中全てに響くような大声で叫んで、ルイズの声をシャットアウトした。

「姫様大丈夫ですか？」

「え、ええ。ちよつと驚いただけですので…」

少し混乱していたが、リナリーが透かさず抱き受けたので、何とか床に落ちずに済んだ。

なにわともあれ、こうして使い魔のアルビオン行きも決まったようである。

ルイズは気を取り直して言った。

「では、明日の朝、アルビオンに向かって出発するいたします」「ウエールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスルに居るはず」

アンリエッタも先程まで浮かべていた混乱した表情は成りを潜め、いつもの表情に戻っている。

「は。以前、姉たちとアルビオンを旅したことがございますゆえ、地理には明るいかと存じます」

失神から回復したギーシュが自信たっぷりにつ。

もし彼が先程の出来事を見ていたら、また怒り狂って気絶したかもしれないが。

「旅は危険に満ちています。様々な苦難があるかと思いますが、頑張ってください」

アンリエッタのその言葉にルイズは自信満々に言葉をつむぐ。

「任せてください！」

「頼もしいですね」

ルイズの言葉に微笑んでそう言うと、アンリエッタは机に座り、乱雑に置いてあった羽ペンと羊皮紙を使い、さらさらと手紙になにやら書き始めた。

書き始めた手が止まる。

「姫さま？どうなさいました？」

その様子を怪訝に思ったルイズが声をかける。

「な、なんでもありません」

じっと自分の書いた手紙を見つめて、そのうちに悲しげに首を振る。

アンリエッタは顔を赤らめて、最後に一行書き加えた。それから小さく呟く。

「始祖ブリミルよ……。この自分勝手な姫をお許してください……」

まるで念仏や经文でも唱えるかのような、小さな、ハッキリした呟きだった。

「わたくしはやはり、自分の気持ちに、嘘をつくことはできないの

です……………」

アンリエッタは書いた手紙をクルクルと優雅に巻いた。杖を振って、巻いた手紙に封蝋され、トリステイン王家の百合を模した花押が押される。その手紙をルイズに手渡しす。

才人はルイズとアンリエッタのやりとりをぼんやりとして目で見つめた。

「ウエールズ王子にお会いしたら、この手紙を渡して下さい」

「王子への親書ということですね」

それからアンリエッタは右手の薬指から指輪を引き抜くと、ルイズに手渡した。

「これは…?」

渡された青い宝石をまじまじと見つめながら聞いた。

「母君から頂いた『水のルビー』です」

「そんな！そんなモノ頂けません！」

拒むルイズの手を強引にアンリエッタは握らせた。

ピクリと寝ていたはずの、アレンの白髪に隠された形の良い耳が反応したのは、誰も知らない。

「せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金に当ててください」

「そこまで…。私を信頼して……………」

ルイズは感極まった様子で頭を深々と下げる。

「この姫様の頼み、確実にやり遂げて見せます！」

アンリエッタは二人に綺麗な顔で微笑む。

じつと怪訝な色を混ぜたオニキスのような黒い瞳が見ているとも知らないで。

「あなた方は我が国トリスティンの大使としてアルビオンへ行つて頂きます」

「はい！その任、確かに承知しました！」

最後まで、アレン達の気が付いた違和感には誰も言えなかった。ルイズとギーシュは姿勢を正し、アンリエッタに立派な礼をする。

「杖にかけて！」

ルイズが寝静まった頃。

翌日、早速「親善大使」としてアルビオンへ赴くという、重大な任を受けた彼女は普段より数倍良い寝つきで今、大鼾を掻いて寝ている。美少女台無しな顔ではあるが、取り敢えずちゃんと才人は布団を掛けておいた。

「やっぱり、気になりますね…」

「アレンもそう思う?」

箱舟の中、ランプ一つだけの灯の元、アレンとシヤナ、そしてリナリーが顔を突き合わせていた。

「どうもあのお姫様、裏があるような気がするのよね」

才人は既に主人同様、何も疑わずに夢の中へとダイブしている。先程のアンリエッタの頼み、腑に落ちないことは山ほどあった。

「まず、何でこんな夜中に姫一人で出向いて来たのか?」

「次に、彼女の結婚と親善大使はどう繋がるのか?」

「そして、彼女の手紙」

三人とも頭を抱える。ここまで納得の行かない行動というのは始めてみた気がする。

「お待ちせ!」

そんな時、戸を勢い良く開け放ってネギとエドが入ってきた。手

には大きな荷物を抱えている。

「本当に便利ですね。錬金術って」

「いや、それ程ないさ。ネギの教えてくれた事があつたから、こんな形になつたんだぜ」

そう言つて入ってきたエドとネギは、ドンと黒いモノを机の上に置いた。

「お二人はどうしたんです?」

「リンは夜食の調達。ウインリイは最終調整中だ」

「それよりもこれは?」

シヤナは目の前に置かれたものに対して、速く答えて欲しいようだ。

「有体に言えば盗聴器だな」

至極簡単な言葉でエドが纏める。

エドの化学とウインリイの金属工学技術、そしてネギの理論を混ぜた三人の発明第一号である。

「さて、気になる事は色々あるんだろ?」

「これは耳につけておけば、こちらの音声も聞き取れます」

そして、これを使って何をするのかというと、

「アレンよ。はったりであの姫様にカマ掛けてくれないか?」

エドの言葉に、アレンは白い歯を見せて笑う。それだけで返事は

わかった。

「じゃ、早速始めましょうか」

深夜の魔法学院。

灯を落とされた廊下は窓も無いので、月明かりが入ってくることも無い。一部の隙もなく積み上げられた石が塞ぎ、漆黒の闇を作り出している。

その中で金色の羽根を羽ばたかせながら、飛び回る影が一つ。

「ありがとう、ティムキャンピー」

彼を探してやってきたアレンが、労いの言葉を言葉で掛けると、また嬉しそうにバタバタと羽ばたかせ飛び回る。

アレンはアンリエッタがルイズの部屋を出て行った後、直にティムキャンピーに後を追わせたのだ。人が尾行するのと違って、確実にばれる事も無く姫の寝所を突き止められた。

確実にルイズが聞いたなら、一瞬で沸騰する事、間違い無しな行動だが、この際気にしてられない。

「鬼が出るか、蛇が出るか……。行ってみましょうか」

ギイツと軋む音を立てて、木の戸を開けた。

「さて、何を話してくれるのかな」

残ったエド達は、適当に占拠した空き部屋に屯している。

目の前には大きな計器が、色とりどりの針を振り乱して数字を刺している。

「ちょっと、押さないでよ…」

ぐいっとシヤナがウインリイに凭れ掛かる。掛かられたウインリイは重さに耐えかねて批難の声を上げた。空き部屋といっても精々4畳ほどしかない。部屋というよりは使われていない倉庫言う方が正しいかもしれない。そこに巨大な盗聴器と5人が入っているのだ。きつくならない訳がない。

「まあ、聞きたい事はあるかも知れねえけど…」

幾分、イラ付いた声でエドが押し合いを続ける後ろを制する。

「取り敢えず、黙つといてくれ」

シヤクシヤクと林檎を食べているリンの齒のかみ合う音だけが、嫌に響く。

「じんばんはー」

いつもと同じ、洒落っ気たっぷりのでアレンは部屋に入った。

「誰か！」

途端に鋭い老人の声が飛んでくる。

だが、それを気にした風も無く部屋の中に入る。部屋の中にはドレスから着替えたアンリエッタ姫と山高帽を被った老人がいた。

二人とも突然入ってきた銀髪の少年に驚いている。

「誰かいるか？」

半狂乱になった老人が応援を呼ぶ為に叫ぶが、アレンは涼しい顔で二人を見つめる。

「呼んでも来ませんよ。途中で見つかったちゃって何人が気絶させましたから」

確かに姫の護衛としてやって来た衛士の内、不幸にもアレンを見つけてしまった者は一人の例外も無く、気絶させていた。そんな事も無げに言うアレンの顔を、アンリエッタはちゃんと覚えていた。

「えっと、貴方は……」

「アレン・ウォーカーです。宜しく、お姫様」

道化師としての本領たる作り笑顔を浮かべた。

「何故、ここに来た？」

一緒に居た老人が聞いてくる。

それにアレンは冷静な声で、静穏な顔でアンリエッタを睨む。

「いえ、少し聞きたい事がありまして、そちらの…、ええっと」
「枢機卿のルイ・ジュール・マンシーニ・マザリーニだ」

マザリーニは尊厳を保った声で、少年に名乗る。

「では、枢機卿閣下。今からの話には貴方にも同席していただきま
すよ」

ニコリとしているが、アレンの目の奥は全く笑っていない。

そのまま手近にあった椅子を引っ張り出すと、ガタンと乱暴な音
を立てて座った。

「まず、一点。何故、彼女に親善大使などを任されたのです」

回りくどい事は省いて、単刀直入に尋ねる。

こうしないと盗聴しているメンバーの一人がイライラするからだ。
盗聴機は目立たないようにアレンの服のボタンに偽装している。尤
も魔法しか判らない彼らに科学の結晶を探知する術はない。

「親善大使…？」

マザリーニが怪訝そうな顔をしたのを、アレンは見逃さなかった。
逆に、姫はいたずらがばれた子供のように俯いている。

「次に、ルイズに渡した手紙」

「……？」

「あれに書かれたのは一体何なのか？」

訳が判らないという顔でマザリーニは眉根に刻まれた皺を深くす
る。

元々、歳のせいで出来た皺が更に深く、彫り込まれた様になる。

「何よりも、何で彼女の部屋なんです？」

「……」

アンリエッタは黙ったままだ。

「親善大使なんて言う国の重役なら王宮に呼べばいいでしょう？何故、そうされないんです？」

「それはその、極秘の任務なので……」

ようやく反論に漕ぎ着けたのだが、アレンはその反論を切っ捨てて捨てる。

「それなら尚更。彼女のような学生に何故任せたんんです？」

「……」

反攻もそこまで。

ようやく観念したのか、悲しさを隠しきれていない表情で語る。

「わたくしは、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになったのですが……」
「……」

寂しそうな顔をするアンリエッタを見てられないのか。マザリ
ーニは目を背けた。

その顔からは、アレンにもその結婚を望んでいない事は良くわかった。

ゲルマニアは、トリステインの国家で唯一始祖と縁の薄い国である。ゲルマニアは元々一つの都市国家であり、周辺地域を併合する事で勢力を広げた、いわば“成り上がり”だ。

現ゲルマニア皇帝のアルブレヒト三世ですら、その家系図を辿っても他国の王や教皇のように由緒ある、というほどの物ではない。おまけに、金さえあれば魔法が使えない平民でも貴族に取り立てる始末。伝統や格式などという言葉を蔑ろにするようなゲルマニアの制度は、それらを重んじるトリステインから見れば野蠻に感じられるのである。その心の底から毛嫌いしている国の頂点に立つ男と、アンリエッタは結婚しなくてはならない。

「でも、仕方がないのです」

「仕方が無い？」

アレンが怪訝な顔を向ける。

「同盟を結ぶためなのですから…」

「そこからは私が話そう」

アンリエッタの言葉を、重厚な口調で止める。

マザリーニは、ゆっくりと語るような口調で、アレンにハルケギニアの政治の情勢を説明した。

「この国の上空に浮かぶアルビオンは、現在紛争の真っ最中なのだ」

この時点でアレンは呆れてしまった。

そんな重要な事をアンリエッタは隠していた。そして、その内乱状態の国に学生を送り込もうというのである。幾らなんでも無理があり過ぎる。

そして何よりもルイズが、そのような事を知らなかったのも問題だ。

あの興奮した様子では、ギーシュも知らないだろう。

「チツ」

世間知らずな二人の能天気な顔を思い浮かべながら、アレンは舌打ちした。

それを聞かないように、

「王家を主君にする王党派と、その王家を叩き潰そうとする貴族派との間で戦火が切られてしまった」

ふつつとため息を一度だけ付いて、マザリーニは続ける。

「現在は貴族派優勢で戦況が推移しており、王党派が潰えるのも時間の問題だろう」

「まさかとは思いますが、彼女にその負けそうな王様を助ける、なんて言うんじゃない…」

流石にそんな事をする義理も義務も無い。

彼らの目的はあくまでも「元の世界に帰る」ことだ。そんな無駄な事をして、死んでやれるほど気は良くない。

「いや、これはあくまで知っておいてほしい情報だ。問題はその後」

淡々とマザリーニは続ける。

彼はじつとアレンの幼さを残す顔を見ながら、得体の知れない何かを感じ取っていた。そして、同時にその「何か」に無意識に期待してしまっていた。

「確かに、国土や人数ではこちらが多少優位だ。だが…」

言い難い事だ。だが、言わなくてはならない。

「しかし軍備は、残念ながらトリスティンを凌ぐ優秀な物が多い。武器も、人も」

自分の国を汚すような事は言いたくないのだろう。

マザリーニの自嘲の言葉に血の香りが混じる。

「我が国は、連中がこちらに矛先を向けた場合に備え、隣国ゲルマニアと同盟を結ぶ事にしただのだ」

なるほど、国同士の同盟を結ぶというのは悪くない。利害関係の一致さえ確定すれば、政治や軍事である程度の融通が利く。仮にアルビオンがトリスティンを攻めたとしても、利益が認められる間はゲルマニアが援護してくれるだろう。

過剰な期待は禁物だが、少なくとも牽制ぐらいにはなる。

「このパレードは、ゲルマニアと同盟を結びに行った帰りというわけですね」

「そうだ」

マザリーニは虚勢を張りながらも、堂々と答える。

「だが、この同盟締結にあたって懸念事項が見つかったのだ。私もつい先程聞いたばかりだが…」

「懸念？」

アレンは怪訝な顔を、再び二人に向ける。

「で、もしかして、同盟締結を妨げるような材料が？」

アレンが尋ねた。するとアンリエッタは悲しそうに頷く。

「あるのです……………」

今まで黙っていたアンリエッタがそう言うと、マザリーニの顔が更に蒼白になる。

アレンはアンリエッタの芝居がかった仕草や口調に眉を顰める。アンリエッタは両手で顔を覆ったまま、呟く。

「実は、同盟にあたってゲルマニアの皇帝と、姫様が結婚する事が条件となったのですが……………」

「成る程。同盟締結、この国の生き残りの人身御供というわけですか」

何とも見も蓋も無い例え方をするアレン。

だが、事実である以上、反論のしようも無い。聞いているアンリエッタの胸の内は更に重くなる。

「でも、政略結婚ぐらい別に珍しくもないでしょう？」

それなりに彼もまた、歴史を学んできている。小国が生き残りの為に姫を嫁がせた例など、古今東西枚挙に暇が無い。だが、そこまですべてアレンは気が付いた。

「…まさか、その結婚が御破算になるようなスキャンダルが？」

結婚が破談になれば、同盟も白紙となる。

今、マザリーニがその白くなった頭を抱えている理由はそれだ。

「その火種が、アルビオンに眠っているのですよ」
「で、それが？」

ギロリと鋭い瞳を向ける。

「…わたくしが以前したためた一通の手紙なのです」
「でしようね」

ようやくアレンと話を盗聴している一同の間で、話が繋がった。

「それがアルビオンの貴族たちの手に渡ったら…、すぐにゲルマニアの皇室にそれを届けるでしよう」
「どんな内容の手紙なのですか？」

聞かなくても解るが一応、形式的に聞いておく。

「…それは言えません」

口を鎖すが、アレンには察しが付いていた。
勿論、聞いているエドたちにも。

「それを読んだら、ゲルマニアの皇室は、このわたくしを赦さないでしよう」

内容は間違いなく彼女の書いたラブレターだ。

それも「子供のいらざら」で済まされないような衝撃的で、スキヤンダラスな内容を含んだラブレターだろう。

「間違いなく、トリステインはアルビオンとゲルマニアに立ち向かわねばならないでしような」

事も無げに話すマザリーニ。彼は国の舵取り役として、冷静に物事を見ていた。

それはこの国にとって、国家存亡を賭けた一大事である。

「それで？その手紙というのは、どこに？」

「アルビオンの反乱勢と骨肉の争いを繰り広げている、王家のウエールズ皇太子が……」

アンリエッタはベッドに横たわり、大声を上げる。

「ウエールズ皇太子は、遅かれ早かれ、反乱勢に囚われてしまっわー！」

寝静まった全ての人を起こすかのような悲痛な声で喚きたてる。

「そうしたら、あの手紙も明るみに出してしまうわー！そうしたら破滅です！破滅なのです！」

たかが手紙と侮ってはいけない。

邪魔な人間のマイナスイメージを強調して追い落とす、というのは、意外に役に立つ戦術なのだ。

（だが……）

その程度の事は相手も考えつく筈。

仮にその手紙が存在していなくとも、偽の手紙をでっち上げれば同盟の妨害は可能である。実物がない場合でも、口先三寸で揺さぶりをかける程度の事は簡単にできるのだ。

しかし、それでは証拠はない。

確実に追い落とす為に、アルビオンの貴族たちは、王女と皇帝の婚姻を妨げるための材料、その姫の書いた「本物のラブレター」を血眼になって探している。それ以上に同盟阻止に効果的な材料はない。

「それを親善大使という名目で、ルイズに取りに行かせようとしてた訳ですね…」

ハアとアレンは、大きなため息を付いた。

彼もこの素敵な姫さまが、ここまで見かけだけで中身は、無意識に残酷なだとは思っていなかった。

(しかも、頼むまでの流れが…)

最悪だ。ポリポリと後頭部を搔きながら思う。

一介の生徒に、それも一応は「最愛のともだち」に内乱状態の国に行かせて、自分の尻拭いさせようとしているのだ。アレンの透き通る瞳には、このお姫様は悲劇のヒロインに酔っているように映った。

「
「
「
……」
……」
……」

夜の静けさが部屋を包む。

若い時に誰もがするように、アンリエッタも恋人であるウェールズに恋文、ラブレターを送ったのだが、そのせいで国が一大事なのだ。

そう考えた時点で、かなりの重圧がアンリエッタに押し掛かっていたであろう。

(確かにそう言った所は同情できますが…)

アレンの頭の中でクルクルと思考が巡る。

内々に手紙を取り戻すとなると、彼女の頭に浮かんだのはルイズだけだった。ともだちのルイズに取りに行かせれば、信用できない部下を使わずにも済むし、マザリーニにもバレない。

その時点でアンリエッタはもう冷静さを欠けていて、この件の危険性に全く気が回っていなかったのだろう。

「では、聞かせてもらって良いですか」

一応、前置きして話し始める。

マザリーニは無言で頷いた。

「どうぞ」

「彼女をどうやってアルビオンに送るつもりで？」

「…今は何も」

質問を続ける。

「では、王子様が居られる場所の情報は正確ですか？」

「…1週間ほど前のことですので、それなりに信用できるかと」

この言葉には流石に渋い顔をした。

アレンも広義には、教皇庁所属の軍人である。軍に属す以上、情報というのは一番重要視される。それが一週間も前のモノでは、話にならない。今、この瞬間にも陥落している可能性がある。

「手紙を手に入れたとしても、どうやってそこから脱出させるので

すか？」

「…その時になったら思いつくでしょう」

信頼の現われなのか、それとも、

「結局、あなたは何も考えてないんですね。姫は何も支援しないんですか？」

「申し訳ございません！宮廷の者は信用できませんので…」

アレンはこの素敵な姫様が嫌いになった。

ルイズは人の役に立ちたいと思っている。ルイズは今までに、友人や他人に頼ってもらった事はなかった。魔法が使えない自分に頼る人はいなかったのである。

だからルイズは、頼られたかった。それを努力を見ているアレンは良く解っていた。

「僕、貴方が嫌いです」

「え…？」

「…」

ストレートに感情をぶつけられたアンリエッタは泣き腫らした顔を向ける。マザリーニは目を瞑り、黙ったままだ。今の発言は確実に、不敬罪で捕まりそうなものだが、彼もアレンの立場なら同じ事を言っていただろうから、何も言えなかった。

そこには、普段から煙に巻く事の多いアレンには珍しい怒りを浮かべた顔があった。

「貴方は彼女の気持ちを利用した。それが悪いとは思いませんが…」

じっと怜悯な目がアンリエッタの青い瞳を見ている。

「僕は大嫌いですね。ともだちに死ねなんて言える貴方は」
「……そうですわね」

アレンが低い声音で言っているのがぼんやりとだが、アンリエッタの耳には聞こえた。

マザリーニは、深く考えている少年を見ながら、言葉を発した。

「それに彼女は、公爵家の娘。それを姫の一存で戦地に行かせたとなれば……」

「そういえば、そう言っていましたね」

記憶の底を浚う。確か、ルイズは公爵家の三女と言っていた。

基本的に公爵となれば、貴族の位階では最も高い位だ。その娘を送ったとなれば、結果は凡そ付く。

「無事に帰ってくれば良し。でも、そうでなければ……」

「確実にヴァリエール公爵は王家に叛旗を翻すでしょうな」

「そうなれば、アルビオンが来るより先に、内乱で終わりますね」

ニコリとこの国の最悪の未来を語るアレン。

その言葉に、暗い表情でアンリエッタが肩を落として、唇を噛み締めているように感じた。

姫は再び俯く。そんな時、思いついたようにアレンが口を開いた。

「それじゃ、ごうしましゅうー」

アレンがポンと手を打ってそう言うと、俯いていたアンリエッタが顔を上げた。

マザリーニも突如として言い出した少年の言葉を、測りかねてい

るようだった。

「？」

「僕たちは、ある目的がありまして……」

目的に関しては、ぼやかす。

ここで最高国権の二人に実情を話してやる程、アレンも軽薄ではない。

「でも、そのためにはお金がいるんですよね……」

あわよくばアレンはこのまま借金返済に漕ぎ着けようと考えているが、それは者の序でだ。

実際の目的は、

「成功の暁には報酬を寄越せと……？」

「お金と後は、爵位ですかね？」

黒いアレンがにゅっと後ろから出てきているが、気が付くのは盗聴でエドとネギだけだ。これだけは同僚のリナリーも目にした事がない。

「全員にか……？」

マザリーニの懸念は尤もだった。

見た目は平民でしかない、それが「爵位を寄越せ」と言って来ているのだ。彼には受け入れられようはずが無い。勿論、彼の信念という面からではなく、周囲の反発という面で。

「ああ、与えてもらうのは一人で結構ですよ」「

チラリと姫の方を見る。

「姫様も見ましたよね。赤毛の少年」

「ええ……」

「彼、実はメイジなんですよ。で、僕らはその護衛？」

「え？」

さっきまでの剣呑な空気はどこへやら。再び茶化すような声にアレンは戻っていた。

実際はアレンの言うような事は全く無いのだが、嘘も方便である。彼以上にこの言葉を体現している男はいないだろう。

「僕らが一緒に行って、貴方のおともだちや、大事な手紙と一緒に帰ってきますよ」

「それが叶えば……」

「僕の要求に答えて貰いますよ」

ニツと黒い笑顔を浮かべる。

その笑顔を見たマザリーニは、額に冷や汗を浮かべながら尋ねた。

「…断われば、どうなる？」

「渡す前に、少なくともお金は贈呈してもらいましょう」

貴族の頂点に立つ王家が平民風情に負けるわけには行かない。いざとなれば、そのような約束をしていないと逃げられる。そう思っ
て聞いた質問だったが、無駄に終わってしまう。返答に成っていないが、アレンの言葉の裏にある真意にマザリーニは気が付いた。
つまりは「このまま手紙を持って、ゲルマニアに渡る」と。

「…我が部下に欲しいくらいだ」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。枢機卿」

立ち上がってペコリと頭を下げるアレン。

その交渉術に枢機卿は感服していた。これから先にマザリーニとアンリエッタに待つのは地獄。だが、アレンの言葉に従えば、少なくとも最悪の事態だけは回避される。

その案は、極上の蜜に思えた。

「良からう…。爵位は難しいが、少なくともそれなりの報酬を用意しておく」

「枢機卿!?!」

アンリエッタは素っ頓狂な声を上げた。

「静かになさい、姫様。現状、我々は彼らに従うほかありません」

「どうしてですか!」

「重大な話を聞かれたのです。このまま彼らを他国に逃がせば、この国は終わってしまう…」

ギリツと奥歯を噛むマザリーニ。

「ああ、お金が用意できないのでしたら、他への通行権と王宮図書館の閲覧許可でも構いませんよ?」

こういう風に譲歩案も出しておく。

一つ出すだけでも、国家がひっくり返るのだが、選んでいる暇はない。

「良からう。その代わり…」

「ええ。確実に任務は遂行しますよ」

言い残すようにアレンは部屋を後にした。

「お疲れ様。アレン君」

「ご苦労だったな」

部屋に戻ったアレンは、緊張の糸が切れたのかへなへなと床に座り込んでしまった。

「ホント、あんな事、二度とさせないで下さいよ……」

正直、アレンはこのような交渉術には向いていない。

彼をこのような交渉人 ネゴシエーター にさせたのは、事前の打ち合わせと、咄嗟の時に対応できるように、このメンバーと回線を保っていたからだ。

「さて、どうなる事やら……」

天空の国で待ち受ける困難を予期するかのように、星は不気味に瞬いていた。

33・Immaculate children

「おい、どこだー」

時計の針を戻し、ルイズの部屋を飛び出た一護と夏梨がどこへ行ったのか。

二人は飼い犬（？）であるコンを探しに、学院の中庭を探し回っていた。

「ダメだ……。こつ暗いと探せねえや」

時刻は既に夜。

月明かりも薄い夜では、小さなぬいぐるみを探すのも一苦労である。

「コン、どこ行ったのー」

行方不明にした張本人もガサゴソと色々な場所を探している。ふと、その時。

「いてえよおおー！」

「どこー？」

「きゅいー、逃がさないのねー」

「ん……なんだ？」

聞き覚えのない声と、良く通る澄んだ声が耳に入ってきた。

二人揃って、暗い闇を見透かすように細い目で顔を睨み付けた。

「んん？」

声が聞こえてくる方を眺めると、そこには何かに噛み付いている影があった。

ちようど陰になっていて、全体像はつかめないが、それなりに大きいだろう。

そのシルエットに見覚えのあった一護は、ポンと手を叩く。

「シルクロードだったけ？」

「違う、違う。シルフィード。確かタバサの使い魔」

目を細めて凝視する。

闇の奥に浮かぶその正体。それがタバサの連れていた青い鱗の風竜であることに気づいた。

「って、何でコンの声が聞こえてくるんだ？」

「さあ？」

少し積もった落ち葉を踏みしめつつ、シルフィードに近づく。

そこには綿がはみ出た、みずばらしい縫ぐるみを踏みつけて遊んでいる竜の姿があった。

「やめて、やめて！もう綿が大変だから！」

「きゅー、もっと遊ぶのね！」

涙を流しているコンとは対照的に、シルフィードは物凄く楽しそうだ。

「あ、一護…、夏梨…」

呆れた顔で見ている二つの顔を視界の端に見つけたコンは、最後

の力を振り絞って爪の拘束を振りほどく。そのまま全速力で駆け出し、一護の胸に飛び込んだ。

「一護才才才！助けに来てくれたんだな！」

コンの流す感動の涙で、服が濡れそうだった。

折角の卸し立ての服だというのに、これではあまり持ちそうにないだろう。

「夏梨…、変なこと言っでごめんな〜」

「はいはい…」

どうせ、また同じ事を繰り返すだろうから、適当に返事を返す。それより一護達には気になっている事があった。

「お前は何だ？」

人の言葉を喋る爬虫類など珍しい。

そう思いつつも、じっとそのエメラルドのようなシルフィードの瞳を見つめる。

「シルフィなのね！よろしくなのね！」

「シルフィ……？」

一護と夏梨は考えれば考えるほどわからなくなる。

（　　）　　っていつか、竜も喋るのか…）

そして、風竜は嬉しそうに羽根をバタバタと羽ばたかせた。

その風圧で二人の髪が乱れる。

「シルフィ、ごはん持ってきた…」

その後ろで、きよとんとした顔で片手に魚を持った、青い髪の少女が呆然と立っている。

タバサは相変わらずの無表情のまま、竜と二人を見つめている。

「お姉さまー！おなかですいたのねー！」

静けさが漂う深夜の広場に響く甲高い声。

だが、その嬉しそうな声とは裏腹に、タバサは虫の居所がよろしくない様子であった。

「シルフィ……？」

穏やかなようで、確かな怒気を含んだ声。

ポカンとした表情を浮かべる死神兄妹を余所にタバサは続ける。

「人前では喋らないって、私言っただよね……？」

「きゅいきゅい！でもでも！おなかすいた！」

どうやらこの竜もまた、食い意地が張っているらしい。

「お腹すいた」と闇雲に叫びまくる。

「シルフィのこと忘れてるみたいだった！」

そんな事もないから厨房から失敬したらしい魚を抱えているのだが。

「言っただよね？」

タバサは相変わらずの無表情で、静かな口調なのだが、どうやら怒っているらしい。

普段のタバサとは違うその異様な雰囲気、シルフィードの色がもっと蒼くなつた。

「お姉さま怖いー!!」

ドタドタと足を慣らして、タバサから逃げるように暴れまわる。

「助けてほしいのね!きゅい!きゅい!」

「いだだだ!」

シルフィードは大きさに暴れると、一護の傍に寄ってギョツと爪を立てて、しがみついた。その序で一護の胸に飛び込んでいたコンが、鋭い爪に挟られる。

最早、コンは見るに耐えないほど、顔を崩していた。物理的に。

「大丈夫か、これ…」

幸いな事に核となる部分は壊れていないようだが、皮の修理は専門の裁縫屋とか、服飾に詳しい人間がいないと難しいかもしれない。

「石田も来ねえかな…」

ぼそつと呪詛のように一護が呟く。

タバサの中で何かが壊れる音がした。

「シルフィ…」

タバサは一言、そう言い捨てた。

シルフィードの顔からさーっと血の気が引くのが見て取れた。

「きゅいーきゅいーきゅいー！ーいやー！ー」

シルフィードは泣いてタバサにしがみつくが、タバサに表情に変化は無い。

無表情のまま、ポカポカと手に持った身の丈程の杖で殴り始めた。

「へー。コイツがお前の使い魔なのか？ そりゃまた、すげーな」
「……………」

一護は、コンを爪に抱えたまま、さめざめと泣いているシルフィードを見てタバサに言った。

そして、タバサも頷く。夏梨は首筋を撫でてみたりして、じゃれ付いている。

タバサから聞くと、シルフィードというのは、どうにも普通の風竜ではないらしい。

「竜は普通、喋らない」

「じゃあ、何で喋ってるんだ？」

死神の世界では、ぬいぐるみも喋るし、猫も喋る。

人語を解すると言う点では、こちらの方が普通かもしれない。そんな風に色々なゲームを積んできた一護は思った。

「竜の知能は、幻獣のなかでは優秀な部類。でも、人の言葉を操るほどじゃない」

「だが、何の因果か、失われかけた伝説の風韻竜ふういんりゅうとやらを呼んじまっただと？」

タバサは再びコクリと小さく頷いた。

「秘境で暮らす伝説の生き物。これでもまだ2000年程」

「二百年も生きてるのか…」

一護がタバサからシルフィードの生きてきた年数を聞いて、静かに驚く。

だが、死神は長寿で老化も遅い。2000年生きてきても、まだ若輩者だ。何となくシンパシーを感じた。

「そう。人間の年でだいたい十歳ぐらい」

タバサは小さく頷く。

韻竜は人語を解するほどに知能が高いだけに、成長に時間を要する。

鱗の年輪から推測して、おおよそ二百年は生きていて、人間の年に直すとまだ十歳ぐらいだと言う。

「へー。じゃあ、なんで今まで俺らに喋らなかつたんだ？」

首を持ってきたシルフィードの首周りを撫でながら聞く。

今まで、一護はこの青鱗の竜と何度か一緒にいたことがある。

広場なんかで見かけた時には、今のように優しく頭を撫でたりしてやるが、その時だつて一回も喋った様子は無かつた。

「いろいろと面倒」

小さくタバサは答えた。

「あー、成る程な」

韻竜は太古に絶滅したとされている。それでなくとも伝説級の生物だ。

万が一にでも、喋っているのを見られてシルフィードの正体が露見するような事になれば、トリステインの^{アカデミー}実験室や、ガリアの研究所などが標本提出を求めてくるだろう。

生態調査なら未だしも、解体解剖されるような事態になる訳には行かなかった。

「だからこの姿で、他人の前で口を開くのは禁止にしている」

相変わらず、呟くような小さい声で一護に言った。

「まあ、とりあえずコイツが喋ることは秘密なんだな？」

一護が、まだ涙目になっているシルフィードの頭をポンポンと叩いて言う。

タバサが頷く。

「シルフィは今まで我慢してたのね」

そうぶー垂れたシルフィードの頭を、タバサがバシッと本で叩く。

「いったーい！」

シルフィードは頭を両手で痛そうにおさえる。

「でも喋った」

タバサが小さく呟く。

まだ、約束を破った事を許してはいないようだった。

「それはウツカリなのね！ごめんなさいなのね！でも、二人とも悪い人じゃないのね！」

シルフィードは、騒ぎたてる。

その声に反応するかのように、また一段と叩く力が強くなる。流石に、こればかりは二人とは黙っているしかなかった。

「ま、まあ、その辺にしとこうぜ……」

そんな中、空気を読まずに発現したバカが約一名。コンだ。

案の定、喋りだした縫ぐるみに、じつとタバサの青い視線が濯がれる。

「……………」

一護も夏梨も、頭に手を当てて沈む。流石に目の前で喋ってしまったのは誤魔化しようがない。

観念した二人は、訥々とコンの事を話し始めた。

「良く解った…」

タバサはというと、二人の目の前に向かい合うような形で、ちょこんと座ってお器用に片手で本を読みながら聞いていた。シルフィードはと言うと話している最中も、楽しげにコンとじゃれあっていた。

体格差でコンはとんでもない事になっていたが。

「まあ、これは他の誰にも話してないんだけどな」

「ルイズにも？」

「ああ」

ふうつと煙でも吐くかのように、一護は言う。

星の少ない灯に照らされたタバサの顔を二人でまじまじと見る。

なかなかの美人ではある。

短く切り揃えられた青い髪と、透き通るような碧眼が彩る顔は、幼いがそれなりに可愛らしい。

(だけどなあ…)

チラリと二人で目を合わせる。

少々残念なのは、タバサの表情。その表情は凍りついたように冷たく、透き通り感情を窺わせない。

本に夢中になっっているのか、することがなくてただページをめくっているのか、それすらも判読できないほどの無表情。少なくとも話している最中は、反応するように顔を上げたりしていたから、全く感情がないと言うわけでも無さそうだ。

「…?」

見られている事を気にしているのか、いないのか。すっと、まな板のような胸に十五歳という年齢にしては低すぎる身長。

何処となく、一護にとつては妹を、夏梨にとつては姉を思わせるような感じだった。早い話が、何となく遊子に似ているのである。外見だけは。

「あなた達に、頼みたい事がある」

タバサは無表情で淡々と二人に言った。

今まで黙って本を読んでいた彼女がいきなり口を開いたので少々、驚いたが直に常の顔に戻る。

（頼み事…？一体何？）

ぼんやりといつもの彼女とは違う空気を感じ取りながらも、頼み事の内容を尋ねた。

「頼み事か、何だ？」

一護が単刀直入にタバサに尋ねる。

だが、彼女はやっぱり無表情のまま、こう返した。

「私と一緒に来て欲しい」

「はい？」

「…何だ、そりゃ？」

二人とも彼女の言う事が解らなくて、怪訝な表情を向ける。

頼み事と言うからには、それなりの内容だと思ったが、余りに薄い事に構えを崩されてしまう。

だが、タバサは相変わらずの無表情を決め込んだまま、

「一緒に来て」

そう繰り返した。

内容が今ひとつ掴めないの、思案顔になる。

色々と考え込むが、目の前で困っている人間を見捨てていけるほど、二人とも腐ってはいない。勿論、タバサが受けた恩を忘れるようなら、途中で見捨てるかもしれない。

だが、どうもそんな不義理をするような女の子には見えない。

「まあ、そのうち何か食わせてくれよ」

「だね」

「解った」

タバサは、一護の了承の意にも無表情で返した。

(どこまで、無表情…?)

一護と夏梨は思う。

感情がまったくあるわけではないが、冷たい雰囲気は漂ってくる。同じように感情を露にしない人たちは、二人も幾人も見てきた。

照れ隠しでやっている者、強い決意に裏打ちされた者、使命感に燃える者。色々は無表情なのは居たが、そのどれでも無い気がした。

「で、何時なんだ？」

頼み事と言うなら、こういうことを聞いて置かねばならない。

だが、予想に反した答えがタバサの口から帰ってきた。

「今から」

「今から?」

「今から」

「ホントに?」

「そう」

まさか今からとは思っていなかったが、一度頼みを受けてしまった以上、ここで引っ込むわけにも行かない。

「ま、いいぜ」

「うん。解った!」

二人の了解を取り付けたタバサは、ピーツと指笛を吹いた。合図を受けたシルフィードは、

「きゅー!」

と、大きな声を上げる。ばさばさと大きな羽音を立てながら、羽根を全開にする。

その背にタバサが、手馴れた様子で飛び乗った。

「乗って」

地面で見ていた二人を促す。

一護と夏梨も、見よう見まねでシルフィードの背に乗る。

ちょうどいい感じに背中には、突起があり一護はそこに背を預ける事にした。

「飛んで...」

タバサの合図で一気にシルフィードは上昇する。
空には、3人を見守るかのように星が瞬いていた。

「オイ、オレを忘れるなああ！」

34・Viscount Wind

澄み切った青い風がさあつと吹きぬける。

薄白の朝靄の中、ルイズたちは馬に鞍をつけていた。

ルイズは普段の制服だが、スカートの下にブラウンのスパッツを着け乗馬用のブーツを履いている。

エド達はいつも通り、動きやすい常のコートと黒い服を着ている。

「くあ…」

だが面倒なのか、昨日の疲れが残っているのか。再び、大きな欠伸をかました。

リナリーは常のミニスカートの上から、分厚い防寒用のコートを着ている。ウインリイも似たような感じだ。

「ところでウインリイさん」

「何、ネギ君？」

カチャカチャと手馴れた様子で鞍を付けるエドを、眠たげな目で見ているウインリイにネギが話しかける。

「これ、少なくとも自衛のために持つておいて下さい」

「何これ？」

ぐいっと白い包みを渡した。ちょうど棒状の形で、何となく銃を思わせる。しゅるつと衣擦れの音を立てながらウインリイは開いた。中には重厚なアンティークの銃が。

「えっと、これは錬成銃って言います。エドさんの錬金術が仕込ん

であります」

ネギが用意したのは、錬金術の効力を込めた錬成銃である。錬成術のエネルギーを物質に与え、分解・再構築する為の銃だ。だが、ウインリイには物理学の知識が薄い。エドやアルのように鉄を金に変化させる事は出来ないが、鉄の形を長短自在に変えられる代物だ。

だが、そういった銃の付加効果は機械バカは、一切興味が無く、

「ウツハー、これどうやって造ったの？」

骨董品のようでいて、先進的なデザインの素晴らしさ。

一個一個に息吹を感じる歯車や、ストリングたち。それらに一瞬で心を奪われていた。

「え、えつとですね…」

流石にそこまでは解らない。

ネギが提供したのは、「錬金術の物質定着」だけである。ワクワクした様子に、若干、顔を引きつらせながらも、ネギは解説していた。機械バカと骨董品バカ。^{アンティーク}

マニア同士、何か通じるものがあるのかもしれない。

そして才人はというと、

「はあ…」

苦い面持ちで馬を見つめていた。

アルビオンはここからどのぐらいの距離なのか聞こうとしたが、怖くてやめた。

この前、体験的にルイズに馬に乗せられたのだが、降りた瞬間、

腰が痛くなった。余りに腰が痛くて痛くて、毎日、乗馬していただるう昔の武将達は、何でヘルニアにならなかったのだろうと不思議に思うほどである。

正直、馬に乗るのには慣れない。慣れそうにもない。

「はあ……」

また、あの痛みを味わうのかと思うと、気が滅入る。

そんな沈みきった才人とは打って変わって、他の面々は普通に馬に乗っていた。

「そういえば、アレンさんと、一護さんに、夏梨さんは？」

ネギがいつまで経っても来ない三人の行方を心配そうに尋ねた。

その質問にリナリーが、ニッコリと答える。

「アレン君なら、お弁当をを貰いに行くって」

「遠足気分？」

才人は思わず叫んでしまったが、あの普段の消費量では、如何程になるのだろうか。

「で、一護さん達は？」

「二人は何か、どっか行くなって、書置きがあつた」

昨晚、二人は飛び立つタバサを制止させ、走り書きを箱舟の中に突っ込んでおいた。朝、出掛けに見かけたシャナが、端的に答える。

「どこ行くなって？」

「知らない」

そんな風なやりとりをしていると、ギーシュが、困ったように言った。

「お願いがあるんだが……」
「あんだよ」

才人は、馬の鞍に荷物をくくりつけながら、ギロツとギーシュを睨みつける。

彼は、決闘の件と昨晚の件を、まだ根にもっているようだった。

「ぼくの使い魔を連れていきたいんだ」

「使い魔なんかいたのか？」

「いるさ。当たり前だろ？」

才人とルイズは顔を見合わせる。それからギーシュの方を向いた。

「連れてきやいいじゃねえか。っていうかどこにいるんだよ」

「今呼ぶから少し待ってくれたまえ」

そう言ってギーシュは足でリズムカルにとんとんと地面を叩く。すると、モコモコと地面が盛り上がり、茶色の大きな生き物が、顔を出した。

「うわっ！」

才人が驚いてのけぞる。

「ヴェルダンデ！ああ！ぼくの可愛いヴェルダンデ！」

そう言ってギーシュはその生き物に抱きついた。
ルイズがその毛むくじゃらの生き物を見て言う。

「それってジャイアントモールじゃない。地中を進んでいくんでしょ？」

「そうだよ！」

ギーシュがうんうんと嬉しそうに、首を縦に振る。

「ヴェルダンデは何せ、モグラだからね。地面の中だと馬と同じくらい速いんだ！」

ジャイアントモール。

それは小さいクマほどの巨体を持つモグラである。

モグラなので地面を掘って進み、その速度は騎乗馬にも匹敵するというが、詳しい事は知られていない。何せ、しっかりと生態を調査した記録が少ないのだ。

あまり使い魔の例としては、ポピュラーではないからかもしれないが。

「早いのはいいけど、行き先はアルビオンよ？」

地面の中を掘って進むモグラを扱いかねたルイズが、反対の意見を述べる。

「港町のラ・ロシエールからどうやって連れていくつもりなのよ？」

ルイズがそう言うと、ギーシュははっとし、膝をついた。

今生の別れのように、モグラに抱きついて泣き出した

「お別れなんて、つらい、辛すぎるよ……、ヴェルダンデ……」

そのとき、何故か巨大モグラが鼻をヒクヒクさせた。
地面をのそのそと歩き出し、くんくんさせてルイズに擦り寄る。

「な、なによ！」

巨大モグラはいきなりルイズを押し倒した。そのまま、鼻で体を
弄り始める。

「や、ちょ、ちょっと！」

「主人に似て、女好きなんかな」

才人がその光景を見つめながらそう呟く。

「あ、や！ちょっとどこ触ってるのよ!？」

ルイズは体をモグラの鼻でつつきまわされ、地面をのたうち回る。
ちよつと官能的である。

スカートが乱れて、下着は必死に本人が抑えているために、見えない。
才人はなんだかその光景を、眩しいものを見るように見守った。

「お待たせしました！」

才人とギーシュが元気の良い声に振り向くと、そこには巨大な背
囊を背負ったアレンが佇んでいた。そして、何故だかキュルケまで
居る。

露骨にルイズが嫌そうな顔をするが、その顔を向けられた当人は
気にしていない。

「よ。アレン」

「アレン君、遅いよ」

エドとリナリーが声をあげる。

アレンは、背囊を馬の鞍に引っかけ、才人の方へ近づく。余りの重さに一瞬だけ馬が、嫌そうな顔をしたが、誰も気が付かない。

「いやあ、アレン」

鼻の下を伸ばした才人が、嬉しそうな顔で語りかける。

「なんだか巨大モグラと戯れる美少女ってのは、ある意味官能的だなと思つてたんですよ」

「君もそう思うだろ？」

才人とギーシュが腕を組んで尋ねる。

アレンは二人の言葉に嫌そうな顔を向けると、モグラに押し掛かられているルイズを見つめた。

「……そんな趣味があつたんですか、二人とも？」

腕を組んで、じとつと批難の視線を向けるアレン。

「バカなこと言つてないで助けなさいよ！きゃあ！」

巨大モグラは、ルイズの右手の薬指に光るルビーを見つけると、そこに鼻を擦り寄せた。

必死になつて、その指輪を守ろうとする。

「この！無礼なモグラね！姫さまに頂いた指輪に鼻をくつつけないで！」

ギーシュが頷く。

「なるほど、指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね」

「イヤなモグラだな」

「イヤとか言わないでくれたまえ」

才人の発言に、ギーシュが顔をしかめる。

「ヴェルダンデは貴重な鉱石や宝石を見つけてくれるんだ。土系統のメイジの僕には素敵な協力者さ」

「便利ですね。金儲けにぴったりですね」

目が\$マークになっているアレン。

そんな風に借金返済を考えるアレン、官能的なルイズを見ている才人とギーシュ。

見ているばかりで、一向に助けの来ないルイズが暴れていると、

「うわ！」

「な！」

突然、一陣の風が舞い上がり、ルイズに抱きつくモグラを吹き飛ばした。

巨大モグラはそのまま地面を転がって、目を回して気絶。

「だ、誰だッ！僕のヴェルダンデにこんな事をしたのは！」

ギーシュが激昂してわめいた。

すると、声に反応するかのように、上空の霧の中から、グリフォンに乗って一人の長身の貴族が現れた。

その男は羽帽子をかぶっている。

才人はその男に見覚えがあった。

「貴様！！ばくのヴェルダンデになんてことをするんだ！」

ギーシュは薔薇の造花を掲げたが、それよりも早く杖を抜いた羽帽子の男は、薔薇の造花を容易く風で吹き飛ばした。

「僕の杖が！」

ギーシュが嘆きの叫びを上げるが、男の方は軽く一礼して、皆に向き直る。

「僕は敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行することを命じられてね」

帽子の男は、手を振りながら弁明する。

「どうも、君達だけでは心許ないらしい」

彼の言葉に少しだけ、ルイズとギーシュは心が痛んだ。

あまり自分達は信頼されていないらしい。その事が悔しかった。

「だが、お忍びの任務であるゆえ、一部隊つける訳にもいかない。そこで僕が指名されたってワケだ」

長身の貴族は、帽子を取ると優雅に一礼した。

帽子の下からは、精悍な顔が現れた。それを見たルイズとキュル

ケが息を飲む。

「魔法衛士隊のグリフォン部隊・隊長を務めさせてもらってる、ジヤン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ。子爵を務めさせてもらっているよ」

文句を言おうと口を開きかけたギーシュだが、相手が悪いと知つてうなだれた。

魔法衛士隊は、全貴族の憧れである。それはギーシュも例外でない。

ワルドはそんなギーシュの様子を見て、首を振った。

「すまない。許嫁が、モグラに襲われているのを見て見ぬ振りばかりでなくてね」

「え？許嫁？」

「……………は？」

アレンたちが固まる。シャナが才人を見る。それに併せたかのように、鞍を付けていた全員の同情が混じった視線が、才人に集中する。

やはり、才人は口をあんどりと開いていた。

「おいおい、歳の差カップルにも程があるダロ」

「犯罪だろ。どう考えても…」

「いや、それよりもネギ君やシャナちゃんに見せたくないんですけど…」

ヒソヒソと見えないようにエドとリンとアレンが、呆れながら密談を始める。

彼以上に見せては成らない存在が、もっと身近に居るのだが、そ

れには気が付いていない。

流石にこれにはギーシュもキュルケも驚いていた。

「なあに？あんたの婚約者だったの？」

キュルケはつまらなそうに言うと、ワルドは頷いた。

「ワルドさま……」

ルイズがワルドに近づきながら言う。

「久しぶりだな！ルイズ！僕のルイズ！」

「うわ、キザ！」

「それはないダロ……」

「変態だ、絶対に変態だ……」

後ろで相変わらず、男三人はひそひそと話し合う。

そんな密談は耳に入っていない、ワルドは人懐っこい笑みを浮かべると、ルイズに駆け寄り、抱き上げた。

「お久しぶりでございます」

ルイズは頬を染めて、無抵抗にワルドに抱きかかえられている。

「相変わらず軽いな君は！まるで羽のようだよー！」

「お恥ずかしいですわ……」

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ワルドはルイズを地面に下ろすと、再び帽子を目深くかぶり言う。

「あ、あの、同級生のギーシュ・ド・グラモンと、キュルケ・ツェルプストー」

そこで一端、言葉を切る。

「後は使い魔達です」

全部、名前を言うのが面倒になったのか、全部纏めて紹介される。適当な扱いに、当然抗議の声が上がる。

「おい、コラ！」

だが、全員の願いは空しくスルーされ、ワルドが気さくな感じで8人を見つめた。

「君達がルイズの使い魔かい？というより8人もいるとは……」

ワルドが驚いた様子で一番、近くに居たアレンに近づく。

「ぼくの婚約者がお世話になっているよ」

「世話にはなってますんよ？」

アレンの言葉にワルドは怪訝な顔をする。

「大体、自活してお金稼いだりしていますから」

につこりと笑って差し出されたワルドの手を握った。

そのふたりのやり取りの中、才人は上から下までその貴族、ワルドを見つめた。

(かつこいい。ああ、こいつかつこよすぎる)

ギーシュは確かに美少年だ。だが、キザで、落ち着きがない。オマケに趣味が悪い。モグラに頬摺りするくらいだから、その趣味の悪さは推して測るべしと言うところだ。

ギーシュは、実のところ、大してモテるとは思えない。
なんというか、マニア受けするタイプである。

(でもな…)

ワルドはかつこいい。正直にそう思う。フェロモンとも言つようなオーラが出てる。

目つきは鋭く、鷹のように光り、形のいい口髭が男らしさを強調している。

(そして…)

才人も羨むほどの、なんとも逞しい体つきだ。

どうも魔法使いというのは、皆ギーシュみたいにヒョロヒョロだと思っていたら、違った。

たぶん彼には、ケンカしたも二秒で捻られるだろう。

(逆にギーシュは二秒で捻り潰してやるけどな！)

才人のそんな思いを受けたのか、

「ぶえつくしゅんッ！」

ギーシュが大きなくしゃみをした。

「あら、ギーシュ、風邪気味？」

「いや違うね。たぶん誰かが僕の噂をしているんだろうね」

鼻の下を擦りながら、キュルケの質問に答えた。

「ワルドさま…」

そんな遣り取りを無視して、ルイズは呟く。

その恋煩いのようなルイズの様子を見て、才人はまた深いため息をついた。

才人のそんな様子を見て、ワルドはにっこりと笑うと、ポンポンと肩を叩いた。

「どうした？もしかして、アルビオンに行くのが怖いのかい？」

豪快に笑いながら言う、彼の言葉に元気付けられてしまう。

「なあに？何も怖いことなんかあるもんか！君達はその『土くれ』のフーケを捕まえたんだろう？」

その事がどうにも才人は悔しかった。

「その勇気があれば、なんだってできるさ！」

そう言い切って豪傑笑いをした。

才人はますます悔しくなった。おまけに人間的にも出来ている。勝てそうなところが一個もない。

(そっかあ、ルイズはこいつと結婚するのか…)

と思つてしまつたら、とても寂しくなつた。

ルイズはというと、ワールドが現れた途端に落ち着きをなくし、なんだかそわそわしている。そのルイズの顔を見ていられなくなった、才人は顔を背けた。

そんなソワソワしたルイズは、任務に現れた余計なお邪魔虫を見つけて言う。

「ツエルプストー。あのねえ、これはお忍びなのよ？」

「お忍び？ だったら、そう言いなさいよ。言ってくれなきゃわからないじゃない」

ソワソワしたままなので、今ひとつ迫力がない。

「何、彼女もフーケを捕まえたメンバーの一人なんだろう？ 居てくれると心強いじゃないか！」

そう言われては、ルイズに反論の仕様が無い。ふふんと大きな胸を張るキュルケを、恨みがましい目で見ると。

問題が解決したのを見届けたワールドは、ため息を付いて、ひらりとグリフォンに跨り、ルイズに手招きした。

「おいで、ルイズ」

ルイズは少し躊躇うようにして、俯く。

彼の言葉は、見ていた面々をドン引きさせたが、気が付いていない。

だが、その仕草は恋する乙女に見えて、才人を激しくやきもちさせた。

(なにあいつ!?)

思いつきり、叫びたくなった。

(おいでって何?、どういうこと?)

だが、ここで叫ぶのは男としてのプライドが許さなかった。

才人は一応男の子だったので、悔しくても耐えた。歯を食いしばり、黙ったまま、自分の馬に跨る。

「ワルドさま…」

ルイズはモジモジしながらも、ワルドに抱きかかれ、グリフォンの跨った。

ワルドは手綱を握りしめ、杖を掲げて叫んだ。

「では諸君！出撃だ！」

グリフォンが先頭に立ち駆け出す。

ギーシュも感動した面持ちで、後に続く。

アレンは欠伸を一つかまして、後に続く。その後ろにはリナリーとネギが乗る。

エドは神妙な面持ちで、後に続く。その後ろには錬成銃を持ったウインリイが乗る。

キュルケが嬉しそうな顔で、後に続く。真剣な顔をしたシャナが後ろには居る。

才人はがっくりと肩を落として、後に続いた。

「ガツクリとすると、落ちるゾ」

追い討ちを掛けるかのように、後ろに乗ったリンに言われた。彼

は曲芸のように馬に跨っている。

アンリエッタは出発する一行を学院長室の窓から見つめていた。目を閉じて、手を組んで祈る。

「どうか、彼女たちに、御加護をお与えください。始祖ブリミルよ………」

隣では、学院長のオスマンが呑気そうに鼻毛を抜いている。

普段の学院長としての威厳はどこへやら。いろいろと全てが台無しに成ってしまっている。

姫さまの目の前で鼻毛を抜く人なんて、この人以外にこの国ではないかもしれない。寧ろ、恐れ多くて出来ないだろう。

「見送らないのですか？オールド・オスマン」

「ほほ、姫、見てのとおり、この老いばれは鼻毛を抜いておりますのでな」

「……………」

アンリエッタは、呆れて者が言えなかった。傍に居るマザリーニも、やれやれと言った様子で頭を振った。

そんな風に不思議な緊張感が漂う学院長室。ふとコンコンと規則正しく、ドアがノックされた。

アンリエッタは扉の方へと顔を向ける。

「入りなさい」

オスマンは顔を向けず、そのまま鼻毛を抜く手を止めずに、そう言う。

「いいいい、一大事ですぞ！お、オールド・オスマン！」

叩いた時は丁寧だったのに、入った瞬間に慌てた様子のコルベール。

まさに飛び込んできたという表現がぴったりの様子で、障害物の無くなった学院長室へ突撃する。

「きみはいつでも一大事ではないか……、どうも君は慌てんぼでいかんのう」

その狼狽振りを、少しばかり煩わしく思い、オスマンは顔をしかめた。

「慌てますよ！！わたしだってたまには慌てます！城からの緊急の知らせですぞ！」

「たまにじゃなくて、いつもじゃろう……」

ふうつとため息を付いて、ようやく鼻毛を抜く手を止める。

ガサゴソと引き出しの中を漁り、水キセルを銜えてから、話を促す。

「まあいい、話したまえ」

「チエルノボーグの牢獄から、『土くれ』のフーケが脱獄したそうですー！」

「ふむ……」

オスマンは、口髭を捻りながら唸る。
そんなのんびりした様子のオスマンに、コルベールは更に口調を荒げて続ける。

「門番の話では、さる貴族を名乗る怪しい人物に『風』の魔法で気絶させられたそうです！」

バンバンと学院長の机を叩きながら、喚きまくる。
だが、彼の話は、今回も火急の知らせだった。

「魔法衛士隊が、王女のお供で出払っている隙に、何者かが脱獄の手引きをしたのですぞ！」

もしこの情報が真実ならば、

「つまり、城下に裏切り者がいるということですよ！これが一大事ではなくてなんなのですか！」

アンリエッタの顔が蒼白になる。
そして、そのまま彼女は、机に手をついて、ため息をついた。
聞いていたマザリーニも、奥歯を強く噛む。

「城下に裏切り者が！」

蒼白な顔のまま、取り乱すアンリエッタと、

「アルビオン貴族の暗躍か…？」

対照的に冷静に事実を分析し始めるマザリーニ。

この対照的な二人が、今のトリステインを危うくしているのだが、

哀しい事に片方に自覚が無い。

「そうですね！オールド・オスマン！」

「そうかもしれませんな」

オスマンは、煙を深く吐きながら、呑気にそうに言う。
その様子を見たアンリエッタは、立ち上がって叫ぶ。

「トリステインの未来がかかっているのですよ！」

ハラハラと気が気でない姫は、更に取り乱す。

「なぜ、そのような余裕な態度を！」

「そうですね！オールド・オスマン！こんな時にその態度は幾らなんでも！」

バンバンと叩きながら、コルベールが抗議の声を上げる。

だが、その二人を窺めるように、静かな声でオスマンは言った。

「すでに杖は振られたのじゃ」

その声は冷静で、素晴らしく落ち着いた声だった。

「我々にできることは、ただ待つことだけ……違いますか？」

「そうですね……」

その静かな威厳には、流石にアンリエッタも黙るしかなかった。

「なあに、あの彼らならば、道中どんな困難があろうとも、やってくれますでな」

「彼らとは？」

「聞いていきなりだが、思いついたようにアンリエッタは言う。

「あのギーシュとワルド子爵が？」

オスマンは静かに首を振った。

「ならば、あのルイズの使い魔たちが？」

「まさか…、彼らはただの平民では？」

確かに、銀髪の少年の交渉術はマザリーニも管を巻いた。

だが、到底魔法を使える貴族に勝てる道理はない。二人はそう思っていた。

そんな二人を説得するように、オスマンは言葉を紡ぐ。

「姫は始祖ブリミルの伝説をご存知かな？」

「通り一編のことなら知っていますが……」

オスマンにはっこりと笑う。

「では『ガンダールヴ』のくだりはご存知か？」

「始祖ブリミルが用いた、最強の使い魔のことですよね？」

そこまで言って、機と気が付いた。

「…まさか彼らが！？」

オスマンはここまできて、迂闊にも喋りすぎた事に気づいた。

『ガンダールヴ』のことは、今の所は自分の胸一つに収めている。

アンリエッタが信用できないわけではない。だが、まだ王室のものに話すのはまずい。

そう思っていた。最悪、待ち受けるのは彼ら9人とトリステイン軍の全面戦争。結末の解り切った9人のソリティアでしかないゲームだ。

「えーと。おっほん」

話題を変えるかのように、業とらしい咳払いを挟む。

「とにかく彼らは『ガンダールヴ』並みに使えると、そういうことですな。うん」

だが少しだけ、明かしておく。自分が信ずるに足る根拠を。

「…ただ、彼らは異世界から来たのですじゃ」

「異世界？」

「異世界とな？」

聞きなれない単語にアンリエッタも、マザリーニも怪訝な顔をする。

いきなり聞かされた言葉に、コルベールはワクワクした。

「そうですじゃ」

再び、水キセルを吹かす。

「ハルケギニアではない、どこか。ここではない、どこか。そこからやってきた彼らならばやってくれると、この老いばれは信じておりますでな」

笑う顔には、信頼が滲んでいる。

「余裕の態度もその所為なのですじゃ」

オスマンには、この部屋で見た6つの顔を思い浮かべていた。彼らならやってくれる。

長いこと生きてきた勘がそう訴える。

「そのような世界があるのですか……………」

アンリエッタは、遠くを見るような目になった。

「ならば祈りましょう……………異世界から吹く風に……………」

飛び立った彼らを止める術は無い。

もう姫には祈るしか、方法は無かった。

移り行く年月の末に高昇る愛の中、種は芽吹く。

波乱と、変転と、野望を抱えた、別離の花は咲き誇る。

そして、世界は、動き出す。

34・Viscount Wind（後書き）

第三章、完結であります。姫の来訪から、アルビオン出発までです。天空の王国で待ち受ける、試練と出会いは第四章へと回したいと思います。

第四章は白の国の冒険、そして別働隊の冒険譚です。

EDは「Diggy・More Stay Beautiful」、浦原V.O.でお楽しみ下さい。

バックコーラスは胸の大きな皆さんにお任せしたい所です。

S P · W h i f f s t o r y s

?料理長VS大食漢

「つたく、幾ら食うんだよ…」

そう言いながらトリステイン魔法学院の料理の一切を預かる、マルトー料理長は頭を抱えた。

目の前にはパーティーの時しか使われた事の無い大皿が、いくつも積み重なっている。

「あー、次は未だですか？」

そう言ってあどけない顔を向けてくるのは、ルイズの一応使い魔の一人、銀髪のアレン・ウォーカーだ。彼は常人には考えられない程の圧縮率で、目の前に置かれた料理を平らげていく。

ちょうど今、10枚目のステーキを食べ終わった所だった。

最早、食べるというよりは飲むという表現の方が近い。

「ん、もういいかな…」

そう言うアレンに、マルトーは内心ホツとする。

この男が来てから、残り物はなくなってしまった。多少残されたも、アレンが残さず食べてしまうからだ。だが、食材の消費量は倍増してしまった。

「じゃ、次はデザートを持ってきてください」

事も無げに言うアレン。

流石に、これを聞いたマルトーは、

「も、もう無理だ…」

「親父!」「料理長!」「マルトーさん!」

厨房の床に倒れ伏してしまった。

料理人と大食漢のプライドを掛けた試合。現在の勝敗、アレン1
5連勝中。

?リゾート気分

ドライブオマ魔法球のオポジションとして、南国の別荘がある。

燦爛と照りつける太陽、白い砂浜、青い海。まさに真夏の海である。

「いやつうほう!」

「わわわ!」

はしゃいで海へと飛び込む才人。

一緒に彼の右手にパーカーの襟を掴まれたネギも、勢い良く飛び込んだ。

「つたく、はしゃぎやがって…」

暑い海を満喫する才人をぼんやり見ながら、一護は石で作られた東屋の下、トロピカルドリンクに口をつける。すっと氷に冷やされた感触が喉を通り過ぎる。

焼く気もない、海で逸る気にもなれない彼は、こうしてチャチャの入れてくれるドリンクに舌鼓を打っているのだ。勿論、海なので、下は半ズボンタイプの水着に、上は薄手のパーカーだが、少し横になろうと、サングラスをずらした彼の耳に、

「お待たせ」

女性特有の色っぱさを混ぜた声が聞こえて来た。
ちらりと首だけを曲げて見ると、そこには、

「何よ、あんまりじろじろ見ないでよ」

ストレートの髪を後ろに払い、海辺に屹立するシヤナ。
輝く陽光に照らされて、その小柄さを感じさせない存在感を辺りに振りまいている。

肩ほどの長さの髪を綺麗に纏め、ビーチボールを抱えた夏梨。

白い砂浜の照り返しを受けて、その倦怠感を感じさせない澆刺さを辺りに振りまいている。

ウエーブの掛かった髪を丁寧に整え、恥ずかしそうに立つルイズ。
青い海のきらめきを得て、その乱暴さを感じさせない優雅さを辺りに振りまいている。

「ふうん…」

但し、最初に見せた相手が悪かったとしか言い用が無い。

一護はのんびりとした口調で、そう呟く。

「な、ちょっと！少しは感動してよ！」

折角恥ずかしい思いをして肌が露出するような水着を着ているの

に、この反応の薄さ。

正直、ルイズは怒りたくなかった。

だが、これには筆者も同感である。

何せ、三人が三人ともセパレートの水着のデザインの洒脱さを空しくする程に、余りに無残な平面を露にしていたからだ。

「ちょ、ちょ、ちょっと！何、上の言い草！」

「いや、まあ、当然の事か…」

噛み付くルイズ。

自分の体のことは良く解っている夏梨は、冷静に物事を見ていた。

「まー、そう怒るな」

そう言っで一護同様に、東屋で休んでいたカモが声を掛ける。

オコジヨは寒帯や高山に住む動物だ。どうしても暑さには弱い。

「そんな、嬢ちゃんたちにいいモンがあるぜ」

そう言っつて傍に置かれた袋をゴソゴソとまさぐる。

「コレ！」

「何よ…、コレ？」

ルイズが見たのは、赤と青の二色で分けられた丸い飴のようなものだった。

「紅い飴玉、青い飴玉、年齢詐称薬」

どこかのネコ型ロボットの効果音が聞こえてきそうだ。

「何よこれ？」

「早い話が、体を大人っぽくしてみたり、子供にしてみたりする薬だな」

カモが薬の解説を始める。

「赤で大人に、青で子供になれるぜ。飲んでみないか？」

ただ、この白い悪魔の誘いに乗ったのは、ひとりだけ。

「飲むわ！」

そう、ルイズである。

躊躇う事無く、紅い飴玉を十個も取り出し、

「あー！」

「えい！」

カモが止める間もなく、一気に噛み砕いてしまった。

「おーい、何やってんだ？」

そこへ運悪く才人が帰ってくる。

「あ……」

「あ……」

そこには大きくなってしまって、元の水着が着れなくなってしまったルイズの姿が。

早い話が今、彼女は生まれたままの姿なのである。
勿論、才人がボコボコにされたのは言うまでも無い。

？ギャンブラーの才覚

「トランプしません？」

そうやって53枚のカードの束を出してきたのはアレンだ。
一枚一枚ちゃんと1から13の数字が書かれていて、4つのマー
クが振られている。典型的なトランプだった。

「いいぜ、何するんだ？」

彼の申し出を二つ返事で真っ先に受けたのは、一護。
追従するようにリンと才人も加わった。

「ルールはシンプルにポーカーでいいですよね？」

全員が頷く。正確に正方形に切られたテーブル、その4辺に4人
が付く。

「オープン・ザ・ゲーム！」

丁寧に、慣れた手つきでカードを繰るアレン。
その手をじっと3人は見ている。

「じゃ、配りますよ。交換は一回でお願いしますね」

そう言って5枚ずつ配る。皆、一様に真剣な目でそのカードの行方を見守っている。

「さて…」

一護の手札はスペードの4、5、6。そして、ハートの6と10だ。

悪くない手ではある。初手からワンペア来ているなら、後は相手の出方次第だ。

「フム…」

リンの手札はハートとクラブのエース。そして、ハートの3、スペードの7、ダイヤの2だ。

どうとでも出せる手ではある。高い役も狙える。

「……………」

才人の手札はクローバーの2、ハートの7、クラブの6、ダイヤの9、クローバーの11だ。

完全なフダ。破れかぶれで全交換という選択肢もアリかもしれない。

（さって、どうでしょうか…？）

イカサマギャンブラー、アレンの手にはジョーカーがある。そして、ダイヤとクラブの3。

後の2枚はどうでも良いので無視しておく。手には、まだ何枚か仕込んである。

「僕はノーチェンジ」

「!」「?」「!」

三人の間に衝撃が走る。アレンが真っ先にホールドした。

アレンは堅実的で、バレにくいスリー・オブ・ア・カインドで勝負に出た。

これから上の手役は加速度的に、成立の可能性が狭まる。まず負ける事は無いだろう。

「じゃ、俺は3枚交換だ」

一護。新しくクラブの8とダイヤの4、スペードの9を入手。結果は2ペア。

「俺は2枚」

リン。結局、残した2とエースと揃う事はなかった。結果は1ペア。

「ええい、全部交換だ!」

「!」「!」「!」

才人。全部を交換する。

結果は、

「オープンカード!」

アレン。3のスリー・オブ・ア・カインド。

一護。4と6の2ペア。

リン。エースの1ペア。
才人。

「え？」

「おいおい……」

「ま、こんな事も……」

スペードのロイヤルストレートフラッシュ。
才人の完勝である。
ちよつとだけ、才人は嬉しくなった。

？草原のお昼寝

一護はここに来てからというものの、修行や手伝いの無い時には、
昼寝をするようになっていた。

元の世界に返れば、受験戦争真っ只中の高校三年生であるのだが、
勉強の役に立つ教科書がある訳でもないのに、何となく目的を見失
ってしまったのだ。

幸いな事に、英語だけは専門家ネセがいるので、彼の暇な時を見つけ
ては教えてもらっている。

「くわ……」

大きな欠伸をして、ごろんと草原に寝転がる。
大きな布製のマットを敷いているので、服が汚れる心配も無い。
春の心地よい陽気に誘われて、直に眠りの世界へと旅立って行っ
てしまった。

「あ！」

眠りこけた兄を見つけた夏梨。
傍にトトトと近寄って、ぺたんと座り込む。そしてそのまま横になる。

「くかー」

可愛らしい寝息を立てて、直に寝てしまう。
春の陽気に誘われたのは、夏梨だけではなくて。

「むう、私も寝る……」

何となく倦怠感を感じていたシャナも。

「……」

本を読み疲れたタバサも。

「お昼寝ですか。いいですね」

何となく外へ出てきたネギも。
皆揃って、寝てしまった。

日が少しばかり傾きかけて、

「んん……」

一護は目を醒ました。寝ていたはずだが、体が重たい。見れば自分を挟み込むように4人も寝ていた。4人とも心地よさそうに寝ている。

「ふう…、やれやれ」

ため息を付いて、マットを4人を上にしたまま纏めて仕舞う。そのまま担ぎ上げ、寮の方へと向かった。

35・The Sun in the distant mountains

第四章開始です。

天空の国で待ち受ける大冒険。それと地上で繰り広げられる、怪死事件の全容。

2チームの行方はどこにあるのか。

OPはユンナ「儂く強く」

「ん…」

瞼の奥も焼くような赤い光を受けて、一護は目を覚ました。
座ったまま寝ていたためか、体の節々が痛い。

「あ、起きた」

赤い光と風に煽られた髪を押さえながら、夏梨が覗き込む。
沈みかけた太陽が、頬を紅く染めている。

「もう夕方か…」

二人はタバサと一緒に、彼女の使い魔であるシルフィードに乗って上空、三千メートルを飛んでいた。

下を見渡せば、赤に染まる雲海が広がる。時折、雲の切れ間を裂いて、広がる緑や、多々の村や街の灯がポツポツと星空のように繋がっている。

「お姉さま、お姉さま」

そんな時、青い鱗をきらきらと輝かせて、シルフィードが主人を呼んだ。

タバサは本から目を離さずに呟く。

「なに………?」

「お姉さまお相手して。シルフィのお相手して。きゅいきゅい！」

顔に似合わぬ可愛い声で、シルフィードはタバサを首だけ向けておねだりする。

昨晚、魔法学院を出発してからどれだけの時間が経ったのか。要するにシルフィードは暇なのだ。

だが、伝説の幻獣である風韻竜のシルフィードがおねだりしても、タバサは本から一ミリも目を離さなかった。

ばっさり、

「いやだ」

とタバサは一言。

どうやらタバサは本に夢中なようだ。いつその事、本と結婚した方が幸せなのではと勘違いしてしまうほどの集中力。

「むー！」

シルフィードはタバサに構ってもらえなかったため、しょんぼりとしていたが、すぐに気がついたように顔を後ろに向けると、嬉しそうに声をかけた。

「そうだった！そうだった！イチゴとカリンがいたね！」

相変わらず、主人とは真逆の位置にいるようなテンションで叫ぶ。

「きゅいきゅい！お相手して！シルフィのお相手して！きゅい！」

シルフィードに呼ばれた一護と夏梨は、背びれに預けていた体を持ち上げると、胡坐をかいたまま、寝起きの重い目でその青い竜を見つめる。

「こんな所で何すんだよ……」

「そうだよ、私たち飛べないもん」

「むー！」

二人にも構って貰えなかったシルフィードは、膨れて拗ねてしまった。

「で、そろそろ何処行くか話してくれてもいいんじゃないか？」

段々と赤から青に変わりだした雲を見ながら一護が機長に尋ねた。そろそろ日没だ。どこへ向かうのかは知らないが、宿や明日からの行動方針もある。何よりもシルフィードの体力が不安だ。魔法学院からここまで確りとした休息も無い。

くるりと機長タバサが乗客の二人を見る。

「これ、見て」

そう言ってマントの下から巻物スクロールを取り出した。広げられた巻物スクロールには、色々な記号が書き込まれた絵があった。

「これはハルゲギニアの地図」

トントンと白い指を叩きながら、解説を始める。

一護の背中に乗りかかって、夏梨も地図を覗き込む。

「トリステインとゲルマニア、ガリアの大陸の3ヶ国の街が載ってる」

「へえ……」

何処と泣く海岸線はヨーロッパに似ている。一目見た二人は、直感的にそう感じた。

測量技術が完成していないハルゲギニアでは、海岸線を何となくで現している。そのため、実際の地形とは、大きな齟齬が生まれているのだが、気にされていない。

尤も此方のガリア文字でふられた、都市の名前は聞いた事も無い名前が並んでいたが。

「この大きな丸が各国の王都」

トントンと三つの大きな丸を叩く。

一つは一護たちも一度行ったトリスタニア。その東側にあるのがゲルマニア帝都のウインドボナ、南側はガリア王都のリユティスである。

「今、私たちはこの山脈の麓へ向かっている」

ずっとリユティスから更に南西へと指を滑らせる。

そこには他の場所とは違う茶色で書かれた場所があった。どうも茶色は山脈を現しているらしい。同じように描かれた南東にも山脈があった。

「この南東の山脈を越えると、ロマリアになる」

ガリア南東の山脈は多くの火山が立ち並び、不毛の大地となっている。そうやって付いた名が火竜山脈。まるで臥した竜の背のような形になっていることが由来だという。

キュルケの使い魔であるフレイルムも、ここから召喚された。

そして、南西の山脈の向こうにも王国が存在している。

「カステイリヤという王国がある。でも、3ヶ国との交流は無い」
「何で無いの？」

夏梨が尋ねる。

「山脈が険しくて、何よりも魔獣の巣」

南西の山脈は木々が生い茂り、その木を隠れ蓑のにして通行人を襲う魔獣が多い。

中にはまだ知られていない魔獣も生息しているらしく、立ち入る人もいないという。海路という手も無くは無いが、航路開発されていないのが現状だった。

「ふうん…」

感心したのか、興味を無くしたのか。どちらにでも取れるため息を一護は吐く。

「この山脈の麓、トゥーリーワースと言う街に向かっている」

そう言っって山脈近くの丸を指差した。

「今回はここで起きている怪死事件を調査する」

言っている事は重大なのに、どこか緊張感が無い。

正確には、タバサの感情が薄すぎて、緊迫感が削がれていると言った方が正しいだろう。

「ん、解った」

「了解！」

短く肯定するが、一護も夏梨も腑に落ちない点があった。
何故、そのような事件をタバサのような一介の学生が調査するの
だろうか。

（見た目は子供、頭脳は大人…？）

（こつ見えて、実は名探偵とか…？）

二人の心配を他所にタバサは再び、本を読み始めた。

竜に乗り、トゥーリーワースへと向かう三人とは別方向に進むル
イズ達、名目上はアルビオンへの親善大使の一団は、

「はあ、はあ」

「ぜー、ぜー」

完全にへばっていた。

正確に言うと、才人とギーシュだけがへばっていた。

他の面々は、楽しげに談笑してみたり、ゲームに興じてみたり、
アレンやリンに至っては、馬上で曲芸を披露していた。

「ちょっと早くない？」

抱かれるような格好で、ワルドの前に跨ったルイズが言った。こ
こまでの間に、ルイズの口調は畏まったものから、段々と昔の砕け
た調子に戻っていた。

「困ったな、今日中にはラ・ロシエールへたどり着きたいんだが…」
早朝に魔法学院を出発して以来、ワルドたちはフルスピードでグリフォンと馬を疾駆させていたので、夕方にはラ・ロシエールの入り口についた。

後ろに続く、彼らの乗っている馬は今の馬で三匹目である。あまりの速度に途中で馬が潰れてしまい、駅で二回も馬を換えたからである。

だが、馬は換わっても、乗り手は換わらない。今度は馬より先に、乗り手の方が参ってしまった。

「普通は無理よ。二日は掛かる距離なのよ」

「へばったら置いていけば良い」

さらりというワルドに、ルイズは困ったように反論した。

へばっているのは才人とギーシュだけなので、他の面々は間違はなく付いてくるだろう。嫌々でも。ただ、リナリーやネギに到っては、馬に乗るよりも、自分で走った方がよっぽど速い。

ネギの杖は150キロ。馬の3倍。

リナリーに到っては音の速度に匹敵する。到底、生物では成し遂げられない。

「そういうわけには行かないわ」

「どうしてだい？」

人懐っこい笑みで聞き返すワルドに、今度はルイズが困ってしまった。

彼はそんな事は、全く知らされていない。勿論、ルイズにも彼ら秘匿しているので、全く聞いていない。

「使い魔を放っておくなんて、メイジのする事じゃないわ」

そう言われたワルドは、少し拗ねるような口調で、

「嫌に彼らの方を持つね。もしかして、彼らの誰かが、君の恋人なのかい？」

笑いながら言った。

「こ、恋人なんかじゃないわ！」

ルイズが顔を赤らめる。

「そうか、それなら良かった！」

かなり嬉しそうな様子で、ワルドがはしゃぐ。

少しばかり、子供っぽいような調子がして、どうにも調子が狂ってしまう。

「婚約者に恋人が居るなんて知ったら、ショックで死んでしまうよ」「こ、婚約者なんて…」

言っているルイズの口は上手に回っていない。

婚約者とは言っても、彼女の父が気まぐれに言ったような口約束程度のものでしかない。それなのに、ワルドは信じて、若くして近衛の隊長の座にまで上ったのだ。

「別に、私じゃなくても…」

「何、この旅は良い機会さ」

何事か言いかけたルイズの反論を止める様に、ワールドが笑いながら言った。

「この旅が終わったら、きっと君は昔みたいに戻るさ」

「くそ……」

才人は恨みがましく、先行するグリフォンを見た。

潰れた馬とは違って、グリフォンは疲れを見せずに走り続けた。乗り手と同じく、タフな幻獣である。対極に才人やギーシュはぐったりとして、馬に跨っていた。

肩で息をし、かなり疲れが見えている。

「もう半日以上走って着いたってのに、どうなってるんだ……」

段々と赤から青へと色を変えだした空を見ながら、ギーシュが呟く。

「魔法衛士隊の連中は化け物なのかい……？」

ぐったりとして馬に体を預けながらも、隣に行く才人に疲れた声をかけた。

彼もまた、同じようにぐったりと馬に上半身を預けている。

「知るか……」

才人は疲れた声で言った。

彼はここまでの旅の道中、時折前に行くグリフォンの上で、ワルドがルイズを、まるで恋人のように肩を抱いたりしていたのが、正直、気が気でなかった。

（まあ婚約者だから…！仕方ないが…！せめて俺の見えないところで…！）

ギリギリと歯噛みしながら、才人は思った。

そんな風に考えているのが伝わったのか、ギーシュがニヤニヤと笑いながら、更に才人の疲れと怒りを倍増させるような事を言うてしまう。

「ぷ、ぷぷ…」

含み笑いをしている。その後続く言葉が解ってしまつて、才人は更にイラ付く。

「もしかして、きみ……、やきもち焼いてるのかい？」

「あ？どーゆー意味だ！」

才人はガバツと馬から身を起こす。

どういう意味も、そういう意味しかない。彼を見ていた一同の心は一致した。

「あれ、当たった？もしかして凶星？」

ギーシュはさらにニヤニヤと笑う。

「黙ってる！モグラ野郎」

そう叫ぶが、ギーシュの口は止まらない。

「ぶぶ、ぶぶぶ。ご主人様に、適わぬ恋を抱いたのかい？」

ニタニタと笑っているギーシュの顔。

それに併せるかのように、後ろに居るリンも笑っている。糸目だから解り難いが、才人は確実に解った。この場で馬から叩き落したくなった。

「いやはや！悪いことは言わないよ。身分の違う恋は不幸の素だぜ？」

確かに、ギーシュの言う事は一理ある。

古今東西、小説や御伽噺の中でも身分違いで大恋愛の末に結ばれた物語は多い。

だが、問題なのはその後だろう。抱えている価値観の違いというのは、そう簡単には埋められない。

「しっかし、君も哀れだな！」

「うるせえ。あんなやつ、好きでも何でもねえや」

ぶいっとそっぽを向く。

「ま、確かに顔はちょっと可愛いけど、性格最悪だし」

だが、これは精一杯の彼なりの強がりである事は明白だった。ギーシュは前を向くと、驚いた声で言った。

「あ！キスしてる」

才人はギョツとして、前を見る。

ゴシゴシと目をこらして見てみるが、二人はキスなんかしていない。

ギーシュを見ると、口を押さえて笑いをこらえている。シャナは相変わらず無表情だが、女性陣は爆発しそうな笑いを堪えている。アレンとエドは興味無さそうに見ている。

要するに、単純にからかわれたのだ。

「ぬおおッ！！！」

「うわ！！」

才人はうなり声をあげてギーシュに飛びかかった。

二人は馬から見事に転げ落ち、取っ組み合いを開始する。

「何してんだ…？」

そんな二人を見下ろしながら、エドが疲れを残した声で言う。

「こら！置いてくぞ！」

前の方からワルドの怒鳴り声がしたので、ギーシュと才人は慌てて馬に跨る。

才人は、ルイズがこっちを見ていることに気づいた。

唇が動いているのが解ったが、この距離では声までは聞き取れない。

じつと批難されているような彼女の視線に目が合ったので、才人は思わず顔を背けた。

そんな二人をアレンは、ため息を付いて交互に見る。

「前途多難ですね……」

「何がですか？」

彼の前に乗っていたネギが聞いてくるが、優しく彼の頭を撫でて答えるのはやめた。

後ろでリナリーがくすつと小さく笑っているのが、解った。

「しかし……」

キヨロキヨロと街道を進む馬の上から、周囲を才人は見渡す。

先程から、「もうすぐだ」とワルドがしきりに繰り返すのだが、幾ら街道を進んでも、海など見えてこない。潮の香りも漂ってこない。

アルビオン行きの船が出る「港町」と才人たちは聞いていたのだが、海が見えないのはおかしい。

寧ろ、ドンドン山が深くなっていく。

「なあ……」

「何だい？」

いくら走れど周りには山である。

寧ろ、段々谷に誘い込まれているような気がする。

「なんで港町なのに山なんだよ」

才人は自分でも知らず知らずに、そう呟いていた。

アレンもその呟きに、

「そういえば……」

と反応を返した。

そんな二人の言葉に、ギーシュが呆れたように言った。

「君たちは、アルビオンを知らないのかい？」

「知らないです」「うん」「ええ」

丁寧に返すアレン達。

「知るか、ボケ」「話してないダロ」

矢鱈と乱暴に返すエドとリン。

「まさか！というか、ボケって……」

ギーシュは笑ったが、才人たちは尚も首を傾げる。

「では、君たちのために僕が説明しよう……」

ギーシュが、歌劇のように薔薇を振りながら、そう言った時だった。

ふわっとアレンの銀髪が逆立つ。

「何か来ます！」

「え？なにがですか？」

アレンが全員に伝わる大声で叫ぶ。だが、才人とギーシュは状況をつかめず、首を傾げる。

才人たちの跨った馬めがけて、崖の上から松明が何本も投げ込まれた。火を灯された松明は赤々と燃え上がって、才人たちの周りを

照らす。

「な、なんだ!?!」

ギーシュがどなる。

いきなり飛んできた松明の炎に、戦の訓練を受けていない馬が驚き、鳴き声をあげて前足を高々とあげた。

「わわわ!」

「こら、暴れ…!」

止めようとしても遅い。

馬が反り立った反動で、才人とギーシュは馬から投げだされ、尻餅をついた。

アレン達は暴れる馬から、しゅったつと器用に跳び降りる。

だが、その隙を狙って、次々もの矢が地面に力力カツ!と突き刺さる。

「奇襲だ!」

ギーシュが喚いた。

だが、そんな事は言われなくても解っている。降り注ぐ矢の雨を、皆華麗な動きで全て避ける。

「は!」

降り注ぐ矢を避けたシャナが敵の方へ人間離れたスピードで地を蹴って走り出す。

才人も慌てて、背負ったデルフを握ろうとしたが、遅い。

既に第二波の矢が、才人とギーシュめがけて殺到した。

「わっ！」

才人とギーシュはもはやこれまでかと、目をつむった。

そのとき、一陣の風が舞い上がり、才人とギーシュの前の空気がゆがみ、小型の竜巻が起こる。その竜巻は飛んでくる矢を巻き込むと、あさつての方に弾き飛ばした。

二人が風の発生した方を見ると、グリフォンに跨ったワルドが、杖を掲げていた。

「かかれ！」

そうやって一団を挟み込むような形で、剣や斧を構えた鎧姿の男たちが現れた。面を覆うようなかぶとを付けていないので、表情が良く解る。皆、欲望に取り付かれた目をしていた。

それに向かって、アレン達が鉄拳を叩き込む。素手なのに、何故か鎧は凹み、歪んでいた。

リンやウインリイもその持てる力を振るう。その攻撃は、鎧の覆われていない部分に減り込み、赤い飛沫が飛んだ。

キュルケもまた、火の呪文を唱え、放つ。煽られた傭兵達は方々の体だ。

「大丈夫か!？」

ワルドの声が才人に飛んだ。

「だ、大丈夫です…」

そう言って立ち上がるが、内心は恥ずかしかった。

(うう、ルイズの婚約者に助けられた!!)

情けない気持ちぐむくと才人に膨れ上がる。

アレンや、自分より年下で、更に女の子であるシャナすらも敵を軽々と蹴散らしていて、自分は何もしていかないばかりか、助けられた。それも自分が一番嫌いな相手にである。

そんなことが、才人の劣等感を刺激した。

更に、それを刺激するように

「すごい…」

皆が一人、また一人と傭兵達の意識を刈り取っていく。

隣を見ると、驚いた表情で傭兵達をなぎ倒す7人を見るギーシユもいる。

「化け物並みの強さだ…」

そんなことを言いながら、才人は背中の中のデルフを引き抜いた。

左手のルーンが光る。くたくたに疲れていたが、体が軽くなつたことで、疲労感が幾らか軽減された。チラリと高速で動き回るエド達の左手も光っていた。

「相棒、寂しかったぜ……」

引き抜いたデルフリングァーが最初からスロットル全開で喚きだす。

「全く俺の出番が遅せよ。鞘に入れっぱなしはひでえや!」

才人は目線を崖の方に向けた。今度は何故か矢が飛んでこない。

「夜盗や山賊の類か？」

矢が飛んでこなくなった事を、危険視しているワルドが呟いた。ルイズが、はっとした声で言った。

「もしかしたら、アルビオンの貴族の仕業かも……」

「貴族なら、弓は使わんだろう」

ルイズの予測は、まずありえないと考えたワルドが否定する。ひよっこりと崖の上からシャナが顔を出す。

「上の奴らは全部倒した」

「そう……。ならこれで！」

ぼつと杖の先に灯った火球を最後の傭兵に放った。焼かれた傭兵もまた逃げ出す。

「終りね！」

キュルケはそう言って倒れている男たちを指差した。

ほとんどの男たちは、ありきたりな捨てゼリフを残して逃げたが、怪我をして動けない男たちはヒモで縛られ、口々に罵声をルイズたちに浴びせている。

「さて、色々と聞かせてもらおうよ……」

ギーシュが訥々とその男たちに尋問を始めた。だが、慣れていないのが声が若干震えていた。

何事か言いたそうなルイズは腕を組んで、キュルケを睨む。

「勘違いしないで。あなたを助けたわけじゃないの。ねえ？」

キュルケはしなをつくと、グリフォンに跨ったワルドににじり寄る。

「おひげが素敵よ。あなた、情熱はご存知？」

しかし、ワルドは、チラッとキュルケを見つめて、左手で押しや
った。

「あらん？」

「助けは嬉しいが、これ以上近づかないでくれたまえ」

取り付く島のない、ワルドの態度であった。

今まで、こんな冷たい態度を男に取られたことはなかった。

どんな男でも、自分に言い寄られたら、どこかに濃淡はあれども
動揺の色を見せたものである。例えそれが、彼女や婚約者がいても
変わらない。

しかし、ワルドには、それが全く、ない。キュルケは口をあんぐ
りと開けて、ワルドを見つめた。

「婚約者が誤解するといけないのでね」

そう言っつてルイズを見つめた。勿論、ワルドの優しそうな目に見
つめられたルイズの頬はかあつと紅く染まった。

キュルケは、ワルドをじっと見る。遠目ではわからなかったが、
目が冷たく、まるで氷のようだ。

彼女は思いつきり鼻を鳴らす。少しばかり、ルイズをからかう程
度の心算だったのだが、この調子では面白くも何とも無い。

(なにこいつ、つまんない！)

からかいでもなく、本気でもなく、ただ単純にそう思った。
アレンの銀の瞳も、その時のワルドの目を見ていた。正直な話、
彼らはワルドを信用していなかった。

「どうしたの、アレン君？」

後ろからリナリーが声を掛けてくるが、ずっと手で制した。
彼女もどこかほの暗いワルドの視線を疑っていた。

「どうしたのよ、二人とも？」

そんな風に怪訝そうに睨むアレンとリナリーを見たキュルケが近
寄る。アレンのほうも何事か言おうと思ったが、どこまで話すべき
か逡巡しているように見えた。

それを見たルイズは唇を噛んだあと、怒鳴ろうとした。

ツエルプストーの女に、使い魔が取られるのは我慢できない。本
人達はその気は全く無いのだが、真剣に話している二人を見ている
と、そう思ってしまった。

(何よ！主人はこっちでしようが！)

そんな怒りを抑えるように、そっとワルドがルイズの肩に手を置
いた。

ワルドはルイズを見て、にっこりと微笑みかける。

「ワルドさま……」

彼の微笑みに、また少し色を混ぜた眩きを漏らす。

そこに男たちを尋問していたギーシュが戻ってきた。

「子爵、あいつらはただの物取りだ、と言ってます」

「ふむ……、なら捨て置こう」

ひらりと再びグリフォンに跨ると、ワルドは颯爽とルイズを抱きかかえた。

その様子を才人が、何とも表現しづらい、苦く、悔しそうな表情で見つめる。

「今日はラ・ロシエールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡るぞ」

ワルドは一行にそう告げた。

来た時と同じように馬の後ろに跨って、また才人を除く皆が、楽しそうに騒ぐ。

沈みきった太陽の中、ラ・ロシエールの街の明かりが、やって来た新たな旅人を祝福するかのように灯り始めた。

35・The Sun in the distant mountains

西洋史は英仏独伊くらいなのでイスパニア半島が欠けています。

タバサ一行が向かったのは、実際の南仏にあるトゥールーズをモチーフです。山脈の麓とっていますが、実際はそんな事は全くありません。フランス・スペイン国境のピレネー山脈からは100キロくらい離れています。

街並はは古代ローマの趣を色濃く残す、川の流れる商業都市であります。

カステイリヤは中世イスパニアにあった王国の名前です。舞台が中世という事もあり、使わせていただきました。

予定ではここから出てきたキャラクターを出す予定です。

36. One of the port city

港町ラ・ロシエール。

トリスティンから離れること早馬で二日、アルビオンへの玄関口である。

狭い峡谷の間の山道にもうけられた小さな町であり、その人口はおよそ三百ほど。

だが、アルビオンと行き来する人々で常に十倍以上の人間が街を闊歩し、それらを狙って商いを営んでいる旅籠や商店が、狭い参道をはさむようにしてそそり立つ崖の一枚岩を穿って、並ぶ。

どれも立派な建物の形をしているが、並ぶ建物の一軒一軒が、同じ岩から削り出されたものであることがわかる。その細工と建築の腕は見事なもので、普通のメイジたちではまずできない。

それはまさに土系統のスクウェア・メイジたちの匠の技であった。

「全く、傭兵家業って言うのも楽じゃねえな！」

ラ・ロシエールの町の一角に店を構える酒場 『金の酒樽亭』。

その日も朝から、いや、前日の晩からどんちゃん騒ぎをしながら酒をかつくらっている一団が店に陣取っていた。既に時間は夜だというのに、いつまでも騒ぎ足りないのだ。

「アルビオンはもう終めエだな。王様も終わっちまうね！」

「いやはやー!! 『共和制』ってヤツの始まりかねエ!!!!」

数十年前に店を構えて以来、立地条件から常連客の多くは、傭兵や盗賊あがりなどのならずものばかりである。その為か、どうにも来店する人間は血の気が多い。

「そうか、王様の政治っていうのは終わりかい！」

誰かが言った言葉に対して、大声で笑いあう。

今、来ている鎧を着込んだ男達は内戦状態のアルビオンにおいて、王軍側に付いていた傭兵達である。だが、まだ戦闘状態はルイズやアレンの懸念を跳ね除ける形で、王軍は生き残っていた。

勿論、風前の灯と言う言葉がこれ以上ないくらいに似合う状況だが。

彼らだって命は惜しい。金も払われない上に、命を失うかもしれない戦いに参加する義理は無かった。良くも悪くも職業意識の高い傭兵なのである。

「ああ、何だ？『共和制』ってのは？」

そして、剣一本で生きてきたような荒くればかりの為か、今ひとつ学に欠けている部分が多い。

そんな血気盛んな男達が口論になると、人死にが出るような決闘になる事もしばしばあった。苦肉の策で店主が打ち出した策は、店の入り口には張り紙を見れば解る。

その張り紙には『人を殴るときはせめて椅子をお使いください』と書かれている。

店主の心意気を気に入った傭兵達は、また今日も今日とて繰り返す。

「低脳のテメエにはわかるめエよ！！ガハハ！！！！」

「んだとオルア！！！！殺すぞ！！！！」

売り言葉に買い言葉。

また壊れた椅子が店の前に積みまれると思うと、主人はため息しか出なかった。

「お客さん。椅子を使っただせエよ」

人死によりは椅子が壊れる方がよっぽど良いのだが、こつも毎回、店に来るたびに壊されては売り上げが直に消えてしまう。

「主人よオ！！わっかってらァア！！」

傭兵の一人が濁った声で答える。

顔は皆一様に赤く、とろんとした目をしている。

「かかってこいや！」

「いくぞ、馬鹿が！」

強い酒やら肴やらを食い散らかしながら、荒くれた男たちが酔った衝動でもつぱら日課となっている喧嘩をおっばじめる。そして、それを見ている傭兵達はどちらが勝つかで賭けを始めた。

そんな荒くれ達が集う店に、ふと見慣れない客が入ってきた。

「いらっしやい」

酒場の主人は、その客が出入り口からこちらに向かってくるのを認めて、愛想良く声をかけた。

ローブを身に着けて、フードのせいで顔が全く見えないが、その両足には中々の装飾がされたブーツがきっちり履かれている。

「……」

謎の客はカウンターの椅子に無言のまま座ると、主人の前にジャラ、と小気味よい音を立てる皮袋を置いた。そしてはつきりとした

命令口調で注文する。

「肉と酒、用意しな」

主人がその袋の口をあけてみると、中には新金貨がぎっしりと詰まっている。

一見ただけで解る。かなり過払いともいえる金額だ。

「お客さん、そんなに出されても困りますよ」

店主は皿を拭く手を再開しながら、無表情に断わった。

確かに金回りのいい客は一見商売として旨みがある。だが、ここに店を構えて以来、荒くれ者を扱ってきた主人は一方で、なにやら危うい空気を勘繰った。

客はカウンターに肘をついて答えた。

「宿代も入ってるのさ。部屋は空いてる？」

澄み切った鈴のような声は、路地裏で男を待っているようなうらぶれた女ではない。

凜としたものが混じった、美女といえる類の声だ。貴族のような気品さに垢がついたような物言いと見える。

「…なあ、オイ」

「ああ」

主人とその女とで会話をしていると、先程まで喧嘩をしていた傭兵の一団が女を囲むように集まってきた。皆一様に下卑た笑いを浮かべている。

「お姉さん、ひとりでこんな店にはいつちゃあ、いけねエなア」
「危ない連中が多いからなア。怖かったら守ってやるぜエ、どうだ？部屋に来るかイ？」

酒臭い息を吐いて、一団の一人が下卑た笑いを浮かべながら、悪戯のようにフードを引っ張ると、その下から女の顔が覗く。

鼻筋の通った小顔に切れ長の目。

その瞳は、裏の世界を見てきた人間だけが持つ鋭い目をしていた。髪は特徴的な、鮮やかな緑色。

「こりや上玉じゃねエか。見るよ、肌が象牙みてエじゃねえか！！」

男が女の顎をもちあげ、その頬にナイフを当てた。ナイフが鈍く光る。

明かに顔と命と貞操の危機だが、女は恐怖に顔をゆがめず、平坦な声で尋ねる。

「ここじゃ刃物の代わりに、椅子を使うんじゃないか？たかしら？ねえ？主人」

女はナイフを突き付けられているのに物怖じした様子も一つも見せず、妖艶な笑みを浮かべた。

それに対し、主人もグラスを磨く手を止めずに無表情で、

「そつだが」

と短く答えた。

彼もこのような出来事は日常茶飯事である。だが、女を守ってやるつなどという意識は微塵も無い。彼もまた、酒場の店主という職業意識の高い人物なのだ。

「ああ、その点は大丈夫だぜエ。これは脅すだけさ」

ナイフを持つ男が笑いながら、

「まあ、椅子なんかじゃ脅しにすらなんねエからな」

「かっこつけてんじゃねエよ。男を漁りにきたなら、俺たちが相手をしてやる」

「…ただし、部屋でなア」

最後の傭兵が言い終わると、一斉に大声を上げて笑い出した。

それを見ていた女は薄く笑みを浮かべると、杖を取り出し、短く呪文を唱える。すぐさま、頬を斬られそうな程に、鋭く当てられたナイフに呪文を素早くかけた。

「あ、何だ？」

見る見るうちにナイフはただの土くれへと変わり、ぼろぼろと元は刃だった土くれが、テーブルの上へと落っこちていく。その一部始終を見ていた傭兵も青ざめる。店内の空気がガラッと変わった。

「き、貴族!？」

一人が叫ぶ。

男たちは一斉に後ずさった。女がマントを羽織っていないので、メイジと気がつかなかったのである。だが、戦々恐々とする男達に女は、また薄く笑った。

「私はメイジだけど、貴族じゃないわよ」

男たちは呆気にとられて顔を見合わせた。とりあえず、その女の言葉に一安心する。

貴族でないのなら、とりあえず命を落す事はない。もし今みたいなことを貴族にしたら、それはもう殺されても文句はいえないのだ。安心した男達へ、女は短く尋ねた。

「あなた達、傭兵でしょ？」

「そ、そうだが。あなたはなんなんだ？」

少しばかり恐怖に怯えながらも尋ねる。

「誰だつていいじゃない。私はあなたたちを雇いに来たのよ」

そういつて女は大きな麻袋を机においた。

ドサツと言う豪快な音がして、何枚かの金貨が口から零れた。だが、袋の中には、まだ大量の金貨が顔を口から覗かせている。

主人は横目でそれを見つめた。

傭兵の中から、ごくりと唾を飲む音が聞こえる。

「エキュー金貨じゃねえか！！かなりあるぞ！！」

「何！！」

「こりゃ、すげえ量だ！！」

傭兵達が金に目が眩んで騒ぎ出したタイミングを見計らったかのように、ばたんとはね扉が開く音がして、白い仮面にマントの男が現れた。

その奇妙であり、不気味ななりを見て、また傭兵たちは息をのむ。その男は先に待っていた女のもとへ、規則正しい靴音を鳴らしながら、近づいてきた。

「おや？随分と早い到着で……」

「連中も到着した」

何か言いたそうな女に対し、男は事務的に答える。

「ふ〜ん」

対して、女の方もさして興味が沸かなかつたらしい。
適当な生返事を男に返した。

「まあ、こつちもあんたの言うとおりに雇ったよ」

女の端的な言葉に、仮面の男は傭兵たちを一瞥した。

そして、冷静で、熱いものを込めた声で言う。

「貴様らを雇う。拒否は無しだ！その代わり金は貴様らの言い値で結構」

これに傭兵達は、またニヤリと笑った。

上手く事が運べば、大金を一晩で手に入れることも出来るだろう。
敗色が濃厚となったアルビオンの王軍に付いていた彼らにして見れば、またとないチャンスである。

「だが、逃げたら殺す」

その後続く、仮面の男の短く噛み切るような声。

「へ、へえ」

「は、はい」

主人のグラスを磨く音が虚しく店内に響く中、傭兵の男たちは仮面の男の殺気の籠った言葉に、ただただ頷くしかなかった。

その頃。

ラ・ロシエールで一番上等な宿、『女神の杵』亭にルイズ一行は泊まる事となった。

一行は夕食のために、一階の酒場に集まっている。だが、才人とギーシュは長時間馬に乗った疲れが出てしまい、テーブルに伏している。

「あー、これもおいひい…」

棧橋へ乗船の交渉に行ったワルドとルイズを放っておいて、残った面々は早速腹ごしらえを始めた。勿論、アレンは驚異的とも言える圧縮率で胃にしまっていく。

店員が若干引きつった、愛想の良い笑みを浮かべてテーブルに料理を並べていく。

「いや、これ美味しいナ。ありがとう、エド」

「あ、あんでだ？」

「奢ってくれるんだロ？」

「ふざけんな！」

こちらでも喧嘩が始まりそうになるが、幼馴染が辞めさせた。

他はというとネギは無表情でパンに齧りつく、シャナを苦笑しつつ食べている。リナリーとキュルケはのんびりと言った様子で出さ

れる料理に舌鼓を打っていた。

「皆、元気だな…」

「僕は飲み物すら、通りそうに無いよ…」

『女神の杵』亭は、貴族を相手にする宿である。

その為、内装は非常に豪華なつくりで、テーブルは床と同じ一枚岩からの削り出しで、ピカピカに磨き上げられていた。

店内では、金持そうな貴婦人や杖を腰に差した男に、いかにもといった格好をした貴族の客で溢れ、店員やメイドが忙しそうに動いている。

才人とギーシュの前にも上等な一皿が置かれているが、どうにも食べる気がしなかった。正確には食べるだけの気力が沸かなかった。

「食べないなら貰っちゃいますよ・・・」

自分の皿の上の料理を食べ終えたアレンが手を伸ばしてきたので、びしっと叩いておいた。

流石に食べないとは言っていない。

しばらくの間、皆で食事を取りながら雑談をしていると、そこに棧橋へ乗船の交渉に行っていたワルドとルイズが帰ってきた。

二人とも随分と渋い顔をしている。アレンが尋ねる。

「どうでひた？」

デザートのパイを口の中に放り込みながら、聞く。

ワルドは席につくと、困ったように言った。

「参ったな…」

「今、アルビオンへの民間船は内乱中で出ないそうなの」

ルイズが理由を続けて言った。

だが、昨日のマザリー二の話を全部聞いている一同は、何も思わなかった。

土台、戦時中の国への民間船が出ると思っている時点で、どこにかしている。戦争に民間人を巻き込まないのが、軍や政府の役目である。

ルイズの世間知らずさに、また一つ重いため息が出た。

「アルビオンに渡る軍船や商船は無くはないが…」

じとつとシャナは、ワルドの人懐っこい笑みを浮かべながら喋る顔を何故か凝視してしまった。

釣られてネギも思わず見てしまう。

船があったところで、その軍船にどうやって一民間人が乗り込もうというのだ。

(そういえば、あの姫様、通行手形とか出してくれなかったな…)

ポイツと自分の口へパイの最後の一切れを放り込んだアレンは思った。

「あ！」

短い悲鳴が上がる。

隣では、最後の一口を食べられたリナリーが恋しそうな顔を見て睨んでいるので、ちよつとだけ申し訳なく思った。

「どの道、それらも船は明後日にならないと、出ないそうだ」

ふつつとため息を付くワルド。

「じゃあ、どうするんだ？」

ルイズにどんな考えがあるのか。

「急ぎの任務なのに……」

ルイズが思いっきり歯噛みをするが、無理なものは無理である。

「仕方がないが待つしかないだろう」

ワルドの言葉に才人とギーシュは内心ホツとした。馬に揺られて一日も走ったのだ。その体の疲れは重苦しく全身を蝕んでいる。これで明日は休んでいられる。

「あたしはアルビオンに行ったことないからわかんないけど……」

食後のワインを傾けていたキュルケが、纏まりかけた話に質問を挟んだ。

「どうして明日は船が出ないの？」

彼女の質問にワルドが端的に答える。

「明日の夜は月が重なるだろう？『スヴェル』の月夜だ。その翌日の朝は、アルビオンが最も、ラ・ロシエールに近づく」

才人は疲れた顔で、ワルドの説明を聞きながら、

(潮の満ち引きでも関係してるんだろうか…)

と、天文台に連れて行ってもらった記憶を辿っていた。

潮の干満は月の動きで決まるのだが、それは最も大きな一因ではない。

「さて、じゃあ今日はもう寝よう。部屋を取ったし」

並べられていた料理を片付けたワルドは、じゅらりと鍵束を机の上に置く。

「部屋割りはどうすんだ？」

エドが短く尋ねた。

男女混成のこの一団。流石に大部屋での雑魚寝はまずい。

「キュルケ君とシャナ、そしてウィンリイが相部屋」

部屋割りを言いながら、一本ずつ鍵を渡していく。

鍵を受け取ったキュルケは、ポンポンとシャナの頭を撫で回した。

「ギーシュとリンが相部屋」

ギーシュはチラリと横目で、独特の意匠の入った服を着た男を見る。

ざらつくような違和感を、彼はリンから感じていた。

「サイトとエド、そしてネギが相部屋」

そこまでワルドが言って、才人は気が付いた。

残っている顔ぶれに。

「アレンとリナリーが相部屋。そして僕とルイズは同室だ」

才人とギョツとして、ワルドの方を向いた。

エド達も、意味が解らないと描いた顔でワルドを見る。

「婚約者だからな。当然だろう？」

その視線に対してワルドは事も無げに答えた。

当のルイズがはっとして、ワルドの方を見る。

「そんな、ダメよ！まだ、わたしたち結婚してるわけじゃないじゃない！」

ルイズが慌てて否定する。

その一方で、

「やっぱり、問題あるヨナ……」

「大佐だって、あんな歳の子を毒牙に掛けてないしな……」

「何かあったとき、僕らは責任取れませんよ……」

ヒソヒソと男達は囁きあう。三人の言葉を耳に入れてしまった才人も、力の限り頷いた。心の中で思いつきり怒鳴る。所詮、心の中なので、誰も聞いていないが。

そんな三人と一人のなけなしの抗議は、無視して話は進む。

「ルイズ」

ワルドは熱っぽい瞳でルイズを見つめた。

「大事な話があるんだ。二人きりで話が見たい」

「どうにも引つ掛かりますね……」

部屋に入ったアレンは、すぐさまベットの上に寝転んだ。ぼんやりと頭を枕に預け、天井を見ながら呟いた。

「子爵の事？」

その呟きに薄く白い布の向こうから声が返ってくる。

「ええ、リナリー」

しゅるしゅると衣擦れの音がする。薄い布一枚で仕切られた向こう側にはリナリーがいる。

制服で寝てしまうことが多いアレンと違って、彼女は毎晩、きちりと着替えて寝ている。

アレンとて、健全な男の子である。思わず、この布を裂いて向こう側へ行きたい衝動に駆られる。だが、そんな事をすれば待っているのは身の破滅だ。

後の事を考えて、思わずアレンは身を震わせた。

「非公式なんですよ？なのに、あの子爵……」

二人の頭の中では、ワールドに対する疑念が渦巻いていた。

アンリエッタは援軍を派遣できないといていた。勿論、ワルド自身がどこかでこの任務の情報を嗅ぎ付け、志願したという事も考えられなくはない。

「だけでも…」

「できすぎている」

リナリーの一本芯の通った凜とした声に、アレンは頷いた。ルイズとの偶然の再会。偶然の同時出発。偶然の野党による襲撃。いくらなんでも、出来すぎている。現実には歌劇とは違う。

「できれば、杞憂であってほしいんですけど…」

「そうだね、アレン君」

くすつと笑ったのが良く解った。

「じゃ、お休み」

「お休みなさい」

ワルドとルイズは、『女神の杵』亭の一番上等な部屋で大切な話していた。

貴族相手の宿、『女神の杵』亭で一番上等な部屋だけあってワルドとルイズの部屋はかなり立派な作りであった。誰の趣味なのか、ベッドは天蓋付きの大きなものだったし高そうなレースの飾りがついていた。

テーブルに付くと、ワルドはワインの栓を抜いて杯についだ。紅

い血のような水が、光を乱反射させる。そして、それを一息に飲み干した。

「きみも腰掛けて、一杯やらないか？ルイズ」

ルイズは言われたままにテーブルにつく。

ワルドはルイズの杯に、ワインを満たしていく。自分の杯にも再度ワインを注いで掲げた。

「二人に」

かちんつとグラスが触れ合った。なんとも、ギーシュ並みにキザな男である。

だが、ギーシュと違ってしつかりと絵になる。

「姫殿下から預かった手紙はきちんと持っているかい？」

ルイズはポケットの上から、アンリエッタから預かった封筒を押さえた。確かにここにはウエルズ皇太子に当てた手紙が入っている。

ルイズが考え事をしていると、ワルドが自分を見つめていることに気づいた。

目を上げると、彼とばっちり目が合った。

「心配なのかい？」

「ええ、そうね。心配だわ……」

ルイズは心配そうに眉を寄せた。するとワルドはクスツと笑う。

「大丈夫だよ」

またワインを飲んで、微笑みかけた。
人懐っこい笑みを浮かべて、ルイズに迫る。

「きつとうまくいく…なにせ、僕がついているんだから」
「そうね、あなたがいれば、きつと大丈夫よね。あなたは昔から、とても頼もしかったもの」

久しぶりにルイズが会った憧れの子爵。
思い出話に花が咲くのも、無理からぬ事だった。

「所で大事な話って何？」

いきなり話題を変えたルイズに、少々驚きながらも、ワルドは口を開いた。

「覚えているかい？あの日の約束。ほら、きみのお屋敷の中庭で…

…

「あの、池に浮かんだ小船？」

彼女の答えに、ワルドはにこやかな顔で頷く。

「きみは、いつもご両親に怒られたあと、あそこでいじけていたな。まるで捨てられた子猫みたいに、うずくまって……………」

遠い日々を思い出すような調子で、ワルドは語り続ける。

「ほんとに、もう、へんなことばかり覚えているのね」
「そりゃ覚えているさ」

非難めいた事を口にするルイズも、それに答えるワルドも実に楽しそうだ。

「きみはいつもお姉さんと魔法の才能を比べられて、デキが悪いなんて言われてた」

ルイズが恥ずかしそうに俯く。

「でも僕はそれをずっと間違いだと思ってた。確かに、きみは不器用で失敗ばかりしていたけど……」

「意地悪ね」

ルイズは頬を膨らませる。

そんな彼女を窺めるように、ワルドは話を続ける。

「違うんだルイズ。きみは失敗ばかりしていたけど、誰にもないオーラを放っていた。魅力といってもいい。それは、きみは、他人にはない特別な力を持っているからさ」

いきなりそんな事を言われてもルイズには、ピンとこない。だが、ワルドの目は真剣だった。

「僕だつて並みのメイジじゃない。だからそれがわかるんだよ」

「まさか」

「まさかじゃない。例えば、そう、きみの使い魔……」

ルイズの頬が、本人の自覚無く、赤く染まる。

「さ、サイトたちのこと？」

「そうだ。彼が武器をつかんだときに、左手に浮かび上がったルー

ン……」

確かに才人が武器を持つと、左手が熱を帯びたように輝き始める。先程の夜盗との戦闘、ギーシュとの決闘、いくらでも思い出せた。

「あれは、ただのルーンじゃない。伝説の使い魔の印さ」

「伝説の使い魔の印？」

「そうさ」

短く肯定して、彼は説明を続けた。

話しているうちに段々と、ワインを飲むペースが上がっていく。

「あれは『ガンダールヴ』の印だ。始祖ブリミルが用いたという、伝説の使い魔さ」

ワルドの目が鋭く光る。

「ガンダールヴ？」

ルイズが怪訝そうに尋ねた。

始祖が用いた使い魔など、遙か彼方の歴史に闇に消えた存在だ。いきなり突拍子も無い事を言われても頭が混乱するだけである。

「誰もが持てる使い魔じゃない。きみはそれだけの力を持ったメイジなんだよ」

「えと、信じられないわ」

ルイズは首を振った。

彼女は目の前の婚約者は、自分を楽しませようと冗談を言っているのだと思っていた。

確かに才人は剣を握ったこともないという。だが、剣を握った途端にやたらとすばしっこくなって、強くなる。だが、他の面々に到っては、アレンとエドは常に手袋をしていて確認できない。他の4人も同じだ。まだ見た事が無い。

(でも…)

確固たる証拠は才人だけ。だが、それだけで伝説の使い魔だとは到底、信じられなかった。仮にそれが本当なのだとしても、偶然の産物であると頭が否定してしまう。

「ルイズ」は「ゼロ」のルイズだ。落ちこぼれの魔法マギが使えないメイジ。

ルイズどう考えても、どれだけ考えても、ワルドが言うような力が自分にあるなんて思えなかった。

そんな彼女の不安を無視して、ワルドは話を続ける。

「きみは偉大なメイジになるだろう。そう、始祖ブリミルのように！」

もう夜中も近いというのに、随分と饒舌にワルドはなってきた。寧ろ、夜が深いから饒舌になっているのかもしれない。

「歴史に名を残すような、素晴らしいメイジになるに違いない！僕はそう予感している」

ワルドが熱っぽい口調で語りながら、ルイズを見つめる。そして、唐突に、

「この任務が終わったら、僕と結婚しよう、ルイズ」

「え？」

いきなりのプロポーズに、ルイズははっとした顔になった。

「僕は魔法衛士隊の隊長で終わるつもりはない」

酔った上での粹狂な言い方なのか。

頬を紅くしたルイズには、判断の仕様が無かった。

「いずれは、国を、いや、このハルケギニアを動かすような貴族になりたいと思ってる」

「で、でも……」

ワルドの申し出にようやく、頭が追いついた。

弱弱しく否定の方向へ、首を振る。

「でも、なんだい？」

「わたしは……、まだ……」

尚も横に振るルイズに、ワルドは優しく語り掛ける。

「もう、子供じゃない。きみは十六だ。自分のことは自分で決められる年齢だし、父上だって許してくださってる。確かに……」

彼ははそこで言葉を切った。

それから、再び顔を上げると、すっとルイズに顔を近づけた。

「確かに、ずっとほったらかしだったことは謝るよ。婚約者だなんて言えた義理じゃないこともわかってる」

反省と自戒の言葉。

彼の顔に当てられた女なら、既に参ってしまっただろう。

「でもルイズ、僕にはきみが必要なんだ」

「ワルド……………」

ルイズは考える。そこでどうしてか、才人たちのことが頭に浮かんだ。

ワルドと結婚しても、自分は才人たちを使い魔としてそばに置いておくのか。

だが、何の根拠も無く、何故だかそれはできない気がしてしまった。

もし、あの異世界から来た、使い魔達を放り出したりしたら、一体どうなるだろう。

(ええつと…)

キュルケ。

施しを与えている厨房のメイド。

たまに6人と一緒にいるタバサ。

ルイズが放り出しても、誰かが世話を焼くかもしれない。

若しかしたら、自活して傭兵にでもなるのかもしれない。

だが、

(そんなのやだ！)

とルイズは心の底から思った。

少女のワガママと独占欲で、ルイズは思った。

才人は、バカで間抜けで腹が立つ。

一護は、暴力的で腹が立つ。

アレンは、めちゃくちゃ食べて食費を圧迫するので、腹が立つ。

エドは、理解できないことを延々話すので、腹が立つ。
シヤナは、使い魔の仕事を全然やってくれないので、腹が立つ。
夏梨は、人の話を聞かないので、腹が立つ。
ネギは、貴族でもないのに魔法が使えて、腹が立つ。

(…怒ってばかりね、私って…)

だけど、他の誰のものでもない。
ルイズの使い魔なのだ。

それに、才人たちが来てから、学院のつまらなかつた生活が一転
にして、毎日が楽しみになった。色々と腹立たしいことも多いが、
ルイズにとって一護達6人は、誰にも替わりがない、大切な使い魔
なのだ。

(それに才人が…)

ルイズは顔をあげた。

そこには決意を固めた少女の顔があつた。

「でも、でも……」

「でも？」

ワールドはこの後の言葉を察することが出来た。

「あの、そのわたしまだ、あなたに釣り合うような立派なメイジじ
やないし……、もっともっと勉強して……」

言つてはいけない事を言っている自覚はあつた。だから、上げた
顔を再び下げる。

ルイズは俯いたまま、続けた。

「あのねワールド。小さい頃、わたし思ったの。いつか、みんなに認めてもらいたいわって。立派な魔法使いになって、父上と母上に誉めてもらおうだって」

ルイズはまた再び決意した顔を上げて、ワールドを見つめた。

「まだわたしはそれができてない」

言い切ったルイズに、ワールドはため息を付いた。

「きみの心の中には、他の誰かが住み始めたみたいだね。あの使い魔くん達かい？」

「そんなことないの！そんなことないのよ！」

ルイズは慌てて否定する。だが、ワールドは一人で納得してる。

「いいさ、僕にはわかる。今、返事をくれとは言わないよ。でも…」

それは予言にも似た言葉。

「この旅が終わったら、きみの気持ちは、僕に傾くはずさ」

ルイズは俯いた状態でこくりと頷いた。

「それじゃあ、もう寝ようか。疲れただろう」

そう言つと、ワールドはルイズに近づいて、唇を合わせようとした。近づいてきた婚約者の顔に、思わずルイズの体は強張ってしまい、すつとワールドを押し戻す。

「ルイズ？」

「ごめん、でも、なんか、その……」

ルイズはもじもじして、ワルドを見つめた。

ワルドはルイズの行動に苦笑いを浮かべて、首を振った。

「それじゃあ、もう一つ部屋をとって、そこに僕が泊まるとしよう」

ルイズは頷く。

それを微笑んで見つめると、扉を開けて、ワルドは出て行った。出て行った彼を追う事ともせず、ルイズは自問自答を繰り返す。

(どうして?)

問いかける質問に、答えは返って来ない。

(ワルドはこんなに優しくして、凛々しいのに)

ずっと憧れていた年上の子爵。その人にプロポーズされた。

(結婚してくれと言われて、嬉しくないわけじゃない……)

でも、何か心が引っ掛かったまま、取れないでいる。

何かも解らない、引っ掛かった「それ」が、ルイズの心を前に歩かせないのだった。

さて、その頃。

才人はというと屋上からロープで身体を吊し窓の外枠に器用に捕まりながら、ルイズとワルドの部屋の様子をうかがっていた。手にはデルフリンガーが握られている。

「なあ、相棒」

デルフリンガーが才人に話しかけた。

「あ？なんだよ」

才人は部屋の中の二人を見ながら、相棒の剣に返事をした。さつきからくつついたり、離れたり、才人は気が気でない。

「相棒は、あの女に惚れてんのか？」

「…は？今なんて？」

デルフリンガーの言う言葉を美味しく咀嚼できなくて、戸惑ってしまふ。

「だから、相棒はあの女に惚れてるんだろ。だから今もこうして覗いている」

才人はデルフリンガーの言葉に目をぱちくりとさせた。そして少し戸惑うような、慌てた感じで言った。

「いやいやいや、お前何言ってるの！！」

才人は言いながら、ふと思った。確かにワルドは、見た目カッコ

いい。

それに自分は別に、ルイズの事が好きなのではない。

(じゃあ、何でこんなにムカつくんだ…)

才人は眉を寄せて、必死に言い訳を探した。だが、どうにも美味しい言葉が見つからない。

しばらくしてデル公が何かを言おうとしたその時、上から何か降ってきた。

「何を、見てるんだい？」

つんと鼻を薔薇の香りがくすぐる。降りてきたのはギーシュだった。ギーシュは才人が見ていたように窓の中を覗き込んだ。それからため息をつき、彼を見つめる。

「ダメじゃないか…、新婚さんを覗くなんて…」

「はあ？どこが新婚なんだよ！」

ギーシュに大声で反論すると、才人はまた、小さくため息をはいた。

その時である、窓が突然ボタンと音を立てて、大きく開けられた。窓から現れたのは、腰に手を当て鬼のように顔を歪め、二人を悪鬼のような顔で睨んだルイズであった。

「あんたらなにしてるの？窓で」

ルイズの見た二人の様子とは、屋上からプラインとロープで吊られた才人を踏みつけ、ギーシュが立っている光景だった。

「はは。特に意味は…」

ギーシュがはぐらかすと、案の定、ルイズの肩がプルプルと震えた。才人は必死に弁明しようとしていたが違、完全に頭に血が上ったルイズには聞こえない。

「こ、このバカ犬どもが！」

ルイズは怒声を上げて、才人を吊り下げたロープへ魔法を詠唱した。

「ファイアボール」を唱えたが、やっぱり失敗して爆発が起きる。だが、細いロープを切るくらいなら、その失敗した呪文でも大丈夫だった。

「あ…」

「あ…」

支えを失った二人は地面へと自由落下する。

すっかりルイズに忘れられたワルドは、部屋の中からそんな様子を興味深そうに見つめていた。

37. it's almost like a dangerous drive

今回はタバサ一行です。

ガリア南部に位置する街、トゥーリーワース。

ここに一護たちが降り立ったのは、随分と夜も更けてからだだった。魔法学院を出発したのが、深夜だったから、結局丸一日シルフィードの青い鱗の上で、吹きすさぶ風に弄られていた事になる。

「一兄、朝だよ。起きて起きて！」

遠くから妹の音がする。

その声に反応して、一護はムクリと体を起こした。疲れは抜けきっていないのか、まだ体の彼方此方に違和感を感じる。

「眠みい……」

短く呟いて、また寝ようと思うが生憎とカーテンの隙間から差し込む綺麗な光は無視できなかつた。生活のリズムがまた少しおかしな感じになってきているが、まだ実害はない。

寝ぼけた頭を振って、気分を入れ替える。

「じゃ、行くか」

寝る前に引っ掛けておいたマントを取って階下へと下りる。

3人が泊まった宿は、中心街から少し離れた所にある、『風花』という宿だった。寂れているわけではないが、場末と言う感じがして、到底、貴族が使うようなものではない。

(ルイズなら、間違いなく怒るだろうな……)

そんな学院に置いてきた、自分の一応ご主人様の怒った顔を思い浮かべながら、夏梨は朝食の席に着いた。目の前に並ぶ料理は修学旅行の朝食で出されるような、質素なものだった。

「はあ…、遊子の作った味噌汁が飲みたい…」

ここへ来て2週間ほど。やっぱり中学生の身空なので、ホームシックになっていた。兄が居なければきつと今頃は発狂していただろう。

そんな事を言っている間に、先についていたタバサはパクパクと皿を開けていく。相変わらず、脅威の圧縮率だ。体格はそんなに代わらないが、実に良く食べる。

無言なのが、何とも面倒である。

「おーっす、二人とも」

そんな二人の間にドカツという乱暴な音を立てて、一護が座った。目の前にある、空の皿を見て、若干引いていた。近くに居た店員を呼び止めて、また追加の注文をする。自分とタバサの追加だ。彼女はじつと青い目で、お礼を言いたそうにしていた。

「で、今日からどうすんだ？」

運ばれてくる料理を待つまでの間、早速行動指針の説明に移った。

「まず、領主に会いたい」

相変わらず、坦々とした口調で言う。

気軽なのか、どうかすらも判別し難い。彼女の親友であるキュルケが居れば、また代わったのかもしれないが。

「今回は、領主直々に依頼があった」

「詳しい情報は、その領主が持ってるのね……」

食後の紅茶を飲みながら、夏梨が言う。コクリと短くタバサは首だけで肯定する。

「ふん、まずはその領主様に会ってみるとしますか」

そんな決意を固めた一護の前に、コトツと朝食が置かれた。

何となく置いた給仕の手が震えているらしく、少しばかりスープが零れた。勿論、この程度で腹を立てる程、彼の了見は狭くない。

「も、申し訳ありません……」

ガタガタと震えている給仕は、鼻筋の通った可愛らしい女の子だった。

そんな女の子へ、一護は本人としては出来るだけ優しく声を掛ける。

「あー、良いつて。気にすんな」

だが、何故か更に竦みあがってしまう。

「一兄、顔が怖いから」

「……」

妹にそのままずばりと言われてしまったが、彼自身、その自覚はある。

常に眉間に皺がよって、眉根が釣りあがっている。人は見た目が

9割と言うが、確実に一護は顔で損をするタイプだろう。元が良い分、そういつた事が随分と台無しにしている。

「気にしないの、それよりもこの領主様について教えてくれない？」

あっけらかんとした顔で夏梨は、この街の領主について聞き始めた。

「……」

妹の変わり身の早さに、一護は黙ってしまった。

ようやく落ち着きを取り戻したらしい、給仕の女の子は椅子に座ると訥々と話し始めた。女の子はリーダといった。赤みの掛かった茶色の髪の子だ。

「この領主様、ジルドレー様は素晴らしい方です」

何も疑う事の無いきっぱりとした声で、彼女は言った。

タバサはペラリとこの仕事の前に渡された資料を捲りながら、確認を取る。

「……」

ジルドレー男爵。

このトゥーリーワースの領主は気立ての優しい、人を誘い込む魅力的な顔だちで、堂々たる体躯の持ち主で、オマケに武術に長け、情熱的で献身的、敬虔なブリミル教徒で、教養豊か、あらゆる芸術にも深く通じているという。

おまけに美男子で広大な領土を持つ、ガリアでも有数の富裕な

貴族の一人でもあったのだ。

「南の山脈に何度も赴かれては、見たことの無い魔獣たちを討伐されます」

まさに非の打ち所の無い完璧な男。

だが、タバサはその経歴にどこか作為のようなものを感じた。明かに作られている英雄像だ。どこまで真実かは解らないが、虚偽が混じっている事は予測できた。

「で、何処行きや会えるんだ？」

いつまでも領主の自慢話が続きそうだったので、適当に打ち切らせる。

また睨みを利かせた一護に、怯みながらもリーズは答える。

「街の中央通りを行くと、そのうち着きますよ」

「そっか、ありがと」

お礼を言っ、店の店主を呼んだ。

寂れたカウンターに頬杖を付いていた店主が駆け寄ってきて、会計を始める。タバサの食費で若干、予想よりも高い感じになってしまった。

「おい、お前！」

会計も終わらせて外へ出ようとした三人に鋭い声が掛かる。

「あ？」

一護が声のした方へ顔を向けると、彼の腰ほどの高さしかない男の子がじつと睨みつけていた。まだ顔はあどけない。歳は5、6歳と言ったところだろう。

「今から男爵の城に行くのか？」

「そうだけど、何？」

タバサが冷静に聞く。

別に何かあるわけではない。相手はマントもないし、杖も持っていない子供である。平民かどうかは知らないが、杖の無いメイジは無力な存在でしかない。

それなのに持っている杖に力が入る。

「お前ら、貴族だろ。あの領主の味方なのか…？」

「は？」

質問の意味が解らない。

質問の意味を図りかねている三人に、追い討ちを掛けるように更に男の子は続ける。

「お前らなんか、殺されてしまえ！」

そう言い捨てて逃げ出そうとする男の子を、

「おい、待て」

ガツと頭を思いつきり掴んで捕まえる。

男の子は手足をじたばたと矢鱈めつたらに動かし、拘束を振りほどこうとするが、その圧倒的なまでの握力と膂力の差があつては逃げる事もできない。

それに聞き逃してはならない、一言があつた。

「今の話、どういうことだ？」

「あ、あの領主が良いのなんか見た目だけだ！」

「まあ、この子つたら！」

男の子は、子供らしい黄色い怒声を張り上げる。

あまりな態度に、リーゼを始め、食堂の中に居た給仕や客たちが、怪訝な視線を向けてきた。どうにもやりにくい。

「申し訳ありません、貴族様……。この子にはきつく言って聞かせますので……」

リーゼが少年に寄り添って、口を塞ごうとする。

だが、少年の只ならぬ様子とリーゼの語り口調に疑問を持った三人は、詳しく話を聞きたくなった。

「場所を変えるぞ、付いて来い」

「あ、なん、ぐええ！」

付いて来いと言いつつも、首根っこを掴まれた男の子は連行された。

「風花」から出た三人は、手頃な近くの路地裏へと少年を連れ込んだ。何も知らない他人から見れば、カツアゲのように見えるだろうが、そんな事をする気は毛頭無かった。

ようやく拘束を外された、男の子がいきなり怒鳴る。

「バーカ、バーカ！」

これ以上ない幼稚な悪口だ。

流石にこれに一々反応しているような時間はない。一護がずっと睨みを利かせる。それだけで完全に黙ってしまった。

「カツアゲしてるみたい……」

夏梨は少しばかり、良心が痛んだ。

タバサは相変わらず、何処を見ているのか解らない涼しい顔をしている。

「なあ、別に俺たちは乱暴しようっていうんじゃないんだ……」

優しげに一護が話しかけるが、やっぱり顔が怖いらしい。ひっと蚊の鳴くような声を上げて、すすり上げだした。これは彼にとって、ショックだった。

「……そんな怖いのか？」

「私は見慣れてるけど」

妹の言葉に更に落ち込む。隅の方でいじけてしまった。

情けない兄の背中を、ため息を付いて一瞥すると、二人で少年の話聞くことにした。なにやら不穏な事を言っていたが、一応は信用してもらえたらしい。

「俺はミゲルっていうんだ」

目の前の男の子は、利発そうな顔でそういった。

見た目は実に可愛らしい、着せる服を変えれば女の子にも見えるような線の細い男の子である。

「俺には兄ちゃんが居たんだ……」

「居たん『だ』？」

何故、過去形なのだろうか。

怪訝な表情になった瞬間、路地裏に劈くような男の低い声が轟いた。

「居たぞー！」

「捕まえろ！」

ダダダツと駆けて来た男達は皆、一様に手に杖を持っている。

既に詠唱は完了しているのか、先には拳大の火の玉が灯っていた。

「やつべー！」

火の玉が一護たち目掛けて、いくつも飛んでくる。

だが、場所が路地裏で良かった。細い小路に飛び込んで、火の玉をやり過ごす。

「くそ！何だあいつら！」

次から次へとバルカンのように火の玉を飛ばしてくる男達を見やりながら、一護が叫ぶ。

「あいつら、領主の手先なんだ！」

「何だつて！」

「ラウ・フレス……」

ミゲルの言葉を聞いたタバサが、無表情のまま、反撃の詠唱を始める。

空気中の水滴が凝固し、槍状に固まる。彼女の十八番の呪文でも

ある、「ウインディ・アイシクル」が出来上がった。その数、6本。

「君臨者よ、血肉の仮面 万象羽ばたき 人の名を冠す者よ」

飛び出した氷の矢を追いかけられるように、夏梨も詠唱を始める。

「真理と節制 罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ！」

青い火がタバサの氷の矢を追いかけ、放たれる。

肩やわき腹を掠め、うめきを上げて怯んだ男達を襲う。

「破道の三十三 蒼火墜！」

青火に覆われた男達は、悲鳴を上げて逃げていく。

まさに圧倒的。誰も死んでいないが、逆に言えば、殺さないだけの實力差がある事を意味していた。

「よく、やってくれたな」

ふうつとため息を付いて、一護がタバサと夏梨、二人の頭を優しく撫でた。

それを見ていたミゲルの顔は、何ともいえない好奇心に満ちた顔をしていた。

「お、お前ら強かったんだな！」

「ん？」

そう言っただけ見た三人の視線の先には、頭を下げたミゲルがいた。

「頼む、兄ちゃんの敵を取ってくれ！」

「はあ？」

いきなりの言葉に、3人とも訳が解らず聞き返した。

「ええい、くそつ。忌々しいガキめ！」

祖父の死により莫大な財産を受け継いだジルドレー男爵は、自らの城であるダルク城の回廊をイライラした様子で歩いていた。この城も彼が祖父から受け継いだものである。

確かに顔には美髯が揃い、30を前にしていても、まだまだ若々しい顔であった。

だが、今の顔には、街娘が言うような、理知的なものはなく、寧ろ、

「おのれ、あのガキはどこへ行った！」

威張り散らし、何事か狂気に取り付かれたような顔をしていた。イラ付いた顔で、自室へと引き上げる。

そこにはまた、可愛らしい顔をした、まさに美少年という顔をした男の子が幾人もいた。皆同じように白く、青で縁を飾られた服を着ているが、何処と無く貴族らしい上品さが無い。言ってしまうと、何だか見た目だけ取り繕ったような、そんな感じのする子供達だった。

「男爵様……」

イラ付いた様子におっかなびつくりと言った様子で、一人の男の子が近づく。

そうするとジルドレーは打って変わった様子で、微笑みかけた。

「おつおつ、愛い奴よ」

そんな怒りなど雲の如く消えてしまったかのような、猫なで声で近づいてきた子供の頭をいとおしそうに撫でた。

「男爵殿」

そんな優しく撫でている男爵の楽しみを邪魔するかのようなタイミングで、低く平坦な声が掛けられた。戸を開ける音も小さく入ってきたのは、黒いフードを掛けた人物だった。

「おお、フレディ殿」

フレディと呼ばれた男は、顔を喜びにも、笑いにも、歪ませる事もない。

そのまま、佇んでいるだけだった。

「目的の少年は見つかりましたかな？」

「それが…」

ジルドレーは頭を掻きながら、恥ずかしそうに言った。

「部下に追わせていたのだが、中々見つからなくてな」

ふつつとため息を付き、注がれたワインを飲み干す。

フレディはジルドレーに変らない坦々とした声で続けた。

「契約が結べるのは、今日が最後であります。お急ぎを」
「ふん、解っておる」

解っている事を繰り返されるのは腹立たしいだけだ。

だが、男爵はわかっている。この男しか、自らの目的を達する手段を持っていないのだと。

「正規の手続きを踏んで、契約をした方が男爵殿の目的にも通じる事となります」

「よい、私が直々に捕まえてくるわ」

その言葉を聞くとフレディは、来た時と同じように静かに部屋を後にした。

「あの男は信じられんが……」

ぎりつと奥歯を噛む。

その整った顔を歪ませたまま、部屋に掛けられた肖像画を見上げる。

そこには青い髪を湛えた、若い男の貴族の絵が描かれていた。傍らには同じ髪色の女性と女の子が居る。皆、素晴らしい、この上ない笑顔を浮かべている。

「シャルル様……」

魔法使いを撃退した一護達は、新手に見つからないように場所を移した。

今度は中心街に近い、ちょっとした開けた四辻である。増築途中なのか、あちらこちらに木やレンガなどの資材が積みあがっていた。

「私たちは、この街で起きている怪死事件を追っている」

「それなら犯人は、この街の男爵さ」

この街は建物がレンガ造りで、丈夫な作りになっている。赤や白のレンガを混ぜて作られた家は、独特の風景と情緒を醸し出している。

そのレンガの山の一つに座って、3人はミゲルの話を聞いていた。

「はあ！領主が怪死事件の犯人？」

リゲルの話を聞いていた一護は素っ頓狂な声を上げた。

途端にがしつと両サイドに居た二人から口を覆われる。誰かに聞かれていては、身が危ない。

「と、すまねえ」

「話を続けて」

「ああ」

ミゲルは話を続ける。

「俺の兄ちゃんは、3ヶ月ほど前に男爵の城に連れてかれたんだ」

その声には寂しいものと一緒に、怒りのような声も混じっていた。

「そりゃ、俺たちは平民だから、貴族の部下になれるなんて、考え

られない事さ」

「……」

どこか自嘲的に喋るミゲルの言葉に、タバサは奥歯を噛んだ。

一護と夏梨は、興味なさそうに聞いている。彼らはこの世界の身分制度などに興味は無い。自分達がどれだけ骨身を惜しんで活動しても、そう簡単には変わらない。

結局の所、この世界の人間達が変らねば、何もならないのだ。

「でも、その城へ行つた4日後だったけど……」

彼はその時の様子を出来るだけ、自分の言葉で克明に描写した。語る人が語れば、聞いているだけで吐き気を催すような状況だった。だが、タバサは坦々と資料と照合する。

「確かに、彼の兄の名前は犠牲者のリストにある。それに……」

「それに？」

タバサは言いにくそうに続けた。

「犠牲者の共通点として、ジルドレー男爵の城に招かれた後という共通項がある」

「全員にか？」

一護の質問にタバサは首を縦に振った。

「そう」

これは偶然の一致なのだろうか。

勿論、偶然の一致とは考えられなかったから、ミゲルはこうして

男爵に挑もうとしているのだろう。だが、肝心要の証拠が無い。この世界では、アルミニウム粉末を撒いて、指紋も取れない。DNA鑑定もできない。科学万歳の便利アイテムは存在しないのだ。

「でも、確かこれって男爵直々の依頼だって…」

夏梨は引っ掛かる。

彼女の言う通りだった。確かに、この怪死事件の調査はジルドレ―男爵直々の依頼だったはず。彼が犯人だとしたら何故、態々タバサを呼ぶような事をしたのだろうか。

「そう。だから、おかしい」

犯人の心理など3人には与り知らぬことであるが、こんな事をするような意図は一体、何か。

「じゃあねえ…」

ここで話していても埒が明かない。パンと小気味良い音を立てて、一護が手を打った。

話すよりは行動あるのみだ。

「男爵の城を探るぞ」

待っているのは、街の人の言うような名君なのか。それとも、彼の言うような殺人犯なのか。

答えは、どうにも彼の城にしかないようである。

「行くぞ」

一声掛けて、4人は路地裏から出て行く。
その姿は物陰から、しっかりと見られていた。

38・Dream of the Gentiles

ルイズは昼になってようやく目を覚ました。

昨日、呑みすぎたせいか、それとも、才人とギーシュをボコボコにした為か、どうにもお腹がすいた。昼食をとる為に食堂に行く。

「本当に、何も無いと暇ね…」

「そうね、街へ行こうって気にもなれないし…」

食堂には既に、昼食を終えたらしいキュルケとリナリーが、食後
を思い思いに楽しんでいた。他の面々は街でも見に行っているのだ
ろうか。姿が無かった。

(全く、気の利かない使い魔ね！)

ふんと鼻を鳴らしたが、聞いてくれる人はいない。

才人とギーシュの付いたのテーブルの周りだけは、異様に疲れた
空気が充満していた。昨日、散々ルイズにボコボコにされた為に、
体の節々が痛いらしい。

「あら、ルイズ。起きたのね」

一番、起き抜けに見たのがキュルケとは、ルイズは寝起きの機嫌
が悪くなった。

「結局、丸一日、この街に滞在でしょ？皆、暇でやることがないの
よ」

「仕方ないじゃない。急いでるけど、どうしようもないもの」

そう言うルイズは明かに焦っていた。
彼女が体を落ち着かない様子で、席に着いた。

「どうしたんだい？」

ギーシュが尋ねるが、見ることも無く、運ばれてきた料理を注文した。

才人の疲れた顔を見て、ため息を付いた。

(やっぱり、あんたはロクなことしないわね…)

ルイズは心の中でそう言った。

遅れて席についたルイズは、ゆっくりと食事を始めた。

ゆっくりと食事を取っている間に、外に出ていたアレンやエドが帰ってくる。手には大きな荷物を抱えていた。個人の体格ほどもある大きな荷物だか、軽々と担いでいる。

そして、ルイズが遅めの昼食をとっていると、ワルドが戻ってきた。大きな荷物を抱えて、戸を塞いでいたアレンを押しつけながら、入ってくる。

「ふう…。交渉してみたが、どうも無理なようだ」

「やっぱりですか」

期待も望みも薄かったが、ワルドはもう一度棧橋へと赴き、乗船の交渉をしていた。

だが、結果は彼の言葉のとおりである。上手く交渉できなかった自分に腹を立てているのか、乱暴に椅子を引き出して座った。

そして何の前置きも無く、席に着いていた才人に言った。

「きみは伝説の使い魔『ガンダールヴ』なんだろう？」

唐突な彼の言葉に、空気が固まる。だが、これを聞いていたアレ
ンの耳は、痛いほどに反応した。

彼は、疲れた顔で机に沈む才人に言っているらしく、それに気づ
いた才人はというと、

「それで、どうしたんですか？」

眠そうな目でワルドを見る。

そして、一緒になって机に沈んでいたギーシュを見ながら言う。

「君たちは決闘をしたそうじゃないか？」

「どこで、そ、げほげほ！」

ギーシュが驚いて、勢いよく弁明しようとしたが、いきなり空気を
吸い込んだ為に咽てしまった。バンバンと胸を叩いて、調子を整
える。

「あ、あのそれはですね……」

平静を取り戻したギーシュが取り繕うとしたが、それを透かさず
ワルドが手で制する。

「サイト君、その決闘で君は彼を簡単に打ち負かしたそうじゃない
か？」

「そうですけど」

そこでギーシュがうっと唸る。

実際はかなり苦戦していたし、最初の決闘に関して言えば、完敗
していた。逆にギーシュの方も、シャナと夏梨には、完敗どころか、

若しかしたら膾炙りにされていたかもしれない。

「じゃあ、『土くれ』のフーケを捕まえたことも事実かい？」
「……」

才人は、無言で答える。

確かに、強ち間違ってもいない。「ルイズ」の「使い魔」が捕まえた事は事実だ。

「それと、ルイズから聞いたがきみたちは異世界からやってきたそうじゃないか」

（あの、バカ…！）

エドはこの場にワルドと才人とウインリイが居なかつたら、思いっきりルイズの脳天に右の拳を叩き込んでやりたかった。

外から見れば、二人の何気ない世間話のようだったが、この会話には皆が一様に聞き耳を立てている。自分たちの出自に付いては、ルイズには硬く言い聞かせておいたが、どうも守られていないらしい。

（それとも学院長かな…？）

オスマン辺りがうっかり漏らしてしまった可能性もある。

いずれにせよ、9人の出自に関しては、ルイズとキュルケ、タバサとギーシュ。そして、オスマンしかない。一番、流れた可能性が高いのは、間違いなくルイズだった。

（全く、情報の価値というものを知らぬようだな…）

アラストールはシャナにしか聞こえない声で、ようやく重い口を

開いた。

(そうね、どうなるか解ってるのに…)

6人の怒りの視線がルイズに集中する。

これで変な団体にでも追われる様になったら、確実に戦争だ。

「おまけに伝説の使い魔『ガンダールヴ』だそうだね」

「何故、そのような事をご存知で？」

傍で聞いていたアレンが、当然にしか思えない疑問を口にする。
それには、才人達も同意見だった。

「ガンダールヴ…？」

耳慣れない単語を聞いたキュルケが鸚鵡返しに呟く。

このことを知る者は、学院内にコルベールとオスマン以外は誰も知らない。あの二人がそのような重大な事をホイホイと話すはずは無い。勿論、後から来たりナリーたちにはちゃんと話してある。

一応は主人である、ルイズすら話していないことである。

しかし、ワルドはフツと微笑んで言う。

「僕は歴史と、兵のに興味があつてね」

シヤナは、この言葉に取って付けた様な即席性を見た。

明かに立場が悪くなったものだから、適当な事を言って誤魔化しているだけに過ぎないのだろう。昨日から不審に思っていた、シヤナのワルドへの警戒心は一気に最高値になった。

「何、フーケを尋問したときに、君たちに興味を抱き、王立図書館

で君たちのことを調べてね」

そう言っているが、王宮にはルイズ達が捕まえたと報告させたはずだ。

別にあの一件で名誉を得ようとも思っていなかった6人は、自身たちの秘匿のために、成果を押し付けたのだ。

「その結果、『ガンダールヴ』にたどり着いたのさ」

そして、才人の左手を、正確にはそこに刻まれたルーンの羅列を見ながら言う。

ワルドの視線に釣られるように、才人も自分の左手へと視線を走らせた。

「それに『ガンダールヴ』のルーンは左手に刻まれるというしね。君たちの左手のルーンがそれさ」

ネギやシャナも自分の左手を見つめる。確かに、左手の甲はルーンが刻まれている。

だが、キュルケとギーシュは、全く話についていけずに頭に？を浮かべている。その後ろで、リンは壁に寄りかかりながら、ワルドの言葉を待った。

彼の視線も、怪訝なものを見る視線が混じっている。

「それでどうしたんです？」

才人がそう尋ねると、ワルドが手を組んだ。

そして、なぜか彼の漆黒の目を見つめている。そして、こう言った。

「あの『ガンダールブ』がどれ程の兵か、知りたいんだ。ちょっと手合わせ願いたい」

「はい？」

才人は唐突な申し出に、答えを詰まらせてしまった。

その後ろで、事の成り行きを見守っていた7人の意見は一致した。

「今は、時間があるんだよ。やってみないかい？ サイト君？」

「なんで俺なんです？」

才人は考える。

確かに、必死のサバイバル修行。命を削るような模擬戦の中で確実にレベルアップしている。だが、それでもまだ遠く及ばないのが現実だ。

そんな風に考え始めた才人の事など、露知らぬワルドは、

「ああ、それなら、別に他意はないさ」

「婚約者にカツコいいところを見せたい…っていう所だろ」

話を聞いていたエドが強引に割り込む。

それを聞いたルイズは、耳まで真っ赤にして俯いてしまった。

「な…」

ガタガタと椅子を鳴らして抗議するが、別にワルドは気にも止めない。

「僕も男だからね。君に手合わせ願いたい」

「ちょっと！ ワルド！？ 今はそんな事してる場合じゃ…」

いきなりの展開に、ルイズが口を挟むがワールドも才人も、全く気にした素振りも見せない。

「いいじゃないか。今は特にやることがないのだしね」

ルイズの反論を、すっと手で制してワールドは才人に問いかけた。また女性がぐつと来そうなほどに、屈託の無い笑みである。才人に取っては腹立たしいだけであるが。

「で、どうだい？」

才人は、少しだけ考えて、

「やります」

短く答えた。

その返事には、ワールドも感心したように頷いた。

「結構。この街には練兵場があるんだ。そこで待っているよ」

それだけ最後に言うワールドは、颯爽とマントを翻して食堂を出て行った。

後に残された面々、特にルイズと才人は大騒ぎである。

「アンタね、ホント勝手な事ばかりするのね！」

「いいじゃねえか、別に」

耳を思いつきり引つ張って抗議の声を上げるルイズだが、決まってしまった以上は仕方が無い。

その二人を他所にアレン達は、

「どっちが勝つか、賭けません？僕は子爵に20枚です」

「じゃ、俺は才人に5枚だ」

賭けを始めていたが、結局乗ったのはエドだけだったので、お開きになってしまった。あまり人数がない賭けは、面白くも何とも無い。

「はあ…、ホントこの使い魔は…」

「本人の意思を汲むのも必要」

呆れ顔になるルイズに、シャナが声を掛ける。

至極当然ともいえるその言葉を言われて、ルイズは無性に腹が立った。

「じゃ、早く行きましょうか」

アレンに促されて、ゾロゾロと練兵場へ向かう。

「ああ、もう！勝手にして！」

一人ぶつくさ文句を言って残されたルイズが、羽扉を蹴破って、才人達の後を追った。

宿から少し離れた練兵場の中では、ワールドが待っていた。

「やあ、待っていたよ」

そんなに時間は経っていないが、随分な役者ぶりだ。

才人は、そんなワールドの「決闘を面白くする為のスパイス」すら

腹が立った。昨日からの彼の態度がどうにも才人をいらだたせる。何故かは分からないが、どうにも面白くない。

「勝負は簡単さ。先に参ったといった方の負けだ」

そう言つとワルドは二十歩ほど才人から離れて、向かい合つた。

「今から話すのは昔の話さ…」

この練兵場は長らく使われていないのか、樽や空き箱が積み重ね、かつての栄華を懐かしむように、石でできた旗立て台が、苔むして佇んでいる。

遅れて使い魔7人に、キュルケとギーシュが入ってきた。

二人の間に流れる空気を感じ取って、思わず黙ってしまう。

「と言っても、君は解らんだろうが、かのフィリップ三世の治下には、ここでよく貴族が決闘をしたものさ」

まるでここで遙か昔に行われた、王の閲兵のシーンでも準えるかのような口調で続ける。

「前置きが長えぞ！」

「え、エドさん…」

どうでもいい台詞に、エドが野次を飛ばす。

多分、彼ならワルドが話している間に襲い掛かって、それで終わりだろう。

「古き良き時代、王がまだ力を持ち、貴族たちがそれに従った時代…、貴族が貴族らしかった時代…」

エドの野次は無視して、ワルドは続ける。
草原に吹き抜ける、風のように、軽くスルーされてしまった。

「名誉と、誇りをかけて僕たち貴族は魔法を唱え合った…」

シヤナが何時までも終わらない、お遊戯に付き合いきれなくなつたのか、早速イライラし始めた。

「早く始めて！」

「でも、実際はくだらないことで杖を抜きあつたものさ」

ようやく入ってきたルイズをチラリと見ながら、ワルドは笑つて言った。

「そう、例えば女を取り合つたりね」

「ワルド！そんなバカなことはやめて！今は、そんなことをしているときじゃないでしょう？」

奔ってきたルイズは肩で息をしている。

そんなに長い距離ではないが、どうにも彼女は体力面に不安があった。一応、キュルケとタバサと一緒にサバイバルを体験してみたのだが、真っ先に根を上げた。

「そうだね」

確かにこのような模擬戦に興じている場合ではない。

それはしっかりワルドも解っている。だが、

「でも、貴族とは厄介だね。強いか弱いか、それが気になるともう、

どうにもならなくなるのさ」

聞く耳が無い。

ルイズは次に才人を見て、短く言い放った。

「サイト！やめなさい。これは、命令よ？」

才人は頭をボリボリ掻いている。
そこへ、キュルケが口を挟んだ。

「いいじゃない。面白そうだし」

ギーシュも言う。

「才人く、頑張れく」

「頑張つて下さい！才人さん！」

とうとうみんなが、やる気になって応援を始める。
若干、応援の密度に濃淡の差があるが。

「ちょっと！皆、なに言ってるのよ！」

「いいじゃないですか。ワールドさんの実力も知りたいし」

彼の事を一番、疑いの目で見ているアレンがそんな事を言い出した。

「大丈夫だよ、ちょっとした軽い運動ということだしさ」

叫ぶルイズを、ワールドがたしなめる。

「もう!どうなっても知らないわよ!」

遂に根負けした。

もう止める気も失せたルイズが仕方なく木箱に腰掛け、腕を組んで、ムスツとした表情で見る。

どうやらそれ以上止める気もないようだった。

「では、始めるとしようか………」

ワルドは腰から、杖を引き抜いた。細めのレイピアのような、鉄拵の杖だ、

それからフェンシングの構えのように、それを前方に突き出す。

才人も、背中に差したデルFRINGERを引き抜いて一回素振りする。

「よ、相棒」

「頑張ろうぜ、デルフ」

ワルドが喋りだした剣を見て、尋ねる。

「君はインテリジェンスソードかい」

「ああ」

軽い感じで剣本人が返した。

「そうか………」

一瞬の静寂が満ちる。

その静寂を破って、

「では行くぞッ！」

ワルドは地を蹴って、二つ名の『閃光』らしい速さで切りかかった。

そのあまりの速さに、ギーシュとキュルケは一瞬、ワルドの姿を見失ってしまう。

「サイトー！」

ルイズが、叫ぶ。

だが、そこには突きを止められたワルドの姿が。

才人はデルフリンガーを楯の様に構え、ワルドの必殺の突きを受け止めたのだ。

「ッ！」

ワルドが目を見張り、驚いている。

「…やるじゃないか」

感心した様子で、ワルドが口を開く。

さっきの一撃は、それなりに力を込めたものだった。だが、それをいとも容易く止められてしまった。少しばかりショックであると同時に、強者と戦える喜びに満ちている。

「あれ位当然」

「常の成果でてます？」

「でも…」

そんな才人の手際に評点を下すシャナ。才人よりも頭一つ分、背

の低いこの少女は、これでも彼の師匠なのだ。師匠は厳しく採点している。

だが才人は余裕綽々といった様子で、ニヤリと笑った。

「どうしたのだ？」

ワルドがそんな才人の表情に疑問を浮かべる。

「いや、今度はこっちの番さ！」

「…どういうことだね？」

「おりゃ！」

そう言っつて、才人は受け止めていたワルドの細剣を力一杯に押しつけて振り払った。

その目は爛々と輝いているが、シャナは呆れてしまった。彼の悪い癖が出ている。

「くツ！！」

押し返されてしまったワルドは、後ろによろめく。

その体勢を崩してしまった僅かな一瞬。それを見逃すはずもなく、才人は猛攻という言葉が似合うような攻めを開始した。

「らあっ！！」

「ぐツ！！」

「いい調子だぜ、相棒！」

ガキン！ガツ！と鉄が触れ合うたびに火花が散る。才人は相手を休む暇もなく、右へ左へデルフリンガーを振る。しっかりとした剣術ではないので、兎に角、滅茶苦茶に奔る。

ワールドは、才人の剣筋がまったく読めず、防戦一方だった。

「くそ！」

正式な剣術を学んだワールドには、才人のメチャクチャな剣筋には対応し難い。

雨霰と降り注ぐ剣戟を、持ち前の運動能力と反射神経で避けていくぐらいである。だが、逆に正当な剣術のセオリーにあった攻撃があれば、

「ッ！」

顔を狙ってきた突きを、軽く杖で払う。

ワールドはそのまま魔法衛士隊の黒いマントを翻らせて、優雅に後ろに飛び退り、体勢を整えた。

「すごい！！」

ルイズが真っ先に驚きの声をあげる。

ギーシュやキュルケも繰り返される、まるで舞踏のような戦いに呆けたような表情で、見入ってしまった。

「魔法衛士隊の隊長を押すとは、いやはや……」

「ちゃんと毎日、頑張っているのよ。サイトは」

そうやって褒められる弟子を見て、シヤナは胸を張った。

ワールドの所属する魔法衛士隊とは、陛下を守る直属の護衛隊のことだ。

そこに属するメイジは普通のメイジとは違い、詠唱さえも戦いに特化されていて、杖を構える仕草、突き出す動作、杖を剣のように

扱いつつ詠唱を完成させ、魔法を繰り出す。

戦闘に適した体系を習う、数多のメイジの中でもエリート中のエリート、それも戦闘に関してのエキスパートであるのだ。

「これは勝ってしまうんじゃないかい…」

ギーシュがごくりと唾を飲み込む。

ワルドは、そのエリート部隊の中でも、一隊を任されるメイジである。

単純な強さも中々のものである。

「魔法は使わないのかよ」

才人にそう言っただけで挑発する。

安い挑発をする時の才人は、かなり気が大きくなっている。別に魔法を避けたり、無効化したりする術が在る訳ではない。

何の確証も無く、単純に攻撃を誘っているのだ。これがシャナ達なら、返す算段をいくつも用意しているのだが、まだ素人に毛が生えた程度の才人に、それを求めるのも酷だ。

「あのバカ…」

エドは頭を抱えている。

この後、大怪我したら、直すのは自分だからだ。体力の消耗は避けたい。

「いや、正直な話、悔っていた」

その挑発にワルドも乗ってしまう。

「では君に僕の魔法を披露するよ」

ワールドはそう言い、何やらブツブツと呟き始め、そして細剣を横レイピア薙ぎに振るった。

「な…！」

目の前を吹き抜ける、裂く様な大気の流れ。
空気が振動するような音。そして、

「う…、わ…！」

空間が歪んだ。

才人は見えなかった。後方にあつた樽の山まで、見えない何かによつて一緒に吹き飛ぶ。殴られたような痛みが、全身を襲った。才人が突っ込んできた樽は高い音をたててバラバラに砕け散った。ワールドが誇り高く宣言する。

「今のは、僕の十八番の『エア・ハンマー』だよ」
「いたた…」

吹き飛ばされた才人が、真っ青な顔を瓦礫の中から出した。
打ち付けた腕や頬が、少し青あざになっているが、出血していたり、骨折していたりと、酷い怪我は無いようである。

「ちょっと！大丈夫なの？」

「平気平気。こんなのかすり傷だよ」

ルイズが駆け寄ってくるが、笑顔で流した。

「それなりに本気だったのだが…」

すぐに回復した才人を見て、ワルドは怪訝な表情を浮かべる。避けられてはいない。相殺されたわけでもない。だが、無事に済んでいた。

「まあいい。続けるぞ」

ワルドは、才人を休ませる事もなく次のエア・ハンマーを放つ。だが、今度の大気の衝撃は屈んで、避けられてしまった。勿論、才人には見えていない。大気という見えないモノが武器である以上、何となく感覚的に避けているだけだ。つまりは「ハンマー」という武器の属性による。

「おお！」

腹の底から叫ぶ才人は、物凄い身のこなしで風の槌を避けていく。武器の特性上、ハンマーは縦か横にしか振ることができない。剣と違って重いからだ。それが解つていれば、来る方向はある程度予測できる。

才人に当たることない幾つかの風の槌は、周りの壁を次から次へと崩していく。

「ちょっと暴れすぎよー!!」

その様を見ていたルイズが声を荒げる。

だがワルドは魔法を放つのに集中し、才人はその魔法を避けるのに必死なため、ルイズの叫びは届いていない。

「チッ！」

ワールドから放たれるエア・ハンマーを辛くも才人は避けている。だが、吹き荒れる暴風を避けて飛び込むだけの余裕が無い。旗色が段々と悪くなり始めた。

(くそ…、どうすりゃいいんだ！)

ワールドの杖の先からは風のメイジがあまり使うこともない炎球ファイアボールが放たれる。

その炎球を数十、才人に向けてばらまく。閃光の二つ名にふさわしい詠唱速度である。

「がはっ…」

善後策をはじめ出そうとしていた才人は、しこたま喰らってしまった。

その出来てしまった隙へ、最後の一撃を加える呪文を唱える。

「やっぱりプロね…」

シヤナが呟いた時、

「デル・イル・ソル・ラ・ウインデ……………」

完成した。才人の体を上から殴りつける空気の大槌。

これにやられた才人は、もう立ち上がれない。恨みがましい目でワールドを見ているが、足が痺れて経つ事も俛ならない。

「終了」

試合を見ていたエドが短く、宣言した。

「…参ったな」

ルイズはしばらく固まっていたが、はっとしてワルドに駆け寄る。

「ワルド！大丈夫！？」

「ああ、大丈夫だよ、ルイズ。君の使い魔は強いよ」

ワルドは、ヒビが入った細剣と杖を見つめてそう呟く。

何度と無く才人の攻撃を受けていた、自慢の愛剣はボロボロだった。

もし、もう一撃でも喰らっていたら、確実に折れていただろう。

そうなってしまえば、ワルドは魔法も使えない、剣も使えない。

「まさか…、本当に…？」

ワルドは本気こそ出していなかった。

最後の一撃はお互いに焦った結果だ。このまま続けていたら、どうなっていたかは解らない。

ワルドは立ち上がると、才人に歩き寄って手を前に出した。

「いい勝負だったよ。君は強いね」

「…どうも」

だが、才人が負けたのには違いない。彼は思いつきり悔しかった。だが、ここで振り払っては子供っぽいと考えて、手を出して握手する。

握手するとワルドは颯爽と宿へ戻って行った。

「全く、まだまだね…」

来たのは厳しいお説教。

これからまたしばらく、
ダライオマ魔法球で休息と修行の日々は
続く。

ドンドンと大きな木の戸を叩く音が辺りに満ちる。

時刻は既に夕刻。遠くの山に日は落ちて、トゥーリーワースの街も段々と闇が支配し始めた。

「こんばんはー！」

誰も出てこないが、めげずに夏梨は戸を叩き続ける。

「こんばんはー」

幾度か繰り返したとき、ようやく根負けしたような雰囲気で、ギイツと軋む音と共に、重い戸がゆっくりと開いた。

「どなたですか、このような時間に？」

現れたのは、60は過ぎているだろう白髪交じりの使用人だった。夜も迎えかけた時間に尋ねてきた少女を測りかねている様子である。その使用人に向けて、夏梨は元気よく自己紹介する。

「こんばんは、ガリア花壇騎士のカーリーヌです」

勿論、これは偽名だ。出自も全部でたらめ。

ジルドレー男爵の城に入るために用意した、でっち上げの肩書きである。

更に、そのでっち上げに信憑性を持たせる為に、マントまで用意した。立派に経歴詐称、間違いなく貴族を語った角で捕まるだろうが、別にどうでも良い。

捕まらない自信がある上に、捕まってもどうしようもないからだ。

「これはこれは、騎士様。よくぞダルク城へおいでなされました」
「予定より遅れて申し訳ありません。実はですね……」

ぐいっと右手の縄を思いっきり引っ張る。

「痛って、引っ張るんじゃないよー！」
「うるさい！」

その先には縄でがちりと縛られたミゲルの姿があった。
何とも悔しそうな顔で、使用人の顔を穴が開く程に睨みつけている。

「いや、この少年がですね、街で盗みを働いておりまして……」
「なるほど。捕まえていらしたと」

ようやく捕まえたといった様子で夏梨は喋る。
いつものぶつきらぼうで、クールな様子は一切無い。必死になつて演技をしているのだが、気がついた様子はない。

「ええ、お陰でこんな時間になってしまいました」
「お疲れでしょう。ささ、どうぞ」

使用人は夏梨に入城を勧めた。勿論、彼女はちゃんとその誘いに乗った。

「では、お言葉に甘えて。おら、さっさと来い！」
「痛いから、引っ張んな！ブス！」

最後の一言には腹が立ったので、思いっきり力を込めた拳骨をかましておいた。

「本当に大丈夫？」

一方、ダルク城の上空ではシルフィードが滞空していた。一護とタバサが突入の時を待っていた。

「心配すんな、俺の妹だから」

何故、それが信頼する根拠となりうるのか。

絶対的な信頼を彼女の作戦と演技に置いている、一護の態度を怪訝そうな顔で見つめた。

「あいつが、大丈夫って言ったんだ。なら、信じようぜ」
「……」

そう言われると反論できない。
大人しく、タバサは黙った。

「これはこれは、騎士どのが派遣されると聞いていたが、まだこの様な若い方が来られるとは……」

使用人に案内された応接室で、夏梨はジルドレー男爵と向かい合っていた。

ミゲルは案内してきた使用人によって、どこかへ連れて行かれてしまった。彼が犯人を知っているというなら逃がすことは無いだろう。そう考えているなら、帰って好都合である。

「いや、若いつて言っても、もう16ですよ」

ケラケラと笑うが、年齢詐称も甚だしい。実際は、まだ13になったばかりである。

勿論、これはこの城に潜入する為についた「嘘」である。

「そうでしたか…。で、カーリー又殿。貴方をお願いしたい事というのは…」

「ああ、そうでした。怪死事件の調査でしたよね」

「いえ、そのことなんです…」

そう言って、懐から資料を取り出そうとするが、何故か制された。いきなり言い難そうな態度になった男爵を怪訝な顔で、夏梨は見つめる。

「どうされました？」

「いえ、犯人はもう分かっているのです」

手を組んで語り始める男爵の髭が小さく揺れる。

「実はカーリー又殿が連れてこられた、あの少年」

「あの少年が何か？」

聞き返す夏梨に、じつと目を見つめながら、

「あの少年が犯人なのですよ」

男爵は言い切った。

(うつすら予想はしていたけど…)

ここまで露骨に罪を着せてくるとは思わなかった。

最初はこの男爵が犯人ではないという前提の元に話を進めようとしていたが、これでは自ら疑ってくれといているようなものだ。後はボ口を出すのを待てば良い。

事件現場はどれも陰惨なものばかり。

到底、5、6歳の少年が出来るような芸当ではない。

「では、私は期せずして捕まえてしまったと。何という偶然でしょう」

「はは、これも始祖のお導きでしょう」

顔は笑っているが、目の奥が笑っていない。

その上辺だけの笑顔を軽く夏梨は避ける。それを気に入らなかったのかと思った男爵は続けた。

「カーリー又殿。このような遠方までいらしたのですから、私のコレクションを見ていかれませんか？」

「ええ。喜んで」

いとも容易く釣れた。

このコレクションに何か関係があるに違いない。

応接室を立つて出て行くシルドレーに夏梨はつき従う。

「どっこぞ」

「どっこぞ」

彼は近くにあつた階段を指差す。全てが石で固められた、不気味な階段である。

その階段を事も無げに、コツコツと規則正しい音を立てながら、地下へと降りていく。

「あ、待ってください」

壁にはロウソクが置いてあり、一応は真つ暗にはなっていない。だが、地下特有の薄ら寒い不気味さが、一面に漂っている。

「ニコは…?」

段々と深い場所へと降りていく事を不安に思った夏梨が、前を歩く男爵に尋ねる。

「ダルク城自慢の地下室ですよ」

今まで笑っていたのに、今度はニコリともせず男爵は言った。

そう言つて階段を下りていった先には、重い鉄の扉があつた。見た目は何の変哲も無いが、夏梨にはこれが地獄へと続く門に見えた。

「さぞ、得とご覧あれ…」

木よりも重い軋む音がして、鉄の扉が開いた。

途端に夏梨の鼻を突き刺したのは、腐った肉の匂い。

「うっ…」

鉄の扉の向こう。

そこに広がっていたのは、地面に血がこびりつき、壁には無残な死体が壁に立てかけてあるという凄惨な部屋だった。オマケにまだ生きているのか、磔にされた男の子が猿轡を噛まされたまま、転がしてあった。入ってきた新しい人物を見て、助けを求めるように、呻き声を上げた。

「何ですか、これは…?」

「素晴らしいでしょう…!」

凄惨な光景に言葉を発することが出来ないでいる夏梨に、ジルドレーは恍惚の笑顔を浮かべたまま、語りかける。それは恰も、死体をコレクションしているような様子だった。

空気孔として用意された隙間から差し込む、僅かばかりの月明かりが、一層不気味さを掻き立てる。

床には白い石灰で固められた円形の魔法陣が、引かれている。

「ここは、悪魔を召喚する為の場なのですよ…!」

「悪魔…?」

死神になつてまだ短いが、生憎と悪魔という存在にお目に掛かった事は無かった。

ネギやアレンは会った事があるようだが、夏梨には経験がない。

「そうなのです。悪魔を呼び出し、我が力とする。そして、あるお方を蘇らせたのです!」

そこにあるのは領民から信頼される心優しい男爵の姿ではない。

何者かに取り付かれたような顔をした、怖ろしい殺人鬼の姿だった。

「あるお方と言うのは…?」

夏梨は、この光景に怯んではない。ただただ、唾棄すべきものとして看做しながら男爵に聞いた。その不遜な態度に腹を立てることも無く、男爵は短く言った。

「シャルル・オレルアン公ですよ。信心の相手たる我が君を蘇らせたいのです」

床に転がした男の子の頭を、猫か犬を撫で回すように弄りながら、当然のような喋り口調で続ける。事実、彼はここに集められた少年達を、犬か猫、もつと言え、家畜程度にしか思っていないのだらう。

見ているだけで気分が悪い。トラウマになりそうな光景だ。

「あの王位を篡奪した憎きジョセフに復讐するのです」

そう言うのと夏梨を応接室まで案内してきた使用人が、磔にしたミゲルを運んできた。ガラガラと石の床を引き摺る音が、天国へのカウントダウンに聞こえてきた。

「んー!んー!」

口を塞がれたミゲルが最後の抵抗を見せる。

だが、磔にはガツチリと太い革のベルトが巻かれ、彼の動きを押さえつけていた。テキパキと用意する使用人の傍で、男爵は柵から針や刃物が入ったバットを持ってきて、そばに置いた。

まるで今から、彼の手術でも始めるような雰囲気だ。

「彼はですね、その悪魔を呼び出す良い生贄なのですよ……」

それが当然と言う調子で男爵は言う。

ここまで言えば、ミゲルの言っていた事とも合致する。怪死事件の死体は、この男爵が悪魔召喚の過程で生み出したモノだ。

「何故、それを私に……？」

「決まっているでしょう……」

質問を口にした夏梨に、笑いながら男爵は言った。

「貴方もその生贄になって貰いたいからですよ」

準備をしていた使用人がいつの間にか、後ろに立っている。ビシッと手を叩かれ、持っていた杖を落としてしまった。石の床に虚しく、落ちる音が響く。

「ちっ！」

潮時だ。

これ以上は続けていても無意味だろう。

「さあ、カーリ又殿。我が崇高な目的の為に……」

杖の無いメイジは無力な存在。段々と男爵がにじり寄ってくる。そう勘違いしていた。

「破道の三十一 赤火砲！」

「んあ！」

杖も無く赤い火を天井に向けて放つ。その事に男爵は驚いていた。ガラガラと衝撃で、天井の一部が崩れだした

「ミゲル！」

その混乱に乗じて、捕らえられたミゲルの拘束を切り裂き、部屋から飛び出した。

その衝撃は外からも見えていた。
特に上空からは。

「きゅい！きゅい！合図なのね！」

「ああ！」

シルフィードから一護は勢い良く呼び降りる。

「まっ……」

タバサの制止も虚しく、一護は城の中へと突撃する。

「逃がさんぞ！」

瓦礫を回避した男爵は鉄の扉を叩き折り、地上へと這い出していた。

美しい髭と髪は健在だが、狂信者の顔を微塵も隠そうとはしていない。

「くそ！」

ミゲルを連れたままだと逃げ難い。

一人だけなら、瞬歩でどこまででも逃げられるのに、彼が居たのではそれができない。はつきり言って今この時点で、ミゲルは重荷でしかなかった。

「あう！」

ドタツと足が回りきらず、ミゲルが扱けてしまう。夏梨もそれに引き寄せられ、足を止めてしまった。逃げる二人が止まった瞬間を好機と見た男爵は、

「行け！」

自分の使い魔に命令を下した。

彼の声に反応するよつに、廊下のあちらこちらからヒルが飛び出してくる。それも普通のヒルではない。ビール瓶と同じくらいの大さきのヒルだ。

「うげ！」

指先と変わらないサイズでも気持ち悪いのに、それが大きくなっ

たのだから、更に気持ちが悪い。ベタベタと、その気持ち悪い軟体動物が張り付いていく。

「く、取れない…」

ヒルは一度噛み付くと中々取れない。無理矢理に剥がそうとすると皮膚を食い破ることも多い。その上、今回は一匹一匹が冗談みたいに重い。

「ヒヒ、我が使い魔たちの力はいかがですか、カリー又殿」

いつの間にか男爵はハンドベルを持っている。

目の焦点は定まらず、何かを追い求めるような調子である。その顔を憎憎しげに夏梨は睨みつけた。その殺すような視線を避け、男爵は言葉を続ける。

「私はこの悪魔を召喚する過程で、新たな魔法を生み出しましてね…」

そう言いつつ、ハンドベルを鳴らした。

澄み切ったベルの音が、ダルク城の回廊に響く。その瞬間、ドーンと轟音を立てて、城の壁が爆発した。瓦礫が吹き飛び、爆風が舞う後には、大穴がぼっかり開いていた。

「な…」

一番、驚いたのは傍で見ていた夏梨だ。

「ヒヒヒ、このベルに掛けられた魔法は、私のヒルを爆発させる能力があります…」

簡単に言っているが、実際是最悪だ。
今は壁に居たヒルだったから、無事に済んだものの、

(この張り付いたヒルを標的にされたら…)

最悪だ。まだ、張り付いた数が少なくて良かったかもしれない。

「さ、もう一度。今度は貴方の腕が？ げる様に爆発させま…ぶ！」
「人の妹に何してんだ！」

言い切らないうちに、開いた大穴から黒い影が飛び込んできた。
遅れてばさばさと羽音が聞こえてくる。

「助かったよ、一兄」
「まったく…。ちょっと痛えけど、我慢しろよ」

妹を気遣いながら、できるだけ力を込めて、ヒルを引き剥がす。
歯の跡がくつきりと白い肌に残ったが、夏梨なら十分に治療できる。

「首尾は？」
「上々。地下室にもスツゴイ証拠があるよ。二度と見たくないけどね」
「そっか…」

くるりと一護は振り向き、蹴られた衝撃から回復した男爵を睨む。

「まったく、クソヤローだな。テメーは」

そう吐き捨てた一護に対して、遂に男爵の仮面が剥がれた。

「クソヤローだと！崇高な目的があるこの私がクソヤローですと！許しませんよ！」

丁寧な口調は全て演技だったようだ。

こちららも夏梨が冷静で丁寧な仮面を脱ぎ捨てる。

「は。あんな胸のむかつくことしてるアンタの目的なんか、どうだっつていい」

その様子をタバサは無言のまま、じっと見ていた。

間違いない戦場になる場所に佇む二人を、シルフィードに乗ったまま、見ていた。

「気をつけて。アイツは使い魔を爆発させてくる」

じりつとジルドレーの動きを窺いながら、夏梨がアドバイスする。どこかで使われた戦術だ。この時点で一護は確信する。

「心配すんな。大丈夫だ」

ニコリと笑って、夏梨の頭をぐしぐしと撫でた。

「二人とも、コイツを連れて安全な場所へ行っていてくれ」

「OK」

「一人じゃ…」

単独で向かおうとする一護を止めようとするが、夏梨にミゲルと一緒に強制的に排除された。

「大丈夫。絶対に負けないから」

離れていく妹の目は信頼に満ちていた。

「オノレ！行け、我が使い魔たちよ！」

ジルドレーの合図と共に壁の彼方此方からヒルが飛び出してくる。

「こいつが…」

そう言いつつも、斬月を払い、纏めて全てを横薙ぎに斬り捨てる。じわりと普通のヒルでは在り得ない様な色をした体液が、廊下の絨毯に染み出た。体液を出し、空っぽになったヒルを一護は踏みつけた。

「どうした、これで終わりか？」

「間違えるな！」

叫ぶジルドレーはハンドベルを思いつきり振り下ろした。

楽器なので、これ自体を幾ら上下に振っても、痛みはない。だが、染み出た体液が勢い良く燃え始める。

「！」

「驚いただろう！ヒルの皮は火薬！中の体液は油なのだ！」

つまり油が染み付いたヒルの皮は、弾け、爆風が溢れ出る。

「ヒヒヒ！私の邪魔をするからこうなるのだ！」

燃え盛る紅い炎を見ながら、黒い夜天に向かって叫ぶ。
宛ら、何かの宣誓の様にも見える。

「さて、後はあの逃げた3人を捕ま……」

ジャキン、と音がして、ジルドレーの首筋に刃が触れた。

冷たい感触が体中を駆け回る。その怯えた男爵の視線の先には、
冷静に怒りを向ける一護がいた。彼は炎を真っ直ぐに突き抜け、男
爵へと迫ったのだった。

「一つ、テメーに聞きたい事がある」

どこまでも冷静に。

どこまでも冷酷に。

男爵へと問いかける。

「あの子の兄貴、殺したのは、お前か……？」

「1」めんなさい……」

城から少し離れたところでシルフィードは、滞空していた。
ばさばさと普通に飛ぶよりも、力を込めて、羽ばたいている。

「何だつて…」

「そんな事、可能なの？」

ミゲルの懺悔に耐えかねたタバサが、夏梨へと問い掛ける。

「兄ちゃんもオレルアン様が大好きだったんだ。俺たちみたいな平民にも優しく接してくれる…」

グスグスと泣きながらミゲルは続けた。

「だから、男爵に蘇らせる手伝いをして欲しいって言われた時は凄く嬉しかったんだ…。でも…」

「でも…？」

夏梨に反応したミゲルは、小さく頷いた。

タバサはこの力無く泣きじゃくる少年を、責められなかった。

「あんな事になるなんて思ってなかったんだ…」

「人を生き返らせるなんて、できるの？」

若しかしたら、そんな絶望にも似た確信をを持って死神に問う。

夏梨は力なく、横に首を振った。

「そんな事、誰が言ったんだ…！？」

「そうですね。彼の兄は私が殺しました」

ジルドレーは何の罪の意識も無く、ただ当然のように答えた。

「彼も本望でしょう。敬愛していたオレルアン公復活の贄となれたのですから」

ジルドレーは、その時の事を克明に思い出していた。

好きなだけ弄んだ少年の身体を裂き、その肺臓を手に取り、その臓腑の匂いを嗅いで悦に入る自分。更にはその臓腑を掻き出し、死の痙攣が見えるようその中にどつかと座り、断末魔の苦悶に喘ぐ様と臓腑の生温かさを楽しむ。

紅い鮮血で彩られるたびに、自分の傍へと敬愛する男が来る様な気がしていた。

「何人も殺しましたけど、皆、オレルアン公の為に死ねたのです。良いことじゃありませんか！」

ここまで黙って聞いていた一護は吐き気のするようなジルドレーの自分語りに、思わず構えを崩してしまった。そして、その一瞬を男爵は見逃しはしなかった。

一護の左手へとヒルが殺到する。

「ヒヒヒ、形勢逆転！」

後はベルを鳴らすだけ。

そう思って、ベルを高く掲げた。

「貴方もオレルアン公復活のた… ば！」

だが、そう思っていた男爵の口へと、綺麗に生え揃った歯を叩き

折りながら、一護は左手をぶち込んだ。

何匹ものヒルが付いたままの左手を。入りきらなかったヒルが衝撃に耐え切れず、切れて落ちた。

「おら、返すぜ。この爆弾…」

「あ、が、が…」

折られた歯が何本からポロリと床へと落ちる。

それを右の視線だけで見つつ、一護は挑発する。

「どうした…？鳴らしてみろよ、その左手のハンドベル…」

そんな事はできない。

今、自分の口の中には銘一杯詰め込んだ火薬と油で出来たヒルが居る。その状況で鳴らせば、吹き飛ぶのは決まっている。

「鳴さねえのか…、なら、そのベル、腕ごと…」

右の手にだけ持った斬月を大上段に構える。

柄もつばも無い大刀が、これから何処へ向かうのか。ジルドレーは解ってしまった。

「俺が貰う！」

振り下ろされた斬月がジルドレーのハンドベルを左手ごと巻き上げる。

「ぎゃああああ！」

斬られた激痛が全身を走りぬけ、ジルドレーは屋敷の全ての部屋

に響き渡るような絶叫を上げた。

本人の鮮血が、切られた左肩から吹き出る。

「オノレ…、よくも私の左腕を！」

叫ぶジルドレーに一護は追撃の手を緩めない。

丁度、廊下の壁に飾られていた細剣を、這い蹲り、逃げ出し始めた殺人鬼を縫い付けるように脛に突き刺した。

そして、足元に転がってきたハンドベルを踏み潰す。

「ぎいやああ！」

もし、二人が見ていたら間違いなく目を背けていただろう。

右の脛を押さえられたジルドレーは、もう動くことも俣ならぬい。

辛うじて生きてはいる事が、彼に取っては最早苦痛でしかなかった。

「あ、足、私の足が…。お、お願いだ…。だ、だすけて、くれ…」

苦痛が頂点に達したジルドレーは涙ながらに懇願する。

これで相手が天使なら救いもあったかもしれない。だが、相手は死神だ。

「お前が今まで殺してきた奴らもそう言ったんじゃないのか…？」

涙を浮かべるジルドレーの目は、冷酷に処断する黒い神の姿を映し出した。

「これでテメーは動くこともできねえ…」

足は完全に断ち切られた。

「武器を使って戦うことも出来ねえ……」

残るのは右手のみ。だが、ハンドベルが無くては、爆発させられない。

この爆発の呪文に頼りきっていた男爵は、通常の杖の携帯がすっかり形骸化していたのだ。

尤も持っていた所で、体を開く孔が一つ余計に増えるだけだ。

「どうだ……？」

そんな無残な姿のジルドレーへと問う。

「少しは味わえてるか？ 殺される側の気分をやつを……」

「ひ……？」

もう声も上げられない。

断末魔の時が迫る。

「忘れんなよ……」

ゆっくりと斬月が振り上げられる。

彼の全ての罪を処断する、断罪の剣が。

「その恐怖を！」

ストッパーが切られるように、速度と質量を持った一撃が振り下ろされる。

「頭の芯まで叩き込んだまま、消える！」

斬月が、ジルドレー目掛けて落ちた。

「フレディどのおお！」

「おーい、終わったぜ」

呼ばれたシルフィードは勢い良く、開けられた大穴に飛び込んだ。真っ先に彼女が見つけたのは、紅く染まった廊下と一護の服。

「きゅい！イチゴ、怪我してるのね！」

「あ、大丈夫だ。これは返り血だ」

そう言っ上に乗っていた二人も降りてくる。

真っ先にタバサは足から剣を生やし、倒れている男爵に向かっていった。

「殺したの？」

顔も上げずに聞くが、それに対して涼しい顔で答える。

「殺してねえよ。怪我は酷いけど、ノビてるだけだ」

顔についた血を袖で拭いながら、答えていく。

傍では剣を筆りつつ、夏梨が傷を治していく。死神は戦闘してナ
ンボの存在でもある。治療の技術もしっかり確立されているのだ。

「ま、ちゃんと罪を問わないと不味いんだろ？」

結局、一護はジルドレーを殺さなかった。後頭部に思いつきり刀
の峰を叩き込んだだけだ。勿論、こんな考えもあったのだが、本懐
は別にある。

一護の気遣いに、タバサは頭を下げた。

「ありがとう。私だったら、死なせてたかもしれない」

「おいおい、ガキが物騒なこと言うんじゃないよ」

ポコツと優しい裏拳でタバサの頭をこずいた。

「……………」

その様子をミゲルは羨ましそうに見ていた。

「俺、これからどうすれば良いんだろ……………」

彼の何気ない質問には、タバサと夏梨は答えられなかった。
自然と一護へと6つの視線が集まる。

「あ……………」

言いにくそうに頬を掻きながら、年長者は言い始めた。

「お前、親は？」

「近くの村にいる……………」

「そっか、じゃ、そこへ帰れよ」
「え……」

ミゲルは顔を上げて、オレンジ頭の男を見た。
その顔はとても嬉しそうに笑っていた。

「親が居るなら、安心させてやれ。少なくともお前の復讐は終わっ
たろ？」

「…うん！」

ミゲルは一番、嬉しそうな声で言った。
これで此方は終わりだ。

「さつて、男爵様はどうするかね……」

「この憲兵に引き渡す。後はちゃんと法の裁きを受けさせる」
「そっか」「了解」

一護と夏梨が短く、返事をした時、扉を勢い良く破り、突入して
くる音が聞こえてきた。

「噂をすれば、やってきた」

相変わらず、坦々とタバサは言った。

「さつて、これで終わりだな」

あたり一面、緑の草原を夜風が吹き抜ける。

ジルドレーを憲兵に引き渡した後、3人はシルフィードに乗り、ミゲルの故郷へとやってきていた。何も無い辺鄙な村である。遠くに見えるのは小麦の苗だろうか。緑の絨毯が広がっていた。

「その、ありがとうございます。それと、ごめんなさい」

何について謝ってるのか。

三人は、業とらしくとぼけた。

「感謝されるような事はしていない」

「そうだな、たまたま仕事と一緒にただけだ」

「君はオマケ」

三人なりに気を使ってみる。

何とも言えない位に不器用な使い方ではあるが、ミゲルは再び頭を下げた。

「じゃあな！」

「楽しかったよ！」

「さようなら」

三人が再び、竜に乗る。

シルフィードが魔法学院を出たときと同じように、力強く羽ばたき始める。

「ありがとう！」

ミゲルは、青い鱗の竜が見えなくなるまで、手を振り続けていた。

トウリーワースの憲兵詰め所。

ここにはこの街を治めていたジルドレー男爵が運び込まれていた。彼を裁くのは、屋敷の調査が終わってからだが、十中八九、死罪は免れないだろう。

度重なる誘拐と殺害、おまけに禁忌と^{タブー}されている新呪文の開発。どれもこれも、一級品の罪状だ。

「やれやれ…」

そういつて隊長は頭を掻いた。

下級貴族の家督を継がない者たちの集まりではあるが、それなりにプライドもあり、実力だっている。それを王都から来た騎士に全部、掻っ攫われてしまった。

「気がつけなかった、私たちにも責任がある…か…」

「隊長、どうされました？」

自嘲のように呟いた言葉は、バツチリ部下に聞こえていた。

これだけの大規模な事件になったのに、自分たちは全く気が付かないまま、日々の街の平穏維持に努めていたのだ。決して野心があるワケではないが、これは気分が良からうはずが無い。

これでは、舐められてしまうと思った隊長は、顔を一発叩いて、気合を入れなおす。

「いや、何でもないさ」

「ならいいですけど」

そう言って再び、目の前の書類に向きなおり、気合を入れた。

「ん…」

そんな気合いを入れなおした隊長の鼻を、甘い香りが刺激した。

「な、ん、だ…」

途端に瞼が重くなっていく。

「これは…、眠り、の…」

気がついたときには遅い。隊長は部下共々、眠ってしまった。眠った憲兵達を一瞥もせず、詰め所の中へ男が入ってきた。男の足は淀みなく、地下牢へと向かう。

「…」

地下牢ではジルドレーがぶつぶつと呟いていた。

そこには、もう美髯を蓄え、民に慕われていた領主たる男爵の姿はない。

「シャルル様…、私は諦めませんぞ…」

「いえ、貴方は終わりですよ」

呟いた男爵の耳に、鉄格子の向こうから平坦な声が掛けられた。そこには、

「フレディ殿ではございませんか！」

鉄格子の向こうには、男爵が一番気に入っていた男の姿があった。赤茶けた髪の毛、この男。だが、屋敷で会っていたのとは、纏う雰囲気は全く違う。鳥のような意匠の入った黒いマントを着込み、顔の下半分を仮面で覆っている。

「申し訳ありません。折角、貴方に召喚の法を学んだというのに……」

悔しそうに、そして、哀しそうにジルドレーはフレディに言う。

「ええ、とても残念です」

「待っていて下さい。直にでも、次に取り掛かりますから」

決意表明するジルドレーの傍で、フレディは事も無げに言う。

「何を言っているんですか。次は無いのです」

「へ？」

マヌケな返事をした男爵は、首の無い自分の体を見た。

次にその認識することも出来ない眼が写したのは、何時取り出したのか、大鎌を振るったフレディの姿だった。

「貴方、もう用済みですよ」

どさつと鮮血を撒き散らし、男爵の体は崩れ落ちた。

もう聞こえていないだろう、彼の耳。転がってきた頭部の髪を持つて、耳元で囁いた。

「その耳に刻んでおけ」

どこまでも優しい声で。

「
我らの名は『アリストリア・ペリグリース』
」

39・Fanaticism(後書き)

ジルドレー男爵のモデルはお気づきの方も居られるでしょうが、100年戦争の英雄であるジル・ド・レイであります。ジャンヌ・ダルクが処刑された後、段々と狂気に走っていった彼は同性愛者で、魔術にも傾倒していました。

今回の話は、一護の「黒」の面を見せる為の話でもありません。彼は決して、スーパーヒーローではありません。ある意味では黒いダーティな部分も持っていると思っています。その黒い部分を強調する為の話です。

そのストーリー設定において、彼程の適役は居ませんでした。もっと史実の彼のように、狂気に満ちた一面を描こうとも思いましたが、書いているだけで気分が悪くなりそうだったので、止めました。

彼の逸話については、是非とも検索してみてください。同時に童話「青ひげ」も読まれると良いかもしれません。

次回からは再び、ルイズ一行であります。

40・The Midnight Wind

空には重なった二つの月が昇る。

「ふう……………」

才人は一人、部屋のベランダで月を眺めていた。

ギーシュ達は、一階の酒場で酒を飲んで騒ぎまくっている。

明日はいよいよアルビオンに渡る日だということで、盛大に盛り上がっているみたいだ。

だが彼は、今日は飲む気はしなかった。

二つの月が重なる晩の翌日には、船はアルビオンに向けて出港するという。

「はあ……」

再び、重いため息をついて、才人は夜空を見上げる。

瞬く星の海の中、赤い月が白い月の後ろに隠れ、一つだけになった月が青白く輝いている。

その月を見ていると、何故だか才人に故郷を思い出させる。単純に、故郷の月を思い出すのだ。全く色も大きさも違っているが、それでも錯覚してしまう。

「今頃、父さんや母さんはどうしてるんだろな……」

そんなことを呟く。

誰にも、何も、言わないまま、こんな世界に来てしまった。

両親は今頃、搜索願でも出しているのだろうか。学校の友人たちはどうしているのだろうか。一回、思い出し始めると際限なく、頭

の中に故郷の人たちの顔が繰り返されるのだ。

魔法使いなど、絵本や小説の話だと思っていた。

そんな、絵本や小説の御伽噺の中で、実しやかに囁かれる作り話だと思っていた。だが、今間違はなく、魔法を使う人種に触れ合っているのだ。

疑いようが無い。

「はあ…」

そんな風に、ため息を付いては、月を眺めては一人でブツブツ呟いている。

単純にホームシックに掛かっている才人に、後ろから声がかけられた。

「サイト」

振り向くと、ルイズが立って、じっと見つめている。

「どうしたのよ？一人でブツブツ言って……変よ」

その言葉にムツとした才人はルイズを細目で睨んだ。

「変、言うな」

「変じゃない」

続けざまに言うルイズに、才人は反論する気も失せてしまった。

「もういいよ変で」

「なによ、それ」

ルイズは、何故才人がこんな風にアンニユイになっているのか、全く分かっていないようだった。

その事が才人を、どうにも苛立たせる。普通、女の子に腹を立てることなど無いのに、どうにも調子がおかしい。

「もういいよ。いろいろと違うし」

「なにが違うのよ」

突き放すような才人の態度に、今度はルイズがムツと来た。

「家族には何も言わないまま、この世界に来ちまったからさ」

そのさり気無く言った言葉に、ルイズは俯いた。

「……悪いとは、思ってるわよ」

「犬扱いなのにか？」

俯いた彼女の気持ちに追い討ちを掛けるような事を言う。

「しかたがないじゃないの。わたしは貴族なんだから。外聞が悪いじゃない」

「知るかよ……」

ルイズにも事情がある事は、才人だって理解している。

だからと言って、自分の扱いに納得できてはいない。大好きなパソコンも出来ない、メールも出来ない。無い無い尽くしの世界で、どうしろというのか。

「はあ、手がかりが何も無いんじゃ、帰れようがねえよ」

才人は、疲れた声で呟いた。

「……この任務が終わったら、きちんと探してあげるわよ」「
どうだか」

ルイズは腰に手を当てて、可愛らしく首をかしげた。
華奢な体つきが、一々、可愛らしさを加速させる。

「わたしは貴族よ。嘘はつかないわ」

「じゃあ、もし、手がかりが見つからなくて、俺が帰れなかったら、
どうすんだよ？」

何故か、ちよつと頬を染めて考え込んだあと、決心したようにル
イズは言った。

「……そのときは、ちゃんと面倒見てあげるわよ」

ジト目でルイズを睨む。

全く、才人は信用していなかった。犬の行き先の面倒を見る飼
主が何処に居るといふのだろうか。

「結婚しても？」

「結婚は関係ないじゃない」

ルイズが、ぐつと才人を睨み返す。

「いいよな。お前は……」

はあつと、さつきよりも深いため息を才人は吐いた。

何とも癪に障る言い方をするので、ルイズは段々とイライラして

きた。

「どうしようもない性格してても貰ってくれるってやつがいるんだから」

誰の事を指しているのかは、一発で解った。

「奇特な人だなあの子爵は……。君は、幸せ者ですね」

才人はイヤミな声で言った。明かにやきもちだ。

ルイズはむっとして、腕を組んで言い放った。

「なによ…、その言い方…」

でも、言葉が続かない。

それは才人も同じで、言葉が続かなくなった二人は顔を背け合った。

ルイズは、目をつむると、気を取り直すように言った。

「とー、にー、かー、くー！」

気を取り直す様に言ったその声は、かなり苛立った口調だった。ますます、才人は腹立たしく感じてしまふ。

「ハルケギニアにいる間は、あんたはわたしの使い魔なんだから、わたしが結婚しようがなにしようが、わたしを守ってもらおうよ。あと掃除選択。その他雑用」

黙っていれば言いたい放題。

いい加減、言い返そうとして才人は振り向いた。

「……」

だけでも、言葉に詰まってしまっ。

長い桃色がかったブロンドの髪の下では、鳶色の瞳をルイズは怒りに輝かせている。

白い頬が、ほんのりと怒りで赤く染まっている。

への字に曲げた口元も愛らしい。

ほんともう、容姿だけは、容姿だけは、良くてグッときてしまっ。

どんなにムカつくことをされたり、言われたりしても、やっぱり綺麗で、見惚れてしまっ。

(やっぱり、そうなのか…)

と思わずには居られない。

ルイズの容姿がこんなにも綺麗だから、こんなに才人の鼓動は高鳴るのだろうか。

でも、それだけでは説明できない気がした。

(そんなワケねえよ、だって、コイツは…)

いくら綺麗で可愛くても、腹の立つ事を言われ続けているにはドキドキするわけがない。

自分の手を握って、顔を赤らめていたルイズ。

自分を看病してくれたルイズ。

ゼロのくせにフーケのゴーレムに立ち向かっていったルイズ。

そして、ゼロと呼ばれて悔しいと言って泣いていたルイズ。

ときたまルイズが見せる、勇気と、優しさと、そんな女の子らしいところ。

(なんだかなあ…)

重なって一つになった月を見るまで、家に帰りたいたの思わなかった理由に気づいた。

才人が何かを言おうとしたその時。

「え？」

ルイズが突然、自分の後ろを見て、啞然とした表情になった。

「どうした？」

才人が首を傾けて尋ねる。

ルイズは、自分の後ろを指差した。

「あ、あれ…！」

「どうしたんだよ？」

くるりと、ルイズの指を辿っていった。

だが、先程まで煌々と輝いていた月は、巨大な何かに遮られていた。

月明かりをバツクに、巨大なその何かの輪郭が動いた。

「うわ！なんだ！？ありやあっ！？」

「なによ、あれは？」

目を凝らしてよく見ると、その巨大な影は、なんと、岩でできたゴーレムだった。

「あれ？確かこのゴーレムは……………」

才人とルイズの記憶では、こんな巨大なゴーレムを操れるのは一人しかない。

巨大ゴーレムの肩に乗り、長い髪を風にたなびかせているそいつを、才人は忘れていなかった。

「フーケ！？」

二人は同時に叫んだ。

二人の叫び声にフーケは、口を吊り上げ、三日月の形で笑う。

「こんばんは、私を覚えててくれたのね」

本音を言うと覚えたくも無かったのだが、あんな印象的な登場と退場の仕方をされては、忘れることもできない。二人の脳細胞は、そんなに単純ではない。

フーケは、気が変わったかのようにの不気味な笑みを浮かべた。

「何とも、嬉しいじゃないか」

その表情にルイズは恐怖を感じて後ずさる。

才人は壁に立てかけてあるデルフリンガーを掴んでルイズの前に出る。

「お前は、捕まってた筈じゃあ……………」

才人はデルフリンガーを抜いて構える。

勿論、30倍もの体格のあるゴーレムには、蚊の刺す程度の力だろつ。

「何、親切な人がいてね」

二人を笑いながら見ている。
だが、その笑顔は悪人のそれだ。

「私みたいな美人はもつと世の中のために役に立たなくてくてはって、牢屋から出してくれたのよ」

フーケは笑いながら嘯いた。

月明かりを塞がれてしまったので、暗くて顔はよく見えない。

「おせっかいなヤツがいたもんだな…」

ギリツと奥歯を才人は噛んだ。

フーケの隣には、黒マントを着て顔には白い仮面を被った不気味な男が立っている。

そいつは何故かフーケがベラベラと喋り込んでいるのに対し、口を鎖したままだ。

「で？何しにきやがったんだ？」

間違いなく彼女の脱獄の手引きをしたのは、あの仮面の男で、十中八九間違いない。

才人はおどけたように剣を肩に乗せた。

「何、決まってるじゃない…」

更に、フーケの唇が鋭角に釣りあがる。

「素敵なバカンスをありがとうって、お礼を言いに来たんじゃないのッ!！」

フーケの目が吊り上がって、狂的な笑みが浮かぶ。

巨大ゴーレムの拳がギョーンと風を切る音をたてて、ベランダの手すり目掛けて飛んだ。

「ちっ!！」

直撃の寸前、才人はルイズを抱えて、部屋の中へと跳躍した。

その巨大な土くれの拳は、硬い岩でできた手すりをいとも簡単に粉々に破壊する。一瞬でも遅かったら、あの手すり共々、粉々になっっていたに違いない。

「ここらは岩しかないからね。土がないからって、安心しちゃダメよ!！」

「誰も安心してねえよ!！」

才人はルイズの手を掴んで、駆け出す。

「急いでしらせねえと!！」

階段を勢い良く駆け下りて一階の食堂へと向かった。

「んな!！」

「うそ!！」

だが、一階の食堂も、既に修羅場と行っていい状況だった。矢が飛んできて、此方からは魔法が飛んでいく。

「お、才人。遅かったナ」

そんな中でも、落ち着いた調子でリンは、声をかける。

「どうしたんですか、これは？」

流れ弾に当たらないように、身を屈めながらリンの元へと駆け寄る。

「どうもごうもねえよ！いきなり、来たんだ！」

見て解れと言わんばかりの勢いで、エドが怒鳴る。

その後ろで、ギーシユやキュルケ、ワルドが魔法で応戦している。此方からも火の玉や、風の塊が飛んでいく。だが、目立った成果は与えられていない。

「数が多いな…」

エド達はというと、キュルケたちと同じくして、床と一体化したテーブルを立てて盾にして、傭兵たちが放つ矢から身をかがめていた。

「オマケに慣れてるわね…」

歴戦の傭兵たちは、メイジとの戦いに慣れていた。

最初の衝突でキュルケたちの魔法の射程圏を見極めて、魔法の射程外から矢を射けてきた。こうなってしまうと、簡単にはこの劣勢は覆せない。

「あぶない！」

暗闇を背にした傭兵たちに、地の利があり、屋内の一行は分が悪い。
魔法を唱えようと立ち上がる者なら、矢が雨のように飛んでくる。

才人はテーブルを盾にしたキュルケたちの下に、姿勢を低くして駆け寄る。

「上には、フーケがいます」

「解ってる、足がさつきからちらついているだろ！」

巨大ゴーレムの足が、吹きさらしから覗いていたので伝える必要はなかったようだ。

絶対不利な子の状況の中、才人はキュルケたちを見た。

キュルケは魅力的な赤い髪を優雅にかきあげ、つまらなそうに、唇を尖らせて言った。

「ま、仕方ないかな。あたしたち、何しにアルビオンに行くのかすら知らないしね」

ギーシュは薔薇の造花を、不安そうに弄り始める。

「うむむ、ここで死ぬのかな。死んだら、姫殿下とモンモ……」

「うるせえ！」

「ぶー！」

そんな不安げにぶつぶつと言うギーシュの頭を思いっきり、エドが殴り飛ばした。

いきなり飛んできた鉄の拳に、鼻血を一筋垂らしながら抗議する。

「何をするんだね！」

「弱音、吐くのは死んでからにしろ」

ギーシュを黙らせてから、エドは言った。

「ここは俺たちが引き受ける。アレンとリナリー、んでネギに才人」

名前を呼んだ四人を指差して、冷静に告げた。

「バカな主人に付いて行ってやれ」

「了解です」「うん」「解りました」

聞き逃せない一言を言っていたが、ルイズの事は無視する。今は一分一秒でも惜しい。

「大丈夫ですか？」

「こっちは心配ないな……。寧ろ、人が多くて邪魔だ」

どうもエドは厄介払いをしたらしい。確かに彼の力は味方が多くては、多用できない。

そんな7人の傍で、キュルケはルイズに向き直る。

「ヴァリエール、勘違いしないでよ。あんたのために困になるんじゃないんだからね」

「わ、わかってるわよ！」

ルイズはそれでも、キュルケたちにぺこりと頭を下げた。

「本当に大丈夫なのかね？」

ワルドが心配そうに聞いてくるが、

「うぜえ、さっさと行けや！」

「じゃあ、行きますよ！」

ルイズ達は低い姿勢で、駆け出した。

矢が次々と飛んでくるが、5人と一緒に駆け出したワルドが杖を振り、風の防御壁を張り、一本も刺さりはしなかった。

「急ぐぞ！」

ワルドが急かす。

酒場から厨房に出て、6人が通気口にたどり着くと、酒場の方から派手な爆発音が聞こえてきた。

「……始まったみたいね」

ルイズが心配そうに言った。どうやら店の中では派手な戦いが始まったようだ。

ワルドがぴたりとドアに身を寄せて、ドアの向こうの様子を探った。

「誰もいないようだ」

勢い良くドアを開け、6人は夜のラ・ロシエールの街へと躍り出した。

「棧橋はこつちだ」

ワルドが案内するように先頭に行く。ルイズが次に続く。

ネギとリナリーはルイズの次に続き、更にその後ろにアレンが続く。

「派手にかましてくださいね」

才人は殿を受け持った。

41・Cool Jokes

裏口の方へとルイズたちが向かったことを確かめると、キュルケは皆を一喝した。

「じゃあ、おっぱじめるわよ!」

「おー!」

「へいへい…」

だが、士気が高いのはギーシュだけだ。

他は、何だか冷めた目で見ている。それに対して、怒ることも無く坦々と続ける。

「ねえギーシュ、厨房に油の入った鍋があるでしょ」

「揚げ物の鍋のことかい？」

「そうよ。それをあなたのゴーレムで取ってきてちょうだい」

そう命令するキュルケの傍で、エドが冷静に言い放つ。

「んな、まだるっこしい事しないでいいだろ？」

「良いから、見てて」

ギーシュは、テーブルの陰で薔薇の造花を振った。

すると花びらが舞って、青銅のゴーレムが現れる。そして、続きざまに杖を振る。滑らかな動きで、ゴーレムは体を持ち上げて厨房へと走った。そのゴーレム目掛けて矢が数本飛ぶ。

青銅のゴーレムに、何本も鋼鉄の鏃がズカカッ!!とめり込む。

「まだだ!」

めり込む拍子にゴーレムはギギギと音を立てて膝をつくが、ギーシュは力を込めた。ゴーレムはすぐに立ち上がり、なんとかカウンターの裏の厨房にたどり着いて、油の入った鍋を掴んだ。

「それを、入り口に向かって投げてちょうだい」

「だから、そんな面倒な事、しなくて良いって言うてんだろ！」

早速、血管が切れたエドが怒鳴る。

キュルケは、手鏡を覗き込んで、化粧を直しながら呟く。

「君はこんなときにまで化粧を直すのかね……」

その緊張感のない行動に、ギーシュが呆れて言う。

ギーシュはゴーレムを操り、言われたとおりに鍋を入り口に向かって、投げつけた。

キュルケが杖を構えて立ち上がる。

「だって歌劇の始まりなのよ？」

ふふつと美しさを持った笑顔で、ギーシュに微笑んだ。

思わず、ぐつと来てしまったが、集中してゴーレムを操る。

「主演女優がスツピンじゃ、」

油を所々に撒き散らしながら空中を飛ぶ鍋に向けて、杖を振る。

その横を、轟音を響かせ、砲弾が飛んでいった。

「しまら……」

一番、締まっていけないのは自分だろう。マヌケな顔をしているのが、自分でも良く解った。

突如として、自陣から飛んで行った砲弾。その弾道を辿っていくと、自分のすぐ傍らに、黒光りする無骨な大砲がいつの間にか、出現していた。

その後ろで、不敵にエドが笑う。

「うおおっ!!」

「何だ、あの砲門は!」

「くそっ!!どうすりゃいい!!」

どよめきが起き、今しがた、突撃を敢行しようとした傭兵たちが、突如として現れた砲門、飛んできた巨大な砲弾にたじろぐ。

「今のは、ほんの挨拶代わりだ。これで逃げるなら良し……」

エドが隣で、邪悪な笑顔を浮かべながら言っている。

キルケは色気たつぷりの仕草で呪文を詠唱し、杖を振り直す。すると、炎は油に引火して、たちまち燃え広がり、入り口でオロオロしていた傭兵たちに燃え移った。

「ほ、炎がッ!!!!」

「た、助けてくれええ!!」

「誰か火を消さんかあ!!」

更に、そこへリンとシャナが剣を持って飛び掛る。先程まで、隊列を組んで冷静に処理していたという事が、混乱に拍車を掛けた。

「はっ!!」

「あらヨー!!」

傭兵たちは、炎に巻かれて、剣に斬られて、悲鳴を上げてのたうち回った。

深い傷でもないが、その事が逆に痛い。切り傷が無数に出来ているのだ。致命傷ともいえないが、恐怖を掻き立てるには十分すぎた。

「行けー、エドー！ やっちやいなさい！」

矢の飛んでこない安全圏から、ウインリイが手をメガホンにして叫ぶ。呼ばれたほうは、

「うるせえ！ お前もさっさと引けや！」

「…解ったわよ！」

楯にした石の後ろで、錬金銃の引き金を引いた。中に搭載されたプログラムが周囲の物質を取り込み、銃の形を変えていく。形はガトリング砲になった。砲身を回転させることで、速射性を増した兵器と言っに相応しい銃火器だ。

「ちょ、ちよつと、これ大丈夫なの？」

ウインリイとしては人殺しにはなりたくない。

「心配すんな。人体貫けるほどの威力は無いはずだ」

どう心配するなというのだろうか。それを一番傍で見ていたギーシュは見たことも無い兵器の登場に心から驚いていた。

「一体、君達は何者なんだね……」

そんな恐怖とも、畏怖とも付かない感情を抱く彼の前で、炎の女王が立ち上がる。

「名もなき傭兵の皆さまがた」

キュルケは優雅に髪をかきあげて、杖を掲げる。

今、この場は彼女の為に用意された時間と、場所である。その事を全身に感じながら、彼女は続けた。次々と飛んでくる矢の嵐の中、キュルケは微笑を浮かべて一礼した。

「どうして、あたしたちを襲うのか、全く存じま……」

だが、最後まで口上を名乗ることは許されない。

なぜなら、ここは彼女が主演の舞台ではないからだ。再び、轟音と共に砲弾が酒場を貫く。その不気味に黒光りする砲身の上、錬金術師が叫ぶ。

「来いよ、ド三流！」

腕を鳴らし、傭兵を挑発する。

「誰に喧嘩、吹っかけたのか。良く教えてやるからよ！」

ワールドという部外者ストッパーが消え去った今、彼らを縛るものはない。

今から始まる喜劇の主演は、この男だ。濛々と上がる煙も、石壁の宿屋も、そして、立ち並ぶ洋平たちも全てが、彼を輝かせる舞台装置ではない。

一方的な、ゲームが始まった。

巨大ゴーレムの肩の上、戦局を見ていたフーケは舌打ちした。今しがた、突撃を命じた一隊が、炎に巻かれて大騒ぎになっている。炎を貫くようにして走った2発の砲弾が、更に騒ぎの度合いを大きくしていた。

「一体、何だつて言うんだい」

フーケは、隣に立っている仮面の男に呟いた。

「あいつら、どこに大砲なんて隠してたんだい？」

仮面の男は答えない。だが、相手の戦力以上に気になる事はあった。

「つたく、金で動く連中はやっぱり使えないわね…」

大金を払って雇い入れたというのに、あれでは何の役にも立っていない。

所詮は傭兵。魔法も使えない平民では、十分に善戦していると言つて良いのだが、フーケは納得行かなかった。

「あれでよい」

「あん？」

短く言い切った男に、フーケは鼻息も荒く詰め寄る。

「あれじゃあ、あいつらを仕留めることなんかできやしないじゃないな

いのっ!!」

怒鳴るフーケに、相変わらず冷静な調子で男は言う。
仮面を通してしているのに、どこか澄んだ声だ。

「倒さずとも、かまわぬ。分散し、時を稼げれば、それでよい」
「あんたはそうでもね」

確かに、作戦ではその通りだろう。
だが、やられっぱなしは、彼女の流儀に合わない。

「わたしはそうはいかないね。あいつらのおかげで、恥をかいたからね」

男は眼下の酒場を見つめたまま答えない。
数秒ばかり戦局を窺うと、坦々とフーケに告げた。

「俺は、ラ・ヴァリエールの娘を追う」
「わたしはどうすんのよ？」
「好きにしる」

勝手な返事だが、この上ない位に嬉しい命令だ。

「残った連中は煮ようが焼こうが、お前の勝手だ」
「やってしまっただいいんだね？」

一応、確認を取っておく。

生死問わず《デット・オア・アライブ》を気にする義理はフーケには無いが、雇い主の意向は儀礼として聞いておく。
仮面の男は、顎を少しだけ後ろに引いて肯定する。

「だが、決して油断はするな。合流は例の酒場で」

それだけ言い残し、男はゴーレムの肩から身軽に飛び降りると、暗闇に消えた。

「あ、ちょっと！」

質問を許さないかのような態度に、呆れながらも大人しく従う。

牢獄で会った時から、態度が変わっていないところを見ると、あの好き勝手な性格は男の生来のものなのかもしれない。

「まったく、勝手な男だよ」

ガシガシと頭を掻いた。

切れていた綺麗な髪が、房から離れて、風に舞う。

「なに考えてんだか、ちつとも教えてくれないんだからね」

フーケは苦い顔で呟いた。

また再び、下で傭兵たちの悲鳴があがり、数十人の傭兵たちが吹っ飛んで壁にめり込んだ。

「!?!」

そのおぞましい程の攻撃に傭兵たちは怯え、弓兵の攻撃が止まる。この機を逃すまいと、赤々と燃え盛る炎が、さらに激しさを増し、暗がりには潜んだ弓兵たちをあぶり始めた。方々の体で、壊走し始める傭兵も見え始めた。

フーケは、またも舌打ちする。

「どうやら奴らは、よくわからない魔法を使っているようだね…」

フーケは下に向かって怒鳴る。

「まったく、頼りにならない連中だね！どいてなッ！！」

ゴーレムがズシンと地響きを立てて入り口に近づき、拳を大きく振り上げて、入り口に叩きつけた。

同時に轟音が鳴り響く。その轟音に、宿の中に残っていた6人が入り口の方に首を向ける。叩き潰された建物の入り口が見事になくなっていった。

「お、俺の、店が…」

事の成り行きをカウンターの下に隠れてみていた店主が、あまりの惨事に嘆いた。

「ち、着やがったか」

視界いっぱい立ちこめる土ぼこりの中に、巨大ゴーレムの姿が浮かび上がった。

フーケの乗ったゴーレムはそのまま、逃げ惑う傭兵たちを蹴り飛ばし、立ちはだかる。

「あちゃー。忘れてたわ。あの業突く張りのお姉さんがいたんだっけ」

キュルケが舌をお茶目に出して呟く。

「黙ってれば調子にのって……、小娘どもがッ！まとめてぶっ潰してやるよッ！」

ゴーレムに乗っているフーケが、目をつりあげて怒鳴っている。

「どうする？」

キュルケはギーシュの方を見た。だが、彼は突然現れた巨大なゴーレムを見て、激しくパニックになっていた。目の焦点も定まらずに、混乱して喚き始めた。

「諸君！突撃だ！突撃！トリステイン貴族の意地を今こそ見せるときである！」

もう、何がしたいのだから良く解らない。

ある意味では自殺者にも、見えてしまう。

「父上！見ててください！ギーシュは今から男になりま、ブッ！？」
なにやら喚いていたギーシュの顔面を、シャナがグーで殴った。
思いつき顔面に入った右ストレートで、完全に彼は沈黙してしまっただ。

「うるさいから黙らせておいた」

「よし、良くヤッター！」

リンが親指を立て、シャナの労を労う。

ただ、結構深く入っている。今すぐには再起できないだろう。

「しかし、現実的にどうするの？」

ギーシュの特攻は阻止できたが、このままではギリ貧なだけだ。時が経てば、壊走していた傭兵たちも戻ってくるに違いない。そうなれば、僅か6人の此方は圧倒的に不利になる。

「どうするのよ?」

キュルケの魔力も残り少ない。

ゴーレムの肩に乗ったフーケは、それが解っているのだろう。冷静に事を見て、余計な体力や魔力を使わないように、最低限の動きしかしていない。

「……」

エドの脳細胞が、フル活動を始める。

そして、ふと足元に塗る付いた感じを覚えた。しゃがみこんで、手に触ってみる。どうも、さっきの燃え残りの油のようだ。

グルグルと頭の中で、思考が駆け巡る。

「ほっ、ほっ」

ニヤリと意地悪く口の端が釣りあがる。

(あ、何かいやらしいこと考えてる)

4人の頭の中では、同じ事を考えていた。

「さあ、出てきなよ！」

フーケは先程から挑発していた。

宿の中に残った面々を燻りだす為に、玄関前で土煙を巻き上げているが、一向に降参する気配すらない。

「全く、面倒だね…」

じれてきたフーケは、思いつきりゴーレムの拳を振り上げた。

最後の一撃。それを見舞おうとしたゴーレムの顔に、何かが当たった。パシャツとマヌケな音を立てて、ゴーレムの顔を濡らす。

見れば、ちょうど屋上に昇った、キュルケとウインリイが何かを投げつけていた。

これに遂に、最後の堪忍袋の緒が切れた。

「もう、手加減はしないわよ！」

ゴーレムは拳を振り上げて、キュルケたちをぶっ潰そうとした。

「今よ！シャナ！」

声に反応すると、上空には紅蓮の双翼を生やした、燃え盛るような髪の少女が飛んでいた。手には巨大な炎の剣が握られている。

フーケはそこでハツとなる。

（さっきのは、まさか！）

そう考えた彼女の鼻に、独特のきつい臭いが漂ってきた。

油の臭いだ。

だが、フーケの想像したような、「ただ」の油ではない。この世^{ハルゲ}界では、まだ実用化されていない灯油である。エドはその構造が解^{ギニア}っているなら、何でも作り出せるのだ。

(やばいッ……！)

フーケはすぐさま振り向く。

ゴーレムに指令を下し、必殺の紅蓮から逃げ出そうとする。ズシン、ズシンと大股でゴーレムが歩き始める。

「はああああ！」

だが、既に手遅れであった。

振り下ろされた紅蓮の一撃で、一瞬で巨大ゴーレムはブワツと炎に包まれた。

燃え盛る炎に焼かれて、ゴーレムはフラフラと歩きだす。使えなくなったゴーレムを捨てて、フーケはゴーレムから飛び降りた。

「くっそ、こんな手段を取ってくるとは……！」

苦い顔で反撃の機会を窺う。だが、もう一度、先程と同じ大きさのゴーレムを作れるかと言われると魔力の容量には不安がある。

そこへ、

「発ッ！」

エドの鋭い声が峡谷中に響き渡る。

ゴーレムから飛び降りたフーケが、目にしたのは30門はあるだろう、大砲の戦列だった。道を一杯に塞いで、並べられている。そ

の砲口がどこに向けられているか、解らないフーケではなかった。

「射ア！」

黒い砲門が一斉に叫んで、尖頭弾を放つ。

砲弾に貫かれ、30の孔を開けたゴーレムは、燃え盛る炎に耐えきれず、地面に崩れ落ちた。

「メイジがやられたぞ！！」

「もう無理だ！！相手が悪すぎる！！」

自分の雇い主が敗北したのを見届けると、蜘蛛の子を散らすように残っていた傭兵たちは逃げ散っていく。

屋上にいたキュルケとウインリイは手を取り合って喜んだ。

「やったわ！勝ったわ！あたしたち！」

「簡単にできちゃったわね」

そのまま、屋上から飛び降りて、地上に残った面々と労いあつ。

「ま、こんなもんだろ」

「俺、見せ場なかったゾ」

エドが纏めにかかったが、リンはどうも不満らしい。

そんな時、轟々と紅く火の粉を散らし、燃え尽きようとするゴーレムをバツクに、物凄い形相のフーケが立ち上がった。

「よ、よくもあんたら、二度までもこのフーケに土をつけたわねえッ！……」

見るも無残な格好でフーケはそう言った。

長くて、美しかった髪はちりぢりに焼き焦げていて、ローブは炎でボロボロになっている。

顔は煤で真っ黒であり、せつかくの美人が台無しであった。

「あら、素敵な化粧じゃない、お・ば・さ・ん」

矢鱈と最後の「おばさん」を強調した言い方だった。

「あなたには、そのぐらい派手な化粧が似合ってよ？なにせ年だしね」

キュルケは、止めとばかりにフーケ目掛けて杖を振った。

しかし、さっきまでの戦いで、魔法を唱える精神力は消耗しきっていたらしい。

ぽつと小さな炎が短く飛び出て、すぐに消えた。

「あら、打ち止め？」

キュルケは頭をかいた。

だが、

「ありゃ？私もか？」

フーケも同じく打ち止めだったらしい。

杖を投げ捨て、真っ直ぐにこちらに向かって歩いてくる。

「年ですって？小娘が！わたしはまだ二十三よっ！」

フーケは拳を握り締め、キュルケに殴りかかった。

キュルケも負けじと、思いつきり殴り返す。

「十分、おばさんよ！」

「言ったわね、小娘が！若いだけの癖に！」

口汚く罵りあう、二人。

シヤナは座り込み、もう興味ないといった風だ。勿論、それは他の面々も同じ。

「さて、俺はこの街を直してくるよ」

トテトテとゴーレムの破壊した後、砲撃の後を修理しに、エドは行ってしまった。

リンは、

「ご飯でも食べに行くかな？」

多分、もう閉まっているだろうが、そんな事は構わない。

「はあ……」

錬成銃を腰に戻したウインリイだけは、ただ一人、二人の殴り合いを見守った。

「俺はあの赤い髪の姉ちゃんが勝つ方に一エキュー……」

「俺は2だ」

遠巻きにその様子を見ていた傭兵たちは、さっそくどっちが勝つかで賭けを始めた。

ルイズ達、6人は棧橋へと向けてひたすら走っていた。

煌々と降り注ぐ月明かりが、道を照らす。

とある建物の階段にワルドは駆け込むと、そこを登り始めた。先
の见えない長い階段だ。

「棧橋なのに、山にのぼるんすか？」

才人が荒く呼吸しながら尋ねる。しかし、ワルドは答えない。

長い階段を登ると、丘の上に出た。現れた光景を見て、才人は驚
いた。

「すげえ……」

思わず、その光景に息を飲む。

山ほどもある大きさの巨大な樹が四方八方に枝を伸ばしている。

高さは、夜空に隠れて、てっぺんが見えないが、相当の高さがある
ことが伺える。

目を凝らして樹の枝を見ると、両舷に大きな羽根を生やした巨大
な船であった。飛行船のような形状で、枝にぶら下がっている。

スケールが大きすぎて、才人についていけない。

「まさか、これが棧橋なのか？それであれが船？」

才人が心底驚いた声色で言うと、ルイズが怪訝な表情で聞き返し
た。

「そうよ。あんたたちの世界じゃ違うの？」

「棧橋も船も、海にある。」

才人は答えたが、3人は黙って樹を見つめる。

「海に浮かぶ船もあれば、空に浮かぶ船もあるわ」

ルイズは平然と答えた。

そんな彼女を他所にワルドは、樹の根元へと駆け寄る。樹の根元は、巨大なビルの吹き抜けのホールのように、空洞になっていた。枯れた樹の幹をうがって造ったものらしい。

ワルドは目的の階段見つけると、駆け上がり始めた。才人たちは慌てて後を追いかける。

階段を駆け上がった先は、一本の太い枝が伸びていた。

「もう、何でもありだな……」

その枝に沿って、下で見たときと同じように一隻の船が停泊している。

帆船のような形状だが、空中で浮かぶためだろうか、舷側に羽が突き出っていて、上からロープが何本も伸び、上に伸びた枝に吊されていた。

枝から伸びたタラップを伝たって、ワルドがその船に乗り込む。

才人達も続いて乗り込む。

「船長はいるか！」

ワルドが鋭い声で、聞いた。

全員が船に乗り込んだ。その声に、甲板で眠っていた船員が飛び上がって、起き上がった。

「な、なんだあ！？おめえらは！」

「船長はいるか？」

再び、ワルドが聞き返した。

「こんな朝早ええんだ。普通に寝てるわ！」

解りきった事を聞くなと言わんばかりに、もう一度船員は横になる。

「まったく、用があるんなら、また明日の朝に出直して来るんだな」

男は酔っているらしく、片手に酒の瓶を持っていて、顔を赤くしている。

ワルドは何も言わずに、杖を引き抜いて、その船員の首に押し当てた。

「貴族に二度も同じことを言わせる気か？僕は船長を呼べと言ったんだ」

「き、貴族！！？」

身の危険を感じた船員は、すっかり酔いが醒めた様子で、慌てて船長室にすっ飛んでいった。

しばらくして、寝ぼけ眼の初老の男を連れて戻ってくる。急いで来たのか、ずれて帽子を被っている。どうやら彼がこの船の船長らしかった。

「こんな夜更けになんの御用ですか？」

船長は胡散臭げにワルドたちを見つめた。

「女王陛下の魔法衛士隊隊長、ワルド子爵だ」

船長の目が驚きで丸くなる。相手が身分の高い貴族だと知って、急に言葉遣いが丁寧になる。何とも現金な性格だ。

「これはこれは。して……、当船へはどういったご用向きで……？」

船長が帽子を取ってワルドに尋ねる。

「アルビオンへ、今すぐ出港してもらいたい」

「へえ？……って、え？む、無茶を！」

船長が驚いて叫ぶが、ワルドは冷静に言葉を並べる。

「勅命だ。王室に逆らうつもりか？」

だが、船長は尚も渋る。

「……あなた方が何しにアルビオンに行くのか存じませんが、朝にならないと出港できませんぜ」

「どうしてだ？」

大人しく理由を喋りだした船長を、ワルドはじろりと睨む。

その鷹の目のような眼光に怯みながら、更に続ける。

「アルビオンが最もここに近づくのは朝だ！その前に出港したんでは、風石が足りませんや！」

「風石って？」

才人が尋ねる。船長は風石も知らないのか？といった顔つきにな
って答えた。

「『風』の魔法力を蓄えた石のことさ。それで船は宙に浮かぶんだ」
それから船長は、ワルドに向き直った。

「子爵様、当船が積んだ風石は、アルビオンへの最短距離分かあ
りません」

確かに相手は貴族だ。

だが、船の上なら、船を扱っている船長たちのほうが専門家だ。

「したがって、出港できません。出港したら、途中で地面に落っこ
ちてしまいまさあ……」

「待て」

そう渋り、引き上げようとする船長をワルドが引き止めた。

「風石が足りぬ分は、僕が補う。僕は『風』のスクウェアだ」

その言葉を聞いた船長と船員は、顔を見合わせた。二言三言何事
か相談しあう。やがて、結論が出たのか、船長がワルドの方を向い
て頷く。

「ならば結構で。料金ははずんでもらいますよ」

「積荷はなんだ？」

「硫黄でさあ。アルビオンでは、今や黄金並みの値段がつきますん
で」

硫黄が黄金並みとは。

アレンは舌打ちした。エドを連れてくれば、また一儲けできたかもしれない。

「新しい秩序を建設なさっている貴族の方々は、随分な高値をつけてくださいます。秩序の建設には火薬と火の秘薬は必需品ですからね」

ケラケラと商売つ気たつぷりに船長は言った。

ルイズは正直、その笑いが気に入らなかつた。何せ、反乱軍側に軍事物資を売っているのだ。王を蔑ろにしているような貴族に味方している、その事実だけで彼女が嫌うには十分だった。

「その運賃と同額を出そう」

その男達を利用してはいるワルドも、好きにはなれない。必要なことだとは頭が分かっている、心が許せなかつた。

「.....」

船長はこずるような笑みを浮かべて頷いた。

商談が成立したので、船長は矢継ぎ早にぼけっと突っ立っている船員たちに命令をくだした。

「出港だあ！もやいを放て！帆を打てえ！」

「こんな朝早くからですかい？」

まだ夜も明けていない。

寝ていたい船員に、船長は鋭い命令を下した。

「いいからつべこべ言わずに動けや!!」
「へいへい」

ぶつぶつと文句を垂れながらも船員たちはよく訓練された動きで船長の命令に従い、帆を枝に吊るしたもやい網を解き放ち、横静索によじ登り、帆を張った。

戒めが解かれた船は、一瞬、空中に沈んだが、即座に発動した風石の力で宙に浮かぶ。

「出航だあ!!」

ガンガンと音を立て、鐘楼の鐘が夜明け前の空に鳴り響く。帆と羽が風を受け、ブワツと張り詰め、船が動き出す。

「アルビオンにはいつ着く?」

「明日の昼過ぎには、スカボローの港に到着しまさあ」

出航してしまえば、特にやることもない。

5人は腰を降ろそうとした。寛ごうとした時、船員の一人が上を見て驚きの声を上げた。

「な、なんだあ!?! あいつはあ?」

アレンたちも、船員が指差した方に顔を向ける。

すると、帆を張る足場の所に、マントをはためかせながら、一人の男が立っていた。

「あいつは!」

才人はその男に見覚えがあった。

フーケのゴーレムの肩に乗っていた白い仮面の男だった。そんな簡単に忘れられるほど、才人も軽い頭をしてはいない。

「どうやら、あいつは、僕たちの後をつけていたみたいだな」

仮面の男は、そこから飛び降りる。

その瞬間に才人は剣を引き抜いて、そのまま飛び降りてきた仮面の男に振りかぶったが、男は体をひねってそれをかわした。

「くそ！」

「やああ！」

そのまま、男はリナリーの放った槍のような上段蹴りも避け、ルイズの背後に回る。

「ルイズッ！！」

「え？」

反応が遅い。

ぼけつとしていたルイズに才人が怒鳴った。

ルイズは、はつとして振り向くが、一瞬で男はルイズを抱え上げた。

「きゃあ!？」

抱えられたルイズは悲鳴をあげる。

男は軽業師のように、ルイズを抱えたまま後方に飛んだ。すくつときれいに甲板の端へと着地した。

才人は動くことができずに、そのまま立ちすくんだ。ルイズの方も、突然起きた出来事に体を動かす事が出来ないでいる。

「ぼさつとしない！」

腰から白い銃をアレンが引き抜いて、構える。

その横でワルドが杖を引き抜いて振る。

仮面の男は、以前手合わせの時、才人にしたのと同じ風の槌をしっかりと打ち据えられ、ルイズから手を離れた。

「きゃあああ！」

男は派手に吹っ飛んだが、そのまま片手で甲板の手すりを掴む。

ストッパーの無いルイズは、船から飛び出してそのまま地面に真っ直ぐに自由落下していく。

「ルイズ！」

才人が叫ぶ。

だが、それよりも早く、

「間に合ってくれ！」

ワルドは間髪いれずに船から飛び出すと、カイツブリのようにルイズ目掛けて急降下した。

そのまま落下中のルイズを抱きしめてワルドは、ピューと口笛を吹く。

すると、どこから現れたのか、ワルドの使い魔のグリフォンが背中をワルドとルイズを受け止め、空中を飛んで船を追いかけた。

取り敢えずは一安心である。

「さて、こっちはどうしましょうか……」

「どうもしないでしょう。明らかに敵ですよ」

ネギが聞くが、アレンはバツサリ切り捨てる。

白仮面の男は、体を軽くひねって甲板に飛び乗り、才人達と対峙した。

「うらああああッ!!」

まず、デルフリンガーを抜き放った才人が、常人離れた速さで仮面の男目掛けて駆ける。

そのままを横薙ぎに振るが、上に飛んでかわされた。

「ぐおっ!!!？」

男はそのまま才人の背中を踏みつけて、銃を構えているアレンに接近する。

「アレン君、その銃って…」

「ええ、そうです…」

後ろから才人は剣を構えて、飛び込んでくる。

「師匠の銃ですよ！」

仮面の男を照準具に捕らえ、3連射する。

白い閃光が、男の体をしっかりと三箇所捕らえた。

「人を足蹴にしゃがって！」

才人は、アレンに急接近する仮面の男に物凄いスピードで追いつ

き、背中から唐竹に切り下ろした。しかし、また、仮面の男は身軽に体を左へと優雅にずらして避ける。

その勢いを殺すことなく、才人に踵蹴りを見舞う。

「ぐっ…」

男はそのまま、バク宙で後方に飛んで、才人目掛けて杖を振った。追撃の一発である風が、才人の体を打ち据える。だが、威力が低い。本命はこの後の一発。

「才人さん！気をつけて！」

ネギが才人に叫ぶ。

男の頭上の空気が、ひんやりと冷え始めた。

才人も接近して剣を振りかぶったが、デルフリンガーが叫んだ。

「相棒！危ねえ！！構えろ！」

デルフリンガーが叫ぶと同時に、空気が震えた。

バチチツ！と弾け、男の周辺から、稲妻ができていく。

「まずい！」

「ッ！！？」

「避けて！」

男に左右から蹴りを振っていたリナリーは、身の危険を感じて、一足飛びに後退した。

だが、稲妻はそのまま剣を構えている才人に伸びていく。ネギが叫ぶ。

「来きます！！才人さん！！」
「え？」

風の槌を受けてよろけていた才人は、対応が間に合わない。

「相棒！『ライトニング・クラウド』だ！危ねえ！」

呪文の正体に気づいたデルフが叫ぶ。

だが、もう遅い。青い稲妻が才人に直撃し、したたかに体を通電する。電気が体中を走り回る痛みに耐えかね、才人は甲板を駆け回った。

「ぐあああああああ！！」

才人は左腕を押さえて呻いた。

見ると、電撃の痕が服を焦がしていて、焼きゴテを当てたかのようには大火傷していた。

その余りの酷い火傷を見た才人は、痛みと驚きで気絶した。

「ちっ！」

アレンは舌打ちをすると、才人を倒して油断をしていた仮面の男に音もなく接近し、仮面の男の鳩尾に銃底を叩き込んだ。

怯んだ所へ、頭を抉るようなりナリーの蹴りが飛ぶ。

足元へはネギの掌底が。

「！？」

三箇所を思いっきり打ち据えられた仮面の男は、甲板に合った樽やら箱やらを巻き込んで派手にぶっ飛ぶ。

「逃がしません！」

追撃の手を一切緩めないアレンは、マズルフラッシュを煌かせ、男を狙った。

だが、そのまま男は甲板から身を飛び出して、叫ぶことも無く落下していった。

船から落下していった仮面の男にアレンは呟いた。

「逃がしましたね……」

どうやら一筋縄では行きそうに無い。

先程の野党と違って、今回は明らかにルイズを狙ってきた。あの仮面の男の目的は、間違いなくルイズを抹殺。最悪、アルビオン陥落まで止めておくことだろう。

「また来るでしょうか……」

「間違いなくね」

そんな風に呟きあう3人の元へ、

「無事か、君達！」

男が落下していった後からしばらく経って、グリフォンに跨ったワルドとルイズが甲板に戻ってきた。

船員たちは、グリフォンを見て驚く。

「サイト！」

ルイズはワルドの腕から離れグリフォンから降りると、倒れてい

る才人に駆け寄った。

彼のケガの状態を見ると、電撃の傷が、剣を握った左手から腕へと、服を焼け焦がしている。

ルイズは慌てて才人の胸に耳を当てる。

「大丈夫よね…」

と同時にホツとした。

心臓は動いているみたいだ。強力な電撃を受けたらしいが、死んではいなかった。

「本当に無事でよかったよ」

ワルドが苦笑しながら言った。

ゆっくりと才人の目が開いていく。そして、苦しそうに立ち上がる。

「な、なんだあいつ…」

明確な殺気を放ちながら、襲ってきた仮面の男。その男が残していった傷がうずく。

「いてえ……。くっ！」

「何をやってるんですか…」

アレンが銃を腰に戻して、言葉を投げた。死なずに済んだ事に安心しているようだった。

「ああ、無事で良かったです。怪我は大丈夫ですか？」

怪我の様子を見たネギが不安そうに聞いてくる。
自分を労わってくれる少年の言葉に、才人は苦い表情をして左腕を押さえて言う。

「す、すみません。心配かけて…」

そうして足に力を込めて、立ち上がるうとする。

「でも、もう大丈夫です」

取り落としてしまったデルフフリンガーも、心配そうに言う。

「今の呪文は『ライトニング・クラウド』だ。『風』系統の強力な呪文だぜ」

去ってしまった仮面の男の実力を冷静に測る。

「あいつは相当の使い手みたいだな」

ワールドが才人の様子確かめる。

ルイズの婚約者に心配されるのは、才人のプライドがどうにも邪魔したが、ここで好意を払えば、何だか自分が小さくなるような気がしたので、黙って見せる。

「まあ、腕で済んでよかった」

腕の調子確かめているワールドには気になることがあった。

「しかし、本来なら、命を奪うほどだぞ…」

「男の力の割には怪我の度合いが軽い。

男の実力なら、才人は間違いないで死んでいた。だから、デルフはしきりに叫んでいたのだが、

「どうやら、この剣が電撃を和らげたようだが、金属ではないのか？」

検分しながら、意思を持つ剣に問いかけるが、当の本人はあっさり返す。

「知らん、忘れた」

デルフがそっけなく答える。

そんなワルドと剣の遣り取りを見ている才人は、唇をぎりつと噛んだ。

ケガした腕は確かに痛む。それよりも、ルイズを助けられなかったことが、もっと痛かった。

（ホント、頼りねえ…）

さらには、自分がぼけつとしていたせいで、三人にも心配させてしまった。

特にネギは、まだ10歳だ。こんなみっともない姿は、一応年上の意地として、絶対に見せたくなかった。そして、こんな酷い傷を見せるわけにもいけない。

（情けない…）

思わずため息が漏れる。

まだまだ自分はこのなんじゃ、ルイズを守れない。

誰にも迷惑をかけずに、ルイズを守れないとダメだ。
才人は心の中でそんな決意を秘めていた。

「どうしました、才人さん？」

実際は、ワルドに全部いいところを持ってかれた事が悔しいのだ。
そんな彼をじっとネギが見つめている。

「あ、あのう、大丈夫なんで？」

今まで、遠巻きからワルドたちを見ていた船長と船員たちが心配
そうに話しかけてきた。

ワルドが羽帽子を取って、頭を下げた。

「すまない、君たちを危ない目にあわせて……。運賃は倍の額は
出すから許してほしい」

「い、いえ…平気ですあ」

「立て続けに悪いが、治療してやってくれ」

ワルドが船員たちに才人を指差して言う。

「了解です」

船員たちは了解の返事して、ケガをした才人の治療に当たった。
彼の後ろについて、ルイズ達も船室へと入っていった。

ルイズ達がじっと待っていると、ワルドが寄ってきた。

「とりあえず、サイト君は無事みたいだ」

その言葉に取り敢えずは安心する。

「それと、アルビオンの戦況を船長に聞いたのだが…」

ワルドは言い難い顔になってしまふ。

この後に続く言葉次第では、今から足先を変えねばならない。もう既に陥落して、貴族派の一味に捕らえられているというのであれば、この大使の意味は全く無くなってしまふ。

アレンの受けた密命である手紙の奪還と、ルイズの護衛という事なら、まずは護衛の方を優先させてもらおう。

「船長の話では、ニューカッスル付近に陣を配置した王軍は、攻囲されて苦戦中のようだ」

ルイズがはつとした顔になった。

「ウエールズ皇太子は？」

ワルドは苦い顔つきで首を振った。

「わからん。生きてはいるようだ…」

「どうせ、港町はすべて反乱軍に押さえられているんでしょ？」

「そう…、みたいだね」

ワルドはルイズの質問につっかえながら言った。

「どつやって、王党派と連絡を取ればいいのかしら」
(それくらい考えて来てくださいよ…)

ルイズの的外れな疑問に、アレンは呆れていた。

「陣中突破しかあるまいな。スカボローから、ニューカッスルまでは馬で一日だ」

「反乱軍の間をすり抜けて、一日？」

幾らなんでも危険すぎる。

こちらのまともな戦力はワルドしかないのだ。

ワルドがいなくなってくれば、アレンやリナリー、ネギは本来の力が出せるのだが、彼が居る状況では、それができない。

「そうだな。まあ、反乱軍も公然とトリステインの貴族に手出しはできんだろう」

随分と樂觀論である。

使えない駒を5枚も抱えて、ワルド一人で動けるわけが無い。

「隙を見て、包囲線を突破して、ニューカッスルの陣へと向かう。ただ、夜の闇には気をつけないといけないがな」

今まで黙ってワルドとルイズの会話を聞いていたアレンが尋ねる。

「じゃあ、なんでこの子に乗ってかないで、船に乗って行くんです？」

羽休みをしているグリフォンを指差して言う。

「竜じゃあるまいし、そんなに長い距離は、飛べないわ」

ルイズが答える。

興味を無くしたアレンは、

「あ、そうなんですか…」

と短く返して、欠伸をして床に座り込んだ。

その傍で、ネギヤリナリーもペタンと座り込んだ。

付くまではまだ一日半もある。

空の上だが、敵が襲ってこないとも限らない。休める内に休んでおきたかった。

(さて、どうなることか…)

瞼を閉じながら、そんな事を思う。

船室の窓の向こう。

流れ出した雲が不気味な朝焼けを写していた。

43・The coming

ラ・ロシエールの街に朝日が昇る。

「ん…、朝か…」

窓枠から差し込んでくる太陽を見つめて、エドは呟いた。

結局、キュルケとの壮絶な殴り合いの末、フーケは逃げてしまった。あれだけ殴り合って、まだ倒れないとは、盗賊とはやはり相だなタフネスの持ち主たちらしい。

一言だけ呟いて、いつもの真紅のコートに袖を通す。

「俺たちはどうするかな」

ルイズ達を見送った自分達もアルビオンへ渡るべきか否か。

正直、アレンとリナリーとネギに任せていけば、万事解決する気が彼にはあった。丁度、この街の出入り口には、昨日の間にアレンが箱舟の入り口を置いている。

それを通れば、3分後には一日掛けた行程を戻す事ができる。学院に戻ってしておきたい事もある。

「……」

一人で考えていても始まらない。朝食を取る為に、下へ降りていった。

昨日大暴れして、ぶっ壊してしまった酒場は綺麗に元に戻っていた。勿論、エドの錬金術の賜物である。所々に嫌な装飾が施されているが、誰も何も言わない。

「…おはよう」

深夜まで大暴れしていた一同は皆、目の下に隈を作り、顔色が悪い。

「元気ないな…、ま、俺もだけだよ」

そんな彼の傍、朝からリンだけはモリモリと食べていた。

この男、放っておくと直にどこかで行き倒れになってしまう。とりあえず、エサを与えておけば逃げる事はないだろう。

欠伸を一つかまして、どかっと乱暴に椅子に座った。

「で、これからどうするんだ？」

椅子に座ったエドが問う。

正直、ここに残った面々は、あまり同盟の事など興味はない。この国が生きようが死のうが、生きていられる。キュルケに到っては、何も知らされないまま、ここまで着いてきてしまったのだ。

ここで引き返すのが、潮時かもしれない。そう思って聞いたのだが、

「勿論、これからアルビオンへ行くわよ！」

褐色の肌でもよく目立つほどに、隈の濃いキュルケが元気よく立ち上がった。言った。

一同は、ぽかんとする。

「…本気か？」

「本気よ！」

ふらつとした様子で、空元気のまま、兎に角、叫ぶ。不安が一杯だ。

「けど、どうするの?」

一人先行しているキュルケを止めるように、シャナが口を開いた。

「相手は内戦状態。行くなら軍船か、密輸船くらいしかないとと思う。行き先であるアルビオンは内戦状態にある。」

そこへ態々旅行へ行こうという物好きはいないだろう。居るとしたら、戦争へ赴く軍用の船、若しくは両軍へと物資を横流ししている密輸船くらいしか方法はないだろう。

「だよな…」

ポリポリと頬を搔いて、エド達は考える。

勿論、この面々なら接收することも出来ないことは無いだろう。だが、後々面倒な事になる事は間違いない。

「ああ、もう。いいから行くわよ!」

色々と考えている皆を見て。

キュルケはそう叫んで、ふらつきながらも船着場へと向かっていた。

「おい、待ってって」

慌てて皆で彼女のあとを追った。

最後まで食べられなかったリングが、残った食事を恨めしそうに見

ていた。

船着場は着いた時は暗くてよく見えなかったが、実に勇壮な巨木だった。

その丘の上に枯れても尚、立ち続ける巨木に皆、一様に息を飲んだ。そして、その枯れ枝の先に吊り下げるような形で大小様々な形の船が停戦している。

幾つかは自衛の為の砲門を備えていて、物々しい空気がそこかしこに漂っていた。

「この階段、何段あるんだよ……」

上を見ていると、足元を忘れそうになる。

だが、丘の上までは直線に作られた石段になっている。傾斜がかなり急で、上りにくいこと、この上ない。いつそのこと、エドは全部作り変えてやろうと思ったくらいだ。

「文句は言わない！さ、もうすぐよ！」

石段を登りきると、巨木の大きさを改めて実感できる。

樹の根元は、巨大なビルの吹き抜けのホールのように、空洞になっていた。枯れた樹の幹をうがって造ったものらしい。

「急いで船を捜すわよ！」

「やあ、そこまでしてくれないかな？」

勢い根元へと駆け出したキュルケへと、のんびりとした声が掛けられた。

向かおうとしていた巨木の根元には、垂れ目とクシャクシャな髪の毛、緩んだ口元が特徴の覇気の無い男が立っていった。

「あなたは…」

肩周りに黒い羽毛をあしらった、派手なコートを着た男がふふんと鼻を鳴らす。

気取ってはいるが、キザではない。

「貴様、アルビオンの手のものか！」

「んん」

確かに今の状況で、アルビオンへと渡るキュルケ一行を妨害する必要があるので、大使が渡られると困るアルビオンの貴族派くらいしかない。

男の態度に腹を立てたギーシュが怒鳴るが、その男はさらりと受け流す。

その返し方に、ギーシュの温度は、更に上がる。

「何だ、その態度は！」

思いつきり怒鳴るが、全く持って意に介した様子はない。

「君達は、トリステインの特使だろう」

「僕らは、ここまでの水先案内人で…」

確かにギーシュはルイズ達を含めたアンリエッタ肝煎りの特使団の一人だ。

だが、本隊は既に昨夜の内に、アルビオンに向けて出発している。その事をエドは、はぐらかして答えるが、男はまたニヤリと笑って、
「誤魔化してもムダだよ」

勝ち誇ったような顔をしている。

だが、その気取った言い方が、どうにもギーシュは気に入らない。

「貴様、名を名乗れ！」

「おお、そうだった！」

どうも調子が狂う。

ギーシュだけが一方的に怒っているだけで、男の方は何も気にしていない。おどけたピエロのような調子で、手をポンと打って思いついたように自己紹介を始めた。

「俺はハノーヴァー」

「え……」

その名前を聞いたキュルケが呆けたような悲鳴を上げた。

「ハノーヴァー・バーデーン・ウェルテンブルクだ」

ニコリと更に口元を緩ませて、さらりと自己紹介した。

その名前に聞き覚えがあったのは、唯一キュルケだけだった。彼女だけが短く反応する。

「…何故、貴方がここに？」

いつもの彼女らしくない。

常の纏っている女王のような雰囲気は鳴りを潜め、まるで猛犬に睨まれた、子猫のような弱弱しさが漂っている。

「いや、あのね、ツエルプストーのお嬢ちゃん」

髭の生えていないすつきりとした顎を白い手袋をしたままの手で撫で回す。

何事か思索しながら、喋っているようだ。

「トリステインとゲルマニアの同盟。それを阻止しようと思って」

重大な事を全く深刻さも無く、まるで世間話でもするかのような調子でハノーヴァーは言った。

空気のように軽すぎる彼の言葉に、惑わされそうだが、エドとシヤナは一斉に戦いに備える。ここで押し通るのは、あまり得策ではないが、ここで時間を食うわけにも行かない。

先行しているアレンたちにも、このような妨害があるとも限らないのだ。

(まずいな...)

エドは奥歯を噛む。

かといって、天空に浮かぶというアルビオン。

その空中の航路で役に立つのは、シヤナくらいだ。自分達がいっても、足手まといにしかならない。

「何故！貴方はゲルマニア側の人間でしょう！」

腹の底から搾り出したようなキュルケの叫び。

その声に、皆が反応した。

「どづいつことだい…?」

ギーシュが冷や汗を垂らすキュルケの目を見つめながら聞く。
あまり聞きたくない答えのような気もした。

「彼はゲルマニアの侯爵なのよ」

予想通りの答え。

だが、後に続くのは、

「…そして、近衛師団も預かっている天才的な軍師よ」

近衛を預かるほどの存在。

それが堂々と叛旗を翻す。このことがどれだけ重大な事か、理解できない程、感は鈍くない。

「成る程。あちらさんも一枚岩じゃないっテカ…」

「そうみたい…」

世事に疎いウインリイは黙ったままだが、エド達は危険な香りを感じていた。

その危険な香りを垂れ流す、ハノーヴァーはこれまた実に楽しそうに笑みを浮かべている。

「いや、あのさ、同盟の条件？」

人の往来が朝ということもあり、少ない事が幸いした。

語っている内容は、十分に国家機密クラスのことである。市井に回るような事があれば、ご破算になりかねない。

「野蛮な成り上がりの帝に嫁ぐ事など、本来なら僕は許せん！」

ギーシュがかつとなる。

彼は出発の前の晩に、色々と殴られてはいたが、重要なことだけは忘れては射なかった。

バカにされた言い草に、キュルケが嫌そうな顔をしたが、国政に関わっているだろうハノーヴァーの方は、意に介した様子は無い。寧ろ、楽しんでいるような感じすら、ある。

「ウチのバカ皇帝はアンリエッタ姫と結婚できるって言うことで喜んでるみたいだけどー」

ふつつとため息を吐きながら、やる気の無い声を紡ぐ。

「そんな事したら、アルビオン攻めて来るじゃん」

明かに、嫌そうな顔になる。

確かに同盟締結となれば、アルビオンの標的はトリステインとゲルマニアに増える。同盟で攻め難い状況ではあるが、両国の軍事力を上回っているならば、気にせずに攻めてくるだろう。

そうなれば、ゲルマニアも道連れだ。

「俺としてはあのバカが死のうが、トリステインが滅ぼうがどうでもいいんだけどー」

重大な皇帝侮辱だが、元々ゲルマニアは諸侯連合で成り立っている国だ。

彼のような忠誠心の低い者も、少なからず居る。

「俺の領民を使うのはごめんだし、目的が達せられなくなるし、色々問題があるのよ」

それが当然だと言わんばかりに彼は言葉を続ける。

「だからさ、ここで大人しく引いてくんない？」

もう一度、垂れ目をキラリと光らせてキュルケ達に告げる。

「引けない、…と言ったら？」

答えは決まっているだろう。

すつとギーシュも杖を構える。自分達よりも確実に実力は上だろ
う。

勝算は全く無い。

しかし、誰か一人でもハノーヴァーの向こう、棧橋へと辿り着く
ことが出来れば、それで終わりなのだ。圧倒的に、此方の方に分が
ある。

「んー、別にいいよ」

返って来たのは、予想外の返事。これには拍子抜けしてしまう。
オマケに相手の真意がつかめない。

「俺が妨害しなかった所で…」

ハノーヴァーの言葉を遮るように、爆音が轟いた。

その耳を裂くような音に、上を見ると、轟々と赤い炎を上げて、
実のように吊り下げられていた、船が全て燃えている。焼かれた船
は、果実が落ちるように、落ちて来た。

「ま、こんな風にアルビオンには行けそうに無いしね」

完全に足を封鎖された。

このラ・ロシエールはトリステンからアルビオンへと渡る唯一の道だ。その港に浮かぶ船を全て破壊されては、キュルケ達に道は無
い。

勿論、ゲルマニアの港から渡る船もあるが、今から其方へ廻って
間に合う保証はない。

「おお、よく燃えてるね」

落ちていく紅い船を、感嘆の混じった声で眺めていた。

「閣下、命令通り、全ての船舶の破壊、完了しました」

楽しそうに爆炎を見つめていたハノーヴァーの傍へと平坦な声と
共に、銀髪の美女が降りてきた。

鼻筋の通った無表情さが、コロコロと秋の空のように変る、感情
豊かな侯爵の傍に居る分、より際立っている。

「ご苦勞様、セルベリア。殺しては無いよね？」

「抵抗されましたので、死に至らない程度には」

「結構」

それだけ返して、セルベリアと呼ばれた女性に微笑みかけた。

「いえ、閣下のご命令とあれば……」

「ま、という訳なんだわ」

呆けた顔で落果した残骸を見ていたキュルケ達に笑いかける。

「引くも何も行き先が無くなっちゃったね」

腹の立つ笑顔だ。

ギリギリと皆、特にギーシュは奥歯を噛んで悔しかった。ここで道を強制的に立たれてしまった今、打ち合ったところで、何にもならない。

「じゃ、そういうことで大人しく学院に帰ってね」

それだけ言い残して、颯爽とコート裾を翻す。

「待つてください!」

「ん?」

去ろうとしていた彼を呼び止めたのは、キュルケだった。

「何? カッコよく帰りたいんだけど…」

嫌そうな顔で、ぎりっと見つめているキュルケを、見るでもなく見ている。

早く帰りたいという希望が、体中から垂れ流れている。

「貴方の、貴方の目的は何ですか…?」

怯えるような声で、辛うじて叫ぶ事の出来た声。

その哀しい声に、朗らかな声でハノーヴァーは言った。

「俺の目的は…」

「目的は…」

ニツと更に口の緩みが大きくなる。
整った顔立ちである分、その緊張感の無さが、今ひとつ大人らしさを演出できていない。悪く言えば、子供っぽい印象を他人に与えるのだ。

「目的は、『楽しむ事』さ」
「それが、どういう…」

キュルケの足が震えている。
周りで見ている面々も、彼女は今すぐこの場から逃げ出したいと思っていることくらい、容易に察しがついた。ハノーヴァーは足を止め、じっと見ている。
くるりと振り向く。

「自分で考えな。ツエルプストーのお嬢ちゃん」

その言葉を口から出した時には、彼は既にこちらを見ていなかった。

「じゃ、また！」

右手を上げて、風に靡くコートを翻しながら、颯爽と去っていった。

後に残されたのは、それを憎々しげに見つけているエド達6人だけだった。

「閣下、本当に宜しいので？」

ハノーヴァーとセルベリアはここまで遣って来た自分の竜に乗って、帰り道を急いでいた。

吹きぬける風が、意匠の羽根や、髪を戦がせる。

「何が？」

のんびりと懐からキセルを取り出して加える。

煙を流し、一回だけ噴かせる。吹き抜ける風と一緒に息が灰を紅く染めた。

「妨害するならアルビオンに渡れば宜しいのでは…？」

「んー、それなんですけどね」

ハノーヴァーは、また一回だけ煙を吐く。

その言葉は何処まで本当なのか。嘘かもしれない、本当かもしれない。そう言った疑心暗鬼に陥らせるのが、彼のやり口だった。

故に、一癖も二癖もあるゲルマニアの諸侯たちを纏め上げられているのだ。

その手腕や話術は、次期皇帝に最も近いと目されている。現皇帝の懐刀であると同時に、タイマーの無い爆弾。

「既にアルビオンには入っているのよ、こっちの部下が。だから心配無用？」

「御意」

ばさつと、また竜が羽ばたいた。

「どうするのよ…」

未だに煙を噴き上げる残骸を見届けながら、キュルケが聞く。
アルビオンへ行く術が無くなってしまった今、残された道は一つしかない。

「仕方ない…、学院に帰るぞ」

諦めのようなエドの呟きが、港町に吹き抜ける風に乗って消えた。
その傍でギーシュが哀しげな声で、ポツリと呟いた。

「はあ…、姫様の役に立てると思ったのに…」

この街の出入り口には、昨日の内にアレンが箱舟の出入り口を設置してある。

それを使えば、すぐにでも学院へと帰ることができる。港町だと言うのに、ここには酒場と宿屋しかないのです、土産や観光という面に欠けている。

その為、一刻も早くエド達は帰りたがったのだ。

「君達は、どうにも姫様の役立てるといことが…」

そそくさと街の出口へと向かうシャナ達を追うように、ギーシュが喋り始めるが、皆聞いていない。

キュルケは、そもそも忠誠心の薄いゲルマニア出身ということが

先行している。

シヤナにとっては、王族というのは、どうでもよい存在なので。エドやウインリィは、王族のいない国から来たので。

そして、リンは、

「あ、そういうのイイカラ。俺、王子だシ」

「は…:？」

一番、解っているので今更、説明が不要だから。ギーシュとキュルケの目が点になる。

「ちょっと、王子というのはどういことだい？」

聞き逃せない一言を、さり気無く言ったりリンにギーシュが詰め寄る。

だが、相変わらずリンは冷静に、細い目で答える。

「んー、俺は東の大国のシンって所から来たノ。で、俺はその国の王子？」

何故か疑問系だが。

これは聞き逃せない話である。いきなり、「王子」という単語に反応したギーシュが往来にも関わらず、平伏した。

「王子殿、昨晚は失礼な事をして申し訳ありませんでした！」

「あ、そういうのいいんだケド…:」

彼は完全に誤解しているが、リンはこの世界でいう魔法の使える王族ではない。何部族かの集合として、成立している王室の生まれというだけの話だ。

ハルゲギニア

その為、あんまり礼をされるような事になれていない。

「何と王子は優しい!」

実は、昨日の晩、同室に泊まったギーシュとリンは決闘まがいの騒ぎを起こしていたのだ。

勿論、繰り出される徒手空拳に全く対応できず、魔法を全く使わせて貰えなかったギーシュの惨敗という結果だったが。

その後から、どうにもリンにギーシュは懐いているというか、信奉しているのだ。

ぶっちゃけ、リンには迷惑極まりないが。

「困ったナ…」

ポリポリと頬を搔きながら、参考にしようとする他の面々を見た。キュルケは、道端に捨てられていたらしい黒い犬を見つけて、はしゃいでいる。

「あら、可愛いわね。連れて帰るからね」

「……」

「ねー、シヤナもそう思うでしょ」

シヤナに見せているのだが、彼女は無反応のままだ。それでも挫けることなく話し続けていると、耐え切れなくなった彼女は口を開くのだ。

エドとウインリイは、

「あー、また無茶したでしょ!」

「うるせえよ!」

エドの機械鎧オートメイルの状態を見て、不具合を見つけたウインリイが怒鳴っている。また何処か故障したらしい。便利な反面、機械鎧オートメイルというのは、準備や材料が高価だ。

だが、これを見たリンは一計を思いついた。

「なあ、ギーシュ」

「はは、何なりと」

「……」

何だか、扱い難い。向こうの世界に残してきた部下達が懐かしい。

「良質な鉱石の取れる鉱山と炭鉱、後は優れた鍛冶師はイルカ？」

「いえ、どちらも思い当たりません……」

悔しそうに言いよどむギーシュと違って、面白いものを見つけたような調子で、リンの言葉を小耳に挟んだキュルケが近寄ってきた。

「どっちも当てがあるわよ、王子さま？」

「何！」

これで大丈夫そうだ。

いつも奢ってもらってばかりのリンなりの、エドへの恩返しである。幸いなことに技師も居ることだし、問題ないだろう。

「でも、皆が帰ってきてからね」

くすつと笑いながら、黒い子犬を抱えたキュルケが言った。

豊満な胸に抱かれた子犬は、少し苦しそうに断続的な息を吐いていた。

「勿論だ。それでいい」

44・The song is to welkin

「アルビオンが見えたぞーっ!!!」

鐘楼の上に立った見張りの船員が、大声を上げた。

ラ・ロシエールを出航してから、早1日半。ようやく目的地が見えてきたらしい。

「うおおっ!! な、なに!？」

その船内全てに響き渡る声は、あまりにも大きい声だったので治療を終えて本調子ではないが、すっかり元気になって寝ていた才人は驚きの声を上げて飛び上がった。

それには、すでに起きていたルイズも呆れ顔で見る。

才人は背伸びをした後、船室の窓から下を覗き込んだ。

白い雲が広がっている。

「………?」

才人は寝ぼけ眼をこすって、また舷側から眼下を覗き見る。

しかし、広がるのは穏やかに流れている白い雲ばかり。陸地など、どこにも見えない。

才人はあくびをしながらぼけっと白い雲を見つめていたが、やがて居ても経っても居られなくなって、船室を飛び出した。

「どこにアルビオンがあるんだよ……」

甲板に出てみても、流れるのは白い雲ばかり。

その時、舷に寄りかかって寝ていたアレンが目を覚まして、軽く

背伸びをして起き上がった。
才人が挨拶する。

「あ、おはよう。アレン」

「ごはんはまだ？」

「・・・・・・・・」

相変わらずよく食べる少年である。

船に積み込める食料には限界があるのだから、その殆どを空にしていた。本来なら保存食ばかりで1ヶ月は持つはずの、糧食が僅か1日で、この少年の胃へと消え去った。

お陰で、才人たちに出される食事は何段もランクダウンしたものになってしまっていた。

「おはようございます、才人さん」

朝起きて、いきなり食事の事を話された才人は、堰き止めていた疲れが出てきたような気がした。

そのとき、遠くでワルドと何やら話をしていたルイズが、アレンに気づいて近寄ってきて声をかける。食事が足りない為か、どうしてもイライラしてしまう。

「アレン、おはよう」

「随分と、早いですね」

そんな事を言うアレンに、ルイズはため息をついて、

「もう昏よ」

「あれ、そうなんですか？」

ルイズの睨みつけに、けろりと興味なさげにアレンは返す。

「そういえば、さっき船員がアルビオンが見えたぞー！とか言ってたけど・・・」

遠くへと流れていく白い雲を目で追いながら、才人が尋ねた。

「どこにも陸地なんかないじゃねえかよ」

才人がそう呟くと、ルイズは、

「あっちよ」

と短く言っつて、空中を指差した。

「はあ？」

ルイズが指差す方をアレンと才人が顔を向ける。その途端に二人は息を呑んだ。

「はあ・・・」

「へえ・・・」

そこには素晴らしい光景が広がっていた。

雲の切れ間から、黒々とした大陸が覗いていて、大陸は遙か視界の続く限り延びている。

地表には山がそびえて、川が流れていて滝からはるか下の大地まで水が流れ落ちていて途中で霧に変わっていた。

簡単にいえば、とても大きな島が空中に浮いていたのだった。

「驚いた？」

ルイズが口をポカンと開けている二人に言った。

「ああ、こんなの、見たことない」

呆けている才人がそう呟くと、ルイズは何故だか自信満々に説明を始めた。

まるでこんな風景はないだろうと言っているかのようだ。別にこの浮遊大陸が出来たのはルイズの仕業でもなんでもないのだが、誇らしげに話す。

「あれは浮遊大陸アルビオン」

天空に浮かぶ、莫大な土地が目指すべき場所らしい。

「ああやって、空中を浮遊して、主に大洋の上をさまよっているわ」

大洋の上と言う事は、この下は眩く陽光を反射する青の平原という事だろう。

彼女の説明を聞いているうちに、ネギとリナリーも甲板に来た。眼前に広がるファンタジーな光景にリナリーだけは息を飲んだ。

「すごいわね…、この光景」

「でも、月に何度か、ハルケギニアの上にはやってくる」

誇らしげに話すルイズの傍。

ネギは魔法世界の事を思い出していた。どこか、里帰りしたような気分さえある。

「大きさはトリスティンの国土ほどもあるのよ。『白の国』とも呼ばれているわ」

才人が尋ねる。

「どうして『白の国』なんだ？」

「あれ」

ルイズは大陸を指差す。

大陸から零れ落ちる大河の水が、滝となり空から流れ落ちている。その際、途中で白い霧となって、大陸の下半分を幻想的に包み込んでいた。

霧は雲となり、大雨を広範囲にわたってハルケギニアの大陸に降らすのだと、ルイズは可哀想な胸を張って言った。

「どう凄いでしょ？」

そのとき、鐘楼に上がった見張りの船員が、大声を上げた。

「右舷上方の雲中より、船が接近してきます！」

アレン達は言われた方に、一斉に顔を向けた。

目を凝らすと、白い雲を引き裂いて船が一隻、近づいてくるのが見えた。

自分たちが乗っている船より明らかに大きく、舷側に開いた穴から大砲が突き出ている。

とてもではないが、その船は和やかな雰囲気は一切感じられなかった。攻撃的で、暴力的。そんな雰囲気全体に纏ったフリゲート艦だった。

「あの、嫌な予感がするんですけど…」

ネギがボソツとアレンとリナリーの袖を引きながら呟いた。

「奇遇ですね、僕もです」

「…私も」

その危機感を抱いている三人の傍、才人だけは呑気に、

「へえ、大砲なんかあるんか」

とぼけた声で言っていた。緊張感が少なすぎる。

4人の言葉を耳に入れたルイズが眉を顰める。

「いやだわ。反乱勢……、貴族派の軍艦かしら」

ワルドと並んで操船の指揮を取っていた船長は、見張りから報告を聞いていた。

「た、大変です！船長！」

鐘楼に登っていた見張りが大声で叫ぶ。

だが、今度は幾分、恐怖が混じった声である。それを感じ取ったのか、船長も真剣な顔になって聞き返す。

「何だ！どうした!？」

「あ、あの船は旗を掲げておりません！」

見張りからそう聞いて、船長の顔がみるみるうちに青ざめる。

「何だとう！」

船の旗は、その船舶の所属を表す重要な印だ。

それを掲げていないという事は、単に掲げる事を忘れているのか。それとも所属の無い、つまりは、

「く、空賊なのか？」

「くそ、こんな時に……」

船長と同じく顔を青ざめてた船員が、緊張気味に呟く。ワルドも額に冷や汗を浮かべる。

その言葉を聞いて、他の船員たちも騒ぎ出した。にわかに船内が慌しくなる。

このルイズ達が乗り込んだ船、マリー・ガラント号は、戦闘域に行くにも関わらず、大砲などを積んでいない。つまりは、空中での砲戦ができないのだ。

「ま、間違いありません！」

船員が一人。大声で叫ぶ。

その事が、更に船内中の恐怖を掻き立てる。

まだ貴族派の戦艦だった方が良かったかもしれない。

此方には、敵方である王党派に会いに行くとは言え、貴族が乗っている。貴族が乗っているなら、手荒な真似は出来ないはずだった。

「内乱の混乱に乗じて、活動が活発になっていると聞き及びますか

ら……」

だが、空賊なら別だ。

貴族への儀礼など彼らは持ち合わせていない。撃沈されるか、殺害されるか。どちらにしても危険なのは、間違いない。

「に、逃げるんだ！取り舵いっぱい！」

船長は船員たちに、命じたが、時すでに遅し。

黒船は併走し始めて、脅しの一発を放った。船のすぐ横をその砲弾が掠めて、空中で爆発する。

「ひいいいっ！！や、やっぱり賊だアアア！！」

「勘弁してくれよおお！！殺されちまうのか！？」

その鈍くて大きい音に、船員たちは脅え始めた。

威嚇の一撃を放った黒船のマストに、四色の旗流信号がするすると登る。

「停船命令です、船長お！！」

「クソツたれがア！」

黒船の掲げた停船命令を無視して、尚も船を進める。

「やっぱり撃ってきましたね……」

甲板に居た5人は大砲の衝撃をまともに喰らっていた。喰らったからといって、気絶するようなことはないが、ルイズは半狂乱になっていた。

「ここで死ぬの私、まだ何もできないのに！」

「落ち着け、ルイズ！」

必死になって才人が押し留めているが、その停止を振り切ろうともがく。華奢な体つきの癖に嫌々と頭を振るルイズの力は、かなり強い。

才人は振り乱すルイズの手に彼方此方、引っ掛かれていた。

「いやよ、落ち着いていられないわ！」

完全にルイズは混乱している。

「ネギ君！」

アレン達の考えは一致した。今は兎に角、自分達が生き残る方が先決だ。

撃沈しない程度に、帆をネギが射抜く準備を始める。

「魔法の射手連弾雷の17矢！」
サキタ・マジカ セリエス フルゴーリス

雷の閃光が音を立て、17本。

黒船の帆を射抜くように進んでいく。ふわりと吹きぬける風が順風になり、速度が上がってくれば、帆のなくなった船では追いかけることは出来ないだろう。

だが、

「へ?」「んな!」「誰?」

その17本の雷は突如として、敵船の甲板に現れた人物によって阻止されてしまった。

クルクルとリボンのような者が、その人物から伸びて、雷を全部弾いてしまった。

「あれは…」

リボンの片一方は、まるでミイラ男のような包帯でクルクルと巻かれた大男に繋がっている。その男が全てを弾いたらしい。

段々と黒船とマリー・ガラント号との距離が近づいてくる。その男に巻かれたリボンも一条毎に判別できるほどだ。

「もう一度!」

今度はさっきよりも強い雷を。

「ラス・テル マ・スキル マギステル…」

帆を射抜くのではなく、マストを押し折る様な迅雷を。

「闇夜切り裂く 一条の光」
ウヌース・フルゴル
コンキデンス・ノクテム

白い雷がネギの右手へと集まる。

青白い閃光と電撃を纏いながら、解放への時間が迫る。白のミイラ男は辺りにリボンを漂わせながら、此方の様子を注意深く、窺っている。

「我が手に宿りて 敵を喰らえ」
イン・メアー・マヌー・エンス
イニミークム・エダット

雷を纏った右手を前へと差し出す。
お互いの船の間を、音を越える速度の弾丸が飛ぶ。

フルゲラティオー・アルピカンス
「白き雷！」

だが、それも無表情にミイラ男が弾き、蒼穹へと散らす。
これはネギもシヨックだった。

(かなりのやり手ですよ！)

ネギの持つ呪文の中では「白き雷」は上から数えられるほどの高威力の呪文だ。それを易々とミイラ男は弾いてみせた。ネギ自身も、この呪文を弾くには対抗呪文が欲しい。

これ以上の呪文となると、詠唱に時間がそれなりに必要になってしまふ。

「…まずいですね」

アレンには飛ぶ術がない。

つまりはこの空中で、船という足場を失うと、戦えなくなってしまふ事を意味していた。二人は戦えないことも無いが、どうしても足手纏いを抱えて撃退できるような相手ではない。

顔の見えないミイラ男が、覆面の下、笑っているような気がした。ネギの呪文を弾いたミイラ男から伸びる、一条のリボンが、頭を悩ませていたアレンの左腕へと巻きつく。

「へ？」

これから先は、予想は付いた。

「アレン君！」

「アレンさん！」

「アレン！」

甲板で見ていた3人が叫ぶが、遅い。

リボンに巻きつかれたアレンが、釣竿を引き上げるような調子で、空中へと投げ出された。

「くそ！」

直に右手だけで腰の銃を引き抜き、左手に巻き付いたリボンを打ち抜く。

拘束を強引に解いたアレンは、黒船の甲板へとドンと大きな音を立てて、着地した。

「危ないですね…、寿命が縮まるかと思いましたよ」

今の曲芸染みたアクロバットは、アレンの道化師としての技能が生きた。

もしサーカスに参加していなかったら、間違いなく今頃は自由落下していただろう。

「大丈夫ー！」

手すりに掴まり、リナリーが黄色い声で叫ぶ。

彼女の声に、アレンはミイラ男を、銀色の目で睨みつけながら答える。

「大丈夫です！」

取り敢えずは助かった。

だが、ネギの呪文を防ぐような実力者を自分ひとりで、船を壊さずに、倒せるかと聞かれると、自信がない。加えてここは敵船。戦っている内に、他の空賊がやってこないとも限らない。

圧倒的にアレンは不利だった。

「……」

それを解っているのか、ミイラ男はゆっくりとした動きで拳を振るってきた。

避けられない速さではない。だが、防戦一方になってしまふ。銃弾を放つが、ポスポスと情けなく当たるだけで、貫いている様子はない。

師匠の銃のためか、100%の力を出せていないようであった。

「く……」

幾度か打ち合い、再び、距離を置く。

最初と同じ位置だ。ミイラ男の背の奥に、乗ってきた船が見える。見つかった時よりは、随分と速くなっているが、それにピッタリ併走する速度で、黒船は着いてくるのだ。

再度、ミイラ男は打ち合う姿勢を取る。この白い塊、凶体はでかいくせに、意外と敏捷に動く。

（来る！）

そう思って、アレンも身構える。

だが、

「あれ…？」

右側を綺麗にすり抜けて行ってしまった。何かしらの攻撃を受けた様子はない。

殴られたわけでもなく、蹴りを入れられたわけでもなく、毒を打たれた様子もない。ただ右をすり抜けていった。

だが、油断は出来ない。

「何をしたんですか…？」

すり抜けたミイラ男は、アレンの後ろで手すりに足を掛けていた。そして、出航の夜に襲撃していた仮面の男と同じように、逆様に落ちていった。違うのは、ここが陸地が見えないほどの上空であるということだろう。

「逃げた…？」

そう呟いたアレンの両腕が、何かに引っ張られる。自分の意思とは無関係に、腕を引っ張られ、足が動く。余りの強さに木製の甲板の上で踏ん張る事が出来ない。

「わ、わわ…！」

見れば両手には錠のように、白いリボンが巻きついていて、その先は甲板を飛び出し、船の下へと繋がっている。

「せ」

リナリーの見ている前で。

「ば」

ネギの見ている前で。

「い！」

才人の見ている前で、ミイラ男に牽引されたアレンが、蒼穹へと自由落下を始めた。

両腕が塞がれている以上、さっきと同じように拘束を振りほどく事ができない。

「わー！」

叫び声を上げて落ちて行く。

「アレン君！」

危機的状况を察知したりナリーが、甲板を蹴り、自分の意思で蒼穹へと飛び出していった。

「アレンさん！リナリーさん！」

だつと二人を追って、ネギも空中へと飛び出す。

「3人とも！」

才人が叫び、甲板から身を乗り出す。

遠くへ自由落下していく赤毛の少年の影が見えた。

「大丈夫ですからー！」

そう叫ぶネギの音が、才人の耳にはしつかりと聞こえた。
しかし、そうは言っても、人間は飛ぶようには出来ていない。

「大丈夫な…」

再び叫ぼうとした時には、誰も見えなくなっていた。

「死ぬなよー！」

届いているかは、解らない。

それでも才人は無事を祈らずには、いられなかった。

甲板での一頻りの戦闘が終わったのを見計らったタイミングで、
再び黒船は脅しの一発を放った。

船のすぐ横をその砲弾が掠めて、空中で爆発する。火薬の量が先
程よりも多いのか、炸裂の威力が強い。

「ひいひいっ！！」

「俺たちはどうなっちまうんだ…」

その一際、鈍くて大きい音に、船員たちの脅えは最高の位置に
来ていた。

「船長お！！」

半狂乱になった船員がなみだ目で叫ぶ。

「クソツたれがア！」

悔しさを隠しきれずに、船長が怒鳴る。

「泣き言、言うなや！」

部下達を叱咤するが、正直、船長も逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

「まだ、諦めんな！」

そう叫ぶ船長の叫びは、船員を励ますものであると同時に、震える自分の足を叩くためのものでもあった。だが、操舵室に集った皆の恐怖を、更に掻き立てるように、混乱したルイズが飛び込んだ。

「も、もうダメよ… 完全に塞がれたわ」

そうルイズが言うと、進行方向に砲弾が打ち込まれた。

また炸裂の衝撃で、船体が大きく震える。ビリビリと振るわせるだけで、直接の衝撃は全く無いが、それでも船員たちの心を折るには、十分すぎた。

「く、クソ…」

遂に船長は諦めてしまった。

そして助けを求めるように、隣に立ったワルドを見つめる。

「ワルド！」

船長と同じように助けを求めようと、ルイズが叫んだ。身近な人間を見て、幾分落ち着きを取り戻したらしい。

だが、そんな二人の期待とは裏腹に、ワルドは両手を挙げてまいったとばかりにこう言った。

「魔法は、この船を浮かせるために打ち止めだよ」

唯一、この船に乗ったメイジの降伏宣言。

それはこの船の降伏宣言と同意だった。

「あの船に従うしかないよ」

ワルドの落ち着きを払ったその言葉に船長はうなだれる。そして、怒りを含めた声で、船員たちに静かに命令した。

「裏帆を打て。停船だ」

「…アイ・サー」

力なく、船員達がマストへと昇り、裏帆を掲げる。

完全に停止した操舵室で、船長は腰をドカツと落とし、帽子を投げ捨てて叫んだ。

「これで俺は破産だ！」

嘆いても始まらない。

命とお金のどちらが大事かは、また個人の価値観だろう。

「チキショーッ！」

船長は心の底から叫んだ。

叫んだ所で、この後に待ち受ける結果が変わるはずも無いのだが。

45・Prince of the heavenly State

突如として現れて大砲を放した黒船と、行き足を弱め停船した自船の様子に怯えて、ルイズは思わず才人に寄り添った。

「何だなんだ……」

「しょうがないじゃない……」

可愛く寄り添うルイズの足はガクガクと震えている。

勿論、武器を持って遣って来た黒船に、才人も内心は震えている。しかし、ここで恐れていることが解れば、ルイズが危険に晒される。それだけは何としても阻止しなければならなかった。

「イカツイ顔した奴らがいっぱい乗ってるし……」

二人は不安そうに黒船の甲板に現れた強面の男達を見て、震えていた。

「空賊だ！無駄な抵抗はするな！」

突然、黒船からメガホン持った男が大声で怒鳴った。

先陣を切って、腰にサーベルを指した男が乗り込んできた。

「空賊ですって？」

ルイズが驚く。アレン達の悪い予感が当たったと舌打ちをする。

黒船の舷側に弓やフロント・ロック銃を持った男たちが並び、こちらに向けて狙いを定めた。一歩でも動けば、即座に蜂の巣だろう。鉤のついたロープが放たれ、こちらの船の舷側に引っかかる。

それをつたって手に斧や剣などの武器を持った屈強な男たちが、船に乗り込んだ。

その数はおおよそだが、大体二十人。

その夕夕事でない様子に、才人はルイズの前に出て、剣を握った。だが、完全には治っていない腕がズキズキと痛み始める。痛みの走る腕に両刃の大剣であるデルフリンガーは重すぎた。

「痛っ……………」

「サイト……………」

ルイズが心配そうに呟く。

才人はその声で、なんとか剣を握り締める。

「サイト君。無理だ」

だが、いつの間にか背後に現れたワルドに止められた。

「でも……」

「ここは大人しくしときなさい……」

食い下がろうとする才人にワルドは、冷静に言葉を続ける。

「やめておけ。敵は武器を持った水兵だけじゃない」

ずっと片舷にずらりと並んだ黒い口を指差し、才人を説き伏せる。

「あれだけの門数の大砲が狙ってるんだ。あれが火を噴けばどうなるか、解らない訳じゃないだろう」

確かにその通りだ。

凡そ、20門。一斉に火を噴けば、確実にこの船は撃沈されるだろう。

オマケに、ここは空の上。落とされたら海まで自由に墜落だ。

「戦場で生き残りたかったら、相手と己の力量をよく天秤にかけ、わきまえろ」

齒噛みして悔しそうに、目を伏せる。

「おまけに、向こうにはメイジがいるかもしれない」

ワルドの言うとおり、前甲板で繋ぎ止められていたワルドのグリフォンが、突然騒ぎだす。

だが、すぐにそのグリフォンの頭が青白い雲で覆わると、グリフォンは倒れて寝息を立て始めた。どうやら、あれも魔法らしい。大方、貴族崩れが空賊に紛れ込んでいるのだろう。

スリープ・ケラウド
「眠りの雲…」

平民ばかりなら魔法は唱えられない。

明確な証拠であった。

「確実にメイジがいるようだな」

「つくづく魔法ってのは厄介だな…」

才人が舌打ちすると同時に、甲板に派手な格好した一人の空賊が降り立った。

ボサボサの黒い長髪は纏められ、無精ひげが顔中に生えている。

更に左目には眼帯が巻いてある。丁寧なほどにテンプレートな海賊

の長の姿だった。

才人はそのいかにもな姿に怯えてる。

「この船の船長はどこでえ」

その男が荒つぽい仕草と言葉遣いで、辺りを見回しながら言った。大声に荒さが混じり、怖ろしい事この上ない。

「わ、わたしだが」

震えながらも、必死に威嚇を保とうと努力をしながら、船長が手を上げる。

頭らしい髭の男はドストロスと船長に近づくと、抜いたナイフを船長の顔にびたびたと叩いた。

「船の名前と、積荷は？」

「ト、トリステインの『マリー・ガラント』号。積荷は硫黄だ」

ガクガクと震えている船長を見た、空賊たちの間から、ため息が漏れる。

頭の男はニヤリと笑うと、船長の帽子を取り上げ、自分にかぶった。

「船ごと全部買った。料金はてめえらの命だ」

船長が悔しさで震える。

「く……」

それから頭は、甲板に佇むルイズとワルドに気づいた。

こちらも解りやすく、貴族であるという印を着けているのだから、反応しないはずが無かった。

「おやおや、貴族のお客さんまで載せてんのか」

ルイズに近づいて、顎を手で持ち上げる。

必然的に、ルイズの顔が、男の目と鼻の先になり、さらに目が合った。

「こりゃあ別嬪だ。お前、俺の船で皿洗いをやらねえか？」

男たちはそう言うと、下卑た笑い声を上げた。その笑い声に続いて空賊の船員たちも笑い始める。

下卑た笑い声とその言葉にルイズは、反射的にルイズはその手をピシヤリとはたく。

「ほう……」

叩かれた方の男は、感心した目で見ている。

そして燃えるような怒りを込めた瞳で男を睨みつけた。

「下がりなさいッ！！ 下郎ッ！！」

「驚いた！ 下郎ときたもんだ！！」

男たちは大声で笑った。

ルイズをバカにした態度に、才人は剣を抜こうとしたが、ワールドが止める。

「少しは冷静になれ」

「で、でも……。ルイズが……」

才人も、自分のご主人様の危機に気が動転している。
こんな時に他の3人が居たら、どうなっていたのだろうか。

「君がここで暴れても、どうせ勝ち目はない」

肩に掛かる力が強くなる。

「ここにいる奴らが武器を持っている上に、メイジだって居る」

才人ははつとした。

すっと柄を握る手を緩める。

「落ち着いたか？」

少しばかり、肩に置かれた力が緩められる。

「今、君が暴れなければルイズに害は及ばない。今は耐えろ」

才人は柄から手を離してグツと耐えた。

「てめえら。こいつらも運びな。身代金がたんまり貰えるだろうぜ」

頭が、ルイズたちを指差してそう言った。

眼帯と髭の頭は、ずっと大笑いしていた。

才人は剣を取り上げられ、ワルドとルイズは杖を取り上げられた。したがって、船倉に鍵を掛けられただけでもう、手足が出なくなっってしまった。

武器のない才人と杖のないメイジはただの人である。ルイズは杖があるうがなかるうが、あまり関係なかったが。

「…三人がいてくれたら」

三人がいれば、船倉の鉄製の鍵など、易々と破壊して、無理やりにも出られるし、三人は素手でも充分強い。才人は思わず呟く。

「そつえば、3人はどうしたんだい？」

船倉に閉じ込められた3人。

周りには、酒樽や穀物の詰まった袋やら、危険な火薬樽が雑に置かれている。ワルドは興味深そうに、そんな積荷を見て廻りながら聞いた。

「3人は、さっきの戦いで…」

「そうか・・・」

皆まで言わなくても、ワルドには伝わった。

3人がじつと腰掛けていると、ギイツと重苦しい音がして扉が開いた。

見れば、太った男が、スープの入った皿を持ってやってきていた。

「飯だ」

扉の近くにいた才人が、皿を受け取るうとしたとき小太りの男はその皿を遠ざけた。

その行動に、思わず眉にしわをよせる才人。

「何すんだ……」

「質問に答えてからだ」

小太りの男がそう言うと、ルイズが立ち上がった。

「言っでごらんさい」

「お前たちは、アルビオンに何の用だ？」

「旅行よ」

即答である。

その答えに、小太りの男は怪訝な表情をする。内乱中の国に旅行など、どれだけ粹狂な趣味の持ち主でも、自分の身を危険に晒すような事をするはずがない。

「トリステインの貴族がこんなときのアルビオンに旅行か？」

はつと鼻を鳴らして、否定する。

「いったい、なにを見物するつもりだい？」

「そんなこと、あなたに言う必要はないわね」

「ほっ……」

その強気な態度を崩さないルイズに男は興味を持ったようだ。

「随分と強気な態度じゃねえか。おもしれえな……、アンタ……」

空賊はそう言って笑うと、皿と水の入ったコップを寄越した。才人は受け取り、それをルイズの元へ持っていく。

「ほら」

「あんな連中の寄越したスープなんか飲めないわよ」

ルイズはそっぽを向いてそう言う。

「食べないと、体がもたないぞ」

ワルドがそう言うと、ルイズはしぶしぶスープの皿を受け取った。3人は、スープを飲み干すと、またやることなく、時間が経っていく。

ワルドは壁に背をついて、なにやら物思いに耽っている様子。

才人はキョロキョロと辺りを見回して、火薬が詰まった樽を見つめる。

「こんなところで油売ってていいのかよ。脱出すんぞ」

「え？」

ルイズは怪訝な表情で、才人のすることを見ていた。

才人は火薬の樽をカポツと開けると、皿を使ってざらつと火薬を掬う。

それを見ていたワルドがポツリと呟いた。

「どこに脱出するつもりだね？ここは空の上だよ」

「あ……、そーいやそーうだった……」

才人は、諦めたように座り込んだ。

「でも、黙って座ってるだけじゃあ……」

ぐつと堪えるが、このままでは前にも後にも進む事ができない。
ルイズは外の様子をぼけっと眺めていた。

「はあ…」

時計も無い。窓も小さいので、どうにも時間の経過が分かり難い。
そんな感じで時間が流れていくと、突然、扉が開いた。

「ようっ！」

痩せた男が入ってきて、男は3人を見回すと、楽しそうに言った。

「おめえらは、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」

ルイズたちは答えずに目を閉じている。

「おいおい、だんまりかい」

男は頭を掻いて、げんなりした様子で言葉を続けた。

「まあ、貴族派だったら失礼したな」

ルイズの正面にドカッと座って、男は続ける。

「俺たちは、貴族派の皆さんのおかげで、商売させてもらってるんだよ」

この空賊団は貴族派と繋がりがあらしい。

「バカ正直に王党派に味方する馬鹿な連中を捕まえることも、裏で

頼まれてるのさ」

「じゃあ、この船はやっぱり、反乱軍の軍艦なのね？」

やおらルイズが尋ねたが、男は懐から取り出したタバコに火を着けた。

ふつつと煙を吐いて、質問に答える。

「いやいや。俺たちはあくまでも対等な関係さ。まあ、お前らには関係ねえことだがな」

じつとタバコを銜えたまま、ルイズに顔を近づける。

タバコの煙の甘い香りが、ふんわりと彼女の鼻をくすぐった。

「で、どうなんだ？」

タバコを手で強引にもみ消しながら、男が聞いてきた。

熱い、焼けるような臭いが一瞬だけして、才人は顔をしかめた。

「お前らは貴族派なのか？そうだったら、きちんと港まで送ってやるよ」

才人はホツとした。

ここでルイズが自分たちは貴族派だと言えば、全ては丸くおさまる。

おまけに港まで運んでもらえる。

しかし、ルイズは首を縦には振らず、真っ向から男を見据えた。

「バカ言っちゃいけないわ！」

男も、才人も、ワールドも、ぼかんとして見ている。

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか！」

いきなり雰囲気の変った、正確に言うと、推しとめていたものが一気にあふれ出てきたという方が正しいのかもしれない。

いきなり喚きだしたルイズの言う事に、男は笑って、もう一本のタバコに火をつけた。

「わたしは王党派への使いよ。まだ、あんたたちが勝ったわけじゃないんだから」

ギリツとタバコをじっくりと蒸かす男を睨む。

勿論、男の眼光も鋭く見ている。その視線は怖いのだろう。手が震えているのが、才人には、よく解った。

「アルビオンは王国だし、正統なる政府は、アルビオンの王室ね」

朗々と言葉を紡いでいるが、やっぱり怖いのだ。

才人はすつとルイズに寄り添って、手を握ってやった。

「わたしはトリステインを代表してそこに向かう貴族なのだから、つまりは大使ね」

ルイズの声の震えが止まった。

「だから、大使としての扱いをあんたたちに要求するわ」

ワルドは思わず苦笑する。

空賊はそれを聞くと、ニヤリと笑った。だが、下卑たような笑みではなくふんわりとした笑みだった。

「お前は面白いね」

じつくりとタバコを蒸かす。

「正直なのは、確かに美德だが、お前たちはただじゃ済まねえからな」

「あんたたちに嘘ついて頭下げるぐらいなら、死んだほうがマシよ」

ルイズは無い胸を張って言いきった。

「俺はそんなことで死にたくねえぞ」

才人は心底呆れた声で言う。

「なに言ってるのよ。あんたはわたしの使い魔でしょ。こうなったら、覚悟しなさいよね」

「はあ……」

強引なルイズの言葉。

こうなった彼女は、もう人の話を耳に入れようとしない。

空賊はルイズたちに背を向けて言う。

「頭に報告してくる。その間にじっくり考えるんだな」

そう言うのと、空賊の男は扉を開けて去っていった。

空賊が去っていった後、才人は緊張を解いた。

「なんで正直に言ったんだよ……」

「何がよ」

「俺たち、もうタダじゃ済まねえぞ」

「うるさいわね。あんたは黙ってて」

「あー！わかったよ！黙ってやるよ！ふんだ！」

こんな状況でも喧嘩している二人を見て、ワルドはまた苦い笑みを浮かべた。

「それより、あんたは体大丈夫なの？」

「あのなあ、俺たち破滅なんだぞ。わかってんのか？ 体の心配するどころじゃねえっつの！」

ルイズは毅然として言った。

「最後の最後まで、わたしは諦めないわ。地面に叩きつけられる瞬間までロープが伸びると信じるわ！絶対にね！！」

才人には真っ直ぐにそう言うルイズがとても眩しかった。

眩しかったけど、ワルドと結婚するんだよなと思ったら、たまたまなく切なくなつた。今、こうやって握っている手の暖かさが、哀しくなつた。

「…それなら、嘘くらいつけよ」

「それとこれとは別。嘘なんかつけるもんですか。あんな連中に！」

才人は呆れて、右手を額について、ため息を吐いた。

そのとき、扉がまた開く。見れば先ほどの痩せた男だつた。

「頭がお呼びだ」

空賊の男は、短く、呆れながら言った。

ルイズたちが連れていかれた先は、かなり立派な部屋だった。扉を開けて中に入ると、まず目に入ったのは豪華なディナーテーブルである

その一番上座に先ほどの派手な格好した空賊の男が、どてんと腰掛けていた。

「こいつらか？」

「へえ、そうでさー！」

頭は大きな水晶のついた高価そうな杖をいじっていて、その周りでは頭の部下たちがルイズたちをニヤニヤと笑いながら見つめている。

痩せた男が後ろからつつく。

「おい、頭の前だ。挨拶しやがれ」

その言葉にはっとしたルイズは、挨拶なんかするもんか、といった様子で頭を睨みつけた。

その様子を見て頭はニヤリと笑う。その表情はどこか気品が漂っていた。

「気の強い女は好きだぜ。…子供でもな。さてと、名乗りな」

「大使としての扱いを要求するわ」

ルイズは、頭のセリフを無視して、先ほどと同じセリフを繰り返

した。

勿論、空賊が大使として扱うわけも無く、

「バカか、お前さんは？」

あつさりと返される。

だが、そのまま王子は言葉を続ける。

「王党派と言ったな？」

「ええ、言ったわ」

頭は杖をテーブルに置いて言った。

「なにしにあんな場所へ行くんだ？あいつらは、明日にでも消えちまうぞ」

「あんたらには絶対に言わないわ」

頭は、歌うような楽しげな声でルイズに言った。

「貴族派につく気はないかね？」

多分、頭もルイズの答えはわかっているのだろう。

その上で、敢えて聞いてきている。答え次第ではいつでも殺せる準備をして。

「あいつらは、メイジを欲しがってるんでね。もしつくなら、港まで無事でタダで送ってやるよ」

尚も大振りな水晶の付いた杖を弄りながら、聞いてくる。

「さらには向こうもたんまりと礼金を弾んでくれるだろうしね」
「死んでもイヤよ」

ルイズはきつぱりと言った。

才人がルイズをそつとつつく。そのとき、ルイズの体が震えていることに彼は気づいた。

好きで言っているわけではないのだ。

体が恐怖で震えている。

「やれやれ、随分と強情だな。頑固なのは美德にならんぞ」

怖くても、ルイズは真つ直ぐに男を見つめていた。

才人はそんなルイズを眩しいものを見るかのように見つめていた。

「もう一度言う。貴族派につく気はないかね？」

頭の口調が重くなったが、ルイズは負けずに腕を腰に当てて、胸を張った。

そして口を開こうとしたが、才人が先に口を開いた。

「つく気はねえって言うてんだろ！」

才人の鋭い言葉に部屋が静まり返った。

空賊の頭が才人をジロリと目を細め、見つめて言う。思わず怯みそうになるが、ぐつと才人は堪えた。

「貴様はなんだ？」

口調が変わったその男の、人を射すくめる眼光に才人も負けじと睨み返す。いきなり割り込んできた彼を値踏みするような目つきだ

った。

「俺は使い魔さ」

「使い魔？」

「そうだ」

才人が短く、噛み切るような調子で言うと頭が大きな声で笑った。

「トリステインの貴族は、気ばかり強くって、どうしようもないな」

「ごとつと杖を置いて、立ち上がる。

どこか踊っているような調子で、何だか不思議な気分だ。

「まあ、どこぞの国の恥知らずどもよりは、何百倍もマシだがね」

頭はそう言っつて、笑いながら立ち上がった。それに続いて、周りにいた男たちも笑いだす。

ルイズたちは、頭の豹変ぶりに戸惑い、顔を見合わせた。

「これは失礼。貴族に名乗らせるなら、こちらから名乗らなくてはな」

「…は？」

才人が如何にも意味がわかんないとばかりの声を出す。

周りに控えた空賊たちが、ニヤニヤ笑いをおさめ、一斉に直立した。

そして頭は、縮れた黒髪を剥いだ。

「え……」

頭の変っていく様子に、3人は驚きを隠せない。

右目につけられている眼帯を取り外し、髭をブリツとはがした。

「貴方は一体：？」

現れたのは、凜々しい金髪の若者であった。

怪訝な顔で、青年を見つめるルイズに、先ほどとは全く異なる、明朗でよく通る声で自己紹介を始めた。

「私はアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令長官……、本国艦隊といつても、すでに本艦『イーグル』号しかないがね。無力な艦隊だよ」

自嘲気味に、金髪の青年は呟いた。

「まあ、その肩書きよりこちらのほうが通りがいいだろう」

青年は居住まいを整えて、威風堂々と名乗った。

「アルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」

ルイズは口をあんどりと開けた。

才人もぼけつとして、いきなり名乗った皇太子を見つめた。

ウェールズは、にっこりと女性が見たらイチコロになってしまい、そんな魅力的な笑みを浮かべると、ルイズたちに席を勧めた。

「アルビオン王国へようこそ、大使殿。さて、御用の旨を聞かせてもらおうか」

「はい………？」

あまりのことに、ルイズは呆然と立ち尽くし、口がきけなかった。

「その顔は、どうして空賊風情に身をやつしているのだ？といった顔だね」

確かに疑問だ。

王子は今、船長の話ではニューカッスルの城に釘付けになっているはずだった。

「いやはや、敵には続々と補給物資が送り込まれるのでね、敵の補給路を絶つのは戦の基本さ」

戦争に勝つ基礎戦術は、相手の最も嫌がる事をする事だ。

兵站と戦線を維持する為には、兵に食わせる糧食や弾薬が必要になる。その補給路を断てば、段々と戦線を保つ事が難しくなる。

シーレーン、この場合はスカイレーンと呼ぶのが正しいかもしれないが、その遮断は有事の際には、非常に有効だ。才人達の現代戦争でも、基本である。

「だが、堂々と王軍の軍艦旗を掲げたのでは、あつという間に反乱軍の船にやられてしまうだろう」

最上位の敬礼をして、ルイズ達に向き直った。

「まあ、空賊を装うのも、致し方ない」

「成る程」

才人が納得した様子で言った。

ウェールズは、イタズラっぽく笑って、言った。

「いや、大使殿には、誠に失礼をいたした。しかしながら、君たちが王党派ということに驚いてね」

話すウェールズの傍、船員達がテキパキとお茶の準備を整える。船員達は、どうやら最後に残った王党派の面々のようだった。

「外国に我々、王党派の味方の貴族がいるなどは、夢にも思わなくて、なかなか信じられなかった。君たちを試すような真似をしてすまない」

そこまで言っても、ルイズは口をあんぐりと開いていた。いきなり目的の皇太子に出会ってしまったので、心の準備ができていないのであった。

「アンリエッタ姫殿下より、親書を言付かって参りました。殿下」
ワルドが、一歩前に出て、優雅に頭を下げた。

「ふむ、姫殿下とな。きみは？」
「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊長、ワルド子爵です」

それからワルドは、

「そしてこちらが……」

二人を指しながら、ウェールズに紹介した。

「姫殿下より大使の大任をおおせつかった、ラ・ヴァリエール嬢とその使い魔のサイト君です」

「殿下、此方であります」

そして、そのあとにルイズが、アンリエッタから預かった手紙をウェールズに渡す。

「こちらが、アンリエッタ姫殿下より賜った親書であります」

「さて、我が従妹姫は何を書いたのやら…?」

どこか楽しそうな様子で、封を解く。

一通り無言のまま読んだ後、優しく微笑んだ。

「用の旨は、了解した」

「それでは!」

ルイズの顔が輝いた。

「何より大切な、姫から貰った手紙だが…、致し方ない。姫の望みは私の望みだ。そのようにしよう」

その笑顔の端にどこか、哀しげな表情が浮かんでいたが、ルイズは気が付いていなかった。

才人も口が緩んでいた。船の上での大使との会談というのも、如何なものかと思うが、これで一応は大使の任は終わりである。

だが、現実はその上手に事は運ばない。

「しかしながら、今、目的を果たす為の品は、私の手元にはない」
「え…」

ルイズが心配そうな顔になるが、

「何、心配しないでくれ」

不安げな表情を浮かべるルイズに、

「本陣のニューカッスルの城にあるんだ。姫の手紙を、こんな小汚い空賊の船に連れてくるわけにはいかぬのでな」

ウエールズはにっこりと笑って言った。

「多少、面倒だが、ニューカッスルまで足苦勞願いたい」

才人は肩を落とした。

そんな彼にウエールズは大きく笑いながら声をかけた。自慢げに。

「私の変装はどうだったかね？見事な変装だろ？」

本人は、結構この変装を楽しんでいたらしい。

「かなり驚いた表情をしていたし、その威厳さと恐ろしさは見事な空賊の頭に見えてただろう？」

彼の質問には、疲れて言葉が返せなかった。

ウェールズの敬称が「皇太子」なのか、「王子」なのかで問題になりました。

現実に即すならば、「皇太子」というのは、帝位継承者に与えられるもので、親達は皇帝である必要があります。その為、現在、世界で「皇太子」を名乗る事ができるのは、厳密に言えば日本の天皇家しかありません。

マスコミの統一的な報道で、王位継承者にも「皇太子」の呼称が使われていますが、これは言葉からすると誤りであると言えます。

ハルゲギニアでは「帝位」がゲルマニアにしかないので、アルブレヒトは「皇帝」、彼の息子達は「皇太子」「皇女」と呼称し、他の国については「国王」「王子」「王女」で統一させていただきます。

貴族の爵位についても、統一させていただきます。

大公、公爵、伯爵、侯爵、男爵、子爵、武勲爵の6つだけに限定させてもらいます。大公が王位である国もありますが、あくまでも貴族であるという扱いでどうかご容赦下さい。

46・It is incorrect (前書き)

予定では今頃、皆、学院へ帰っているはずだったのですが、気が付いたら12話。

もう少し天空の国での冒険にお付き合い下さい。

46. It is incorrect

「アレンさん！」

ネギが先行して落ちていく、白髪頭の少年の名前を呼ぶ。

高度がどれほどのものだったかは、測っていないので分からないが、多分既に落下速度は100キロを越えているだろう。段々と白い雲を付きぬけ、青い壁が迫ってきた。

メア・ウィルガ
「杖よ！」

届いているかも解らない。

だが、自分のトレードマークでもある、杖を呼んだ。

障害物がない彼の節くれだった杖は、持てる速度の全てを出し切って、上空から降りてきた。落下しながら何かを持つというのは、結構な荒業であるが、ネギの身体能力ならどうという事もない。

杖に乗ったネギは、150キロの速度で直角に落ちていく。

「ネギ君！」

先行していたリナリーをようやく見つけた。

肩口に掛かった黒髪が、吹き抜ける暴風に戦っている。

「大丈夫ですか？」

大洋上での背面合わせの垂直落下。

ともすれば、一瞬のミスで両方が命を失いかねない。そんな危険な変態飛行を二人はやっていった。

「今から、私が加速してアレン君を捕まえるから！」

落下していく事で、二人は大気の中を猛スピードで駆け抜けていく。

その為に今、相当な大声を出さないと、顔が近づきそうな距離でも声が聞こえない。

「ネギ君は捕まえたアレン君をこの辺りで乗せて！」
「解りました！」

短く答えて、杖の先を強引に水平に持つていく。
本来なら折れかねない程の、圧が掛かるのだが、そんな事で使えなくなるほど、ネギの杖は軟くない。

ラビデー・スフシスタート
「急速停止」

杖に命令を下し、上空で待機する。

「…はああ！」

気合を一発入れるリナリー。

ネギの眼前で、彼女の履いていた黒いブーツがメカニカルに変化していく。

「それは、何ですか…？」

「説明は後！」

聞いたそんな顔をしている少年への回答を避け、リナリーは更に力を込める。

「お願い、力を貸して！」

履いた黒い靴に神の力が発現する。その技の名は「繫累」音響の踏技『音枷』」

ぐつと膝と足の裏に力を込める。

その瞬間、

「だあ！」

気合の入った叫び声と共に、音の速度でアレンへと向かっていく。

「く、くそ！」

ぐいぐいと腕に巻かれたリボンの枷を必死になって外そうとする。だが、落下に掛かる風圧で今ひとつ上手にいかない。視界の向こう、白いミイラ男の先には、青い海原が迫ってきていた。もう時間がない。

「……………」

迫るその時にも、ミイラ男は怯んだ様子はない。

その気になれば、いつでも止められる、止まれるという事だろうか。だが仮にミイラ男が空中で停止できたとしても、長いリボンに縫い止められたアレンは、そのまま猛スピードでコンクリートよりも固くなった水面へ叩きつけられるだろう。

神の力を振るうエクソシストでも、流石にそれで生きていられる

保証はない。

「こ、こうなったら…！」

腕を子供のように回転させる。

拘束は強くなるが、近づく事ができれば、

「…！」

ミイラ男の驚愕が大きくなる。

「へへへ！」

どんな不安定な足場でも、アレンの体幹軸は素晴らしく発揮される。

リボンが短くなり、その両手で抱き止められるほどに近づいた。

こうなってしまうえば、アレンを殺す為には一緒に叩き付けられるより、道はない。

「捕まえましたよ…！」

右手で思いつきり捕まえる。

だからといって、ミイラ男と心中する心算はない。

「その顔…」

アレンの左手が大きな爪に変化する。

突然、太くなった拘束物に耐え切れずに、リボンがちぎれて風に舞う。

「拝ませてもらいますよ！」

右手で必死にミイラ男を捕まえながら、左手の爪で男の覆面を切り裂く。

「…ッ！」

「な！」

覆面の下から現れたのは、美しいが表情のない女性だった。

年の頃は20半ば、アレンやリナリーよりは少し年上といった所だろう。

「貴方は…！」

完全に男だと思っていたアレンは、現れた女性に戸惑っている。男だと思って乱暴にやっていたので、胸の辺りを乱暴に触っている。その事が恥ずかしいのか、能面のような顔に赤みが差している。

「…！」

グルグルと集まったりボンで、わき腹を打たれる。

「ぐ…！」

たかが布の塊だが、しっかりと巻きつけておけば、十分に重い。ハンマーで殴られたような衝撃に、一瞬クラツとしてしまうが、ぐつと堪えた。それを見た女性は何度も打ち据える。

「アレン君！」

何度も打たれ、意識を手放しそうになってきたアレンの耳にリナリーの声が飛び込んできた。

高速で落下している中でも、声がよく通る。

「！」

だが、声に反応したのはアレンだけではなかった。

外側へ髪の毛の撥ねた女の方も、上空へと顔を向ける。マッハで落下してくるリナリーへ槍袈のようにリボンを幾条も放った。

「遅い！」

だが、音速で落ちるリナリーには、リボンの速度など大したことはない。

容易く避けて、アレン達を越える。そのまま50メートル程下で、反転する。反転による重力負荷も無視して、もう一度、二人へ接近する。

「アレン君！」

「リナリー！」

掴んでいた右手をリナリーへと差し出す。

音速に引かれて、右手の骨と筋肉が悲鳴を上げるが、これくらいなら耐えられない事はない。音速の速度で再上昇する。再び、青い壁が上空に広がった。

バリバリと雷撃が一点で光っている。

ネギが放っている、サインの雷撃だ。

「待つのであります！」

放って行こうとした女性が、体を覆っていたリボンを全て剥いだ。現れたのは鉄仮面のメイド服を着た女性だった。綺麗な顔立ちで、均整の取れた体をしているが、無表情であることが、全てを台無しにしていた。

「ぐえ！」

女性の放ったリボンが、今度はアレンの腹へと巻きつく。重さと速度が全て、アレンの体の一点へと掛かる。思わず、その重さにえづきそうになるが、ぐつと飲み込んだ。

「聞きたい事があるのであります！」

リボンで繋がったメイドが、事務的な声で二人を呼び止めた。だが、呼び止めたときには、既にリナリーはアレンをネギの杖へと投げ、華麗に乗っていた。

「し、死ぬかと思った…」

クテツと杖の上で、アレンはネギに体を預けた。リナリーは靴の裏に、力場を作ったまま、滞空している。

「聞きたいことって…？」

飛び乗る瞬間に聞こえていた、メイド服の女性の言葉。

「貴方達は『炎髪灼眼の討ち手』を知っているのではないのですか？」

その称号には、3人とも聞き覚えがあった。

巡洋艦『イーグル』号は、浮遊大陸アルビオンの端、ジグザグした海岸線を縫うように航行を続けていた。『マリー・ガラント号』も一緒に曳航されて、続いている。

3時間ほど進んでいくと、大陸から突き出た岬が見えた。その先端には、高い城がそびえ立っている。

新しく乗り込んだ客人たちに、ウェールズが説明した。

「あれが、ニューカッスルの城だ」

そのまま、陸地へフネを寄せるのかと思いきや。『イーグル』号は、大陸の下側に潜り込むような進路を取った。

「どうしてまっすぐ進まないのですか？」

ルイズが投げかけた質問に、ウェールズは城の遙か上空を指差しながら言った。

眼前に広がる広大な大陸を横切るように走る、何隻もの軍船を見ることが出来た。何れもこの軍船より規模が大きく、砲門の数が多い。

「見てご覧」

遠く離れた岬の突端の上から、巨大なフネが降下してくる途中であった。慎重に崖沿いを航行し、今も雲の中にいるので、向こうからは『イーグル』号が見えないようだ。

「叛徒どもの艦だ」

それは、禍々しいとしか形容できない巨艦であった。全長は『イーグル』号のゆうに数倍はある。大きな帆を何枚もはためかせ、ゆるると降下してきたかと思うと、ニューカッスルの城へ、舷側に並んだ砲門を一斉に開いた。

「キャッ！」

斉射による轟音と震動が、遠く離れた『イーグル』号にまで伝わってくる。巨大艦から放たれた砲弾は城に着弾し、城壁を砕き、小さな火災を発生させた。

響き渡る轟音の中、

「あれは、元々『ロイヤル・ゾウリン』と言う名前だったのだがね……」

王子は自嘲気味に呟きながら、ルイズと才人に説明した。

「今は『ネーズビー号』と叛徒どもが、その名を変えている」

そこは王党派と貴族派の劇戦の地。

ここでの衝突から、この反乱の全てが始まった。

「彼の地を貴族派連盟に奪われてから、我が方の敗色が濃厚となった。まさしく因縁の土地さ」

二人は、雲の切れ間に覗く巨大戦艦を見つめた。無数の大砲が舷側から突き出て、艦上には竜らしき影がいくつも舞っている。

「あの忌々しい艦は、ああして空からニューカッスルを封鎖しているのだ」

悔しげに言う、ウエールズの傍。

ルイズはぐっと握る手すりに、力を無意識に込めていた。

「あのような巨船を相手に出来るわけも無いのでね。大陸の下に潜り込み、地下から城に近づく」

そう言うと王子はテキパキと船員達に指令を下し始めた。

「急ぐぞ、見つかったら厄介だ」

「アイ・サー」

雲の中を進んでいくと、段々周囲の色が白から黒へ変っていく。日暮れには未だ早いから、大陸の下へ潜り込んでいるのだろう。段々と、地獄の底へと落ちていくような感覚になった才人は、少し怖くなった。彼の震えを見たウエールズは、ポンと肩を叩いて言う。

「ここには、我々しか知らない秘密の港があるのだよ」

大陸の下に移動すると、周囲は深淵の闇に包まれた。大陸が上にあるため、日差しが完全に遮られているからだ。おまけに、濃い霧のような雲中である。視界はほぼゼロに等しい。ひんやりとした湿気を含んだ空気が、一同の頬を颯る。

「このような空間であるため、技術を持たぬ者は簡単に上方の陸地に激突してしまう」

ポツと灯を灯すと、王子の影が伸びた。

その小さな灯だけを頼りに進む船は、まさにファンタジーそのものであった。

「貴族派連盟の軍艦は、それを怖れるが故に大陸の下へは決して近付かないのだ」

揶揄するように、王子は笑う。

どこか諦めたような感じではあるが、その諦めには気が付かなかった。

「だが、地形図と小さな魔法の明かりだけを頼りに進むことなど、王立空軍の航海士にとっては、造作もないことだ」

ウェールズはこの自らの軍が持つ、実力を素直に誇っていた。

「実に、見事な操船技術ですな」

「貴族派連盟、あいつらは所詮、空を知らぬ無粋者さ」

ワルドが感心した様子で言うと、ウェールズは笑った。

しかし、暗い影に隠れていたその表情までは覗えなかった。

そのまま1時間ほど航行すると、頭上に直径300メートルほどの穴がぼつかりと空いている場所に出た。どうやら、ここが秘密の港の入り口らしい。

「停船せよ」

「アイ・サー！」

ウェールズの命令で、暗闇の中にも拘わらず、穴の下に『イーグ

ル』号はピタリと停止する。『イーグル』号から派遣された航海士が乗る『マリー・ガラント』号も、並んで停まる。

「このような秘密の入り口とは……」

後詰の上手さに感心しきりといったワルドに、ウエールズは更に大きく笑いながら言った。

「どうだね。まるで空賊のようだろうか？」

「まさに空賊ですな、殿下」

ふつつとため息を付くワルドに、王子は口を吊り上げた笑みで答えた。

戦時中だというのに、どこか楽しそうな、いたずらっ子のような笑みを浮かべている。

「まさに空賊なのだよ、子爵。微速上昇！」

「微速上昇。アイ・サー」

穴に沿って垂直に上昇すると、その先に明かりが見えた。そこに吸い込まれるように、『イーグル』号が上っていく。次の瞬間、眩いばかりの光にさらされたかと思うと、艦はニューカッスルの地下にある、秘密の港に到着していた。

「すげえ……」

「綺麗……」

ルイズと才人は、思わず声を上げてしまった。

周囲の光景に目を奪われたそこは、白い光を放つ苔に覆われた、巨大な鍾乳洞だった。

「着岸準備！」

「着岸、完了！」

船がやって来ると、一斉に棧橋から一斉にもやいが放たれる。

水兵たちは、その縄で『イーグル』号に結わえ付けて、軍艦を岸壁に引き寄せて、ぴったりと岸に軍艦が取りつけられた。ドンと岸に当たる衝撃が全体へと伝わる。

「王子、『イーグル号』、着岸致しました！」

遣つて来た水兵が最敬礼で王子に報告する。

「ご苦労。さ、大使殿」

その報告を受けたウェールズは、ルイズたちを促して、タラップを降りる。

降りてきたルイズ達に、背の高いメイジらしき老人が近寄つてきてウェールズの労をねぎらった。

「ほほほ、これはまた、大した戦果ですな。殿下」

老人のメイジは、『イーグル』号に続いて鍾乳洞の中に現れた『マリー・ガラント』号を見て、顔をほころばせた。

「喜べ！パリー。硫黄だ、硫黄！」

ウェールズがそう叫ぶと、集まった兵隊たちが、歓声をあげた。

「硫黄だど！」

「何と言う成果！流石は殿下！」

「火の秘薬ではございませんか！」

「これで我々の名誉も、守られるというものですな！」

老メイジは、おいおいと泣き始めた。

その老メイジの肩を優しく王子は叩く。

「先の陛下よりおつかえして六十年、こんな嬉しい日はありませんぞ、殿下……」

「おいおい、泣くな。バリー」

がしりと老兵を王子は抱きしめる。

その事に、更にバリーは顔を泣き崩した。

「反乱が起こってからは、苦渋を舐めつばなしでありましたが、なに、これだけの硫黄があれば……」

につこりとウェールズは笑った。

「王家の誇りと名誉を、叛徒どもに示しつつ、敗北することができらるだろう」

その事が何でもない事のように、王子とバリーは言っているが、才人は正直、何か怖いものを感じた。嫌な、何の根拠もない嫌な怖さだ。

「栄光ある敗北ですな！この老骨、武者震いがいたしますぞ！」

感嘆に咽ぶ、バリーが涙を拭い、事務的な報告を王子に上げる。

「して、ご報告なのですが、叛徒どもは明日の正午に、攻撃を開始するとの旨、伝えて参りました」

最後に少しばかり、涙を流し、

「まったく、殿下が間に合って、よかったですわい」

「間一髪とはこの事だな！戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな！ハッハッハ！」

ウェールズたちは、心底楽しそうに笑いあっている。

だが、ルイズは「敗北」というその言葉に、顔色を変えた。

死ぬということに、この人たちは、それが怖くないのだろうか。

「して、その方たちは？」

パリーという老メイジが、ルイズたちを見てウェールズに尋ねる。

「トリステインからの大使殿たちだ。重要な用件で、王国に参られたのだ」

パリーは一瞬、怪訝な顔つきになったが、すぐに表情を戻して微笑んだ。

「これはこれは大使殿方。殿下の侍従を仰せつかっております、パリーでございます」

流石に長い間、王族に使えてきただけあって、実に鍛えこまれた礼であった。

ルイズ達も礼を返す。才人の返礼だけではどうにもぎこちなかったが、別に何も誰も言わなかった。

「遠路はるばるようこそ。このアルビオン王国へいらっしやっただ」

顔を上げたバリーには、嬉しそうだった。

「大した持成しはできませんが、今夜はささやかな祝宴が催されます。是非ともご出席くださいませ」

思い果てぬ、その世界に、新しい旅人が到る。

始まる烽火の芳しき、願いを見て、また彼女は思う。

もし、君が、その心を持つことができるのなら。

46・It is incorrect (後書き)

4章終了でございます。

別編と序章を交えても気が付けば既に53話を数える事となりました。

本来であれば、46話であるこの話でアルビオン編が終了のはずだったのですが、ここまで来た以上、しつこく5章の12話が繋がるように行きたいと思えます。

原作では「レキシントン」という名前でしたが、「レキシントンはアメリカの地名なので、ピューリタン革命で王党派が敗北した「ネズビーの戦い」から名付けさせていただきました。

EDテーマは、「Angello」FATE」

47・And the pendulum swings back the

さて、アルビオン編も大詰めであります。

NOVELの「ミッシングリンク」を再生しながらお願いします。

ここで一度、振り子の針は振れ戻る。

決して、誰も知らない。だが、知らねばならない真実がある。

そこにあるのは、誰もが思い描いた、小さい恋の話。

ラゲドリアン湖。

トリステイン王国とガリア王国との国境に位置するこの湖は、ハルケゲニア随一の名所である。

その大きさは巨大そのものであり、差し渡しは魔法学院からトリステイン王国首都トリスタニアへの距離に匹敵するほどだ。

「姫様ー！」

そして、この湖にはハルケゲニアの先住民である、水の精霊たちの棲みかでもある。その姿を見たものはあまりの美しさに、例えばそれが悪人であろうとも心を入れ替えると言われている。

そんな水の精霊は制約の精霊と呼ばれ、その御許で行われた制約は決して破られるものではないと伝えられている。

幻想的な月明かりが、波の無い湖面に移りこんでいる。

そんな中、大声を上げて走り回る影が3つ。

「どこへ行かれたのですかー！」

しかし、数十年に一度トリステイン王家との盟約の更新を行う以

外には滅多にその姿を現すことはなく、「誓いが破られることはない」と言われてもそれを確かめる術はないのであった。

ここでは、トリステイン王国王妃であるマリアンヌ太後の誕生日を祝う園遊会がラグドリアン湖の湖畔で開かれていた。

この園遊会はマリアンヌがトリステイン国王に嫁いだときから毎年行われるようになり11度目を数える。

「姫様ー！返事してくださいー！」

当初はトリステイン国内の有力な貴族たちと王族のみで開かれていたこの園遊会も年を増すごとに大規模なものに変わっていった。今回も、各国から王族達を招き、2週間にもおよぶ大規模な式典となっていた。

湖面には魔法の花火が打ちあがり、星空と大きな天幕の下、夜通し舞踏会が開かれていた。

「若しかしたら、部屋に戻っておられるのかもしれない」

「かもしれないね…」

「ラ・ポルト様…」

大人たちは自分たちの都合で舞踏会に参加しているが、子供たちを取っては、大人の社交場などつまらないだけである。

次から次へと押し寄せてくる挨拶や追従、おべっかに彼女たちは辟易としていた。

「参ったの…、もうすぐだというのに」

だが、辟易しているのは、子供だけではない。

出席者の世話をする、侍従や、使用人たちの気苦労も大きい。中でもトリステインの侍従団は、ホスト役ということもあり、その疲

労の色は殊更に濃い。

「アレク、お主は一度部屋へ戻って様子を見てまいれ」

「解りました」

「ウエルク、お主はマリアンヌ様達にも聞いてまいれ」

「解りました」

侍従長であるラ・ポルトと、彼の部下であるアレクとウエルクは、居なくなったアンリエッタ姫を探し回っていた。恐らくではあるが、いい加減、長々と続く園遊会に嫌気が差したのだろう。

だつと二人は再び湖畔にある会場へと舞い戻っていった。

月明かりに照らされた湖畔で、気苦勞の多い侍従長は、深いため息を付いた。

「全く、あのお転婆姫め……」

振り回されてばかりの彼は、また一段と疲れた顔になった。

「姫様、戻られていますか？」

アンリエッタの部屋の前に着くと、アレクは扉を叩き中へ声をかけた。

「アンリエッタ様、いらっしゃいますか？ 私です」

しかし中から応答はない。

彼はここではなかったのだろうか、と考えつつノブに手をかける。すると、どうやら鍵はかかっていないらしく、何の抵抗もなく扉

が開いた。

「入りますよ、姫様」

王女にあてがわれた部屋らしく、中は広い。

奥には大きいベッドが一つ存在している。その上はこんもりとふくらんでいて、人が寝ているようだった。

「アンリエッタ様？ お休みになられたのですか？」

その言葉にも反応はない。

やはり寝てしまったか、と考え出ていこうとすると、アレクの目にシーツからはみ出た髪が見えた。

その髪の色はアンリエッタと同色の栗色だが、長さが彼女よりも長い気がする。

そのことに疑問を覚え、アレクは出ていこうとした足を止めると、もう一度ベッドへ近づき先ほどより大きめに声をかけた。

「アンリエッタ様？」

先ほどと同様に反応はない。

やはり寝ているだけだろうか、と思いつつもベッドのふくらみに手を触れると、そのふくらみがピクリと動いた。

その反応にきているのかと思い、声をかけつつシーツをめくろうとするが、中から抵抗をしているらしく、めくらせようとしない。

「……」

若い侍従はそう考え彼女を起こそうとするが、必死に抵抗しているらしくなかなか動かせない。

仕方がない、と考え一度力を抜く。彼女もそれに安心したらしく、フツと力を緩めた。

「きゃっ！」

その隙に一気にシーツをめくり上げる。

シーツの中の人物が驚きの声をあげた。

その声は確かに若い女性のものであるが、聞き慣れたアンリエッタの声とは若干違う。

しかしてめくり上げたシーツから覗いた顔は、そこにいるはずのアンリエッタではなく、彼女の遊び相手である公爵家の三女であった。

「ルイズ様？ 何をしてらっしゃるのですか？」

「あ、あははは……」

呆れたように言うアレクに、ルイズは誤魔化しように笑った。

おそらく髪は魔法薬が何かで染めたのだろう。

わざわざそんな真似をしてまで抜けだしたのかと、侍従は頭が痛くなる思いであった。更にこれを上司に報告しないといけないのだと思うと、ますます痛くなる。

お転婆姫に振り回される、2人目の犠牲者だった。

「まさかアンリエッタ様に頼まれて？」

「ち、違います！」

ぶんぶんとは何故か姫のベッドの上に居たルイズは

「姫様が抜けだすために身代わりを頼まれたとかじゃないんだからね!？」

聞いてもいないことを喋る。自分から墓穴を掘るルイズは言った後にハツと口を押さえるがもう遅い。若き侍従は彼女の言葉に頭を押さえポツリと呟いた。

「全く…、困りましたね…」

アレクは気を取り直し、ルイズにずっと顔を寄せ問いつめた。

「アンリエッタ様はどちらへ？」

「だ、だめよ。姫様に内緒だっって言われたもの……」

侍従の役目は姫の世話である。

相手が公爵家の娘だということなど、関係ない。姫に何かある事は許されないのだ。

「どちらへ？」

「だから、だめだっ……」

「どちらへ？」

「だめっ……」

段々と詰問する声が強くなる。

最後の一押しになる、一声は今までよりも強くなった。

「どちらへ？」

「…ラグドリアン湖へ行くって言った」

初めは抵抗したものの、引く様子のないアレクに気圧され白状するルイズ。

若いくせに、アレクの髪はこれから先、薄くなることは確定のよ

うである。

「全く、どう報告すれば良いのやら……」

毛だけならまだ良いだろう。

生活に直結する、給料まで下げられなければ良いのだが。

「アレク」

「ああ、ウエルクか……」

ガクリと肩を落として、部屋を出たとき同僚が声を掛けてきた。

「太后様は存じていなかったのだが……」

その沈んだ様子に、何か嫌なものを感じた。

「どうしたんだい、そんなに沈んで……？」

「姫様、行方不明だよ……」

怪訝な顔で尋ねる同僚に、できるだけ危険な感じで言ってみた。

「……そっか」

ふうつと、三人目の犠牲者はため息を付いた。

「また給料下がるな……」

下級貴族である彼ら二人には、この仕事の年金というのは大きい。それが毎日のように、お転婆姫に振り回されるたびに、削られていく。

「転職先、探すか…」

「ラ・ポルト様も誘ってみっか？」

軽い感じで言っているが、かなり深刻な問題だった。

アンリエッタは湖畔を歩いてた。

会場となった迎賓館とは、それなりに距離が離れているので、早々簡単に見つかる事は無いだろう。

「ふう…」

ちやぷんと小さな水音が、暗い夜に響き渡る。この澄んだ水に棲む、魚だろうか。

ラグドリアン湖は、ハルケギニア随一の名勝と言われるだけあり、その光景は自然のものと思えないほど芸術的で美しい。

「全く、人と逢うと言うのも中々疲れますわ…」

侍従たちが必死になって探し回っているのは、分かっている。心配しているのも、分かっている。

だが、それでも、アンリエッタは、園遊会を抜け出してきたのだ。

「毎日、毎日、人と会ってばかり…」

それは王族特有の悩みともいえよう。

人と合うことが仕事とも言える、王族の気苦労。だが、それを理解してくれる人は誰もいない。侍従長も、その部下達も、そして、自分のお友達も。

しゅるつと衣擦れの音がして、アンリエッタは全ての服を脱いだ。一歩ずつ、湖面へと歩いて行き、体を全てつけた。

「冷たい……」

全身が冷たくも、心地よい感覚に浸される。

全ての力を抜いて、湖の水に体の全てを預けた。

侍従のラ・ポルト達に見つかったら、一時間は小言を続けられそうだが、これくらいは自由くらいは彼女も欲しかった。

「……」

さあつと湖面を弄る風が、自分の体も撫でていく。湖畔の茂みもガサガサと揺れた。

「……？」

だが、その乱暴な揺れ方は、明かに風に弄られたものではない。

勢い良く自ら上がり、アンリエッタは持ってきていたタオルを体に巻き、杖を構えた。

「誰ですか!」

揺れ動く茂みに向けて、彼女らしくない尖った声を放った。

招待客の一人が偶々来て覗きの真似事でもしているのか、もしくは彼女の命を狙った刺客か。

「無礼者が、名乗りなさい！」

慌てたような声が、茂みの向こうから聞こえた。

「怪しいものじゃないさ。君こそ、こんな夜更けに何をしているんだい？」

白々しくも、優しい男性の声だった。

誰だかは知らないが、姫君のこのような姿を見ておいて、無事に帰れる保障はないだろう。その事を少し震えた声で続ける。

「私は、トリステイン王国王女、アンリエッタです！」

だが、何も言わないまま、ガサガサと茂みは揺れる。

既に人がいる事は、彼女にも分かっている。それでも尚、隠れた人物は出てこない。

「さあ、出てきなさい。すぐにでも人を呼びますよ！」

張ったりではあるが、ここで大声の一つでも上げれば、侍従の誰かが気が付いてくれるだろう。

勿論、侍従ではないかもしれないが、少なくとも安心は出来る。

「誰ですか？」

もう一度、誰何する。

そうするとようやく観念したように、人が出てきた。

「アンリエッタ？ 君はアンリエッタなのかい？」

出てきた男が、自分呼び捨てにしたことに、彼女は驚く。今ラグドリアン湖の畔に集まっている中で、アンリエッタのことを呼び捨てにできる者など5人とおらず、その中に彼のような若い男性はいなかったはずだ。

「僕だ、ウエールズだよ！ 君の従兄さ！」

「ウエールズ様！？」

アンリエッタは驚き、思わず自分が裸であることを忘れ立ち上がる。

ウエールズも彼女の裸を眺めていたことに気づき、恥ずかしそうに視線をそらす。

「す、済まないが、服を着てくれ……」

「え、ええ」

会話が続かない。

静かな湖畔に、姫が服を着る音だけが、嫌に強く響く。

「こちらを向いてもかまいませんわ」

服を着終えたらしい、アンリエッタが声をかけた。

振り向くウエールズの前には、まだ恥ずかしさが抜けきっていないのか、ほんのりと頬を赤く染めたアンリエッタの姿がある。

彼女はウエールズに顔を向けると、申し訳なさそうに表情を曇らせる。

「いやはや……」

その曇った顔を見ながら、王子はすまなさそうに頭を掻いた。

「申し訳ないね、君のそんな姿を見てしまって…」

「い、いえ…」

顔を真っ赤にした二人の空気を変える様に、アンリエッタが話題を強引に変えた。

「ウエルズ様はどうしてここへ？」

「先ほど父上と到着してね」

すっとさり気無く彼女の手を取り、近場にあった岩に腰掛けた。湖を二人で見るような二人は、とても絵になった。

「音に聞こえたラグドリアン湖を一目見ようと散歩をしていたら、人影が見えたもので…」

「私っいたらはしたない姿を……」

赤くなり頬を押さえるアンリエッタ。

「水の精霊が湖面に姿を現したかと思ったよ」

「私で残念でしたわね」

「そんなことないよ。君は水の精霊より……」

そこまで言っつて、ウエルズは言葉を止めた。

「私がどうされたのです？」

「いや、別に何でもないさ」

上手にはぐらかすが、それでは満足しなかったようである。

「最後まで、言って下さいな」

ずっとアンリエッタが、膝に置かれていたウェールズの手を優しく握る。

真つ赤になりながらも、王子は優しく言葉を紡いだ。

「君は水の精霊より綺麗だと思ってね」

実際、王子も姫も水の精霊にあったことは無い。

だが、口伝され、真しやかに囁かれる水の精霊の姿というのは、この世のありとあらゆる美女ですら、裸足で逃げ出すほどだという。その姿は、語る人によって異なるが、やはり美人という事だけは共通していた。

「まあ……」

最高の褒め言葉に、アンリエッタは更に顔を紅くする。ウェールズは気恥ずかしそうに、頬を掻きながら、言った。

「嘘は言っていないよ。僕は王子だからね」

二人が恋仲になっていくのに、1週間というのは長すぎた。やがて、二人は幼くも愛の言葉を交し合う。ぎこちなく、可愛らしい、何処までも、純粋な言葉を。

ウェールズとアンリエッタは、園遊会の中、夜になると抜け出して、この場所で会うのだ。

勿論、初日に抜け出してしまった事は、アンリエッタの侍従団も知っていたのだが、どうにも美味しく交されていた。

小石が水面に落ち、短い音と、波紋が広がる。

それが合図だった。二人が茂みから、誰もいない事を確認して、恋人に合言葉を投げかける。

「風吹く夜に」

そうウェールズが口にすると、

「水の誓いを」

こうアンリエッタが答えるのだ。

互いに王子と王女と言う身分。このことが表沙汰になれば、二人は二度と会うことを許されないだろう。だからこそ、こんな夜中に人目を避けて、密会しているのだ。

その事を自嘲するように、ウェールズが言った。

「いや、君と会うのに、これだけの事をしないとイケないとは」

「どこに眼や耳があるか、解りませんからね」

二人が公式に会おうと思えば、最早、結婚するよりほかに無い。だが、それが叶う保障など、どこにもない。それ分かっていて、それでも二人は愛し合っている。

不意に、ウェールズの両手が、アンリエッタの顔を優しく包んで、

唇が近づいてきた。戸惑ったが、アンリエッタは眼を瞑った。

二人は唇を重ねた。

「君が好きだ。アンリエッタ」

呼ばれたアンリエッタは、顔を真っ赤にしながら、勇気を振り絞って、愛の言葉を呟いた。

「私だって…、私だって、お慕い申し上げますわ…」

二人とも恋の熱に浮かされた頭で、この恋の結末を冷静に理解している。

だからこそ、無理した声でウェールズは哀しく眼を瞑って言った。

「ただ、一緒の時間を過ごしたいだけなのにな…」

「ならば…」

ウェールズの胸にアンリエッタは寄り添った。

「ならば誓ってください」

「誓い？」

「夢ですか…」

遠くには、沈みかけた夕日が見える。

いつの間にか、転寝をしている間に、日が暮れてしまったらしい。

ルイズ達を送り出してから、既に丸3日。早ければ、そろそろアルビオンに到着しているだろう。

「いけませんね、王女ともあろう者が…」

アンリエッタは不安から、夜、眠れなくなることが多くなっていた。

もし、ルイズ達が失敗すれば、それは自分とトリステインの破滅を意味する。成功して貰わねばならなかった。

「しかし、あの少年…」

学院に泊まった夜。

寝所へと現れた銀とも白とも付かない髪色をした、黒衣の少年。

どこか柔らかな腰つきに、それでいて一本の芯が通った立派な少年。彼は、どうなのだろうか。

マザリーニは彼に、恐怖を感じ、危惧していた。彼らにしてみれば、必ずしも任務遂行する必要は無い。最悪、逃げてしまえば良いのだから。

気が滅入ると、どうしても悪い方向へとばかり、物事を考えてしまふ。

「考えていても始まりませんね…」

自嘲地味な声を呟き、窓の外を見る。

窓の外には、朗らかな笑顔を浮かべる、金髪の少年、今では青年になってしまった思いい人の影が見えた。他の誰でもない、生涯で唯一自分が愛を誓った男性。

遠くに沈む夕日の向こう。

全く、影も見えないアルビオンの大陸にいる彼。

その人の事を思うと、今すぐにも泣き出したい思いで一杯だった。無事に追っ手から逃げられているのだろうか、ルイズ達には無事に合えたのだろうか。

ここからでは確認する術などない。

「…ウエールズ様」

少しでも近く。

少しでも届くように。

窓を開けて、夕日を部屋へと招き入れる。

「結局、誓っては下さいませんでしたね…」

今見た夢の続き。

あの後、アンリエッタは誓いの言葉を言った。だが、結局、ウエールズはその言葉を終ぞ言ってはくれなかった。

「…無事に逃げてくださいますか」

想いが届いているかも、確かめられない。

今では、愛しているのかも解らない。

「いや、秘密の港から大使を案内するなど、申し訳ない」

カツン、カツンと4人は階段状に加工された鍾乳石を登っていく。辺りの照明は、等間隔に魔法のランプが灯れてあって、暗くは無い。

「構いませんよ」

申し訳無さそうに笑いながら言うウェールズに、ワルドが短く答えた。

秘密の港から地上へと上がっていくと、そこには遠くに沈む夕日が見えた。

「ウ……」

目も眩むような赤い光に、才人は強く目を瞑った。

澄んだ空気の中に居るからだろうか。その太陽は、彼が今まで見た夕日の中で一番、綺麗なものだった。東京という大都会に暮して、夕日などじっくりと見た機会が無かったからかもしれない。

それが新鮮だった。

「城はこちらだ」

ウェールズに案内され、港から離れたニューカッスルの城の中にたちは入った。

途中の壁に設けられていた狭間サマから、ちらりと外を伺った才人は絶句した。

砲撃によるものなのだろう、城の外壁はあちこちの壁にヒビや亀裂が入っており半壊していた。焼け焦げた壁の近くには、備え付けられていた大砲とおぼしき残骸が転がっていた。

そのすぐ側に、赤黒い染みのようなものを見ては、少ない行き交う人々もため息を漏らし、兵隊たちは疲れの色を見せている。

「……」

才人は、ようやく肌で実感した。

自分は真正正銘、命のやりとりをする場所に立っているという事を。

テレビやネット越しに見ている遠くの世界の出来事ではない。本物の戦場に居るのだと言う事を。

そして、これが、彼らの言う「戦場」なのだということ。

「……」

「何せ、戦闘中だからね」

絶句していたルイズ達の無言の言葉を察したのか、苦い顔で窮乏した国の王子は呟いた。

ルイズたちは怪我が治りきっておらず、あちこちに包帯を巻いた兵士たちを横目で見ながら、ウエールズの居室へと向かった。

城の一番高い天守の一角にウエールズの部屋はあった。

「ここだ、入ってくれ」

立て付けのおかしくなった木戸を開け、王子は一同を部屋へと案内する。

ウエールズの部屋は、一国の王子の部屋とはとてもだが思えない、質素な部屋であった。

木でできた粗末なベッドに、椅子とテーブルが一組。壁には戦の様子を描いたタペストリーが飾られている。その他に置かれている家具はといえば、これまた、木製のボロボロな本棚に、会議用の少々大きめなテーブルがある。

その机の上には、合戦場のものとおぼしき地形図と、駒のようなものが無造作に置かれていた。恐らく軍議のためのものだろう。

それで、全てだった。

「すぐに何か用意させよう。掛けていてくれ」

ウェールズに促され、ルイズとワルドが用意された椅子に座る。

才人はいつも通りに、無言のまま、ルイズの傍に立ったまま、控えていようとしたが、

「君も座って待っていると良い」

「は、はい……」

ルイズが一瞬眉をひそめたが、半ばウェールズは強引に座らせた。

「では、待っていてくれたまえ」

そう言うのと、もう伝令に割ける人員もいないのだろう。自ら立つて大使をもてなす用意をしに、部屋を出て行った。

そうすると残されたルイズ達はやる事がなくなってしまう。

王子の部屋である以上、何もせずに黙って、待っているのが一番だろう。

「……」

「……」

「……」

時折、遠くの方から轟音が聞こえてくる。
恐らくはここへ来る時に見た、巨大な軍艦がまた、城へと砲撃を
加えているのだろう。

「…怖い」

ポツリとルイズが呟いて手を握った。
才人の手を。

「…ルイズ」

才人が握り返そうとした時、

「殿下！」

ボタンと戸が外れそうな勢いで、先程あつたバリーが飛び込んで
きた。

だが、部屋の中を見回し、いない事を確認した。

「殿下はどうされましたかな？」

髭の生えた顎を摩りながら、バリーが聞いていた。

「お茶を用意すると言って出られましたが…」

何とも言いにくそうにルイズが答える。

此方がゲストとは言え、一国の王子にお茶の用意させるなど、本
来ならあつてはならない事だ。今回は、王子が手ずから淹れてくれ
るからだ、褒められた事ではない。

「呼んでくだされば、準備致しましたのに…」

哀しげに言うバリーは、やはりアルビオン王家に使えてきたという自負があるのだろう。

「それで、どうされたのですか？」

ワルドが、びしっと格好を決めて尋ねる。

「いえ、すぐに戻ってくるでしょう。少し待ちます」

そう言うとバリーは、丸いすを引っ張り出して、座った。

しばらくして、人数分のカップをトレイに載せた王子が帰ってきた。トレイを持って、給仕の真似事をしているウェールズは、どこか滑稽だった。

「おや、バリー。どうしたんだい？」

新しく部屋にやって来た、老メイジを見つけ楽しそうな顔になる。

「おお、殿下」

トレイを持ったままのウェールズへバリーは最敬礼する。

只ならぬ気配を察し、テーブルへとトレイを置いた。少しばかり乱暴な置き方だったのか、ポットの蓋が定位置よりずれてしまっている。

「殿下が探しておりました、カルメル殿が戻られました」

「何—」

バリーの報告に、心底嬉しそうな顔をする。
ルイズ達が居る事など、頭の隅へと追いやられてしまっているようだった。

「見つかったのか、早く案内してきてくれ」
「はは」

王家に長く仕えてきたという証拠が、体のそこかしこから漂ってくる。

しっかりと敬礼を王子に返し、バリーは出て行った。そう思ったら、すぐに戻ってきた。今度は、メイドを連れて。

「王子、失礼したのであります」

開口一番。

部屋に入ってきたメイドの女性は、深々と頭を下げた。綺麗に折り目正しい服を着て、ぴったりとした礼だった。

「いや、船から落ちたと聞いていたのだがね、怪我がないようでありよりだ」

「ご心配頂き、真にありがとうございます」

ホツとしたような様子で、彼女の肩を叩く王子。

世の女性が、王子のような絶世の美男子に、こんな事をされたら、間違いなく卒倒するだろう。だが、メイドの女性は顔を一ミリも崩さない。

ただ、単純に礼だけを述べている。

「ああ、紹介しよう」

そういつと王子はルイズ達に向き直った。

「最後まで付き合ってくれたヴィルヘルミナ・カルメルだ」

「お初にお目にかかるのであります、トリステイン王国からの大使の皆様」

再び、ヴィルヘルミナは顔を笑いにも、悲しみにも崩すことなく、ルイズ達へと頭を下げた。

左右へと跳ねた、桜色にも見える赤みがあった髪が、不自然に揺れた。

「早速で申し訳ないが、紅茶を淹れてはくれないか？」

ウェールズは照れを隠すように、ヴィルヘルミナへと言った。

「いやはや、上手に紅茶を淹れるというのも中々、難しいものだ」

「畏まりました」

鍛えこまれた給仕の格好で、ヴィルヘルミナは王子が持ってきたトレイを抱えて、部屋を出て行った。

「お待ちせしました」

ペコリと頭を下げ、ヴィルヘルミナが入ってくる。

手には先程、持ってきたものと同じ、陶磁のカップが4つ準備さ

れている。

「ありがとう」

ウェールズは椅子に腰掛けると、机の引き出しを開き、宝石が散りばめられた小箱を取り出した。

首にかけられたネックレスを外して、先端部分の鍵を小箱の鍵穴に差し込み、小箱を開ける。その小箱の、蓋の内側には、見る人全てを魅了するようなアンリエッタ姫殿下の肖像が描かれている。

「宝物だね」

誰も聞いていないのだが、小箱を愛しい恋人のように撫でるウェールズは、短くそう答えた。

中には、一通の手紙が入っていた。

ウェールズはそれを取り出して、便箋も封筒も何度となく読んだのだろう、ポロポロになった手紙を広げる。彼方此方の折り目から、裂け目が入っている。

何度も何度も読み返すと、ウェールズは愛しそうにそれに口づけ、手紙を丁寧にあたんで、再び封筒に入れると、ルイズに手渡した。

「これが姫からいただいた手紙だ。このとおり、確かに返却したぞ」
「……………」

ルイズと才人は、何のことだか分からずに、渡された古ぼけた手紙を見つめた。

その二人の様子を、不思議そうな顔で王子は見ている。

「どうしたのだね？」

「いえ、この手紙は一体…？」

ルイズの質問に、王子が答えようとしたところで、バリーが再びやって来た。

ニユーカッスルの城の一番高い尖塔を何度も往復した為か、かなり息が荒い。

「で、でん、か…」

「そんなに慌てて…。一体、どうしたのだい？」

息を荒くするバリーへ、ヴィルヘルミナが透かさずデキャンタに入れていた水を、コップに入れて飲ませた。ゴクゴクと大きな喉の音を立て、一気にバリーは飲み干した。

「は、畏れながら…」

「やあ、やあ。お三方、無事でしたか？」

落ち着いたバリーが喋りだすよりも早く、銀髪の少年が入ってきた。

「アレン！」

ガダツと大きな音を立てて、才人が立ち上がる。

「無事だったのか！」

「ええ。無事でしたよ？」

感動の再会とはならない。

今にも泣きそうな顔でアレンに駆け寄ってくる才人と違って、アレンは至極当然といったような顔だ。けろりとしていて、何事もな

かったかのように振舞っている。

「それよりも、その手紙……」

煩わしそうに、泣きついてくる才人を強引に座らせ、王子へと向き直る。

ここまで来てしまえば、黙っている必要も無い。

「その手紙を貰ってくる事が、お姫様の頼みだったんですよ」

王子の方を向いたまま、ルイズと才人へと話す。

言葉の端々に、明確に謀られたと言う事を匂わす調子で、続ける。

「その手紙はラブレターですよね？」

「殿下……？」

ルイズや才人も割って入りたそうな顔をしているだろう。

だが、それを全て無視する。聞き入れたところで何も無いし、事態が好転する事も無い。

「君達は、あの姫様に騙されたんですよ」

ニコリと変らない黒い笑顔で、アレンが二人へと振り向いた。

「そんな！」

ルイズが反論しようとするが、斬って捨てる。

「彼女は君達に戦地に行かせて、態々自分の尻拭いをさせようとしてんだんですよ」

ルイズは何か思いついたのか、アレンを押し退けウェールズの前に立つ。

哀しさも、怒りも、色々と緇交ぜになったような、そんな顔をしていた。何に対して怒っているのか、悲しんでいるのか。それは誰にもわからない。

「殿下、畏れながら申し上げたい事が」

「…何なりと申してみよ」

言いくそうにウェールズは許可した。

「姫様と殿下の様子から察するにもしや殿下と姫様は……」

「従姉のアリエッタと、この私が恋仲であったと言いたいのかね？」

ルイズの質問に答えた、ウェールズの顔は微笑んでいる。

だが、誰にも伝わる位に哀しそうで、今にも泣きそうな微笑を持った顔だった。

「はい、そう想像いたしました。とんだご無礼を、お許しください」「構わんよ。続けてくれ」

一拍置いて、ルイズは続けた。

「はい。今の話が本当であるならば、この手紙の内容とやらは……」

ウェールズは額に手を当てて、言おうか言まいか、しばらく悩んだあと、ゆっくりと言った。重苦しいものを吐き出すような、そんな声だった。

「その彼の言うとおり、恋文だよ」

ヴィルヘルミナが淹れてくれた紅茶はすっかり冷たくなっていた。それを一気に流し込んで、続ける。少し口が廻るようになったのか、一気に言いきった。

「確かにアンリエッタが手紙で知らせたように、この恋文がゲルマニアの皇室に渡っては、とてもまずいことになる。なにせ、彼女は始祖ブリミルの名において、永久の愛を私に誓っているのだからね」

アレンや才人には、この世界の婚姻の事など知らない。

だが、口ぶりから察するに、相当な問題なのだろう。そして、この世界でも重婚は禁忌のようだ。

「知つてのとおり、始祖に誓う愛は、婚姻の際にたてなければならぬ。この手紙が白日の下にさらされたならば、彼女は重婚の罪を犯すことになるだろう。ゲルマニアの皇帝は、重婚を犯した姫との婚約は取り消すに違いない」

その後待ち受けているのは、マザリーニが危惧したとおりだろう。

アレン達にとってみれば、どうでも良い問題だが、^貴国のシステムの一部であるルイズやワルドには死活問題だろう。

「そうなれば、同盟は白紙に戻り、トリステインは一国で、あの恐るべき貴族派に立ち向かわねばなるまい」

言い切った王子へと再び、尋ねるようにルイズが口を開いた。

此方も重大な事を話している事に耐え切れなくなってきた。

「では、姫さまと殿下は恋仲であらせられたのですね？」
「昔の話だよ」

ルイズの質問を、ウェールズは短く切った。

「殿下…、恐れながら、申し上げたいことがございます」
「なんなりと、申してみよ」
「殿下、亡命なされませ！」

堰を切ったようにルイズが喚き立て始めた。
いきなりのことに、才人は驚いた。二人は、冷静に彼女を見ている。

「トリスティンに亡命なされませ！」

熱っぽい口調で言うルイズの肩に、ワルドが手を置いた。
しかし、それでもルイズの剣幕はおさまらない。

「お願いでございます！わたしたちと共に、トリスティンにいらして
くださいませ！」

「お、おい…。ルイズ…」

才人が窘めようと口を挟もうとするが、それでも止まらない。

「手紙にも、あなたに亡命を勧める文は書いてあるはずですよ！」

確証など、そんなものは存在していない。

たった一つ。自分の記憶だけで、只管に高熱を持った語り口調で
続けた。

「わたくしは恐れ多くも、幼き頃に姫さまのお遊び相手を務めさせていただきました！」

「そうか。ラ・ヴァリエールと言うのには、聞き覚えがあったが…」

ウェールズがようやく得心が言ったような顔になり、ルイズの鳶色の目を見つめた。

「姫さまの気性は大変よく存じています！」

自分が幼なじみであったことくらいしか、今の主張の根拠は無い。自分でもとんでもない事を言っているのは、冷静に分析できていた。

「あの姫さまがご自分の愛した人を見捨てるわけがございません！」
「それはできない」

冷静にウェールズは答えた。

「殿下！」

尚も食い下がろうとするルイズとアンリエッタの思いを、隠すように王子は最後の一言を言った。

「それにそのようなことは、一行も書かれていない」

ウェールズは首を振った。

「殿下！」

それでも尚、ルイズはウエルズに詰め寄る。

「私は王族だ。嘘はつかぬ。姫と私の名誉に誓って言うが、ただの一行たりとも、そのような文句は書かれていない」

額に汗を浮かべてウエルズは苦しそうに言う。

それを見て、ルイズの指摘は当たっていたことが、アレンには解った。だが、解ったからといって、何をしようとも思わない。

彼の目的は、手紙とルイズだ。良くも悪くも、彼は約束を違える心算は全く無い。

ウエルズが生きるか死ぬかを、アレンが決めてよい道理は無い。神様の力を振るう事ができても、神様ではないのだから。

「アンリエッタは王女だ。自分の都合を、国の大事に優先させるわけがない」

ふうつと、一息ついて、落ち着いて言った。

すっかり冷めてしまったポットの紅茶を、控えていたヴィルヘルミナが淹れようとしますが、王子はそれを制した。

「明日の朝、避難のために非戦闘員を乗せた『イーグル』号が、ここを出発する」

もう、する事はない。

もう、できる事はない。

それは、遠まわしな王子からの、ルイズ達への最後通牒だった。

「それに乗って、君たちはトリステインに帰りなさい」

「……」

「トリステインの領内まではいけませんが、近くまでは運んでくれる

だろう」

ルイズは、ポケットに入った手紙を押さえながら、決心したように口を開いた。

「あの、殿下……」

「ん、まだ何かあるのかな？」

先程の話はして欲しくないのだろう。

亡命の話も、これ以上続けた所でウエールズの気持ちを、揺らす事は出来ないだろう。

「先ほど、栄光ある敗北とおっしゃっていましたが、王軍に勝ち目はないのですか？」

ルイズは躊躇うように尋ねた。

しかし、ウエールズは、あっさりと答えた。まるで世間話をしていのような軽い調子で。

「ないよ」

何の誇張も、何の先入観も無い。

それは確固たる彼我の戦力差であった。

「我が軍は三百。敵軍は五万。万に一つの可能性もありえない」

敵の戦力は此方の20倍。

これは最早、戦ではなく、単なる虐殺というに等しい戦力差であった。

「我々にできることは、はてさて、勇敢な死に様を連中に見せつけるだけだ」

「殿下の、討ち死になさる様も、その中には含まれるのですか？」

言いにくそうに尋ねるルイズに、またあっさりとうエールズは答ええた。

「当然だ。私は真っ先に死ぬつもりだよ」

ルイズは俯いた。

傍でやりとりを見ていた才人は、重苦しいため息をついた。明日にも死ぬというときには、王子はいささかも取り乱した様子がない。

現実味など全く無く、今、目の前で起きていることは、どこかの歌劇のような、芝居のような、作り物、遠い世界の出来事のようにも見えた。

ルイズは深く頭を下げたあと、ウエールズに言った。

「本当に宜しいのですか？」

「何がだい？」

とぼけたような調子だが、ウエールズはルイズの言いたい事がわかってるのだろう。彼女の肩をポンポンと優しく叩いた。機先を制し、ルイズのこれ以上の反論を止めさせた。

「きみは、正直な女の子だな。ラ・ヴァリエール嬢。正直で、真っ直ぐで、いい目をしているよ」

ルイズは寂しそうに俯いている。

「忠告しよう。そのように正直では大使は務まらんよ。しっかりしなさい」

ウェールズは微笑んだ。

「しかしながら、亡国への大使としては適任かもしれぬな」

どこまでも寂しげで、優しい微笑で。

「明日にも滅びる政府は、誰よりも正直だからね。なぜなら、名誉以外に守るものがないのだから」

それから机の上に置かれた、時計を見つめた。

正確に、定期的に針が動いている。

「そろそろ、パーティーの時間だね。きみたちは、我らが王国が迎える最後の客だよ」

また微笑んでいるが、今度は心の底からの笑顔だった。

「是非とも出席をしてもらいたい。ヴィルヘルミナ、後で案内を頼むよ」

「畏まりました」

とんでもない話を聞いたというのに、些かもヴィルヘルミナは取り乱した様子はない。扉を開け、二人を促す。ルイズと才人は一礼して部屋の外に出た。

アレンも、しばらくの間、ウェールズを見つめていたが、ルイズに呼ばれて出ていった。

だが、ワルドだけは部屋の中に残った。

「まだ、なにか御用があたりで？子爵殿」

最後まで居残っていたワルドに、丁寧な口調でウエールズが尋ねる。

ワルドは一礼して言った。

「恐れながら、殿下にお願いしたい議がございます」
「なんなりとかがおう」

ワルドはウエールズに、自分の願いを語った。
ウエールズは微笑んで言った。

「なんともめでたい話ではないか。喜んでそのお役目を引き受けよう」

王子は、ぱあっと太陽のように華やかな顔になった。

「早速、準備をせねばな。ヴィルヘルミナにも頼んでみよう」

カツカツと石の廊下を無言で、一同は進んでいく。

先程の話に、ルイズと才人は付いていけず、アレンは何事か考えているかのような調子で、誰も口を開かなかつた。

何階か、階下へ降りていく途中、ようやく先頭を言っていたヴェルヘルミナが口を開いた。

「申し訳ございません」

此方を見向き、背後を付いてくる3人に向けた謝罪の言葉だった。

「本来、王子はあのような事を仰る方ではないのであります。亡命の話も本当のことでしょう」

「ええ、解ってます」

彼女の言葉に、アレンが短く答えた。

傍から見ても、ウェールズの顔が目まぐるしく変わっていったのは、よく解っていた。そして、彼がアンリエッタをどれだけ好きなのかという事も。

「これも殿方の意地ということ、大使殿には理解していただきましたのであります」

無表情のまま、抑揚の無い声でヴェルヘルミナは続けた。

ルイズには、その言葉の真意など何一つとして、理解できていなかった。

「…それよりも!」

くるりと先頭を歩いていったメイドが、後ろを振り向く。
鉄仮面の表情には、怒りがあつた。

「ど、どうしたのですか…？」

幼い頃、母親に叱られたような感じがして、ルイズがおっかなび
つくり尋ねる。

「大使殿たちは、丸一日、船の上におられたのでありましょう？」

「え、ええ…」

ラ・ロシエールを出航してから、今日で丁度2日。

その間、寛ぐ暇も無く、何もする事も無く、気を張っていたので、
疲れていた。そして何よりも、汚れていた。

「これからパーティであります。ささやかですが、湯浴みされては
如何でしょうか？」

これには3人とも仁部も無く賛同した。

ニューカッスルの城は、そもそも軍事用途として建てられた物で
ある。

そのためか、中身はまさに要塞と言うに相応しく、余計な装飾な
ど一切無い。それはこの城、唯一の浴場も例外ではなかった。

「なあ…、アレン」

澄み切った湯に体を預けて、才人が聞いた。
質問を投げられた方は、シヤカシヤカと粉石鹸を、白い髪の中で
泡立てつつ、のんびりとした口調で聞き返す。

「何です？」

服の上からでは解らなかったが、華奢な体つき割り、筋肉が
程よく、バランスよくアレンには付いている。鍛え上げられた軍人
の体つきである。

「アレン達なら、何とかなるんじゃないか？」

「何とかって、何です？」

洗っているアレンは、質問の意味をはぐらかす。

聞きたい事は、その一言で十分に理解できたが、答えたいとは何
故だか思わなかった。

「いや、だから！」

ザバツと水を撥ねさせ、才人が勢い良く浴槽の中で立つ。

「アレン達なら、5万にも立ち向かっていけるだろ？」

それは根拠も何も無い。先程のルイズの言葉と同じもの。だが、
もっと酷い口ぶりの発言だった。

確かに、今から箱舟を用意し、一護達を召喚してしまえば、5万
と言わず、この世界全てを敵に回しても、勝てる自信がアレンには
あった。

だが、それをした所で何もならないというのも確かだった。
だから、

「無理ですね」

きつぱりと才人の質問には、首を横に振った。

それに、彼の口ぶりに、少しばかり腹が立つたということもある。

「そんな…！」

尚も何か言いたそうな顔をしている才人へ、泡塗れの顔でアレンは続ける。

「僕だって、人間なんですよ。全知全能の神様じゃないんです」

自分が全知全能の神様なら、どれだけ素晴らしい事が出来たのだから。

それは解らない。だが、少なくとも、エクソシストこたなごとはしていなかっただろう。

ザバツと桶に汲んだお湯で、泡を流す。

「この話は終わり。僕らは早く帰りましょう」

「…ああ」

不満と無力感。

それが一緒になった声で、才人は呟いた。

「替えの服とマントを用意しておくのであります」
「……………」

ルイズを半ば強引に叩き込んだヴィルヘルミナは、脱衣所で煤けた服を真新しいものへと替えていた。城に在った既製品なので、若干、ルイズの着てきたものよりは大きい。

だが、叩き込んだ後、ちゃんとサイズを見ながら、すぐに仕立て直した。

「…では、ごゆるりと堪能くださいませ」

脱衣所と浴場を仕切る扉の向こう、ヴィルヘルミナが綺麗な一礼をしたのが、ルイズには解った。

「……………」

彼女が考える事は一杯あった。

アンリエッタのこと。

ウエールズのこと。

才人やアレンのこと。

考えていると、次から次へと何も思い浮かばなくなってしまふ。

思考の迷路に迷い込んだ彼女は、考える程に、底へと落ちていくのだった。

パーティーは、城のホールで盛大に行われた。

3人が、ヴィルヘルミナに再び、案内されてやってきた時には、既に何人が顔を紅くし、出来上がっている人が居た。

「では、ごゆっくりお楽しみ下さい」

ペコリと一礼して、案内してくれたメイドは去っていく。

ホールの中を自由に見渡せるスペースに、簡易であるがそれなりに装飾が施された玉座が置かれている。そこへゆっくりと入ってきた老人が座る。

「陛下だ」

「おお、我らが陛下」

それを見て、ホールに集った面々は、皆一様に歓喜の声を上げた。腰を落ち着けたアルビオンの王、年老いたジェームズ一世は、楽しそうに騒ぐ貴族や兵士達、臣下を目を細めて見守っていた。

その表情はにこやかに微笑んだような感じではあるが、どこか違う。

「それにしても……」

明日で自分たちは滅びゆくというのに、随分と華やかなパーティーであった。

テーブルの上にはこの日のためにと置かれた、様々な豪華な料理が所狭しと並べられている。そんな事情は知ったことではないアレンは、今日も今日とて豪快に口へと運ぶ。

次から次へとまるで手品のように消えていく食事を見ていた貴族たちが、拳って歓喜の声を上げている。

「…何だかな」

才人は会場の隅に置かれた椅子に腰掛け、華やかなパーティーを見つめていた。

どこだか、皆、諦めたような顔をしているのは気のせいではないだろう。

「明日で終わりだっていうのに、随分と派手に…」

才人が呟くと、遅れてやってきたワルドが頷きながら言った。

「終わりだからこそ、ああも明るく振る舞っているのだ」

「そういうものなのか…？」

才人には、到底、理解できない事だった。

やはり、この世界は彼が生きてきた世界とは、異なりすぎる。

「殿下が参られたぞ！」

しばらく経ち、ウエルズが気品を保って現れた。一番、最初に気が付いた扉に近い位置に居た、貴族が大声で、来場を知らせる。すると、たちまち貴婦人たちの間から、歓声がとんだ。

どうやら、若く、凛々しい王子はどこでも人気者のようだ。

彼は玉座に近づき、父王であるジェームズ一世になにやら耳打ちをする。

それを聞いてジェームズ一世は、すくっと立ち上がるうとしたが、かなりの年であるらしく、よろけて倒れそうになった。

「陛下！お倒れになるのはまだ早いですぞ！」

「そうですとも！せめて明日までは、お立ちになってもらわねば我々が困ります！」

屈託の無い失笑を浮かべながら兵士達が言う。
ジエームズ一世は、そんな軽口を気分が悪い様子もなく、にか
つと笑みを浮かべた。

「父上、大丈夫ですか」

「すまんのう。何、座っていて……ちと、足が痺れただけじゃよ」

ウエールズが、そんな父を心配して、寄り添うように体を支える。
それから陛下が軽くこぼんと咳をすると、ホールにいる全ての貴
族、貴婦人たちが、一斉に直立した。呑気に座っていたルイズ達も
立ち上がる。

アレンは、立ち上がることなく、手だけを止めていただけだが、
誰も気にした様子はない。

「諸君。忠勇なる臣下の諸君たちに告げる」

楽しく見えるだけのパーティの空気がガラリと変る。

「いよいよ明日、このニューカッスルの城に立てこもった我々、王
軍に反乱軍の総攻撃が行われる」

どちらも軍備を整えている。

だが、その力の差は歴然としている。

「よくぞ皆、無力で何もできなかった、この無能な王に、諸君らは
よく従い、よく戦ってくれた」

そこでホールに集った最後まで忠臣に、深々と頭を下げた。
物音一つしない、静かな空気に包まれる。

「しかしながら、明日の戦いは、もう戦いとは呼べない。恐らくは一方的な虐殺になるであろう。我は忠勇な諸君らが、傷ついて、倒れるのを見るに忍びない」

そこまで言つて、老いたる王は、咳き込む。透かさず野次が飛ぶが、皆一様に無理した笑いを浮かべていた。

そして、王は言葉を続けた。

「したがって、我は諸君らに暇を与える。長年、よくぞこの王に付き従つてくれた。厚く礼を述べるぞ」

再び、深く頭を下げたジエームズに、ホールに集つた貴族や兵達も、全員が返礼した。

「明日の朝、『イーグル』号が、女子供を乗せてここを離れる。諸君らも、この船に乗り、この忌まわしき大陸から離れるがよいぞ……」

言い終えた後、誰も返事はせず静かな空気に包まれる。

やがて一人の兵士が、大声で王に言った。

「陛下！我らはただ一つの命令をお待ちしております！『全軍前へ！全軍前へ！全軍前へ！』今宵、うまい酒の所為で、陛下のありがたいお声が聞こえません！」

大声で言い出した兵士に続くように、次から次へと声が上がる。

「はは、耳が遠くなつてしまったのですな！はて、私もそれ以外の命令が、耳に届きませぬ！」

その勇ましい言葉を合図に、次々と集まった全員が頷き、言った。

「おやおや！今の陛下のお言葉は、なにやら異国の呟きに聞こえたぞ？」

「耄碌するには早すぎですぞ！陛下！」

老王は、熱くなった目頭を拭って、

「馬鹿者どもめ……」

と短く呟き、杖を高々と掲げた。

その呟きは、誰にも聞こえていないだろう。だが、全員が解っているだろう。そんな呟きだった。

「よかろう！しからは、この王に続くがよい！さて、諸君！今宵はよき日である！重なりし月は、始祖からの祝福の調べである！よく飲み、よく食べ、よく踊り、楽しもうではないかあ！！」

老王の掛け声に一斉に歓喜にも似た声上がる。

「おお！アルビオン万歳！」

「ジエームズ王、万歳！」

「万歳！」

只管に言い続ける彼らは、どこかに狂気にも似たものが漂っていた。

それからは、辺りはよりいつそうに賑やかな空気に包まれた。

こんな戦時下にも関わらず、遙々トリスティンからやってきた客が珍しいらしく、貴族たちが、一人、また一人と次々にルイズたち

の元へとやってくる。

その中に紛れて、鎧を付けた兵士達も混じっている。

「大使殿！このワインをお試しなされ！年代物で最高級品ですよ！」
「なに！いかん！そのようなものをお出ししたのでは、アルビオンの恥と申すもの！」

差し出されたボトルを押し退け、まだ封の開けられていないワインを別の貴族が持ってきた。

異国の言葉で書かれたラベルを見た才人には、違いが今ひとつ分からなかった。

「このワインの方が上等だと思いますぞ！」

「こちらも食してごらん下さい！このハチミツが鶏のソテーとうまくマッチしまして、うまくて、頬が落ちますぞ！」

最初、テーブルの上にはワイン以外並んではいなかったが、次から次へと高値がつくワインや豪華な料理が並んでいく。

貴族たちは、悲観にくれたような言葉は一切述べずに、ルイズたちに明るく料理や酒を勧めるためルイズや才人は断れずに受け取ってしまう。

そして最後には、アルビオン万歳！と言って去っていくのであった。

「…ごめん、私、先に部屋に戻る」

「どうした、ルイズ？」

「…何でもない」

いい加減に、この場の雰囲気になえきれなくなったルイズは、逃げ出すように走って最後の晩餐会の会場から出て行った。

「アレン、俺も先に戻るよ」

「あ、ふぁい。わかりまひふぁ」

モグモグと咀嚼しながら喋るアレンを置いて、才人は頷いてルイズの後を追いかけるため、ホールを後にする。

「飲みます?」

残されたアレンとワルド。

一息つくくと、アレンは会場を眺めているワルドに酌を仰いだ。

「ああ、すまない、一杯頼むよ」

「解りました」

と返事をして、アレンはワルドのワイングラスにワインを注いだ。トクトクと血のように赤い液体で、グラスが満たされる。ワルドは、その一杯を一気に飲み干すとアレンをじっと見つめた。

「どうしました?」

視線に耐え切れなくなった、アレンが嫌そうな顔で尋ねる。

「いや、何。君は飲まないのかい?」

そう言ってワルドが、アレンのグラスにワインを注ごうとするが、手で制した。

「生憎と、師匠にきつく『お前は飲むな』と言われているもので」「そうかい、残念だな」

確かに、アルコールの味を知らないと言うのは、中々に損なのかもしれない。

だが、アルコールを体に入れると、アレンと彼の周りの人は、それ以上に損をすることは間違いない。

「アレン君で良かったかな？」

「ああ、そういえばちゃんと名乗ってませんでしたね」

そう言えば、名乗ってなかったと思い出す。

名乗る暇が無かった事も事実だが、最初の時、一括りで紹介された事を思い出す。

「では、改めて」

コホンと、業とらしい咳払いを一つしてから、自己紹介を鷹のような目を持った子爵へとした。立ち上がって、体の前で片手を組み、頭を下げる。

「アレン・ウォーカーです」

見ているものが惚れ惚れするような丁寧で、折り目正しい一礼だった。

これを見て、ワルドの方も、また丁寧な礼を返す。

「トリステイン子爵のジャン・ジャック・フランシス・ワルドだ。よろしく頼むよ」

そう言って右手を差し出し、握手を求めてきた。

特別、断わる理由もなかったなので、その鍛えこまれた武人のよう

な手をアレンは取った。手袋の上からでもわかったが、直に触ってみると、骨や筋肉が張っていつて、かなり硬い。

手を離れた後、感心仕切りと言った様子で、ワルドが聞いてきた。

「これは実に、鍛えこまれた…。元貴族ではないのかい？」

その問いには、くすつと笑って返す。

「いえいえ、さっき言った師匠は貴族でしたけど、僕は特別、何も相変わらずの口八丁で切り抜ける。全くの嘘だが、顔色一つ変えない。

彼の師匠であるクロス・マリアンが貴族だったことなど、一度も無い。寧ろ、貴族と言う存在からは最も縁遠い生活と性格をしている。

「そうか、実に素晴らしい、師匠だったのだな」

「いや、それ程でも」

ケツと、今あっても殴りたい赤毛の師匠のニヤついた顔を思い出す。

「うん、君になら話してもいいかもしれないな」

「？」

突然、真面目な顔になって、ワルドが言ってきた。

食事を再び止められたので、アレンは若干嫌そうな顔をしている。

「話があるんだが……」

「んですか？」

気のせいだろうか、ワルドの声色は少し冷たい。
アレンは首だけ動かして返事を返す。

「聞いてくれるかい？」

「聞いてくれるかいつて、聴かせる気、満々じゃないですか」

頭をポリポリと掻きながら、呆れて言う。

どの道、アレンが聞かないといっても、絶対に聴かせるつもりだったのだろう。そんな感じの口ぶりだった。よほど、聞いてもらいたい話のようだ。

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げる」

「…ふあい？」

アレンは、優しげな目つきをさらに緩くした状態で、心底間拔けな声が出してしまった。

そばに置かれたデキャンタから、水をまるっと飲んで、気を取り直すと、無表情のワルドに質問した。彼は何故だか、冷たい顔になっている。普通、結婚式と言つのははしゃぐものではないだろうか。

「……なんでこんな時に？」

そんな彼の質問は、尤もだろう。

「今じゃなくて、帰ってからやれば良いでしょう」

「こんな時だからだよ」

アレンの質問は、軽く返された。

「ウエールズ皇太子に媒酌をとつてもらい、勇敢なる戦士諸君らを祝福する意味合いでお願いしたくなってね。皇太子も、快く引き受けてくれたよ。決戦の前に、僕とルイズは式を挙げる」

アレンは、ワルドの考えている意図が読めなくなった。

そんな結婚式など挙げる余裕があるなら、一刻でも早くトリスティンに戻った方がいいだろう。

間違いなく、ここは戦場になる。そんな戦地で、のんびりと結婚式を挙げている余裕など、無いはずだ。

それに、ルイズと再会して全然日にちは経っていないというのに唐突すぎる。

例えば婚約者でも、いや、婚約者だからこそ、時と場合を選ぶはずだ。

(何かに焦っている…?)

ワルドの様子から見て思う。

旅立った時から膨れ上がっていたこの男に対する疑問が、段々と固まり始めていた。

だが、此方の方が先手を取っている。それに気づかれない限りは、まだ優勢だ。何があっても対処できる。幸いなことに新しい仲間も引き入れる事が出来た。

「君も出席するかい？」

アレンがそんな事を考えているとは露知らず、ワルドが尋ねる。

「ええ。良いですよ」

とりあえず、反対する理由などないので返事を返した。

「そうか。では、僕とルイズの婚姻を祝福してくれたまえよ」
「はいはい」

そう言うつとワルドは、先ほどの表情とは打って変わり、穏やかでいて、そして無表情の顔つきをしたまま、席を立ち上がり去っていった。

その表情に、アレンは違和感を覚えるが、特に気にせず食事を再開した。

「やあ」

席に独りになってしまったので、のんびりと食事をしながら、パーティーを眺めていると、貴婦人や兵士達に囲まれて歓談をしていたウェールズがこちらに向かって歩いてきた。

軽い調子で、アレンに話しかける。

「席いいかい？」

「ええ、どうぞ」

アレンの了承の一言を受けて、ウェールズは椅子に腰かける。

「しかし、君は一体、何者なんだい？」

唐突にそんな事を聞かれたので、口に運ぶ手を止め、飲み込んでしまう。

大きく、1回、2回と噛んで、ウェールズへと向き直る。

「別に大した者じゃありませんよ。ただの大使の護衛です」

「そうか」

そういつと王子は得心が言ったようだった。

「にしても、ラ・ヴァリエール嬢の使い魔。人が使い魔とは珍しい……。トリステインは変わった国だな」

ウェールズは笑いながら言う。

「トリステインでも珍しいですよ」

アレンは嫌な顔つきで言った。

一応、彼もルイズの使い魔ではあるのだが、この様子では言っていないのだろう。

「どうしたんだい？どうやら楽しめてないみたいだが……」

アレンの顔を見てウェールズは気さくに尋ねる。

だが、黙ったまま、じつと銀色とも灰色とも見える瞳で、彼の青い瞳を見つめ返す。澄み渡った湖面のような瞳に、くすんだ自分の左目がチラリと映る。

「どうしたんだね？」

「いえ、死ぬ事が怖くないのかと思ひまして」

アレンが今まで思っていた疑問を口にする。

「私たちを案じてくれている……、という訳ではないみたいだね」

「ええ、僕は死ぬ事が怖くて仕方ありませんから」

けろりとした調子で、アレンは言った。

彼は自分が死にたくないから、武器を振るう。武器を振るって、敵を殺す。そして、それが悪い事だとは全く思っていない。

殺さなければ、自分が死ぬのだから。勿論、敵で無いなら、助けるかもしれないが。

「怖いさ。死ぬことが怖くない人間なんて、いるわけがないだろう？」

当然の事を、今更に聞くアレンに、ウェールズは哀しげな声で言った。

「王族だろうが、貴族だろうが、平民だろうが、皆人間だ。死ぬことが怖いに決まっている」

「じゃあ、なんで勝てない戦をするんです？死に行くようなもんでしょう？」

今度は、王子の方がケロリとした様子で言った。

「守るべきものがあるからだよ。守るべきものの大きさが、死の恐怖を忘れさせてくれるのだ」

「守るべきもの…、ですか」

ウェールズは、遠くを見るような目で、語り始めた。

アレンの守りたいものとは、根本からそれが違うような気がした。

「我々の敵である貴族派は、ハルケギニア統一という理想を掲げている」

アレンにはどうでも良い話だった。

だが、聞いておきたいと何故だか思ってしまった。

「理想を掲げるのはよい」

きりつと引き締まった凛々しい顔で、アレンへと詰め寄った。

「だが、あやつらはそのために流されるであろう民草の血のことを考えぬ。荒廃するであろう、国土のことを考えぬ」

「……………」

これが王族の勤めなのかもしれない。

孤児で、捨てられて、満たされる事の無かったアレンには今ひとつ、解らない感情だった。

「我々は勝てずとも、せめて勇気と名誉の片鱗を見せつけ、ハルケギニアの王族は弱腰ではないことを見せつけねばならぬのだ」

「どうしてです?」

ウェールズは、毅然として、言った。

「何ゆえか?簡単だよ。それは我らの義務なのだ。王家に生まれたものの義務なのだ。内憂を払えなかつた王家に、最後に課せられた義務なのだ」

アレンはその答えを聞いて、心の中で盛大にため息をつく。
勇気と名誉。

彼に取って、それがいかなる意味を持つのか。

地上に残ったシャナに取っては。リンに取っては。エドに取っては。

一緒についてきたネギヤリナリーに取ってはどんな意味を持つのだろう。

その意味は、千差万別で間違いない。
だが、

「王子さま」

「何だい？」

どうも彼らは勇気と名誉という言葉の間違えている。

「王族じゃない、貴方の名誉と勇気って何ですか？」

「……」

何も、死ぬことだけが名誉と勇気ではないだろう。

そう思って訊いた、この質問には、ウェールズは答えてくれなかった。

アレンの中では、結局、彼は名誉だとか、勇気だとか、義務だとか、美辞麗句だけ並べて、率先して、その責任や重圧から逃げ出したいだけにしか見えなかった。

勿論、それがアレンも悪いとは思っていない。怖い事、いやな事から逃げ出すのは、罪でも恥でもない。

「ふう……」

重苦しいため息を付いて、暗い廊下へと向かう。

ウェールズには愛している人がいて、その彼女も彼のことを愛している。

「何か、姫様に伝えておきましょうか？」

背中越しに、凜々しい王子へと問いかける。

ここまで関わってしまった以上、少しくらいはという偽善だ。

「ならば、『君の愛した人は勇敢に戦って死んでいった』とだけ」
「ええ、解りました」

アレンの耳にはしっかりと聞こえていた。

全ての責任を放って、死んでいったと――。

アレンは燭台に乗せられたロウソクの灯だけを頼りに、暗い廊下を歩いていった。

コツコツと石の床や壁に反響する自分の足音が、暗い廊下に嫌に大きく響いた。別にそれだけの事で、普段はどつと言つことも無いのに、今だけは何とも腹立たしく感じる。

「何だかな……」

最後にホールから余った料理を幾らか、抱えられるだけ持つてきて食べながら歩いている。

後ろにはポロポロと食べかすが、足跡のように続いていた。

「どうにも納得行きませぬね……」

今、彼がイラ付いている理由は明白だった。

一度全てを失って、それでも尚、生きる事を、死ぬまで戦い続ける事を誓ったアレンとは、あの王子は全力で逆方向へ行こうとしているのだ。全てを持ったまま、その重圧に耐え切れずに、全力で走っている。その姿が、どうにも彼に同属嫌悪させてしまう。

結局の所、彼はアレンに似ているのだ。

「助けてあげたいですけど、どうしようもないですし……」

怒りや、自分の葛藤を全て噛み千切るように手に持った林檎を噛み砕いた。

積年の恨みを晴らすかのように、林檎は一瞬で砕け散ってしまった。

シヤリシヤリと心地よい音がして、芯だけになってしまふ。このまま捨ててても、誰も気にしないだろうが、何となく、そのまま芯まで飲み込んでしまった。

「何を考えているのでありますか、アレン・ウォーカー」

「あ、ヴィルヘルミナさん」

角を何度か曲がり、危うく迷子になりかけていたアレンの前に、桜色を纏ったメイドが現れた。暗闇の中、ロウソクの僅かな灯でも解る位に、無表情という表情で塗り固められた鉄仮面には、些かの揺るぎも見られない。

その整った顔を、一部も崩すことなく、アレンへと詰め寄る。

「な、何ですか…？」

思わずアレンは、腰が引けてしまふ。

無表情で、平坦な声。感情が無いかのように振舞っているが、それなりに美人である。美人に吐息が掛かるほど接近されて、戸惑わない男はいない。

「貴方の考えは図りかねるのであります。それに王子の考えも」「いいんじゃないですか、それで」

それで解りきったような事を言って、この話は煙に巻いた。ルイズならしつこく食い下がってくるだろうが、そこは大人の女としての余裕と経験という奴である。何も聞かずに、本題へと話を進める。

彼は笑顔で誤魔化してきた。

本音で何かを言ったことなんて、間違いなく、ない。いつも人の話をニコニコと笑いながら聞いているだけ。自分の身の上を話した

くないという気持ちもあるが、それ以上に誤魔化すことに慣れていた。

「人の心なんて神様しか知りませんよ」

「確かにそのとおりでありますな」

ふん、と鼻で笑われたような気がした。

ヴィルヘルミナも自分の事を詮索されない為に、無表情を貫き通してきたのだ。

「それよりも、私は貴方が『炎髪灼眼の討ち手』を知っていると
うから協力しているのです」

「解ってますよ」

彼女の無言の案内にしたがって、用意された寢所へと向かう道すがら、確認作業のように聞いてきた。煩わしそうに返すが、それが気にいらなかったらしい。

少しばかり不機嫌な声音で、

「違う事は許さないのであります」

「…解ってます」

迫る反乱軍も今頃、こんな風に勝利を願って騒いでいるのだろうか。遠くから勝利を願う祝砲が聞こえてきたような気がして、そんな考えがふと、アレンの頭に過ぎった。

「どうしたのでありますか？」

足を止めて、何事か考え込むような表情になったアレンを目ざとく見つけた。

それに何でもないような顔で、彼は返した。

「どうもしません」

言いながらも歩く自分の足音が、嫌に耳に響いて、彼はまた少し、嫌そうな顔をした。

「…本当に、嫌な奴ばかりであります」

ぼそりと呟いた先行するヴィルヘルミナの言葉は彼には聞こえなかった。

リナリーは単独で、空を滑空していた。

全身を覆うように作られた黒い毛皮のコートを着て、月明かりに照らされる空を心地よく飛んでいるのだった。途中、反乱軍の陣の上を通り過ぎたが、追撃は受けていない。

岬の先端に建てられたニューカッスルの城への陸路を全面封鎖するように5万の大軍が展開していた。彼方此方に篝火が焚かれ、まるで漆黒の大陸に星空のように広がっていた。

この大軍が、明日の正午には城へと迫るのだ。勝ち目どころか、城に残った人間の命の保障もできない程に戦力差は圧倒的だった。

「見られたけど、大丈夫だよな」

速度は既に、音に近い。例え発見できたとしても、十分に追撃を振り切れる。

コート之余りの部分と、肩口に掛かった髪が、一段と強さを増した轟轟と吹き抜ける夜風に、パタパタと大きくうねりながら、はためいている。

「あーあ、ルイズのウェディングドレス見たかったな〜」

単純に全乙女の憧れとして、白いドレス姿というのは絵になるのだ。幸せの絶頂に居る姿として。

例え、その隣に立つのが誰であったとしても。

「まあ、アレン君ならやってくれるでしょ」

期待と信頼に満ちた言葉を風に流し、他の二人を残しても、彼女はトリストニアへの道を急ぐ。

本来なら、箱舟を使って一気に帰ることも出来たのだが、敢えてそうしなかった。

「頑張つてね、アレン君」

励ましの言葉もまた、月明かりの下。

吹きぬける強風に紛れて、消えた。音速を保ったまま、目的地へと急ぐ。

才人の方もまた、燭台を片手に暗い廊下を歩いていた。

途中、何故だか明るくなっている場所を見つけて、気になってしまった。少しだけ扉が開いた、その部屋には、窓にカーテンもなく、

月明かりが最高に良い状態で飛び込んできているのだった。
その窓の下で、泣いている少女が居た。

「ルイズ…」

月明かりに照らされる姿に、才人は思わず、息を飲んだ。
今まで逢った事も無いような、可愛らしく美しい姿にくっと思を
飲んだ。声を掛ける事も忘れて、しばしの間見入ってしまう。
だが、ふとルイズがこちらを見たときに、目が合ってしまった。
彼女はバツが悪そうに、目頭を拭ういつもの調子で言った。

「何、見てんのよ」

「何、泣いてんだよ」

涙は拭えても、涙の後までは誤魔化せない。

「ねえ…、何で王子様は死を選んだの…？」

弱気になったルイズは才人へともたれかかった。
自分の胸へとすっぽり収まったルイズの綺麗な桃色の髪を優しく
撫でながら、才人はぎこちなく答えた。

「そんなの…、わかんねえよ…」

「私、もう一回、王子を説得す…」

ルイズが言わんとした事が解ってしまった。だが、何故だか、そ
れはしてはならないような事の気がした。自分の胸から離れて、ど
こかへ行こうとする彼女の手を引きとめる。

「ダメだ。早く帰って姫様を安心させてやれ…」

そういうとまた、ルイズは嗚咽を漏らし始めた。女の子に泣かれるなんて初めての経験だった才人は戸惑ってしまったて、どうすれば良いのか解らない。だから、只管に何も言わないで、優しく撫でていた。

痛む腕で撫でていた事にルイズは、はっとした表情になる。ゴソゴソとポケットを探つて、掌ほどの瓶を手を取った。

「腕、見せて」

「な、なんだよ」

その剣幕に推されて思わず、うろたえるが、ルイズは全く聞いていない。

「いいから見せなさい」

そう言われて、しぶしぶ腕を見せた。

雷に打たれた火傷の跡がくつきりと残っている。痛く残るその後を出来るだけ見ないようにしながら、瓶から軟膏を一掬い腕に塗りこんでいく。

「城の人から貰ったの」

嫌なものを見ないようにしながら、できるだけ会話にルイズは集中する。

大本を辿れば、これはルイズが油断していた為に出来てしまった傷だ。もし、出航の時に、リナリーやネギの注意の十分の一でもあれば、間違いなく防げていたに違いない。

そんな彼女の嫌な事が、才人の火傷には籠っていた。

「薬だけは一杯あるんだって、当然よね。戦争してるんだし」

そう言いながら、塗りこんでいくルイズの手は凄く優しくて。そして、凄く才人を傷付けた。すつと小さな手から瓶を取り、自分で塗り始める。

「ちょっと、どうしたのよ…」

「いい、自分でやる」

「これくらい、させなさい」

「いいから！」

ルイズの申し出をきっぱりと断わった。

このまま続けていたら、確実に才人は耐え切れなくなっていた。

「…一緒に旅をして解った」

「何がよ」

突如として様子の変わった才人に、ルイズは怪訝な目を向けた。

その先を言うことを許さないかのような意思が込められていたが、才人は無視した。

「俺には、お前を守る力が無い」

「はあ？」

いきなり言われた言葉に、二の句が告げなくなってしまった。

彼なりの結論が出ていたのである。この優しさを、恋人でも、何でもない自分が受け取るわけには行かない。そう思ったから、彼女の優しさを拒んだのだ。

「何、言ってるのよ！」

床を勢いよく叩き、才人へと詰め寄る。

「じゃあ、何で必死になって頑張ってきたのよ！」
「……」

それには何故か答えられなかった。

言ってしまうえば、全てが知られてしまうような気がしていたからかもしれない。

「意気地なし！」

そう叫ぶとルイズは部屋を飛び出して行ってしまった。

尾を引くように流れていったのは、きつと涙に違いない。

部屋の外では、一部始終をアレンとヴィルヘルミナが、神妙な面持ちで聞いていた。深刻な話をしている、入るタイミングを完全に失ってしまったのだった。

幸いなことに、涙を拭いながら走り去っていくルイズは気が付かなかったようだ。

「全く、本当に嫌な奴ばかりであります」

その再びの呟きは、アレンの耳にはしっかりと聞こえていた。

「昔を思い出すとか？」

片目だけでヴィルヘルミナを捕らえているアレンは、何を言われなくても口元も目元も動かない彼女の表情が、少しだけ哀しそうに変わったことに気が付いた。

本当に大陸が動いた程度の変化だが、確実に変わっていた。

「探つて欲しくない過去など、誰にでもあるのであります」

それだけ言うとヴィルヘルミナはルイズの消えた方向へと、一礼をして去つていった。

後から、さも今来たかのような調子で部屋へと入る。

「どうしたんですか、さつき物凄い勢いで走つていきましたけど」

ゴシゴシと乱暴に目頭を拭つて、才人は元気よく言った。

「な、なんでもねえよ！ちょっと怒らせちまつただけさ」

そのまま、元気よく立ち上がつて、服をはたく。

床に落とされていた土埃が、彼の決して他人に見せない涙のようにポロポロと零れた。

「そっか、それなら良いんですけど」

そう言つと設えられたベットを慣れた手つきで整えていく。

メイドも真つ青なほどに手馴れていて、見る見るうちに二つ分のベットが準備できた。今度は仕切る必要も無いので、廊下側に陣取つたアレンのほうにも、月光が濯ぐ。

「あまり喧嘩しないで下さいよ。彼女、明日結婚するんですから」

何気なく、世間話の心算で言った一言だったのだが、才人を更にどん底へと叩き落すには十分だった。

「は、何だよ、それ！」

「え？」

床に就いて寝ようとしていた、アレンをたたき起こすような調子で、才人が喚き始める。

重くなり始めた瞼を必死に堪えて、才人の真剣な目をじつと見る。

「アレン、ルイズが結婚をするって嘘だろ？」

「言ったとおりですよ」

何か、会話がかみ合っていない気がする。

てつきり既に二人には話していたものだ、アレンは勝手に思っていた。少なくとも当の本人には伝えていなくてはおかしい。

「ルイズは明日、結婚式を挙げるようですよ」

アレンのあっさりとした言葉に才人の体が固まった。

「こ、こんなときに？こんなところで？」

「そのようですよ」

坦々と返しながらも、違和感はどんどん膨れ上がっていく。

先の話进行を思い返してみるが、結婚の話など一言も出ていなかった。ルイズの性格を考えると、才人の心を折るために、言おうものだが、何故か言わなかった。

「な、なんでだよ！」

「僕に聞かれましたも…」

深夜も近いというのに暑苦しく詰め寄って来る才人をあしらいながら、アレンはベットへ潜り込んだ。ゴソゴソとアレンの体積より

も白いシーツが大きく盛り上がる。

「なんで今やるんだよ!」

「寝さしてください!」

そう言つと一応は、落ち着きを取り戻したようだ。

「明日なんですけど、君はどうします?」

「…一応、出る」

そう言つた才人に続けるように、アレンは言つた。

「どうして、あんな事を言つたんですか?」

「……」

背中を向けて寝ている才人の顔は窺えない。答えも帰ってこない。だが、背中が小さく上下しているのが解つた。恐らくは泣いているのだらう。

「俺さ、本当に強くなつてんのか、アレン」

「…さあ、どうでしょう?」

無責任に返事をするが、じつくりと言い聞かせるように彼は続けた。

「本当に強い人は、自分の強さを疑いませんよ…」

もう既にウトウトと夢への扉を開きかけていたアレンの言葉は、聞き取りにくかったが、才人の耳にはしっかりと届いていた。

届いていて、それからどうするかは彼の考えと思ひ次第である。

もうすぐ、夜が明ける。遠くの方へと段々と星は沈み始めていた。

51・Gone with the Wind

翌朝。

始祖ブリミルの像が置かれた礼拝堂で、ウエールズ達は新郎と新婦の登場を待っていた。

周りには、参列者としてアレンと才人が椅子に座っている。周囲も鎧で身を固めた戦場へと赴く戦士達で溢れている。アルビオンへ訪れた最後の客の結婚式ということで、盛大に集まっているのだ。

最後に残された、『マリー・ガラント』号の船長も特別に参列を許されている。あまりの場違い感に、卒倒しそうな程、うろたえていた。

「…はあ」

「そんな不景気な顔してはダメですよ」

人で満ちているのに、礼拝堂は妙な静けさを保っていた。

その中で、才人はというと、ずっとシユンとしてうなだれている。よほどの結婚話がシヨックだったらしい。

卓の前に佇むウエールズは、礼装に身を包んでいる。式を終わらせると、すぐに戦の準備に駆けつけるつもりみたいだ。

「ラ・ヴァリエールの使い魔君」

「なんですか…」

そんな風に、落ち込んでいる才人を見たウエールズが、気さくに話しかけてきた。

だが、才人は気だるく返事を返す。

「アンリエッタに言伝を頼みたいのだが…」

ウェールズが一呼吸置き、言伝を言おうとした時、扉が開いてワルドが現れた。

才人が顔を上げて彼のほうを見る。彼はアルビオン王家から借りた黒のマントを羽織っている。普段着として使っているものより、数段上等な生地で作られた代物だ。

「で？言伝とやらは？」

「いや、後にしよう」

「そうですか」

ウェールズの言葉に二人は席につく。

カツカツと拍車の音を鳴らしながら、ワルドは式場の前方へと歩いていった。途中、二人を見つけて、笑っていたのが才人は悔しかった。

一方、ここは式場の控え室。

控え室といっても、布や衝立で区切られただけの簡素なつくりだ。

「着替えが終わったのであります」

朝早くにワルドは起こされたルイズは、いきなり『今から僕らの結婚式を開こう』と言われ、ここでヴィルヘルミナによって純白のウェディングドレスへ着替えていた。新婦しか身につけることを許されないと綺麗な純白のドレスである。

アルビオン王家から借りたという魔法の掛けられた永久に枯れる

ことの無い花の王冠が、桃色の髪の上に載せられた。

「……」

あれよあれよと言う間に進んでしまった準備の間、彼女は一言も発さないままだった。

気分が優れないわけでもなく、緊張しているワケでもない。だけでも、何故だか心に引っ掛かっていた。

「どうかされました？」

無表情だが、その視線には心配している気持ちが込められていた。そのじつと見つめるメイドから視線を、思わず外してしまう。

「な、何でもないわ」

「なら、大丈夫なのであります」

そういうと頭に被った純白のベールを降ろし、彼女を式場へと案内し始めた。

「おお……」

式場へと入ったルイズは、温かい拍手で迎え入れられた。

ルイズは呆気に取られた様子で、キョロキョロと周りを見回しながら、最後にアレンと才人の方を見た。少しだけ席に余裕を持って座っている。

才人は目を逸らして顔を伏せ、アレンは相変わらずの場違いにも、もしかしたらとパンを齧っていた。傍らには既に食べ終えたらしい皿が幾つか重ねられていた。

「これは……」

「何か言ったかい？ルイズ？」

ルイズは、とりあえず深呼吸して状況の整理をした。

(どうして…)

気づいたら、今、彼女は始祖ブリミルの像の前に立っている正装したウェールズの前で、ワルドの横に立っていた。ワルドは、そんな彼女の反応を肯定と受け取っていた。

「それでは、式を始める」

ウェールズの声がルイズの耳にも届く。

だが、どこか霧が掛かった、遠く方で鳴り響くような鐘の音のような声だった。

急な展開についていけないルイズは、またもや大きく深呼吸する。今が、結婚式が始まってしまったのだということに、ようやく気づいていた。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド」

そこで一度、大きく咳払いをする。

次の詔の一文を、一気に言う為だ。

「汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして

妻とすることを誓いますか」

ワルドは重々しく頷いて、杖を握った左手を胸の前に置いた。この時点でアレンは、段々と興味がなくなってきた。眠くなってきた。他人の結婚式など大抵、そういうものである。

「誓います」

ウェールズはニッコリと笑って頷き、今度はルイズへと視線を移した。

粛々と式は進んでいく。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

朗々と響く王子の声は、やはり霧の向こうだ。

相手は、小さい頃から憧れていた頼もしいワルド。二人の父が食事の合間に交わした、結婚の約束。幼い心の中で、私がぼんやりと想像していた未来。

それが今、現実のものになるうとしている。だが、気持ちは深海の深さのように沈んでいた。

「新婦？」

ウェールズが怪訝な表情でルイズを見つめる。

ルイズは慌てて顔を上げた。

「ヴァリエール殿、緊張しているのかい？」

じっと見ている彼の顔は、どこか不思議そうで、そして、哀しそ

うに見えた。

「仕方がない。初めてのときは、ことがなんであれ、緊張するものだからね」

慌てて顔を上げたルイズに、ウェールズがそう言つと、にっこりと笑つた。

そして続ける。

「まあ、これは儀礼に過ぎぬが、儀礼にはそれなりの意味がある」

そこで再び、大きく咳払いをして、詔を続けた。

「では繰り返そう。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして夫と……………」

ウェールズの落ち葉かせようと言つた言葉が胸に響いた。

ルイズはそこで気づいた。十年の時を経てみると、ルイズはワルドに対して抱いていたのは好意ではなく、憧れという感情だったのだ。

自分に無いものを持っているワルドに憧れたのだ。心の底から。

(それに…)

何故か、才人の顔が頭をよぎつた。

ルイズは才人に視線を向ける。才人はルイズを見つめていたため、ルイズと才人の目が合った。

二人はお互いに見つめ合う。才人はすぐに俯いた。

そこでルイズは悲しみに耐えきれず、昨晚、廊下で出会つた才人の胸に飛び込んだ理由に気づいた。でも、それは本当の気持ちかど

うかはルイズにはわからない。

(でも…)

確かめる価値は、十分にある。

なぜなら自分から異性の胸に飛び込むなんて、どんなに感情を高ぶらせたって、ついぞなかったことなのだから。

誰もこの答えを、教えてはくれない。誰にも頼らずに自分で決めねばならぬのだ。

ルイズは最後にアレンと才人を見つめて、残してきた皆の顔を思い出し、深く深呼吸し、決心する。

「新婦？」

「ルイズ？」

二人が怪訝な顔で、ルイズの顔を覗き込む。

ルイズはワルドに向き直り、悲しい表情を浮かべて、首を横に振った。

ワルドがその様子に尋ねる。

「どうしたね、ルイズ。気分でも優れないのかい？」

「違うの。ごめんなさい……」

「日が悪いなら、改めて……」

慌てたワルドに、必死にルイズは謝った。

「そうじゃない、そうじゃないの。ごめんなさい、ワルド」

「どうして、謝るんだい？」

「わたし、あなたとは結婚できないの」

小さい声。

だが、式場の全員を凍りつかせるには十分だった。

「だから、ごめんなさい」

「……………え？」

いきなりの展開に、ワルドは呆然と立ち尽くした。
ウェールズは戸惑いながらも、ルイズに話しかけた。

「新婦は、この結婚を望まぬのか？」

「はい、そのとおりでございます」

どこまでも自信と希望に満ちた声で、ルイズは言い切った。

「お二方には、大変失礼をいたすことになりましたが、わたくしはこの結婚を望みません」

ワルドは表情を歪ませてただただ黙る。

才人は異様な展開についていけない。

ウェールズは困ったような表情で、首をかしげ、残念そうにワルドに告げた。

「子爵、誠にお気の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続けるわけにはいかぬ」

しかし、ワルドはそんなウェールズ言葉を無視して、ルイズの手を取った。

「……………緊張してるんだろ？ルイズ。きみが、僕との結婚を拒むわけがない」

「ごめんなさい。ワルド。わたしが、あなたに抱いていたのは恋ではなくて、憧れだったのよ」

ルイズがそう言うと、ワルドは、ルイズの肩をガシツとつかんだ。表情が、いつもの優しいものではなく、どこか冷たい感じに変わる。

そして、熱っぽい口調で、彼は叫んだ。その変りように会場中に動揺が走る。

「世界だ！世界だルイズ！僕は世界を手に入れる！そのためにはきみが必要なんだ！」

豹変したワルドに怯えながらも、ルイズは首を横に振った。

「……………わたし、世界なんかいらぬもの……………」

ワルドは両手をめいっばい広げると、ルイズに詰め寄った。

「僕にはきみが必要なんだ！ きみの能力が！ きみの力が！」

そのワルドのただならぬ剣幕に、ルイズは本心で恐れをなした。優しかったワルドがこんな顔をして、叫ぶように話すなんて、夢にも思わなかった。

「おいおい…、なにごとだ？」

「ど、どうしたんだ？」

才人も、ワルドの豹変振りに思わず立ち上がる。

その剣幕に虞をなし、後ずさるルイズに、ワルドは血走った目をして叫ぶ。

「ルイズ、いつか言ったことを忘れたか！」

まるで政治家の宣伝のように、教会中に響く大きな声でワルドは言い続けた。

危機を感じた衛兵の一人が銃を取り、中に弾を込めた。いつでも撃てる準備は整った。

「きみは始祖ブリミルに劣らぬ、優秀なメイジに成長するだろう！ きみは自分で気づいていないだけだ！ その才能に！」

「ワルド、あなた……………」

ルイズの声が恐怖で震える。

彼女の知っているワルドではない。今まで見てきた優しい年上の男性ではない。

何が彼を、こんな物言いをする人物に変えたのだろう。

ルイズに対するワルドの剣幕に見かねたウェールズが、間に入つてとりなそうとした。

「子爵、きみはフラれたのだ。いさぎよく……………」

ウェールズは肩に手を置いたが、ワルドはその手をはねのける。

「君は黙っておれ！」

ウェールズはワルドの言葉に驚き、立ち尽くした。

離れてみていた才人も、ワルドの怒声に驚き、立ち尽くす。アレンはジリジリと迫ってきた「その時」に、肌を振るわせた。

ワルドはルイズの手を握る。

ルイズはまるでヘビに絡みつかれたように感じた。

「ルイズ！きみの才能が僕には必要なんだ！ わかってくれ！」

「わたしは、そんな、才能のあるメイジじゃないわ」

「だから何度も言っているだろう！」

話すたびに、その声も勢いも強くなる。

だが、段々と声がひび割れたような感じになってきた。

「自分で気づいていないだけなんだよルイズ！」

ルイズはワルドの手を振りほどこうとするが、物凄い力で握られているために、振りほどくことができない。

苦痛に顔をゆがめながらも彼女は、はっきりと良く通る声で言った。

「そんな結婚、死んでもいやよ！あなた、わたしをちっとも愛していないじゃない！」

ぐいぐいと締め付けるワルドの手を振り解くように、ルイズは手を必死に動かした。

「あなたが愛しているのは、あなたがわたしにあるという、在りもしない魔法の才能だけ！」

暴れるほどに拘束は強くなるが、それでもワルドは離そうとしない。
い。

見かねた衛兵がまた一人と武器を持って、二人へとにじり寄る。

「ひどいわ！そんな理由で結婚しようだなんて。こんな侮辱はない

わ！」

ルイズはワルドから離れようと、暴れた。

「おい、君！離れんか！」

「おい！その手を離せ！」

ウエールズと才人が、二人がかりでワルドの肩に手を置いて、引き離そうとした。

しかし、ワルドはそんな二人を無言で突き飛ばした。

「うおっ！」

才人は突き飛ばされた衝撃で、床に大きく転がる。

才人と同じく、突き飛ばされたウエールズは床に転がることはなかったが、大きくよろめいた。

その屈辱的な行いに、ウエールズの顔に、赤みが走る。そして、体勢を整えると、杖を抜いた。

「うぬ、なんたる無礼！なんたる侮辱！今すぐにラ・ヴァリエール嬢から手を離したまえ！」

言いながらも、周囲の兵隊達を整えていく。

杖を構えるもの、槍を構えるもの、式場に集った兵士達が段々と輪を狭めていく。

「さもなくば、我が魔法の刃がきみを切り裂くぞ！」

ワルドは、そこでやっとルイズから手を離した。

どこまでも優しい笑みを浮かべる。嘘で塗り固められた笑みを。

「こうまで僕が言ってもダメかい？ルイズ、僕のルイズ」

ワルドのその表情にルイズは怯えを忘れて、怒りで震える。

「いやよ、誰があなたと結婚なんかするもんですか！もう僕のルイズとは呼ばないで！」

ルイズがそう言うと、ワルドは天を仰いだ。

「この旅で、君の気持ちを掴むために、随分と努力したんだが…」

天を仰いだまま、言葉を続ける。

内容は、才人の隣で冷静に事態の行く末を見守っていたアレンの予測どおりだった。

「…あまり意味はなかったようだね」

両手を広げて、ワルドは悲しみを含んだ笑みで首を振った。

「こうなっては仕方がないな…。ならば目的の一つは変更しよう」
「目的？」

ルイズは首をかしげた。

ワルドは唇の端を吊り上げて、禍々しい笑みを浮かべる。

「そうだ」

ニヤリと唇を吊り上げたその顔は、まさに悪人というに無かった。

「この旅における僕の目的は三つあったのだ。その二つが完遂できただけでも、よしとしなければな」

「完遂？二つ？どういうこと？」

ルイズは不安におののきながら、尋ねた。ルイズと才人、二人の心の中で、考えたくない想像が急激に膨れ上がる。

ワルドは、右手を掲げると、人差し指を立ててみせた。

「まず一つは君だ、ルイズ。君を手に入れることだ」

どんな目標があるのかは解らないが、彼に取って余程重要な人物であるらしい。

「まあ、これはどうやっても果たせないようだ」

「当たり前じゃないの！」

次にワルドは、中指を立てる。

「二つ目の目的は、ルイズ。きみのポケットに入っている、アンリエッタの手紙だ」

ルイズは、はっとした。

「ワルド、あなた……………」

「そして三つ目……………」

ワルドの『アンリエッタの手紙』という言葉で、すべてを察した才人。

彼は、ワルドの二つ名の閃光よりも早くデルフリンガーを抜き、

ワルドの首筋に突きつけた。

「サイト!!」

「才人さん!!?」

「使い魔くん!!?」

ワルドの首筋に切先を突き付けていた才人に素直に驚いていた。

「サイト君か…。まさか僕より速いとは…」

彼と同じく、杖を抜いていたワルドがそう呟く。

「ッ!! 杖ッ!？」

その杖に気づいたウェールズは、ルイズと才人を背にワルドから距離をとった。

「アレンに聞かされたときは、驚いたけどよ…、裏切り者だったのか」

才人が怒りを込めて呟く。

それに続いてルイズとウェールズも怒鳴る。

「貴族派!あなた、アルビオンの貴族派だったのね!ワルド!」

「貴様……、反乱軍の一員か!」

周囲に何が起こったかは、さっぱりわからなかった。

だが、十分すぎる位にショッキングな出来事であるのは、間違いない。先程よりも構える武器に込められた力が強くなる。

「そうとも」

ニヤリと最初に会ったときと全く同じように微笑む。だが、今の笑みは全く中身が違っている。何処までも冷たい笑みだ。

「いかにも僕は、アルビオンの貴族派の一員さ」

才人にデルフリンガーを突きつけられているというのに、ワルドは全く動じた素振りも見せない。

それよりか、笑みを浮かべたまま明るい声でそう言ったのだ。

「どうして！ トリステインの貴族であるあなたがどうして!？」

「僕はハルケギニアの将来を憂い、彼らの活動に参加したのさ。我々に国境はないよ」

そう言うと、ワルドの体が一瞬にしてかき消えた。

「なッ!?!？」

まるで忍者のようにドロップと目の前から消えたワルドに才人は驚いた。

「えっ!?! き、消えた!?!」

「え? な、なに!?!」

ルイズと才人が驚く。

「『風』の遍在か?!?!」

風のメイジであるウェールズが、杖を構えてそう言い放つ。
才人たちが辺りを見回すと、柱の陰からワルドがぬっと出てきた。
その手には細剣型の杖が握られている。

「ハルケギニアは我々の手で一つになり、始祖ブリミルの光臨さし
『聖地』を取り戻すのだ」

「昔は、昔はそんな風じゃなかったわ！ワルド！何があなたを変えたの？」

ルイズの質問にも、冷酷な顔のまま、坦々と答える。

消えてしまったために、包囲が完全にムダに終わってしまった。
兵士にはこれは大きな痛手である。

「月日と、数奇な運命のめぐり合わせだよ、ルイズ。それがきみの
知る僕を変えたのだ」

彼のマントが翻るほどに、強い突風が吹き荒れる。

いつでも攻撃できるという意思表示のようだ。才人はルイズの前
に立ち、デルフリンガーを構えた。

「すまないが、今ここで語る気にはならない。話せば長くなるから
な」

そう言うと、ワルドはおどけた調子で杖を構えた。
とても人を裏切ったような雰囲気を出していない。

「しかし、予定が狂ってしまったようだね。まあ、すぐに戻せる
からいいがな」

「ためエ……よくもルイズを騙しやがったなっ！！」

怒りに震えた才人が、柱へと突っ走る。

「待って！無闇に出たら！！」

アレンの制止の声を聞かずに才人は叫んで、剣を腰だめにして突っ込んだ。

ワルドは軽やかに飛んで、その剣をかわす。そして、優雅に床に着地した。

「すまない、サイト君……。目的のためには、手段を選んではおれぬのでね」

「ルイズはためエを信じてたんだぞ！ 婚約者のためえを…、幼い頃の憧れだったためエを…」

そう言ったワルドに才人が剣を乱雑に振る。

「それは彼女の勝手だろう」

ガンダールヴのルーンを借りているのだが、それでもワルドには遊ばれているようにしか見えなかった。ワルドは才人の剣撃を、右へ左へと、飛びながらかわす。

それから器用に杖を振り、呪文を発した。

「相棒っ！！来るぞっ！！」

「ぐおっ！？」

才人は剣で受け止めようとしたが、風の呪文『ウィンド・ブレイク』は、才人を剣ごと吹き飛ばした。壁にぶち当たり、才人はうめきをあげる。

「サイト！」

ルイズが才人に駆け寄る。

火傷が完治しておらず、どうにも動きが鈍い。

「どうした？ガンダールヴのサイト君。ラ・ロシエールで戦った時と違って動きが鈍いな」

からかう様な口調でワルドは言った。

火傷を押して戦っている事を承知の上で、挑発してきているのだ。

「せいぜい、僕を楽しませてくれないと困っちゃうな」

陽気な笑みを浮かべて、ワルドが囁く。

「それと…、君達に言っておくよ」

そんなとき、アレンとウェールズがワルドの前に立った。

才人も、痛む左手を押さえて、遅れて立つ。

「サイト！無茶よ！そんな傷で……………」

ルイズが悲鳴に近い声をあげて才人に叫ぶ。

「大丈夫だ…、こんな傷！」

叫ぶ才人と真っ直ぐに睨みつけてくるアレンとウェールズ。

それらを見ても、ワルドは余裕な態度で言った。

「憧れというのは、理解から最も程遠い感情だよ」

そのワルドの小ばかにしたような台詞が、才人の怒りを更に増やした。

「余り遊んではいられないな。何故、風の魔法が最強と呼ばれるのか、その所以を教えてあげよう」

そんなことを言うワルドに、アレンと才人は飛びかかったが、ワルドは呪文を既に完成させていた。

ワルドが杖を振る。すると突然、ワルドの体はいきなり分身した。その数は本体を含めると10人。それぞれのワルドは、アレンと才人を取り囲んだ。

「分身かよ！」

「ただの『分身』ではないぞ、サイト君」

ずらりと並んだ10人のワルドが、一斉に口を開く。

「風の偏在だ。ユビキタス風の吹くところ、彷徨い現れ、その距離は意思の力に比例する」

「言っつけ」

呟く才人をよそに、ワルドたちは快活に笑った。

10人もいるから余裕綽々といった様子だ。しかし、ワルドの遍在の一体が爆発と共に消えた。

「何！」

ワルドは呆気にとられた表情をして振り向いた。そこには杖を構えたルイズが立っていた。

突然のことに、見ていたアレンや才人たちも驚く。

「ルイズ！！何やってんだよ！！」

「私だって、戦えるわ！ 戦えるんだから！」

そんな二人を見てワルドはくっくくくと笑いながら叫ぶ。

「その力だ！その力こそ虚無の系統の証なんだよ！頼むからきてくれないかね？」

「嫌よ！、私は行かないわ！！」

「『虚無』……？」

ルイズは再び拒絶の言葉を口にした。

その拒絶の言葉にワルドは、一瞬だけ悲しそうな表情を見せると、ルイズに言い放った。

「……じゃあ、すまないが散ってくれ」

その声と共にワルドはルイズに向けて走り出した。

そして杖が青白く光り始める。細剣の杖はその青白い光によって、太く、長く伸びていく。

「危ねエツ！！！ ルイズっ！！ 避ける！！」

「まずい、逃げたまえ！」

才人が叫ぶ。

アレンや、ウェールズも駆け出すが、行く手をワルドの分身に遮られる。

「すまないね、3人も。連行できない場合は殺してよしと言われ

「ているんだ」

分身の言葉に、才人と王子は動けなくなってしまった。
迫り来る兇刃に、ルイズは体が硬直したかのように動けなかった。
そして、迫りくる恐怖から目をつむった。

「…?」

だが、いつまで経っても痛みも無い。刺された感触も無い。
痛みがこなかったことに不思議に思いながらも、恐る恐る目を見
開くと、そこには、

「な、何よこれ…」

自分の服を包むように桜色の帯が何重にも広がっていた。

「く、何だ、これは!」

その帯がワルドの刺突を止め、ルイズを守ったのだった。

「やれやれ、一応、保険として用意して正解だったのでありますな」
「解答明白」

ボタンと大きな式場の戸を勢いよく開け放ち、コツコツとメトロ
ノームのように正確なリズムの足音を立てながら、一人のメイドが
入ってきた。

遅れて、彼女の放った平坦な声が、式場の皆に伝わる。

「さて、私の事は誰にも言っていなかったので、改めて名乗るのであ
ります」

「静粛」

彼女、ヴィルヘルミナ・カルメルの声に紛れて、短く一単語で会話している女性の声も聞こえた。

式場に集った皆が、圧倒的な彼女の存在感に負けて、その声を聞いている。

「私は『夢幻の冠帯』ティアマトーのフレイムヘイズ、『万条の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメルであります」

式場の人間は誰一人として、彼女の言う口上を理解できてはいないだろう。

その中で、アレンだけがにこやかに微笑みかけた。

「ありがとうございます。お陰で助かりました」

「礼は良いのであります。それよりも…」

「ええ、一緒に来てもらえば、ちゃんとシヤナさんには逢えますから」

そう言ってる二人の傍で、ルイズを包んでいた桜色の帯がワルドを拘束するようにうごめいた。

彼が口を開く間もなく、手足を縛られ、床に転がされる。

「無事に終わったのでありますな」

「ああ、助かったよ。ヴィルヘルミナ」

王子とメイドはカツチリと固い握手を交した。それからテキパキと王子は部下に指示を出す。

「さて、子爵。何事か弁明があれば聞くが、そういう訳にも行かな

いのでな」

兵士達が拘束されたままのワルドを抱えて、外へと出て行く。偏在が段々と詠唱者を失った為に、薄くなり始めていた。抱えた兵士の一人が近寄って、報告を始める。

「では、このまま連れて行きます」

「ああ、たの…」

敬礼した兵士が、突然槍を持って王子の胸を貫いた。

「え…」

唐突な展開に見ていた4人は、理解が追いつかなかった。

「まったく、このような切り札があるとは…、僕も予想外だったよ」

ニヤリと笑って、突き刺した兵士が兜を脱ぐ。

その下には、さつき捕らえたはずのワルドの顔が居た。

「さっきのは偏在ですか…、僕らは担がれたってワケですね」

「その言葉、そっくりお返しするよ。アレン・ウォーカー君」

目の前で吹き上がる鮮血を、まともに浴びたルイズは、糸が切れる様に、ぱたつと膝を折り曲げて倒れた。

王子が刺されてしまったことで、瞬く間に部屋の中に集った兵士達は逃げ出し始めた。

勇猛果敢に準備していた武器も鎧も何もかも捨てて、兎に角、一目散に逃げ始めた。

「気絶してくれた方が、ありがたいかな。喚かれずに済むし」

その瞬間、才人の怒りは爆発した。

才人は、さつきよりも格段違うスピードでワルドに駆け出した。

「てめエ……よくも王子様を！」

才人は剣を横殴りに払った。

ワルドは、ふん、と吐き捨てると、才人の剣を飛び退り、かわす。

「後ろが」

ワルドには、ヴィルヘルミナの参戦は予定外の出来事だった。

だが、それでもニヤリと余裕の笑みを絶やさない。

「がら空きであります！」

ヴィルヘルミナの纏ったりボンが、ハンマーのようになって落ちてくる。

振り下ろした衝撃は、ワルドを巻き込んで、凄まじい音を立てる。その衝撃に床がめり込んだ。

だが、土煙が晴れたそこには誰も居ない。どうやら遍在だったようだ。

「くそ！」

「私の準備不足であります。王子を、あのような手段で狙ってくるとは予定外でありました」

だが才人は、そんなの気にしないとばかりにワルドたちに視線を移した。

隙の生まれた瞬間に、ヴィルヘルミナは、王子に駆け寄って、傷の具合を見始めた。深い傷ではあるが、即死ではないようだ。その目は、怒りを含んでいる。そして才人は、弾丸のように駆け出した。

「遮二無二、突っ込んででも避けられるだけだぞ」

ワルドの遍在たちは、それぞれに杖を構えて、才人の剣戟を防いでいく。

しかしながら、才人の動きは次第に速さを増していく。アレンは銃を構えたまま、じっとワルドから視線を外さない。

「どういうことだ……」

ワルドたちの息が荒くなる。

「どういうことだ……、コレは……」

手合わせの時とは違いワルドは本気で戦っている。それなのに次第に圧されてきている。

ワルドは才人の何度目かの剣戟を杖ではじくと、後方に飛び退さった。

そして、息を整えながら、ワルドは才人に問う。

「なぜだね？」

「ああ？」

怒りを込めた目で、才人はワルドをにらみつけた。

じっとそれをヴィルヘルミナとアレンは、冷静な目で見ている。

二人は気を失ったルイズとウェールズの為に参戦できないのであ

た。

「なぜ、君は…、君を蔑むルイズのため、どうして命を捨てる？平民の思考は理解できぬぞっ！」

その問いに才人は両手で剣を構えて怒鳴った。

「じゃあなんでてめえはルイズを殺そうとした！ 婚約者だろうがよ！」

「ほほう、やはりサイト君。君はルイズに恋していたのか？」

ニヤリと、先程とは違う、からかうような笑顔だ。その顔が、無性に腹立たしい。

「適わぬ恋を主人に抱いたのかな？滑稽までとは言わないが、あの高慢なルイ…」

「恋なんかしてねえよ！」

才人は唇を噛み締めて、ワルドの言葉を遮った。何度か味わった、血の味が口の中へ広がる。

「ただ………」

「ただ、なんだね？」

「ドキドキすんだよ！」

ワルドは才人の答に、戸惑った表情を浮かべた。

二人はさつきまでとは違った気の抜けた表情で、じつと才人を横目で見つめる。

「ああ！顔見ると、ドキドキすんだよね！！！」

今度は正眼に構える。

絶対に逃さないという、才人の意思表示だ。

「理由なんかどうだっていい！だからルイズは俺が守る！」

才人は絶叫した。傍で見ていた二人は、珍しく笑っている。その時だった。

「な、何だこれは…？」

突如として現れた光。その光の出所へ一斉に視線が集まる。呆然と立っていたのは才人だったが、その才人の左手のルーンが大きく光り輝いていたのだ。

その輝きを受け、デルフリンガーも光りを受けて、叫んだ。

「思い出したぜ！ 相棒！ 懐かしいねえ、泣けるねえ！！！」

キンキンと相変わらず唾を鳴らしながら、デルフリンガーが喚く。

「まさか、なんか懐かしい気がしてたが、そのルーンはやっぱり。

相棒、あの『ガンダールヴ』か！」

「うるせえ！今は黙ってる！」

才人はデルフに怒鳴ったが、そんなこと気にせずにデルフは続ける。

「嬉しいねえ！そうこなくっちゃいけねえや！相棒が今、まさに感情を震わせてるってのに、俺がこんな格好してる場合じゃねえな！」

そう叫ぶなり、デルフリンガーの刀身は光り出した。
才人は一瞬、呆気を取られてデルフを見つめた。3人も遠くから
見つめる。

「デルフ？ ……はい？」

もちろん、呆然と立ちすくんでいる隙をワルドが見逃す筈もなかつた。

再び、ワルドは才人に向けて『ウィンド・ブレイク』を唱える。

周りの木材や砕けた床の破片を巻き込んで、濛々と猛る風が、才人めがけて吹きすさぶ。

咄嗟に才人は、光り出したデルフを構えた。

「無駄だぞ、サイト君！ 剣では避けきれないと…さっきで証明しただろうにっ！！」

ワルドが叫んだ。

しかし、才人を吹き飛ばすかのように思えた風が、デルフリンガーの刀身に吸い込まれる。

そして、

「これが本当の俺の姿さ、相棒！」

デルフリンガーは今まさに研がれたかのように、光り輝いていた。遠巻きで見っていたアレンとヴィルヘルミナ、杖を構えたワルドも驚きで目を見開いている。

「デルフ、お前…」

「いやあ、てんで忘れてた！ そういやあ、飽き飽きしてたときに、テメーの体をサビサビに変えたんだっ！ なにせ、面白いことはあ

りやあしねえし、つまらん連中ばかりだったからな！」
「早く言ってくれよ！」

才人が怒鳴るが、尚も呑気にデルフは言い続ける。

「しかたねエだろ。忘れてたんだから。でも、安心しな相棒。しょぼい魔法は全部、俺が吸い込んでやるよ！この『ガンダールヴ』の左腕、デルフリンガーさまがな！」

興味深そうに、ワルドは才人の握った剣を見つめた。

「なるほど……。やはりただの剣ではなかったようだね。この私の『ライトニング・クラウド』を軽減させたときに、気づくべきだった……」

そう言うとワルドは、すっと懐から真っ白の仮面を取り出し、顔につけた。

才人の体が震えた。怒りだけでひたすら震える。

「その仮面……」

フーケの隣に立っていた男、船の甲板で才人に電撃を食らわせた仮面の男は、他ならぬワルドだったのだ。

「じゃあ、あのフーケを脱獄させたのも、てめエだったってことかよ。じゃあ、さっきの分身の術は、そういうことだったんだな。おまけにどこにでも現れるってか」

ギリツと奥歯を噛み締める才人に、ワルドは嬉しそうな声で話した。

「いかにも。しかもだ！ 一つ一つが自分と同じ意思と力を持っている。言ったろう？ 『風』は遍在するとね！」

そう言い、ワルドは呪文を唱えた。再び、ワルドは五人に分身した。

後に付け足すように、そう呟いたワルドは才人へと一斉に躍り出した。

「『エア・カッター』！！」

三人のワルドから放たれた風の刃は、才人を切り刻もうと風と共に突き進む。

しかしながら、ワルドの放った魔法は、才人にとって遅く動いていた。スローモーションのように。

ヒュンヒュンッ！！と風を斬る音が鳴る中、才人は自分目掛けて迫りくる風の刃を洗練された動きでかわしていく。

（避けられる！）

シヤナと一護、そして夏梨の神速で振るわれる剣先をこの間、幾度となく見てきたのだ。

風の動きなど、今の才人にして見れば避けることなど容易い。

「冗談だろ？ 僕の魔法が……」

あまりにも目で追えない速さで己の放った魔法を避けていく才人に、ワルドの目が大きく見開かれる。そして、才人は物凄いスピードで、呆気にとられる遍在の内、二人を斬り裂いた。

「くっ！！」

ワルドは呻めく。まさか、遍在を瞬時に二人も斬られるとは思わなかったのだ。

才人を見ると、左手のルーンは今までにない以上に光り輝いていた。

「いいぞ！いいぞ相棒！そう！その調子だ！思い出したぜ！俺の知ってる『ガンダールヴ』もそうやって力を溜めてた！」

間髪入れずに才人は、呆気にとられるワルドに飛びかかる。

目で追えない剣筋に、ワルドは表情を歪めて細剣で受けていく。

「はああ！」

だが、才人の剣が残った遍在のワルドの内の一人を、袈裟に両断する。

真つ二つに切り裂かれた分身は、吹き抜けた風と共に消え去った。

「さすがはガンダールヴと言った所か……。伝説を侮っていたよ」

残ったワルドの二人が、驚愕の表情をしてそう呟いた。

「ガンダールヴの強さは心の震えで決まる。怒り！悲しみ！愛！喜び！なんだっていい！とにかく心を震わせてな、相棒！」

残ったワルドたちは杖を構えて呪文を詠唱した。

その二人は、剣を構えた才人と打ち合わねばならない接近戦を嫌って、大きく間合いを取っている。斉唱のように重なり合った詠唱が続けられるたびに、周囲の空気が白く光っている。

「同じ手は食わねエ!!」

人を一瞬にして丸コゲにする電撃が杖から放出される。

しかし、それを見切った才人はデルフを床に突き刺した。

真っ直ぐに伸びた電撃は、その剣へと進路を変えて、才人への狙いが逸れる。

「なんとッ!!」

そして、その電撃がデルフに吸い込まれると、才人はそのままデルフを床から抜き、間髪いれずにワルドへと駆ける。驚愕の表情に染めるワルドに、才人は剣を右斜めに振り上げた。

ワルドの遍在は才人の剣筋を読めずに、斜めに斬られ、消滅した。残りは、どうやら本体のワルド一人。

「や、やってくれるね…サイト君…」

「いいか、忘れるな! 戦うのは俺じゃねえ! 俺はただの道具に過ぎねえ!」

最後の留めを刺す。才人は空中高く跳び上がるために、剣を振りかぶった。

足に力が集中して、

「あれ?」

ぼすんとマヌケな音がして一気に力が抜けた。よろけて、膝をついた。

そのままドタンと体が動かなくなる。

「く……………」

「ああ、相棒。無茶をすればそれだけ『ガンダールヴ』として動ける時間は減るぜ」

絶体絶命のピンチにも関わらず、デルフリンガーはのんびりとした口調で言った。

「なにせ、お前さんたちは主人の呪文詠唱を守るためだけに生み出された使い魔だからな」

あと一人だというのに。

ここまで来て、才人の体は限界に達してしまっていた。

「形勢逆転という奴かな……」

ワルドがよろめきながらも立ち上がり、才人を見下ろした。

「まさか…………、この『閃光』がよもや後れを取るとは……………」

才人はワルドに向けて駆け寄ろうとしたが、もう、体が思うように動かない。

アレンが白い銃を引き抜き、足元へ連射するが、抑止力にはならない。完全に八方塞がりだった。

「いいえ、未だです」

そこへすつと黄色い声が掛けられた。

桜色の火の粉を散らした帯が、空間から解けるようにして、赤毛の少年が現れた。

「ネギ…」

身の丈程の杖を構え、真剣な眼差しでワルドを睨んでいる。その幼くも凜々しい顔を見た瞬間に才人は、気を失ってしまった。

「死んだものとはかり、思っていたが…」

ワルドの軽口にも、ネギは全く答えない。じっと見ていただけだ。ネギはヴィルヘルミナの手によって、今の今まで誰にも気づかれないようにされていた。フレイムヘイズの使う、この世に在らざる事象を起こす「自在法」によって、気配を完全に隠蔽されていたのだ。

「二人とも、サイトさん達をお願いします」

そう言うとネギの赤毛がぶわっと逆立った。

何時になく感じたことの無い、プレッシャーにワルドが後退した。

(バカな、このような子供を恐れているだと…)

少しずつ足を引いていたワルドへと、まるで何かの印のように左手を見せ付ける。

そこには才人と全く同じ、ルーンが刻まれていた。

「ああ、そうか…」

奥歯を強くワルドは噛み締める。

「君もガンダールヴなのか！」

51・Gone With the Wind(後書き)

はい、今回はこれでもかって位にネギ君無双です。

「ネギ君、申し訳ないですけど、任せますよ」
「ええ」

気を失ってしまった才人を自分のところへと引き寄せながら、アレンが冷静に頼む。だが、頼まれなくても、この子爵は倒す心算だった。

何時になくネギは、怒っていた。

高々10歳の子供である彼に、男女の色恋の機微など、完全には理解できていない。人間関係の円満な成就など望むべくも無い。だが、目の前の子爵が言った言葉だけはどうしても許せなかった。

「デルフ君、あとで君に聞きたいことがあります」
「な、なんでえ？」

頭は怒りに震えているが、気持ちは冷静だ。
澄み切った早朝の湖面のように、静まり返っている。

「今のは、太陰道ですよね？」
「タイインドウ、って何だよ？」
「いえ、目の前の敵を片付けたら、しっかりと聞きますから」

高い天井にまで満ちるような巨大な威圧感。
目の前にいるのは、年端も行かない少年であると、ワルドは必死に言い聞かせていた。

「君のような少年が、僕に勝つつもりかい？」

冷酷な瞳で見るが、冷静に立った一言。

「ええ」

「ふふ、ならば…」

また一段と冷たい瞳で詠唱が始まる。

詠唱が進むたびに、才人が切ったはずの分身が増えていく。やはり分身だけあって、本体を倒さないと意味が無いようである。

「今度は僕に出せる全力だ」

三度、新しく出来た分身の周りに冷たい空気が集まり、耳障りな音が鳴り始める。

彼の誇る本来なら、命を奪うほどの呪文。

「10の雷に撃たれて死ね！」

エミシタームスタクネット
「解放！固定！」

ネギの右手に白く光り輝く球体が現れた。

だが、既にワルドは詠唱を終え、『ライトニング・クラウド』の準備は整った。才人の腕を焼いた、恐るべき呪文だ。だが、ネギに取ってはどつと言ふ事も無い。

「今更、何をしようとも遅いぞ！」

コンプレクショ-
「掌握！」

ネギの手から放たれるはずだった攻撃力へ転化された魔力が、体内へと取り込まれる。

その瞬間、青白い雷は目標を失って、空を焼いた。10の雷がぶつかり合って、目も眩むような閃光が生まれた。

その閃光に掻き消されるように、ネギの姿はなくなっていた。

「ど、どこへ消えた…？」

ネギの姿を探して、ワルドが辺りを見回すが、どこにもいない。完全に見失ってしまった。

「上です」

凜々しい少年の声が、轟音と共に降り注いだ。

だが、負けじと風の刃を数十、上空に向けて放つ。だが、今の速度で奔るネギを捉えるならば、相当な訓練と才覚が必要だろう。だが、それがあつたとしても、雷の速度、秒速150キロメートルで移動している物体を捕らえる術など、このハルゲギニアには存在していない。

風の刃を容易く避け、今度は地上から這い登る龍のように、

「ぐはあ…！」

白い雷を纏った肘うちが、正確に本体であるワルドの鳩尾を捕らえる。

その自分を撃った雷の正体が、ネギだと気が付いた時には、ワルドは教会の壁に、机も椅子も全てを吹き飛ばして、叩きつけられた。

体には痺れるような感覚が広がっている。自分の呪文であるはずの「ライトニング・クラウド」を受けた時と、同じ感覚だ。

「随分と侮っていたね…」

そういうと、分身たちが細剣を片手に、ネギへと踊りかかってくる

る。

だが、その速度は精々、車と同じくらい。今のネギの目には、止まって見えている。

(右の上段…)

頭を軽く振って分身体の突きを避ける。

体は沸騰しそうなほどに熱いが、頭は冷静なまま、反動を利用して、その分身体へ拳を叩き込む。ぶつかった場所から、放射状に電撃が走り、その分身は消滅する。

「この程度で僕をどうこうする心算だったんですか？」

冷静な目のまま、ワルドをしつかりとネギは見据える。

「随分とクンフーシューシューが足りませんよ」

追撃をやめない分身に向けて、今度は雷速で距離を取る。

できるだけ呪文詠唱の時間を稼ぐ為だ。ネギも此方の魔法使い同様、詠唱中は無防備になる。

「ラス・テル マ・スキル マギステル」

距離を詰める為に、残った分身たちが一斉に走り始める。

魔法使いというのは、総じて接近戦に弱いのが常である。だからこそ、戦いのエリートであるワルドは距離を詰め、一撃で心臓を刺し、押さえる作戦に出た。

だが、ハルゲギニアの戦いのエリートワルドよりも、ネギの方が踏んできた場数の方が多かった。ワルドが知る由も無いことだが、彼は元いた世界では、それなりに名の通った存在なのだ。

英雄と呼ばれた「千の呪文の男」の息子として。

サウザンド・マスター

「影の地 統べる者」
ロコース・ウンブラエ・レーグナンス

あと20歩で、腰だめに構えたワルドの剣がネギに届く。
その距離を詠唱の完成までに詰めてしまえば、結果は変る。

「スカサハの我が手に授けん」
スカータク
イン・マヌム・メアム・デット

先程、ルイズを貫こうとしたワルド得意の「エア・スピア」も詠唱は終わっている。

剣の先に高速の風のうねりが生まれ、万物を貫く大気の槍が出来た。

「三十もの棘持つ愛しき槍を！」
ヤクルム・ダエニオム
クム・スピリス・トリギンタ

突き刺せば終わり。

事実、敵がネギでなければ、ワルドの圧勝で終わっていただろう。だが、今のこの情けない状況は、彼の慢心が生んだ結果だった。平民扱いしていた才人に、体力も魔力も限界近くまで削られた上に心の隅に置いていなかったメイドであるヴィルヘルミナの参戦、そして、ネギの追撃という三連打を受けた彼に残された道は、撤退しかなかった。

それを読み違え、無様にも戦う道を取ってしまった。

「雷の投擲！」
ヤクラティオー・フルゴリス

9本ばかりの風の槍など物ともしない。
30の棘を持った雷の槍が、分身を全て焼き、風へと変えた。

「ば、バカな…」

爆音に耳を塞ぐことも無く、ただ目の前で起きていることが信じられないとばかり、ワルドは頭を左右へ振った。エリートとして鳴らしてきた自分が、敗れることなど微塵も想像したことが無かったのだろう。それも惜敗などという、生易しいものではない。

純然たる、相手に一打も入れられていない、完敗というものだ。

「こ、こんな事が…」

白い雷と化したネギの右手に白く光る剣が生まれる。

見たことの無い呪文、見たことの無い闘技法、ハルゲギニアだけが、自らの扱う魔法だけが、このセカイの理だと信じている貴族たちが見たら、どう思うだろうか。

「エンシス・エクセクセンス
断罪の剣」

液体の物体を魔力で無理矢理に機体へと相轉移させる、対人用としてネギが持つ中では必殺の呪文。

極低温の剣を構えた雷神が、ワルドに迫る。

「こんな事が！」

叫ぶ、ただ只管に。

「あつてたまるかあああ！」

叫ぶ。

自信をなくしたエリートへと、断罪の剣は振り上げられた。

次の瞬間、ワルドは瞬く間に斬られた。一陣の突風が、彼をどこ

までも無慈悲に撫でる。

「くそおおおお！」

視線を上から下ろすワルドには、間近に剣を振り下ろしたネギが居る。

そのまま、斬られたワルドは膝を折り、床に倒れる。肩から先の斬られた左腕が、少し遅れて地面に落ちた。

「進め！憎き王党派を皆殺しにするのだ！」

「おお！」

「アルビオン、万歳！」

ニューカッスルに集った反乱軍の兵士達は、近づく決戦の時に向けて士気を高めていた。

正午まではもうすぐである。

「この一戦にアルビオンの未来が掛かっておるのだ！進め！」

一番高い所で、馬までもが鉄の鎧を付けた重騎士に囲まれ、この攻城戦の総指揮を執っているのが、反乱軍のリーダーであるオリヴァー・クロムウェルである。

元は首都で説法しているだけの、しがない司教だったのだから、いつしか王政への疑問から革命戦争へと身を投じた変り種だ。別に何ら不思議な力は持っていない。

言うならば、類稀なる指導力とリーダーシップという、得てして

時代の狭間に生まれる男である。

「おおお！」

彼の呼びかけに呼応し、兵士達は雄たけびを上げる。

そんな岬の先端へと進む彼らの上を、一匹の黒い鱗の竜が飛んで行った。

その存在には誰も気がつかない。

「行くぞ！未来のアルビオンの為に！」

「アルビオン、万歳！」

気が付かないまま、行軍は始まった。

「よもや、この私が……まで……」

「降参してください」

残った右腕で必死に傷口を塞ごうとするが、腕一本を丸々切られていては、止血も俟らない。すぐに失血から顔が青くなり始めた。

そんなワルドへと、ネギが降伏を薦める。

「ワルド、てめえ……」

「まだ、動いちゃ……」

アレンの気付けで、意識だけは取り戻した才人が動けない体で睨みつける。抱えていた少年の手を振り解いて、射殺すような視線を

向ける。

その視線に臆することなく、ワルドはまた冷酷に笑った。

「てめえは裏切ったんだ。ルイズの憧れを…」

「何度も言わせるな」

叫ぶような調子で、才人の声を遮った。

「憧れなどで、人を理解できると思うな…」

左の肩口からは、じんわりと紅いシミが、彼の誇りでもあった魔法衛士隊の制服へと広がっていく。もう意識を保つことすら、困難な出血量はずだ。ネギが手加減できなかったというのもある。

「結局の所、ルイズも、彼女の父も僕を理解できはしないのだ…」

「どうして、そこまで…」

また違った憧れを抱いていたネギが、気を緩めることなくワルドへと尋ねる。

「人は完全に理解しあうことなどできぬ！だからこそ、王を求め、神を求めろ！」

その目にはしっかりとした意思と狂気が宿っていた。

半死人だと言うのに、ネギは思わずたじろいでしまった。

「何を言って…」

疑問を口にした瞬間、外壁を破って何かが飛び込んできた。

「ゴガアアアア……！！！」

耳を劈くような咆哮と共に、石造りの壁を易々と打ち破って、黒い鱗の龍が飛び込んできた。その衝撃に思わず、身構える。

何度かネギとアレンが見た、タバサのシルフィードとは、その大きさも凶悪さも全く違う。

まさに敵を殺すことだけを求めて進化を繰り返してきた帰結、生物の頂点に相応しい黒い龍だった。

「リュ、龍ですよ！ど、どうしましょう！」

いきなり現れた闖入者にネギが慌て始める。

竜種というのは、人の力では最早どうしようもないほどに強い存在なのだ。確かに、龍の中でもクラスはあるが、鱗の色が濃いほどに強く、そして凶暴で、知能が高い。

「どうしましょうー！」

「どうも、こつもしないでしょう……」

「イルヤンカ……」

「大丈夫かよ！」

目の前の襲ってこない龍に、4人は4様の反応を返す。

その呆然と事態の成り行きを見守る4人と、気絶しかけたワルドへと冷静な声が掛けられた。

「らしくないな、ジャン・ワルド」

声の主は龍の背から飛び降り、ワルドの前に立った。

顔の下半分を覆うような仮面をつけ、体には体長の長い鳥の様な意匠の入った、黒いマントをつけている。更に肩には禍々しいと形

容されるべき、巨大な鎌を担いでいる。

「レオン…、何故、ここに…」

何事が言いかけたワルドを裏拳で殴り、意識を完全に飛ばす。

ワルドは胃の中身を吐き掛け、左肩を覆っていた右手を離してしまった。血とも何とも判別できないような液体が、彼の傍から溢れては弾けた。

「ぐ、き…、さま…」

「はしやぎ過ぎた」

恨み言を言う、ワルドの後頭部へ手刀を振り下ろす。そのまま、彼は意識を闇の底へと沈ませていった。突然、現れた男は、ワルドを気絶させると、そのまま抱えて再び龍の背へと飛び乗った。

身の丈程の処刑鎌デスサイズを抱えても尚、ワルドを軽々と抱えている。

「逃げるんですか？」

挑発気味に、去ろうとしていた男の背中へとアレンが声をかける。勿論、この場で新手のメイジと戦う心算は彼には、ない。

「らしくない挑発だな。そこに寝転がってるバカと違って聡明だと思っていたが…」

挑発を挑発で返される。

「ここで死に掛けのゴミ3匹抱えて立ち回れるほど、貴様らも器用ではあるまい」

「……………」

ここでワルドを迎えに来たということは、間違いなく彼はワルドの仲間である。恐らく乗ってきた龍も彼に手懐けられているに違いない。

仲間であるなら、目的はウェールズとルイズ。そして手紙。消耗しきった才人や死に掛けの王子は真つ先に標的になるだろう。

新手の、レオンと呼ばれたこの男が、如何程の力を持っているのかは未知数だが、庇いながら戦える保障は3人には全く無い。

「目的の一つが果たせただけで、良しとしよう」

酷薄そうな視線を向けて、龍の背へと昇る。

主が乗った事を確認した、黒龍はすぐに巨大な羽根を力強く羽ばたかせ始めた。

「ここには、すぐに反乱軍が押し寄せる。さし当たって、報告だけはしておこう」

遠くから馬の蹄の音、何者かの怒号、砲撃音、それらが絶妙な4重奏を奏で城へと迫ってきていた。

段々と小さくなり始めた龍の背から、城中に響き渡るような声で言った。

「貴方が目を付けた使い手もどきは」

「ま…」

「殺すに足らぬ、ゴミでしたとな」

才人の制止も虚しく、龍は遙か虚空へと消えていった。

「くそ…」

言われたくなかった一言。

ルイズを馬鹿にするような一言。

それを言われた才人は無力感に打ち震えていた。

「嘆く暇はありませんよ、脱出します」

そう言うとアレンのフードからタイムキャンピーが、場違いなほどに嬉しそうに飛び出てきた。彼の周りを旋回しながら飛び回り、すぐに白髪頭の上にチョコンと乗った。

「箱舟」

短く噛み切るように起動コードを唱えると、旋律が遠くからの砲撃音と重なって、心に優しい5重奏になった。元気付けられるように才人が、確りとした足取りで立ち上がる。

「才人さん、立てますか？」

「大丈夫だ」

ガンダールブの力による倦怠というのは一時的なものらしい。

元気良くとは行かないが、それなりに歩けるようになった才人は、気絶していたルイズを抱えて、箱舟の中へと先に入っていった。

「ネギ君、先に行ってください」

「ええ、でも…」

食い下がろうとするネギに、アレンは首を振った。

「箱舟を最後に破壊しないと、いけませんから」

尚も反論しようとしていたネギを、強引に水晶の中に放り込むと、王子へと向き直った。

「さて、王子様……」

「ああ、アレン君か……」

ヴィルヘルミナの献身的な応急処置で、何とか一命は取りとめたらしい。

ムクリと無理して軋むような音を体中から立てながら、王子はゆっくりと立ち上がった。

「ヴィルヘルミナ、ありがとう。もう大丈夫だ……」

そう元気よさそうに言っているが、明らかに空元気なのは、誰の目にも明らかだろう。

巻かれた包帯にはじんわりと血が滲み始めている。完全に傷が塞がっていないことは明白だった。あくまでも応急処置しか出来ない。体力も回復していない中で、彼は強引に気力だけで体を起こしたのだ。

「まだ、動けないのであります！」

「安静必須」

留めようとする二人にして一人を、解くようにウェールズは最後の力を振り絞って歩き始めた。

「行かなければ、死ぬ為じゃなくて……、守る為に……」

「待つのであります！」

「停止」

ヴィルヘルミナと、彼女に異能の力を与えるティアマトーが並んで叫ぶが、王子は聞き入れることなく、歩を進める。塞がりきっていない傷から、ポタポタと床に落ち始めた。

「ヴィルヘルミナ、君に暇を出すよ。僕のバカな夢に付き合ってくれてありがとう」

口元の血を拭って、王子は最後まで微笑んでいた。

「君たちの作法では、別れ際はこう言うんだったね、因果の交差点で」

「また、会いましょう、ウエールズ王子」

それが作法らしい。フレイムヘイズの作法に習って、ヴィルヘルミナはすっと身を引いた。嘗て、彼女が見た戦友との別れ際を、その脳裏に思い出しながら。

二人の遣り取りをアレンは黙って見ていた。哀しそうな瞳でも、怒りの籠った目でもない。どちらでもない優しい目で。

「アンリエッタへの伝言、頼むよ。アレン君」
「必ず」

びしっと今までにした事の無い貴族の礼をアレンはした。見よう見まねだったので、酷く不恰好だったが、それでもまたウエールズは笑った。

「君たちのような素晴らしい友に、もう少し早くめぐり合えて居ればな……」

王子の眩きは轟音に掻き消された。
教会へ目掛けて放たれた大砲の一発が着弾したらしい。ガラガラ
と天井が落ちていく。

「王子！」

「ウエールズさん！」

二人が必死に手を伸ばすが、ウエールズは首を振った。
3人を邪魔するかのようになり、巨大な瓦礫が振ってきた。

「く…！」

誇りに塗れ、それでも尚、救おうと手を伸ばす二人に、

「君達は生きたまえ！」

崩れ落ちた瓦礫の向こう。

王子の姿を確認する術はなくなってしまった。

だが、轟音にも負けない位に大きな、最後に聞こえた声だけは、
しっかりと二人の耳に届いていた。

「そして、愛する事を恐れるな！」

彼の声聞きながら、アレンとヴィルヘルミナは箱舟の中へと足を
踏み入れる。

「人を愛して生きてくれ！」

最後の操作とばかりに、箱舟の出入り口を壊し、白い水晶は雪の

ように散って、消えた。

礼拝堂の大きな扉を破って、王軍を撃破した貴族派の兵士やメイジが飛び込んできたのは、そのすぐ後だった。

52・God of Lightning(後書き)

何となくはじめてみた時、ウェールズ王子がどうしてもメリヒムや、マチルダと似通って見えた記憶が蘇りました。皆、どうにも愛や恋に対して、不器用で自分の立場を考えてしまう余りに、素直になりきれない。強いることしかできない男、何も出来ない男、全て解つて突き通す女。最後の王子の台詞は、そんなものが一杯詰まった彼なりの、また不器用な二人へと繋げる言葉なのかもしれませぬ。

さて、しかし、本当のサヨナラは、姫様とアレンへとと言われるものですので、この章はまだ続きます。

崩れ落ちていくニューカッスルの城から箱舟を通り、ものの3分ほどでトリステイン魔法学院へと戻ってきた才人達は、早速ダライオマ魔法球の中に、叩き込まれた。

この中なら休息の時間も、実時間計算なら短くて済む。

特に、目の前でウェールズが刺される所を見てしまったルイズのシヨックは半端なかつたらしく、今だ目を覚まさない。だが、ここなら安心して眠り続けられる。

ヴィルヘルミナが必死の看護をしているが、彼女が面倒を見れるのは体の傷だけだ。心の傷だけは、本人が頑張る以外にどうしようもない。

アレンは、リナリーと合流するといって、別行動を取っている。

「ルイズ…」

願わくば、みている夢が幸せなものであるようにと祈って、才人は彼女の頭を優しく撫でてやった。

サラサラとピンクブロンドの髪が、指の間をすり抜けて行く。

「オーイ、才人！」

遠くからリンの声が聞こえる。

「はい、今行きます」

目覚める時は傍にいてやろうと、以前大怪我した時の看病のお返しとして、才人はそう思った。

彼が降り立ったのは、レーベンスシュルト城のオプションパーツ

として追加されている浜辺である。降り注ぐ眩しい陽光、照りつける白い砂浜、紛うことなき海辺である。

その白い砂浜へ、

「おい、何でおれっちはこんなことになってんのかねー？」

デルフリンガーが何かの印のように突き刺さっている。

彼は喋りはするが、所詮は剣なので、このように使い手がいないと、うるさいだけの存在になってしまう。そんな彼へと無慈悲な研究者が開始を宣言する。

「いいから、実験ですー！」

可哀想な剣の叫びを無視して、ネギが何事もないかのように言う。横からずいっと、この炎天下の中でも黒いマントを着て、汗一つかいていないタバサが進み出た。隣にいる短パンパーカー姿で、ラフな格好のネギとのギャップが激しい。

「ラーズ…！」

タバサが詠唱を始めると、彼女の周りに氷の矢が出来た。

そのまま解けることなく、デルフリンガーへと向かっていく。

「ちょ、ちよっと、待ってくれよ！」

無視して氷の矢は飛んでいく。

だが、当たる寸前で最初から氷の矢など無かったかのように、氷の矢は全て消えてしまった。それこそ、文字通り影も形も無く消えてしまった。

「…ふー、ビックリしたぜ」

そんな事を言っているデルフリンガーへ、

「僕も行くよ！」

あまり得意ではない火の呪文をギーシュが放つ。煌々と輝く炎の弾が、間髪居れずに飛んできた。

その炎を圧すかのように、ネギの風が飛び、更に一緒にゴーレムが襲い掛かる。かなり大型化した上に、青銅から穂先だけは鉄になったゴーレムと、巨大な火球が、動けない剣へと襲い掛かる。

「だー、だから、ま…」

叫ぶデルフを無視して、やっぱり放った魔法は消えてしまう。ゴーレムは触れた部分から、まるで消しゴムで消されたかのように、すっぱり無くなっていった。

その様子をじりじりと肌を焦がしながら見ていた、才人が聞いてきた。

「今のが、ネギの言ってた『太陰道』って奴か？」

「へー、便利だねー」

「不思議・・・」

シゲシゲと夏梨とシャナが、手に取って見る。

氷に風に炎と立て続けに攻撃を受けた、デルフの刀身には刃こぼれどころか、焦げ目一つ付いていない。頑丈というよりは魔法を無力化したという方が正しいのかもしれない。

この事実から、デルフリンガーの検分は、エドとアルから、ネギへと委譲されていた。

どれだけ魔法染みた事が出来るといっても、錬金術師は、どこまでも科学者である。魔法のような非科学的は彼らは門外漢オカルトなのだ。

「ええ、多分、そうだと思います」

そう言つとネギは太陰道について、ガラガラと黒板を砂浜に持つてきて解説を始めた。

カンカンとチョークで図を描くが、あんまり上手くないので、今ひとつ解り難い。

「太陰道っていうのは、相手の力を吸収する闘技法なんです」

単刀直入に言われても、何のことだがさっぱり解らない。

黒板の前に集つた面々が、頭にハテナを浮かべていると、

「ええつとですね、相手の放つた力をその身に受けて、自分の力とする…」

「あー、カウンターみたいなもんか？」

ポンと手を打ってリンが纏める。

その纏め方にネギ先生は感心した。彼の言葉を借りて、説明を続ける。

「そうです。相手の、この場合は魔力・魔法ですけども、それを吸収する能力が、デルフ君にはあるんですね」

自称、魔剣という話だったが、こんな事実があれば、その自称にも箔が付く。寧ろ、自称ではなくて、本物の魔剣になってしまったのだ。おまけに魔法を吸収できると言う事は、対魔法使い戦では、無敵という事。

才人のテンションは一気に上がった。

「すっげー！デルフ、すげーよ！」

兎に角、凄い凄いと叫び捲くる。

遮るものが何も無い、炎天下の海辺に、彼の声が矢鱈と大きく響く。

「あ、いや、そんな風に褒められると、テレんね」

「照れるなよ」

そんな風にワハハと笑いあう剣と使い手。やっぱり才人は、どこか抜けている。

だが、そんな彼を横目で見ながら、ギーシュが尋ねた。

「しかし、何故、そのようなシステム機構が剣に備わってるんだい？」

「ええ、そこが疑問なんです」

「確かに、不思議だよな。オレッチも最初聞いた時、信じられなかったもんな……」

ここの辺りは深く考えない才人は、一切心配していない。

ギーシュたちが不安げに見るのも無理からぬ事だった。カモミールが、シッポをビンビンに立てて警報を鳴らしている。ふうつと一息ついて、

「元々、これは僕のマスターの師匠を始め、色々な人が考えた方法なんです。でも……」

「でも……、何だい？」

言いにくそうにネギが続ける。

「誰も成功していないんです」
「はい？」

有頂天になっている、一番聞いていなければならぬ当人が聞いていないので、皆、真面目な表情になる。もし何か逢った時には、カバーしなければならぬ。

「誰も成功していないって…」

「そう、あれは本来”あつてはならない”存在なんてすよ…」

ネギの言う事は、限りなく真実に近い。

ネギの師匠は、嘗て、まだ若輩であつた時分に、相手の力を利用して「敵弾吸収」という戦法を閃いた。敵の魔力や力を利用して、自らの能力を底上げする方法である。

だが、実際の所、あるかどうかも解らない相手の力に頼るよりは、自ら鍛錬したほうが早い。

そういつた費用対効果の結果、断念した経緯がある。何よりも術式が複雑で、戦闘の度に用意しなければならぬ、という煩わしさというのも響いた。

「それが何故かある…」

「うーん、謎だらけだ…」

じつと不安げに見ている皆の視線は、気にした風も無く、才人とデルフリンガーは笑いあっていた。

「兎に角、要監視だな。何か危険なおいがプンプンしやがる」

カモの解つたような言葉に、皆が頷いた。

得体の知れない者と言うのは、いくら警戒していても警戒しすぎると言う事はない。

「吸収というからには、何か出す方法があるんじゃない？」

「ちよ、かえ…」

何事か閃いたシャナが、才人の手からかなり強引にもぎ取った。ひったくりより早い速度で、もぎ取られた才人は、シャナに片手で押さえつけられている。武器を持っていないガンダールブは、シヤナにも勝てないほどに非力なのだ。

耳元でうるさい才人を、シャナが思いつ切り襟首を掴んで投げ飛ばす。

「だー！」

そのまま青い海へダイブ。

息を吸い込む間もなく放り込まれ、顔面から水へと飛び込んだので、鼻の頭が擦りむけて紅くなっている。

海から上がった才人が一直線に詰め寄ってくるが、涼しい顔。ビチャビチャに濡れた顔を煩わしそうに、話しながら、

「何すんだよ！」

「あの程度、受身取りなさい」

済ました顔で言うシャナに、才人は何も言い返せない。

「能力がないと何も出来ないなんて、お笑いよ」

「っ…」

痛い所を突かれてしまった。

確かに、一護を始めとして、才人の剣術特訓に付き合ってくれる面々の太刀筋が目で見えるのは、ガンダールブの力があってこそ。離れた瞬間に、もう何をしているのか、全く判断できないのだ。

今は、デルフリンガーをどこに行くにも帯刀しているから良いものの、デルフリンガーはかなり大きめの剣だ。屋内や森林、振り回せない場所は山のようにある。そんな時に、敵に囲まれたら、手放して戦うしかないのだ。いつもは斬月を振るっている一護も、結局は拳闘を研鑽している。

「今度から、体術も鍛錬の項目に入れておくから。みっちり扱いてもらいなさい」

「はい…」

どよんと落ち込む才人。

そんな彼へと、重く遠雷のような声が掛けられる。

「落ち込んでいる暇は無いぞ。聞いていれば、また危険な事をしたそうではないか」

「うぐ…」

アラストールの言う事は尤もだ。

今回のアルビオン行きでは、ニューカッスル城でワールドと2度戦うことになった。

もし、あの時、ネギやヴィルヘルミナ達が居なかったら、今の才人がどうなっていたのかは、想像に固くない。

「いつ、何時でも戦えるように手札を揃えておく。戦いの必須だ」

アラストールの辛辣だが、励ましの籠った言葉に、才人はとりあえず元気付けられた。

「それよりも！」

ぐいぐいと才人を押し退け、シヤナと夏梨が興味深そうに、デルフとネギの顔を交互に見ながら、話し始めた。二人とも始めて見た喋る魔剣に心を奪われていた。

「『吸収』ってことは、『発射』もできるんじゃない？」
「え…、ええ。確かにその通りです」

太陰道は敵弾の吸収が主だ。決して無力化して、霧散させている訳ではない。

そうなると吸収した魔力が、どこへ行くのかという疑問が残る。

「基本的には、溜め込まずに跳ね返したりするものなんですけど…」
才人はデルフリンガーが光り輝いたワルドとの決戦を思い出していた。
だが、溜め込んだ雷や風を吐き出した覚えは無い。

「いや、そんな事は無かったぜ」
「うーん…」

ますます、ネギは悩んでしまった。

吸収魔道陣はペットボトルと一緒だ。ある一定量までしか、蓄えることは出来ない。その先は、溢れ出て、それでも尚注ぐのであれば、容器そのものが壊れかねない。
便利な品には、それなりのリスクと制限というのが、必ず存在しているのだ。

「ま、吸収できるのは解ったんだし、吐き出す方法を考えようぜ」
「そっか…」

才人の期待は、ちょっと外れてしまった。例えば、彼は一護のよ
うに刀の先から、吸い込んだ魔力をドカンと吐き出して、攻撃でき
るのではないかと密かに期待していたのだ。

カモの言葉に、また一同頭を捻り始めた。

ここは時間がゆっくりと流れていく。

トリスティンの王宮は、ブルドンネ街の突き当たりにあった。

王宮の門の前には、当直の魔法衛士隊の隊員たちが、幻獣に跨り
見回りをしている。

戦争が近いという噂が、二、三日前から街に流れ始めていた。

「出入りするものは、こちらで確認を受けよ！」

アルビオンを制圧した貴族派が、トリスティンに侵攻してくると
いう噂である。

よって、王宮を守る衛士隊の空気は、ピリピリしたものになって
いる。

王宮の上空は、幻獣、船を問わず飛行禁止令が出され、門をくぐ
る人物のチェックもより一層厳しくなった。

「通ってよし！」

「へえ、ありがとうございます」

ピリピリしたムードの衛兵に見送られて、城へと入っていくのは、どうにも居心地が悪い。

いつもなら、ただ挨拶をすれば通される商人や仕立て屋、出入りの菓子屋の主人までが門の前で呼び止められ、身体検査を隅々まで受けて、ディテイクトマジックでメイジが化けていないか、『魅了』の魔法等で何者かに操られていないか、など、厳重な検査を受けた。そんなときだったから、王宮の上空に一人の女性が現れたときは、警備の魔法衛士隊の隊員たちは色めき立った。

「杖を捨てる！」

マンティコア隊の隊長のその一声で、隊員たちは、城の中庭に華麗なステップを踏んで、着陸した少女を取り囲んだ。

腰からレイピアのような形状をした杖を引き抜き、一斉に掲げて取り囲む。

だが、相手は一向に杖を捨てる気配がない。その態度に痺れを切らした、ごつい体に、いかめしい髭面の隊長が、侵入者の前に一歩出て、大声で怒鳴った。

「貴様、何者だ！　今現在、王宮の上空は飛行禁止だ！それを知らんのか！？」

隊長がそう言うと、少女は毅然とした声で喋りだした。

「殿下に取り次ぎ願いたいのですけど…」

だが毅然としていたのは、最初だけ。周りの無言の圧力に圧されて、黙ってしまった。

隊長は口髭をひねりながら、少女を見つめた。隊長は掲げた杖を下ろした。

「まあ、仇なすものでは無さそうだ。して、要件を伺おうか？」

「それは言えないかな。密命だし……」

口ごもった少女を、じろりと睨む。

黒いコートで身を包んでいるので、辛うじて色が違つのは、日焼けしていない顔だけ。このような少女は見た事が無かった。

「では、すまないが、殿下に取り次ぐわけにはいかぬ」

きつぱりと隊長は言いきった。

「要件も尋ねずに取り次いだ日にはこちらの首が飛んでしまうからな」

困った表情で隊長は少女に言った。

「参ったな……」

少女、昨晚アルビオンから一足先に手紙と共に撤退していたリナリーは、頬を掻いた。

確実に貴族派が手紙を狙ってくるだろう脱出前に、先に手紙と共に避難していたのだ。あの面々の中では最も足の早いリナリーだからこそ、任せられたネギの作戦だ。

「リナリー、無事でしたか！」

「アレン君、一護さん！」

そんな嫌な空気を払うかのように、突然、困んでいた衛兵達を押し退けて、アレンが中庭に飛び込んできた。リナリーと似たような

黒のコートを付けている。後ろには、斬月をしっかりと背負った一護もいる。

二人とも、姫に会うためにバッチリ正装だ。

「な、何だ、こいつらは…」

隊長は、口を挟んできたアレン達の容姿を見て、苦い顔つきになった。

見たこともない服装だが、鍛えられた体に、一方は腰に剣を差しているから、傭兵に見える。

しかし、どこの国の人間だかはわからぬが、貴族ではないことは確かであった。

「無礼な平民だな」

じろりと入ってきた得体の知れない二人へ、倣岸不遜な態度で話しかける。

だが、銀と茶色の鋭く尖った射殺するような視線に負けてしまう。少し怖くなって、泣きそうになりながらも、声を張って言った。

「…平民風情が貴族に話しかけるといふ法はない。黙っている」

その言い草に、アレンは目を細めた。

「なあ、アレンさん？」

「何です、一護さん？」

この遣り取りも何度目だろうか。

「こいつ、やっちまおっか？」

「そうですね、それがいいですね」

二人から発せられる異様な程に冷たい空気。それに恐怖して、隊長は再び杖を構えなおした。握る手に自然に汗が零れる。

「貴様ら、本当に何者だ？」

こわごわと言った様子で衛兵隊の隊長が、もう一度尋ねる。

「とにかく、殿下に取り次ぐわけにはいかぬ」

一護は自分の行動の結果とは言え、こうなってしまったことにガシガシと乱暴に頭を掻いた。これでは話がややこしくなってしまうだけである。

だがその時。

「アレンさん！」

ビックリしたような、女性の声が掛けられた。

宮殿の入り口から、鮮やかな紫色のマントとローブを羽織った、その声の主が、ひょっこりと顔を出した。中庭の真ん中で魔法衛士隊に囲まれたアレンの姿を見て、慌てて駆け寄ってくる。

「あー、姫様、手間が省けましたよー」

駆け寄るアンリエッタの姿を見て、アレンの顔が、幾分綻んだ。逢えて嬉しいというよりは、面倒な事を回避できて嬉しい、という類の顔だ。

「ああ、無事に帰ってこれて何よりだわ！」

すっとリナリーが無言で背を倒す。
見よう見まねで一護も、それに習った。

「件の手紙は、この通りです」

リナリーはシャツの胸ポケットから、そつと手紙を見せた。
アンリエッタは大きく頷き、二人の手をかたく握り締める。

「ありがとうございます…」

アンリエッタはアレン達を自分の居室に招き入れた。

最後まで斬月を手放そうとしなかった一護は、衛士隊と格闘していたが、結局アレンの取り成しで、帯刀したままの入室を許された。彼女の部屋は、小さいながらも、精巧なレリーフがかたどられた椅子や、高級そうなソファアアがあったりして、やはり一国の姫様の居室であると実感させられる。

「ところで、ルイズは…？」

「あー、彼女なら…」

アンリエッタは、ルイズと一緒に同行させた筈のワルド子爵の姿が無い事に気が付いて、いきなり聞いてきた。その事を話すには、少しばかり彼女に心の準備が必要なはずだ。

もごもごとアレンは口ごもる。

「ワルド子爵も見えませんか？」

事の顛末を最後まで見届けていたアレンは渋い顔をする。

「姿が見えませんが、別行動をとっているのかしら？」

頬を掻きながら、言いにくそうに言葉を発した。

「彼は裏切りましたよ」

「…裏切った？」

「その結果…、とっては何ですか、彼女は今、寝込んでいます」

アンリエッタは、何のことなのか、解らないといった表情をしている。

そんな不安げなアンリエッタの表情を見て、アレンは、訥々とアンリエッタにことの次第を説明した。

「いいですか、姫様」

「は、はい…？」

ガツシリとアンリエッタの肩を掴んで、真剣な顔になる。

普段は道化師じよほであるが、彼もふざけて良い場所くらいは弁えている心算だった。

「少しショックな話かもしれませんが、最後まで聞いてください」

「…はい」

予め前置きした上で、アレンは言い難い話を始めた。かなり彼は荷が重いが、王子達に最後を託された責務として、この大事な責

任は絶対に果たさねばならない。

「アルビオンへと渡航する前に、脱獄してきましたフーケと交戦しました」

「おいおい……」

一護はこの情報を手に入れる前に、タワーリーワースへと出発していた為に知らなかったのだ。

この世界の防犯はどうなっているんだと、独りごちながらも、軍人のように坦々としたアレンの報告を、黙って聞いている。

「アルビオン渡航後、ウェールズ王子と接触、無事に手紙を返還していただきました」

ここまではアレン達の請け負った任務の範囲内である。問題はここから先。少しばかり俯いてから、一拍置いて話し始めた。

「その後、結婚式を挙げるといふ子爵とルイズを最後まで護衛する為に、僕も参列」

聞いているアンリエッタの顔はドンドン沈んでいく。

成り行き上、聞かざるを得なくなった一護の顔も苦くなり始めた。

「その式場において、子爵が王子を攻撃。何とか子爵は撃退いたしました……」

「……ウェールズ王子はどうなったのです？」

先回りして、アンリエッタが質問してくる。

「応急処置を受け一命は取り留めましたが、そのまま戦列に加わり、生死は不明です」

「そうですか……」

何時命を落としても可笑しくない程に危険な旅路。しかし、このように手紙は取り戻してきた。

アルビオン貴族派の野望。ハルケギニアを統一し、エルフから聖地を取り戻すという大それた野望は初手からつまずいたのだ。

「とりあえず、無事トリステインの命綱であるゲルマニアとの同盟は守られましたよ」

だが、アンリエッタの顔は沈んでいる。

確かに、その通りだろう。この話を聞いて、当の本人が沈まないわけが無い。

「あの子爵が裏切りものだったなんて……」

遂には顔を手で覆って、泣き出してしまった。

泣き止ませるような方法のない、3人は困ってしまったので、とりあえず落ち着くのを待つ。

「まさか、魔法衛士隊に裏切り者がいるなんて……」

こんな時ルイズなら、そっとアンリエッタの手を握って慰めるのだろうか、そんな事をする権利はここに集った3人には無い。彼女は今、過去の憧れと決別する為に、必死に頑張っている。

「わたくしが、ウェールズさまのお命を奪ったようなものだわ……」

だが、アンリエッタが決別できる保障はなかった。

心の弱い者は得てして、目の前の虚構すら見抜けなくなるのだ。

「裏切り者を、使者に選ぶなんて、わたくしはなんとということをして…」

ただ彼女は泣き続ける。

きつとこのまま何時までも泣いているのだろう。いずれは泣き止まなくてはならないだろうが、今だけは悲しみに浸るしかないのだろう。

「私が、ウエールズ王子を殺したも同然ではないですか…」

一通り泣いた後、いつものように威厳を取り繕った顔を、3人には見せた。

「なにわともあれ、わたくしの婚姻を妨げようとする暗躍は未然に防がれたのです」

そこには確かに涙の後の残る、哀しいお姫様の姿があった。

リナリーは少し俯いて、彼女の顔を直接見ないようにしながら、話を聞いていた。

「わが国はゲルマニアと無事同盟を結ぶことができるでしょう……」

そして、彼女の心の底から、望もしていない婚姻も現実のものとなる。

彼女は、トリスティンという小国が生き残る為の羊なのかもしれない。それをひっくり返すには、彼女自身が自分で自由を掴むしかない。他人に与えられたのではない、自分の自由を。

「そうすれば、簡単にアルビオンも攻めてくるわけにはいきません。危機は去りました」

アンリエッタは微笑みながら言った。

それに続いて、アレンも微笑んだ。だが、黙って見ていた、一護だけはどこか腑に落ちない顔をしていた。

「さつて、姫様」

「はい？」

キョトンとした顔でアンリエッタは見ている。アレンの黒い笑顔
を。

「話も終わったことですし、約束の品を頂きましょう」

だが、アンリエッタは首を横に振った。

途端にアレンの黒さが、更に深くなる。

「報酬は後日出しますので…、今日はこれでお願ひします」

着ていた服のポケットを弄り、宝石や金貨を取り出し、アレンの手袋をした左手に乗せる。

高貴さと美しさのこもった笑みで言う。

「鬼だな…」

ぼそつと一護が呟いたが、そんな事はアレンは気にしない。

「では、失礼します」

そう言っつて戸を開けて、退出しようとする。
だが、二人が出たところで、アレンが思い出したように立ち止まった。

「ああ、王子様からの最後の伝言です」

「え…？」

沈んでいたアンリエッタの顔が、少しだけ明るくなった。
そんな風に窓から差し込んでくる太陽の加減で見えたのかもしれない。実際は、目元に涙の筋がいくつも残っている。

「『僕は守る為に戦う』って」

その言葉に、彼女は雷に撃たれたようになった。

少しばかり彼女を傷つけないようにと、アレンなりの心遣いを込めた言葉。

「彼の守りたいものが何かは、貴方が一番良く知ってるんじゃないですか？」

「…そうですね」

ボタンと重い音を立てて、戸は閉まった。

今、この部屋にいるのはアンリエッタただ一人である。

「バカな人…」

誰にも聞こえない声で呟いた。

「私はただ愛して欲しかっただけなのに…」

その慟哭も誰も聞こえない。

歩く人物の顔すら判別できる程に、磨き込まれた黒い大理石の床を二人の人物が歩く。

果てが無いと錯覚するほどに、広く取られた漆黒の回廊である。要所に設けられた赤い灯が磨かれた床に反射して、足元に満点の星空が広がっている。

「ワルド、傷の具合はどうだ」

後ろを振り向くこともなく、先を進む仮面の男が唐突に口を開いた。

担ぐ処刑鎌デスサイズへ加える力を緩めることなく、レオンは後ろを歩くワルドへと問いかける。声を掛けられた方は、憎々しげな精一杯の強がりを込めた声で、

「ふん、貴様に助けて貰いたくはなかった…」

「そうか…、それだけ吠えられるならマシだな」

ただ付いていくだけのワルドは左手がない。

ニューカッスルでの戦闘の際、ネギに肩口から思いつきり斬られてしまったためだ。

幸いなことに治療までに要した時間が短かった為に、今ではすっかり傷は塞がっている。だが、無くなった主人を惜しむかのように、芯のない左の袖が歩きたびに揺れる。

彼の傷は、ここに来るまでの間に、レオンによってすっかり塞が

れていた。

「ちっ…」

できるだけ口汚く罵ってやろうと、頭の中で文句を考え始めたワルドの元へ、澄ました女性の声が掛けられた。

「おや、早かったね…」

付けば折れそうな程に細く、それでいてしつかりとした柳腰の女性。紫のドレスに身を包み、指から体から、金細工のアクセサリーで着飾ったその姿は、まさに悪女というに相応しい。

だが、腕の動き、足の運び。何気ない拳措の一挙手一投足までもが、一々絵になるといふ、まさに美女でもあった。

「これはこれは、参謀閣下」

その彼女へ、レオンは付け焼刃丸出しの聞いているほうが恥ずかしいほどに丁寧な口調で話しかけた。

それを聞いているワルドは、気が気でない。この女、物腰は柔らかだが、秘めている魔力は凄まじいの一言に尽きる。もし、レオンとこの男が今ぶつかれば、余波を食らって死んでしまうだろう。

それ程に力の明確にして、純然たる差が存在していた。

「御自ら我々のお出迎えに来ていただけるとは」

女はくすつと少しだけ笑って、丁寧な口調で諭した。

「おやめなさいな、レオン。貴方はそのような口で喋りはしないでしょっ？」

「そつだな、貴様にこのような口調も疲れる」

ワルドの见ている前で、レオンはあからさまに態度を変える。纏う空気は冷たいまま、後ろに居たワルドを伴って歩き出す。

「さて、盟主閣下がお待ちだよ」

「解っている」

ワルドは生まれて以来、感じたことの無かった高揚感に見舞われた。

初めて魔法が使えた時よりも、使い魔であるグリフォンを召喚した時よりも、激しく興奮していた。これから盟主との初めての謁見が始まるのだ。

「お帰り、レオン」

黒く、暗い回廊は何時しか部屋になっていた。

すつと女が引き摺るようなデザインのドレスを丁寧に畳み、膝を付いた。

「そして、初めまして、ワルド子爵」

幾分、高い場所から重い声が轟いた。

その声に合わせた様に、レオンが膝をつき、礼を取った。

「只今、戻りました、閣下」

頭を下げ続けたままのレオンへ向けて、重く、しかし、優しい声で盟主は言葉を掛けた。

礼を続ける彼の頭を上げさせた。

「よい」
「は」

この中は全て、この声の主の支配下にある。

彼が言葉を紡ぐたびに、ワルド達の目線に12の青白い炎が灯った。その灯に、歳も性別も判別できない、11人の顔が照らし出される。

「トリステインの『虚無』の担い手はどうだったのかな、ワルド子爵」

「お、おお…」

感涙に咽ぶほどに、ワルドの精神は高ぶっていた。

「早速だが、聞かせてくれ」

青白く照らされた11人の顔が一斉に笑うのが見えた。

戦える歡喜に満ちた笑み、知的好奇心に満ちた笑み、笑顔にも様々な種類があるのだと言う事を、ワルドはこの時初めて知った。他人の笑顔を見て、初めて知った。

「この我ら十字軍の同胞、^{ペリグリース}円卓の騎士の前で」

54・Active Heart

静まり返った漆黒の中、盟主はワルドの傍へ立った女へと告げる。

「セントヘレナ」

「はい、盟主」

レオンからは参謀閣下と呼ばれたセントヘレナは、ずっとワルドの顔へと手の甲だけを覆う手袋をした右手を翳した。そのまま優しく触れる。女性特有の柔らかな香りと肌が感じられた。

僅かに開いた彼女の指の隙間からは、飛び散る雪のような結晶が、漆黒の中へと舞い散るのがワルドの鷹のような目には見えた。それを皆、一様に紅茶でも楽しむかのような表情で受け止めている。

その雪のような結晶が降り止んだ所で、盟主がポツリと呟いた。

「なるほど」

その声はどこか新しい玩具を買ってもらった子供のような呟きだった。

それでいて、重苦しく、聞いているワルドにはプレッシャーを余す所無く与えてくる。

「レオン、これで君は彼女を殺す価値なしと判断したわけだ」

「はい」

盟主の問いに、レオンが短く答える。

「彼女は未だに自らの価値に気づいていないようでした」

レオンの変らない冷静で、冷酷で、坦々とした声が漆黒に響く。心の弱い者が聞いていたら、確実に折られているだろう。そんな刃物のような冷たさのある声だ。

「障害になるようなら殺せとのことでしたので」

「ふむ…」

盟主と共に聞いていた11人は言葉を発さない。

まるで盟主から指令が下されるのを、今か今かと待っているかのような態度だった。

「ここは少し、お姫様と遊ぼうかな」

暗闇の中でも盟主の座に座る、その圧倒的な存在が笑っているのが、ワルドには解った。

戯れとも言っても、国家ひとつひっくり返る位に衝撃的な遊びに手を出そうとしている。だが、ルイズを殺さないことが、何故、アソリエッタと遊ぶことに繋がるのか。それは理解できなかった。

「別に彼女を消す必要は無いんだ」

「はい」

盟主の言葉に、レオンはまた小さく頷いた。

「さて、ワルド君。君に早速だが、頼みがある」

「な、なんなりと」

幾分、緊張しながらも盟主の訓示と指令を待つ。

「腕は癒えているだろう。レオンと共に貴族派連盟に戻って欲しい」

「はは」

初めての盟主からの指令にワルドは震えていた。要はスパイというわけだ。

これ以上ない任務である。元々、3重スパイとして、貴族派連盟とトリステインの情報を流していたのだから。

一礼をすると、そのまま踵を返して去っていった。その後姿をレオンは見なくてもなく、見ている。

「閣下、何が望みで？」

ワルドがいなくなった事を確認したレオンが、変らない声で続ける。

そんな彼へと盟主は坦々と言葉を紡ぐ。

「何、ウェールズ王子を君の力で蘇らせて欲しいだけさ」

その言葉で全て得心が言ったようにレオンは、再び漆黒の廊下を歩き始めた。

先に出たワルドにも十分追いつけるだろう。黒い鳥の意匠の入ったマントを翻し歩いていく、その姿を見送りながら、盟主は笑い声を上げた。

「面白いじゃないか、死んだはずの恋人が目の前に現れる」

どこまでも続く漆黒の天井を見上げながら、盟主は誰に見せるでもない喜劇の粗筋を語る。

「愛しい男の死を愚弄する者を、果たして姫はどうするのかな」

この作戦が嵌れば面白い。嵌らなくても面白い。

怒りや復讐心に狂って、アルビオンとトリステインが全面戦争になる結末も、姫が自殺する結末も、他の結末でも構わない。どれでも結果的に、盟主にはプラスになるのだから。

「お手並み拝見と行こうじゃないか、ロマリアとガリアの担い手よ」

未だに逢った事も無い、その存在を予期して、盟主は語る。

「貴様らは所詮、余の前では石に過ぎんだと言っことをな…」

かつては 難攻不落の名城 と謳われたニューカッスルの城は、
惨状を喫していた。

生き残ったものに絶望を感じさせ、死者に鞭打つ惨状である。

城壁は度重なる砲撃と魔法攻撃で、瓦礫の山となり、無残に焼け焦げた死体や全身を切り裂かれたような死体も転がっている。

攻城に要した時間はほんのわずかだったが、反乱軍の損害は想像の範囲の遙か上を超えていた。

三百の王軍に対し、反乱軍の損害は二千。怪我人も合わせれば、
四千。

戦死傷者の数だけみれば、どちらが勝ったのかわからないくらいであった。

「ええい、忌々しい…」

「だが、結果はご覧のとおりです」

そう反乱軍の司令官達が呟くのも無理からぬことではある。

敵の攻撃で体が傷つこうが、腕がとぼうが、足がもげようが、王軍の兵士たちはものともせず、反乱勢を一人でも討ち取ろうと戦った。

だが、所詮は多勢に無勢。

難攻不落とも言われた城の中へと侵入されたら、もう堅城は、とてつもなくもろかった。

王軍は、そのほとんどがメイジで護衛の兵士たちを持たなかった。王軍のメイジたちは、群がるアリのような名もなき、反乱軍の兵士たちに一人、また一人と討ち取られ、散っていった。一昼夜にも及ぶ、攻防の末の結末だった。

敵に与えた損害は大きかったが、その代償として、王軍は全滅した。

文字通りの全滅であった。最後の一兵に至るまで、王軍は戦い、倒れた。

崩れ落ちた荒城の上、宣言はなされる。

「これを持って、革命戦争は終結した！」

「おおおおお！！！」

アルビオンの革命戦争の最終決戦、後に ニューカッスルの攻城戦 とも言われる戦いは、百倍以上の敵軍に対して、自軍の十倍にも上がる損害を与えた戦いとして、伝説となったのであった。

戦が終わったその日から早速、照りつける太陽の下、死体と瓦礫が入り混じる中、戦跡の検分が始まった。この戦争で活躍した傭兵や士官への報奨の為だ。

そんな中、珍しい男が戦場の跡を歩いていた。

「さて、我が愛しのの王子様はどこかな」

羽のついた帽子に、アルビオンでは珍しいトリスティンの魔法衛士隊の制服を着ているのは、ワルドであった。

彼の隣には、フードを目深にかぶったフーケこと、マチルダも見える。

彼女は、ラ・ロシエールから船に乗り、アルビオンに渡ってきたのである。

昨晚、アルビオンの首都、ロンディニウムの酒場でワルドと合流して、このニューカッスルの戦場跡へとやってきた。

「そいつは使えるのか？」

二人の前を歩くのは、この照りつける太陽の中でも、マントを崩さないレオンであった。

周りでは、貴族派連盟に所属していた兵士たちが、財宝漁りにいそしんでいる。宝物庫と思いきりでは、金貨探しの一団が歓声をあげていた。

「あら、何ならここで実力を見せようかい？」

「ふん」

挑発に乗ったことで、実力を測られたような気がしたフーケは面白くない。

長槍をかついだ傭兵の一団が、元は綺麗な中庭だった瓦礫の山に転がる死体から装飾品やら武器やら魔法の杖やらを奪い取っては、子供のように大声ではしゃいでいる。

「ちっ」

フーケは、その様子を苦々しげに見つめては舌打ちをならした。

そんなフーケの表情に気づき、ワルドはにこっと笑みを浮かべる。

「どうしたんだい、土くれ」

「ああ？」

二重のイラ突きがフーケを襲っていた。

「君もあの連中のように、宝石を漁らんのか？」

残った右手で周囲で歓喜の声を上げる一団を見回しながら、ワルドが尋ねた。

「貴族から財宝を奪い取るのは、君の仕事じゃなかったのか？」

「は、私とあんな連中を一緒にしないで欲しいわね」

フーケは苦々しい顔で答えた。

心底、馬鹿にされて怒り心頭といった顔だ。

「死体から宝石を剥ぎ取るのは、私の趣味じゃないわ」

「なるほど、盗賊には、盗賊の美学があるということか」

ワルドは笑いながらそんなことを呟いた。

「私はね、大切なお宝を盗まれてあたふたする貴族の顔を見るのが好きなのよ」

結局、フーケは犯罪がしたいという根っからの悪党ではない。

自分の実力を誇示したいがために、大胆不敵な行動を取る。そういった人種なのだ。

「でも、こいつらは……………」

フーケは、チラツと辺りに転がっている王軍のメイジの死体を横目で眺めた。

「もう、慌てることもできないわね」

そう言っつて瓦礫を一つ蹴り飛ばしたフーケを、面白そうな目でレオンは見ている。

冷酷な冬の霊峰のような視線がじつと見ている。

「アルビオンの王どもは貴様の仇だろう？」

その視線とは対極に位置するような声でワルドものんびりと尋ねた。

「君の家名は辱められたのではなかったかな？」

ワルドが無くなった左腕を撫でながら、嘯くように言う。

するとフーケは冷たい、感情を抑えた声で頷いた。出来れば自分の手で復讐を成し遂げたかったのも事実だ。それをされる前に終わってしまったので、整理が付いていないのだ。

「そうね…、そうなんだけどね……………」

それから、ワルドの左腕をチラツと見る。

二の腕の中ほどから綺麗に切断されている。主をなくした制服の袖が、ひらひらと風に揺れていた。

「あんたも随分と苦戦したようね」

ワールドは苦笑いをしながらも、変わらぬ調子で答えた。

「王子さまと腕一本なら、安い取引だったと僕は思うね。だが、やられたよ」

「たいした奴だったようだね…、あの ガンダールヴ」

フーケも嘗て、戦った一団を思い出しながら話していた。

「風のスクウエアのあんたの腕を、ぶった切っちゃうなんてね……」

……

「いやいや、油断しただけさ」

「貴様は、はしゃぎ過ぎる」

何気無しに言った言葉を、レオンに拾われ、ワールドはバツが悪くなった。

向こうは此方をからかう為に、拾ったのではない。純然に冷酷に指摘するただけに拾ってきたのだ。

「だから言ったじゃない。あいつらは私のゴーレムを物ともせずによっつけたんだ」

いとも容易く斬られてしまったので、彼女の言うことには若干の誇張が混じっている。

だが、それを確かめる術は、前に行くこの二人にはない。

「ま、この城にいたんじゃないあ、生き残れはしなかっただろうけどね……」

フーケがそう言うと、ワールドは微妙な表情を浮かべた。

その表情にフーケが首を傾げていると、ワルドはまた陽気な笑みでこう呟いた。

「それはどうだか…」

「は？」

フーケは、ワルドの言葉に思わず間抜けた声を出す。

ワルドの脳裏には、元婚約者のルイズと、その使い魔の赤い髪の少年と才人が出てきている。

あの時ばかりは、自然と胸が震えた。任務だとかそんなのは関係なしに、あの少年と戦っていると楽しくて仕方がなかったのだから。そう、思考に耽っているワルド達に遠くから、元気の良い声が掛けられた。

「子爵、ワルド君！ 件の手紙は見つかったかね？ トリステインの姫君が、ウェールズにしたためたという、ラブレターは見つかったかね？」

「閣下。残念ですか…」

ワルドは首を振って、あらわれた男に応えた。

「何、そうなのか？」

閣下と呼ばれやってきた男は、年はだいたい三十代半ば。丸い球帽をかぶり、緑色のローブとマントを身に着けている。

その姿は一見すると聖職者のような格好に見えた。しかしながら、物腰は軽く、軍人のようであった。そして、彼のすぐ後ろには、4人の巨大な重槍を構えた男達が四方を守るように立っている。

「閣下。手紙は私のミスです。申し訳ありません。なんなりと罰を

お与えください」

「いやいや、構わんよ」

ワルドは、地面に膝をつき、頭を垂れた。

閣下と呼ばれた男は、にかつと人懐こそうな笑みを浮かべ、ワルドに近寄るとその肩を叩いた。

「子爵、きみは目覚ましい働きをしたのだよ」

どこまでもその透き通るような瞳で男は言った。

「きみは敵軍の勇将を一人で討ち取る働きをしたのだよ！そんな失敗、気にならんよ！」

豪快には程遠い、何かを気にしたような声で言う。

「ですが、閣下が欲しがっておられた、アンリエッタの手紙を手に入れる任務に失敗しました……。私は閣下のご期待に添うことができませんでした」

尚も頭を下げるワルドを、閣下と言われた男が慌てて止める。

「いやいや、気にするでない。同盟阻止より、確実にウェールズを仕留めることの方が大事だ」

そこで僧侶が辻説法するように、業とらしい咳払いを一つ挟んだ。

「理想は、一歩ずつ、着実に進むことにより達成されるのだからな」

それから男は、フーケの方を向いた。

「子爵、その二人を紹介してはくれまいか。特に、綺麗な女性をね」

そこで男は照れくさそうに頬を掻きながら続けた。

「未だに僧籍に身を置く私は、女性に声をかけづらいからね」

フーケは、男を見つめた。

ワールドが頭を下げているところを見ると、随分と偉い人なのだろうが、奇妙なオーラを放っていて、説明しづらい男である。

ワールドは立ち上がると、閣下と呼ばれた男にフーケとレオンを紹介した。

「彼女が、かつてトリスティンの貴族たちを震え上がらせた『土くれ』のフーケにございます。閣下」

「おお！君がそうなのか！？」

いきなり飛び上がるほどに嬉しげな顔になる。

「噂はかねがね存じているよ！お会いできて光栄だ、ミス・サウスゴード」

かつて捨てた貴族の名を口にされたフーケは苦々しげな顔で、男と握手しようと手を出した。

「ワールドに、わたしのその名前を教えたのは、あなたなのね？」

「そうとも、私はアルビオン全ての貴族を知っている」

だが、途中で周りを囲む屈強な男達に手を引っ込めさせられた。

この男、身なりは僧侶だが、随分と用心深いようである。

「系図、紋章、土地の所有権…、管区を預かる司教時代にすべて諳んじた」

それから思いついたように、

「おっと！ご挨拶が遅れたね」

男は胸に手を添えて、目をつむる。

「貴族派連盟の総司令官を務めさせていただいておる、オリヴァー・クロムウエルだ」

目を瞑ったまま、何かを諳んじるように言葉を続けた。

予め、喋る言葉を決められているかのような口ぶりである。

「元はこの姿の通り、一介の司教に過ぎぬ」

バサツと着ていた僧服を二人に見せ付けるように払う。

その一つ一つの挙措に付け焼刃の貴族らしさが漂う。それが、元貴族であるフーケには可笑しくてたまらなかった。

「しかしながら、貴族議会の投票により、総司令官に任じられたか
らには、微力を尽くさねばならぬ」

そんな彼へワールドがすつと口を挟んだ。

「閣下はすでに、ただの総司令官ではありません。今ではアルビオンの……」

「皇帝だ、子爵」

クロムウエルは呑気に笑った。

反乱軍の総司令官は、反乱の終わった今となつては、新たなるアルビオン新政府の総統である。だが、この男は皇帝と名乗ることにしたのだ。

「そちらの御仁は何方かな？」

クロムウエルは変らない呑気な声で、経緯を黙ってみていたレオンへと声を掛けた。

こちらにも変らない冷酷な声で、短く名前だけを名乗った。

「レオン・アルタミラ」

「ふむ、聞いた事の無い名だが…」

若干、考え込むような雰囲気を出したが、すっぱりとクロムウエルはレオンを無視した。

無視された方も、それで一々腹を立てたりするほど、了見は狭くない。それが当然であるかのように此方も無視した。

「ああ、先程は失礼したね、何、私は軍人ではないので…」

そう言つと、周りの四人を紹介しながら、クロムウエルは続けた。

「このように守ってもらっているのだよ、フーケ殿」

話題を変えるようにクロムウエルは言葉を続けた。

一介の聖職者であった名残など、この男には微塵も無い。猛禽類のような理想的な政治家へ転身していた。

「確かにトリステインとゲルマニアの同盟阻止は、私の願うところだ」

口の端をニヤリと小さく吊り上げる所を、フーケは見逃さなかった。

「しかし、それよりももっと大事なことがある。なんだかわかるかね、子爵？」

「閣下の深いお考えが、私にはわかるはずもないでしょう」

問いかけられたワルドは、謙遜するように答えをはぐらかした。クロムウエルはそれから咳を一つすると、目を大きく見開いて、両手を振り上げ、大げさな身振りで演説を開始した。

「『結束』だ！鉄の『結束』だ！」

瓦礫の大地に響くような大きな声で、続ける。

「ハルケギニアは我々、選ばれた貴族たちによって結束し、『聖地』をあの忌まわしきエルフどもから取り返す！それが始祖ブリミルにより私に与えられし使命なのだ！」

その音吐朗々と響くクロムウエルの声に気が付いた兵士達が、万歳の声を上げ始める。

そのシュプレヒコールは気が付いた兵士達へ伝播していき、伝染病のように広がっていった。

「『結束』には、なにより信用が第一だ。だから私は子爵、きみを信用する。些細な失敗を責めはしないよ」

ワールドは深々と頭を下げた。

「その偉大な使命のために神は余に力を授けたのだ」

フーケはこの男の言う事を怪訝な顔つきで思案した。神の授けた力というのは一体、いかなるもののだろうか。

そんな彼女の疑問を察したのか、クロムウエルは手近な死体へと寄り添った。

目を見開き、何も無い物言わぬ骸と化した名も無き、兵士である。

「見たまえ、これが神が私に与えた力、『虚無』だ」

そう言つて短くルーンを唱え、杖を兵士へと振り下ろした。

振り下ろすと、その兵士はムクリと起き上がる。この光景にはフーケの背筋が凍りついた。

「な……」

「これが『虚無』だよ。四系統のどの属性にも属さない系統」

ムクリと起き上がった兵士は、無言のままどこかへフラフラと歩き出した。

「さて、我が近衛に親愛なるウエールズ王子も加えたいのだが……」

「残念ですが、王子は燃えてしまったようですな」

ワールドの言葉に、クロムウエルは至極、残念そうな顔をした。

だが、顔をふらりと変えて、また彼はニコリと人の良い笑顔をフーケたちに向けた。

「フム、それは惜しいな」

だが、首を振って気を持ち直し、ワルドたちへとニッコリと微笑んで話し始めた。

人の心を一瞬で掴むような、そんな話し振りだった。

「この力を持つて、議会は余を皇帝に推したのだ」

ゾクゾクと背筋の震えるような恐怖に耐えながら、フーケは目の前の男を見つめた。

「まあ、気にするなということだ、ワルド君」

また膝を付いたままのワルドの肩を抱き、クロムウエルは優しげな声で諭すように語り掛ける。

「安心したまえ。同盟など結ばれてもかまわん。どのみちトリステインは裸だ。私の計画に変更はない」

ワルドは頭を下げる。

「トリステインは、なんとしてでも私の版図に加えねばならぬ。あの王室には『始祖の祈祷書』が眠っておるからな。聖地に赴く際には、是非とも携えたいものだ」

そう言つて満足げに頷く。

「外交には二種類あつてな、杖とパンだ。トリステインには、まず温かいパンを与えてやる」

「御意」

ワルドの返事に、また満足気に頷くと、クロムウエルは去っていった。

この陽気に反する位に、冷たい空気を発していた存在が消えて、フーケは大きなため息を付いた。

「アイツ一体は何なんだい」

「さあ？」

それだけ言うとレオンは再び瓦礫の中を歩き出した。ワルドも彼について瓦礫を除けながら、進んでいく。

「さあ、って…」

的を射ていないワルドの答えにフーケは、また苦い顔をした。

この男は、肝心なことは何も喋らない。クロムウエルの事も、目の前を歩く仙人のような男の所在も、何も教えてもらっていない。

「虚無は魂を操る…、よく解らんがそういうことらしい」

「じゃあ、アンタや私たちもそうだったのかい？」

フーケは震える声でワルドに尋ねた。そんな彼女に、振り向くことも無く答える。

「いや、幸か不幸か、この命は生まれつきだよ。俺のものさ」

それからワルドは天を仰いだ。戦後の空は何処までも高い青空が広がっている。

何事か考え込むような顔で、フーケのほうを振り向いた。

「土台、あの程度で驚いていては身が持たんぞ」
「はあ…?」

そのまま歩くと、瓦礫の山が見えてきた。

一際、大きな瓦礫が積みあがった一角である。周囲にはステンドグラスの破片も見える。ここはワルドが結婚式を挙げようとした礼拝堂なのだ。

「結局、愛してなかったのかい?」

「何がだ?」

黙々と進むレオンと違って、フーケは実に饒舌だ。

今までの仕えが降りたかのように、次々に喋ることが見つかっていく。大抵の質問ははぐらかされるが、それでも話していられるのが心地よかった。

「この辺りだな」

「へ?」

そんな事を、一人考えていたフーケは呆けた声を出した。

どう見ても、辺りは瓦礫の山しかないのだが、ワルドはフーケのことを気にも止めず、杖を振る。

小型の竜巻があらわれ、辺りの瓦礫が飛び散る。その底には綺麗な絵画が転がっていた。

「あら?」

その絵画に気が付いたフーケが早速、判別を始めた。

綺麗な女性とも男性とも付かない、人物が天から降りてきているシーンを描いていた。

「これってジヨルジュ・ド・ラ・トゥールの『始祖ブリミルの光臨』じゃないの」

フーケは、そう言いながら床に落ちていた絵画を手にとって、まじまじと見つめた。

有名な画家が書いたものはそれなりに値が張るので、フーケは鑑定するようにじっくり見つめたが、すぐに顔をしかめた。

「やっぱり、複製か。ま、そうよね、こんな田舎の城の礼拝堂にあるわけないし」

そうやってポイツと贋作の絵画を捨ててしまった。

贋作でもそれなりの値段があるのだが、彼女は一品モノのお宝にしか興味が無いのだ。

「あつた、目的のものだ」

「ん？ なにかあつたのかい？」

冷酷で、冷静な平坦な声が掛かる。

「どれどれ？」

フーケとワルドはレオンが見つけたものを覗き込んだ。

そこには冷たくなったウェールズ王子が生前と変らぬ、顔のまま横たわっていた。首に手を当てて、脈を確認するが、鼓動は聞こえない。確実に死んでいる。

フーケも確認してみるが、憎き王家の最後の血統は、確実に死んでいた。

「ふむ、我が盟主も酷な事をする…」

そう短くばやくと、レオンは担いでいた^{デスサイズ}処刑鎌を降ろした。柄と刃の接合部分には心臓のように赤いルビーが煌いていた。生きていけるような、そんな鎌の存在に思わずフーケは息を飲んだ。

「さあ、ゲイボルク」

「ヒヤッハー！久しぶりだな、レオン！」

降ろした瞬間、^{デスサイズ}処刑鎌がキンキンと耳障りな声で喚きだす。またまたフーケは目を見開いた。

「その鎌、インテリジェンス…、サイズとでも言うのかい…」
「ああ」

短く答えて、刃を思いつ切りウエルズの胸へと振り下ろした。鎌の心臓のようなルビーから、赤い滴がポタポタと二滴、胸の中へと吸い込まれていく。そうすると、まるで寝ていただけのようにウエルズが起き上がった。

先程のクロムウエルと似たようなものだが、全くレベルが違う。

「やあ、初めましてかな、王子さま？」

「よう、王子さま、元気になったかい？」

「君は誰だい？」

ゲイボルクと呼ばれたインテリジェンス・デスサイズは使い手と反対に、異常にテンションが高い。

レオンはニコリと笑うことも無く、王子へと自己紹介を始めた。

「レオン・アルタミラ」

その名前を反芻し、ウエールズは心の底へと刻み込む。

「早速だが、貴様には部下と共にアンリエッタに会いに行ってもら
う」

「ああ、構わないよ」

一応は王子だと言うのに、そんな事はこの男には関係ないらしい。変らない慇懃無礼な態度で、王子へと坦々と命令を下す。下されたほうも、坦々と従っている。

先程のクロムウエルの蘇生は、死んだ人間をマリオネットのように操るようなものだった。

だが、これは死んだ人間を、そのまま生前と変らぬモノにするようである。明らかにレベルが違いすぎる。

「あなた、一体、何者なんだい……」

「……」

レオンは黙っている。

「アンタのそれも『虚無』なのかい？」

「いや、違う。それではない」

またワケの分からない具合に答えを誤魔化された。

吹き荒れるような突風にマントの襟の部分が解けて、仮面が見えた。無骨な動物の歯を模した様な仮面だった。

「この力は生まれつきだ」

そんな風に冷淡に言い放ったレオンを邪魔するかのように、これ

また元気の良い少女の声が掛けられた。

「やつほー！ねおぼんに、わるるん！」

「ユーリか…」

その声に辟易しているのか、それとも呆れているのか。

変らない冷徹な声が元気の良いユーリへと掛けられる。少女のほうは、体中を布のようなもので覆っている。風を読むように右へ左へふわふわと揺れている。

手には巨大な剣が担がれていた。

「これこれ、これだよー。盟主さんの言ってた、聖剣って！」

その剣は柄と鞘を繋ぐ血管のような装飾が施されている。

これを見たレオンは、見たことの無い笑顔を見せた。と言っても、短く口の端を吊り上げただけの微細な変化ではあったが。

「とりあえず、当面の用は終わった。後は事の成り行きを見るとしよう」

また照りつける太陽には合わない、冷たい空気が廻りに満ちて、フーケは背筋を振るわせた。

55・Section coal mine

ルイズ達が帰ってきたのも束の間、彼女が寝込んでいる時間を利用してエドワード達は、キュルケの案内でゲルマニアのミュルハイムへと向かっていた。

彼女の実家であるツェルプスナー領の隣にある大規模な炭坑都市である。

ここへ訪れた理由と言うのは、エドの機械鎧オトメイルの修繕に必要な上質な鉱石や、精錬に必要な機材を手に入れるためだ。尤も、アメストリスのような技術レベルは望むべくも無い。

エドとアルの知識と、ウインリイの技術がモノをいう世界である。

3人は彼女の手配した竜籠に乗り、空を漂っていた。

「しっかし、まあ……」

彼女の実家に何から何まで面倒を見てもらうというのは、エドとしては面白くない。

後で礼金を含んでいくらか払う心算だ。

「この世界でも飛行技術つていのは無いんだね」

これから先、実用化されるかもしれない飛行機械。

ネギヤ一護達の世界では、日に何機も空を飛び交っていると言う話だが、実物を見たことが無いので、彼らは判断が付きかねていた。ガチャガチャと今回は2メートルを越える巨大な鎧の姿となったアルが、体を揺らしながら尋ねる。

「まあ、飛べる生物がいるし、仕方が無いかもね」

のんびりと爪の手入れをしながら、ぼんやりと彼の隣に座ったキユルケが言う。

彼女もネギのいう世界には興味があつたが、やっぱり現物を見ないことには信じられない。この4人は良くも悪くも合理的な考え方をしている。

「でも、これって高いんだろ」
「そうだよ、高そうだよ」

エドが頭を掻きながら、目の前で寛ぐキユルケに尋ねた。
彼女は少しバツの悪そうな顔をしながら、

「そうね、確かに普通の人だと一発で生活が傾くでしょうね」
「ふん…」

やっぱり、この世界は格差が酷い。
貴族と平民とでは、それこそ国籍が違うというより、似たような容姿をした生物なのだ。どうにもその事が、エドワードは気に入らない。

それは露骨な貴族中心社会であるトリステイン貴族であるルイズを見ていると良く解る。

「はいはい、話してないで、エド、ちょっと腕見せて」
「はいよ」

隣に座ったウインリイがスパナやドライバーを持って、エドの右腕のコートの裾を捲り上げた。

そこには無骨な色味のコードや、鉄色をしたプレートが複雑に絡み合つて出来た機械の腕があつた。一本一本のネジやナットに力強

い息吹を感じる。

仕組みは理解できないが、それが素晴らしい芸術品であることは理解できた。

「ちょ、ちよつと、何その腕……」

突然現れた肌色をしていない腕を、血の気の引いた顔でキュルケが尋ねる。

義肢技術が確立していない、この世界では珍しいというよりも、畏怖を感じるものらしい。

「ああ、これが言ってたオートメイル機械鎧だよ」

残った左腕で頬杖を付いて、何事もないかのようにエドが言う。その反対側では、ウインリィがまたブツブツと小言を言いながら、ドライバーを差し込んでいた。

「機械の腕……」

「珍しいか？」

口ごもったキュルケに、意地悪い調子でエドが尋ねる。

返ってくる答えなど、予想できているが、ためしと言う奴だ。

「珍しい、なんてものじゃないわ。初めてよ、そんなの……」

「序でに言うと、左足もだ」

ズボンの裾を捲ると、そこにも無骨な色味の機械の足があった。

「更に言うと、僕は全身がありません」

緊迫した空気を払うかのように、アルがおちやらけて鎧の頭部をカポツと外す。

そこにはあるべきはずの、目や鼻や口といったモノで彩られるべきはずの頭部が何処にも無かった。更にいうと首から下も無い。鎧だけで動いているのだ。

「……」

あまりにショッキングな光景にふらりとキュルケは声も上げることなく気絶してしまった。

「ああ、やっぱりこうなったか……」

その様子を呑気な声でエドは見送った。

この対応に慣れてきている自分たちが、少しだけ残念に思えた。

「気が付いた？」

しばらく経ってキュルケは、ウインリイの呼びかけで目を覚ました。

気絶から回復したらしい彼女のテンションは、一週廻って変な感じになっていた。

「凄いわね、作ったのは誰！」

「いや、あの……」

何か面白いものを見つけた、好奇心一杯の幼い子供のような調子だ。

いつもは女王様然としている姿は全く無い。

「私だけど…」

おずおずとウインリィが手を上げた時、大きく籠が揺れた。

皆、ミキサーに掛けられたように揺れるが、誰も落下する事は無かった。原因を確かめようと、キュルケが籠から身を乗り出すと、すぐ隣を別の竜籠が通り過ぎていく所だった。

「なによー、もー!」

例え、貴族同士、格の違いがあつたとしても、こういつた衝突しそうなものはご法度だ。

文句の一つでも言つてやろうと乗り出したのが、籠には眩しい金髪の煌く青年が座っていた。傍には大きな杖を構えた老僕が控えていた。

その時、彼女の目にはその美青年しか移っていなかった。怒りもどこかへ霧散してしまう。

「あら、良い男…」

腕を組んでうんうんと頷く。エド達は呆れ顔で見えていたが。

それから傍と気が付く。どこかで見た記憶がしたのだ。だが、彼女は鉄のように熱しやすく、冷めやすい。あまり興味の無い事は覚えていない。

「ま、いいか」

ニアミスしたことなど、すっかり忘れてエドたちに向き直る。

「とりあえず、差し支えなければ、その腕の事を教えてくださらないかしら？」

その言葉に、3人は暗い顔をする。

この腕の事を知っているのは、彼らの知り合いの中でも、ごく握りの人たちしかない。信頼が置けるとか、そういった問題ではなく、この少女に話してよいものなのか、しばしば逡巡する。

「まあ、面白くも何とも無い、俺たちのクソつまんねえ身の上話だぜ」

自嘲的な口ぶりで、機械の腕を摩りながらエドが言った。

「それでも聞くか？」

エド達の余り話したくない過去を、掻い摘んで語っている間にミユルハイムへと着いてしまった。

途中、キュルケは何度も耳を塞ごうと思ったが、悲痛な表情を一切感じさせないのを見て、最後まで聞く覚悟を決めた。

「その若い身の上で、良くやるわね、貴方達……」

感心しきりだったが、エド達に取っては別に感心してもらおうよう

な話ではない。

何せ、これは彼らの咎の結果である。身の程知らずにも神へと挑んだ天罰だと捉えているから。

「別に気にすんな」

そう言うが、キュルケに見れば、楽しい話でなかったのも確かだ。

でも、聞かなければ良かったとは思っていない。

「しっかし、まあ…」

そんな彼女の思いを悟ってか、エドワードが空気を变える様に呟いた。

降り立ったのは、ミュルハイムの中心街。数十年前に炭坑が発見されて依頼、工業の基幹として栄えてきた街だ。この街を中心として、辺り一帯はゲルマニアでも有数の工業地帯となっている。

技術力は、そのまま国の戦力となる。資源力は、そのまま国の戦力となる。

この豊富な資源と技術力を持ってして、ゲルマニアは軍事大国として君臨しているのだ。

「これが…」

だが、目の前にある街は、そんな国の根幹をなす場所ではない。

「本当に炭坑街？」

行き交う人も少なく、その少ない人すら、どこか疲れたような顔を見せている。

一言で言うならば、

「炭坑つて、もっと活気があるものだと思ってたけど…」

兎に角、寂れている。

「おい、本当にここが軍事大国さんトコの工業地帯なのかよ？」

見たことの無いような酷い有様に、エドが食って掛かる。

自分の背よりも高いキュルケを見上げるような形だが、鋭く睨みつける視線は怖い。どうどうと馬を沈める調教師のようにアルが宥めるが、エドの疑心は収まらない。

「あれ…、おかしいわね…」

言われているキュルケも何か戸惑っている。

何事か気が付いたように、遠くに見える煙突を指差した。そこからはもうもつと煙が上がっている。どうやら閉山した訳ではない様である。夕焼け空に立ち昇る白い煙は、どこか寂しい。

では、何故、こんなにも活気が無いのか。

「とりあえず宿だな、宿」

意地でも高い部屋でないと許さないルイズと違って、キュルケは中々に適応力がある。

サバイバルしても、魔法を使わずに、寧ろエンジョイしていたほどだ。逆にタバサは真剣そのもので、ルイズは真っ先に根を上げた。

「あ、あれね」

キュルケが指差す先には、それなりにしつかりした作りの宿があった。

ぞろぞろと4人が連れなつて向かっていると、一仕事終えたらしい、炭鉱夫たちが汚れたツルハシやスコップを片手にその宿へと入っていくところだった。

どうやら酒場も兼ねているらしい。するりとキュルケはピンを外して、マントを脱いだ。

「何やってんだ？」

「別に、大したことじゃないわ」

貴族^{マント}の証明を脱ぐ、キュルケに怪訝な視線を向けながらも、エド達はその宿へと入った。入った瞬間に、よそ者を見る炭鉱夫たちの視線が4人に集う。

確かに目立つ外見である事は間違いない。一人は金髪金目に赤いコート。一人は全身鎧。これで目立たない方が可笑しいだろう。

「いらつしゃい」

店主らしい筋肉隆々としたエプロンをした男が元気よく声を掛けてきた。

上から下までじろじろと舐めるように見られる。

「な、なんですか…」

その店主の視線がエドの肩に止められたピンを見つけた瞬間に、顔の色が変わった。

ドカつと無言で4人が店の外へと蹴り飛ばされる。時刻は既に夜山に囲まれている、この街の日暮れは早い。周囲は顔の判別も難しいほどに、暗くなっていた。

「何、すんだ、コラ！」

蹴り飛ばされたことにエドが激昂する。

いきなり見ず知らずの人物に蹴り飛ばされて、安穩としていられるほど、彼はお人よしではない。一緒に蹴られた3人は蹴られた場所と、地面とぶつけた場所を摩っていた。

ぞろぞろと酒を飲んで、ほんのりと赤くなっていた炭鉱夫たちが店先に集まってくる。

「カー、ぺっ！」

一番先頭にいた店主に唾を吐きかけられる。

「クソ貴族なんぞに食わす飯も、出す宿も無いわ！」

いきなりの暴言である。だが、ぐっと堪えて聞いていた。何かデジャブを感じる。

「それでもまあ、20万エキューくらい出すつつなら出してやらんことも無いがな！」

店主の強がりを含めた最後の一言。

20万エキューと言うと、今ひとつ物価が解らないエド達は知る良しも無いことだが、立派に土地が買える値段である。相当なレベルの金額である。

「あ、僕は貴族とかそんなんじゃないです」

「私もです」

「あたしもよー」

慌てふためくエドの隣で3人が、そんな事を言い出した。
店主の偉丈夫は尚も敵つい笑顔で、手招きした。

「おお、そうか。すまなかつたな。よし、入れ」
「裏切り者ー！」

エドの叫びが虚しく炭坑街に響くが誰も気にしない。
ガヤガヤと何事か言いながら、キュルケたちも皆、宿の中へと入
っていつてしまった。そのままエドだけを寒い外に締め出すように、
宿の扉が強く締められる。

キュルケがいそいそとマントを脱いだのは、このためだったのだ。

「何だよ、あのガキも貴族かよ……」

「しらけるな、久しぶりの客が貴族だなんてよー」

そんな事を言いながら、炭坑夫たちは再び自分の席へと戻ってい
く。

ある程度落ち着くと、新しい客人を持って成すようにふくよかな体
形をした婦人が、寄ってきた。

「ごめんなさいね、ウチのバカ亭主が」

「あ、いえ。お気になさらず」

くすつとキュルケが笑って、その婦人に話しかけた。

ゴトツと大きな皿に大盛りのおいしそうな料理が置かれた。注文
はしていないが、どうやらここで出される料理はこれだけらしい。
決して高級な食材は使っていないだろう。ルイズなら間違いない、
怒り狂っていきそうだが、この女王様は別に気にした風でもなく、取
り分け出した。

「ねえ、何でこの皆さんは貴族が嫌いなの？」

そんな事を不意にウインリイが口にした。
途端に怖い視線が四方八方から向けられる。

「ああ、まあ、ここの炭坑のトップの奴が金で官位を買いやがったんだよ」

一人が言い出すと、一気に不満が爆発する。

「お陰で俺たちは大增税！」

「雀の涙ほどの給金でこき使われてるって訳さ！」

「お上に上申しようにも、戦争ごっこで聞く耳持たず！」

それら口々に続けられる悪口にキュルケは耳が痛くなった。

ルイズは「貴族は清廉潔白で聖人である」などと言うお題目をよく口にする。キュルケがルイズをからかうのも、彼女のそう言った無関心と疑いの無い素直さが気に入らないという理由もある。

蝶よ花よと育てられたトリステインの大貴族と違って、政治や戦争の最前線を見たゲルマニアキュルケの貴族は、それなりに世の中の汚い部分を知っている。

「ここはその縮図ね…」

この世の中は正義よりも、欲が強い。

金を持っている貴族が、平民を奴隷のように使っている事は多い。
必ずしも全てが「聖人君子」ではないのだ。

この街は「ハルゲギニア」の縮図。貴族が思うがままに君臨する、この世界の箱庭だった。

為政者というのは、嫌われて当然なのである。だから、アルビオン王家は倒れたのだ。

「…全く、あの子にも聞かせてやりたいわね」
「何が？」

ふうつとドツキ合ってきた隣人の顔を思い出しながら、そんな事を呟いた。

いつしか料理は二人で食べきっていた。少しだけ、外に残された仲間の為に残しておいた。

「ちくしょー、アルの奴」

ぐうつと腹の虫に必死に耐えているのはエドであった。

明かりの無いどこかの鉱夫の休憩所の軒先に座って、コートに仕舞っていた軍用の保存食を食べている所だった。軍属である彼のコートは防寒性に優れており、内ポケットには極限でも耐えられるように色々と備えがあった。

「腹減ったな」

だが、あくまで保存食は保存食。腹が一杯になるわけではない。おまけに不味いと結構不評なのだ。軍部が一切、改良しようと言う気が無いのが腹が立つ。

「あんのクソ大佐…、今度逢ったらシバく！」

言ったたびに「ははは」と笑う声が聞こえてきそうになる。
怒るたびにカロリーを消費して、また腹がなった。

「うっ、ちくしょー…」

また腹の虫に耐える。

そんな時、トントンと優しく彼の肩が叩かれた。後ろを振り返ると先程裏切った3人が湯気の立つ料理を持って立っていた。

「おなかすいてるだろうと思って持ってきたよ、兄さん」

「早く食べちゃいなさいよ、バレたら私たちまで締め出されそうだし」

「ま、一人残ってたなら、大丈夫でしょ」

そんな事を言う3人がエドには神様に見えた。

「ありがとう！」

ガシッと三人にまとめて抱きつく。その彼の頭を三人は優しく撫でた。

「よしよし」

これではどちらが弟なのか解らない。

そんな事を思いながらも、3人は軒先に座った。

「全く、エド達が貴族が嫌いな理由が分かった気がするわ」

そんな事を聞こえるようにキュルケがいきなり呟いた。

勝手の知らない異世界へと、勝手な都合で召喚され、勝手に使い魔にされた彼らの苦悩を、キュルケは修行の合間合間に見せたりする顔や、聞かされたりする話から理解していた。

「そうか？」

確かにエド達は此方に着てから一週間でトリスティンの最低加減を知ってしまった。

貴族でなければ人に非ず、そんな政策を敷いていて、それで誰も違和感を持たないという状況に誰もが気が付いていないのだ。外から冷静に見ているキュルケやタバサの方が、よっぽど知っている。

「ま、確かにあの国は最低だ。俺たちの国よりもな」

エド達のアメストリスは軍政国家だ。

だから、軍で功績をあげれば、まだ平民や貴族の区別無く、誰でも出世できる。それだけまだマシかもしれない。どちらも国家として「最低」であることは間違いないが。

「堂々とこんな店先で良く国家批判できるわね……」

呆れながらもウインリイは呟いた。

そんな彼女の呟きも確かにそのとおりである。誰かが聞いていたら、このまま牢獄へ直行だろう。

「ま、そんな事を気にせず兄さん食べちゃってよ」

アルの呟きと、店から聞こえてきた物々しい銃声が同時だった。その銃声を引き寄せられるように4人は走った。

「全く、税は納めなくせに、このような事に興じる暇があるとは……」

ブツブツと呟きながら、ちょび髭の身なりの良い男が宿へと入ってきた。

この男こそが、この街の炭坑の一切合財を取り仕切るフルサ子爵だった。口元をハンカチで拭いながら、敵つい炭坑夫たちを舐めるように見回した。

後ろには細剣レイピアを提げたボディーガードらしい男が二人控えている。

「これはこれは子爵殿、このような宿にようこそ」

精一杯の皮肉を込めた言い方で、店主が笑いかける。

目は笑っているが、目の奥は怒りを込めていた。

「全く、まだ酒をたしなむ余裕があるとは……」

コホンと業とらしい咳払いをして言葉を続けた。

「と言う事はまだ税を上げても良いということだな
「な……！」

その言葉に店の中が一瞬で凍りつく。

いい加減、耐えかねた若い抗夫が手に持った雑巾を子爵の顔へと投げつけた。

「このヤロー！」

べちゃつと汚い水が弾ける。

その事に顔を全く崩さず、フルサ子爵は命令した。

「なるほど、見せしめが必要のようだな…」

後ろに控えた男が、雑巾を投げた抗夫を捕まえる。そして、細剣^{レイピア}を抜き、無言で振り下ろす。思わず目を瞑ったが、ガキンと言う音がして、何時までも痛みは来なかった。

目の前にはエドが右手を楯のように構えて、剣を受け止めていた。ベキンという音がして振り下ろされた細剣^{レイピア}の刀身が根元から折れた。

「ええ、ベキンって…！」

折れた刀身に驚きながらも、突然の闖入者へと宿に集ったみんなの視線が集まる。

視線を集める主役は、呑気に手に持った紅茶を飲んでいる。

「お、お前は何者だ…？」

「通りすがりの小僧です」

紅茶を啜りながら、のんびりと言った。

そして、見せ付けるようにキュルケの放っていたマントを見せ付ける。五^{ペンタクル}方星の付いたピンを見て、子爵の顔が見る見るうちに青ざめていく。

「いや何、子爵が来てるって言うんで、挨拶しておこうかと…」

前にもあったことだなあ、と一人ごちながら、エドはそんな事を

言った。

やはり突然、権力を手に入れた人間のする事は何時の時代も、異世界でも変わらないらしい。

「これはこれは、貴族様、一体、どこのお方で…？」

「ゲルマニアのフォン・ツエルプストー」

チラリと目だけでツエルプストー《本人》に確認を取る。

ぐつとサムズアップで三人が返事をする。その名前を聞いた瞬間に、今度は子爵の顔がぱあつと華やいだ。

「このような宿に貴方様を置いては置けません、ささ、我が屋敷へ案内しますので…」

「何、ホントツすか？」

エドの顔がまた黒い笑顔になる。

態々、宿中に響く大声で言ってしまう。

「いや、この宿の店主さん、けち臭くて泊めてくれないっていうので！」

ぐつと苦虫をかんだような顔になるが、確かに事実なので反論できない。

そのまま案内されるような形で、エドは子爵に連れられていった。

「ええい、くそ！忌々しい！」

そんな店主たちの叫びが子爵たちが去った通りにむなしく響いた。残されたキュルケ達は、彼らの叫びを重く受け止めていた。

エドの案内された子爵の屋敷は、それはそれは素晴らしいものだった。

街は活気も無く、酒だけを楽しみに生きているような抗夫ばかりだというのに、この子爵は素晴らしい生活をしている。ゲルマニアでは平民でも金で爵位を買える。その事が、このような悪い状況を生み出しているのだが、国力は高まっている。

単純なプラスマイナスでは測れないだろうが、国としては成功と云ってよいだろう。

「良いもの食べてますね。街はあんな状態だったのに…」

目の前のちょび髭の子爵に皮肉を込めた一言を言いながら、エドは優雅に肉を切り分ける。

彼の前には、高級そうなソースが掛けられた、高級そうな肉があった。成金趣味丸出しという奴である。

「いえ、いえ、税の徴収も忞ならず困っているのですよ」

手を組みながら子爵は鋭い目つきで言う。

エドはデジャブを感じていた。だが、その時のこの男の立ち位置にいた人物の名前は思い出せない。

「ふむ…」

また切り分けた肉を口へ運ぶ。

高級なだけで質が無い。これならまだ場末の酒場で食べている方

がマシである。

「では、こういうのを政治の仕組みとして受け取ってもらえますな」

そうフルシが言うと、執事らしき人物がエドの前に、小さな袋を置いた。口からは金貨が見えている。エドは嘆息して、子爵を呆れた目で見つめた。

「これは所謂『ワイロ』という奴で？」

「気持ちですよ……」

ニツコリと人の良い笑みを浮かべて子爵は言う。

「私は一炭坑の経営者で一生を終える心算は無いのです」

その袋を置いたまま、エドは食事を終えた。

宿泊を薦める子爵の言葉に遵って、そのまま屋敷に泊まった。泊まった窓からは二つの月が綺麗に見えている。ネギ辺りがもしかしたら天測でもしているかもしれない。

そんな事を考えながら、眠りについた。

翌日、4人は炭坑のボタ山の前にいた。

目の前には積みあがった使えない石炭が山のように積みあがっている。概算で2トンか3トン位はあるだろう。

「さって、前にもこんな事をやったよな」

そうぼやきながらエドは手を合わせる。

小さい体を駆使して、黒い石の山の山頂へとよじ登る。

「本当に彼って、えーと誰だっけ？」

兄弟二人揃って考える。確かに前に見た誰かに子爵は似ているのだが、その誰かを思い出せない。

ぼんやりと容姿は思い出せるのだが、名前がどうしても喉の奥に引っ掛かって出てこない。

「ま、今からやることは二人ともナイショな」

エドが両の手をボタ山と翳す。瞬間に黒い山は眩い光を放つ金の山へと変貌していた。

「ご、ゴールド…なの？」

「おう」

「本当に…？」

疑い深い、だが、ぽかんとした顔でキュルケが聴いてくる。

だが、エドは自信満々で延べ棒を一つキュルケの足元へと放った。ゴトンと重い音がして落ちる。

「お礼だ、取っておいてくれ」

「……」

名前を借りたことと、案内してくれたことへのお礼。

かなり過払いなのだが、こういう事にはエドは無頓着だ。キュルケは顎が外れそうになる位に、口を開けて錬金術師を見ていた。

その金の使い道は、決まっている。

「もう許せねえ！」

「今から殴りこみに行くぞ！」

一気呵成にやる気上げる抗夫達。

そんな彼らの緊張した空気を消すように、エドが元氣良く入ってきた。後ろにはこれからの展開を予期して笑っているキュルケと、呆れた様子のウインリイがいる。鎧は鎧なので、表情が読めない。

「ご機嫌麗しゅう！炭坑夫の皆様！」

昨日、泊まった宿にはツルハシやスコップを片手に立ちあがっていた炭坑夫達が集っていた。

これからどうやら討ち入りに入るところだったらしい。

「何しにきやがったんだ？」

途端に貴族が入ってきたことで睨まれるが、エドは涼しい顔で受け流す。

「あらら、ここの経営者に向かって、そんな口利いて良いの？」

そういつてずいっと一枚の羊皮紙を突き出す。

その羊皮紙をシゲシゲと詰め寄ってきた炭坑夫が眺める。平民は字が読めないというが、中にはちゃんと神父に教えてもらった人も

いる。

「何を言って・・・、ってこれ炭坑の所有権と経営権の権利書じゃねえか！」

「何！」

「しかも、名前がエドワード・ツェルプスターって…！」

「そう俺の名前だ！」

自信満々で偽名を口にしたエドワード。

苦しい軍部や社会を生きていくためには嘘も要る。

だが、権利書にエドの名前が書かれているということは、

「つまり、今現在、この炭坑の経営者は俺ってことだあー！」

「何ー！」

一際大きな声上がる。

「とは言っても、こんな権利書持っても邪魔になるだけなので…」「俺たちに売ろっつてか…、幾らだ…？」

苦々しげな顔で宿の店主はエドを睨む。その顔にまた底意地の悪い笑顔が浮かんだ。

「高いよ」

ひらひらと運んできた箱と共に、それを見せ付ける。

「何かを得るなら金が要ることぐらい解ってるだろうっしね」

そういうと態々見せ付けるように、解説を始めた。

「何せ、保管用の箱はヒスイ製、鍵も真鍮とかそんなモンじゃなくて、金製だ。うーん、これは高いね。おまけにこの紙も金糸の織り込みが入ってる…」

それらをばかんとした顔で皆は見ていた。

こんな高級な代物は今まで見たことがないのだろう。解説に汗臭い炭坑夫達は耳を傾けている。

「ま、素人目の見積もりダケド…」

続く鑑定の値段にぐつと息を飲む。

「親方んとこの宿賃、20万エキューでどうだい？」

笑顔で言うエドワードに、集った男達は一齐に笑い出した。奥さんたちらしい女性達も、一齐に笑い出した。宿の中に笑いが満ちる。

「こんな面白い奴は初めてだ！、よし、買った！」

「売った！」

これにて売買契約成立。それをキュルケは微笑ましい顔で見ている。ウインリイは悪事の片棒を担いだ事に呆れた顔をしている。

だが、事はそう上手く進まない。

「一体どういうことですかな！」

勢い良く戸を開けて、部下をいっぱい従えた子爵が飛び込んできた。

隣には杖を構えた若い女性のメイジもいる。どうやら用心棒を雇

つていたらしい。その事に気が付いた炭坑夫たちは、一斉に反対側の壁まで飛びのいた。

「これはこれは子爵殿。ついさっき、権利書を買った所で…」
「何ですとー！」

事も無げに言うエドに、白目を向いて子爵は大声を上げた。

「いやいや、そんなことよりも…、貴方に頂いた金塊、全部土くれに変わっておりますぞ！」

こそこそとウインリイが寄って来て、耳元で囁いた。

「何時戻したのよ…？」
「さっき、出かけにちよろっと」

ふんと鼻を鳴らすエド。

そんな彼らを見無視して、後ろに控えたメイジが杖を振った。飛んで来た風を事も無げにエドとウインリイは避けた。椅子や机が派手な音を立てて吹き飛ぶ。

「あちらは凄く怒っているみたいよ…」
「だな。まあ良いだろ」
「許さない、貴方に決闘を申し込む！」

そんな感じで言うメイジはボブカットの女性だった。歳はエドたちよりも少し上くらいだろう。
マントを着てどこか、きつい目をしている。

「いいぜ、受けてやるよ」

笑っているエド。

そんな彼と女メイジの間で決闘が行われる事となった。負ければ権利書は、また子爵の手に戻るだろう。

「私はセレス、風のラインメイジ。今は武者修行で彼に仕えている」
坦々と言うセレスに、エドはまた鼻を鳴らした。

「修行つて言うなら、もう少しまともなトコ着けや」

言えた義理ではないだろうが、こう言う事は言っておかねばならないだろう。

二人は10メートル程の距離をとって対峙する。

「いざ、勝負！」

言った瞬間、セレスは顎に鉄球を受けて昏倒した。

エドの足元には、野球ボールほどの大きさの鉄球が二つ程転がっている。彼女が少し目を話した瞬間に、地面を鉄球に変えて、蹴り飛ばしたのだ。

「そんな作法、誰が守るかよ。バーカ」

エドの宣言と共に子爵たちは逃げ出そうとする。

「おおっと、どこへ行かれるのですかな、子爵殿…？」
「ひ…」

ボキボキと太い指を鳴らしながら炭坑夫たちが詰め寄ってくる。

さながら肉の壁だ。

「今まで俺たちにした分、たっぷり味わえや！」

「ぎいいいいやぁー！」

フルシと部下の悲痛な叫びが辺りに響いた。

「全く、あの権利書持ってたら、金持ちでしょうに…」

そんな事を帰りの竜籠でいうのはウインリイ。

確かに一鉱山丸々持っていれば、その財は計り知れないだろう。だが、此方に生活の基盤の無いエドたちが持っても何にもならないだろう。

「ま、気にすんな。当初の目的は果たしただろ？」

「そうだけど…」

尚も口を尖らせて、反論したそうなウインリイ。

ミウルハイムを訪れた理由は到底、エド達には精錬できない鉄や石炭を手に入れる為だ。その当初の目的は果たせたといつて良い。おまけに、この角で上質な鉱石を無料で手に入れられるのだ。これはお得だ。

あくまでも3人は帰らねばならない存在。権利を振りかぶって、自由にするのは気が咎めた。

「今回は、貴族って言うのがいかに嫌われるか良く解ったわ」

そんな解りきったような口ぶりのキュルケ。

彼女の手には大きな金色のインゴットが握られている。アルが延べ棒から加工したものだ。

「ま、そういうなら、ちゃんと支配する側として、される側の気持ち
を汲んでやることだな」

「それが無いと、またアルビオンみたいな国ができると思うよ」
「そうね、そうなのよね…」

アルビオン陥落は各国に衝撃を持って伝えられた。
その動きを受けて、また各国新しい波乱うねりが生まれている。

「世直し…、なんていいんじゃない？」

「は？」

「ん？」

「へ？」

唐突なキュルケの言い草に3人は呆けた声を出した。

「3人とも、いえ、皆かしら。きつと、その力はこの世界を変える
為にあるのかもしれないわね…」

そんな事をいうキュルケは、珍しく女王様ではなく、歳相応の伝
説に憧れる女の子の姿だった。

「は、世直しか…。そういうのも楽しいかしんねえな」

エドの呟きは、吹き抜けた風に乗って、辺りへ伝わった。

55・Section coal mine (後書き)

タイトルをそのまま日本語訳にすると「炭鉱節」となります。まあ、今回の舞台が炭坑だったので、この歌で良いと思います。

舞台となりましたミュルハイムはドイツのルール工業地帯の都市のひとつであります。

実際はこの一地方全体が炭坑だったり、鉱山だったりして、炭坑全てということはないのですが、舞台も合わせて炭坑だけということにしました。

ストーリーに関しては、アニメ版のユースウェル炭坑をモデルにしています。

「か、かまぼこ?」

「うお!」

変な叫び声を上げて、ガパツと跳ね起きた。

だが、ルイズが目覚めた時には、全てが終わっていた。アルビオンから帰ってから4日目の朝の話である。

「全く、二日も良く寝れるな...」

部屋の主が起きたことに気が付いたエドが、動かしていた手を止めて振り返る。

ドライオマ魔法球で3日分の治療を終え、容態の安定したルイズは自室に置かれていた。度々、ヴィルヘルミナがチョコチョコと氷枕を替えたり、才人が看病したりとしていたことを、彼女は知らない。

旧知の仲の人に会えたシヤナは、この間ずっと心中、穏やかでなかったらしく、ピリピリするような空気を周囲に放っていた。

「二日...、二日も寝てたつての...?」

ようやく目を覚ましたルイズは開口一番、そんな事を聞いてきた。2日と言ってもドライオマ魔法球の外での話である。

彼女達がアルビオンから帰ってきた3日後には、正式にアンリエッタとアルブレヒトの婚姻が両国に伝えられ、一カ月後の式の日取りも全て決定していた。

「ああ、随分、ぐーすか寝てたな」

日帰りでミュルハイムへ行っていたエドが、呑気に書き物をしながら話している。

その婚姻に先立ち、トリステイン、ゲルマニア両国における軍事同盟が、ゲルマニア帝都のヴィンドボナで調印。こうして晴れてルイズ達の役目は終わったのであった。

一応、色々とアレンに聞きたいこともあったが、この場にはないようである。

「そののバカにお礼言つとけよ、寝ずに看病してたんだからな」

見ればベットに伏せるように才人もぐーぐーと鼾をかいて寝ていた。

気持ちよさそうに寝ている彼の顔を見ると、何だか腹立たしい。

「全く…、二人揃ってバカだな…」

エドが優しく呟いて、出て行った。

その軍事同盟の締結直後、雲の上の国から神聖アルビオン帝国の樹立の公布が、初代皇帝となったオリヴァー・クロムウエルの名において宣布された。この事態に両国には緊張が奔ったが、すぐに帝国側は特使を派遣し、不可侵条約の締結を打診してきた。

ギリギリの状況での行動であったが、一応両国はこれを呑んだ。

「ほーら、起きなさい。バカ犬」

エドがいなくなった事を確認すると、ルイズは才人の頬を突っついた。むにゃと幸せそうな顔をして、すぐに跳ね起きた。

「あ、ああ、すぐに用意するからな」

起きると、才人はちよつと照れながら洗面器を用意した。

床に洗面器を置き、才人が両手で水をすくうが、ルイズは動かない。柔らかい、桃色がかったブロンドの髪が、崩れて顔にかかっている。

ルイズは眠そうに目をこすると、ぼんやりとした表情のまま、口を開いた。

「そこに置いといて。自分で洗うから、いいわ」

「え……………」

才人は驚いたのだ。

まさか、ルイズの口から「自分でやる」なんて言葉が出るとは思わなかったのだ。

「ルイズ？」

顔の前で、才人は手をブンブンと振った。

ルイズは拗ねたように唇を尖らせると、そっぽを向いた。頬が赤く染まっている。

そして、なんだか怒ったような調子で、ルイズは言った。

「自分で洗うから、ほつといて…」

ルイズはそう言うと、洗面器に手を入れた。

そして、水をすくうと思いきり顔を振って、顔を洗った。

以前才人は、ルイズに日頃の鬱憤晴らすということで、魔法学院の裏にある池で捕まえたカエルを洗面器の中に入れておいた。

カエルが大がつくほど嫌いなルイズは、洗面器の中でスイスイ泳ぐ赤い両生類を見て泣いてしまった。まあ、いきなり顔の前に嫌い

なカエルがあらわれたので、そりゃあもう、泣いた。

びーびー泣いた。

一護たちが何事かとルイズに尋ねたところで、さすがに悪いと思っただ才人はすぐに謝った。

しかし、そこはルイズ。やはり許さずに飯を抜いたのだった。

洗面器一つで、そんな風にケンカばかりしていた二人だったが、アルビオン行きで何かが変わった。

「……………」

ルイズのいきなりの変化に才人は戸惑う。しかし、その変化にはお互い気づいていなかった。

バシャバシャという水音と共に、才人の顔にも水が飛び散る。

「お前、顔を動かして顔を洗うタイプか」

才人がそう言うと、ルイズははっとした顔になり、それから、頬を染めて怒る。

「い、いいじゃないのよ!」

「いや、いいけどさ」

それから才人は、着替えを取り、そのまま流れ作業のようにルイズに渡した。

そのまま、じっと彼女を観察するように才人は見つめた。すると、ルイズは急に慌てた顔になり、下着を隠した。

「どうした?」

才人が尋ねると、なぜかルイズは顔の下半分だけシートで隠して言った。

「出て行って」

「いや、そりゃ出て行くけどさ……」

「いいから出て行ってって言ってるじゃない！」

それからルイズは再びシートに顔の下半分をうずめて、才人を睨み、

「うっ」

と子猫のように唸った。

「ちゃんと部屋出るけどさ……」

「うっ……！」

尚も睨んで、唸っている。

「わ、わかったよ。出て行くから、鞭を持つな！」

顔を真っ赤にして鞭を手にとったルイズを見て才人は、慌てて部屋を出た。

才人がルイズの様子を見てなんか妙だと思いつながら壁に背を預けた。どうやら着替えるところを見られるのがイヤなようだ。

それは年頃の少女なら、至極当然な感情ではあるが、今までは男どもがいる部屋では平気な顔をしていたルイズである。才人はいったいどうしたことだろうと思った。

「どうしたんですか、こんな所で？」

トコトコと石段を上がってきたアレンが、壁に背を預けて考え事をしていた才人に訊いた。

「いや、ルイズが着替えてるんで」「
「そうですか」

アレンはそう言うと、また再び石段を降りていった。
才人はその去っていく銀髪の後ろ姿をぼんやりと見つめながら、ルイズの唇の感触を思い出した。

「……」

思い出して真っ赤になる。

実は才人はこそつと寝ているルイズに唇を合わせてしまったのである。寝ている隙にキスをするなんて、卑怯だし、いけないことだ。でも、あのときは我慢できなかった。

昏々と眠り続けるルイズを愛しく感じてしまったのであった。

（もしかして！！）

ルイズは、そのキスを知っているのではないだろうか。

そして、才人に危険を感じ襲われると思っ
て着替えを隠すようになったのではないだろうか。

才人はそこまで思っ
て、ぶるぶると首を振った。あのときルイズが起きていたのなら、黙っ
ているはずがない。

ベッドに忍び込んだときなんか、ひど
かったじゃないか。

そして、次の日には犬のよう
に鎖につながれ、『わん』と言わ
された。

（あ。そっか……！）

才人は気づいた。

アルビオンに行く二日前の夜、寝ているルイズに襲い掛かろうとしたから、危険を感じてるんだ。

これは確かにキスどころの騒ぎではない。だから、部屋から追い出されたのだ。

そこまで考えて、才人は膝をついて落ち込んだ。激しく後悔した。

「そっいや、あのせいで、シャナと夏梨の視線も何か厳しいし……」

ルイズは才人に襲われたくないのだ。

それは当たり前だけど、つまり好きではないのだ。だが、その当たり前が心底、悲しい。

ぼそつと呟く。

「一縷の望みとか？」

「ねえよ」「ないわよ」

そっだ、ないのだ。

才人はルイズに好かれてない。ただの使い魔。

「つか、身の危険を感じる位に危険なんですよ？」

そっだ。いけない使い魔だ。そう思われてる。ルイズとの間に壁が出来ている。

そこで機と閃いた。ルイズに日頃の感謝とかなんとか言って花束を渡そう。誠意を示せばルイズも俺に危険を感じなくなってくれるかもしれない。

そこでふと、才人は気が付いた。

「俺誰と喋ってるんだ？」

才人は振り向く。

するとそこには、才人を無表情で見つめているアレンと怪訝な顔の夏梨がいた。

後ろには着替えを終えたルイズもいる。

「全部、聞かれてたあ！」

「なにぶつぶつと呟いてんの？」

いつの間にかブツブツと口の中でつぶやいていたらしい。

わずか二十秒の間にそこまで考え、結論に至り、落ち込んでいた才人はあんぐりと口をあけ、幽霊のような声で答えた。

「すいません。もう二度と、独り言はいたしません」

「そうして。なんだか、気味が悪いし」

ルイズはじつとそんな才人を怪訝に見つめていたが、歩き出した。

「ほら、朝ご飯行くわよ」

「もう昼だよ」

「ほら、昼ご飯行くわよ」

二人は歩き出すが、才人の足取りは重い。

「ほらっ！なにポケっとしてんのよ？ 行くわよ」

そんな彼を見て、ルイズが一喝する。

「はいでしゅ」

「でしゅ？」

「はいでしゅ」

才人はしょぼんとしながら、ルイズ達のあとに続いた。

「では、部屋の掃除をしておくのであります」

入れ違いに体中から箒を生やしたヴィルヘルミナとすれ違った。

アルヴィーズの食堂に着くと、なにやら人だかりができていた。ちょうど自分たちが座る席あたりである。

人混みをかき分けて近づくと、席に座っている一護とエドにマリコルヌともう一人、彼と似たような体形の少年が抗議の声をあげていた。

「おい、貴様。そこは僕の席だぞ」

「使い魔風情が座るなんて、どういうことだ」

一護はダルそうにマリコルヌを見つめる。

エドは鋭い目で、名前の知らない少年を見つめる。というか睨みつける。

「えーと、誰だっけ？」

「ん？貴様。僕を知らないのか！？前にも名乗っただろうが！僕は

…」

そういえば、名前を知らない。

尤も覚えていないと言う方が正しいのかもしれない。

「あ、そうだそうだ。マリルリ君だったな」

「え、そんな名前だったけ？」

二人はそう言って、思案顔。

「覚えてないのか、この風上のマリコル又様と…」

「この春風のオリオン様…」

そこで最後だった。

「うるせえ！」

エドが驚異的な威力を誇るラリアットを首にぶつける。

片方は鋼鉄だ。その痛みは計り知れない。

「おふっ！」「ぐっぶ！」

二人はその力に押されてこけてしまう。地から離れた足をガツシリと二人が極める。

「4の字固め…！」

「痛い痛い！」

すぐにタップし始める。

「ぼっちゃり王子さま達よ。さっさと椅子を持ってこい」

「わ、解ったよ…」

そう言って、解放された二人はぶつくさと言いながらも、椅子を手を持って戻ってきた。だが機と気が付いた。

「なんで、僕が椅子を持ってくるんだよ！」

「ふざけんな！平民を座らせて、僕が椅子をとりに行く？」

怒り心頭という二人へ視線を合わせることも無く、一護とエドは食事を始めた。

その傍で先に席に着いていたアレンの胃へとマリコヌルとオリオンの食事が消えて言っている事は誰も言わない。リナリーと夏梨は可哀想な目で見ていた。

シヤナとネギは、既に食事を終えて、朝早くから図書館へ出かけているので、ここにはいない。

「取りに行つてたじゃねえか」

一護が口を挟む。

「うるせえよ！おい使い魔、どけ！」

「ここは貴族の食卓だ！平民が据わって良い場所じゃないんだよ！」

ふくよかなマリコヌルとオリオンは、思いきり胸をそらせて、精一杯の虚勢を張った。

今さらだが、ちよつと震えている。さっきのラリアットと4の字固めの痛みが残っているのだ。

「あいつら、大丈夫か…」

「死んでも知らんぞ…」

ルイズたちは、数日学院を留守にしている間に、なにかとんでもない手柄を立てたらしい、ということさえ昨日の今日なのに噂されていたのだ。

「ご馳走様でした」

アレンが丁寧の手を合わせて、食事を終える。

「ごちそうさまでした」

彼に習って皆、手を合わせて食事を終えた。

まだ二人は喚いているが、そんなことへつちやらだ。すたすたと片づけを終えて、午後の当番へと向かって行ってしまった。

「まだ、話は…」

「って、僕らの昼食が無い！」

二人の悲痛な絶叫が、食堂に響きわたった。

「やい、ルイズ。お前、学院を休んだ日にどこに行ってたんだ？」
「私も知りたいわ。教えてよ。ルイズ」

今、ルイズは教室のクラスメイトたちに囲まれていた。

教室に入っていくと、すぐにクラスメイトたちがルイズを取り囲んだのだ。

ルイズたちは学院を数日空けていた間に、なにか危険な冒険をして、とんでもない手柄を立てたらしい、ともつぱらの噂であったからだ。

事実、魔法衛士隊の隊長と出発するところを何人かの生徒たちが見ていたのである。

「ねえ、教えてよ」

「早く早く」

とてもじゃないが、穏やかではない光景である。

そんなわけで、何があったのか、クラスメイトたちは聞きたくてうずうずしていたのであった。

食事の席には教師たちがいるので遠慮していたのである。

「まったく、同世代だったのに、喧しいな…」

「そうですね…」

一護はそんな集団をかきわけて、いつも座っている席にどかっと腰を下ろした。

その隣には教室初体験のエドとアレンがいる。ぶすつとした様子で機嫌が悪そうだ。

キュルケとギーシユは、すでに席についていた。そんな二人にも、やはりクラスメイトの一人が取り囲んでいた。

「ねえルイズ。あなたたち、授業を休んでいったいどこに行っていたの？」

腕を組んで、いかにも偉そうに話しかけてきたのは、香水のモン

モランシーであった。

彼らは既に席に座っていたキュルケに同じように尋ねたが、キュルケは優雅に化粧をしていて全く答えてくれなかったのである。

その為、クラスメイトたちは、常に自分のペースを崩さない彼女に業を煮やし、新たにあらわれたルイズに矛先を変えた。

だが、ギーシュは二人とは違い、完全に舞い上がっていた。

「きみたち、ぼくに聞きたいかね？」

そう聞くと、周囲はうんうんと頷く。

「ぼくが経験した秘密を知りたいかね？」

そう聞くと、また周囲はうんうんと頷く。

「困ったウサギちゃんだな！あっはっはっは！」

と、呟くなり足を組み、人差し指を立てていた。完全に調子に乗っている。

ルイズは、人混みをかきわけて、調子に乗っていた頭をバシッとひっぱらいた。

「痛ッ！なにするんだね！」

「口が軽いと姫さまに嫌われるわよ。　ギーシュ」

アンリエッタの名前を引き合いに出されたので、ギーシュはうつと黙ってしまった。

二人のそんな様子を見て、余計に好奇心をくすぐられたクラスメイトたちは最後の希望のルイズを取り囲んで、再びやいのやいのやり始めた。

「ルイズ！ルイズ！　いったい何があったんだよ！」

「気になるじゃない！」

そんな詰め寄られたルイズはちよつと恥ずかしそうに、

「なんでもないわ。ちよつと学院長に頼まれて、王宮までお使いに行つてただけよ」

キュルケは意味深な微笑を浮かべて、磨いた爪の滓をふつと吹き飛ばした。

ギーシュがその言葉に頷くが、クラスメイトたちはつまらなそうに、自分の席へと戻つていく。

取り付く島もないルイズたちの態度に、頭にきたクラスメイトもいたらしく、口々に負け惜しみを並べた。

「どうせ、たいしたことじゃないよ」

「そうよね、ゼロのルイズだもんね」

「魔法のできないあの子に何か大きな手柄が立てられるなんて思えないわ」

ほそぼそと言い始めるが、ぐつとルイズは堪えた。

「フーケを捕まえたのだから、きつと偶然だろ？」

「たまたま、あの使い魔が破壊の杖の力を引き出して…」

見事な巻き毛を揺らして、モンモランシーがイヤミつたらしく言つたとき、才人が口を挟んだ。

あまりのクラスメイトたちの口ぶりに、ついカツとなつてしまつたのである。

「うるせーよ！巻き毛女！」

「んな！」

モンモランシーが声にならない悲鳴を上げるが、無視して叫ぶ。

「適当なこと、言ってんじゃねえよ！」

また何か、ルイズやモンモランシーが言いたそうな顔をしていたが、そのとき、教室にコルベールが入ってきたので、しかたなく皆は席についた。

「さてと、皆さん」

コルベールは禿げ上がった頭を、ぼんと叩いた。

そして、彼は実に嬉しそうに、ででんっ！と机の上に妙なものを置いた。

「それはなんですか？ミスタ・コルベール」

机の上に置かれたものを見て疑問に思った生徒の一人が質問した。果たしてそれは、妙な形をした物体であった。

箱自体の形は、正方形で、その上には長い円筒状の金属の筒がついている。

そして、煙を吐き出すのかわからないが、パイプがついている。箱には開閉できるように蓋がついており、コルベールは蓋を開けて、クラスメイトたちに中を見せた。

コルベールはおほん、ともったいぶった咳をすると、語り始めた。

「えー、『火』系統の特徴を、誰かこのわたしに開帳してくれない

かね？」

「コルベールはそう言うのと、教室を見回した。すると、教室中の視線が、キュルケに集まった。

「ハルケギニアで『火』といえば、ゲルマニア貴族である。その中でもキュルケの家門であるツエルプストー家は他国にまで名を届かせる名門である。」

「キュルケは授業中だというのに、爪の手入れを続け、気だるげに答えた。」

「情熱と破壊が火の本領ですわ」

「そうとも！」

「自身も『炎蛇』の二つ名を持つ、『火』のトライアングルメイジであるコルベールは、にっこりと笑って言った。」

「だがしかし、情熱はおいといて、『火』が司るものが破壊だけでは寂しいと、このコルベールは考えます」

「カパカパと開閉できる蓋を動かしながら、そんな事を言い始めた。」

「諸君、『火』は使いようで、いろんな楽しいことができるのです」

「火は確かにその通りだろう。文明とは神に始まり、神話とは火に始まる。」

「だが、エドの上役は『焰』だ。火などという生易しいものではない。」

「いいかね、ミス・ツエルプストー。破壊することや、戦いで火を使うことだけが『火』の見せ場ではないのですぞ」

「トリステインの貴族に、『火』の講釈を承る道理がございませんわ。ね、ダーリン？」

「うん、何で振んの？」

キュルケは自信たっぷりと言い放つ。突然一護の方にも矢が飛んできたが、とりあえず無事に処理する。コルベールは、キュルケのイヤミにもまったく動じず、ニコニコしている。

「でも、その妙な代物はなんですか？」

教卓の上に置かれた奇妙な代物を見て尋ねる。

「前といい、ミスタ・コルベールはどこからそんな代物を持つてくるのかしら？」

キュルケは、キョトンとした顔で、机上の装置を指差した。

とりあえず、そのことは置いといて、コルベールは装置について説明を始めた。

「この中には油が入っております」

見れば暗くて解り難いが、特徴的な香りのする粘ついた液体が入っていた。

「この中に入った油に着火しますと……」

才人は持ち前の好奇心を発揮してじっと見入った。

教室中の視線を集めている事にワクワクしながら、コルベールが着火すると、

「きいきい！」

ともう一つの蓋を突き破ってデフォルメされた蛇が飛び出してきた。

円筒形の筒からはモクモクと煙が上がっている。

「な、あれって……」

「はは、ちよつと興味出てきたな……」

エドはコルベールの持つてきた彼の発明に珍しく興味を持った。

コルベールは、呆氣にとられたクラスメイトたちを実に嬉しそうに見回すと、両手を上げて言った。

「さて、では皆さん！誰がこの装置を動かしてみないかね？」

そう言うが大掛かりな装置の割には、随分としょぼくれた代物である。

生徒たちの興味は一気に失せてしまった。蛇を出すだけなら、魔法で出した方が早い。そう考えているのだった。一部の生徒を除いて。

「なあに！簡単ですぞ！この穴に杖を入れて『発火』の呪文を唱えるだけですぞ！」

後ろを向いて、このシステムを図解し始めたコルベールに見られないように、キュルケが3人の傍に寄ってきた。興味のあったギーシユとタバサもコソコソとやって来た。

黒板に向かって、何やら書き込んでいるコルベールが気が付いていない。

「あれって、前に言ってた『えんじん』ってやつじゃないの?」

「まあ、そうだろうな。あの図解、技師ウイリヤに見せたら喜ぶぞ」

こそこそと小さな声で話し始めた。

彼女の声には、今までに無い好奇心が現れている。

「あれが貴方達の世界ではどこにでもあるの?」

「ああ、まあな」

エンジンは自動車に限らず、物体を自走させる為に欠かせない代物だ。

水蒸気機関に始まり、小さい労力で大きな馬力を出せるように、ガソリンエンジンへと変化していった。

「俄然、僕は君たちの世界に興味が沸いたよ…」

プルプルと震える声でギーシュが言う。この三人は兎に角、新しいものに興味があるのだ。

ルイズは仲良く話している6人が気に入らずに、言おうとガタツと立ち上がった。だが、それをモンモランシーに指差されてしまった。

「ルイズ、あなた、やってごらんさいよ」

その声にくるりとコルベールが振り返る。彼はニコニコしながらルイズを見つめた。

「どうですか?ミス・ヴァリエール! やってみてくれないかね?」

ルイズは困ったように、首をかしげた。

「土くれのフーケを捕まえ、なにか秘密の手柄を立てたあなたなら、あんなこと造作もないはずでしょ？」

ルイズは気づいた。

モンモランシーは、自分に失敗させて恥をかかせようというのだ。おそらく、最近ルイズが派手な手柄を立て、舞踏会の主役になったり、ちやほやされてるのが気に入らないのだ。

モンモランシーが自分に輪をかけて嫉妬深く、そして目立ちたがり屋であることをルイズは思い出した。

彼女は尚も底意地の悪い挑発を続ける。

「やってごらんなさい？ほら、ルイズ。ゼロのルイズ」

ゼロと呼ばれてルイズはかちんときた。モンモランシーごときにナメられては、黙っていられない。

ルイズは立ち上がると、無言でづかづかと床が破れそうな勢いで教壇に歩み寄った。

才人の表情が引きつる。一護達は呆れてしまった。才人はルイズのそんな様子を見て、モンモランシーを睨みつけた。

「おいモンモン」

「モンモンですって！わたしはモンモランシーよ！」

そう反論したモンモランシーに尚も才人は強い声で叫ぶ。

「ルイズを挑発すんなよ！爆発すんだらうが！」

「あ、言っちゃまったな……」

一護が天を仰いで諦めた口調で呟いた。そして言うてから、才人

はしまった、と口に手を当てた。

ルイズが才人のセリフを聞きつけ、目尻を吊り上げた。

「見てなさいよ…」

静かな怒りが教室に満ちる。

才人のセリフで、ルイズの実力と結果と二つ名の由来を思い出したコルベールは、その決心を翻そうとして、オロオロと説得を試みた。

「あ、いや、その、ミス・ヴァリエール」

うろたえぶりが半端ない。

彼女が去年起こした惨劇を何度も見ていたコルベールは慌てた。

「その、なんだ、うむ。 また今度にしないかね？」

「わたし、洪水のモンモランシーに侮辱されました」

冷たい声でルイズは言った。 鳶色の瞳が、怒りで燃えている。もう完全に怒っていた。

「ミス・モンモランシには、私からよく注意しておくよ。 だから、その、杖をおさえめてくれないかね？」

必死になって押し留めているが、ルイズはつかつかと教壇へ向かう。

「いやなに、君の実力を疑っているワケではないのだよ」

彼の顔にも冷や汗が流れる。

「魔法はいつも成功するというわけではない。ほら！言うではないか。ドラゴンも火事で死ぬ、と」

ルイズはコルベールを睨んだ。

「やらせてください。わたしだって、いつも失敗しているわけではありません。たまに、成功、します。たまに、成功、するときがあります」

ルイズは自分に言い聞かせるように、区切って言った。声が震えている。

才人はこうなったらルイズは神様だろうが止められない、と思った。

コルベールは天井を見上げ、嘆息した。

「これ、ヤバイな。逃げるか」

「そうね、そうした方が懸命ね」

6人が逃げ支度を始めた時には、ルイズは蓋の中へと差し込んでいたのだ。既にやる気である。

才人は隣でそんな事が起きているとは知らずに、ルイズの顔をぼんやり見ていた。

「で、ではミス・ヴァリエール。火をお願いします」

コルベールは、冷や汗を浮かべて、ルイズに促した。ルイズは大きく深呼吸すると、目をつむった。

「ミス・ヴァリエール……」

「おお、始祖の導きを……」

コルベールが、祈るように呟いた。教室中の生徒が皆、手を合わせて祈っていた。

「グッバイ！ 才人」

「君のことは、忘れない！」

「え、何言ってるんですか？」

そう言った時には皆、窓へと走り始めていた。6人が机の上だとか無視して逃げる。何人かの抗議の声が上がったが無視して進む。

パリンとタバサを丸太のように担いで先頭を奔る一護が、ガラスを突き破った時、ルイズがとうとう、可愛らしさ抜群の鈴の音のよ
うな声で、呪文を詠唱した。

教室中の全員がピキーンと緊張する。

期待通り、順当に円筒は装置ごと爆発して、ルイズとコルベールを黒板に叩きつけた。

生徒たちから悲鳴があがり、爆発によって逃げ場を見つけた火は、辺りに炎を振りまいた。

「ああ、やっちゃまったな……」

「皆、逃げれば良かったのに……」

爆風を回避した6人が窓の外から眺めている。

生徒たちは逃げ惑った。椅子や机が倒れ、燃える中、ルイズはむつくりと立ち上がった。見るも無残な格好である。制服は焼け焦げ、可愛らしい清楚な顔は煤だらけ。

しかし、さすがである。

大騒ぎの教室を意に介した風もなく、腕を組む。そして呟いた。

「ミスタ・コルベール。この装置、壊れやすいです」

コルベールは見事に気絶していたので、答えることができなかった。

代わりに生徒たちが口々にわめいた。

「お前が壊したんだろ！ゼロ！ゼロのルイズ！」

「いい加減にしてくれよ！もう二度目だぞ！」

「いいから、早く火を消してくれ！」

その教室中の喧騒を打ち消すようにモンモランシーが立ち上がり、呪文を唱えた。

『水』系統の呪文である、『ウォーター・シールド』である。現れた水の壁が、炎を消し止めた。

クラスメイトたちの喝采が飛ぶ。

それからモンモランシーは勝ち誇ったように、ルイズに言った。

「あら、もしかして、余計なお世話だったかしら？」

クスクスとまた嫌味ったらしい笑顔を浮かべる。

「なにせあなたは優秀なメイジだもんね。あのぐらいの火、どつてことないもんね」

ルイズは、その顔を見つめながら悔しそうに、きつと唇を噛み締めた。

まだ彼方此方に火や焦げ臭い臭いが漂う中。

「何をやっとするんじゃね……」

そんな風にガラリと教室の戸を開けて入ってきたのは、学院長だった。

「そのような顔をしておる場合ではないぞ。ミス・ヴァリエールに
ミスタ・グラモン。お客様じゃ」

煤けた顔のままルイズは学院長室へと連れて行かれた。
服を着替える暇が無かったので、こげた服はそのままであるが、
とりあえず顔だけは拭いておいた。二人を待っていたのは、

「姫さま！」

ルイズは、一行が見守る中、ひしと抱き合った。待っていたのは
アンリエッタであった。

彼女の顔を見て、相変わらず一護は思つ。

(ホント、意思のねえ姫様だな…)

ぼんやりとそんな事を考えているとは露知らず、二人は固く抱き
合った。

「ああ、無事に帰ってこれて何より…。うれしいわ、ルイズ」

一緒になって連れてこられたギーシュに至っては感動して泣いて
いる。

「姫さま……………」

ルイズの目からポロリと涙がこぼれた。何度、見ても気持ち悪い。なれそうにも無い。そんな二人の遣り取りを苦い顔でアレンとエドは見ていた。

「やはり、あなたはわたくしの一番のおともだちですわ」

ソファーに座った一同の為にお茶が用意された。

オスマンはぷかり、ぷかりとキセルを吸いながら、一同の様子を見ていた。口を挟む気は無いらしい。またソファーに無遠慮に腰を下ろした一護たちをキツとルイズは睨みつけたが、するりと無視。

ここで何か言ったらまた朝食の席と似たような感じになる。

はつきり言つて、この三人は男女平等である。何故か危険思想に聞こえるのは気のせいだ。

「ウェールズ様は……………」

ルイズが言いにくそうに話し始めると、アンリエッタは力なく首を横に振った。

「そうですね……………」

ウェールズ王子死亡の報は、新政府樹立の公布と共に王族らの処刑がなされ、その中に彼の名はあった。処刑ではなく戦死という扱いだっただのが、せめてアンリエッタの気持ちを軽くした。

「申し訳ありません。私がもっと強く説得していれば……………」

そう言い始めたルイズに、また力なくアンリエッタは首を振った。

「いえ、良いのですよ。ウェールズ様は、きっと亡命を断るつもりだったでしょう」

それに、と続けてアンリエッタは言う。

「わたくしの婚姻を妨げようとする暗躍は未然に防がれたのです」

心のそこから望んでいない、その時は、少しずつ近づいている。ギーシュがぐつと唇を噛んだ。

「わが国はゲルマニアと無事同盟を結べました。危機は去ったのですよ、ルイズ・フランソワーズ」

「そうですね」

そう言って一礼してから思い出したように、ルイズはポケットからアンリエッタにもらった水のルビーを取り出した。

「姫さま、これ、お返しします」

だがアンリエッタは首を横に振った。

「それはあなたが持っていないさいな。せめてものお礼です」

「こんな高価な品をいただくわけにはいきませんわ……」

突き出すルイズの手を優しく握らせた。

出発の前の夜のように。

「いいのです。忠誠には、報いるところがなければなりません。い
いから、とっておきなさいな」

「ありがとうございます…」

それだけ言うとアンリエッタは帰り支度を始めた。どうやらルイズにお礼を言う為だけに、態々ここまで来たようだ。去っていく姫の馬車を見送りながら、事も無げに一護が呟いた。

「あの姫様、最悪だな」

ギーシュはその言葉の意図するところが解り、少し残念に思った。確かに部外者である彼から見ても、彼女を盲目的に信ずるのは如何なものかと彼は思っている。

確かにある種の信仰の対象であるが、その為に戦えはしない。

「何よ、何て口聞くの！」

またボロボロの姿のまま、ルイズが噛み付く。

遠くの空に黒い雲が見える。彼らがこの世界に遣って来てから初めて雨だった。

「ああ、雨が来ますね」

時折、白く光る雲を見ながらアレンがそんな事を呟いた。時刻は既に夕方に差し掛かっていた。

(ど、どうも、こんばんは…)

栗毛の見事な少女が冷や汗を垂らしながら、恐る恐る言葉を紡ぐ。

(ちょっと目立ちません、ケティ・ロツタです…)

彼女の首筋には鋭く尖った爪が突き付けられている。

名家の息女でそれなりに可愛らしい顔をしているが、その顔は今
は恐怖に引きつっている。魔法を唱える為の杖は机の上だった。

目の前にはポカンとして呆れているキュルケがいる。ちょうど授
業を終えた所らしく、小脇には使っていた教科書などを入れていた
カバンを抱えている。

(な、なぜ、私がこんなデンジャーな事になっているのか…)

恐怖で凍り付いてしまい、廻らない頭で必死に言葉を考える。

(今日はそこから話したいと思いまーす…)

ケティは昼頃に中庭で遊んでいた黒い犬を見つけたのだ。

そう言えば、つい先日キュルケがラ・ロシエールで見つけたとい
っていた事を思い出し、この犬がその拾った犬だということを思い
出した。

「ほら、ボールよ」

ポイツと友人と遊ぼうと持っていたボールを投げつけてみるが、犬は無反応。

もしかしたら怪我でもしているのかと思って、あまり深く気にしなかった。

「あら、ケティじゃないの、どうしたのこんな所で？」

「げ、キュルケ先輩……」

飼い主だという火の女王様に見つかってしまった。

正直言つてケティはキュルケが苦手だった。モンモランシーヤルイズのように嫌いなのではない。纏う空気やレベル、全てが格上の彼女が苦手なのである。

不味い所を見つかってしまったと冷や汗が流れる。

「これから授業だからね、ちょっと面倒見てくれるかしら？」

「は……？」

返ってきた言葉は予想外だった。

「じゃ、お願いね〜！」

そう言つて返事を聞くまでも無く、彼女は午後の授業に向かってしまった。

半ば押し付けられた感じだが仕方が無い。黒犬を自分の部屋に連れて帰ることにした。

「はあ……」

連れて帰った部屋はスタンダードなものだ。
物は余り無く、普通に生活できるだけのベットや本棚くらいしか
ない。

「どこも怪我してるようには見えないし…」

足には怪我は見られない。お腹や背中、体中弄ってみたが、どこ
にも異常は無かった。

では、何故ボールに反応しなかったのだろうか。

「もしかしたら、お腹がすいているのかも…」

そう思つて部屋を後にする。

少しの間があつて、食事用にと皿一杯のミルクと共に戻ってくる
と、

「あ！」

「な…！」

犬はいなくなつて、上半身裸の男の子がいた。

年齢は10歳くらい。髪の毛は真っ黒で手入れがされていないの
か、ボサボサだった。と、男の子の容姿をじっくり見られたのは、
そこまで。

その事に驚いていると、飛び掛られ、爪を首筋に当てられている
という有様だった。

「やめろ、誰にも連絡するんやない……」

とても年下とは思えないほどに冷たくて、落ち着いた声。

その事に身が竦んでしまう。目の前のキュルケがじりと杖を構えようとするが、人質を取られた状態では相手を下手に刺激するだけである。

「あ、あの……」

「うるさい」

「はい、ごめんなさい！」

少年の一喝に黙ってしまふ。

外ではとうとう降り出した雨が段々と強さを増していた。

「なあ、その姉ちゃん、何か着るもんと食いもん持ってきてくれや……」

「ええ、いいわよ。だから、その子を話さない」

キュルケは優しく近づいて、手を掴んだ。

そうすると最初から力など入っていなかったかのように、するりとケティの拘束が解けた。そのまま謎の少年はフラリと糸が切れるように倒れてしまった。

「せ、せんぱい。助かりました」

「よしよし、怖かったわね」

泣きそうな顔で飛び込んできたケティをキュルケは優しく受け止める。

「にしても、この子は…誰なのかしら？」
「さあ…？」

倒れ付した少年の横顔を見ながら二人は呟いた。

「つて、先輩、血がー！」

「あら、大変」

トクトクと赤い血が切れたキュルケの腕から褐色の肌を染めるように、流れ出していた。

だが、キュルケのほうは気にした風でもない。動脈が切れたわけではないので、すぐに失血死とはならないだろう。ここで下手に興奮する方が、怪我を悪化させる。

「何があつたんですか！」

叫び声に反応したのか、ネギとタバサが勢い良く飛び込んでくる。二人とも長い杖を槍のように構えている。狭い部屋で長柄の武器というのは不利になるのが定石だが、ちゃんとした体術を学んだ彼らには、よほどの使い手で無い限り、まず覆せる。

「つて、コタローくん！」

倒れ付した少年を見たネギが思いつき叫ぶ。

すぐさま駆け寄って、肩を持って、思いつき前後に降り始める。

「コタロー君、しっかりして！」

「あら、あらら…？」

「あれ、知り合い？」

部屋に集まった3人の女の子の視線が集まった。その中で、ゆっくりとコタローの目が開いていく。

「ん、ここは…」

小太郎が一番最初に見たのは、赤い髪の少年。

良く見た鼻の先に眼鏡をちょこんと掛けた利発そうな少年の顔。よく見ていた忘れたくない顔だった。

「ネギ…、ネギか…」

「そうだよ、コタロー君」

そういつと頭痛に耐えるように頭を抱えて、何事か考え始めた。

「せや、ネギ！勝負しようぜ！」

「いきなりそれ!？」

「はあ……今日も疲れたわ……」

アンリエッタは立つ事さえも疲れるのだろうか、倒れこむようにベッドへと体を預けた。衣服は既に脱いでおり、身を纏う物は一枚の薄着だけ。

彼女のベッドは最高級であるため、なるほど、疲れた分だけ心地よく感じる。

「ルイズ、御免なさいね」

今日逢ったばかりの幼なじみの顔を思い出す。どこか哀しそうな顔をしていたのが印象的だ。

このまま睡魔に襲われて、夢の世界へとおさらばしてもいいのだが、起きている間に少し幸福な時間を過ごしたい。アンリエッタは急そつに起き上がると、そのままベッドの横にあるテーブルに近づく。

小さなテーブルに相応しい物がそこには置いてあった。ワインとグラスである。

アンリエッタの楽しみといたらこれしかない。たとえあまりよろしくない行為であったとしても、それが彼女を止める理由にはならなかった。

「ふう…」

王女のみままでいたかったアンリエッタは、皇妃になる重圧と責任をいまだ扱いかねていた。

だが、それは違う。そんなものになる責任など受け取りたくはなかった。

小さな欠伸をかいて、ワインとグラスに手を伸ばす。息抜きという名の飲酒が、彼女には必要なのである。壺をとり、中身をグラスに注ぐと、躊躇いもなくそれを一気に飲み干す。

「ん…、ん…」

口元から呑みきれなかったワインが、血のように零れていく。

婚姻が決定してからは、毎日がこうであった。

もしお付の女官や侍従に見られたら、間違はなく取り上げられてしまう。だから、こうして一人つきりになれるこの時間に飲むのだ。

もう一杯飲もうと再び注ぐ。と、頭がふらふらとしてきた。

「飲み過ぎ……ではないわね」

とろんとした眼差しでワインのラベルを見る。普段とは飲んだ量は変わらないのだが、いつも以上に疲れてる証拠なのかもしれない。アンリエッタは杖を使ってルーンの文字を紡ぐ。すると、杖先から水が溢れ出て来た。水蒸気を液体に戻す、『水』系統の初歩魔法である。

あつという間に、水はグラスの許容量を越えて零れ落ちる。アンリエッタは慌てて杖先から溢れる水を、蛇口を捻ったかのようにピタッと止めた。

そして、グイツと再び一気に飲み干し、口元を拭った。

「ふふ、可笑しいわね……」

この時間だけ、彼女は一人の女の子となるのだ。そう思うと自嘲的な笑みがこぼれた。

普段は見せられない態度も、ここでは平気で取れる。そんな時間であった。

あまり飲み過ぎるのも体に悪い。グラスをテーブルに戻したアンリエッタは、ベッドに再び倒れ込む。

「なんで……」

いつもと同じように酔い、いつもと同じ思い出を頭に浮かべる。

一番楽しかった日々、一番輝いていた日々。

何事にも囚われず、自由に過ごせた十四歳の夏。

それは短かった。彼女の生きてきた中では本当にごく僅かであった。

しかし、それは彼女の中ではとても大きい、絶対に忘れる事のない時間でもあった。

「どうして、あなたは…」

それでも、たった一つだけ悔やまれた。

愛する人に言って欲しかった言葉を、彼は最後の最後まで言うてくれなかった。言わないまま、この世から姿を消してしまった。

その事を、どれだけ不思議に思ったのだろうか。どれだけ理由を聞きたいと思ったのだろうか。

今になっては誰も、何も答えられない。

「あのおきおっしやってくれなかったの？」

この事を知ってるのはアンリエッタと、彼だけ。

そしてその彼はもういないのだ。この世のどこにも、いない。

その事実が深く、重く心に押し掛かる。理屈ではわかっていても、感情が言うことを聞いてくれない。

もう二度と見れないあの笑顔、もう二度と戻れないあの日々。

途端、

「あ、れ…」

少女の涙腺から透明な雫が伝った。

「あ……れ……？」

なんで涙を流したのだろう。明日の朝は早く、大事な日である。

ゲルマニアの大使との折衝が控えてある。軍事同盟締結後から、

一気に彼女の周囲は変化していた。

そんな大事な時に涙で濡れてしまった顔を見せないと決心したではないか。たとえばあの日々を思い出したとしても、今日は涙を零さないで決心したではないか。

それなのに、流してしまった。

それだけ悲しかったのだ。それだけ、辛かったのだ。

「どうして…?」

たとえどれだけ弱いところを見せないようにしても、心は素直に自分に語ってくれる。

たった、それだけの話であった。

「どうしてなの…?」

このままではよくないと感じたのが、全てを無くす為にも、アンリエッタは酔い潰れようと思い、再びワインに手を伸ばそうとした。

同時、扉がノックされた。

こんな夜遅くに何の用事であろう。慌てている様子はないので、重要な用件ではない。

ならば、寝たふりをしてそのまま去るまで待つのもいいが、それはアンリエッタにとって後味が悪い。

再び、扉が叩かれた。

仕方なくガウンを羽織ると、ベッドの上から尋ねた。

「誰ですか?こんな夜中に」

「ぼくだ」

瞬間、アンリエッタの脳が完全に覚醒した。

しかし、

「飲みすぎたみたいね」

心労から負担は増えていった。

それに比例するように、ワインの量も増えていく。どうやら今晚はよほど多かったようである。嫌にしっかりと耳に、その声は残った。

「いやだわ、こんなはつきりと幻聴が聞こえるなんて……」

わかっている。こんな事はありえないのだ。

そう、ありえないはずだ。

落ち着かせるため、アンリエッタは胸に手を当てる。しかし、心臓の鼓動はいつも以上に早く、小刻みに震え続けた。

「ぼくだよアンリエッタ。この扉を開けてくれ」

アンリエッタの呼吸が激しくなる。期待が身体を支配していく。

「ウェールズさま？」

少女は扉へと駆け寄り、震える声で呟いた。

「嘘。あなたは裏切り者の手にかかったはずじゃ……」

期待とそれと同じ位に悲しみが膨れていく。

「それは間違いだ。こうしてぼくは生きている」

信じられない思いで心がいっぱいだった。

思い出の中で、しかも聞く事のできないはずの音が、今、実際に聞こえてくる。

「嘘よ。嘘。どうして」

それでも、少女は否定する。

この扉の向こう側にいる人間が、少女は別人だと思いたい。

この扉の向こう側にいる人間が、少女はあの人だと信じたくない。

「ぼくは落ち延びたんだ。死んだのは……、ぼくの影武者だ」

しかし、声を聞けば聞くほど、否定する材料がなくなってくる。

彼の言葉は魔法がかかっているかのように優しく、また安心を与える感じであった。

「そんな……、どうして……」

「敵を欺くには、まず味方からというだろうか？」

顔の見えない彼が微笑んでいるのが解った。

「まあ信じられないのも無理はない。ではぼくがぼくだという証拠を聞かせよう」

そつだ。証拠を出せばいいのだ。それなら、この人が別人だとわかる。

少女は待つ。たとえ何時間であろうとも、彼の言葉を聞くまで待ち続ける覚悟で。

「風吹く夜に」

心から聞こえてくる声と、耳から聞こえてくる声が、一致した。

「ああ、ウエールズさま……」

少女を止める理由など、もう存在しなかった。

少女はこみ上がる涙を気にせず、扉を開け放つ。

何度も見たいと願ったその人が、何度も見たいと願ったその笑顔が、そこには、いた。

「よくぞ……ご無事で……」

涙が言葉を発するのを邪魔する。ならばと思い、アンリエッタはウエールズの胸に飛びついた。

「相変わらずだねアンリエッタ。なんて泣き虫なんだね」

ウエールズは、涙を流しているアンリエッタの頭を優しく撫でた。伝わってくる温もりは、いつか夢見た光景と全く同じだった。

「だって、てっきりあなたは死んだものと……」

言いたい事はいっぱいあった。

だが、涙に塗れて全く出てこない。

「どうして、どうして、もっと早くにいらしてくださいさらなかったの？」

「敗戦のあと、巡洋艦に乗って落ち延びたんだ」

そんな泣き崩れるアンリエッタの頭を優しく撫でながら、ウエー

ルズは微笑んだ。

「敵に居場所を知られてはいけないからずっと隠れてたんだよ」

そんな苦労など見せないほどに優しい声。

耳に入り、頭に響くたびに、アンリエッタの涙腺は緩んでいく。

「大変だったさ、きみが一人でいる時間を調べるのにね。まさか昼間に謁見待合室に並ぶわけにはいかないだろう？」

ウェールズはニコツ、とイラ好きの子供のように笑う。

「昔と変わらず意地悪ね……」

そんな彼の微笑みに、皮肉の籠った一言を言ってやる。

「どんなにわたしが悲しんだが……、寂しい想いをしたか、あなたにはわからないでしょうね」

そんなアンリエッタの皮肉に、王子は少しうるたえたような調子になって言い出した。

「そんなことはないさ。わかるからこそこうやって迎えに来たんじやないか」

ウェールズの一言一言が優しく包みこむ。

返事をするのを忘れて、しばらくこのまま抱きしめあった。

「遠慮なさらずに、この城にいらしてください……」

「すまないが、それはできないんだ」

フルフルとウェールズは首を横に振った。
アンリエッタの申し出をきっぱりと断わって、向かい合う。そこには逢えなかった分だけ成長した凛々しい青年の姿があった。何時までも夢見た少女が追いかけて続けた少年の姿が。

「どうするおつもりなの？」

アンリエッタは首を傾げる。

「ぼくはアルビオンに帰らなくちゃならない」

「何を言っているのですか！？命を捨てるだけではないですか！」

「それでも、行かなくちゃならないんだ」

決意に満ちた目はいつか見た夏の夜の瞳と同じだった。

揺らぐ事のない決意を抱えた、ウェールズの双眸がアンリエッタに訴えかける。必死の思いを、退けたく思ったが、愛しい人の思いを断わる事も出来ない。

「アルビオンを、貴族派連盟の手から解放しなくちゃならない」

「そんな！」

最早、それは蛮勇というに相応しい。

影なのだとしたら、今頃貴族派は血眼になって、王子の身柄を探しているだろう。新しい政権や王族に取って、前の王族というのは邪魔以外の何者でもない。

「冗談なんかじゃない。それが理由で今日きみを迎えに来たんだ」

アンリエッタの肩に手を置き、強い口調で言い続ける。

「わたし、ですか？」

「そうだ。アルビオンを解放するにはきみの力が必要不可欠なんだ」
必要とされているその事実。

それが非常にアンリエッタには嬉しかった。だから、もう彼の声以外は何も耳に入ってこなかった。

外では窓を雨が強く打ち付けている。

「国内には仲間がいるが、やはり信頼できる人が少ない。いつしよに来てくれるかね？」

「それは……できることならそうしたいのですが、わたくしは……」

「ごめんなさい、と頭を下げる。」

しかし、ウエルズは諦めきれないのか、ガシッとアンリエッタの肩を掴む力が強まる。

「無理は承知の上だ」

手紙の上でも彼には皇帝との婚姻を連絡してある。

それでも尚、力の籠った、愛のある顔でウエルズは見つめた。
視線が交錯する。

「でも、解放には、勝利にはきみが必要なんだ」

いわばこれは略奪愛。

いや、正確に言うなら元の鞘に、正しい場所に収まるべき話なのかもしれない。

「敗戦の中で気付いたのさ、アルビオンと僕には君が必要なんだよ

！」

どうするべきなのだろう、と思う。愛しい人に必要とされている。それだけでもう、アンリエッタは頷きたいくらいだ。だが、それでも首を縦には触れなかった。

「これ以上わたくしを困らせないでくださいませし」

すつと力強く握られた手を外す。

力なくウェールズの手は下ろされた。

「お待ちください。今、人をやってお部屋を用意いたしますわ。このことは明日また」

ウェールズはアンリエッタの言葉に割り込んだ。

「ダメだ。明日じゃ間に合わないんだ」

そして、彼女がずっと聞きたかった言葉を言ってくれる。

「愛してる、アンリエッタ。だからぼくといっしょに来てくれ」

そういうと、ウェールズはアンリエッタと唇を重ねた。

なにかを言おうとしたが、唇が塞がれて喋れない。今まで言ってくれなかった言葉をウェールズの口から聞いた。それだけでも幸せだった。

だから、アンリエッタにウェールズが魔法をかけた事に気がつかなかった。

ゆっくりと、少女は深い眠りの世界へと落ちていった。

強さを増した雨を避け、ダライオマ魔法球の中に一同は介していた。

「え、えっと、という訳で僕の友達のこと…」

「友達ちゃう！ライバルや、ラ・イ・バ・ル！」

授業が終わってから、また再び皆修行に向かっていた。

レーベンスシュルト城の前に集った面々は新しい来訪者にぼかんとしていた。ネギの友達らしいが、性格は反対にいる。真面目一辺倒のネギと違って、ガサツで粗暴といった感じの男の子だ。序でに言えば、バカっぽい。

「小太郎や、犬上小太郎。宜しくな！」

ぐっとサムズアップで答える。

そんな彼に、最年長者が一言。ダイレクトに心を抉る一言を言う。

「粗暴でありますな」

「大体、ライバルって何よ？」

ヴィルヘルミナに続いて言ったシャナにカチンと来た小太郎が、早速喧嘩腰になる。

ずけずけと遠慮の無い物言いで反撃する。

「なんや、チビ」

今度はシャナがカチンと来た。

ゆらりゆらりと炎のような怒りが湧き出てくる。傍で見ている人は気が気でない。いつとばっちりを喰らうか溜まったものではない。ネギのライバルと言う事は彼と同じくらいの实力があるのだから。

「シャナも似たようなもの。巻き込まれたら命が無い。」

「誰がチビですって…!」

「は、ライバルの熱さも解らん奴やな」

何を言われているのかは解らないが、バカにされている事だけは良く解った。

キれる。普通にキれる。だが、今まで彼女がこのように、怒りを露にすることなど無かった。何というかネギだから素直に認めていて、それと同じくらいで、粗暴なものという、今までに無い存在を扱いかねているような調子だった。

「上等よ…」

「よし、やったるわ!」

ダツと勢い良く翔ける。瞬間、距離の詰まった二人は刀と爪を合わせて、睨み合っていた。紅と黒の鋭い視線が交錯する。ギリギリと前後に擦れ合う唾は動きあい、一進一退の攻防を見せる。

「よくやるわね…」

「は、あんたも、な!」

また再び距離を取り合う。

シャナからは炎が跳んで、小太郎からは黒い影が跳んでいった。狼のような影と剣のような炎がぶつかり合う。吹き昇る爆炎に紛れて、キンキンと金属の擦れ合う耳障りな音が響く。

「ふん、まあ、やるやないか」

「そうね、お互いね…」

そう言つて二人は刀を納めた。

二人の間に漂つていた緊張感が解き解れていく。才人やルイズは僅かな一瞬にも関わらず、腰を抜かしてしまつていた。他の面々が緊張ところか冷や汗一つ書いていないのを見て、少し恥ずかしく思つた。

「全くあの豪胆さを少しは見習つて欲しいものですね」

ヴィルヘルミナの厳しい一言。

誰に向けられたものかは一発で解つた。このメイドは育てる対象に対して異常なまでに厳しい。

「ま、いいんじゃないですか？豪胆さも越えると蛮勇なだけですよ、王子さまみたいに」

「あの王子さま、死んでしまつたようですし…」

アレンが何となく言つた一言でネギがしょぼんとなる。

やぶへびだつた事に気が付いたアレンが慌てる。彼はあんまり子供の扱いに成れていないのだ。こつした時にどうすればいいのか解らない。

「アレン君」

じつーとリナリーの批難する様な視線が注がれる。

結構、居た堪れない展開だ。無意識だつたとは言え、周りの視線が痛い。

「思い出した！」

「何だ、いきなり……」

そんな空気を全部無視して、キュルケが叫んだ。

また腕をきやいきやい言いながら、豊かな胸に運ばれていた一護は耳元で思いつきり叫ばれたので、かなり痛い。

「そうよ！ 思い出したわ！ そのウェールズ皇太子よ！」

「はあ？」

背後からいきなり彼女の大声が聞こえ、アレンはビクツと体が震えた。

振り返ると、そこには今まで思い出せなかったもやもや感から解放されたのか、妙に喜んでいるキュルケがいた。すっきりした顔で皆を見ている。

訳が解らないといった調子で夏梨が、そのすっきりした顔を見ている。

「な、なんなんですか？」

「なによ、いきなり！」

ネギとルイズが抗議の声を上げるが、無視してキュルケは話す。

「そうそう。どっかで見た顔だわーって思っていたけど」

「誰が？」

要領を得ない話にシャナがまた苛立ち始めた。

「あの、竜籠に乗ってた人よ。あれはウェールズ王子さまだったわ

ねー」

「あの竜籠ですれ違った金髪の人？」

ウインリイとエドが記憶の底を浚う。

ニアミスして危うくぶつかり掛けたミュルハイム行きの竜籠ですれ違ったもう一匹の竜。その籠に金髪の青年がいた事を思い出した。真剣な目で前だけをじっと見ていた、その顔を。

「あー、はいはい。あの人か」

ポンと手を打ってエドが思い出した。

キュルケの頭に入っている記憶が一致した。ゲルマニアの皇帝就任式に出会った、高貴で魅力的な笑みを持つ青年、ウェールズ王子である。

満足したキュルケに、アレンは一つの疑問が頭に浮かんだ。

「ちょ、ちょっと待って下さい」

「何、どうしたの？」

屈託無く笑っているキュルケの隣で、アレンが取り乱す。

「彼は死んだはずでしょう。何故、生きていますか？」

ウェールズ皇太子はアレンとヴィルヘルミナの手を拒み、崩壊していくニューカッスルの城に残った。その後、戦死報告がトリステインにも届いている。目の前で、確かに生死の確認は出来なかったが、例え生きていたとしても、新政権が旧来の王族を生かしているはずが無い。確実に処刑しているはずだろう。

「ええ、敗戦で死んだって公布があっただけと実際は生きていたのね

「そうなの…、良かった…」

ホツと胸をルイズは撫で下ろす。

亡命を薦めたのは彼女であるが、ウエールズはその手を拒んだ。なにわともあれ、生きていて嬉しくないはずがない。

「いや、それはありえないはずだ」

ハッピーエンドになった事を心のそこから喜んでいるルイズの傍、エドが水を差す。

いきなり入ってきた人物にルイズは口を尖らせる。

「何よ、生きていて嬉しくないの」

「確かにウエールズは死んだ。死んでなくても、殺されている」

不平不満を言うルイズを無視してエドは続ける。

一縷の望みを持って、アレンがキュルケに尋ねる。彼は最悪のパターンを予期してしまっていた。この世界ではありえない事だといえ、慣れてしまったアレンとリナリーには、その結果を考えられずにはいられなかった。

「人違い、とか見間違いとかは…？」

「それはないわ。あたしがあんな色男を見間違えるはずがないわ」

自身たっぷりに言うキュルケが嘘をついているようにも見えないし、見間違いというわけでもない。だとしたらキュルケが見たウエールズ皇太子は一体誰なのだろうか。

その時だった。

「待つて」

思考の回転が始まった夏梨が、論争の始まりそつな彼らを止める。

「生きているかどうかは、別にどうだっていいんじゃない」
「何…？」

夏梨の言葉に一護は意識せずに言葉が零れた。

確かにその通りである。彼が生きていた所で別になんら問題はない。だから、問題なのは、生きていたとして何をしでかすかである。

「生きていたとして、彼の目的は何？」
「おい、ちよつと待てよ…」

一護は与えられた情報を繋ぎあわせる。クルクルと集められた情報、形を換えてパズルのように嵌っていく。カチリカチリと脳内で音を立てて組み合わさる。

ぞくぞくと死神になってからは感じたことの無い程に心臓が跳ね上がり、ゾツと背筋が凍った。

「イチゴ…？」
「なあキュルケ…、お前がウエールズとあつたのはいつだ？」

真剣な表情で尋ねられたキュルケは戸惑いながらも答えた。

「えっと、あたしたちとすれ違いだったから…」

ぶつぶつとミュルハイムへ行った時の事を思い出す。その便は特別便ではあったが、トリステインの港であるラ・ロシエールから出発していた。つまりは逆方向へ行っていた、あの王子らしき人物を

乗せた便はラ・ロシエールへ向かっていたという事になる。

「ラ・ロシエールの辺りかしら…?」

その先に待つのは王都トリスタニア。

そこにウエールズが向かう理由と言ったら、一つしかない。

そう、アンリエッタだ。

「なるほどな…」

「ははは、どこのどいつだよ。異世界来てまで悪い夢見せてくれやがる…!」

「彼では無いでしょうけども…」

ギリギリと歯が折れそうになるほど、答えに辿り着いた一護とエドは唇を噛んだ。

「くそ、どこまでも世話の焼ける姫様だな!」

エドは絶叫し、駆け出した。

その後を追うように一護とアレンも走り始める。

「どうしたのよ!」

「話は後だ!」

強い口調にルイズが竦む。

駆け出そうとするが、ドライオマ魔法球は一日＝一時間単位でしか使えない。便利な代物ではあるが、こういった欠点も存在していた。

「くそ、そうだったな…」

期限切れが待ちきれないかのように、エドがイラ突く。坦々と刻まれるリズムがドンドンと早くなっていく。

だが、逆を言えばしっかり対策が練れる時間がある事を意味していた。

「ギーシュ、外に出たら親父に連絡して国外へ通じる街道や港を全部封鎖しろ」

「ああ、解った」

真剣な面持ちでギーシュは頷く。

相手の力を、ちゃんと解って指示が下せる。将として最も必要な力をエドは持っていた。

「キュルケはシャナとリナリーを連れてゲルマニアルト」
「OK」

キュルケもいつもはない真剣な眼差しでエドの金色の瞳を見ていた。

「タバサは夏梨とネギと共にガリアルト」
「解った」

短くタバサが頷いた。

「ルイズと才人は俺たち3人と一緒にまずは王宮。残りの面々は情報収集に当たってくれ」

エドの元、着々と作戦が練られていく。だが、ルイズは何時までも喚いている。

喚き続けるルイズに、遂にエドが切れた。

「うるせえ!」

襟を掴んで睨みつける。

その剣幕に、黙り込む。今までも何度か切れた事はあったが、ここまで、死の恐怖を感じるまでに凄まれたのは初めてだった。

「ちよ、ちよっと、エド、手を離して…」

「バカ姫が危ないんだよ! いいから黙って言う事聞けや!」

「なんでよ!?!」

明けるまでの時間が、異常に長く感じられる。

解放されるまで、あと14時間。外に出られても、雨。長い勝負になりそうだった。

豪雨となり始めた天気の中、鳴り響く雷鳴に負けない大声で一護は皆に説明した。

共に行くのはルイズと才人である。一番、アンリエッタに出逢った場合、確認できるのが、彼女であると踏んだからだ。

「ええ！？ 姫さまがさらわれた！？」

「あくまで可能性だけど、畜生ツ、状況があまりにも悪すぎるぞ！」

辿り着いた王宮では、上を下への大騒ぎになっていた。

警邏の隊長はやって来たアレン達を見て、直立すると今までの出来事を手短に報告した。彼は前回の遣り取りで、彼の力を見抜いていた。殿下直々に迎えられるような人物はそうはいない。

「今から二時間ほど前、女王陛下が何者かによってかどわかされたのです」

悪い予感が的中してしまった。

それも最悪な状況だ。この天気では搜索も俣らない。

「警備のものを蹴散らし、馬で駆け去りました。現在ヒポグリフ隊がその行方を追っています」

そうは言うもののワルドが脱隊してからの再編は間に合っていない。

隙を上手く狙われた犯行だった。もう一隊の竜騎士団は、ちょうど訓練中での場にいない。急報を聞きつけて必死に戻っているだろうが、それでも時間は掛かる。

「我々はなにか証拠がないかと、この辺りを搜索してありました」

ルイズは落ち着かせようと深呼吸をするが、顔色みるみるうちに悪くなっていく。

「……どっちに向かったの？」

「賊は街道を南下しております。どうやらラ・ロシエールの方面に向かっているようなのでアルビオンの手のものと見てまず間違いありません」

幸いな事にギーシュへの指示は間に合ったらしい。

ちょうど王宮に詰めていた元帥は息子からの急報を受けて、各地の国境警備隊へすぐに梟を飛ばしたのだった。

「グラモン元帥の命令で、ただちに近隣の警戒と港を封鎖する命令を出しましたが……」

隊長の話を、ルイズは途中できった。場所がわかれば一秒も早くそちらへ向かうべきだ。

追いつける可能性は十分にある。

「さて、先回りして迎え撃ちますかね……」

降り頻る氷雨になり出した豪雨の中、颯爽とマントを翻し目的地へと向かう。

敵との距離は確実に縮まっていった。

「うう……」

アンリエッタは目を覚ますと、そこは草むらのベッドに倒れ込んでいた。

まだぼんやりとする視界、うまく働かない思考、とりあえず今どこにいるかを知ろうとするため辺りを見回した。体を打つ雨が冷たい。もうすぐ夏だというのに、随分冷たい雨だった。

瞬間、ウェールズがヒポグリフ隊の隊長を殺す光景を目に入れてしまった。

「え……」

竜巻の魔法に、隊長の手足が切断される。一瞬で絶命したのだから、倒れたまま起き上がってこない。あまりの展開ぶりに目を見開き、小さく開いた口はしかし、決して閉じる事がない。

彼女の光景は一定の方向しか向いていないが、それでも他の死体であろうヒポグリフ隊の面子が何人も転がっていた。

すると、ウェールズがこちらへと近づいて来た。まるで何事もなかったかのように尻餅をついているアンリエッタに手を差し出す。

「ウェールズさま。あなた……、いったいなんてことを……ッ！」
「驚かせてすまなかつたね」

平然過ぎる態度に、アンリエッタは腰に下げた杖をウェールズへと突きつけた。

キラリ、と杖の先端にある水晶が光る。

「あなた……誰なの？」

恐怖を掻き立てる愛したものの姿に、足が引ける。
体を打つ雨が段々と、アンリエッタの体と心に現実感を取り戻させてきた。

「ぼくはウエルズだよ」

「嘘ッ！ よくも魔法衛士隊の隊員を……」

「仇をとりたいたいのかい？」

また嘗て見たいはずら好きの子供のような笑顔でウエルズは言った。

「いいとも。ぼくをきみの魔法でえぐってくれたまえ。きみの魔法でこの胸を貫かれるなら本望だ」

そういうと、両手を水平に広げた。

敵意も戦意もない、本当に死んでもいいかのような態勢である。

「あ、う……」

その態度にアンリエッタは戸惑い、杖を持つ手が震え出した。

この人はウエルズじゃない。ウエルズであったとしても、大切な魔法衛士隊の人達を殺したのだ。

それは許されるべきではない。

なのに、手の震えが止まらない。

「どっしたんだい？」

ニツコリと変らない、夢見たままの姿を見せてくれる。

かたかた、と杖の照準がぶれる。慌てて両手で杖を持ち直すか、

一向に震えは止まらない。

たとえ目の前の人間が魔法衛士隊の人達を殺したとしても、彼女には、愛しい人に向かつて魔法が放てはしなかった。

カラン、と杖を落とし、少女は小さな嗚咽の言葉を吐いた。

「なんで……こんなことになってしまったの？」

小さく繰り返す彼女に、また変らない声で呟く。

「ぼくを信じてくれるねアンリエッタ」

「でも……、こんな……」

心が否定する。

それでも目が、耳が、鼻が、口が、全てを現実のものだと訴えかけてくる。

「わけはあとで全部話す。お願いだ。今は黙ってぼくについてくればいい」

「わからない……わからないわ……。あなたのすることも、考えることも……」

すると、ウェールズはそんなアンリエッタを抱きしめた。

優しく、全てを包みこんでくれるような感覚を少女は覚えた。

「わからなくてもかまわないよ」

ガウンだけに包まれた彼女の体を温かく包み込む。

その温かさに、アンリエッタは負けてしまった。

「ただ、きみはあの誓いの言葉どおり行動してほしいんだ」

「誓い…」

言われるまでも無く、あの言葉である事が彼女には分かった。

「覚えているかい？あのラグドリアンの湖畔で、きみが口にした誓約の言葉。水の精霊の前で、きみが口にした言葉」

「忘れるわけがありませんわ。それだけを頼りに、今まで生きて参りましたもの」

「お願いだ。言ってくれないか？」

忘れる事のないあの言葉。

たとえ十年経とうと二十年経とうと、一字一句間違える事なく正確に言う自信があった。

あの透き通った湖水の元で誓った言葉を、間違えるわけが無かった。

「トリステイン王国女王アンリエッタは水の精霊の身許で誓約いたします…」

震える声で懐かしい誓約を口にする。

「ウエールズさまを、永久に愛することを」

満足気にウエールズは頷いた。

「その言葉は変わらない。いや、変わるわけがないだろう？」

少女は小さな子供のように小さく頷いた。今の彼女ならば、人の言うことならなんでも聞くであろう。それほどまでに、彼女一人で

は全く状況を理解できなかった。

「どんなことがあるうとも、水の精霊の前でなされた誓約がたがえられることはない。きみは己のその言葉だけを信じていればいいのさ。あとは全部ぼくに任せてくれ」

少女は頷く。それが正しいのだと、子供のように何度も言い聞かせる。

ウエルズはそんな少女を見て、小さく笑った。

「ふう、ようやく追いつきましたよ……」

「この雨の中じゃ、届くかどうかかわらんが一応、飛ばしとくぜ」

向かおうと歩み始めたその瞬間、のんびりとした声が雨にも負けない大きな声で響く。

その貴族の中に、忘れる事のない人影があった。

「ねえ、王子さま！」

エドの予想は的中した。

許すわけにはいかない。そう思った彼は、奥歯を噛み締めるとウエルズに宣告した。

「時間が勿体無いですし、交渉はしません。早く姫様を返してもらいましょう」

いつ手が飛び出てもおかしくない勢い。特にエドは何時でも動けるように、ウインリイにしっかりと整備してもらっている。

だが、5人に対するウエルズは微笑を浮かべ、落ち着いたままである。

「おかしなことを言うね。返せもなにも彼女は彼女の意思でぼくにつきしたがっているのに」

随分と手際が良いと思っていたが、そういったカラクリがあったのだ。

誘拐の被害者自身が誘拐に加担していれば、簡単に抜けられる。

「テメエの冗談を聞いてるつもりはねえんだよ、さっさと姫様、出しゃがれ！」

冗談の通じなかったエドが怒鳴り散らす。

「しかたないな……」

短く咳くと、ウェールズは自分の体を一人分横にずらした。

そこには、ガウン姿のアンリエッタが現れた。

「姫さま！」

悲痛な思いでルイズは叫んだ。

「こちらにいらしてください！」

どこまでも大きな声で悲痛な思いを伝える。

「そのウェールズ皇太子はウェールズではありません！彼は死にました！それは王子の亡霊です！」

しかし、アンリエッタはこちらへと来ないどころか一步も踏み出

さない。

ただ、唇を噛み締めているだけだ。

その様子にウェールズは満足したのか再び口を開く。

「理解してくれたかな？ さて、取引と行こうじゃないか」

「ッ！ 取引だと？」

「そうだ。ここできみたちとやりあってもいいが、ぼくたちは馬を失ってしまった」

ギリツと奥歯を噛んだアレンが腰に差した銃に手を伸ばす。

「朝までに馬を調達しなくてはいけないし、道中危険も……」

言葉の途中で、アレンは引き金を引いた。何本もの白い弾丸がウェールズの体を貫く。

しかし、不思議な事に致命傷なはずのウェールズは倒れない。

それどころか、傷口があつという間に塞がっていく。

「無駄だよ。きみたちの攻撃ではぼくを傷つけることはできない」

不気味な光景がアンリエッタを一步ウェールズから離れさせる。

その隙をルイズは逃がさず、訴えかける。

「見たでしょう！ それは王子じゃないわ！ 別のなにかなのよ！ 姫さま！」

しかし、もう一步離れる事はなかった。僅かに怯えながらも、その目は何かに決心している。

アンリエッタは気持ちを落ち着かせるため深呼吸をとると、ルイズに告げた。

「お願いルイズ。杖をおさめてちょうだい。わたしたちを、行かせ
てちょうだい」

「姫、さま？」

ルイズはアンリエッタの言う事が理解できなかった。

「なにをおっしゃるのですか！姫さまは騙されているのですよ！」

悲痛なルイズに負けない位にアンリエッタが悲痛な叫びを上げた。

「そんなことは知ってるわ！」

強い言葉にルイズは黙ってしまった。

短い沈黙が辺りを支配する。パラパラと降り続ける雨の音だけが
嫌に強く響く。

「わたしの居室で唇を合わせたときから、そんなことは百も承知
でも、それでもわたしはかまわない」

どこまでも愛に彼女は生きる事を決めていた。

「ルイズ、あなたは人を好きになったことがないのね。本気で好き
になったら、何もかもを捨ててもついて行きたいと思つものよ」

アンリエッタの何処までも哀しい声が5人の耳を雨と共に打ち続
ける。

雑音ではなく、どこまでも美しい音色を奏で続ける。彼女の涼し
げな、たおやかな声が響く。

「嘘かもしれないけど、信じざるをえないものよ。わたしは誓ったのよルイズ。水の精霊の前で誓約の言葉を口にしたの。『ウェールズさまに変わらぬ愛を誓います』と。世のすべてに嘘をついても、自分の気持ちにだけは嘘はつけないわ」

それは強く、美しい決意なのだろう。

だが、間違っていると強く言える。

「だから、だから、行かせて。ルイズ」

「姫さま！」

アンリエッタの声にルイズは最後の叫びを上げた。

「これは命令よ」

だが、アンリエッタは彼女に反論を許さない。

「ルイズ・フランソワーズ。わたしのあなたに対する、最後の命令よ。道をあけてちょうだい」

ギリツと奥歯を噛み締め、ルイズは構えていた杖を降ろした。

ダメであった。ここまで説得しようとしたのに、彼女は彼についていくと宣言したのだ。

ルイズにもアンリエッタの気持ちはわかる。もし、自分が同じような立場であつたら、全てを捨ててついていきたいと思うかもしれない。

その可能性が、ルイズをもう一步踏み込ませなかった。

ここまでウェールズを愛しているアンリエッタを止める事ができる訳がない。

ルイズに戦意がなくなつたのを確認して、アンリエッタと死者の

一行は先へと進もうとする。

しかし、そんな時、空気を読まない声が一言。

「いや、話は終わった？」

エドがゆつたりとした声で口を挟んだ。

今までの緊迫した空気など嘘のよう。どこかへ消え去ってしまった。
ていた。

「いや、ぶつちやけ、そんな事どうでもいいんだわ、俺」

「え？」 「え？」

これには一同、目が点になる。

「いや、ぶつちやけて言うアンタの恋バナとかどうでもいいんだ」

うんうんと頷くエド。

早速、ルイズが切れた。

「このバカは！大事な話でしょうがぁ！」

怒り狂うルイズを他所にエドはウエールズへと向き直る。

耳元で大きな声が上がっているが、無視した。今は、ルイズに付き合っている場合ではない。事の次第によっては、この場で二人ともやらねばなるまい。

「率直に聞け、王子さまよ。アンタ、どうやって生き返ったんだ」

「？」

「……」

エドの質問にウエールズは答えない。
答えられないというよりも、答えが無いような態度だった。

「まあ、エド君。その答えは僕が答えますから」

そんなエドの疑問に答えたのは、傍に控えたアレンだった。
見れば彼の左目は何時の間にも、歯車がいくつも組み合わさったような不思議なモノクルに覆われていた。

「アレン、その目、何…？」

不思議な目に才人が尋ねた。だが、その質問にアレンは、おどけた調子で返す。

彼の不思議な目には、捕らわれた魂が映っていた。

「僕の、罪の結晶って言う所でしょうか…」

その目はアレンの罪の象徴。殺してしまった愛しい人へと誓う言葉の結晶。その目で見ると死んだはずのウエールズが、アレンの耳に語りかけてくる。彼にしか聞こえない声で。

「やあ、また逢ったね。アレン君…」

やっぱり死んでも口調は変わっていない。
どこまでも優しく、それでいて力に溢れた王子というに相應しい
秀囲気を纏った青年だった。

「申し訳ないが、救ってはくれないか。僕を…、僕の愛しい人を…」

その願いに優しき破壊者は、短く答えた。

彼の最後の望みと願いを伝える為に、透き通った銀の瞳が真っ直ぐに偽りのウエールズを捉える。目の前で動いている彼は別物である。今、アレンが見ているウエールズこそが、彼の望んだ最後なのだ。

「ええ、勿論」

少年達は一人の生者と死者の前に、威風堂々と立ち塞がった。

決して、誓い合った愛の最後を汚させないために。気高い想いを傷つけない為に。

「そこをどきなさい。これは命令よ」

言葉に迷いが無い。

もう何を言われても自分の意見を変える気はない、そんな思いをこめてアンリエッタは言った。

「……………」

アレンとエドは齒を食いしばる。

アンリエッタの気持ちはわからなくもない。誰よりも愛してた人が再び現れて、一緒に行こうと言われたら行くのかもしれない。

「どかねえよ」

わかる。恋愛をしたことのない才人でも分かった。

しっかりと地に足をつけて立つ。抜かるんだ地面が跳ねて泥が掛かる。

「えっ？」

アンリエッタは思わず聞き返してしまった。

ここまでして、まだ目の前の少年は説得しようとするのだろうか。

「わかっているのか？王子さまがやったことを本当に正しく理解してんのか？」

彼の言葉に乗ってアレンが後を引き取った。

「生きようと思ったら生きることができたはずです。逃げようと思ったら逃げることはできたはずです。でも、王子さまは戦いました」

何事か物語を語るようなアレンの声。

その優しく、そして厳しい声がアンリエッタの耳を打つ。

「うるさい……」

「あなたに幸せな時間を手にして欲しかったから。貴方を守りたかったからですよ。僕はそう言いましたよね」

それは、結果的には意味がないかもしれない。

ウエルズが言ったとおり、彼がトリステインに亡命しなくても、貴族派は攻めてくる事はあるにない話ではない。

だが、だからと言ってそれが無意味な行為とは、絶対にアレンは死んでも言わせない。

最後を見届けた一人として。

「うるさい……」

「そこにどれだけだけの決心があったのか。姫様はその気持ちを分かっているのですか？」

「うるさいうるさいうるさいッ！……」

初めて、アンリエッタは声を荒げた。

「あなたに何がわかるのよ！」

激昂したアンリエッタの顔は泣いていた。

暗闇でも解る位に泣いていた。雨の中でも解る位に泣いていた。

その顔は見ていて痛々しい。

「愛する人間を失った気持ちが！生きて会えるならなんでもすると願ったその覚悟を！」

止め処なく涙は溢れていた。

豪雨の中でもそれが良く分かった。その顔は才人は見ていられない。それでも、デルフを向けた。

「人の気持ちも知らないくせにわかった口聞かないで！」

「いや、知らねえ……」

ずっと黙って聞いていた一護が冷静に言葉を紡いだ。

酷く落ち着いた声だが、良く通る声だった。

「何よ、知らないなら言わないでよ！」

「知らねえから言ってるんだ」

才人は後ろからかけられた声に振り返った。

一護の凛々しい顔は、どこまでも彼女の言葉を理解していて、どこまでも彼女の思いを否定していた。どこまでも優しく強い顔で。

「だから、あんたがそいつについていくのは間違っている。絶対に

だ」

一護は、今まで見てきた人達を思い出す。

彼女を見て、どこまでも泣いていたルイズやギーシュを始めとする学院の生徒達を。優しく彼女を思ってくれていた城の名も知らないだろう兵士達の顔を。

「さて、才人」

「何ですか？」

剣をアンリエッタに向けて、勢い込んでいる才人に優しく一護はボディブローをかました。

才人は泡を吹いて倒れる。だが、気絶だけはしなかった。バチャリと泥がまた大きく跳ねた。

「なに、するんですか…」

「こういう事はさ、俺たちに任せろ」

ニコリと笑いながら手に持っていたデルフリンガーを奪い取った。指に力が入らないので、するりと抜けてしまう。

「こんな恨まれ役は、真っ直ぐなお前がやる事じゃないんだよ…」

「話は終わったかい？」

デルフと斬月を構えた一護が、アレンとエドに並んだのを確認したようにウエールズが言った。

楽しむような雰囲気すらある。だが、此方には別に楽しむ心算はない。死者を愚弄し、また一人の生きるべき少女が死のうとしてい、それを阻止する以上の考えはない。

「ああ、終わったよ」
「それなら…」

パチンと優雅にウエールズが指を鳴らした。

ゾロゾロと汚れる事も構わずに草むらから幾人もの杖を構えた男達が現れた。どうやらウエールズの配下のメイジたちらしい。試しにアレンが銃弾を放つが、どれも反応は同じだった。

「やっぱり借り物じゃ、無理っばいですね。仕方ありません…」

ぐつと構えた左手を突き出す。雨に打たれたアレンの左手は優しく解けて、大きな爪になった。

これがアレンの誇る最大の武器、捕らわれた魂を救う「クラウン・クラウン神の道化」である。優しい破壊者は、王子へと腕を伸ばす。

「憐れな王子に魂の救済を…」

「じゃ、俺は周りを片付けるわ」

「で、俺はバカ姫を抑えておくと…」

即席の連携だが、戦えない事はないだろう。

豪雨の中、死を見てきた聖者の思いが鳴り響く。

後ろに控えていた配下たちを見て一護は嘆く。

皆一様に何かに取り付かれたような顔をしている。こついった手合いは足が飛ぼうが、腕が千切れようが必死になって襲ってくる。

ましてや、今回の相手は死者の軍勢。恐怖がない。恐怖がないということは全てを忘れられるのだ。

どんな武器も通じない、最強の心である。

「ち…、なあデルフよ」

「何だ？」

カチカチと唾を鳴らしてデルフが答える。

あまり答えは望むべくもないが、取り敢えず聞いてみる。彼は所々、抜けていてあまり役に立たない。武器としては一級品だが、6千年間生きているという触れ込みの割には、どうしても知識に乏しかった。

「何か、解説する方法とかねえの？」

「ねえな」

あっさり返される。

しかし、いくらそう嘆いた所で状況が変わるわけではない。

「じゃあ、ちよつと見たくないモン見る事になるぜ」

「ああ、まあしょうがねえんじゃねえの？」

弾丸を撃つても効果がない。あの調子では間違いなく斬っても突いても結果は変わらないだろう。ならば、やるべき事は一つしかない。

「勘弁してくれよ、死人たちよ…」

二本の剣を合わせて拝む。その儀礼的なやり方にデルフは確信を持った。やはりこの光景は才人が見て良い光景ではない。彼がして良い事ではない。

手を汚す歪みが迫る。

「ちゃんと手厚く葬ってやるから…」

一護は両の剣を優しく握って構えた。
本人も余りしたくはない。だが、効果があるのはこれしかないだ
ろう。首切りだ。

「…斬る！」

覚悟を決めた死神が死者に引導を渡す為に、躍り出た。

エドとアレンはアンリエッタとウエールズに向かい合った。
他のメイジは全て一護がひきつけている為に、しっかりと向き合
える。

「ウエールズさま……」

アンリエッタが不安げな表情で覗き込んだのに対して、ウエール
ズは笑みを浮かべて頭を撫でる。
まだピンチではないかのよう、アンリエッタに不安を与えな
いかにように、それは優しかった。

「大丈夫、きみが守ってくれるのだからぼくは死なないよ」

はい、と小さくアンリエッタは頷く。

(ちっ……)

やはりというべきか、たとえそれが偽りの愛だとしても、この光景に手を出すのは若干抵抗がある。

だが、覚悟を決めて、ギユウツと力強く拳を握る。

「行きます!」

「ああ!」

ダツと弾かれたようにアレンが飛び出す。巨大な爪はまるで命を刈る死神の鎌のよう。巨大な爪がウェールズへと襲い掛かる。だが、それはアンリエッタの唱えた水の壁に阻まれる。

ぐにやりと形を変えて、アレンを捕らえるように動いてきた水の壁を見て、一気に飛びのく。

「くそ!」

「やっぱり、傷つけないのは難しいぜ!」

だが、簡単だ。杖を落とし、砕けばアンリエッタは呪文を唱えられない。

エドは錬金術により、オートメイル機械鎧を変化させる。手の甲に鋭い刃が生まれ、武器が出来た。

「おら!」

ここは幸いな事に地面だ。

土が合って、ちょうど街道は森を抜けるように作られているので、木々もある。まさにエドのホームグラウンドであった。序でに地面から身の丈程の槍を生み出す。

「これでどうだ！」

槍を思いっきり力強く構えて、駆け始める。アンリエッタの牽制のためにと出した、その槍は今度はウエルズに突き刺さる。穂先が抜けないのを見て、エドは槍の柄を離した。

斬る・突くはどうかやら全く意味がないようである。すぐにそれを察知して、元の形に戻した。

「全く、メンドクサイ……」

正直、幼なじみのコンビネーションを侮っていた。

お互いがお互いの長所を生かして、攻撃を防ぐ。エドにはウエルズを倒す術がない。アンレンにはアンリエッタを倒す術がない。それをこの一瞬で見抜かれてしまった。

「姫さま！ もう諦めてください！」

膠着し始めた4人に割って入るように、ルイズが叫んだ。

だが、やはりアンリエッタは聞いてはくれなかった。

「わたしは諦めません！ 絶対にわたしの愛は！」

彼女の目の前から魔法が放たれる。

だが、所詮水の弾丸。重さもなく、速さもない攻撃では、簡単に避けられるし、防がれる。

「クロス・グレイブ
十字架の墓！」

アレンの叫びと共に十字の入った光り輝く楯が現れた。先程から何回も繰り返す。

声をかけることなく、それぞれ最善の方法を互いに取り合う。ア
ンリエッタが敵の魔法の迎撃に集中し、ウェールズの攻撃する形。
一見普通な戦術であるかもしれないが、シンプルがゆえに隙がな
い。

攻撃、援護、防御、とバランスがよい属性であるからだ。

「どうする、このままじゃ…」

光の壁に隠れて、アレンとエドは相談を始めた。一方的にやられ
てるわけではない。

相手の攻撃魔法がウェールズだけ、おまけに魔力の消費を抑えた
のか小出しにしている。

だが、それが時間の問題であるのも事実。常に攻められていると
いう感覚が、重圧が彼らミスを与えるかもしれない。それが怖かつ
た。

「何か、いい手は…」

ギリツと奥歯を噛むが攻略法は一つしかない。ウェールズを倒せ
ば、それで終わりなのだ。

膠着状態を抜け出すなら、此方の攻撃札がもう一枚あればよい。
だからといって、ルイズは望むべくもない。才人にこんな重荷を背
負わせるのも、躊躇われた。この豪雨では、援軍など待っただけ無駄
だ。

なら、残る手は一つだけ。

しかし、

「だけど彼は僕が倒す以外、方法がありません…」

アレンの言った通り、彼は不死身なのだ。

こちらが放つ魔法を直撃させたとしても、相手は平然と立ち上がってくるだろう。切り札はアレンの左腕、神の道化クラウン・クラウンだけである。

「ウエールズさま……」

「心配ないよ、アンリエッタ」

ニコリと頷く王子が偽者である事は、ずっと分かっていた。それでも愛しい姿が大好きだった。ウエールズの冷たい笑みとは裏腹に、彼女の心は熱く潤んでいく。

ウエールズとアンリエッタが同時に呪文を詠唱する。

それも、別々というわけではない。まるで、二人が一つの呪文を詠唱しているようだ。

二人の周りに水でできた竜巻が徐々に大きくなっていく。

本来できるはずのない水と風の六乗。王家の中でもほんの一握りしか使えないヘクサゴン・スペル。

地面に巨大な巨大な水の竜巻が完成した。津波のような竜巻、

「おいおい、アレは不味いだろ……」

「ですね、耐え切れませんし、打ち消せません」

あの威力を相殺できるだけの破壊力を持った一撃は二人にはない。単発の攻撃なら、誰よりも上だが、逆に一発の大きさに不安があった。ここでその事が裏目に出る。

「でも、まあ、詠唱者を潰しましょう。いいですか？」

「ああ、分かっただら！」

アレンの左手が変わっていく。今度は十字の入った身の丈程の剣。退魔の力を持った聖剣。

エドのすべき事は一つだ。アレンの進む道を作る事だけだ。

迫り来る竜巻を前に構えた。

「人の命や思いは、そんなに軽くないんだよ！」

その声が合図。

エドの声に反応したアンリエッタが身を竦ませる。竜巻は降り頻る雨を巻きこみ、更に大きく膨れ上がっていく。受ければ、間違いなく命はない。

瞬間、

「取りました」

アンリエッタの杖が白い帯に奪われる。詠唱者を無くした呪文は少し弱くなった。突き抜けても死にはしない。その竜巻に巻き込まれないよう、エドは棒を持って突っ込んだ。

「いい加減にしろよ、姫様よお！」

案の定、ウェールズが庇って、彼の体に突き刺さる。だが、手を離れた先程とは違って、柄に乗る。

「おらあ！」

「く…、なかなか！」

気合一戦。雄たけびを上げて、ウェールズの端正な顔へと左ひざの蹴りを叩き込む。ぐらりとウェールズの体が崩れ、泥の地面へと倒れ伏した。

「くそ！」

すぐに起き上がるうとする、その体をエドは重心を正確に踏む。幾ら死者といつても人体構造は同じ。骨格や筋質までを変える事は出来ない。踏んだのだが、予想は大当たりだった。案の定、ウェールズは起き上がれない。

「ウェールズ様！」

狂乱し始めたアンリエッタへ向けて、生身の拳をぶち抜いた。一国の姫を殴った事、女性を殴った事は、この際、気にしない。後で何でも聞いてやるつもりだった。

エドは叫ぶ。

「後はテメエの仕事だ！あいつを救ってやれ！」

「はああああ！」

上から杖を巻き上げたアレンが、切先を落下の先端に落ちてくる。その向かう先は倒れたウェールズの胸。それを解って尚ももがき続けるが、重心を固定したエドの靴がそれを許さない。

そして、エドは再び叫ぶ。

尚も目の前の愛する人へと手を伸ばす姫へ。全ての想いを断ち切るために。

「見届けるやあ！」

「憐れな魂に救済を！」

胸に墓標のように剣は突き刺さり、瞬間、ウェールズが目を閉じた。

呆気ない幕切れとはこの事を言うのかもしれない。一方のアンリエッタも精神力が底を尽きたのか、被さるように倒れ込んだ。

轟音を立てた竜巻は消え、辺りは再び、雨の音だけが響き始めた。

その雨も段々と小さくなっていく。

「姫さま！」

ルイズの呼び掛けにアンリエッタはようやく目を覚ました。

美しく整った顔は、どこまでも泥に汚れて、姫としての威厳など微塵も無い。

「私は…？」

「全部、終わった」

ポツリポツリと小降りになり始めた雨の中、手を合わせていた一護が言った。彼は自分が二度目に殺してしまった兵達を祀ってとこるだった。隣には彼に合わせて手を合わせる才人も居る。

「これで良かったんですか…？」

才人はこの答えに自信を持てなかった。

彼の思いを汲んだ一護は優しくアンリエッタに微笑んだ。

「アンタは悪い夢をみていただけなのかもしれねえな」

ふうつとため息をつく一護も、アンリエッタを抱きかかえるルイズも、みんな泥だらけだった。

「わた、わたくしは、何と言う事を…」

「目は覚めましたが？」

悲痛に泣き叫ぶアンリエッタに、誰かが優しくしてくれた。

「アンリ、エッタ……」

「ウェールズ様！」

5人は驚きに目を見開いた。ウェールズの目がゆっくりと開かれ、小さい声で呟いた。

この世に奇跡があるとすれば、まさにこの事を言うのだろう。

「ごめんよ、アンリエッタ……」

「いえ、かわまないのです……」

どこまでも自分勝手に、どこまでも自分の愛に素直にアンリエッタは言った。

「済まないが、最後の頼みを聞いてくれないか……？」

消え入りそうな声で言う王子の、最後の声を聞き漏らさないようにとアンリエッタは耳をすませた。

「ぼくを忘れると。忘れて、他の男を愛すると誓ってくれ。その言葉が聞きたい」

いつか二人が初めて出会った場所。

ここはラグドリ안의湖畔に近かった。

「水の精霊を前にして、きみのその誓約が聞きたい」

「え？」

アンリエッタは思わず聞き返してしまった。
ウエルズの命が後僅かというのもわかっている。生気は失われ
ていつ死んでもおかしくない。

おかしくないのに、もう一度聞いてしまった。

聞き間違いであつてほしいと。しかし、言い間違いでも聞き間
違いでまなかつたようだ。

ウエルズは再び同じ言葉を口にする。

「お願いだ、アンリエッタ。誓ってくれ、他の男を愛すると…」

それが彼自身の願いであっても、アンリエッタは首を縦に振るこ
とはできない。

「無理ですそんなの…」

耐え切れない思いが、小雨に紛れて彼女の顔を伝う。

「わたくしの本心ではないのを誓えるわけがないじゃない」

溜まりに溜まった涙が幾筋も零れそうになる。しかし、耐える。

この時間を、この大切な時間を無駄にしないためにも涙は流せな
かった。ここで彼を失えば、全てが終わるような気がしていた。

「お願いだアンリエッタ…」

ポツポツと話すウエルズの声は次第に小さくなっていく。

命の残り火が少ないのは、誰の目にも明らかだった。ワルドに貫
かれた胸の傷からじんわりと赤が滲む。

「きみが頷いてくれないと一生不幸になるだろう……それでいいのか？」

「そんなの……いいわけないじゃない」

当然だ。愛する人を不幸にするなんて出来るわけがない。

だけど、だからといって誓いたくもない。自分が本心ではない、すなわち嘘を誓うことなんて無理だ。

「お願いだ……ぼくはもう永くはいられない……ぼくが生きている間に……」

「なら、誓ってください」

遂に耐え切れなかった思いがあふれ出した。

その思いは止め処なく顔を伝う。

「わたくしを愛すると……。それを誓ってくださいるなら、わたくしも誓いますわ」

「……ああ、誓っよ」

その言葉を聞き、アンリエッタは目をつむる。

自分の悲しげな顔を、ウエルズに見せたくないからだ。

「……誓います。ウエルズさまを忘れ、そして他の誰かを愛することを」

「ありがとう」

ウエルズは満足げな表情で静かに目を閉じる。

それに合わせるかのように、アンリエッタの目がゆっくりと開く。

「さあ、あなたの番ですわ。誓ってください」

せがむ彼女を留めようと才人が駆け出すが、彼の肩に一護の手が置かれた。

後ろでは彼女の全てを肯定する顔で一護が、首を振っていた。肯定して、しかし、許せないという顔で首を振っていた。

「さあ、おっしゃって。わたくしを愛すると。この一瞬、この一瞬だけを永久に抱きますわ。たとえなんとおっしゃてもわたくしはそうしますわ」

だが、彼は目を閉ざしたまま、微笑んでいた。

「……ウエールズさま？」

体を揺らす。しかし、応えはない。

ウエールズがここまで生き続けたのは奇跡と言っても過言ではない。しかし、どうしてこんな重要なところで終わってしまうのだろうか。どこまでも神様は残酷である。

今までの思い出が頭に浮かび、心の奥底へと放り投げられる。再びウエールズと出会えるようなことは、絶対に、ない。

「意地悪……」

アンリエッタはぼつりと呟く。

「最後の最後まで誓いの言葉を口にしてくれないんだから」

だから、誰かを責めずには居られなかった。

間違っていると分かって、せずには居られなかった。そうでな

ければ、溜めた涙は止まりそうにないから。

「わたしは、わたしは、これからどうしたらいいんですか…」

彼女はそれが偽りだと知って、それでも思いを貫いた。その拗り所がなくなってしまったのだ。

ぐっと泥を掴んで、エド達に投げつける。怒りは、思いは、二度目の命を奪った者達に向いていた。上げた顔は、涙と雨と泥で、もはや姫とは思えないほどに崩れていた。

殴られた頬が赤く痛々しい。

「私はこれから、何に縋って生きていけばいいのですか!」

彼女を支えていたのは紛れもなくウエールズが存在だろう。

だから、王女という重圧にも耐えてきたのだ。

「姫様…」

ルイズは優しく声を掛けるが、生憎と他の誰も優しくない。

「知るか、そんなこと」

ケツと憎々しげにエドは唾を吐く。

彼女の縋るところが無くなってしまっても、彼には興味がない。どうだっていい。現実を決して優しくはないのだ。

くるりと踵を返して、帰り道に行く。

「立って歩け、前へ進め」

機械の腕と足を持つ彼だからこそ言える言葉なのかもしれない。

嘗てこの言葉を教えた少女は今、どうなっているのだろうか。ふと、そんな考えがエドの頭の隅に浮かんだ。

「アンタには立派な足がついてるじゃないか」

「おーい、エド、どうすんだ？」

ひらひらと後ろで手を振ってエドは答える。

「後は任せる。早く帰らないと、錆びちまっからな」

残った四人は嘆息する。

そこから先はアンリエッタのたつての希望で思い出の地、ラグドリアンの湖に向かった

急行したシルフィードに乗っている間、誰も言葉を発さず、ただ薄暗い空を眺めているだけだ。

遠くの方に朝日が昇る。嫌味な程に綺麗な朝焼けと共に。

そんな様子を見て、アレンは幾分か考えた後、傷ついたその体に最後の鞭をいれる。無理を強いた体は、彼方此方に痛みが走る。

「アレン？」

突然立ち上がろうとした彼にルイズは驚く。

ルイズの声に振り返る。タバサだけがすぐに本へと目を戻した。

「まだしていない事が、ありますからね」

ニコリと笑ってシルフィードから降りた。それを追うように皆が降りた。

ウエルズの亡骸を抱えた一護がゆっくりと水面へ向かう。その傍を随伴するように皆が着いて行く。

「きゅいきゅい」

と哀しそうな声でシルフィードが鳴く。彼女もまた今の状況をかっかっていた。

「わりいな、付き合わせちまって」

感謝する少年の言葉に、アンリエッタは言葉を返さなかった。

ただ、無言でアンリエッタは頷き、さらに前へと進む。目の前の景色が開けてくる。もう、朝であった。キラキラと朝日が優しく水面に反射する。黄色に染まった光景はどこまでも美しい。

このハルゲキニアの中でも最上位に入るだろう美しい光景を背景に、アンリエッタは口を開く。

「さようなら、ウエルズ様……」

返事が帰ってこない事は分かっている。

ウエルズは、勝ち誇っているかのように、満足したかのように、眠っているかのように、水の底へと沈んでいった。

「それで、お前はどうするんだ？」

不意に声をかけられたが、アンリエッタは力なく首を振った。

力強い目線で眩い朝日を受ける一護に、アンリエッタは尋ねた。

「わたくしは……、どうすればいいのでしょうか？」

今回の騒動で、何人もの人間が死に、傷つけてしまった。その罪の深さは、おそらくとてつもなく深いはずだ。

「さあな」

どこまでも厳しい。だが、優しい声で答えてくれた。

ザブザブと水を掻き分けて進んでいく音を聞きながら、アンリエッタは初めて声を上げて泣いた。

彼女を慰めるように、どこまでも嫌味に優しい朝日が昇っていた。

「さようなら、哀しい王子さま」

アレンは朝日に紛れるように礼を送った。

彼の思いを受け止めていたアレンは優しく、微笑んで泣いているアンリエッタを見つめ続けた。

「サイト……」

「ルイズ……」

湖に入らず湖畔から眺めていた才人は、優しくルイズの肩を抱いた。

一護も、アレンも、エドも、間違いなく姫様に恨まれているに違いない。その恨みの矛先を全部、肩代わりしてくれたのだ。その事は正直、嬉しかった。

「これで、良かったのかな……？」

ふと無意識にそんな事をつぶやいた。愛する人を奪う事が、それが偽りだとしても正しいのかどうかは、決められてなかった。彼の問いに、誰も答えを返してはくれなかった。

何時しか、水面が七色に反射しだすまで太陽が昇っても、どこまでも一番近い場所でアンリエッタは、湖面を見て泣き続けた。

5章終了でございます。

タイトル通り、「さらば、愛しき人」ということで、この内容になっ
ています。

このタイトルはPS2ゲーム「鋼3」のキャッチコピーです。

最初はアレンの武器紹介と、エドの「立って歩け」の台詞を言
たいが為に、この話が始まりました。そして、次章へと続く大きな
伏線として機能する事になります。

才人は真っ直ぐな奴です。

だからこそ、こんな人の感情を向けられる事になれていない。向け
られる感情は決して作中のような好意的なものばかりではないので
す。

恨まれたりすることもあるのです。嫉妬でもない。混じりけのない
恨みというのはどこまでも粘り強く突いてきます。

どこまでも3人は厳しいです。自分にも他人にも。だからこそ、ア
ンリエッタの態度が許せず、気に入らず、慣れないのだと思いまし
た。

哀しい話になりましたが、この後は彼らの真骨頂が行けるかも知れ
ません。

EDテーマは星村麻衣「Regret」です。

女性の後悔を謳ったこの曲です。本来なら離れていく男性へ送る曲
です。

恋人が、愛しい人が、やはり幸せである事というのは祈れないもの
なのです。

是非ともアンリエッタの想いを想像しながら、聴いて頂きたい。

昇りきった太陽の中、奪還の報を聞きつけてやって来た王宮の騎士団に、失意のままのアンリエッタを引き渡した。泣き腫らして雨にぬれ、泥まみれになった彼女の顔は、どこまでも失意に沈んでいた。

そんな彼女を見送り、アレンが帰り支度を始めた時の事。

「少し用がある」

唐突にタバサがそんな事を言い出した。

「何でい、嬢ちゃん？」

ネギのフードの中に隠れていたカモがひょっこりと顔を出した。その彼の可愛くない顔は無視して、ネギと一護、そして夏梨の袖を引っ張った。くいくいと小さな子供が強請るような調子で、3人を引き止める。

「じゃ、まあ僕らは先に帰りましょうかね」

現れた箱舟の扉にアレンが足を踏み入れる。

タバサの態度に納得がいかなかったルイズが、相変わらず狂犬の如く噛み付くが、才人に襟首を引かれて連れて行かれた。

「ちよ、ちよっと話さないよ！何だよ！」

「貴方には関係ない」

冷静に、表情一つ変えず言うタバサにルイズはカチンときた。

とつくの昔に頭に来ていたのだが、もつと腹が立った。何という
か独占されているような感じがする。最近、エド達もどこかキュル
ケやギーシュと出かけているようで、ルイズの傍には才人しかいな
い。一番、アホ面さらした才人だけが、いつも残っているのだった。

「はいはい、いいから行くぞ」

「離しなさい…」

ずるずると引き摺られて消えていった。

「で、何で残したんだ？」

3人が去った後、残された4人。

先程までの悪夢が嘘のように、一護がのんびりとタバサに尋ねた。

「付いてきて欲しい」

それだけ言うとタバサは「フライ」を唱えて浮き上がる。

タン、タンと湖面に波紋を揺らしつつ、湖を対岸目指して渡って
いく。

この湖は、トリステインとガリアの国境になっている。条約上は
どちらの領土にも属さない、いわば中立地帯として存在している。
対岸へ渡ればガリア領である。

そのまま歩を進めると門が見えてくる。

門の紋章には、交差された二本の杖に、
さらに先へ と書かれ
た銘。

「これは、すげー」

対岸に現れた巨大な屋敷に一同は息を飲む。

「いや、でもあの屋敷の紋章……」

「どうしたネギ坊主？」

そんな中、掲げられた紋章をネギは記憶から呼び覚ます。頭を抱えて考え始めたネギを怪訝な表情で一護は見ている。

図書室で見た本の中に、合致する図解があった。

「あの紋章、ガリア王家の紋章じゃ……」

「はあ？」 「ええ？」

その屋敷の門の紋章は、まごうことなきガリア王家の紋章であったのだ。

「じゃあ、あの傷みたいのは何？」

その紋に刻まれた傷を夏梨が指差す。その紋章には バッテンの傷が深くついていた。

「早く来て」

玄関先で待っているタバサに呼ばれた。

紋の意味も考えるのは後にして、ひとまず彼女の後を付いて行く事にした。

玄関前の馬周りに着くと、一人の老僕がさっと近づいてきた。

普段なら馬車やシルフィードで来る事が多いのだろう。少し困惑した表情を浮かべて、恭しくタバサに頭を下げる。

「お嬢さま、お帰りなさいませ」

一護と夏梨は、馬車から辺りを見回す。ネギはびしっと決めていたが、雨に濡れては今ひとつ決まらない。

どうやら、この執事らしき老人以外に出迎えの者はいないらしい。王家の御嬢様には似合わない、随分と寂しい出迎えだった。

「後ろの方々は…？」

泥に塗れた3人を指差し、老僕は怪訝な表情を浮かべていた。

「客」

「然様でございますか」

タバサの短い返事を聞いて、屋敷の扉をキイイと開けて老僕の男を先頭に屋敷へと入る。

「すげエ、屋敷だな……」

三人は老僕に連れられ、屋敷の客間へ案内された。

一護は屋敷の中を眺めては、ぼんやりとした表情をする。彼が良く見る邸宅は、どちらかというと純和風の日本家屋、平安期の貴族が住まうような寝殿造の家屋が多い。

このような絨毯のひかれた洋風家屋を歩くのは初めてだった。

「それにしても静かね」

「誰もいねエのか？」

「物音一つしない屋敷は不思議だった。

普通は出迎えも多いものだし、料理人の一人や二人くらいはいるはずだろう。」

「はい、このお屋敷には執事である私と奥様しかいらっしやいません」

「奥さま……、か」

老僕はかしこまった感じで二人の言葉にそう返す。

屋敷の中は王族の住む場所とあってか、邸内は手入れが隅々まで生き届いていて綺麗だ。

だが、屋敷内にはいそいそと動くメイドや兵士の姿が全く見えず、静まり返っていた。

「まるで葬式みたい……」

雨に濡れた体を振るった夏梨に、いい加減老僕は怒った。

「あの、お客様方、まずは湯浴みをされては……」

確かに雨に打たれ、泥に塗れた体は臭いこと、この上ない。

散々、昨晩の豪雨の中を右へ左へ、トリスティン中を駆け巡った4人はボロボロだった。特に戦闘を行った一護にいたっては泥だらけである。

「服も洗いますので、まず清めてください」

そういう老僕に、ネギがぐるりと踵を返して無言でどこかへ行くところ。

だが、その逃げる小さな体を一護がぐつと掴んだ。

「何処行くんだ？」

「いや、あの……」

言い淀むネギ。そんな彼を見かねてカモが口を出す。

「ああ、兄貴は風呂が嫌いなんだ」

「子供か！ああ、子供か……」

取り合えず、ズルズルと嫌がるネギの襟を掴んだまま、一護は案内された風呂場へ連行した。

その後、ネギの嫌がる声が屋敷中に反響した。

身を清めて改めてホールのソファに座った一護は、タバサに尋ねた。

「どうして親父がいないんだ？」

「……………」

タバサは答えない。黙ったまま一護をじっと見つめているだけである。

バシツと額を隣に座った夏梨に無言のまま、叩かれる。ちょっと痛い。そして、目が怖い。

「ここで待ってて」

と言い残して客間を出て行った。

「どうしたんだろ……」

「さあ？」

取り残された3人がポカンとしてみると、先ほどの老僕が部屋に入ってきて目の前にワインとお菓子を置いた。

「あ、酒飲めないんで、申し訳ないけども別のにお願いできます？」

律儀にもそんな事を言う一護を無視して、さっそく夏梨はお菓子に手をつけ始めている。

ネギは手をつけずに、老僕に尋ねた。

「そつえば、さっきのあなたの言葉で気になっていましてけど…」

少し言い難いことである事は間違いない。

先程、一護が何気なしに聞いたら、タバサの空気が一気に凍っていたのをネギは見逃さなかった。

「なんでこの屋敷には、あなたとお母さんしかいないんですか？」

老僕は恭しく礼をする。

「このオルレアン家の執事を務めておりますペルスランでございます。おそれながら、シャルロットお嬢さまのお友達でございますか？」

ネギと夏梨は頷いた。

一護は黙ってお菓子を食べている。夕食を食べないで出てきてしまったので、腹がすいた。責めて朝食までのつなぎだ。

「どうして王家の紋章にバツ印なんて…」

ネギの質問を切るようにペルスランは大きな咳払いをした。まだ聞きたい事は多かったが、取り合えず喋るのを辞める。

「お見受けしたところ、あなた方は外国のお方と存じますが……。お許しただければ、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

歳を感じさせないきびきびとした物言い、老執事は尋ねてきた。ポロポロと口の端に付いた菓子のカスを拭って、一護が答える。

「ん〜、サー・デスベリー？」

「適当に思いついた偽名だ。」

どの道、この世界の人間には彼らの名前は発音し難いし、伝えられない事が多い。自分の名前を上手い具合に伝えようとするなら、こういった呼び名は必要だった。

我ながら、実に良く思い付いた名前だと思う。

「その妹でカリィヌです」

「僕はネギ・スプリングフィールド。それで、こっちが…」

ひょこつとカモミールが顔を出す。

初めて見る生き物に、ペルスランはマジマジと顔を寄せた。

「アルベール・カモミールさ」

自己紹介も終わった所で、ネギは続ける。

正直、彼女の一番の親友であろうキュルケが居ないのが辛かった。こんな時に気使いのネギはズケズケと踏み込んでいけない。オブラートに包むように、ふんわりと言う。

「では、さっきの話の続きですが…」

「あれは『不名誉印』でございます」

紋の傷は『不名誉印』といわれる。

この印が刻まれた家の者は、王族でありながらその権利を剥奪されていることを意味しているのであった。

「では、この家はどんな家なんですか？」

「タバサなんて偽名まで使って学院に留学してるし…」

モグモグと新しく取り出したお菓子と、アルコールの入っていない唯の水を飲みながら、夏梨が続ける。タバサという名前が、自分たちと同じく偽名である事は薄々感づいていた。

貴族ならば家名と、それに付随する先祖の名前が付いてくる。それら全てが無い名前が偽名で無いなら、何と言っのだからか。

「あいつの本名は、シャルロットっていうのか」

「あの子、なんにも話してくれないもんね…」

前に一緒に南の果てまで旅した時も、自分の事は一切何も言わなかった。話したくない雰囲気があったので、その時は敢えて入らなかったが、ここに連れてこられたということは、それなりに信用しているのかもしれない。

「そうですか、お嬢様は『タバサ』と名乗っておいでで………」

夏梨の言葉を聞くと、老僕は悲しげに俯き、せつなげなため息を漏らした。

「わかりました。お嬢さまがこの屋敷にお友達を連れてこられるなど、今まで絶えてなかったこと」

目の端に涙が溢れかけているのが分かった。

そうとうに辛い話なのかもしれない。だが、ここまで来て逃げようとは思わなかった。

「お嬢様が心許すお方なら話してかまいますまい。ただし、愉快的話ではありませんぞ。それでもよろしいので？」

覚悟を求めるようなペルスランの言葉に、3人とも憤慨した。
今更、聞かれるまでも無い。

「大丈夫、一兄やネギも平気だよね」

夏梨は、お菓子を朝食代わりにパクパクと口に放り込む兄を見つめた。

「ああ、いいぜ」

「僕も大丈夫ですよ」

「早く話してくれ」

一護は最後のお菓子の一粒を口に放り込むと、こちらの方を見ないでそう言った。

3人の決意の籠った顔を見て、また老僕は重いため息を吐いた。

「わかりました。お嬢さまにあなた方みたいなお友達に恵まれたこと、神に深く感謝いたします」

ゴホンと強く咳払いをして準備を整える。

「では、お話ししましょう……」

それからペルスランは、深く一礼すると語りだした。
開口一番、重い話になってしまった。

「この屋敷は牢獄なのです」

タバサは屋敷の一番奥にある部屋の扉をノックした。返事はあるはずがない。

この部屋にいる屋敷の奥さま、つまりはタバサの母親は、もうノックに対する返事を全くしなくなっていた。誰が来ても、誰が去っても、虚空を眺めているだけ。

そうなのはタバサがまだ十歳の時、五年前のことだ。

「…ッ」

タバサは悔しそうに唇を噛んで、扉を開けた。

部屋の中はひどくこざっぱりしていて、ベッドと椅子とテーブル以外、他には何も無い。

一日中開きっぱなしの窓からは、春が近い証拠に暖かな風が吹いてカーテンをそよがせていた。

「だ、だれ？」

怯えたような声色で、部屋に入ってきたタバサに母である筈の女性が問う。

タバサは、ベッドで乳飲み子のように人形を抱えた母に近づくと、深々と頭を下げた。

「ただいま帰りました。母さま」

本来ならば、母と子は久しぶりの再会で抱き合ったりする。喜びからくる行動だ。

だが、この母は違う。

「下がりなさい無礼者！」

タバサの母は目の前で頭を下げる娘にキッと睨みつけ、我が子であるはずのタバサではなく、手に持っていた人形を抱きしめたのだ。そして、娘に冷たく言い放つ。

「王家の回し者ね？わたしからシャルロットを奪おうというのね？」

狂乱した声で、嘗て母であつた女性は叫ぶ。

その顔を黙って見つめ、その声を黙って聞いている。

「誰があなた方に、可愛いシャルロットを渡すものですか！！」

タバサの母はかなり痩せこけている女性だった。

もとは美しかった顔が病のために見る影もなくやつれていて、三十代の後半である彼女はそのせいで、二十も老けて見える。

もとは美しかった青色の髪は何年も手入れをされておらず、のばし放題だった。

その髪から覗く目がひどく怯えていて、とても自分の子に向けているような目ではなかった。

「絶対に、この子は渡しません！」

そんな母にタバサは身じろぎもしないで、深々と頭を垂れ続けた。だが、容赦なく母は子に言葉をぶつける。

「恐ろしい事……！！どうして私の娘が、いずれ王位を狙おうなどと申したのでしょうか……」

彼女は最早、タバサを娘とは認識していない。

叫んだり、震えたり、壊れた心のまま、動き続けるのだった。

「私達はただ静かに暮らしたいだけなのです。下がりなさい！下がれ！！」

突然、ガラスの割れる音が部屋に響き、タバサの足もとに割れたガラスが転がる。

母が娘に投げつけたグラスを、タバサはそれをよけずに、頭に受けたのだ。確かに痛い、彼女はこんな頭の痛みなど、全く気にはしていない。それよりも、心が痛かった。

「母さま………」

タバサが哀しく呟く中、母は抱きしめていた人形に頼りしした。

見るに堪えない光景だ。だからこそ、この母は湖畔の洋館に5年もの間、幽閉されているのだ。

「ああ、可愛いシャルロット……………」

何度も何度もそのように頬をすりつけたせいで人形の顔は継ぎ目がほつれたのか、擦り切れて綿が出ている。洗濯もされていない人形は髪として設えられた毛糸が何本も抜けている。

「あなたは絶対に渡さないわ…。絶対に渡すもんですか……………」

狂ったままの心で、母だった女性は続ける。

誰が来ても、この反応を返している。

「何があるうとあなただけは私が守って見せる……………」
「……………」

タバサは悲しい笑みを浮かべる。

それはたった一人、母の前でだけ見せる、たった一つの彼女の心からの表情だった。

「あなたの夫を殺し、あなたをこのようにした者どもの首を、いずれここに並べに戻って参ります」

冷たく透き通ったままの心で、改めて決意を固める。5年前からここへ来る度に、同じような事を言っている様な気もする。水の精霊の御許での、誓いは違えられない。

「その日まで、あなたが娘に与えた人形が仇どもを欺けるようにお祈りください……………」

開けっ放しにされた窓から吹き込んだ風がカーテンを静かに揺ら

す。
もうすぐ春だというのに、湖から吹いてくる暖かい風はタバサにとって、とても寒かった。

「継承争いの犠牲者？」

夏梨がそう問い返すと、ペルスランは頷いた。

「それでございます」

全ては、その争いに始まる。
血を分けたはずの兄弟の争いから、全てが始まった。

「今は去ること五年前……、先王は二人の王子を遺され、崩御されました」

今のタバサの境遇を可哀想だとは思う。だが、どうにも出来無いというのも事実だった。

この問題は、いわばガリア内部のお家騒動であり、政治的な問題だ。

タバサがルイズの介入を嫌ったのも得心が行く。下手に外国の公爵家の人物を入れては、ガリアとトリステインの衝突に発展しかない。

「現在、玉座についておられる長男のジョゼフさま、そしてシャルロットお嬢さまのお父上であられたご次男のオルレアン公のお二人

でございます」

「そっか、タバサは王族なんだな」

持ってきてくれた色の付いた水を飲みながら、一護がポツリと呟いた。

復讐に生きる彼女。その後姿は、誰かの後姿をネギは思い返していた。余りにも良く似た姿を。

「はい。しかし、長男のジョゼフさまは英知に優れておりましたが、お世辞にも王の器とは言いにくい暗愚なお方でありました」

逢った事が無いので判断し難い。

この老僕は負けた王弟側の人間である。先入観がないとは言えなかった。

「そして、オルレアン公は王家の次男としてはご不幸なことに、類まれない魔法の才能に恵まれ、身分がどうの関係なく、誰に対しても良き理解者であったことで人望に満ち溢れていた」

「……」

一護はソファーに体をぐったりと預けて、天井をじっと見つめる。夏梨も遠くに見えるラグドリアン湖を見つめていた。

「したがって、オルレアン公を擁して玉座へ、という働きが持ち上がったのです」

ネギだけが真剣に聞き入っている。

二人は聞き入る心算が無かった。生憎と、一護も夏梨も政治にも、王権の継承にも興味が無かった。ただ雪風の少女が、苦しんでいる事だけは十分に分かった。

「しかし……、それを良しとしない国王派と王弟派で二つに分かれた醜い争いになりました」

「どこの国にも、よくある光景だな……」

一護は呟く。

息子と父親、兄と弟、政権を握る上で争いあった例は指では数え切れない。今だって、その争いが絶えた事は無い。権力を狙う野心というのは、人である限り消えないのかもしれない。

「そして、その醜い争いの結果としてオルレアン公は謀殺されました。狩猟会の最中、毒矢で胸を射抜かれたのでございます」

彼の無念は如何程だったのだろうか。地に眠る声に耳を傾けられはしない。

話している内に、段々とペルスランの声が強くなっていく。

「この国の誰より高潔なお方が魔法ではなく、下賤な毒矢によってお命を奪われたのです。その無念たるや、私などには想像もつきかねます。しかし……、ご不幸はそれにとどまらなかったのです」

ペルスランは胸をつまらせるような声で続けた。

「ジョゼフさまを玉座につけた国王派の連中は、次にお嬢さまを狙いました。将来への種を摘もうと考えたのであります。連中は、お嬢さまと奥さまを宮廷に呼びつけ、酒肴を振舞いました」

そこからの展開は読めた。

毒殺というオーソドックスな暗殺の結果の先に待っているのが、彼女の氷の彫像のような顔なのだ。

だが、ここへ来た時、少しそれが和らいで見たのは気のせいなのだろうか。

「しかし、お嬢さまの料理には毒が盛られていた」

坦々と言っているが、やはり許せないのだろう。

僕として仕えた者の宿命とも言える心をペルスランに3人は感じていた。

「奥さまはそれを知り、お嬢さまをかばいその料理を口にされたのです」

「じゃ、じゃあ……」

夏梨の言葉に首を振るペルスラン。

「いえ、その毒は人を亡き者にするようなものではなく、心を狂わせる水魔法の毒でございました」

一護は段々とタバサ、シャルロットが自分たちをここに連れてきた理由が分かったような気がした。

「……………以来、奥さまは心を病まれたままでございます」

夏梨は言葉を失い、呆然と老執事の告白に耳を傾けた。

「お嬢さまは……………、その日より、言葉と表情を失われました。快活で明るかったシャルロットお嬢さまはまるで別人のようになってしまわれた」

母が狂った苦しみは3人には、分からない。

だが、この3人には、少しだけ理解できるような気がしていた。それも理由の一端なのだろう。彼女が感じていた一方的なシンパシ

「しかし、それも無理からぬこと。目の前で母が狂えば、誰でもそのようになってしまうでしょう。そんなお嬢さまは、ご自分の身を守るため、進んで王家の命に従いました」

そこでウツと言葉を詰まらせる。

「困難な……、生還不能と思われた任務に志願し、これを見事果たして王家への忠誠を知らしめ、ご自分の身をお守りになったのです」

パキツツと暖炉のたいまつが割れる音が響く。

黙った3人の耳には良く響いた。

「しかし、王家はそんなシャルロットお嬢さまを、それでも冷たくあしらわれました。本来なら領地を下賜されてしかるべき功績にもかわらず、シユヴァリエの称号のみを与え、厄介払いのように外国に留学させたのです」

ペルスランは悔しそうに唇を噛んだ。

「そしてッ！未だに宮廷で解決困難な汚れ仕事がちあがると、呼びつける！」

「なるほど……」

以前行ったトゥーリーワースの事件。

その調査も宮廷で解決できなかった汚れ仕事を負わされたのだろう。二人を呼んだのは、せめてもの彼女なりの心の支えが欲しかった。

たのかもしれない。

「お陰でこのお屋敷と奥様だけは取り上げられずにおりますが……、私は……、悔しいのです！」

奥歯を噛み、唇から血が流れそうになる。

「父を殺し、母を狂わした男に頭を下げ、服従を強いられ、ただ一つシユヴァリエの叙勲のみ受けて危険な任務を受けていらっしやる……そんなシャルロット様が哀れでなりません……！！！」

ペルスランの目から何時しか涙が溢れていた。
止め処なく顔を伝って、深く刻まれた皺に染み込んでいく。

「私はこれほどの悲劇はしりませぬ！どこまで人は人に残酷になれるのでありましようかッ……！！！」

3人は、タバサが口を開かぬ理由を知った。
決してマントに縫いつけぬ、シユヴァリエの称号の理由を知った。

「随分と……まあ」

一護は思わずそう呟く。

「雪風」とは彼女の二つ名。彼女の心には冷たい雪風が吹き荒れ、今もやむことがないのだろう。止まない冷たい想いを、何時までも尖らせ纏い続けているのだった。

「お嬢さまは、タバサと名乗っておられる。そうおっしゃいましたね？」

「あ、はい」

ペルスランの割って入った質問にネギが答えた。

「奥さまは、大変お忙しいかたでございました。幼い頃のお嬢さまはそれでも明るさを失いませんでした……、随分と寂しい想いをされたことでありましょう」

また薪が弾けて火花が飛んだ。

「しかし、そんな奥さまが、ある日、お嬢さまに人形をプレゼントなさったのです。お忙しい中、ご自分で街に出でて、下々の者に交じり、手ずからお選びになった人形でした」

今でも彼は思い返せる。

笑顔の皺の一本から、瞼の動きまで、全てを思い出すことが出来る。

「そのときのお嬢さまの喜びようといったら！ その人形に名前をつけて、妹ができた、可愛がっておられました」

ペルスランは頬を緩めて、微笑みながら語っていたが、暗く悲しそうな表情に戻った。

「今現在、その人形は奥さまの腕の中にございます。心を病まれた奥さまは、その人形をシャルロットお嬢さまと思い込んでおられます」

ネギは、はつとした。

二人も気が付いたのか、頭をガリガリと乱暴に掻き毟る。

「タバサ、それはお嬢さまが、その人形におつけになった名前でございます」

全て話し終えたとき、タバサが戻ってきた。
カツカツと歩いて、3人の前に座る。そして、ゆっくりと口を開いた。

「貴方たちに頼みがある」
「頼みか…、何だ？」

二度目になる遣り取り。凡そ、彼女の言いたい事は分かっていた。だが、できるかどうかは自信がない。

「母を治して欲しい」

タバサの言葉に天を仰いだ。
心の病。そういえば簡単だが、心を狂わせる薬など流石の死神である二人にも心当たりが無かった。技術開発局長《天才》なら、何とかなったかも知れないが、そういった知識は欠けていた。

「うん…」

「どうだろう…」

一護と夏梨は考え込んでしまった。
その傍でネギが立ち上がる。

「いいでしょう。治せるか分かりませんが、診る事は出来ると思います」

タバサの顔に期待の色が灯った。

再び、タバサの母の部屋。

入った瞬間に、怯えたような声色でタバサに母である筈の女性が問う。

「だ、だれ？」

あまりの人数の多さに頭が処理しきれていないような感じである。すぐさま狂乱した声になって、手近にあった物を何でもかんでも投げつけてきた。

「下がりなさい、下郎！」

鋭い声と食器や本が飛んでくる。

別に当たった所で致命傷にはならないが、取り合えず一護は全て受け止めた。

「心を狂わされてる。だから、こんな感じ」

狂ってしまった母を見せたくは無かったのだろう。

タバサの声には一抹の不安と寂しさがあった。

「大丈夫です」

ニコリと微笑みかけてネギは近づく。

ツカツカと近づいてくる見たことの無い顔に、遂に母の恐怖は最

大に達したらしい。ベットから這い出て、壁へと後ずさる。

「アイエール・エト・アクア 水よ ファクテイ 白霧となれ」

ずっと逃げ惑う彼女の額に、右手を翳し呪文を唱える。

モクモクとネギの周りから白い霧が吹き上がり始めた。開け放たれた窓から吹き込む風が、温かくかき回していく。

「ネブラ・イリース 彼の者等に ソヌム・ブレウエム 一時の安息を」

詠唱が進むたびに、夏梨は瞼が重くなっていく。

「あれ…、何か眠い…」

「これがこの霧の効果か…」

久しぶりにネギの魔法を二人は見た。

基本的に死神は敵を全て制圧するか、殺害するかの二択しかない。

このように相手を眠らせる呪文は初めてだった。

ネギの詠唱をタバサとペルスランは、ぐっと構えて見守る。

「ネブラ・ヒュプノーティカ 眠りの霧」

狂乱していた女性が深い眠りへと誘われる。

さっきまで喚き散らしていたのが嘘のように、静かに眠っていた。

「準備が出来ました」

そう言っで一護と夏梨、タバサをベットの傍へと呼んだ。

杖をタバサの母の胸元に置いた。そうするとゆっくりと持ち上

がっていく。糸もトリックも無いネギの魔法である。

「今から何をするんだ？」

少し、不安になった一護が尋ねる。

その声にネギは確りとした声で答える。期待に震えているタバサをせめて落ち込ませないようにと元気付けるような声だった。

「今から彼女の…、あ、えっと、名前は…？」

「アンナ、アンナ・オレルアン」

名前を求めていたネギに、透かさずタバサが助け舟を出した。

「今からアンナさんの夢に入ります」

「はあ？」

「面白そう！」

何のことかさっぱり分からない一護に対して、夏梨は目を輝かせた。

そんな体験、きっと空座町だけには、絶対に体験できないだろう。

「手を繋いでください」

四人は手を繋ぐ。隣から伝わる感触が優しくタバサに訴えかける。不安に支配されていた心が、段々と解れて行くのが分かった。この声や光景が夢で無い事を祈る。

「ニコンファ・ソムニィー
レイギーナ・メイヴ
夢の妖精 女王メイヴよ」

ネギの詠唱が始まる。

どこまでも優しい声に導かれ、4人はアンナの夢の中へと入って
いく。

ポルターム・アペリエヌ・セー・メー・アリキアット
「扉を開き 夢へといざなえ」

そうして4人は沈んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3148x/>

LEGEND OF THE SEVEN

2012年1月6日01時47分発行